MARQUEE SPECIAL EDITION

イタリアン・ロック集成

ENCYCLOPEDIA OF ITALIAN ROCK

ユーロ・ロック集成 1



イタリアン・ロック集成

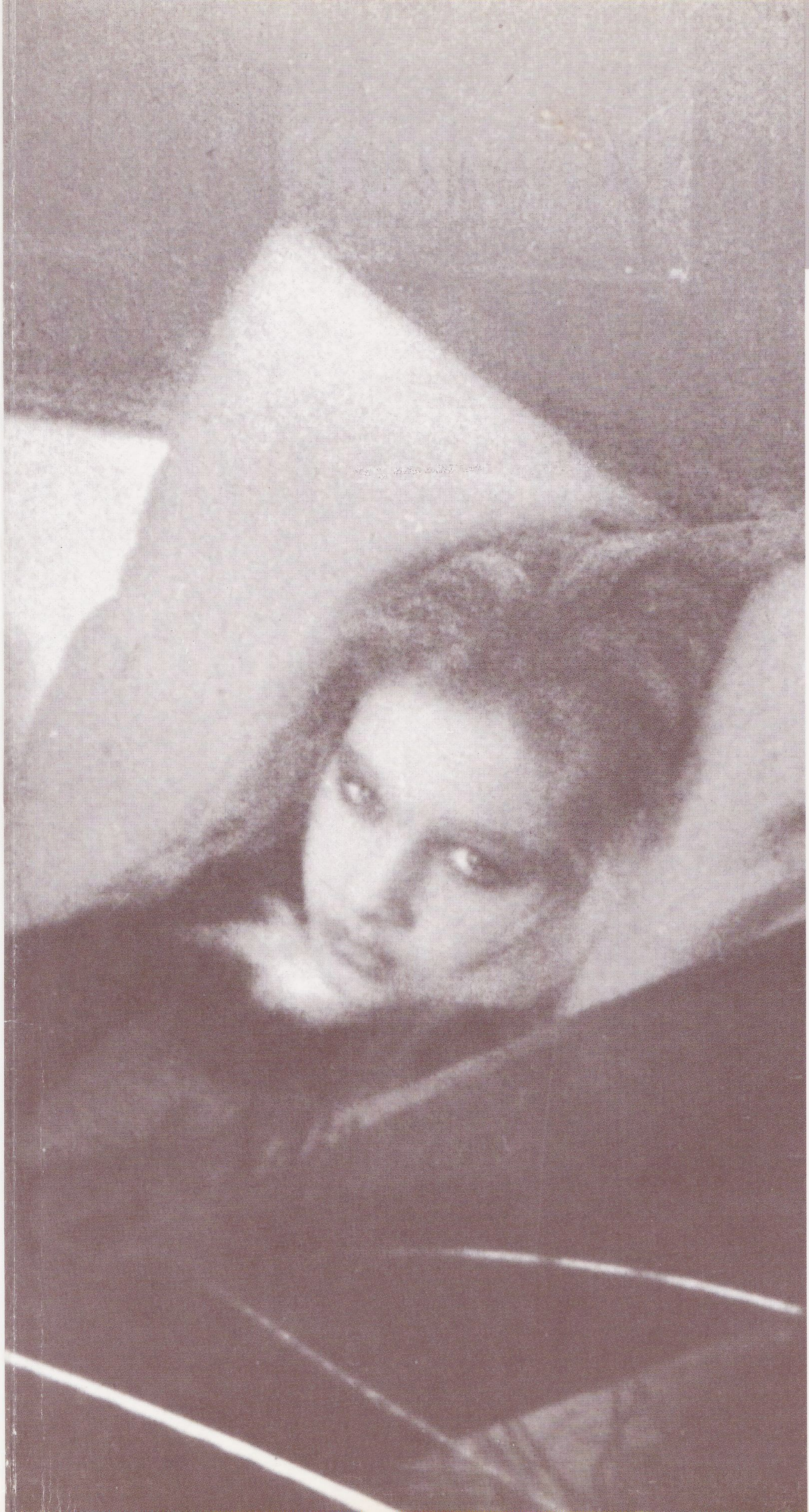
マーキームーン社刊

MARQUEE SPECIAL EDITION

イタリアン・ロック集成

ENCYCLOPEDIA OF ITALIAN ROCK

ユーロ・ロック集成 1



イタリアン・ロック集成

マーキームーン社刊

MARQUEE'S

ENCYCLOPEDIA OF EUROPEAN-ROCK

1

- ITALY -

1965-1993



序

◉

イタリアン・ロック集成発刊によせて

マーキーが"ユーロ・ロック集成"を'87年に出版してから、早6年の歳月が流れた。当時はCDによる再発ブーム前夜で多くのファンは全くユーロ・ロックの全貌をつかめず、あの集成はファンにそのアウト・ラインを提示できたものと自負している。しかし、その後、新たな情報、そしておびただしい数の名作群のCD化によって、とても当時の"ユーロ・ロック集成"ではシーンを正確に把握することが困難になってしまっていた。又、当時はレビュウを読んでもほとんどが廃盤で入手できないという状況であったが、現在は全く逆で、多くのアルバムのCD化によって、とても個人の財力では買い切れない程にアルバムが巷にあふれ、中古盤店にいけば、LPの中古品も山のようにあるという状況で、とても新しくファンになった方にはどれを購入していいのかわからないというシチュエーションである。実際、ワールド・ディスクの在庫をみていても、どうしてこんなにいいレコードがこんなに安価で売れないのだろうと思うこともしばしばである。要は購売者の知識が追いつかない程にCD化の波が進んでしまっているということなのである。

それと、一部のコレクター達の間ではさらに発掘作業が進み、さらに知られざる過去の名作も発見されているのだが、こちらは余りにマニアックで、又、高額である為に、極限られた人間の間でのみやりとりされているのが現状だ。こうしてファン自体も二分化が進み、その両方を把握することが、もはや膨大な暇と財力がないと不可能事となってしまった。

そこで、できるだけ詳細な情報を伝える為に、何と、以前のユーロ・ロック集成のボリュームを全て1つの国だけのレビュウで埋めてしまおうという途方もない案が発案され、ようやくこうして"イタリアン・ロック集成"として出来上がった。御存知のように、イタリアの音楽界というものは、カンツォーネから派生したポップス界が主流であり、それまで含めると途方もない量のアルバムが発表されている。そこで、我々のジャンルである"プログレッシヴ・ロック"のフィールドをあくまで中心に、そこから派生したソリスト達のアルバムもできるだけレビュウするという方針でまとめることにした。さらにイタリアのアーティストはシングルも少なくなく、その中にはアルバム未収録曲や別テイクも多い。こうしたアトラクティヴなシングルもレビュウしている。もちろん、今まで誰も知らなかった幻のコレクターズ・アイテムも含まれているから、これからイタリアン・ロックを聴こうとするビギナーから、CD化されたアルバムはひととおり聴き、さらに未知なる作品へと興味が移行しているマニアまで、全てのユーロ・ロック・ファン必携の1冊といえると思う。

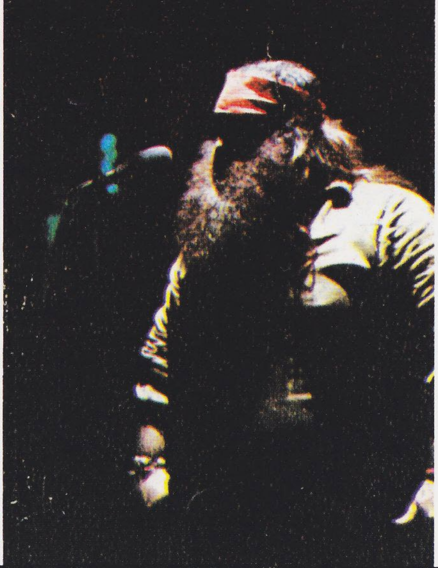
さらに、"ユーロ・ロック集成"では限られたスペースの為、出来の良いと思われるものを中心に、そして1グループ1枚の原則で制作されていたのに対し、今回の集成は、原則として各アーティストがリリースした全てのアルバムをレビュウすることになっているから、いいもの、悪いもの、ひとまとめにしてシーンの全貌が掌握できる仕組になっている。いいとか、悪いとかというのはその人個人の主観に依存するところが大きく、こうしてレビュウを眺めながら、自分に合う音楽を選択できるこのセレクトは、全てのファンに公正にありたいと願う僕個人の考えからも、ますます目的に近づけたのではないかと思う。

最後に、一応、こうして前書きらしきものを僕が書いたが、発案から実際の編集までをひき受けてくれた小社、松本を始め、それに携わってくれた人達、そしてこころよくレコードを貸してくれたマニアの方々、多くのレビュアーの皆さんに心から感謝したい。

この集成シリーズは年2回、マーキー誌の別冊として順次発行していく予定である。

1993年11月11日

山崎尚洋



Banco del Mutuo Soccorso

Finalmente il grande passo

nbra essere arrivato per i gruppi italiani
rande momento: anche il BMS, dopo la presentazione
nuovo disco ai rappresentanti della
mpa inglese, è pronto a sfidare l'Europa del rock.
rco Ferranti, tra gli scompensi di una città
he Venezia, ci porta grandi notizie, non ultima
tervista con Keith Emerson che prevede
uturo impero dello « spaghetti-rock ».











Il Ritratto di Dorian Gray

Oggi, Quella Vecchia Locanda

▼73年、CIAO 2001に掲載された
Q.V.LOCANDA

E' USCITO IL SECONDO ALBUM
DI QUELLA VECCHIA LOCANDA CON
ALLA BASE L'EVIDENTE RECUPERO
DELLE TRADIZIONI ITALIANE;
A VOLTE GLI SFORZI VENGONO PREMIATI,
ALTRE NO. LA NOSTRA INTERVISTA.

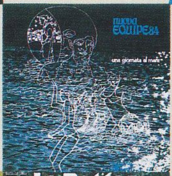



Polydor
Locanda delle Fate
Non chiudere a chiave le stelle
Paola Turci
Bambini
Latte e Miele
Rimani nella mia vita
Patetica: parte seconda
Sold out
God's own land
Dario Baldan Bembo
EMI
I Nomadi
Quanti anni ho?
DATEMI UN BIGLIETTO D'AEREO
BB 3196
I CORVI
tonight
LA QUINTA FACCIA
BLOCCO
FUMETTO ROCK
canapa
RCA
STEREO
TPBO 1049
BELLA SENZ'ANIMA
RICCARDO COCCIANTE
QUI
Fiaba popolare
Enzo Stavolo
OSAGE


angelo mio
gruppo 2001

ride my see-saw
NEW IMPRESSION

sanremo '76
OPERA
L'HO PERSA ANCORA

MAURIZIO e FABRIZIO
Attenzione occasione
Campagna senza fiori


area

La Bottega dell'Arte
bella sarai

OPUS AVANTRA

i pooh

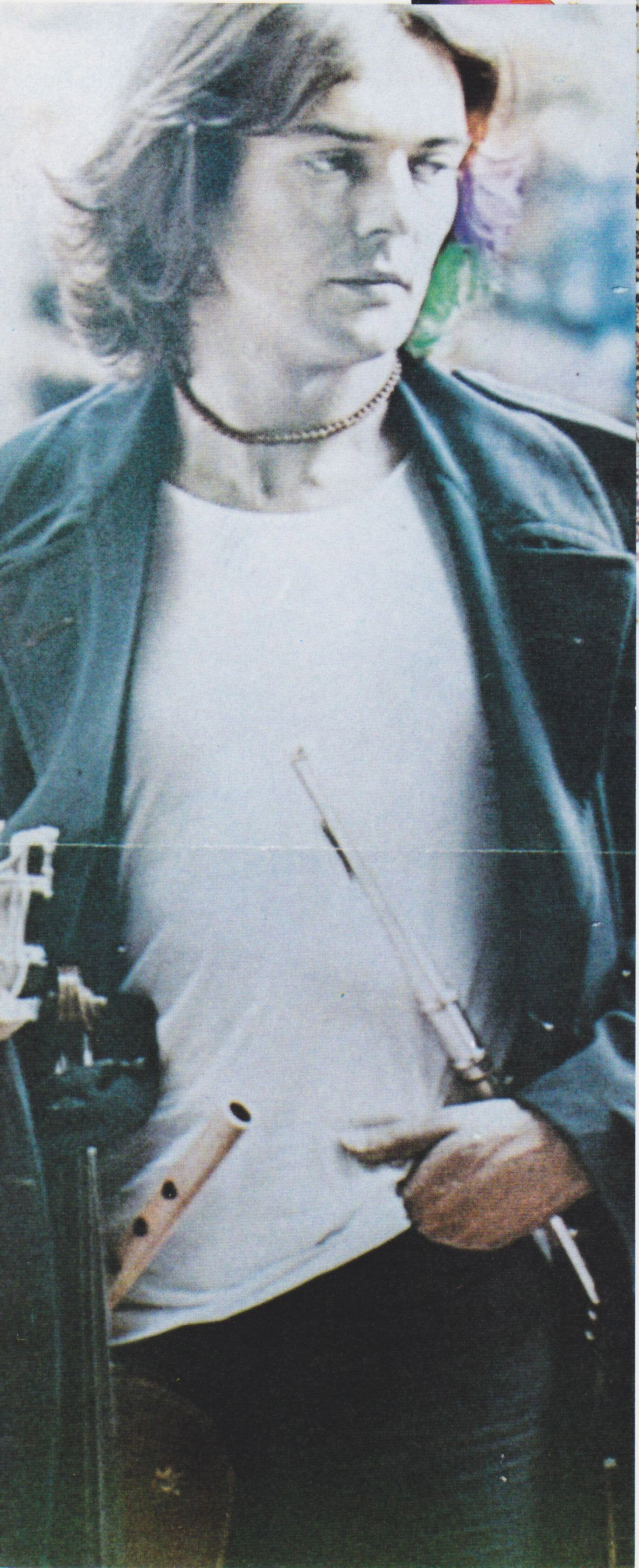
fiori gialli
la strana società

EMI
Alan Sorrenti
Aria
"featuring Jean-luc Ponty"

euro international
annich

Ra elios
Nell'aria


LATTE E
MIELE
Papillon

Latte e Miele


POP
VILLA PAMPHILI
musica
giovani
pace
natura
25-26
27
MAGGIO
ORE
16-24
PARTECIPANO
CIAO 2001

BANCO DEL MUTUO SOCCORSO
PROCOL HARUM
SHAWN PHILLIPS
SOFT MACHINE
STOMU YAMASHTA'S EAST WIND
VILLA PAMPHILI
FESTIVAL
ROMA, 20-21-22-23-24 SETTEMBRE 1974

CONTENTS

ユーロ・ロック集成
イタリア編

税込定価4000円
1993年12月15日第1刷発行

発 行 所●マーキームーン社
161東京都新宿区下落合3-15-18 SYビル404
Tel.：03-3954-2055
Fax.：03-3954-9563
編 集 人●山崎尚洋
発 行 人●賀川雅彦／山崎尚洋
監修/総編集●森下 忠(アンニ・ヴェルディ)
松本昌幸
編 集●古田 賢
川上史郎
中島俊也
レイアウト●古田 賢
写 植●木下隆由(TKルーム)
高沢裕子(ARmS)
印 刷●株式会社カシヨ
Special thanks●鈴木伸一
岡田 洋
Numero Ueno

協力者(50音順／敬称略)

石倉隆弘	川辺敬祐	城元隆志	中島洋一	三輪岳志
石原 洋	木下茂憲	高橋 理	長砂史也	六井久人
いわねあつみ	斎藤隆之	高橋健一(万華鏡)	中西暢久	モダーン・ミュージック
宇田川岳夫	佐々木惇	高見博史	中野周治	山田泰三
内田哲雄	Chihiro S.	高森秀幸	奈良裕明	山中健一
江田和宏	G.S.M.	高山直之	野呂利治	吉瀬孝行
岡崎弘明	渋谷一彦	田中裕生	長谷部均	渡部 暁
岡本太郎	坂本 理	津田幸一	前田 豊	渡辺一己
CASA BIANCA	佐野健二	土川 裕	牧野 博	渡部 武
片山 伸	島村昌樹	堤野正之	松本康臣	杉原光昭

BELLE ANTIQUE
404, SY Bld
3-15-18 Shimo-Ochiai
Shinjuku-ku Tokyo 161
JAPAN 03-954-2055

BELLE ANTIQUE NEW RELEASES IN DECEMBER/JANUARY

TO FOREIGN MUSICIANS & DISTRIBUTORS.
WE ARE SPECIALISTS OF PROGRESSIVE ROCK. PLEASE SEND US YOUR UNKNOWN MATERIALS. WE MAY INTRODUCE THEM IN JAPAN. WE ARE LOOKING FORWARD TO YOUR CONTACT. THANKS.

MARQUEE/BELLE ANTIQUE RELEASES



ツァムラ・マンマス・マンナ 初老の新来者の為に/親しみ易いメロディーの神秘
MARQUEE 9341 2CDs
¥4,855(税抜価格)
12月5日発売

ツァムラ・マンマス・マンナはあまりにも有名なスウェーデンのチェンバー・ロック・グループ。本作は'78年にリリースされた2枚組の大作。この2枚組は全く違うアルバムを2枚あわせたような仕様になっており、1枚は主にインプロヴィゼイションを主体にした作品。もう1枚は、これこそ彼等の最高作という人も多い、音楽的素養の深さをみせつけるような、まるでおもちゃ箱をひっくり返したように自由な発想で創られたチェンバー・ロック・サウンドなのです。一度、はまったら抜けられなくなるような、摩訶不思議なイメージを持った作品。これぞ、ツァムラの本領発揮という感じです。



ツァムラ・マンマス・マンナ 家庭のひび割れ
MARQUEE 9342
¥2,920(税抜価格)
12月5日発売

ツァムラ名義のラスト・アルバムである本作は、かなりシリアスにせまる、テクニカル・ジャズ・ロック系チェンバー・サウンド。とにかくスリリング、超絶技巧、エモーショナルなのです。チェンバー・ロック・ファンばかりでなく、ジャズ・ロック系、あるいはテクニカル・シンフォ系のファンにもマスト・アイテム。自称ユーロ・ロック・ファンで、この2枚のツァムラのアルバムを聴いたことのない人、あなたは不幸です。ファンの間では「ジェントル・ジャイアント張りの複雑な曲構成を、アレア、マグマに匹敵するパワーとテクニックで演奏する驚異の作品」と噂されていた作品なのです!!

NOW PRINTING

美狂乱 "乱"(ライブVol.3)ー仮題
BELLE ANTIQUE 9343
¥2,920(税抜価格)
12月20日発売

「風魔」のCD化に続いて、美狂乱のライブ Vol.3の登場です。今回の最大の聴き物は組曲"乱"。あの「パララックス」に収録された大作を覚えているでしょう? 室内楽的アプローチもあるあの実験的な作品は、そのパフォーマンスの困難さからたった一度しかライヴで演奏されませんでした。その幻のライヴ・テイクが遂に発見されたのです。その壮絶なプレイを聴いて、その場で発売が決定してしまったという因くつきの作品。それだけに迫力は申し分なし。他に「警告」、「二重人格」等を収録します。「風魔」を聴いてぶっ飛んだあなた。これを聴いたら腰を抜かさないように気をつけて下さい!!



レコルダンド・オ・ヴァーレ・ダス・マサス 幻想の彼方へ
MARQUEE 9337
¥2,920(税抜価格)

発売が延びてしまって御迷惑をおかけしました。この号がでる頃には発売できているはずです。'77年というブラジルの第一次プログレッシヴ・ロック・ブームの中で制作された、ブラジリアン・シンフォニック・ロックのトップに位置する作品。4つの小曲と、アナログでは片面全てを費した4つのパートから成る組曲から構成されており、ヴォーカル、フルート、ギター、キーボード、ヴァイオリンという様々な楽器がバランス良くアレンジされ、カラフルな夢を見ているような気持ちにさせてくれる素晴らしいシンフォニック・ロック・アルバムなのです。童話のさし絵のようなカヴァーも見事です。

マーキー/ベル・アンティーク速報

1 関西の伝説のグループ、クェーサー復活。レコーディング終了!!

NOW PRINTING

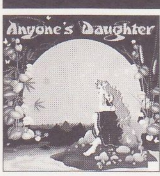
'75年～'82年頃までスペース・サーカスやプリズム等と時を同じくして活動していたクェーサーは、タルカスや悪の教典等のコピーの他、40分に及ぶオリジナル等のレパートリーを持っていた幻のグループ。'82年以降、バンドは解散し、沈黙を続けていましたが、当時のメンバー森田拓也がアイン・ソフの山本要三のバック・アップの元、遂にアルバムを完成させました。当時の面影を残しながらも現代的なイディオムで創られたシンフォニック・サウンド。山本要三もギターをひきまくってます。1月末頃発売予定!! お楽しみに!!

2 フィンチのファースト、シングル曲を加えて来年早々リリース決定!!

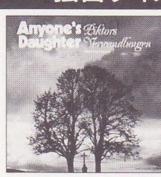


前号でレビューしてから問い合わせが殺到しているフィンチのCDですが、セカンドのマスターが発見できない為、ファーストに当時のシングル曲(これも凄い出来!)をボーナス・トラックとして収録する形でリリースすることになりました。リリースは現時点では未定ですが、来年のできるだけ早い時期にリリースできたらと考えています。アース・アンド・ファイアーと並び、熱いパッション・プレイを聴かせてくれるフィンチは、やはりシンフォニック・ロックの雄というにふさわしい存在ですね。

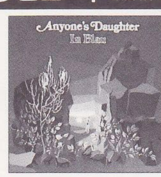
独占ディストリビュート(価格は WORLD DISQUEでの標準小売り価格です)



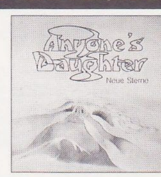
ANYONE'S DAUGHTER Anyone's Daughter
¥2,800
11月初旬入荷予定
ファーストのアドニスに続いてこのセカンドもCD化されました。前作のイメージを継承しながら、演奏自体はさらにソフィスティケイトされてきた時期の作品。この時点では、日本ではまだまだ無名でしたが、これ程の完成度の作品ができあがっていたのです。



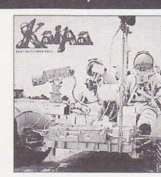
ANYONE'S DAUGHTER Piktors Verwundlungen
¥2,800
11月初旬入荷予定
これこそA.D.の最高作。ロマン派詩人ヘッセの詩を題材にした作品で、清らかなイメージの楽曲を完璧なテクニックで演奏しています。何と、これはライブ録音だったのです。信じられますか? どれか1枚聴いてみたいのなら、間違いなくこれです!!



ANYONE'S DAUGHTER In Brau
¥2,800
11月初旬入荷予定
4枚目の作品。美しい、ブルーに統一されたカヴァー・アートが印象的な作品。カヴァーのイメージ通り、曲はさらになめらかな印象になって円熟されたサウンドが楽しめます。メリハリこそ前作のほうがありますが、この落ちついた感じも最高ですネ。



ANYONE'S DAUGHTER Neue Sterne
¥2,800
11月初旬入荷予定
5th。前作と比べると、シンフォニック・ロックとしてのヴォルテイジは落ちましたが、それもA.D.としてのこと、他のグループの音と比べればまだまだいけます。'80年代のドイツを代表するグループ、エニワンズ・ドーター。どうぞ御賞味下さい。



KAIPA Inget Nytt Under Solen
¥2,800(ライナー付)
日本に突然紹介され、以後、そのサウンドの素晴らしさから人気を呼んでいるカイパ。ファーストからサードまではどれも甲乙付け難いシンフォニック・サウンドですが、組曲形式になっているこのセカンドがトータル性という点では群を抜いています。

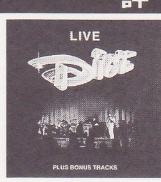


SOM NOSSO DE CADA DIA Snegs
¥2,800
ギターも入ってはいますが、曲の中心はテクニカルなキーボード・ワークです。エマーソンやパトリック・モラツあたりの影響のうかがえるキーボードで、やや泥くさい、'70年代初期のブリティッシュ・ロック系の雰囲気も持っています。

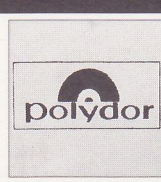
好評発売中



美狂乱
風魔(LIVE VOL.2)
Belle Antique 9339
¥2,920(税抜価格)



ダイス
ライヴ
Belle Antique 9340
¥2,920(税抜価格)



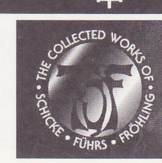
マジカル・パワー・マコ
マジカル・パワー
Polydor/Marquee 9332
¥2,800(税抜価格)



天地創造/アイン・ソフ
駱駝に乗って(アーリー・ライヴ Vol.1)
Belle Antique 9120
¥2,920(税抜価格)



天地創造/アイン・ソフ
過去への扉(アーリー・ライヴ Vol.2)
Belle Antique 9336
¥2,920(税抜価格)



SFF
ザ・シンフォニック・スペクタクルズ
Marquee 9334 2CDs
¥4,855(税抜価格)

主要販売店リスト

＊マーキー/ベル・アンティークの商品は以下の主要販売店で入手できます。通販の場合はTELにて在庫確認の上、代金＋送料(1枚なら350円)をマーキー内ベル・アンティーク係までお送り下さい。

〈東京〉
マザーズ・レコード 03-3461-1134
ディスク・ファン 03-3367-0668
新宿レコード 03-3363-3669
レコファン 03-3468-9543
パム 0427-23-1005
ディスクユニオン新宿店 03-3352-2691
ディスクユニオン渋谷2号店 03-3461-1121
ガーデン・シェッド 03-5389-6721
ピース・アイ・レコード 03-3380-7332

〈東北・北海道〉
仙台 ディスク・ノート 022-222-2837
レコード・ギャラリー 022-221-5308
オールド・レーン 022-213-0141
札幌 グルグル 011-271-0161

〈関西〉
大阪 ディスク・インなんば店 06-644-2822
神戸 ハックルベリー 078-332-0766

〈東海・中部・甲信越〉
沼津 シーザー 0559-62-9070
名古屋 ディスク・ヘヴン 052-853-3571
エイト 052-735-0988
マスタングレコード 052-265-0451
金沢 レコード・ジャングル 0762-64-3672

これが、ベーシック・ユーロピアン・ロックだ!!

EUROPEAN ROCK COLLECTION ENCORE

お待たせしました。皆さんのアンコールにお応えします!

長らく廃盤、品切れすいませんでした。今回当社が権利を持つ膨大なカタログの中から、最重要(ベーシック)なアルバムばかりをセレクトして、しかも特価でプレゼントします。世界・日本初CD化のアルバム(あのアルティも含む!)も多数含みます。当然(!?)全部買いましょう!

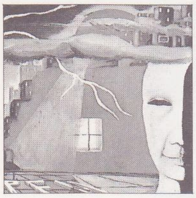
NOW ON SALE!! ●各税込¥2,200

5:1特典盤プレゼント 5/21、8/21発売の"NEXUS CLASSICS全17枚"及び6/23、11/26発売の"ユーロピアン・ロック・コレクション・アンコール+新譜、全26枚"合計43枚の中から5枚お買い上げの方に「オルメ/ライブ」の特製8cmCDをプレゼントします。(詳細はCDオビ裏をご覧下さい)

◉「ユーロ・ロック読本Vol.4」ご希望の方は下記宛へ

切手300円分同封の上、(〒112)東京都文京区音羽2-2-2キングレコード(株)販売促進第一部ユーロ読本係へ。ご住所、ご氏名、年令も併せてご記入下さい。部数に限りがありますのでお早めにお申し込み下さい。(11月上旬完成予定)

P.F.M./幻想物語 ●KICP-2717



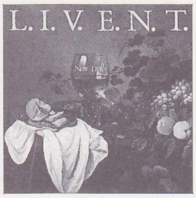
"栄光の"P.F.M.、イタリアでのデビュー・アルバム。イタリアン・プログレの原点ともいえる一枚。古典的名盤にして、歴史的名盤。まだ世界デビューを果す以前のP.F.M.ではあるが、このアルバムを聴くことによって改めて、その実力の高さを知らせしめられる凄いアルバム。

P.F.M./友よ ●KICP-2718



言わずと知れた「幻の映像」の原盤ともいえるアルバム。クリムゾンのピート・シンフィールドが本アルバムを聴いて、あのマンティコアに紹介し、自らプロデュースをかって出たのは有名な話。繊細さとダイナミズムをロックというフィールドで表現し得る最良の形といいきってしまいたい素晴しいアルバム。

ニュー・トロルス/ライブ ★初CD化 ●KICP-2719



76年にオリジナル・メンバーが再集結し発表された「コンチェルト・グロッソ2」の頃のライヴ。誰もが知っているあの名曲「コンチェルト・グロッソ」のライヴが聴けるとは! 正にファン感涙の名曲、そして名演! ファン待望の初CD化だ。

ニュー・トロルス/テンピ・ディスパリ ●KICP-2720



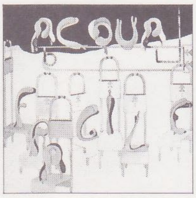
ニュー・トロルスのアルバムの中でもやや異色の存在として知られる1枚。アルバム時はAB面1曲づつという驚かされる曲構成。つまりすべてがインプロヴィゼーションにて演奏されている。他のアルバムの各曲のようなドラマティックさには欠けるものの、彼らのテクニカルな部分は十二分に味わえる。

ゴブリン/サスペリア ●KICP-2721



イタリアン・ホラーの鬼才ダリオ・アルジェント監督の「サスペリア」のサウンド・トラック。イタリアの一流スタジオ・ミュージシャンによって結成されたゴブリンは、数多くのサントラを手掛けている。この「サスペリア」は恐怖映画(ホラー)の傑作として日本でも大ヒットし、サントラも話題となった。

アクア・フラージレ ●KICP-2722



P.F.M.がプロデュースしたバンドとして知られるアクア・フラージレは、当然テクニック的には世界レベル。後にそのP.F.M.に引き抜かれることになるヴォーカルのベルナルドを中心とした美しくさわやかなコーラスもこのバンドの特徴。

アトール/サード ●KICP-2723



本シリーズ中でも人気、セールス両面でトップを行くアトールのサード・アルバム。一般的にはセカンドの「夢魔」が彼らの最高作ということになっているが、むしろ完成度ではこちらの方が上とするプログレ・ファンも多い。特に一曲目の「パリは燃えているか?」は、間違いなく彼らの代表曲。

エルドン/終わりのない夢 ★初CD化 ●KICP-2724



世界中に多数いるキング・クリムゾン・フリーク的バンドの中でも、(美狂乱と並んで?)トップを独走中のエルドンの5枚目のアルバム。クリムゾン同様心地良いドラミングをバックに、リシャール"フリップ"ピナスのギターがここでも冴え渡っている。

リシャール・ピナス/クロノライズ ★初CD化 ●KICP-2725



フランスの鬼才リシャール・ピナス2枚目のソロ・アルバム。エルドンのリーダー(というよりワン・マン・バンド?)として知られているピナスの本アルバムは、そのジャケットが示すモノクロームな世界そのままの無機質なサウンドが、混沌としたうねりを創りあげていく…。

サグラド・コラソン・ダ・テッラ/自由の灯 ★初CD化 ●KICP-2726



ブラジルのトップ・プログレ・バンド、サグラドのサード・アルバム。リーダーで、ヴァイオリン奏者でもあるマルクス・ヴィアナの個性がこのバンドの持ち味となっているが、その美しくもドラマティックなサウンドは、南米プログレの質の高さをうかがわせるにふさわしい。

アルティ・エ・メスティエリ/ティルト ★初CD化 ●KICP-7027



この"芸術家と職人たち"の創り出す超緻密なサウンドは、P.F.M.やアレアと並んで、正にイタリアの奇跡ともいうべきとてつもないもの。デビュー・アルバムにして世界の頂点に立ってしまった恐るべきテクニック、曲構成の見事さは狂気的な傑作!! ●イタリア直輸入盤(歌詞/解説付)

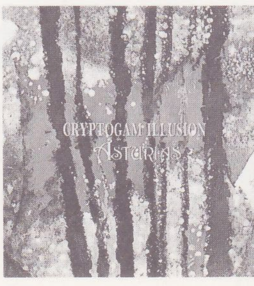
アルティ・エ・メスティエリ/ライブ ★初CD化 ●KICP-7028



あのプログレ史上に残る大傑作「TILT」を、そのままライヴで再現してしまったアルティの実力にはただあきれてしまうのみ。92年に突然リリースされ、すべてのプログレ・ファンに衝撃を与えた本作は、まぎれもなく70年代の録音。
●イタリア直輸入盤(歌詞/解説付)

美しく、激しく、寒い……… アストゥーリアス 3年ぶりの3rdアルバム。

「ブリリアント・ストリームス」に続くアストゥーリアスの第3弾アルバム。輝く美しいメロディ、クリーンなサウンド・ファンタジーの世界。マニピュレーターの大山曜を中心とするインストゥルメンタル・ロックのユニットであるアストゥーリアス。プログレ・ファンを中心に根強い人気を持っている。今回はザバダックの上野洋子がヴォーカルを努め、ポルトガル語による詞(中村善郎作詞)で歌うのが話題。



アストゥーリアス
クリプトガム・イリュージョン

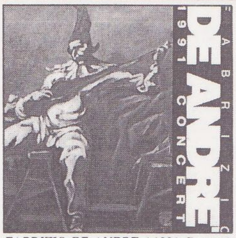
ディスタンス
クリプトガム・イリュージョン
アドレセンスィア
ミストラル・アイランド
フェニックス
グレイシア
サイバー・トランスミッション
ダンサ・ダス・ポルボレタス
オ・テンポ・パサ

NOW ON SALE!! ●KICP-355・税込¥2,800

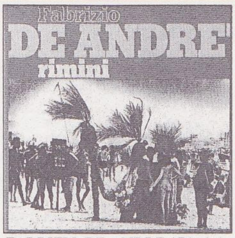
発売元:キングレコード株式会社☎03-3945-2114 CRIME

ディスクユニオン新宿店6Fに
プログレッシヴ・ロック専門フロア オープン!!

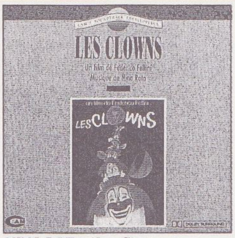
disk union 新宿店 RECOMMENDED ITEMS



FABRIZIO DE ANDRE / 1991 Concerti (CD)
イタリア、ジェノヴァ出身のカンタゥトゥーレ、1991年のツアー収録の傑作ライヴ。盟友マウロ・パガーニのサウンド・プロダクションも見事で地中海音楽の新地平を生み出しています。



FABRIZIO DE ANDRE / Rimini (CD)
そのアンドレの1978年のアルバム。地中海色をうちだす前の作品で、南欧のふりそそぐ陽光とそのなかでふっと襲われるメランコリーを感じさせる名盤です。



NINO ROTA / Les Clowns (CD)
最もイタリア的な感受性を感じさせる映画監督フェリーニ。最近亡くなった彼が愛したサーカス道化の世界を描いた"道化師"のサントラです。哀愁と喧騒の交錯する独自の世界です。



LOCANDA DELLE FATE / Forse Le Lucciole Non Si Amano Piu (CD)
イタリアン・シンフォニックロックの美の究極これ以上表現しようがないほど美しい'77年発表の唯一のアルバム。CDにはアルバム未収録の3rdシングルから2曲追加収録されています。



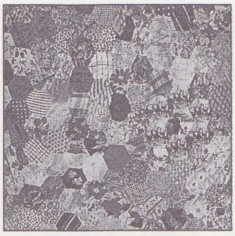
BANCO DEL MUTUO SOCCORSO / Da Qui Messere Si Domina La Valle (CD)
バンコの傑作アルバム1st、2ndを再レコーディングした2枚組壷型CDが再入荷しました。旧作以上にハイクオリティーなサウンドです。



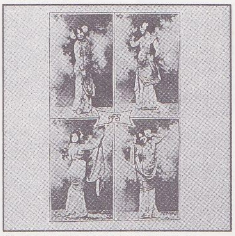
AREA / ARE(A)ZIONE (CD)
テンションの高い演奏とデメトリオ独特のヴォーカルが絡むアレア絶頂期のライヴアルバム。これを聴かずしてアレアは語れない最高傑作です。



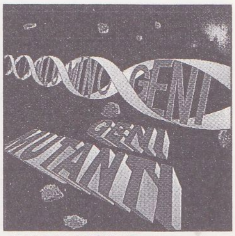
JACULA / Tardo Pede In Magiam Verus (CD ?)
'75年に自主制作されたイタリアン・チェンバーロックの決定盤!! 宗教的なサウンドにシャーマニックな女性ヴォーカルが悪夢のような暗黒世界を展開しています。



IL PAESE DEI BALOCCHI / same (CD)
'72年発表の彼ら唯一のアルバムが本国イタリアでもCD化されました。牧歌的な哀愁のメロディーがノスタルジーをさそいます。CDには2曲ボーナストラック収録。

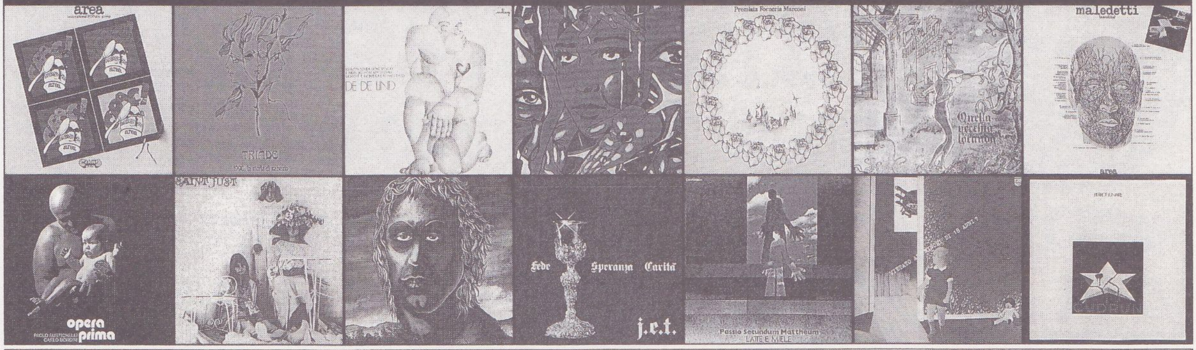


IL BALLETTO DI BRONZO / Ys (CD)
'72年発表の2ndアルバム。完璧な演奏と息つく暇もない曲構成。アルバム全体を通じてプログレッシヴという枠には収まりきれない名作中の名作。CDには2曲ボーナストラック収録。



ALLUMINOGENI / Geni Mutanti (CD)
なんと20年振りの復活ニューアルバムは仰々しいくらいド派手な圧倒的迫力でせまるシンフォニックサウンドです。1曲目のパイプオルガンの音が全てを語っています。

12/31(金)恒例のラストデイバーゲン
今回もプログレッシヴロック中古CD1,000枚大放出

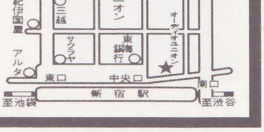


プログレッシヴ・ロック LP・CD・雑誌・パンフ
高価買取中

プログレッシヴ・ロックのLP・CD・雑誌・パンフをご処分の際は、ディスクユニオン新宿店をご利用ください。廃盤、貴重盤は特に高額にて買取りいたします。遠距離の方もご利用いただける出張買取のシステムもございます。詳しくはお問い合わせください。

disk union
ディスクユニオン新宿店
6F：プログレッシヴロック専門フロア
03-3352-2691 営業時間：午前11時～午後8時(日・祝は午後7時まで)

「音楽書籍」専門フロアも同時オープン!!
ロジャー・ディーン画集、再入荷!!
中古書籍・絶版雑誌等も取り扱います。



GROUPS ▶

略号

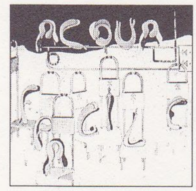
●＝外盤LPのレーベル、規格番号
○＝外盤CDのレーベル、規格番号
◉＝日本盤CDのレーベル、規格番号



ABISSI INFINITI
Tunnel

'81
●Knights K.N.R. 001
○
◉

このアルバムは'81年に発表されたにも拘らず、自主製作の少数プレスの為数年前になってイタリア本国のマニアによって発掘された一枚である。厚手のWジャケットでいやがうえにもあの'70年代への熱い思いが甦る。ジャケットのデザインからはハードな音が予想されるが、実際はカンタウトーレの流れを汲むヴォーカルを中心に据えた歌心溢れるバンドである。バックのAc.ギターが効果的に使われ、ソリーナ専門奏者を加えた二人の奏でるキーボード・プレイは非常にメロディアスで、トータルのイメージはとても瑞々しい音作りである。'70年代の多くの名盤に付け加えたい一枚。　（高橋）



ACQUA FRAGILE
Acqua fragile

'73
●Numero Uno DZSLN 55656
○BMG Ariola ND 74853
◉キング KICP 2051

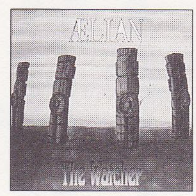
P.F.M.の初のプロデュース・グループとして世に出たアクア・フラジーレは、ブリティッシュ・ロック、とりわけジュネシス、ジェントル・ジャイアントの強い影響下にあった。実際、曲によってはオリジナリティの欠如を認めざるを得ない部分もあるが、溢れんばかりの躍動美と人間味に満ちたその演奏は十分に魅力的だ。また、清涼感溢れるコーラス・サウンドは、多くのイタリアン・ロックの中にあって異彩を放っているといえよう。彼らは、この1stアルバム発表の翌74年、ディスキ・リコルディに移籍して2ndアルバム「Mass-Madia Stars」を発表。よりインターナショナルな可能性を提示していたが、翌75年にVo.のベルナンドが兄貴格のP.F.M.に加入したことにより、その短かい歴史は幕を閉じたのである。　（城元）



ACQUA FRAGILE
Mass Media Stars

'74
●Ricordi SMRL 6150
○Contempo CONTEDISC 003
◉

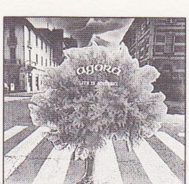
ACQUA FRAGILEの2ndアルバム。2ndになってもやはりジェネシスの影響を強く感じる。清涼感のあるコーラスワークも相変わらず、と言った所。イタリア臭さを感じさせないこと、ジェネシスやジェントル・ジャイアントの影響……というか早すぎたジェネシス・フォロワーという点をどう判断するか、によってこのバンドの好き嫌いが決まってしまうかもしれない。逆に初期のジェネシスからプログレに入った人で、イタリア語のボーカルが苦手な人に歌詞も英語だしイタリアを意識する必要がないので好適かもしれない。1stに引き続きプロデュースをPFMが担当し、すっきりこなれた音になっている奇麗なコーラスが好きな人に向く内容であり、そうした点ではプログレにあって貴重な存在かもしれない。　（野呂）



AELIAN
The Watcher

'92
●
○Musea FGBG 4061.AR
◉

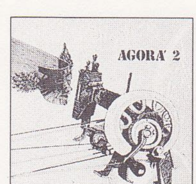
ジェノヴァ出身の4人組で、新人のリリースも積極的なムゼアからのデヴュー・アルバム。ほぼ同時にリリースされたFANCY FLUIDや、JESTER'S MARCH. MONTEFELTRO等と、どうしても比較してしまうのだが、彼らの良さはシンプルな感じである。割合とこじんまりまとまっている気もするのだが、程よい軽さを蓄えた軽快なシンフォニック・ロックなのである。ただアレンジや音の作りなどからはイイ線を行っているところも見られ、環境やスタッフに恵まれれば、面白い展開になるのではないかという期待が持てる。今の感じではポンプ・ロック以降の普通のグループ域を出ていないのだが、リリカルな感じがもっと出れば良い作品になるのではないだろうか?　（津田）



AGORA
Live in Montreux

'75
●Atlantic T50171
○
◉

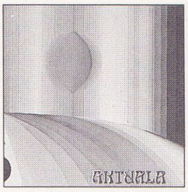
75年7月7日に行われたモントルー・ジャズ・フェスティバルでデビュー。その時のライヴをそのままファースト・アルバムに収めた。グループ名のアゴラとは古代ギリシャの自由と民主主義への「唱和と参加」を理想とする民衆の広場の事。メンバーは全員ミュージカル等で仕事をしていたスタジオ・ミュージシャンの集まり。ジャケットに「ウェザー・リポートにベーシックな影響を受けたエレクトリック・ジャズ」というバンドのインフォーメーションが載っている。 翌年に若干のメンバー・チェンジを行い 「Agora 2」（Atlantic： T-50324）を発表するがその後解散してしまった様だ。メンバーはG.B.D. Kyd. Sax.の5人でセカンドはもう一人のサックスとパーカッションが加わっている。　（いわね）



AGORA'
Agora'2

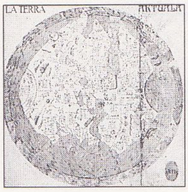
'76
●Atlantic T50324
○
◉

あまり注目されることのないイタリアのジャズ・ロックであるが、アゴラはペリジェオ、エトナなどとともにファンには知られた存在である。彼らは2枚のアルバムを発表しているが、前作はライヴ盤だったので、本アルバムが唯一のスタジオ盤となる。グループはピアノ、ギター、ベース、バリトン・サックス、ドラムス、ソプラノ、サックスの5人から成り、タイトルなリズム・セクションをバックにサックス、ピアノ、ギターが次々にソロを展開するという典型的ジャズ・ロック・スタイルの演奏である。比較的クールな演奏であり、各人のソロもやや短かめでテクニックを誇示するようなものでないため、今一つ迫力に欠ける感があるが、ニートで非常に耳に心地良いサウンドである。　（賀川）



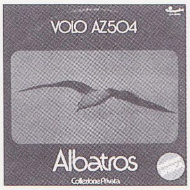
AKTUALA
Aktuala
'73
●Bla Bla BBL 11054
○
◉

イタリアも例にもれず民族音楽の流れがある。これがブラ・ブラとなればとても一筋縄では行きそうにない。アクトゥアラの変質した民族音楽はまるでサード・イヤー・バンドを思わせる。所々アグレッシヴな面がのぞくとは言え、オブラートがかかったようなおぼろ気な流れは独特だ。従って外へ外へと向かう力動感よりも、内側へ向かう瞑想感が強い。彼等の音楽的関心がインド、アフリカ等の第三世界へ向けられていることは確かで、2作目「La Terra」の後、モロッコへ、そして戻って3作目「Tappeto Volante」を製作している。このデビュー作を聴いても民族音楽というよりも、更に呪術的なニュアンスを感じとれる。後にW.マイオリ(木管)はFUTURO　ANTICOを結成、L.ヴァキーナ(perc)はソロへ。(松本)



AKUTUALA
La Terra
'74
●bla-bla BBXL 10004
○Artis ARCD 027
◉

bla-blaというレーベルは実験色の強い作品が揃っているのだが、その中でも極めつけの一枚である。モロに中近東風の民族音楽がベースになっており、非常に不思議な雰囲気を醸し出す音楽である。メインになるのは全作品を書いているWALTER MAIOLIのアラビック・オーボエと現在脚光を浴びているパーカッション奏者TRILOK GURTUの若くアグレッシヴなプレイで、それらにチェロやスパニッシュ・ギターやサックス、タンブーラなどが絡んでくる。もちろん全曲(と言っても4曲しかないが)インストゥルメンタルで、ロックというには程遠いのかも知れないが、浮遊感、恍惚感、適度な緊張感はかなり味わい深いものが有る。ポポル・ヴフのイスラム版と考えれば良いのかもしれない。(津田)



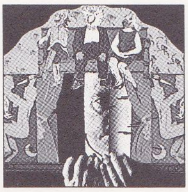
ALBATROS
Volo AZ 504
'76
●Carosello CLN 25065
○
◉

今をときめく大物カンタウトーレ、トト・クトゥーニョが在籍したことで知られるアルバトロスは、地味ながらもラヴ・ロックの佳作を残している。何曲かは日本でも以前発売されたキングのいわゆるカンツォーネのオムニバスで聴くことができた。正直いってそれ程感心する曲ではなく、このLPに対しても期待はほとんど無かった。大傑作、秀作というつもりは毛頭ないが、何曲かは数多く聴いたラヴ・ロックの中でも上位にランクされる。イタリア独特のダミ声とハイ・トーンのヴォーカルが交互に現れるA②は特に印象深い。どの曲も親しみ易くヒット性を持っている。今のところ、この一作しか知らず、メンバーについても詳しく分らない事を、お断りしておく。(吉瀬)



ALBERGO INTERGALATTICO SPAZIALE
no title
'78
●private LDM 001
○
◉

元GIGANTIのGiacomo Di MartinoとTerraという女性ヴォーカリストの2人による傑作。全編オルガンと女声、一部パーカッションと男声を加えただけで淡々と進行していく。メディテイティヴではあるが、オルガンの音色は暗く重く圧迫感があり深く響く表情豊かな女声と相まって、黙示録的終末的な世界を演出している。ジャケットは反戦・反核デモの写真だろうか。付されたポスターには放射能防護服を着た人物が着ていない人物に何やらしようとしているのを大写しにした図柄。音的に共通点はあるものの、はったりじみたヤクラとはある意味で対照的、むしろBattiatoやGiusto Pioあたりとも比較すべきなのだろう。GiacomoはMino Di Hartino名義でソロLPを、TerraはGiacomoも協力しているシングルをリリースしている。(森下)



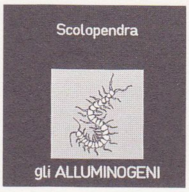
ALBEROMOTORE
Il Grande Gioco
'74
●Intingo ITGL 14001
○
◉

カンツォーニエレ・デル・ラッツィオ、ピアッツァ・デレ・エルベ等、一風変わった作品を出しているIntingoレーベルからリリースされたアルベロモトーレの唯一のアルバムである。グループはヴォーカル、ベース、ドラムス、キーボード、ギターの5人から成るが、主役はややかげりのあるヴォーカルである。イタリア語であることを除けば、ほとんどイタリアらしさを感じさせないもので、ピアノを中心とした乗りの良い演奏と一体化したサウンドは、ブルースをルーツに持つミュージシャンが集まって作ったロック・グループのもののような雰囲気がある。各メンバーはいずれもかなりのテクニシャンであり、'74年にこのような作品を発表したことを考えると、やはり不思議なグループである。(賀川)



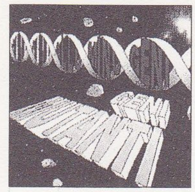
(GLI) ALISEI
(Gli) Alisei
'79
●Durium Ms AI 77407
○
◉

ソリストなら金がかからない、もしくはバンドなら稼げる一握りのバンドを、そうしたレコード会社の方針が見える'70年代後半にあって、彼等はかろうじて1枚のアルバムを残した。本当に一部の有名所を除いて今や逆に珍しくなってしまった歌物バンド。アリセイはその切り変りの時期の一つという気がする。従来のイタリアらしさを受け継ぐ歌い上げのメロディは悪くない。でもどこかそれなりだ。Kbdを始め自分達の手で歌をサポートするが、その演奏はとても一線に出るには力量不足に思える。彼等がこのレーベルに1枚のアルバムを残した事が多くを物語りそうだ。Duriumには歌物が多い。そこでの1枚だ。もちろん曲によってはその妙にロック調のバッキングが利く。でも思い切りに今一つ欠ける。(松本)



(GLI) ALLUMINOGENI
Scolopendra
'72
●Fonit Cetra LPQ-09065
○Fonit Cetra CDM 2029
◉

Patrizio Alluminio率いる3人組アルミノジェニは、'72年にフォニットーLPOより唯一のアルバムを発表している。キーボードトリオのスタイルはトリップと同じであるが、若干ボルテージは落ちる。サントラを含め5枚程出ているシングルはいずれもポップな音作りがなされている。これが彼ら本来のサウンドとも言えようが、本作では幾分ポップな要素を生かしながらもパイプオルガンまで導入した典型的なキーボードロックが聴かれ彼らの作としてはむしろ異端的とも言えよう。ただ、時として本来の持ち味とプログレ的要素がうまくマッチしていない部分も見受けられ、完成度自体は今一つ。が、まとまりは良い方で、泥臭さの中にも味わいがあり、コレクターからは割と受けが良かった作品。 (江田)



ALLUMINOGENI
Geni Mutanti
'93
●
○Vinyl Magic VMNP
◉

'70年に結成されたキーボード・トリオ、アルミノジェニが再結成され、新作をリリースした。'80年代後半から徐々に復調してきた感のあるイタリアン・ロックを象徴する出来事だと思う。新人の余波が'93年になって出てきたということかもしれない。'72年の唯一のアルバムだった「Scolopendra」に勝るとも劣らない荒削りな音作りに、'93年を忘れそうだ。中心人物、パトリツィオ・アルミニオのvo, kbdもそのままに、豪快そのもの。特に大曲でのパイプ・オルガンふうの音色、ヘヴィなギター・ワーク、そして実に様になるヴォーカルの迫力には全盛時'70年代前半を思わせるものがある。もちろん新機材を加え、更にシンフォニックにはなったとは言っても熱いほとばしりが違う。ロックの角っぽさがある。 (松本)



ALPHATAURUS
Alphataurus
'73
●Magma MAGL 18001
○
◉キング KICP 2220

ジェノバを本拠とするストゥディオGによって設立されたマグマ・レーベル。アルファタウラスはその第一弾としてストゥディオGのプロデュースの下にリリースされた。メンバーは以下の通り。ピエトロ・ペッレグリーニ(キーボード)、グイド・ヴァセルマン(ギター)、ジョジョ・サンタンドレア(ドラムス)、アルフォンソ・オリーヴァ(ベース)、ミケーレ・バヴァロ(ヴォーカル)。スタイルとしてはさほど新しいものではなく、ヘヴィーで荒けずりなプログレッシヴ・ロックと言える。ただその荒けずりさが不思議な魅力をかもしだしているのも事実で、めずらしさも手伝ってか一時はかなりプレミアムがつけられていたようだ。オリジナルは3面開きのジャケットである。 (山崎)



ALPHATAURUS
Dietro L'uragano
'92('73年録音)
●
○Mellow MMP 132
◉

こんな録音が残されていたとは驚き!しかもこれを聴けるとは何とまぁ幸せなのだろう。出鼻を挫かれたMELLOW RECORDSのリリースであったが、この作品を出してくれた事には素直に感謝したい。やはり本作も相変わらずリズムはバタ臭く、しかもハードだ。これはまさしくあのALPHATAURUSである。より全面に押し出されている多彩かつ重厚なKey.の活躍…。クレジットを見る限りでは、Vo.が脱退しており?インスト中心に繰り広げられている。ところが意外にもふっ切れたところがあり、プラスになっていたりするから興味深い。特にラストの大作CLAUDETTEではどうなるものかとあたふたしながら聴いてしまい、大変魅力的である。この情熱さがたまらない。 (渋谷)



ALUNNI DEL SOLE
Dove Era Lei A Quell'Ora
'72
●Produttoriassociati PA/LP 38
○
◉

「太陽の息子達」と名乗る彼らの記念すべき1stアルバム。'60年代後半にシングルデビュー、本作リリース後はほぼ1年に1枚の割でアルバムを発表、20年以上を経た今もその輝きを失うことはない。イタリア独得の哀感、語り掛ける様なヴォーカル、溢れんばかりのストリングス、リリカルなピアノの響き…どれ一つを取っても叙情派サウンドの愛好者をセンチメンタルな気分にさせるのに十分すぎる位だ。さすがに後年はポップな色合いを帯びて来てしまったが、それでも10枚以上の作品に共通の物哀しさが秘められており、時代を超越した美しさがそこにはある。そんなみずみずしさを常に保って行くことによって彼らのアルバムデビューの年は"古き良き時代"の一言で片付けられてしまう様な、単なる安っぽい過去にはならなかった。 (江田)



ALUNNI DEL SOLE
...E Mi Manchi Tanto
'73
●Produttoriassociati PA/LP 50
○
◉

「Dove Era Lei A Quell'Ora<Produttoriassociati PA/LP38>'72」に続くアルンニ・デル・ソーレの2nd。前作と比較して作品としてのトータル性に欠けるものの、LPをリリースする以前に発表したシングルの名曲を複数再録音するなど、曲単位で考えると彼らの数多い作品の中でも最高のものと言える。ジャン・ピエロ・レベルベリのオーケストレーションは冴え渡っており、パオロ・モレルリのボーカリストとしての持ち味を十二分に引き出している。愛の世界を切々と歌い上げるヴォーカルを中心としたサウンドは非常にセンチメンタルであり、時の流れに色褪せない輝きを放っている。本作以後もP.A.、リコルディ、RCAから8枚のLPを発売している。 (賀川)



ALUNNI DEL SOLE
Jenny E La Bambora...
'74
●Produttoriassociati PA/LP53
○
◉

アルンニ・デル・ソーレの諸作の中でも、ゆったりとした叙情性と瑞々しさに満ちたトータル色の濃い3rd。艶やかなストリングスとパオロ・モレルリのスキャットが溶け合って流れて行く様は、一光景を長いスパンで追って行く映画のラスト・シーンを見るかの如く、静かなる感動を与えてくれる。特にタイトル曲の長めのエンディングは夢見心地な気分にさせてくれる名調子である。彼らの場合、メロディ・ラインにしてもアレンジにしても決して派手さはないのだが、ちょっとしたフレーズにも深い哀感と物憂さが込められていて、それが切々と語りかける様なモレルリのヴォーカルを一層際立たせて心の琴線に響くのである。例えれば映画音楽と言うよりは一編の映画を見るかの様な映画的音楽である。 (高森)



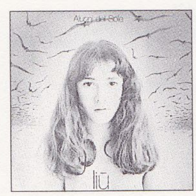
ALUNNI DEL SOLE
Le Maschere Infuocate
'76
●Produttoriassociati PA/LP 66
○
◉

'68年に結成され以来11枚ものアルバム・リリースがありながら、ほとんどCDになってないというのも納得のいかない話だ。このアルバムはオリジナル・ベスト「Raccolta Di Successi」(PA/LP 55, '75)を狭んで通算5作目になる。細かく見るなら2作目からの延長にある作品だろう。デビュー作は例えばPFMがそうだったように一際哀愁が濃く、2作目以後のしなやかさがそれ程は出ていなかった。基本的にシングル集だった2作目の中で純粋な新曲かつアルバムのトップを飾った。"E Mi Manchi Tanto"こそが、以後を占ったといっていいと思う。浸み入るような音楽だ。このアルバムを狭む前後2作にはほとんど差がない。数多いバンドの中でも最も安らぎを与えてくれる一つ。夢見。たそがれ。 (松本)



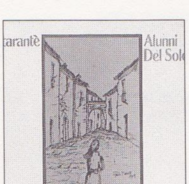
ALUNNI DEL SOLE
'A Canzuncella
'76
●Produttoriassociati PA/LP 76
○
◉

プロドゥトリアソチアティ・レーベルからの最後の作品。溢れんばかりの叙情性が強く支配した初期アルソニの最後の作品とも言える。1・2曲目でのいつになく力が込もった激情的なモレルリのヴォーカルを聴くと、彼がリッカルド・コチャンテなどに通じる瞬発力をも秘めたシンガーである事が分かる。4曲目のようなやや軽快な曲が以前にはなかった曲調であるが、決してポップなわけではなく、むしろホッとさせられる暖かみのあるものである。こうしたラヴ・ロックと呼ばれるバンドをアルバムとして聴いてみると、意外に演奏のしっかりしている事に気づく。ソロを取ったり変拍子を決めたりするわけではないが、2流プログレ・バンドなどよりずっと安心して聴ける。演奏に裏付けされた叙情なのである。 (高森)



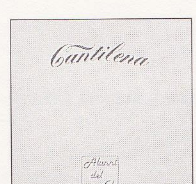
ALUNNI DEL SOLE
Liú
'78
●Ricordi SMRL 6225
○
◉

リコルディに移っての6作目。といってもそのサウンドは基本的には変りがない。オーケストラのアレンジが控え目になった分叙情性が幾分か後退し、地味な印象を受ける。モレルリのヴォーカルも淡々と呟くような歌い方が多くなるが、円熟し枯れた味わいを見せる。タイトル曲を始め数曲でギター・ソロが聴かれるが、何か取って付けた様で多少の違和感を覚える。しかしそれは些細な事かもしれない。Liùという少女に捧げられたこのアルバムは、移ろいやすい人生の見過されて行く日々の感傷を、優しく見守るパオロ・モレルリの暖かな眼差しを感じ取るには充分に魅力的なのだから。 (高森)



ALUNNI DEL SOLE
Taranté
'79
●Ricordi SMRL 6248
○
◉

'60年代の中期から長い活動を続けるアルンニ・デル・ソーレである。パオロ・モレルリを中心としたこのグループのサウンドは、最初期からはほとんど変化しておらず、時代時代で身にまとう服が変わる程の変化で、イタリアの愛を世界中に歌いかけている。本アルバムは'79年にリコルディ・レーベルより発表されたもの。従来通り、ジャン・ピエロ・レベルベリのオーケストラ・アレンジを加えて、甘い哀愁を秘めた歌声を聴かせてくれる。初期のものに比べると、アレンジがシンプルになっているが、やはり歌いまわしは彼等のものである。ジャケットはモレルリのペンシル画。聴いていると、このレコードに出会ったイタリア中部の坂のある小さな町アレッツォの石だたみを想い出す。 (山崎)



ALUNNI DEL SOLE
Cantilena
'83
●Ricordi SMRL 6263
○
◉

'80年代に入って発表された"無駄話"と題された8作目。これまでになくポップなアルバムである。オーケストラのアレンジもジャンピエロ・リベルベリからルッジェロ・チニに交替し、躍動感のある明るいものになっており、シンセを導入するなど演奏面での大きな変化が見られる。軽快なリズムに乗って歌うモレルリのヴォーカルもさり気なく、器用なところを見せる。もちろんしっとりと歌い上げるバラードは不変で、A④はよりつややかさを増した名曲である。このアルンニ・デル・ソーレの鮮やかな転身は一見時代の流れに合わせたものと言えるかもしれないが、幾分自嘲的なアルバム・タイトルからも察せられるようにむしろ彼らの自信の表われと言えよう。プログレ・ファンにもお薦めのアルンニ中期の名作。 (高森)



ALUNNI DEL SOLE
Carezze

'81
●RCA PL 31594
○
◉

Produttoriassociatiからリコルディに移り、「Liu」「Tarante」「Cantilena」と3枚のアルバムをリリースしたアルンニ・デル・ソーレ。'81年にはRCAに再移籍し、通算9作目の本アルバムを発表した。シングル・デビュウしてから既に10年以上の時が経っているが、彼らのミュージシャンとしての姿勢は不変である。'70年代前半の作品に見られた悲愴なまでのセンチメンタリズムこそ後退したものの、メロディアスなオーケストラをバックにパオロ・モレルリが切々と歌う愛の世界は彼らならではのものである。「Tarante」と並ぶ後期の代表作と言える。本作に続いてRCAから「Quando Si E Soli Come Me」を発表した。 (賀川)



ALUNNI DEL SOLE
Quando Sié Soli Come Me

'82
●RCA PL 31658
○
◉

アルンニ・デル・ソーレのラスト・アルバム。アルンニ・デル・ソーレは元々パオロ・モレルリのワンマン・バンドだったが、特に後期の作品は実質的に彼のソロ・アルバム以外の何物でもない。本作品でも全ての曲を一人で作詩、作曲し、ストリングスやバンド(ジャケット等にメンバーの記載はない)をバックに一人で歌っている。年令的なものもあってか、初期の作品に見られた全身で愛を表現するかのような叙情の塊的唱法ではないが、淡々とした中にも優しさを感じさせる穏やかな歌い方で愛を歌っている。10年以上の長きに渡って愛を歌い続けたアルンニ・デル・ソーレ。もう一つのシーンで活躍したイタリア最高のグループの1つであったことは間違いない。 (賀川)



ALUSA FALLAX
Intorno Alla Mia Cattiva Educazione

'74
●Fonit Cetra LPQ 09082
○
◉キング KICP 2221

'74年にフォニット・チェトラから唯一のアルバムをリリースしたアルザ・ファラックスは、マニアの間でさえその名をほとんど知られていなかった。タイトルは邦訳すると「私の奇妙な教育法について」という意味で、全面を通じて短い曲が13曲もクレジットされていて、その全てがトータルな相関関係を成している。サウンドはプログレッシヴ・ロックとしては極めてオーソドックスなスタイルを持ち地味な印象さえ受けるのであるが、所々にユーモアをきかせた叙情的な展開はかなり魅力的といえるだろう。聴く度に彼等のサウンドにはまり込んでしまうような不思議な魅力だ。彼等の活動は古く、'65年と'69年にはすでにビート系のシングルをリリースしていた。 (山崎)



ANALOGY
Analogy

'72
●Ventotto PRVLP 2204
○Vinyl Magic VM 017
◉

アナロジーは女性1人を含む5人組で、'72年に超マイナー・レーベルのVENTOTTOから唯一のアルバムを発表している。クレジットされたメンバー名を見る限りイタリア人のグループではないようだ。音的にさして取り上げるべきものは無く、'60年代の英国を感じさせるオルガンが目立つ程度。ややポップなパートも見受けられるが根本的にイタリアン・ロックの本質から外れた音で、演奏技術も若干劣る。その名のみが知られていた頃はコレクター達も騒いでいたが、実際に音を聴いた時点では失望した人もいよう。なお薄紙製のジャケにはメンバーのヌード写真、中には足跡をデザインした大型ポスターが入っている。結局、プログレファンにとっては単なる"資料的価値"といったところか。 (江田)



ANALOGY
The Suite

'93
●Ohrwaschl Fuzzy's Records OW 019
○
◉

イタリア人とドイツ人の混合グループ、アナロジーのセカンド、ここで聴くことの出来る曲の多くは'73年に作られ、ライヴで演奏されていたらしい。それらに手を加え、2曲追加して、'80年に録音されたのが本CDである。前作はオルガンをメインにしたポップな雰囲気のサイケデリック・サウンドであったが、本作において音の傾向はかなり変化している。前作の面影を感じる部分もないではないが、女性ヴォーカルが中心になった変化に富んだ演奏はややフォーク・ロック調のものが多く、フルートやヴィオラ、ピアノ等がクラシカルなプレイを見せる部分もある。ファースト・アルバムがサイケデリック・ファンに大人気となったため、リリースされたものと思われるが我々にも楽しめる内容である。 (賀川)



ANONIMA SOUND LTD.
Red Tape Machine

'72
●Arcobaleno ARCLP 000111
○Mellow MMP 178
◉

'60年代後半にCBSからAnonima Sound 名義のシングルを何枚か発表、Anonima Sound LTD. と改名して'72年に本作をリリースしている。ドイツロックを思わせる暗い幕明けだが、間もなくやや古めかしい感じのブリティッシュ風サウンドが支配的となり、結局これが最後まで続く。'60年代の英国志向のサウンドはアナロジーなどと共通だがオルガンは余り多用せず、アコースティックギターを重点的に使っているのが特徴。ブルージーな曲も聴かれる一方で、ピンク・フロイドなんかが時々やるフォークタッチの曲を思わせる部分も。演奏技術自体はそれ程でもないが、アナロジーに比べれば録音状態は良い方。なお、レーベルのアルコバレノはリコルディの傘下である。 (江田)



ANTARES
The Sea Of Tranquilty
'79
●Antares AR 03090
○
◉

'70年代終わり頃から'80年代中期までのイタリアは、まさかもうシンフォニック系のアルバムはリリースされていないだろうという先入感と、'70年代の黄金期のアルバム発堀にやっきになっていたこともあり、ポツポツと自主制作されていた作品に廃盤になるまで気がつかないことがあった。これもそんな1枚である。このグループはアルバム以前にもシングルを1枚発表(これはアルバム未収)。又、アルバムからのカットのシングルもあるようだ。やや宇宙的なシンフォニック・サウンドで、素人くさい、いかにも自主制作らしい音だ。哀愁は感じるが、全体のクォリティーの低さの為に大分損をしている作品だ。 (山崎)



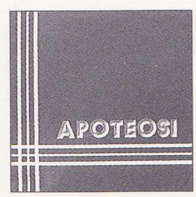
ANTONIUS REX
Zora
'77
●Tickle TLPS 5013
○
◉

ヤクラ解散後、リーダーのアントニオ・バルトチェッティはアントニウス・レックスを結成し、'77年に1stアルバム「Zora」を発表した。ヤクラ同様、ブラック・マジックと音楽を融合させたようなミステリアスな作品で、又、ヤクラ時代の曲も2曲焼き直して演奏している。しかし、ヤクラに較べると若干迫力は不足している。本作は'78年に未収曲を1曲加え、ジャケット違いで再発されている。'79年に2nd「Ralefun」をリリース(幻想性はさらに劣っている)し解散。メンバーの内、キーボードのドーリス・ノートンは以後ソロ活動を続け、バルトチェッティと組んでアルバムも数枚リリースしている。'92年にヤクラからアントニウス・レックス時代の未収曲集「Anno Demoni」をリリースし、現在も活動は続いているようだ。 (山崎)



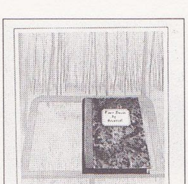
ANTONIUS REX
Ralefun
'78
●Radio ZRLRR 34048
○
◉

ヤクラと比べれば一介のロック・バンドとは言え、前作の不作ぶりを幾らかは返上する2作目。ヤクラの「Tardo～」をコピーするような前作の方向性はなくなり等身大になったことでまとまりが出た。全体にソフト・タッチになっており、フルートとキーボードも軽やかにメロディアス。約半分が吹っ切れのないロック・サウンドだが、残り半分はそうした傾向で、異教ムードを溶け込ませたフローティングなサウンドになっている。アントニウス・レックスでの最も冴えた部分がここだろう。録音はミュンヘンにて。翌'79年3月24日から4月20日にかけて最初で最後のツアーに出た。行先は東欧、トルコ、イタリアはミラノのみ。その後未発表に終った3作目と共にトリポリ、アテネ、日本へのツアー告知も当時の記事に出ている。 (松本)



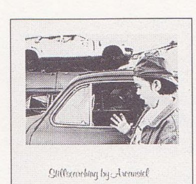
APOTEOSI
Apoteosi
'75
●Said Record MAP 145 SI
○Mellow MMP 139
◉

5人のメンバーから成るアポテオジは、'75年にこの素晴らしいアルバムを発表した知られざるグループである。静けさを誘なうピアノ、自由自在に操られるシンセサイザー、伸びやかなギター、強力なリズム・セクション、そして音の波間に現われては花を添える美しい女性ボーカル。これらが彼等の魅力であるといえるだろう。ロックとクラシックのエッセンスが見事な調和を保っているこのアルバムから、彼らの求めていたものが全盛期イタリアン・ロックに見受けられるあくまでもイタリア的感性による狂おしいまでの美意識の発露であったことが伺える。決して派手ではないが極めて純粋な音楽的姿勢を感じ取れるアポテオジ。お粗末なジャケットに封じ込め闇に葬るには余りにも惜しいグループである。 (鈴木伸一)



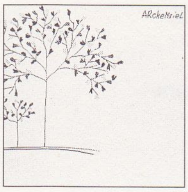
ARCANSIEL
Four Daisies
'88
●private press MG 001
○Contempo CONTEDISC 142
◉

'80年代の後半に現れたイタリア勢の中でも好作品の一つである。サックス奏者を含む5人編成で、ティアックのポータ・サウンドで録音された自主制作盤(メンバーはデモ・ディスクと呼んでいる)なのだが、なかなかの出来である。サウンドを一言で言うとキャメルにピーター・ゲイブリエルのヴォーカルと言った感じ。あるいはマリリオンを軽く聴き安くした具合で、あっさりとした味わいの哀愁が全編を覆っており、結構美しい。もう少し緊張感が有ればと思ったりもするのだが、全5曲(CD化の際にボーナス・トラックが一曲追加されている)という大曲が多い割にはメロディ、構成共にしっかりしていて、一気に聴き通させる力を持っている。こういう音楽が好きだという気持ちが作品に現れている気がして、好感が持てる。 (津田)



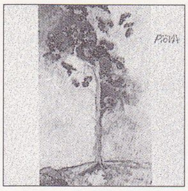
ARCANSIEL
Stillsearching For Arcansiel
'90
●
○Contempo CONTEDISC 143
◉

1st albumから一年半置いて、レコード会社とも契約を果たし、比較的ちゃんとした環境で制作された作品だが、ギターとサックスがメンバーチェンジしていることも有るのか、大きく進歩している。相変わらずの全4曲によるコンセプト作品で、21分を占める1曲目は聞き応えが有る。前作に比べても、哀愁感はそのままに、より一層深みを増している。前作で見られた軽さが、洗練されて良い方向に働いており、逆に持ち味になって活きている。メロディの良さもあいまって、非常に聴き易いのだが、やはり緊張感は今一歩。1st同様に英語で歌われている事もあり、イタリア色は希薄で、好みが別れるところかも知れないが、イギリスでシングル・ヒットを出したりする可能性も秘めているのではないだろうか。 (津田)



ARCHENSIEL
Archensiel
'87
●Cobra A018
○
◉

イタリアのフォーク・ロック・グループ、ARCHENSIELの1stアルバム。フォークと呼ぶにはいささかドラムがタイトだし、ギターの音もかなり歪んでいるが、可憐な女声ボーカルと各種アコースティック楽器(特にバイオリン)はアルバム全体の印象をほんわかとした暖かい物にしている。チェレステがどちらかと言うと夢見るような音であるのに対し、もっとイギリスのグループに近い雰囲気がある。とはいえ、イギリスのようにどこか陰があるわけでは無い。そこがイタリアのグループゆえの特徴だろうか。生活に疲れた時、派手でテクニカルなプログレに疲れた時、ふと聞きたくなる、そういう魅力を持った隠れた好アルバム。歌物、特に女声ボーカルの好きな人、フォークやトラッドの好きな人にお薦めしたい。 (野呂)



ARCHENSIEL
Piova
'89
●Cobra CR 022
○
◉

ARCHENSIELの2ndアルバム。前作の延長線上にありながら、ややロック寄りの音作りになってる。そして、アレンジも前作より凝ったものになっている。その分、素朴な肌触りは前作よりやや減ったと感じる。とはいえ、女声ボーカルの可憐さ、曲の親しみ易さ、メロディーラインの覚え易さと言ったこのバンドの持ち味は健在である。このアルバムの方がロック寄りの音になったため、プログレファンにはこちらのアルバムの方が受けが良いかもしれないが、私自身は1stの素朴さ、暖かみを選ぶ。なお、どちらのアルバムのジャケットも水彩画であり、グループの音を反映した奇麗なもの。2枚のアルバムを残してシーンから消えてしまったこのバンド、CD再発の話も聞かないのが残念。もっと評価されて良いと思うのだが。 (野呂)



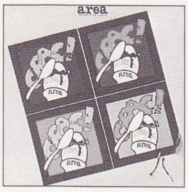
AREA
Arbeit Macht Frei
'73
●Cramps CRSLP 5101
○Cramps CRSCD 001
◉

AREAの代表曲である「Lugilio, agosto, settembre(Nero)」を収録した記念碑的作品。アルバムの出だしで朗読されているのは、恋人と世界に愛と平和を語りかけるアラビア語による美しい詩で、朗読しているのはエジプト人女性だ。これが、フラワー・ムーブメントに対するディメトリオの解釈(彼はエジプト産まれのギリシャ人だ)なのか、単にルーツの一端を提示しただけなのかは、今となってはわからない。これと対称的に暴力的な歌詞を持つ「Lugilio-」はブルガリア民謡に影響を受けたと思われる作品で、テーマ部は15/8、14/8拍子の繰り返しである。本作以後、ほとんどのアルバムでこのタイプの曲が、トップ・ナンバーに使われている。出来れば、AREAには本作から接して欲しい。 (Chihiro S.)



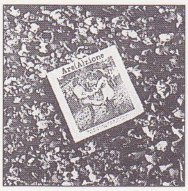
AREA
Caution Radiation Area
'74
●Cramps CRSLP 5102
○Cramps CRSCD 002
◉

ブルガリア民謡の「クリヴォ・ホロ」を原曲とした(この辺りに関しては本誌vol.46のプログレ探偵団参照)「Cometa Rossa」――その後のライブにおいても重要なレパートリー――を収録した2nd。PFMに引き抜かれたP.シヴァスの代わりに新ベーシスト、アレス・タボラッツィを迎えて5人編成で制作されたわけだが、メンバー・チェンジ直後のためか、散漫な印象は拭えない。この印象の原因は、ミュージック・コンクレート的アプローチ、ヴォーカリゼーションやインプロビセーションの占める度合いの多さ。スタジオよりは、ライブ録音にした方がコンセプトが生きたと思う。バンドはこのメンバー・チェンジにより、一層ジャズ色が強いグループとなる。(1stはむしろジャズ・ロック的。) (Chihiro S.)



AREA
Crac !
'74
●Cramps CRSLP 5103
○Cramps CRSCD 003
◉

アレアの3枚目のアルバムである〝クラック!〟は初期のコミュニストとしてのアレアから後期のカオス的なアレアのちょうど中間にあたる時期に発表された。時期的な点のみならず、その音楽的内容においても、彼らの一つの頂点を示すアルバムだろう。A①の流れるようなヴォーカルの、爆発するような感性のほとばしりは、後期のアレアの妙にカオス的でシャーマニックな色彩はなく、地中海的な力強さに満ちている。リンゴをかじる効果音が印象的なアジテート・ソングのA②、そして都市の生成と崩壊を表わした象徴的なA③と、息もつかせぬ緊張の連続である。これに対してB面は多少緊張の糸が解けたような所もあるが、ジャズ・アルバムとしては出色の出来である。 (宇田川)



AREA
Are(A)zione
'75
●Cramps CRSLP 5104
○Cramps CRSCD 004
◉

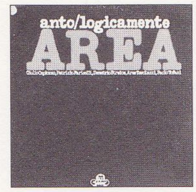
唯一のフル・ライブ・アルバム。彼等のライブが、通常どの位の演奏時間だったのかは知らないが、片面代表曲、片面インプロビゼーション主体の演奏というだけでは、長さとして物足りなさを感じる。逆に言えば例えくどくなっても2枚組位の長さで聴きたかった。ライブ音源がCD化されたりしないものだろうか。とは言うものの、本作のもつエネルギッシュさはスタジオを上回るものがある。トップ・ナンバーはお約束の「Lugilio――」だ。中間部のフリーも生きが良い。また、「La meta di Odessa」では、ステージ上でリンゴを喰うパフォーマンスが聴ける。共産主義のお約束「L'Internazionale」(いわゆる「インター」)が収録されているところも心憎い。 (Chihiro S.)



AREA
Maledetti

'77
●Cramps CRSLP 5105
○Cramps CRSCD 005
◉

クランプスでの最後の録音となったアルバム。バンドの総括となった前作を受けて新たな地平を目指した作品。新たな段階での実験というべきか。AREAは結成当初から、実験的要素を持ったグループ（ロック・バンドとしては）だったわけで、本作ではバンドの可能性と幅を改めて問い直そうとするかのような作品となっている。以前の作品との大きな違いは、ゲスト・ミュージシャンの多さだ。フリー・ジャズ・シーンからスティーブ・レイシー、ポール・リットン、現代クラッシック界からミケランジェリ等が、参加している。残念なのは本作に見られる緊迫感に溢れた感性が次作「1978——」に必ずしも引き継がれなかったこと。（「1978——」は名作だが、本作とは多少違う流れの上に存在する。） (Chihiro S.)



AREA
Anto Logicamente

'77
●Cramps CRSLP 5106
○
◉

非常に渋い選曲だ。1stのエンディング・ナンバーから始まること自体、意図が読めない。ご存知のとおり、通常ベストは各アルバムで一番おいしい曲やヒット曲を集められるものだが、本作ではそれに相当する曲はほとんど収録されていない。最初にこのアルバムでAREAに触れてしまったプログレ・ファンは、非常にアヴァンギャルドなジャズ色の強いバンドだと思い（そのこと自体は間違いではないが）、興味を失うだろう。単にクランプスとの契約の消化だとしたら、逆に「Lugilio——」位は入れているはず。「Are(A)zione」とセレクトが似るのを避けたのか。「Citazione da George L. Jackson」はEP「L'Internazionale」のB面の曲で、フリーをバックに朗読しているような曲。 (Chihiro S.)



AREA
Event '76

'77
●Cramps CRSLP 5107
○
◉

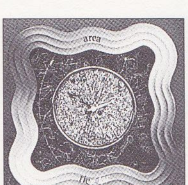
バンドの転換期であった'76年。ディメトリオがスティーブ・レイシー等と行なったフリー・インプロヴィゼーションのみのコンサートを収録したアルバム。通常であれば発表されることなく終わったであろう作品だが、ディメトリオの死のドサクサでリリースされた。時としてサックスやピアノが作品としてまとめる方向に走る（或いは一部テーマとして書かれているのかもしれない。クレジットには「Testi e musiche : P.Tofani, P.Fariselli. D.Stratos」となっている。）が、全編をヘヴィネスが突き抜けて行く。ジャケットの「岸辺で女の子と戯れるフランケンシュタインの怪物」が表わす静的なイメージは、作品の裏返しか。観客のリアクションは激しい。 (Chihiro S.)



AREA
1978, gli del se ne vannno, gli arrabbiati restano!

'78
●Ascolto ASC 20063
○CGD 9031740332
◉MMG AMCE 559

アスコルド・レーベル移籍第1弾。ディメトリオ入りでの最後の作品。トップの「Il Bandit del Deserto」はお約束のブルガリア路線の作品。このタイプのリーサル・ウエポンとでも言うべき恐ろしいほどのインパクトを持つ作品。全アルバム中最高の仕上がりで、この曲だけのためでも本作の価値はある。他の作品もバルカン半島の民謡、ジャズ、現代音楽（ミュージック・コンクレートを含む）、ヴォーカリゼーションといったいつもの要素を、聴きやすく料理した形で提示している。政治色も相変わらず強い。ギターのトファーニが脱退しているが、タヴォラッツィが持ち変えでカヴァーしている。ライブでどのように再現していたのか、興味の持てるところだ。 (Chihiro S.)



AREA
Tic & Tac

'80
●Ascolto ASC 20224
○CGD 9031722112
◉MMG AMCE 565

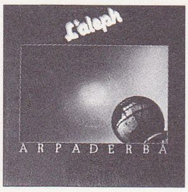
ディメトリオの死後、'80年に残りのメンバーを中心に、一部ブラス・セクションにゲスト・ミュージシャンを加えて制作された作品。本作からは、アレアが内包していた混沌は、あまり感じられない。せいぜい①のイントロ部とタイトル（アンドレ・ブルトンの作品に、ちなんでいる）の付け方、⑨のエンディング部にその名残りが感じられる位で、ほとんど別のバンドと言っても良い。「ただのフュージョン・アルバムである」等、あまり評判のよくない作品だが、よく聴くと楽曲自体は前作の流れを汲んでいるのがわかる。作品にフュージョン的な印象を持たしてしまった一番の原因は、トラック・ダウンの仕方。前作と同じようにやれば、もっとアグレッシヴな作品になったはず。 (Chihiro S.)



ARES TAVOLAZZI TRIO
Kars

'89
●
○Artis ARCD 013
◉

アレス・タヴォラッツィは'74年の「Caution Radiation Area」からアレアに参加したベーシストとして知られている。アレアの強力な布陣の中では、デメトリオ・ストラトス、パオロ・トファーニ、パトリツィオ・ファリセッリに次ぐソロ・ユニットでの録音になるが、これはごく最近の事だ。編成はBruno Cesselli（p）、Fabrizio Sferra（ds）とのトリオで、内容は非常にオーソドクスなジャズになっている。かつてのアレアを期待することなかれ。タヴォラッツィは2曲を書いているが、他にはビル・エヴァンス、チャーリー・ヘイデン他のナンバーが並らぶ。これが彼の現在だろうし、最も落ち着く所なのだろう。クリアーな落ち着きのある作風になっている。 (松本)



ARPADERBA
L'Aleph
'81
●In-contro IN 12003
○
◉

フォーク・スタジオ・A発見以降の発掘作業中に引っ掛かってきた一枚。トラッド系ということで入手し聴いてみると女性はいないし電気・電子楽器は沢山入ってるしで随分がっかりしたのを覚えている。だが改めて聴き直してみると、この陽光さんさんの地中海の雰囲気一杯の音楽はむしろカルロ・シリオットやマルチェロ・カプラの延長線上にあるものであった。元々地力のあるトラッド系ミュージシャンであろう彼らの新しい試みとして評価しておきたい。音楽的傾向は異るが同じ様な試みを見せる作品としてCantambanchiの「Land Rover」(Studio Records MS1003 '83)を挙げておく。こちらは女性ヴォーカルで、演奏しているかどうか不明だがジジ・ヴェネゴーニの名も見える。　(森下)



ARTI + MESTIERI
Tilt
'74
●Cramps CRSLP 5501
○Vinyl Magic VM 7012
◉キング KICP 7027

TRIP解散後、イタリアきっての凄腕ドラマー、フリオ・キリコが、'74年トリノで結成した6人編成(ds, kbd, b, g, vln, sax)。ヨーロピアン・ジャズ・ロック最高峰の一つに数えられる音楽集団。その各ソリストが繰り広げる緻密なアンサンブルは、このデビュー作にて演奏技術の高さ以上の音楽を奏でる。不朽の一作。冒頭から一瞬のすきなく緊張感溢れる名奏者のプレイが走り出し、舌を巻くような目まぐるしさの狭間から、地中海民族音楽をエッセンスにした安らぐような哀愁が広がる時の爽快感は他では味わえないものがある。異様に音数も多くピッチも速い反面で音使いが繊細である。そしてたそがれるようなヴォーカルのわずかなパートさえ瑞々しい。生き生きとした情感そして音楽の躍動を満喫できる屈指のイタリア作。　(松本)



ARTI + MESTIERI
Giro Di Valzer Per Domani
'75
●Cramps CRSLP 5502
○Viny Magic VM005
◉

ex TRIPのFurio Chiricoを中心として非常にハイレベルなテクニックにより構築された作品を作り上げたアルティ・エ・メスティエリの'75年にリリースされた2ndアルバムが本作である。そのChiricoの正確無比でありながらも火の出るような攻撃的なドラミングに代表されるテクニカルで緊張感に富んだ演奏と、その上にのるイタリアらしい美しくも優しいメロディーラインを対比した作風は1st同様ハイレベルなもので作品の出来も甲乙つけ難いほど素晴らしいものになっている。しかし、本作では前作で聞かれた叙情的な部分が若干減っており、その分ジャズロック色が強くなっている為、全体的に前作に比べより硬派なイメージが感じられるように仕上がっている。(島村)



ARTI E MESTIERI
Quinto Stato
'79
●Cramps 5205 505
○
◉

ジジ・ヴェネゴーニがグループを抜け、ヴェネゴーニ・アンド・カンパニーを結成するなど、メンバー・チェンジして発表されたサード・アルバム。前作発表から4年の月日が流れ、その間にイタリアのシーンは大きく変わったが、彼らのサウンドにもかなりの変化が見られる。各メンバーが優れた演奏技術を持っているという点では前2作と同じであるが、従来の作品のような緊張感は感じられず、ゆったりと余裕を持った演奏になっている。サウンドの奥に潜んでいた叙情性も後退したように思われる。ヴォーカルを重視するなど、新たな試みも見られるが、新境地を切り開いたとは言い難い。しかし、ジャズ・ロックとしては悪い出来ではなく、テクニカルな演奏を楽しむことが出来る。　(賀川)



ARTI & MESTIERI
Acquario
'83
●Studio SMS 1002
○
◉

初期のほぼ全曲を書いていたジジ・ヴェネゴーニ(g)が2作目発表後脱退した時点で、アルティ・エ・メスティエリはジャズへ傾いたのだと思う。3作目は各メンバーの近密さが欠けテンションが低い。それを思えば本道を行こうとするこの4作目の方が明解さがある。スタジオ・ライヴということも幸いしているのかもしれない。メンバーもキリコ以外一新され、堂々とジャズ畑に入ったとは言え、バンドとしての勢いは遙かにある。関心のキリコのドラミングにしても同じ事が言える。アップ・テンポな曲が多いこともあって彼の早回しを聴くのならある程度の満足は得られるはず。ただしsax, g, kbdのプレイには、かっての一種の奇抜さはなく、ゆえにひっかかりが少ない。洗練されたジャズ・ロックに仕上っている。　(松本)



ARTI E MESTIERI
Children's Blues
'85
●Edizioni Augusta MS 1009
○
◉

日本ではほとんど知られることなくリリースされていた5作目、ラスト・アルバム。8分、10分、10分という曲の長さを見ると、どうしても「Tilt」「Giro Di Valzer〜」を期待してしまう。もちろん、10年以上の月日が流れたこのアルバムにそれを期待しても叶うはずもないが、手数が減ったとはいえ、唯一のオリジナル・メンバー、フリオ・キリコのドラムは独特のコンビネーションで切れ味鋭いことに変りない。全体には当然ジャズ色が強く、管楽器、kbd、b、gが次々とソロをつないでいく。クリアーなトーンのリラックスした曲調が多い。キリコは同時期にヴェゴーニとの共作を片面収録した「L'altro Lato」(MS 1007, '85)を同一レーベルから出した。こちらはVENGONI & Co.の3rdに通じていく内容。　(松本)



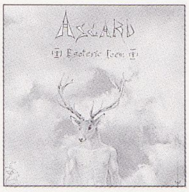
ARTI + MESTIERI
Live
'90('74年録音)
●
○Vinyl Magic VM018
◉キング KICP-7028

まだ今ほどイタリアン・ロック全盛期の未発音源が出ていなかった1990年に突如リリースされたのがこのアルティ・エ・メスティエリの'74年のライブである。なんとこのライブは前記の収録年を見てもらえば解る通り、1stリリース時のライブで、収録されている曲も7曲中6曲が1stの曲になっており、彼らの全盛期のステージでの姿を当時のライブを体験することが叶わなかった我々に垣間見せてくれるものになっている。内容的にも音質があまり良くないことと収録時間が短いことを除けば、ほぼ完璧と言って良いほどのもので、演奏などは1stでの素晴らしさを余すことなく再現した上でライブならではインプロヴァイズも十分に披露してくれている。まさにライブの熱気をそのまま伝えてくれる。 (島村)



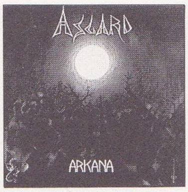
ASGARD
Gotterdammerung
'91
●
○WMMS 007
◉

ほとんど紹介されずに突然現れた5人編成のシンフォニック・バンドのデヴュー作。それもドイツのレーベルからの発売でタイトルはドイツ語、歌は英語、ラテン語のコーラス有りという訳のわからん一作。アカペラの合唱で幕を開けるこのアルバムも、典型的なポンプ・ロックのスタイルで、亜流のジェネシス。だが、得体の知れない暗黒な部分が有る。宗教的なテーマに沿ったコンセプト作のせいかもしれないが、'70年代のイタリアン・ロックが持っていた内省的な暗さが強く、妙に懐かしい感じもするのだ。ファンタジーと言うよりは知的であり、まだ未消化な部分は残しているものの、スケール感をも感じさせている。ただ、構成的に沈滞しているのも事実で、抜けないままに終ってしまうのが残念。 (津田)



ASGARD
Esoteric Poem
'92
●
○WMMS 009
◉

このセカンドではヴォーカルがゲイブリエルから脱皮しつつある。シアトリカルなイメージはそのままだが、朗々と歌っており、オリジナリティが見えて来つつある。1曲目のアンビエントな演奏にときおり絡むつぶやき等も魅力的に思える。全体的にテンポを押えた演奏も深みが有り、単なるポンプじゃないんだぞという雰囲気が出てきた。それにしても相変わらず陰鬱な感が全体を支配していて、この暗さをもっと掘り下げれば、他に無い(現在のシーンにおいて)彼らの魅力となるだろう。もちろん、まだまだ煮え切らないところも残っているし、さほどの束縛力もないが、'70年代のグループ達が持っていた独特な世界の後継者として、期待してみようという気にさせる作品だと思う。 (津田)



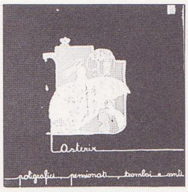
ASGARD
Arkana
'92
●
○WMMS 018
◉

より強力な作品になったサード・アルバム。ファーストがリリースされてから、このアルバムまで、わずかに1年半しか経っていない。恐ろしく早いペースである。よっぽどレパートリーあるいはアイデアが有るのだろう。しかも、どのアルバムにも、ちいさく次のアルバムのタイトルが書かれているのである。前作との間にメンバーが一人去り、二人増えている。これもまた伝説をモチーフにしたコンセプト・アルバムで、70分を超える大作である。陰鬱で物憂げな表情はそのままに、ダイナミックな部分が頭角を現しており、曲調にも幅が出てきた。このせいで、無駄な装飾のない演奏がより活かされており、なかなかの好作品になっていると思う。ここまで来れば、もうジェネシスの亜流といった表現は使えないオリジナルな感性だと言えよう。 (津田)



ASH
Ash
'79
●Lasapa LSP 85002
○
◉

コレクターの興味をそそるカバー・イラストのASHの唯一の作品。メンバーはkbd×2、g、b、ds、そして女性voを加えた6人で製作されているが、それぞれの経歴は定かでない。'70年も経盤の録音とあってサウンド自体も垢抜けてメリハリのある音になっているが、単なる歌ものロックと片付けられないくらいプログレッシヴで凝ったアレンジを盛り込んでいる。マイナー・コードのアルペジオから哀愁を帯びグッと盛り上がるコーラス、そして泣きのギターへと続くオープニングは、只者ならぬところを見せつける。A③では紅一点の女性の可憐なヴォーカルが登場し、シンフォニックなアレンジと共にアルバム最大の聴きどころをつくっている。イタリアン・コレクションの一枚として十分に魅力的な作品。 (た)



ASTERIX
Paligiafici Pensionati Trambai & Santi
'77
●Tickle TLPS 5014
○
◉

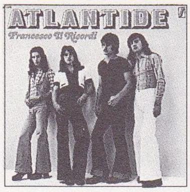
暗く渋いボーカルをメインに美しい生ギターの響き、淡いキーボードの音色がバックを務めるこの作品は、その奇異な雰囲気が評価を大きく分けてしまうだろう。語りとも歌ともつかないボーカルは常に虚ろ気で健全さとは程遠いが、それでもトラッド的メロディーを投げやりに歌う〝La Caramella Di Stato〞、奇妙な明るさが独特のムードを醸し出す〝Tra Amici〞、救いようのない暗さに満ちた〝La Trappola〞や〝P・R・G〞といった曲には何故か共鳴と感動を覚えずにいられない。フォーク、トラッドにアヴァンギャルドな香りを加えた音作りは、真摯な表現意欲から創出されたものに違いなく、一概に異端として片付けてはしまえないものである。 (鈴木伸一)



ASTROLABIO
Spirit Folet
?
●Prince 20040
○
◉

イタリアモノの内外漢である僕にとって、殊FOLK系となると英国産の比ではないにしろ最近少しずつコレクションする様になった。これもその中の1枚。人づてに良いと言われて食指を動かしたんだけど、やはり心が動かなかった。女性の声も余りにも平担過ぎてこちらにちっとも戻って来ないし、2曲のTRADにしてもその独特なWAVEがない。却ってインストの方が心に残る。後述のCORDIGLIERAにも同じ事が言えるが、ノッペリし過ぎるのではないか。イントネーションのせいかもしれないが、もっと起伏があればどんどん乗め込めるのに、今イチツッコミが足りない。やはりFOLK & TRADは本家本元には適わないと言われても仕方がない。このぐらいの作りじゃ。

（佐野）



ATLANTIDE
Francesco Ti Ricordi
?
●SP 1476
○
◉

クリプトの同名バンドが以前にドイツで録音したものとの説があるが嘘であろう。そんなちんけな代物ではない。ちん毛を通り過してまん毛、いうなれば大須観音境台の金粉ショウの如き神々しい輝きを放つ一枚である。全曲カッコ良くしかもどの曲も後半になるに従って陰毛がフンドシからはみ出しても一心不乱に腰を振る舞い子の如く泣きのギターとオルガンが華麗に舞い聴者は下半身が暴発してしまうであろうというまさにシンフォニックの女体盛りフルコース、男の喜びここにありといった感がある。とにかくあまりにもこちらの思いどうりの展開に忠実にもっていくのでちょっと怖いぐらいだ。やっぱ太陽とオペラの国のロックはこうでなくちゃいけない。イタリアの黄金期を締めくくるにふさわしい一枚。

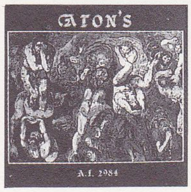
（牧野）



ATMO
Atmo
'90
●
○Mellow MMP 125
◉

2枚の作品が知られているシチリアはカターニャのバンド、EDITH。同バンドのヴォーカリストが関連人脈のキーボード奏者と組んだプロジェクトがATMOである。本作はEDITHの2作目と同時期（'90）に製作されたカセット・オンリーの作品がマテリアル。未発音源の発掘で世界に名を馳すMellow Recordsが目をつけただけあって、親バンドよりも数段出来はよい。全編、奥行きのあるアコースティック・サウンドで、ロック色は薄い。ドラム・レス、ベース・パートもほぼ不在。エスニック色の強いパーカッション（プログラミング）が効果的だが、反復音楽的感触はまるでない。むしろ、非常にしっとりしてムーディーである。平担さの中の叙情性という観点では傑出した作品ではなかろうか。

（ミワ）



ATON'S
A.I. 2984
'89
●Toast ATS 1
○
◉

トリノからのシンフォニック・グループ。デビュウ作。残念ながら、このグループの作品も、'80年代のイタリアン・シンフォニック・グループの例にもれず、自主制作によるローカル限定プレスではある。ライヴ時のミキサーを含む4人編成のグループであるから、事実上3人によって創られているわけだが、全く問題はなく、ギター、キーボード、ベース、ドラムスという編成で録音されている。EZRA WINSTONやLEVIATHAN等に似て、このグループもイタリア臭がないのが残念であるが、音自体はシアトリカルなイメージのシンフォニック・ロックである。ヴォーカルは英語ではなく、母国語である。初回リリースのみであろうか、盤は透明盤で、現在もLPのみのリリースである。

（山崎）



ATON'S
Caccia Grossa
'91
●
○Contempo CONTEDISC 159
◉

おそらくは2作目。いかにも'80年代的な軽快さを持つシンフォニック・サウンドである。デジタルな音色、即ち、楽器間の分離度が際立っている結果、音が薄く聴こえてしまう感覚。特にドラムのおさまりの悪さは楽曲のよさを相当部分殺している。その楽曲だが、非常にセンスのよいアレンジと印象的なフレーズがそこかしこに見られ、ある種の爽快感をともなってリスナーの胸に迫ってくる。不思議なことに、フランスのシアトリカル・ロック、アンジュ、モナ・リザあたりに通底する感覚もある。後半の曲に見られる変幻自在のサウンド・アプローチも高い評価を得られよう。なお、本作をCDリリースしたContempoは、Vinyl Magic、Mellow Recordsらにつぐイタリアの重要レーベルである。

（ミワ）



AULEHLA & ZAPPA
Aulehla & Zappa
'74
●PDU Pld.A.6008
○
◉

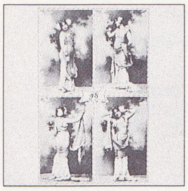
「Celestion」「Chatka」「Haermea」「Trasparenze 1982」「Riccardo Zappa」等のソロ・アルバムを後にリリースするリカルド・ザッパが、それ以前にKlaus Aulehaという人物とのデュオで残しているアルバム。後にザッパは民族音楽/トラディショナルなものをエッセンスにしたアコースティック・サウンドを打ち出すわけだが、この頃はまだ方向性に特色がない。アコースティック・ギターを多用していることを始め、どこがギター・アルバムふうの音使いがあったり、大半が両者の物静かなvo、gを中心に時にピアノを散らし、女性コーラス等をまじえて落ち着いた曲調になっていることが特徴。ソロの前段階という内容だ。カンタウトーレというよりも時々アルペジオ主体のフォーク色を感じさせる。

（松本）



(IL) BALLETTO DI BRONZO
Sirio 2222
'70
●RCA PSL-10459
○BGM Arioia ND 71819
◉

イル・バレット・ディ・ブロンゾの幻のファースト・アルバム。メンバーのクレジットがないのでよくわからないのだが、ギター、ドラム、ベース、ボーカルの4人編成で、この時点ではキーボードは参加していない。内容のほうは純粋なハード・ロックであるが、そうかといって決して出来は悪くはない。年代を感じさせるものの、まとまりがとてもよい。又、一曲だけ出玉の出来の曲があり、ここではチェンバロ、ヴァイオリン、ビオラ、チェロを大胆にフューチャーしてイタリアンバロックの深遠な世界とバラードのリリカルな融合を聴くことができる。この後彼らはセカンド、「YS」を発表後解散、又、キーボードのジャンニ・レオーネはEMIよりLEONEO/VERO、さらにCGOより「MONITOR」と2枚のソロアルバムを制作した。（山崎）



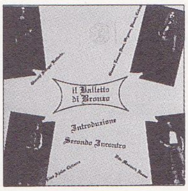
(IL) BALLETTO DI BRONZO
YS
'72
●Polydor 2443 003
○Polygram 519 388-2
◉

遅すぎた日本発売によって、ようやく多くの人々の知る所となったイル・バレット・ディ・ブロンゾの2ndアルバム「イプシロン・エッセ」は、信じ難いまでの重圧さと神秘性に満ちた圧倒的名作だ。'72年というイタリアン・ロック全盛時に生まれ出た名作群の中にあっても、この作品の存在感は壮絶なものであると言えよう。ギター、キーボード、ベース、ドラムの4人が4人とも全編、これでもか、これでもかとばかりに攻撃的な演奏を繰り広げ、聴き手にわずかな息をつく間さえ与えない。アルバムは5つのパートから成るトータルなものだが、我々の予想を次々に覆しながら展開する曲作りは見事としか言い様がなく、20年以上の月日を経た現在も斬新さに満ちているのである。（城元）



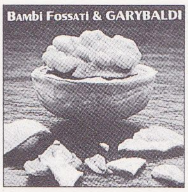
(IL) BALLETTO DI BRONZO
Il Re Del Castello
'90
●Raro! NL 74650
○
◉

バレット・デイ・ブロンゾ最初期のアルバム未収曲を集めたアルバムでイタリア国内でレコード・コレクター向けの雑誌を出版しているラロ「RARO.!」がリリースしたものである。ジャンニ・レオーネ加入以前のものなので、まだプログレッシヴ色はほとんどなく、ハード・ロックとして聴かないと正当な評価は下せないと思う。シングルでしか聴けなかった曲やスペイン語ヴァージョン(イタリアでは他にもニュー・トロルス等、スペイン語で吹き込んだテイクがあるグループがある)を聴くことが出来る。初期バレット・デイ・ブロンゾの持っていたセンスの良さは捨て難いものがある。初回プレスのみカラー・レコードで、普及品は通常の黒レコードになった。（山崎）



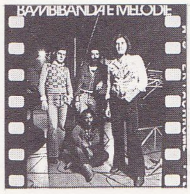
(IL) BALLETTO DI BRONZO
"YS" English Version
'92（'71年録音）
●
○Mellow MMP 112
◉

イタリアン・ロックの名作群の中でも、その闇のエナジーをも感じさせる素晴らしい内容で名高いのが彼らの2ndの"YS"であるが、このCDはなんとその"YS"に収録されている中の2曲（1曲目の「イントロダクション」と3曲目の「第二部」）の英語バージョンであり、演奏もアルバムとは違うアレンジがなされた別バージョンである。これが録音されたのは"YS"がリリースされる1年前の'71年にミラノで行われた"YS"のリハーサルの際だとのことで、その為正規の作品よりかなり荒削りなアレンジがなされている。しかし、それにより曲のワイルドさがより際だっていてアルバム以上にブロンゾの攻撃的部分の魅力を感じさせてくれるものになっている。ミニCDで短いが聴き応えは十分である。（島村）



BAMBI FOSSATI & GARYBALDI
Bambi Fossati & Garybaldi
'90
●
○Artis ARCD 014
◉

2枚のアルバムを残したHARD BLUES BAND、ガリバルディのリーダー、バンビ・フォサッティはソロで活動を続けていたのだが、突然グループと共演して、このアルバムをリリースした。ガリバルディと言っても残っているメンバーはMAURIZIO CASSINELLI(Vo、Ds)だけで、後の二人は新加入である。発掘音源ではないかという意見も有るのだが、録音は現代の水準である。あるいは昔の埋もれたトラックにダビングや差し替えを行ったものかも知れない。とりあえず言えることは、フォサッティが弾き捲っていることと、楽曲自体はスマートになっているものの、まさにガリバルディの作品であること。それとギターのサウンドは今の物であると言うことだ。（津田）



BAMBIBANDA E MELODIE
Bambibanda E Melodie
'74
●Fonit Cetra LPQ 09085
○Fonit Cetra CDLP 431
◉

ガリバルディ解散後の74年、ギタリストのバンビ・フォッサーティは前ガリバルディのドラマー、M.カッシネッリ、元ニュー・トロルスのパーカッショニスト、R.ソムスンダラム、それにベーシストを加え本グループを結成、1枚のアルバムを発表した。ガリバルディ時代あれ程ジミヘン風サウンドに傾倒したバンビだが、その面影は全く無い。力強さがまるで失われてしまっているのだ。クレジットによるとパーカッションが2人、バンビ自らもマラカスを手にするなど、どちらかと言えばパーカッシヴな面に重きを置いてある様で、全面を通じひずみのある荒々しいギタープレイとは無縁である。明るくゆったりとした曲作りが主流で、トロピカルな印象を与える。（江田）



BANCO DEL MUTUO SOCCORSO
Banco Del Mutuo Soccorso

'72
●Ricordi SMRL 6094
○Ricordi CDOR 8401
◉キング KICP 2053

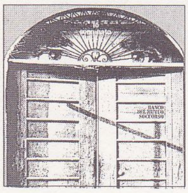
ローマ出身のベテラン・グループ、バンコの輝ける1stアルバム。後の2nd、3nd、そして6th「Come In Un'Ultina Cena」と共に、イタリアン・ロック史上、決して忘れることのできない名盤中の名盤といえよう。表面的にはラフな感じを受け、そのためか低い評価を下す方もおられる様だが、むしろダイナミックな面が強調されたその演奏は、彼らの本質である繊細かつ優美な感覚とあいまって、非常にみずみずしい印象を与えてくれる。そうした点においてこの1stアルバムは、彼らの全作品中でも最も魅力溢れる一枚だといえよう。なお、このアルバムのオリジナルLPジャケは、レコードサイズの壺貯金箱型(もちろん平面)で、ジャケ上部の穴から、なにやらオマケが出てくるというかなり変態的な代物である。　(城元)



BANCO DEL MUTUO SOCCORSO
Darwin!

'73
●Ricordi SMRL 6107
○Ricordi CDOR 8094
◉キング KICP 2706

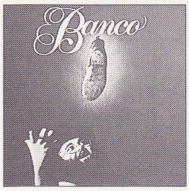
'73年に発表された2ndアルバム。全体的には前作の延長線上にある作品であるが、本作ではさらにアレンジが複雑化し、まるで迷宮の中に迷い込んでしまったかのようなめくるめく構成となっている。もちろん彼ら独特のツイン・キーボードを主体とした攻撃的でかつ緻密なアレンジは健在であるが、それ以上にアルバム全体を占める「次に何が起こるかわからない」ような緊迫した雰囲気は圧巻だ。美しくも徹底的にアグレッシブに迫るA面の大曲もさることながら、どこか偏屈で暗い影を持つB面の小曲群は、いったいどういう発想のもとで作られたのか全くもってわからない。その中において〝75万年前の愛〞のような美しさの塊のような名バラードはまさに混沌の中の美の結晶である。　(渡部　暁)



BANCO DEL MUTUO SOCCORSO
Io Sono Nato Libero

'73
●Ricordi SMRL 6123
○Ricordi CDOR 8202
◉キング KICP 2002

バンコ・デル・ムトゥオ・ソッコルソのサード・アルバム。彼等の結成はジェネシスやジェントル・ジャイアントといった英国のバンドに触発されての事ではあったが、ノチェンツィ兄弟のキーボード、フランチェスコ・ディ・ジャコモの唱法に代表されるまごうかたなき民族性はデビュー当初より第一級の独自性を示していた。熱狂と悲愴とが入り混じり眩を禁じ得ない前作「DARWIN!」に比べ、このサードは整然とした印象を与える。A面で聴かれるアコースティック・ギターの織り成す牧歌的な調べは新境地と言える。しかし初期バンコの魅力——前衛精神と気高い伝統美との見事な共存はここでも失なわれていない。相変わらずの演奏水準の高さには舌を巻く。　(古田)



BANCO DEL MUTUO SOCCORSO
Banco

'75
●Manticore MAL 2013
○
◉

'75年3月に発売されたマンティコアからの世界進出盤「BANCO」は、1stおよび3rdからの曲の新録と1曲の新曲からなっている。内容的には、イタリア盤以上にメリハリの効いたいかにもプログレッシブ・ロック然としたアレンジとなっており、彼らの本来の特性とは若干違ったものであっても、当時の世界のロックのレベルと比較して抜きんでた完成度を示している。決して世に言われるような駄作では無い。ただし、こうした内容面での充実とは裏腹に、彼らの世界進出は完全な失敗と終わりセールス的には無残な敗北となってしまった。やはり、世界にアピールするにはもう1つプラス・アルファ的な物が必要だったのであろうか?また、どうひいき目に見ても彼らに英語は似合わないのも事実だ。　(渡部　暁)



BANCO DEL MUTUO SOCCORSO
Garofano Rosso

'76
●Manticore MAL 2014
○Virgin MPICD 1005
◉東芝 EMI VJD5011

映画のサウンドトラックとして制作された小品主体のインストゥルメンタル作品。作品の性格上、マンティコアからのリリースながらイタリアのみのリリースである。半分程度の曲はいかにもサウンドトラックというようなイメージ描写的な作品であり、BANCO的な要素をさほど感じさせないものであるが、残りの曲はやや贅肉を落としたシンプルな出来ながら、Banco独特のアレンジとメロディーが健在である。特にタイトなリズムの上を軽やかなキーボードが跳ね回る名曲で、つくづくこういう小品として出てしまったのが惜しまれる出来である。こういうサントラ的な制約のある作品でさえ、これだけのボルテージがある作品を作れ、自らの色を出せると言う事は素晴らしい事だと思う。　(渡部　暁)



BANCO DEL MUTUO SOCCORSO
Come In Un U'Ltima Cena

'76
●Manticore MAL 2015
○Virgin MPICD 1001
◉東芝 EMI VJD5012

彼らにとっては久々のオリジナル・アルバムとなったマンティコアからのラストアルバム。キリストの「最後の晩餐」をモチーフにしたこの作品は初期の頃の激しいアンサンブルは幾分丸まったものの、まさに円熟と言っていい程の様々な表情を見せる傑作アルバムだ。1曲々々の骨子はややシンプルながら、地中海地方の民謡、あるいは中世ヨーロッパの土着の歌謡を思わせる美しいメロディを引き立たせるツイン・キーボードを主体とした緻密なアレンジに加えて、マンドリンやヴァイオリンあるいはパン・フルートのような地中海地方の民族楽器を随所にちりばめ、美しい曲、激しい曲を効果的に配置し、圧倒的な集中力で聞き手を最後まで引っ張っていく。まさにイタリアンロック史上に残る永遠の金字塔である。　(渡部　暁)



BANCO DEL MUTUO SOCCORSO
...Di Terra
'78
●Ricordi SMRL 6226
○Virgin MPICD 1002
◉東芝 EMI VJD 5013

再度イタリアに戻って古巣Ricordiから発表されたアルバム。このアルバムはなんとミラノ・スカラ座のオーケストラと共演した全インストアルバム、映画音楽を思わせる宇宙的で透明感溢れるメロディーと雄大なオーケストラ・アレンジが印象的なアルバムだ。ただし、このアルバムではフランチェスコが歌っていないためか、一聴した印象が今までの彼らのアルバムとは随分違うものとなっている。とは言え、近代〜現代クラシックに影響を受けた楽曲の上をオーケストラとBANCO独特のキーボードが絡み合うと言う構図はやはりで健在で、今一ゆったりとしすぎている嫌いはあるが、完成度は高いと言い切れてしまう。派手さは無いがじっくり聞いて、その世界に浸れるアルバムだと思う。　（渡部　暁）



BANCO DEL MUTUO SOCCORSO
Canto Di Primavera
'79
●Ricordi SMRL 6247
○Virgin MPICD 1004
◉東芝 EMI VJD 5015

彼らの「最後のきらめき」と言われるアルバム。「春の歌」のタイトルどおり、イタリアののどかな春を思わせるおおらかなアルバムとなっている。このアルバムでは今まで以上に歌の比重が増え、ほとんどカンタウトーレ風と言っても良いぐらいのやさしくてかつほんのりと陰のあるメロディーを、全編に渡ってフランチェスコがのびのびと歌い上げている。「最後の晩餐」以来の地中海色も、完全に彼らのメロディーと溶け込み非常に良い味を出している。また、このような歌物のアルバムながら、さらっとバックのアレンジで見せる「らしさ」も健在で、ちょっとしたトリルやオブリガードで見せるセンスは抜群である。本当に、一聴しただけで優しいメロディーが耳に残る。そういう素敵なアルバムなのである。　（渡部　暁）



BANCO DEL MUTUO SOCCORSO
Capolinea
'80
●Ricordi SMRL 6260
○Vigin MPICD 1003
◉東芝 EMI VJD-5015

'80年発表の彼らの9作目にして初のLIVEアルバムである。このアルバムに収められているのは、「Banco(マンティコア盤)」「...di Terra」以外のアルバムからセレクトされた彼らを代表する名曲ばかりであるが、アレンジそのものは非常にダンサンブルでポップなものになっている。それでも、長年Bancoを聞いてきたファンにとってはアレンジ違いを楽しんだり、Liveにおける生き生きとした彼らの様子が伺えると言う意味では貴重なアルバムであることには間違いは無い。とは言え、個人的には(というより大部分のファンにとって)この頃のPOPな音になる過渡期のLIVEよりも全盛期のLIVEが聞きたいと言うのが正直な気持ちである。全盛期を過ぎたLIVEはやはり寂しい……　（渡部　暁）



BANCO
Urgentissimo
'80
●CBS 84677
○
◉

'70年他から'80年代にかけて転換期を迎えたイタリアン・ポピュラー・ミュージック界の中で、その影響をまともに受けたバンドの一つ、バンコ。'70年代の実績が逆に災いしたかのようにポップにコマーシャル・ヒットを狙うには音楽素養が邪魔をし、そうかといって独創するには受け皿はなくバンドは大所帯。前作のアレンジからそうした中での模索がうかがえたが、このアルバムになると模索というよりも開き直ったような印象さえ与える。想像以上にコマーシャルな音作りをしている。バンドという形態自体がレコード会社に疑われていただろう時期だから、そう思うと、演奏部の消極的なソロ等、何か苦慮しているようにさえ思えてくる。演奏自体は何も問題ないが、ジェネシスのようには行っていない。歌メロに欠ける。　（松本）



BANCO
Buone Notizie
'81
●CBS 85415
○CBS 460570 2
◉

ポップス路線に転向して、CBSに移籍してからの第2弾(通算11作目)になるアルバム。BANCOのアルバムというよりは当時のイタリアン・ポップスの作品として、評価したい。明るく、力強いメロディと味のあるジャコモおじさんの歌声が、軽快なバックと共におおらかに聴こえてくる。彼ら独特の哀愁味は消えてないが、それさえも明るく優しく包み込む空気感が全体を支配しており、すがすがしい気分にさせてくれる一枚である。どちらかというと、NOCENZI兄弟とGIACOMO氏の共作アルバムという感じが強く、歌物としてはなかなかの水準にある。80年代イタリアの最先端のポップ・ロックの姿がここにあるわけで、それ以外のものを期待してはいけない。　（津田）



BANCO
Banco
'83
●CBS 25729
○
◉

CBS移籍以来すっかり日本での人気を落してしまった感がある。ポップでかつタイトなサウンドは、前2作からあまり変化が感じられなく、昔のプログレ・サウンドとは程遠いものであるが、様々な試行錯誤の中からやっと新たな自分たちの方向性を見つけ出し、4年間の長い低迷の時から目覚めたといった様なサウンドである。その目覚めが実に心地よく、やすらぎさえも与えてくれる様で、仲々の出来と言えるであろう。バンコの軌跡においてサウンドの起転となった重要なアルバムである1st、3rd,それらの各旧B面に収録されていた〝Traccia〟〝同II〟の続編とでも言うべき〝Traccia Tre〟をラストに収録している。又、12インチ・シングルとしてリリースされた〝Moby Dick〟も収録されている。　（石倉）



BANCO
Banco...E Via
'85
●
○CBS 460568 2
◉

CBSでの最後の作品になったアルバムで、この年に加入したGABRIEL AMATO(B)がV・NOCENZIと共同でプロデュースをしている。AMATOはアレサ・フランクリン等と活動していた人なのだが、それがアメリカンな感覚を大幅に持ち込んでいるようで、残念ながら裏目に出てしまった。個人的にはB級ポップスとしか評価できない。何故なら、メロディやそのサウンド・メイキングなどのいたるところにアメリカナイズされたマスプロの弱点が見えており、今までの彼らの細部にまで行き届いた繊細な神経とは無縁な物になっているからである。音に深みはないし、ジャコモ氏の歌声の微妙な味わいも完全に消し去られている。そのせいか、この後グループは契約を失い、活動を休止する。（津田）



BANCO presenta FRANCESCO DI GIACOMO
Non Mettere Le Dita Nel Naso
'89
●
○Iperspazio CDIPL 8901
◉

約3年のブランクを置いて突然現れたアルバムで、ジャコモ氏のソロ的な色彩が強いのだが、癌だったAMATOが抜け、3人の新しいメンバーが加入している（TIZANO RICCI(B)、PIETRO LETTI(SAX)、CINZIA NOCENZI(Pf)）。グループだけでも8人編成、それ以外にもたくさんのミュージシャンが参加している。何よりも決定的なのはアレンジャーにROBERTO COLOMBOを迎えている事で、見事にジャコモ氏の歌声を活かし、イタリアならではの叙情味たっぷりのポップ・ロックを展開している。しかも演奏の細部にあのウェットで牧歌的なところまで見えかくれしており、個人的には「春の唄」の次のアルバムはこれだと解釈している。（津田）



BANCO DEL MUTUO SOCCORSO
Banco Del Mutuo Soccorso
'89
●Contempo PT 42926
○
◉

けたたましい車のクラクションと都会の雑踏のノイズに導かれて始まるこのアルバムはバンコがリコルディよりデビューする以前の'70年にRCAで録音していた作品で'89年にイタリアのコンテンポ・レーベルからこの3曲入りミニアルバムとしてリリースされるまでお蔵入りしていたものである。当然正規デビューした'72年以降のサウンドに比べると、かの名ヴォーカリストであるフランチェスコが参加以前である為ヴォーカルもヴィットリオが担当していることや、曲自体もまだ後にみせる完成度まで至らないことなどから幾分オーソドックスなイメージを受けるが、曲の端々には後の彼らしいサウンドが見え隠れしている。なお、A面の曲は3rdのA②の原曲になっておりこの中では特に聴き物であろう。（島村）



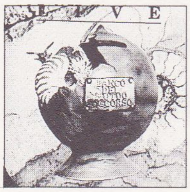
BANCO DEL MUTUO SOCCORSO
Donna Plautilla
'89
●Raro NL 74215
○
◉

このアルバムはバンコがリコルディよりデビューする以前、RCAと契約しようとした時に制作していた幻のマスターを'89年にイタリアのRARO!レコードがリリースしたものである。本来ならこのマスターはRCAとの契約後正規にリリースされるはずのものだったのだが、当時その内容が先鋭的過ぎるとの判断を受けた為発売を見合わされてしまい、その為RCAとの契約も白紙になってしまったのである。内容的にはまだフランチェスコが加入前であることや一部にビート・グループ的雰囲気を残している為未完成なイメージだが、全体的には後のバンコの姿を随所に予見させてくれるバンコの原石的作品になっている。ちなみにくり抜き変形のダブルジャケットでNo入りの限定プレスでのリリースである。（島村）



BANCO DEL MUTUO SOCCORSO
Da Qui Messere Domina La Valle
'91
●Virgin BMSX 1/1〜1/3
○Virging BMSX 1CD
◉

'91年の暮れになって突然発表されたBancoの15作目にして最新作。これは'90年の9月から'91年4月にかけて1stと2nd「Dawin！」をチャリティーのために再録したもので、なんとLP、CDとも1stのあの壺型ジャケットそのままの特殊変形ジャケットに包まれたものであった。内容的には完全に以前の作品の再録作品ではあったが、一部オーバーアレンジや打ち込みが鼻に付くところがあるものの、あのBancoの緻密な作品群が現代のディジタル楽器を使用しても、少しも魅力が落ちないばかりか、曲によってはさらに濃厚な色彩感に彩られ、見事に'90年代に通用するまでのレベルに高められているものまである。まさに彼らの実力と秘められたポテンシャルをまざまざと見ることが出来る作品だ。（渡部　暁）



BANCO DEL MUTUO SOCCORSO
Live
'93('70年録音)
●
○Mellow MMP 150
◉

'93年に発掘された彼らのデビュー前の貴重なLIVE音源。ここに収められているのは1stアルバムの中の大曲3曲および未発表曲〝POLOFONIA〟（この曲もまた凄い）であるが、この時点であの緻密なアレンジが既に完成している。本当にLIVEでこんなことが出来たんだなぁ……と、まさにあっけに取られる思いである。その上、全体を占める熱気というか荒々しさは彼らがまさにロック・バンドであったことを見事に証明している、とにかくファンは手を握り締め、集中して聞くべし、但し、音は悪い、他のBOOTと比較しても悪い方だろう。この点は充分覚悟しなければならないが、それ相応の見返りは必ずある。ファン以外の方あるいは初めて聞く方にとっては下手すりゃ拷問だな、こりゃ。（渡部　暁）



(IL) BARICENTRO
Sconcerto

'76
●EMI 064 18152
○
◉

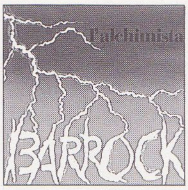
テクニカル・シンフォニック・グループ、フェスタ・モビーレはおしくも1枚のアルバムのみで解散したが、実は若干のメンバー・チェンジの末にバリチェントロ(重心の意)と改名し、2枚のアルバムをEMIに録音した。サウンド・イメージはシンフォニックからジャズ・ロックへと移行したが、あいかわらずアレンジとソロ・プレイの均整の取れた高水準な演奏を繰り広げている。2枚とも良いが、スリリングな演奏はこの1stのほうが楽しめる。'83年にトリオ編成となったバリチェントロは同年「Tittle Tattle」という12インチ・シングルを発表するが、これはディスコ・ミュージックに変化してしまっている。ボクッツィ兄弟はセッション活動も行なっていたようである。 (山崎)



(IL) BARICENTRO
Trusciant

'78
●EMI 3C 064 18322
○
◉

イル・バリチェントロのセカンド。フェスタ・モビーレのメンバーを擁したことで知られる彼らであるが、ファンの人気は今一つの感がある。しかし、ファースト・アルバムはフェスタ・モビーレのジャズ・ロック編とも言うべきもので、作品のレヴェルとしてもフェスタ・モビーレに退けを取るものではない。イタリアのジャズ・ロック作品としては屈指の一枚と言える。それに続く本アルバムであるが、残念ながら、リラックスしたややイーズィな演奏が多く、曲も盛り上がりに欠けるものになっている。バックグラウンド・ミュージックとして聴き流すにはよいかもしれないが、フェスタ・モビーレや前作の緊張感のある演奏を期待して聴くと肩透かしを食わされるだろう。 (賀川)



BARROCK
L'alchimista

'91
●
○
◉Edison ERC-29236

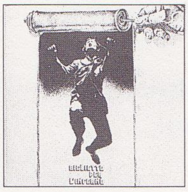
'85年のデヴュー・カセット作品がわが国でも話題となったトリエステのバンド。彼らは少なくとも3本のテープ作品を残しているが、オランダはAndraea crtのオムニバス・アルバム『Exposure』に収録された曲の出来がよく、好事家に注目されていたバンドでもある。同曲は旧ソ連のE.アルテミエフを思わせる硬質なキーボード・シンフォニック・チューンで、本作とは趣を異にしている。2人の女性ヴォーカルが印象的な本作は、前述のカセット作品中の曲と新曲からなり、わが国の西新宿系レーベルのプロデュースによる完全新録作品である。当初はB級とのレッテルも貼られたが、決してレベルの低い内容ではない。多少チープさはあるものの、押しと引き、一本調子に陥らない構成や情感は見事である。 (ミワ)



BELLA BAND
Belld Bdnd

'78
●Cramps 5205 601
○
◉

とにかく一枚のアルバムがあるだけ。このアルバムから得られる情報以外は不明だ。メンバーは5人。サックス＆クラリネット、キーボード、ギター、ベース、ドラムスといった楽器編成だ。イタリアのエンサイクロペディア「POP ITALIANO」にも載せられていないこのバンド、レーベルがクランプスということもあり(?)サウンド的には、アルティの弟分といった感じのジャズ・ロック。ヴォーカルは入らない全4曲共にインストウルメンタル・ナンバー。アルティ、アレアという両先輩のレベルがあまりにも高いので、同等とまではいかないが、新人のデビュー作(にしてラスト・アルバム?)としては、間違いなく相当なものといえる。入手困難なアルバムなので、CD化が待たれるところ。 (高見)



BIGLIETTO PER L'INFERNO
Biglietto Per L'inferno

'74
●Trident TRI 1005
○Vinyl Magic VM 006
◉

トリデントの5番、ビリエット・ペル・リンフェルノは、先に日本発売されたムゼオ・ローゼンバッハやイル・バレット・ディ・ブロンゾ、そして同じトリデントのセミラミスなどと並ぶイタリアン・ヘヴィー・シンフォニック・ロックの極致をゆく名作だ。決して器用とはいえないが終始迫力一杯のギター、エフェクト処理によって多彩な音色を聞かせるキーボード、そしてある時はたたみかける様に、またある時は舞うように吹かれるフルートなど、どれもが素晴らしい。なお、キーボードのバフォ・バンフィは、後にレッド・レーベルから1枚、またドイツのICレーベルから2枚のソロ・アルバムを発表しているが、内容はシュルツェ風、あるいはポップで、いずれもこのビリエットの影を見ることは全くできない。 (城元)



BIGLIETTO PER L'INFERNO
Il Tempo Della Semina

'92('74年録音)
●Mellow RECORDS MMP 106
○
◉

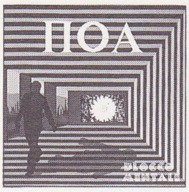
彼らはSEMIRAMISやIL BALLETTO DI BRONZOのHEAVYな部分が共通している為よく比較されているが、もっと大雑把でそれが魅力とも、あるいは欠点としても捉えられている気がする。噂では、兼ねてからあるに違いないとされていたアルバム。基本的に、やはりHARD ROCK BANDと思う。曲は練り上げて作ると言うよりも、行き当たりばったりで……この作品では更に加速した感があって、本当に自由気ままで我が侭(笑)。彼らなりの独特なSENSE OF HUMORもある。これって実はROCK本来の姿ではなかったか? 1stより表立っていないものの、忘れてはいけない、巧い下手を超越した哀愁の「うた」をそっと入れているのも嬉しい。これがイタリアン・ロックの醍醐味。理屈云々より素直に感じ取りたい作品。 (渋谷)



BLACK BLOWING FLOWERS
Human Glow

'75
●CBS 69124
○
◉

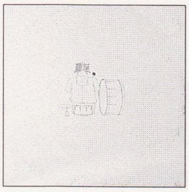
このアルバムの有無を巡って一時、騒がれたことがある。事の経緯はCBS系のミュージシャンによるオムニバス・ライヴ盤「Concerto D'Estac」に、このバンドのライヴが収録されていた事に始まった。その曲はイル・ヴォーロの〝Il Calore Umano〟(1st③)。そこで変名バンドだという説が出る。さて、このLPが見つかったが、メンバーは未だ判っていない。A面①に〝Il Calore Umano〟のスタジオ・テイクを収録している。女性スキャットがあのメロディをハミングし、ラディウスそっくりのトーンのソロもロレンツィ独特のキーボードも入る。ただしアルバムの傾向としてはスタンダード・ナンバーを含むイージー・リスニングふうのもの。確かに演奏は似ている。可能性は高いが判らない。 (松本)



BLOCCO MENTALE
Poa

'73
●Titania BM 2301
○Vinyl Magic VM
○Mellow MMP 143

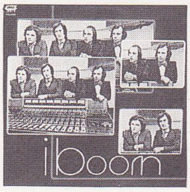
このブロッコ・メンターレはDuriumレーベルの販売傘下にあるTitaniaレーベルから本作品「ポア」を発表した。おそらくこれが唯一のアルバムと思われる。メンバーはG., Key., B., Dr.,そしてFlute & Saxの5人で、Vo.は主にベーシストと管楽器奏者の2人が担当している。表ジャケの中央に見える花の部分はくり抜かれていて、中ジャケでは白い服をまとった5人のメンバーがその花のまわりで手を差しのべて立っている。音の方もそんな雰囲気を反映して、とても優しく暖か味のあるものになっている。演奏スタイルは随所にメロトロン、ピアノ、フルートなどをちりばめた、当時のイタリアのごく平均的なもので、新鮮さなど少しもないが、それでもすがすがしさを伴ったこの美しさには、心魅かれるものがある。 (城元)



BLUE MORNING
Blue Morning

'73
●Tomorrow ZSTOM 2000
○
◉

ブルー・モーニングは1965年にMaurizio　GiammarcoとAlfredo Minottiが中心になって結成されたGUERRIERIを前身とするジャズ/ブルース・ロック・バンドである。バンドはジョン・メイオールに影響を受け、'70年にBLUE　MORNINGと改名した。これが唯一のアルバムになる。そのとおり'60年代後半のブルース・ブレイカーズに典型的なブルース/ジャズ・サウンドになっている。途中からバンドに参加したギタリスト、Roberto Ciotti、管楽器奏者に転向したM.giammarco、らのリード・ソロも軽やかなもので、4ビート主体のバック・サウンドと共にゆったりとした流れをつくり出す。それだけにフルートがリードする部分は、こちらの耳にはなじみやすい。畑違いかもしれないが当時の一面でもある。 (松本)



(I) BOOM
(I) Boom

'73
●Smash SM 905
○
◉

Alan(ヴォーカル、ベース)、Marcello(ヴォーカル、キーボード)、Deni(ギター)、Branco(ドラムス)の4人組 I Boomのこのアルバムは、ジャケットからは想像も出来ないプログレッシヴな作品である。ポップな感覚を基調にしたボーカルとタイトで畳み掛けるような演奏が一体となって、とてもファンタジックなサウンドを形成しているが、サウンドの要はやはり変幻自在に操られるキーボードである。ミステリアスにそして又攻撃的にあるいは奔放にと、様々に使い分けるMarcelloなるキーボード奏者は、かなりの才能を有した謎の人物である。一曲として無駄な曲は無いが、厳かなオルガンの音色で始まる〝Inprovvisamente Notte〟と哀愁に満ちた〝Il Padre Sano Io〟は特に良い。 (鈴木伸一)



(LA) BOTTEGA DELL'ARTE
La Bottega Dell'arte

'75
●EMI 3C064-18106
○
◉

ラブ・ロックの傑作「Dentro」に先立つこと2年、ボッテガ・デッラルテはこのアルバムでデビューを果たした。2ndの人気が急上昇する前は見向きもされなかったレコードである。しかし実際の相違点といえば録音状態、鍵盤楽器が薄いこと、曲展開に詰めの甘さが見られることぐらいで、あの甘いメロディーや秀れたアレンジは他グループと既に一線を画している。当初はフルート、チェンバロ入りのA④に人気が集中したが、やはりこういったグループは聴き手も考えを変えないと結局すぐ飽きてしまうことになる。ジョン・レノンよりポール・マッカートニーが好き、というタイプのリスナーにはとりあえず推め。 (古田)



(LA) BOTTEGA BELL'ARTE
Dentro

'79
●EMI 3C 064-18243
○
◉キング 292E 2026

ボッテガ・デラルテのセカンドアルバム。イタリアのいわゆる「ラヴ・ロック・グループ」、例えばイル・ジアルディーノ・デイ・センプリーチやジー・メン等のカテゴリーに属するるグループであるが、極めて質の高い演奏を聴かせてくれ、又、メロディーラインの美しさも特筆すべきで、ここにとり上げることになった。ピアノ、クラヴィネット、アープ、ミニ・ムーグ、ハモンド・オルガン、メロトロン等、多彩なキーボード群により厚みのある、しかもとてもイタリアらしい哀愁に満ちたサウンドを聴かせてくれる。ピエロ・カラブレーゼ、マッシモ・カラブレーゼ、ロマーノ・ムズマッラ、フェルナンド・チュッチ、アルベルト・バルトークの5人の男達により創られた。 (山崎)



(LA) BOTTEGA DELL'ARTE
L'avventura
'79
●EMI 3C 064-18423
○
◉

彼等の頂点である「DENTRO」から2年。サード・アルバムが本作。流石に「DENTRO」と比べるとヴォルテイジは落ちると思うが、その印象はジャケットのイメージが余り良くないことと、曲が都会的な雰囲気でまとめられている為であろう。前2枚を聴いて彼等の歌やメロディー・ラインのファンになった方にとってはそれなりに楽しめる作品だと思う。演奏がプログレッシブ・ロック的でなくなってしまってはいるが、それは時代がもはやそういう音を求めなくなった為だともいえる。メンバーは前作と全く同じ5人。蛇足ながら、B①はオーケストラをフィーチュアした曲で、シングルでもリリースされたもの。この曲は前作のイメージそのままでアルバム中1番のバラード。ファン必聴。　（山崎）



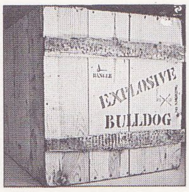
(LA) BOTTEGA DELL'ARTE
Forza　4
'84
●Sound WWLP 1701
○
◉

フェルナンド・チュッチ脱退後初のアルバム。3rdと比べると表現がストレートになった分"らしさ"を取り戻しているが、逆にアレンジのつめが甘く、ボッテガ特有の"ため"や凝った曲展開は期待出来ない。サウンドは全体的に軽めで、英語の曲も2曲入っているが、この辺は迷いというよりも開き直りの感が強い。しかし、ところどころに同時期のAOR系のアレンジがバランスよく施されており、そういった意味では上質のイタリアン・ポップ・アルバムと言えるかもしれない。B⑤のインストゥルメンタルで最後の意地を見せる彼らの"らしさ"と時代の流れとの融合を計ったラスト・アルバム。このアルバムを出すことで、逆に自らの居場所と進むべき道を失ってしまった。　（木下）



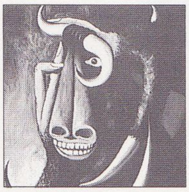
BRAINTICKET
Celestial Ocean
'73
●RCA DLISP 34158
○
◉

「Cottonwood Hill」(BLPS-19019)、「Psychonaut」(BI 15156)のアルバムをドイツのベラフォン・レーベルからリリースしていたブレインティケットのサード・アルバム。'73年にリリースされた。本アルバムでのメンバーはジョエル・ファンドル・ゲンブロック、カローレ・ムリエル、バーネイ・パルムの3人で多種のキーボードを中心にシタール、ドラム、エコーのかかったヴォイス等をちりばめたトリップ・サウンドを演奏している。しかし決してたれ流し的なものではなく、曲としてバランスよくまとめられているので極めて完成度は高い。他の2枚とも比べようもない程の名盤といえよう。メンバーはイタリア、ドイツ人系の混合チーム、バンドはスイス国籍のもよう。以後も活動し、アルバム他を出している。　（山崎）



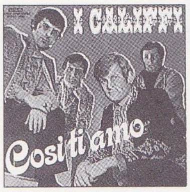
BULLDOG
Explosive
'00
●
○
◉

作詩・作曲者名が、Ping　Pongの各曲と同じである事と、更にはB⑤"Cattedrale"が2ndアルバム「Ping Pong」の名曲"Suite In 4 Tempi"中間部の焼き直しである事から、Ping　Pongの改名バンドで、実質的には彼等の3ndアルバムと考えて良いだろう。曲調はポップな感覚が先行したものばかりだが、それでも、美しく豊かなオーケストレーションが適宜配されたり、叙情的なパートが時折顔を覗かせたりと、結構聴き所は多い。英詩の曲も半分位を占めるが、やはり伊語のボーカル方が良い。年代からして当時の多くのバンドがそうであったように、彼等も又、よりコンパクトでインターナショナルな音作りへと変化せざるを得なかったのだろう。　（鈴木伸一）



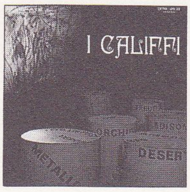
BUON VECCHIO CHARLIE
Buon Vecchio Charlie
'90('71年録音)
●
○Melos 001
◉Melos 001

後にソロ・アルバムを1枚だけリリースしたベッペ・パロンバのバック・バンドを努めたことのあるグループで、当時、アルバムが制作されるはずだったが、マスターまで創られながらリリースされなかったという幻の作品。後にCD化されたが、"ペールギュント"をアレンジした組曲風の作で、'70年〜'71年の間にイタリアで制作された作品の中では最もプログレッシヴ・ロック的なものであったというのが証明された。ローマ出身のグループで、とあるコレクターが交流があった為にリリースが実現したものだ。イタリアにはアルバムがリリースされずに、シングルのみで消えた、あるいはマスターを制作しながらも世に出ずに終わったグループが多く、そういったグループの発掘も現在進行中である。　（山崎）



(I) CALLIFI
Casi Ti Amo
'69
●Rifi RFS ST 14030
○
◉

「Fiore Di Metall」より4年以上前に作られたカリフィもファースト・アルバム。非常に入手困難なレコードである。その内容は当時のイタリアのシーンの状況をストレートに反映したもので、サイモン＆ガーファンクルの"Scarborough Fair"、ビージーズの"To Love Somebody""Close Arother Door"、ナイスの"The Thought Of Dav Jack"等のカヴァーが半分、自作曲が半分という構成になっている。インスト中心の曲ではキーボード等によるややジャズィな、また、多少ブルーズィな、そして、幾分クラシカルな演奏も聴くことが出来るが、全体としての印象はかなりポップである。本作を聴く限りではセカンドのようなアルバムは予想出来ない。反面、ポップスとしては中々の出来とも言える。　（賀川）



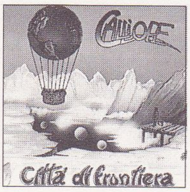
(I) CALIFFI
Fiore Di Metallo
'73
●Fonit Cetra LPX 23
○Fonit Cetra CDLP 420
◉

カリフィはキーボードをフィーチュアした極く標準的なロックバンドでプログレ色は薄い。A面4曲、B面5曲で、割と緩やかなタッチの曲とアップテンポのハードな曲に分かれており、オルガンが余り前に出て来ない場合はギターが主導権を取っている。全体的なイメージとしてグループ自体の目指す方向性が今一つはっきりせず、中途半端な印象を与える。ただA④のインストではパイプオルガンまで用いた驚異的なプログレナンバーを披露、リスナーの度肝を抜く。途中ジャジーな展開を織り交ぜながら、力強いドラミングに乗ってキーボードワークで押しまくるというまさに白眉の出来。これだけのプレイが出来ることから、本気でプログレッシヴロックを志していれば傑作を残していたことだろう。（江田）



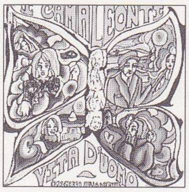
CALLIOPE
La Terra Dei Grandi Occhi
'92
●
○Vinyl Magic VMNP01
◉

主に'70年代の名盤再発で世界を震撼させたVinyl Magic。同レーベルが元アルティ・エ・メスティエリのキーボード奏者、ベッペ・クロベッラをプロデューサーに迎えてスタートしたのが〝New Prog'90〟シリーズである。本作はその第1弾。メロトロン、ミニ・ムーグ、M3、ソリーナといったアナログ・キーボードを最新のエンジニアリングでコントロール、極めて歯切れのよいシンフォニック・サウンドを展開している。一聴したときのインパクトはとてつもなく強い。しっとりとした情感とは無縁で、全篇たたみかけ、押しまくる。こうした領域へのバンドのこだわりには相当なものがあり、それは本作最終曲のタイトルにもあらわれている。そのものズバリ、〝メロトロンマニア〟という曲である。（ミワ）



CALLIOPE
Citta' Di : Frontiera
'93
●
○Vinyl Magic VMNP04
◉

本作は〝New Prog'90〟シリーズの第1号バンド、カリオペの2ndである。同シリーズがただの打ち上げ花火でないことを証明するかのように矢つぎ早に発表されたという印象が強い。ユーロという領域は、全盛期の'70年代においてすら、単発リリースだけで消えていくバンドが異様に多かったジャンルである。そのあたりのイメージを払拭しようとする力学が働いたのかどうか。音的には前作と同傾向のアグレッシヴなシンフォニック・サウンド。いくぶんリラックスした感触もあり、曲想の幅が広がったといえばいえるだろう。具体的には、女性コーラスやサックスの投入、ギターの活躍とメタル・サウンドの消化。リズム・アプローチのチャレンジなども指摘すべきかもしれない。洗練されたアクの強さがある。（ミワ）



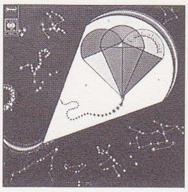
(I) CAMALEONTI
Vita D'uomo
'69
●CBS 52724
○
◉

数あるラヴロックのレコード中最高峰に位置する一枚。中味は殆んどオルガン入シンフォニックの趣きがあり、どの曲も素晴らしいが特にB面が圧巻。胸に額に流れる汗を払う暇ない体さばきで一進一退の攻防を繰りひろげ、一曲め後半には見事根性の一本背負いが決まり2曲めの泣きの曲へと続いていくのだが、さすが太陽とオペラの国のバンドだけあって粘っこく寝技に持ち込んで狂おしいまでの美旋律が覆いかぶさってくるといかにも恋の縦四方固めといった感じで聴者は身動きとれない程の感動を覚えるであろう。やはり技より根性、一撃必殺のイタリアンシンフォニック以外の何者でもない一枚。まさに年に一度の対抗試合、今日に備えた荒稽古といった気迫なのだ。（牧野）



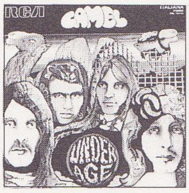
(I) CAMALEONTI
Amicizia E Amore
'74
●CBS 69056
○
◉

彼らの活動歴は古く、64年にカンサス・レーベルよりシングル〝Sha…La La La La〟(DM1005)でデビューした。その後はビート・グループの代表格として活躍を続け、70年のサンレモでは三大プリマドンナの一角オルネラ・ヴァノーニと「永遠」を歌い入賞した。だが彼らはヒット路線を進みながらもサウンドの探求も怠らなかった。〝Lei Mi Dara Un Bambino〟という当時としては長い曲で、構成も変わっていたために多くの人を驚かせた。このアルバムではすでにラヴェッツィに代わりイギリス人のデイヴ・サマーが加わっており、サウンドも一変した。B面3曲目などは明らかに70年代のあのプログレッシヴ・ムーヴメントの影響を受けている。（Hiro Tanaka）



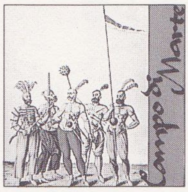
(I) CAMALEONTI
Che Aereo Stupendo...
...La Speranza
'75
●CBS 69234
○
◉

カマレオンティには8枚のシングルと5枚のオリジナル・アルバム「vita D'uomo」（CBS 52724）、「Lo Per Lei」（63350）、「I Magnifici Camaleonti」(65669)、「Amicizia E Amore」(69056)、本作、がある。イタリアン・ロック・ファンにはイル・ヴォーロに参加したマリオ・ラヴェッツィがかつて在籍していたバンドとして知られている。このアルバムはその後のラスト・アルバムになるが、歌物寄りのイタリアン・ロック作としてとらえることのできる仕上りを見せる。比較的、曲は長く、その中でg、kbd等がプログレッシヴな曲想に彩るB④等は聴き所だろう。一方でヴォーカル・パートも忘れず、ハード・ロック調の曲もありと決め手には欠ける。またリズム面の平凡さも否めない。（松本）



CAMEL
Under Age
'70
●RCA PESL 1044 9169
○
◉

キャメルというグループ名やRCAレーベルからソースされていること、又、カラフルなカヴァー・アート等からいってシンフォニックなグループだろうと入手するまでは思っていたが、音の内容はどちらかというとハード・ロック寄りのサウンドだ。僕は残念ながらこの手のサウンドは余り得意なほうではないので、好きな方に一度聴いてもらって判断できればと思う。スタイルとしてはオーソドックスな感じで、プログレッシヴ・ロック・ファンにアピールする要素は薄いと思う。このプログレッシヴ・ロック前夜的な時代は様々なジャンルの音楽のアーティストがごった煮的な様相を呈していたのである。（山崎）



CAMPO DI MARTE
Campo Di Marte
'73
●United Artists UAS 29497
○
◉

カンポ・ディ・マルテとはマルス広場の意味。神話上の人物、軍神マルスの名をとったもので、実際に同名の広場もイタリアにある。本アルバムは73年にリリースされたもので、全体的にヘヴィーな内容ではあるが、単なるハード・ロックとは明らかに一線を画している。イギリス人を1人含む5人のアーティスにより演奏されているが、変拍手を使用したり、フルート、ホーン、メロトロン、ピアノ、オルガン等を随所にちりばめたりと、変化に富み、なかなかの好盤といえるのではあるまいか。筆者個人としては、ジャケットのセンスの悪さが気になるが、このジャケットだけで内容を判断してしまっては危険であるように思う。唯一のアルバムと思われる。（山崎）



CANTOVIVO
La Lüüa E'L Sul
'83
●Ponzo PZN24004
○
◉

私の知る限り「Leva La Gamba」('79)、本作、「Mita La Strada」('85)、「La Perla E L'ostrica」('87)の4枚のLPと「Barbagal E Altre」という未発入りベストを発表しているトラッド・バンド。自主盤一枚限りで消息の知れなくなるトラッドバンドの中では多作と言えるだろう。しかも本作は2枚組である。3作目は未聴だが他の4枚を聴くと、元々それ程泥臭くはなかった彼らが年月の経過と共に一層洗練されていくのがよくわかる。トラッドのアレンジでは無いオリジナル曲も増えて来ている。従って個人的には4作目が一番好きだが、それは最高作を意味するわけでは無い。ここでは最もジャケットが美しい2ndを挙げておく。Alberto CesaとDonata Pintiの2人を中心にして活動していたが4th発売後ドナータは脱退した模様である。（森下）



CANZONIERE DEL LAZIO
Quando Nascenti Tune
'73
●I dischi del sole DS 1030/32
○
◉

地中海音楽をベースに一種独特な音楽空間を構築したカンツォニエーレ・デル・ラツィオの記念すべき第一作。然しここにあるのは余りにも素直で行儀の良い〝民族音楽〟そのものであり、後に見せる野性的な高揚感は一片もない。恐らくは幾多あるフォルクローレグループの一つとして出されたに過ぎない一枚。この時点で彼らのアーティストとしての自我は完全にオフになっていたと見るべきだ。とは言え、演奏自体は見事としか言いようがなく、たおやかなアコースティックの音色に地中海の豊饒のイメージを浮べながらアルコールを傾けるのも、また一興というもの。12ページブックレット付き。（須藤）



CANZONIERE DEL LAZIO
Lassa Stà La Me Creatura
'74
●Intingo ITGL 14003
○
◉

ラツィオとしての創造的活動は本作(2nd)から始まった。それは新加入のジョルジオ・ヴィヴァルディ(パーカッション)、パスカル・ミニエリ(ベース)のリズム陣に負う所が大きいと思われる。ともすれば、たおやかで女性的なカルロ・シリオットのヴァイオリンのみに話題が集まるが、彼らの本質は躍動する男性的なリズムから生ずる、セックスのオーガスムスにも似た高揚感にある。人間が本来持っている野性を、郷愁と共に甦らせてくれるのだ。全編にシャーマニックな雰囲気が漂い、特にB面前半のアシッドな空間は特筆すべきだが、本作では音はまだ完成途上であり、難解な印象を拭えない。全作品中一番アクの強さを感じるが、むしろ後期クリムゾンに共感できる人に聴かせたい。（須藤）



CANZONIERE DEL LAZIO
Spirito Bono
'75
●Intingo ITGL 14006
○
◉

ふっ切った、という感じの3rd。自分達の方向性に自身を持ったことが内容的にはっきりと現れている。ロックやジャズ的要素を融合させたスタイルもほぼ固まった。独特のリズムに疾走感が加わり、何よりも音自体が明瞭簡潔になって聴きやすくなった事が特筆される。勿論踊ることも可能。本作をもってピエロ・ブレガ(ギター)とフランチェスコ(キーボード)が脱退(ただしブレガは後にカルナシャリアやデメトリオ・ストラストの追悼コンサートにも顔を出す、仲々硬派な強者)、オリジナル・メンバーはシリオット(ヴァイオリン)のみとなる。後にこのジャンルの集大成とも言える、ラツィオの5th、カルナシャリア、M.パガーニの1stは、本作の方法論を発展・洗練させたものと言えよう。（須藤）



CANZONIERE DEL LAZIO
Morra 1978

'76
●Intingo ITLM14503
○
◉

稀有の逸材クララ・ムルタス(vo)、マウリツィオ・ジャンマルコ(sax、fl、p)、更にマルチェロ・ヴェント(dr)を得て、最強の布陣を敷いたラツィオの4枚目。明らかな発展と緊張感に漲ったパフォーマンスを聴くことが出来る。特にクララのヴォーカルはバンドのカラーを明確化することに多大な貢献を果した。彼女のvo程、地中海の豊饒のイメージを換起するものはなく、A①の出来は筆舌に尽し難い。相当前衛的なことをやりながらも何処か懐しさを思わせるスタイルは本作で極まっている。また、リズムセクションの素晴しさも特筆されるべきであり、ぞくぞくするようなドライブ感にクララのvoが重なると、非常にエロティックな恍惚感に襲われる。プロデュースはアレアのパオロ・トファーニ。 (須藤)



CANZONIERE DEL LAZIO
Miradas

'77
●Crmps CRSLP 5351
○
◉

本命だろう。充実しきっている頃。5作目。冒頭からアグレッシヴさしか感じられない。音と言うよりもエネルギーの塊が連続する。アレアを大味に骨太にしたようにスカスカだ。〝表現〟という間接技法がないのだ。音楽とも儀式ともつかない。音楽が肉体に限りなく近づいた時のトーンも何もない躍動でしかない。A面最後にはまた全作中屈指の1曲〝Glorias〟を収録しており、彼等の、声や楽器で歌うことの全てが凝縮されている。ざん切りの音、高揚する事それ自体、恐ろしく粗野で力強く音楽と交歓して肉体を超えていくようなリフレインが(本当は)どこまでも続く。内ジャケットにあるパゾリーニやライヒ、ワグナー、ルソー、ジャック・ラカン他の掲載意図を是非知りたいと思う。音楽の屈指の一作としておきたい。 (松本)



CANZONIERE DEL LAZIO
Canzoniere Del Lazio

'78(?)
●旧東独 AMIGA 8 45 142
○

1977年2月にベルリンで行われた「政治的歌曲の7つの祭典」なるコンサートのライブ。何とこの時期、マウロ・パガーニが参加している。3～5枚目から万遍なく選曲されているが、このイケイケはジュリアナやロンドクラブの比ではない。スタジオテイクからは想像もできないドライブ感と感情表現のうねりを聴くことができる(命を吹込むとはこういうことを言うのだろう)。バンドのノリも半端ではなく、メンバー全員が過激に触発し合う様子が容易に想像できる。パガーニの1stやカルナシャリアの必然性が頭でなく体で理解できるという代物だ。しかしそこまで敢えて洗練していない生の高揚感、恍惚感こそがラツィオの身上。むき出しの性欲のような、エロティックさが魅力と言ったら言い過ぎか。 (須藤)



CAPITOLO 6
Frutti Per Kagua

'72
●IT ZSLT 70014
○
◉

ハード・プログレッシヴ・グループ、カピトロ・セイは72年にアルバム・デビューを飾っているが、ポップス様のサウンドも得意としていた様で、同年のサンレモフェスティバルにも参加している。しかし本作では硬質的なヴォーカルとヘヴィなギターによる攻撃的なサウンドが目立つ。フルートの導入はデ・デ・リンドあたりと共通な構成だが、それ程シンプルな音ではなく、全体的に多少入り組んだ印象を与える。部分的にはプロセッションに近い所もあるが、A面終盤からB面にかけて割と哀感を帯びた展開が見られるほかは、イタリア的な感性は余り現れて来ない。むしろ、音の端々に時として暗い陰が感じられる。まず標準作と言えるが、長い曲になるとそれを支える展開力に若干乏しい嫌いがある。 (江田)



CAPRICORN COLLEGE
Orfeo 2000

'72
●Kansas LDM 17004
○
◉

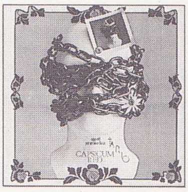
カプリコーン・コレージェの1stアルバム。根本的にはピアノ、フルート、サックスそれに軽やかなリズムセクションを中心に据えたイージーな音が下地である。次作やCapricorn College Brass名義のシングルを聴けば明白だ。ただ、本作ではイタリア臭い情緒的なナンバーが6割方を占め、そこそこのサウンドが楽しめる。演奏技量、録音状態の面では今一つだが、全体的に非常に柔らかな音作りがなされ、チェンバロの導入が効果的で、クラシカルな趣を湛えている。A③、⑤あたりはなかなかの佳曲と言えよう。また、B①などではリズミカルなピアノ、パーカッションがイージーな雰囲気を漂わすが、ヴォーカルが入ると一変してイタリア特有の哀愁が満ち溢れてくる。 (江田)



BARIMAR E CAPRICORN COLLEGE
LP Di Pimavera

?
●Kansas 5300502
○Vinyl Magic Vm 026
◉

Capricorn Collegeの2nd。1stは長い曲も含み、地味乍らもプログレッシヴな趣きの醸し出された好作品だった。このアルバムはそうした前作のサウンドを受け継ぎつつより唄に比重を置いたとても味わい深いものである。当時のラヴ・ロックとも一線を画したそのサウンドは、単なるポップスと言い切ってしまえないまるで春の息吹きとでも形容したくなる若々しい生命の鼓動を感じずにいられない。元々、同グループのシングルプロデュースもした事のあるBarimar(ピアノアレンジ、オーケストレーション等)との共同制作という形で発表されたこの作品はカンサスレーベル特有の温もりと爽やかさの感じられる音作りで、ほのぼのとした余韻を残してくれる。 (鈴木伸一)



CAPSICUM RED
Appunti Per Un'Idea Fissa

'72
●Bla Bla BBL-11051
○Artis ARCD 029
◉

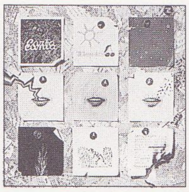
このアルバム一枚を発表して解散したカプシクム・レッドは、現在イ・プーのベーシストとして活躍中のレッド・カンツィアンが在籍していたグループ。彼はギターとボーカルを担当している。A面ではベートーヴェンのピアノ・ソナタ第8番「悲愴」——奇しくもラッテ・エ・ミエーレの「パピヨン」でも用いられていたが——がロック風のアレンジで全曲演奏されている。タイプとしてはリック・ヴァン・ダー・リンデンが率いるオランダのエクセプションあたりが思い浮かぶが、イタリア的叙情に彩られた演奏には未完成ながらも捨て難いものがある。この内容から察するに、イ・プーの「パルシファル」、「ロマン組曲」といった気品あふれる名作群は、レッドの加入に依る所が大きいとも思われるのである。（古田）



CARNASCIALIA
Carnascialia

'79
●Mirto 6323 750
○
◉

玄人好きの作品をリリースをしていたミルト・レーベルから発表されたこのアルバムは、カンツォニエーレ・デル・ラッツィオのジョルジオ・ヴィヴァルディを中心にデメトリオ・ストラストやマウロ・パガーニ等が参加して創られたものである。地中海音楽〜アレア〜マウロ・パガーニ〜カンツォニエーレという硬質でレベルの極めて高いミュージック・アマルガムの採用を呈しているといって良いと思う。A面はどちらかというとカンツォニエーレのヴァイオリニスト、カルロ・シリオットのソロ・アルバムにも通じるようなゆったりとした地中海音楽が、B面はより硬質なアヴァンギャリズムを注入した作品である。又、デメトリオが死去する直前の録音としても話題を集める一枚。（山崎）



CARTA CANTA
Il Tempo Delle Ciliegie

'80
●Zodiaco VPA8471
○
◉

イタリタのトラベドの本来の姿は想像以上に地味で泥臭いものであり、異国のマニアが興味本位で首を突っ込むとえらいことになりかねない。だが、このフィレンツェの女性2人、男性3人のトラッド・グループはオランダやフランスのトラッド・グループのように中世音楽やクラッシックからの影響が感じられ、曲構成やアレンジが複雑化し、音色もかなり洗練されている。特にフルートやヴァイオリンの上品な響きは素晴らしい。それでも随所にどうしても顔を出してしまう恨めしさだけは隠しようがない。なにしろアップテンポになるほど悲痛さが増すのだから。つけ加えると、ボーカルは男女比率半々で歌っているが、どちらの声質も素晴らしく、コーラス等も実に決まっている。中々の好作品。（川辺）



(IL) CASTELLO DI ATLANTE
Sono Io Il Signore Della Terre A Nord

'92
●
○Vinyl Magic VMNP 03
◉

Vnyl Magicの〝New Prog'90〞第3のバンドである。'70年代の著名バンドに例えるなら、メタモルフォッシ、セミラミス、クエラ・ベッキア・ロカンダの名を俎上げてもよかろう。ヴァイオリンをフィーチャーした極めてアトラクティヴな楽曲群は、好まざるとにかかわらず、リスナーの耳を刺激する。エスニックなアコースティック・アンサンブルにシンセサイザー、カントリー＆ウェスタンのフィドルを思わせるヴァイオリン、ムーディーなピアノにブラス・ロック風アレンジetcおよそ「ロックとは何をやってもいいのだ」と思わせる作風ながら、全体はある種の統一感を保ち、おだやかですらある。聴きどころの多さの前には演奏の野暮ったさなど雲散霧消してしまう好サンプルである。（ミワ）



CELESTE
Cleleste

'76
●Grog GRL 02
○
◉キング KICP 2711

わずか5枚のアルバムを残して消滅したグロッグ・レーベルの中でもこのチェレステの創り出したサウンドは比類なき美しさを感じる良質なものだ。アコースティックな響きを大切にしながら、フルートやメロトロンがソロを取っていき、全体に清らかなイメージで仕上げられている。これ一枚で解散してしまったが、キーボーダーのチロ・ペッリーノは'80年代以降、2枚のソロ・アルバム（ニュー・エイジ調）をリリースし、最近では、往年のイタリアン・ロックの未発表音源をリリースするMELLOWレコードのテクニカル・アドヴァイザーとして活躍する一方、過去の未発曲を収録した「Celeste II」及び、チェレステ結成以前に制作したサウンド・トラックス「I Suoni In Una Sfera」を発表した。（山崎）



CELESTE
II

'91('76年録音)
●Mellow MAC 1001
○Mellow MMP 154
◉

CELESTE「II」はイタリアのマイナー・レーベル、メロウレコーズの第1弾として91年に限定300枚という少数プレスで発表された作品。「II」とは言っても完成品として残っていたわけではなく、'76年頃の未発表曲を集めてアルバムとした作品のためセッション風のような部分も含まれている。1stの白いジャケットそのもののような清楚で繊細な響きを想像してこの「II」を聴くと、その曲風の違いにちょっと戸惑いを覚えるかもしれない。しかし聴いているうちに、戸惑いは消え、しだいにそのジャズ色の強い幽玄なサウンドに引き込まれていくようになる自分に気づくだろう。1stとはイメージは違うが、これも'70年代の熱い息吹を感じさせる好作品である。（佐々木）



CELESTE
I Suoni In Una Sfera

'92('74年録音)

●
○Mellow MMP 113
◉

70年代イタリアン・ロックの未発音源を積極的に発掘してるメロウ・レコーズから'92年にリリースされたCELESTEのこの作品は1st以前に録音された映画のサントラである。(映画は公開されなかったと言う)この作品を聴くとCELESTEの本質である無垢な純情性といったものはすでに、確立しているように思える。映画のサントラという制約のせいか全体に淡いイメージの断片といった印象が強く、1stほどの完成度は無いかもしれない。だが、CELESTEの奏でるその淡いイメージの断片はその無垢な純情性ゆえんに心に残り哀愁を誘うのである。それはそう、僕たちがはるか昔に忘れてしまった少年の(純情な)心のようなものかもしれない。　(佐々木)



CERVELLO
Melos

'73

●SMRL 6119
○Contempo CONTEDISC 002
◉キング KICP 2707

オザンナー派の数あるアルバムの中でも「パレポリ」と並び称される名盤である。ダニーロ・ルスティーチの弟、コルラド・ルスティーチのバンドで、コルラドは後にダニーロと共にノヴァを結成することになる。73年にリリースされた本アルバムの内容は、ギリシアの古伝説に基づく「メロス」の物語である。サテュロスの夜宴から物語は幕を明け、フレスコ画と称された不思議な象徴詩に致るまで美しいイタリア話の響を伴いながら圧倒的な曲展開をする。コルラドのギターを中心に各人が使い分ける多数の楽器が怖るべき変拍子を伴いながら古伝説を見事に現代に甦らせている。ダニーロとエリオ・ダンナの協力の基に作成された。しかしこの素晴らしい内容とは裏はらにチェルヴェロの活動は、はかなく短いものであった。　(山崎)

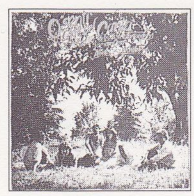


CHERRY FIVE
Cherry Five

'75

●Cinevox SC3327 SC27
○
◉キング KICP 2709

チェリー・ファイヴは、コブリンのクラウディオ・シモネッティのユニットで、彼が全ての曲を書し下している。ドラムをたたいているのは、名作「オペラ・プリマ」を作成したルスティケッリ+ボルディーニのカルロ・ボルディーニ。内容は割とハードなプログレッシヴ・ロックと呼べるもので、時折前にでてくるメロトロンの響きがなかなか魅力的である。ゴブリンの一連の作品から、想像するのはむずかしいだろうが、強いて言うとするならば「IL FANTASITICO VIAGGIO DEI〝BAGAROZZO〞MARK」あたりの作風に近いような気もする。全体的に軽快な曲が多く、多少物足りなさも残るが、一聴には値すると思う。　(山崎)

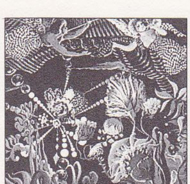


(LA) CIAPA RUSA
O Senti Che Bel Canta'

'85

●La Ciapa Rusa D 001
○
◉

北イタリアのトラッド・バンドの代表格である。この3枚目の作品はゲストにトリノのトラッド・バンド、CANTOVIVOよりArberto CasaとDonata Pinti嬢の2人をヴォーカリストとして迎え、歌に重点を置いた作りとなっている。CANTOVIVOな非常に地味な音のグループなのだがここでの両者の歌声は実に味わい深く、本来はダンス・バンドだったキャパ・ルーサの表現の幅を何倍にも広げている。この作品での北イタリア・トラッドと南フランス・トラッドの共通性を指摘する意見有り。その後、キャパ・ルーサはシンセサイザー等を加え、よりコンテンポラリーな方向に進んでいくことになる。　(川辺)



CIATO AND CIATO'S
Divagazioni

'75

●Eleven EL 25112
○
◉

作詞/作曲、ピアニストのArnaldo Ciatoの2作目。他に数名のミュージシャンが参加しており、全曲をバンド形態で聴かせてくれる。大半の曲がヴォーカルを中心にしたいわゆる歌物だが、過度なオーケストレーションはなく、軽くストリングスのバッキングが流れる程度だ。従ってイタリアに数多い曲の盛り上がりはあまりない。しかも何曲かは英語で歌われている。ヴォーカリストの声質がソフトなトーンを持っているので、聴きざわりのいい感触はある。全体にムード・ジャズの下地がある。チャトはジャズに通じている人のようだ。それを思えばこの作風は納後できる所だ。歌、弦楽器のサポート、ジャズの流れが結び合った所に一番の特徴がある。他にも「Ciato And Ciato's」が出ているもよう。　(松本)

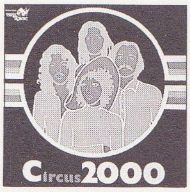


CINCINNATO
Cincinnato

'74

●PDU PLD. A 5091
○
◉

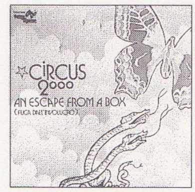
PDUから唯一のアルバムをリリースしているチンチナートはアヴァンギャルドなジャズ・ロックを得意とする。ピアノがサウンドの核をなし、A①ではそれにひずんだギターが絡みロック色の濃い演奏を聴かせる。しかし全体を通して見ると、ジャズ風のインストパートが大半を占め、ヴーカルは一部で聴かれるのみ。演奏の端々に〝技巧派〞を目指しているフシが伺えるもの、アルティ・エ・メスティエリあたりと比べ隔たりが感じられるのは仕方あるまい。録音状態が完璧でないせいもあろう。曲構成はA面3曲、B面は1曲で全て費やしている。メロトロンはB面の中程で顔を出すが、若干の哀愁をそそるのみで、シンフォニック通を満足させるまでには至っていない。　(江田)



CIRCUS 2000
Circus 2000

'71
●Rifi RFL-ST 14049
○Vinyl Magic VM014
◉

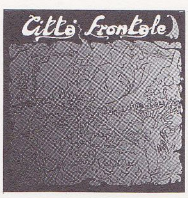
サイケデリックな香りがプンプンする、女性VOCALを中心にした、4人組。かきならすギターと歌いあげるヴォーカル、それに絡むフルート、コーラスなど、当時のアシッド・サウンドの典型的な世界なのだが、曲がポップなので聴き易く、そのあたりが評価を分けてしまうかも知れない。英語の歌詞なども含めて、イタリアっぽさは全く無いが、逆に普遍的なアシッドの入門編と思えば、それなりに楽しめる。サウンド面でもいろいろな実験はしており、意欲は伝わるのだが、CDになってしまうと荒さが目に付く感じはしょうがない。アシッド・フォーク(ロック)の世界も相当に奥深く、マニアックで莫大な埋蔵量が有るのだが、それを垣間見るには充分な一枚で、これにハマったら恐いぞ。 (津田)



CIRCUS 2000
An Escape From A Box

'72
●Rifi RDZ-ST 14215
○Vinyl Magic VM015
◉キング KICP 2102

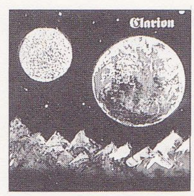
サーカス2000(ドゥエミッラ)のセカンドLPである本作品は、残念ながら日本では知名度も人気も低い。編成は女性ヴォーカル、ギター、ベース、ドラムスと比較的オーソドックスなタイプで、サウンド的には早い話アシッド・ロックである。だが当時の他のバンドのように混沌だけを売り物にしている訳ではなく、整然としていて心地良い、フォーク・ロック風に始まるA①を頭だけ聴いて『ようするにジェファーソンか』と思う人も大胆にギターが入って来ると意見を変えざるを得なくなるだろう。B①に至っては、もはや完璧に乱れたメロディーが暴れ回っている、というよりも散歩している。メンバーの写真を見て納得してしまった。ハッキリ言って眼がキマっとるわ。 (Chihiro S.)



CITTA FRONTALE
El Tor

'75
●Fonit Cetra LPX45
○Fonit Cetra CDM 2028
◉キング KICP 2155

オザンナの4枚目「ランドスケイプ・ライフ」が発表される少し前の74年6月にエリオ・ダンナとダニーロ・ルスティーチはクラウディオ・ロッキと活動していたドラマー、エンツォ・ヴァリチェッリとピンク・フロイドの「狂気」に参加していたライザ・ストライクを加えウーノを結成、残りのリノ・ヴァイリッティとマッシモ・グァリーノは新たに4人のメンバーを加え、チッタ・フロンターレを作る。ウーノとは違い、全曲イタリア語で唄われ、曲もリノとマッシモが全て書いている。しかし、このアルバム一枚で行方不明となってしまった。ジャケットはウーノ、「ランドスケイプ」と同じくドラマーのマッシモのデザイン。メンバーはfi & Sax、ds、g、kbd、vo、bの6人編成。 (いわね)



CLARION
Clarion

'93
●
○Mellow MMP 142
◉

元ZAUBERのキーボードとクラシック畑出身らしいフルート奏者がZAUBERをバックにコラボレイトしたアルバムで、ZAUBERから女性ヴォーカルをカットしたものと思っても差し支えない。ZAUBER自体が今でも良質なシンフォニック・ロックを届けてくれているのだが、その中でも、もう少し繊細さの欲しかったヴォーカルの代わりに、卓越したテクニックを持つフルートがリードを奏でているのだから、まさに鬼に金棒状態である。中世的なイメージにファンタジックな色合いと微妙な色気が溶け合い、イタリアの胸を打つ景色が、うまく表現されている。ちょっと口当りが軽く良すぎるきらいもあるのだが、メロディを重視した、その切口は納得出来るし、充分な魅力のある一枚である。 (津田)



(I) COCAI
Piccolo Grande Vecchio Fiume

'77
●Style CT 7185
○
◉

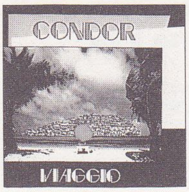
ジャケットとはうらはらにラヴ・ロック色の強いサウンドを聴かせる。イタリア語のヴォーカルが見事に溶け込んだA①は、美しいメロディがちりばめられており、演奏も仲々良く、単なるラヴ・ロックと片付けてしまうには惜しい。その後、平均的な曲が続き、多少我慢していると、シンセの哀愁のあるイントロで始まるB③で、再びすばらしさを思い知ることになる。Il Giardino Dei Semplici, La Bottega Dell'arte に通じる美しい曲。短いのが難点だが、インストゥルメンタルのB④は一番プログレ色が強い。叙情性あふれるこういった曲は、イタリアならではのもので、他の国々の追随を許さない。ボローニャでの録音となったのは、ローマ、ミラノ、トリノといった都市においてこの手の音はすでに廃れていったあおりだろうか。 (吉瀬)



COLLAGE
Due Ragazzi Nel Sole

'76
●Harmony LPH 8013
○
◉

このコラージェなるグループが何枚のLPをリリースしていたのかは不明だが、知るかぎり4枚のLPはリリースしている。彼等も'70年代中盤に誕生した、いわゆるラブ・ロック・グループと日本でいわれているものの一つで、タイプとしてはジャルディーノあたりと同系統のグループである。彼等の写真をみるかぎり、アイドル的な売り方をされていたようで、10代の人気をねらったようだが、内容のほうは、万人受けするしっかりとしたもので、薄っぺらな印象は全くない。オーソドックスであるが、イタリアの愛の形を表現するには充分に魅力的な作品だ。5人から成るグループで、演奏も彼等の手によるもの。 (山崎)



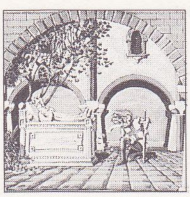
CONDOR
Viaggio
'85
●CON 85
○
◉

自主レーベルからと思われるコンドール'85年のデビュー作。'70年代のイタリアン・ロックの持つ様々な要素をコンパクトに最良な形で'80年代に再現してみせたアルバムと言える。唯一欠けているのが、ドタバタリズムに代表されるオドロオドロしさで、逆に全体的な軽さとして耳に入ってしまい、それがこのアルバムの魅力を伝えにくくしている最大の弱点でもある。確かにヘヴィーなシンフォニックではないが、同時期の他のグループが中途半端に日和った作りをしている中、かなりしっかりしたサウンドプロダクションがなされている。特に歌心を大事にしたイタリアらしいメロディラインにこのアルバムの価値を見出せる。そのメロディを生かすキーボード、アコースティックギター等、正にイタリアの音だ。 （木下）



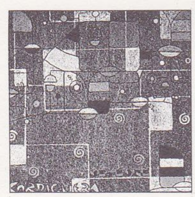
CONSORZIO ACQUA POTABILE
Sala Borsa Novara 5 Maggio '77-Ore 21. 15
'93('77年録音)
●
○Kaliphonia KRC002
◉

このコンソルツィオ・アックア・ポタビーレというグループは'70年代の中期から活動を始めたグループであるが、活動がシーンの衰退期と合致していた為、アルバムデビュウをはたせなかった。この時期には'70年代前半のシーンの影響で多数の新人グループが誕生したのではないかと推測できるので、アルバム・デビュウできずに消えた才能豊かなグループが他にも存在していた可能性は高い。これは当時残されていたライヴ・レコーディングをCD化したものである。どの曲もシアトリカルな印象でいいものを持っているのだが、残念ながら演奏がいまひとつといった感である。いいプロデューサーの基でスタジオ盤さえだせたらという感じだが、それは同時リリースのもう1枚のほうで実現するのである。 （山崎）



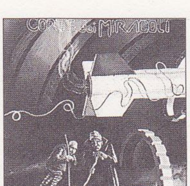
CONSORZIO ACQUA POTABILE
...Nei Gorghi Del Tempo
'93
●
○Kaliphonia KRC 003
◉

'70年代から活動していたグループだが'93年になってやっとスタジオ盤がリリースされた。もう1枚のライヴで演奏されていた古い曲も新しく録音されて、イメージはそのままにアレンジ力も演奏力もアップして幻想的なシンフォニック・ワールドを聴くことができる。聴くとぐいぐいとひき込まれていくようなアクの強さはアンジュ的だが、全体のイメージは僕にバンコの傑作「ダーウィン」を想起させた。往年のイタリア然とした、本物の風格を漂わせる音だ。尚、限定としてこの変型ジャケットに包まれたものと、さらに、同時リリースのライヴと2枚一緒に変型ジャケットにしたものと2種類のスペシャル・ヴァージョンも用意されている。近年リリースのイタリアのシンフォ系ではピカーの出来。 （山崎）



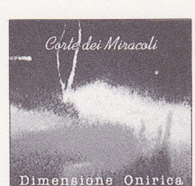
CORDIGLIERA
Meteore
'86
●LPS 1001
○
◉

イタリアンFOLKというのは英国モノにはないその独特な雰囲気があって、それに慣れるまで結構聴き込まなければ仲々心の中に浸透して来ない。全部が全部、そうとは言い切れないが、このCORDIGLIERAに関して言えば比較的聴き易い部類に入る。インストの比重が大きく、そのどれもが非常に魅力的である。特にSIDE1のラストが素晴らしい。パンフルート、ハープ、ダルシマー、アコギが一体となって徐々に盛り上がって行く所など何とも言い難い。どことなくマイク、オールドフィールドを想起させる。他のインストも水準以上だが、SIDE2のバッハの曲だけは戴けない。ただ忠実に再現しているだけに過ぎない。歌モノも入ってはいるが影が薄いし、女性もメインではない。シングル付。 （佐野）



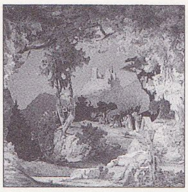
CORTE DEI MIRACOLI
Corte Dei Miracoli
'76
●Grog GRL 04
○
◉キング KICP 2003

コルテ・デイ・ミラーコリの唯一のアルバムは、ニュートロルスのビットリオ・ディ・スカルツィをゲストにむかえて作られた。ツイン・キーボードという意欲的な編成、ユートピア志向を示した歌詩と曲作りと、素晴しいグループになる萌芽を持ったグループだった。A面1曲目の〝人間がいなければ〞はユートピアとしての自然が人間によって破壊されていく悲哀を歌っているが、これが彼らのベストだと言って良いだろう。ビットリオ・ディ・スカルツィのギターにツイン・キーボードがからむところなどは秀逸の一語に尽きる。全体としてはニュートロルスの影響から抜け出していない部分も多く目につくが、これから彼らの個性が発揮され、ビッグなグループになるという矢先にグロッグレーベルが消滅してしまったのである。 （宇田川）



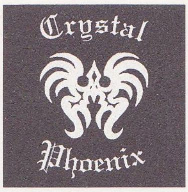
CORTE DEI MIRACOLI
Dimensione Onirica
'92('73/'74年録音)
●
○Mellow Records MMP 104
◉

グロッグ・レーベルから正式にアルバム・デビュウする前、ニュー・トロルスのスカルツィ加入前のオリジナル・メンバーによる演奏が聴ける。ジャケット裏写真のライヴ演奏場面が目に見えるようなノリと勢いが伝わってくる。やや雑な箇所もあるが演奏力は高く、スピード感溢れる流れで圧倒してくる。アグレッシヴかつワイルドにハモンドを弾くアレッジョ・フェルトリのハードなオルガン・ワークは冴え、時にナイスの〝アメリカ〞のエンディング部を思い起こすようなエキサイトした場面も聴ける。全体的に元々の音源の質が悪いが、エネルギーを感じる好印象なアルバムだ。 （熊谷）



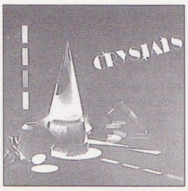
CORTE DEI MIRACOLI
Live At Lux
'93
●
○Mellow MMP 138
◉

このライブは先に同じメロウ・レーベルよりリリースされた未発表作品が録音されたのとほぼ同じ頃の'74年、イタリアのLUXで行われたライブのCD化作品。しかし、残念ながら正規のライブ録音を目的としたものではないので音質が全体的にこもり気味であまり良くはない。とはいうものの演奏自体は非常にヘヴィーでスリリング(一部アンサンブルが危なくてスリリングになってしまうのはご愛敬だが……(笑))且つ熱のこもった生々しいものなので聴き手を当時のライブ会場にタイムトリップさせるに足るものを聴かせてくれている。余談ながら収録曲のうち1曲目、2曲目、5曲目の3曲が後に正規アルバムに収められることになるものでそのアレンジの違いも楽しみの一つとなるであろう。 (島村)



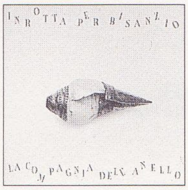
CRYSTAL PHOENIX
Crystal Phoenix
'80?
●BLACK Widow BWR 001
○
◉

いきなりクランチの効いたディストーションギターを中心とするインストのメタルサウンドで幕を開けるこのアルバムはクリスタル・フェニックスが'80年頃に人知れずリリースした唯一の作品。前記のように1曲目はかなりコアなメタルサウンドになっており驚かされるのだが、このアルバムの真価は2曲目以降に聴くことが出来る。その2曲目以降のサウンドはまさに往年のバンド達をも彷彿させる典型的なイタリアン・シンフォニック・ロックで、そのアコースティックで叙情的なサウンドを中心としながらも時に情熱的に奏でるといったような変化に富んだ演奏は聴くものを魅了するに十分のサウンドになっている。またメインの女性ボーカルも歌詞は英語だがこれまたイタリア的雰囲気の素晴らしいものである。 (島村)



CRYSTALS
Crystals
'93('74年録音)
●
○Mellow MMP 120
◉

'74年制作のハード・ロック・バンド。初登場の音源のようだが、イタリアン・ロックという事にこだわらないで、'70年代初期のハード・ロックというレベルで見てみると十分なレベルに有り、楽しめる。一級品という訳ではないが、メロディはなかなかだし重いギターもねばっこい。アコースティック楽器の使い方にツェッペリンの影響を感じるのだが、どちらかと言うと全体は「LIVE! YARDBIRDS」の頃のサウンドか?。GARYBALDIよりはもっとブリティッシュで、オリジナリティはないが、曲は良質で、勢いも感じられる。全曲英語で歌っている事もあり、言われなければ、イタリアのグループだと思わないだろう。録音はいまいちだが演奏は下手ではない。 (津田)



(LA) COMPAGNIA DELL' ANELLO
In Rotta Per Bisanzio
?
●
○
◉

La Nuova Eraのメンバーに、ボーカルのMario Bortoluzzi、Adolfo Morganti、Marco Priori、Luigi Pinciniを加えたLa Compagnia Dll' Anelloのこの作品はLa Nuova Eraを想起させる気品溢れるインストゥルメンタル・パートとM.Bortoluzziの味わいの深い歌唱を織り混ぜた美しいアルバム。特にオープニングを飾る〝Al Largo Della Laguna〟は静謐なまでの詩情を湛えた逸品のこのインストゥルメンタル曲から切れ目無く続く〝In Rotta Per Bisanzio〟からは、嫋やかで品格のある演奏と表現力豊かなヴォーカルが美しく調和したサウンドが展開される。A面のこの流れは本当に素晴らしい。尚明るくほのぼのとしたB面では彼等の多様性の一端を窺える。 (鈴木伸一)



COMPAGNIA DELL' ARCO
Compagnia Dell Arco
'82
●C&M ZNLCM 34158
○
◉

イタリアも南の端、バルカン半島を対岸にのぞむバリからの意欲的なトラッド・サウンド。全曲、自作曲だが、リズムもメロディもトラッド・ミュージックに由来したもの。強く土着のものを感じさせると同時に卓越した演奏力で、恐らくトラッドにはない複雑なリズム・チェンジやアクセントの強張、各楽器の変則的な重ね方等が頻繁に出てくる。非常に緻密な音作りだ。一言で言うなら意欲的なトラッド・サウンドということになると思う。これはトラッドの再現による解釈というよりも、トラッドを素材とした独自の創作に近い。アコースティック楽器の細やかさやトラッド・シンギングを最大限に活かしたいわゆるチェンバー・ロックと言った方がいいか。女性VOの魅力を含めて早急こちらの範中に入る音楽だろう。 (松本)



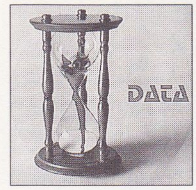
DALTON
Riflessioni : Idea D'Infinito
'72
●Music : LPM 2011
○Viny Magic VM 012
◉

非常に癖の強いシンフォニックロックを得意とするダルトンの1stアルバム。ピアノ、オルガン、メロトロン等kbd系を中心とした屋台骨はその不器用さ故に少々頼りない印象を受けるが、フルートの導入によりかなり引き締まったサウンドとなり、哀愁を帯びたメロディーラインも俄然生きてくる。曲と曲の間隙にはピアノとフルートによる淋しげなテーマが幾度となく繰り返される。しかし、どの場面でも極端なイタリア色は感じさせず、特にB面では、力強いリズムをバックにワイルドなギターが右に左に飛び回り、荒々しいオルガンがうなりを上げるなど、ブリティッシュナイズされた演奏も披露している。2ndは75年の発表。プログレ色は薄まり、強い個性も影を潜めてしまっているが、巷で酷評される程ひどい出来ではない。 (江田)



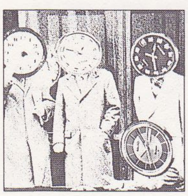
DALTON
Argitari
'75
●IAF LP 29001
○
◉

3面開きの2ndアルバム。キーボードがメンバーチェンジしているが、その点はあまり変化はない。ただ1作めでかなり活躍していたフルート奏者がゲスト扱いになり、その比重が後退している。1作めがかなり毒々しさを伴なった押しまくる内容だったのに比べるとアコースティックな面が強くなり、よりすっきりとした音に聞こえるが、各所に前作の名残りも多く聴く事が出来る。しかし歌メロを重視した作りに変化しているのは事実で、その辺の受け止め方しだいで各人の評価も分かれるだろう。ヘヴィーな演奏を含む歌物ロック・アルバムとしてなかなかの佳作と評価しておこう。このバンドの不思議な点は、作詞、作曲者のクレジットがバンドのメンバーではない事だ。前作もそうだし本作もしかり。事情の程は不明である。 (城元)



DATA
Data
'74
●Numero Uno ZSLN 55668
○BMG Ariora ND 74852
◉

'70年代後半には、ソロシンガーとしてヒットをとばし、キング・レコードより日本盤もリリースされたウンベルト・トッツィが、それ以前に在籍していたグループにストラーナ・ソチエタとこのダータがある。ダータのほうは当時意欲的な作品群をリリースしていたヌメロ・ウーノからのデビュウと、その意味深げなジャケットからして、プログレッシヴ・ロックの中でもかなり革新的な内容を想像しがちだが、彼等の持ち味はストラーナ・ソチエタ同様ソフトでメロウなカンタウトーレ・タイプのポップ・ロックである。最近日本で、プログレッシヴ・マニアの中にクローズ・アップされてきたカンタウトーレ達であるが、それらを好む方には絶好の作品としてあげておこう。良質なポップス・アルバム。彼等唯一の作品。 (今)



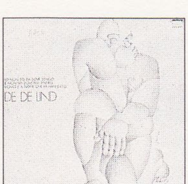
DEDALUS
Dedalus
'73
●Trident TRI 1001
○Vinyl Magic VM 009
◉

シンフォニック系の好作品が華やかに注目を集める中で、イタリアン・ジャズ・ロックの人気は今一つ地味であるが、興味深い作品は意外に多い。Tridentレーベルに2枚の作品を残しているデダルスは前衛ジャズ・ロックの代表格とも言え、割と個性的な存在である。2ndではフリーな部分を極限まで押し進めた実験音楽を披露しているが、本作では〝本格派〟としての体裁を十分に整えながらも、サックス、elピアノ、elチェロ等を駆使、更には民族ジャズ・ロック・グループ〝アクトゥアラ〟から参加したReneのパーカッションも加わり、部分的には徹底的にフリーな空間を創り上げげている。演奏技術もまずまずで、重量感溢れるリズム陣の働きが効いている。時計を取り入れたカヴァーはCaesar Montiの手によるもの。 (江田)



DEDALUS
Materiale Per Tre Esecutori E Nastro Magnetico
'74
●Trident TRI 1008
○
◉

一瞬レコード針を乗せそこねたかと思うホワイト・ノイズのリアルさに、このアルバムが読める。前作のジャズ・ロック指向は影をひそめ、完全なフリー・サウンドに移行している。前作からベーシストがぬけて、vlncello & kbd, g & sax, dsのトリオになり、ちょうどOPUS AVANTRA「Lord Cromwell～」のインプロヴァイズド・パートに似たサウンドになっているので、はっきりと好き嫌いが分かれそうだ。エレクトロニクス・エフェクトの使い方もよく似ている。また静/動、早/急といった変化が少なく、流れよりも音一つ一つを集めたといった連なりであることも硬いイメージを与えているのだと思う。D.ベイリーのカンパニーあたりに通じる。 (松本)



DE DE LIND
Io Non So Da Dove Vengo E Non So Dove Mai Andro, Uomo E Il Nome Che Mi Han Dato.
'72
●Mercury 6323 901A
○Polygram 846 414 2
◉

おごそかな雰囲気につつまれて、このデ・デ・リンドのアルバムは幕を開ける。他の多くのイタリアン・ロックと同様、この作品もトータルな曲作りがなされており、アコースティック・ギターとフルートをメインに使った〝静〟の部分と、ブラック・サバスばりのヘヴィーなギターをメインに使った〝動〟の部分とが、何度となく対比されながら曲が進行してゆく。が、部分部分が聴く限りは輝きを見い出すことも容易なのだが、両面通して聴いた後には、少々散漫な印象のあることは否めない。彼らは、本アルバム以前にもシングルを発表しており、そのジャケット写真でははつらつとした青年の姿を見せていたのだが、本作の中ジッケに見える姿が、何とも不健康な雰囲気に満ちているのは、一体何故なのでしょう? (城元)



DELIRIUM
Dolce Acqua
'71
●Fonit Cetra LPX 11
○Fonit Cetra CDM 2025
◉

デリリウムはトロルスを始め多くのロック・アーティストを生み出したジェノヴァの出身であるが、随所にジャズのエッセンスをちりばめながら抒情性とアグレッシヴなパワーも持ったユニークなグループである。リーダーのイヴァノ・フォッサーティはこの1作にのみ参加し、後はオスカル・ブルデンテとの共作とソロを合わせ6枚のアルバムを発表しているものの彼の本領はミュージック・メイカーとして他のアーティストに手を借す時に発揮され、ソング・ライターとして数多くのヒットを放っている。グループの方はメンバーを補充し「Lo scemo e il villaggio」、「Delirium III」の2枚の秀作をリリースし解散している。どこか郷愁をただよわすフォッサーティのヴォーカルとフルートが印象的な作品。 (岡本)



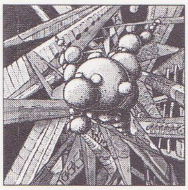
DELIRIUM
Lo Scemo E Il Villaggio
'72
●Fonit LPX18
○Fonit Cetra CDM2027
◉

まさかこんな物まで再発されると誰も思わなかった、DELIRIUMの2ndアルバム。パタパタ・ドラム、多彩なキーボード、イアン・アンダーソン的なフルート、ジャズのエッセンスを取り入れた演奏と、'72年というイタリアプログレの黎明期（BANCOやPFMのデビューアルバムと同じ年!）という時期を考慮に入れればかなりの出来と言える。一部、ばたくさい所も散見されるが、（それが良いのではないか、という人も居るかも）、イタリア的叙情パート（もちろん必殺のメロトロンがフューチャーされている）が補っておつりがある。また、歌メロが良いのもこのアルバムの特色で、つい拳を握って一緒にコーラスをしてしまう人も居るはず。アルバム全体を通しての印象が希薄なのが残念。イタリアの血の熱さを感じる一枚。（野呂）



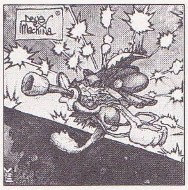
DELIRIUM
Viaggio Negli Arcibelaghi del Tompo
'74
●Fonit Cetra LPX 20
○Fonit Cetra CDLP 421
◉

デリリウムの3rdアルバム。1stではアコースティックパートを中心にジャズ的な要素も絡めながらイタリア特有の郷愁、切なさを奏で上げ、2ndはメロトロンを前面に押し出し、よりプログレッシヴな手法を模索した意欲作であった。本作では前2作の持ち味をソツなく吸収することにより、より完成された形でのプログレッシヴ・ロックが聴かれる。最後のアルバムになってしまった点は惜しまれるが、残された作品はいずれも良質なものばかりで特にフルート、ピアノに加えオーケストレーションが効果抜群の本作などは国内盤リリースには持って来いだったはずだ。トロルス等のビッグネームの陰になって今一つ地味な印象を拭い切れない彼らが、我が国で正当な評価を受ける日は遠のいたままである。（江田）



DEUS EX MACHINA
Gladium Caeli
?
●
○
◉

'85年、ボローニャにて結成。何度かのメンバー・チェンジを経てvo、g、kbd、vln、b、dsの6人編成に落ちつき、このデビュー作をリリースした。最近のイタリアでは久しぶりにアグレッシヴな音楽性を感じさせる。20年前ならSEMIRAMISあたりが演った屈折感の強いヘヴィ・サウンドをより様々の要素を取り入れることで、更に複雑にした、と言えるかもしれない。そのあたりに'90年代ならではの、蓄積された語法の吸収、を感じさせるが、不思議と発散力がある。小袋に入り込まない。その意味ではロックっぽさ、骨っぽさ、パッション、が先に立つタイプだ。多少の荒さがあるとは言え、デビュー作でのカラーリングとしては明確な方だろう。ハード・ロック・サイドでも受け入れられそうだが、一方で陰でもある。（松本）



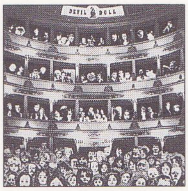
DEUS EX MACHINA
Deus Ex Machina
'93
●
○Kaliphonia KRC 001
◉

デウス・エクス・マッキーナは期待のニュー・グループだ。ファーストでも光るものを感じたが、このセカンドでは彼等は大きく飛躍した。彼等のサウンドは、'80年以降のニュー・グループ達に多い無国籍でひよわなイメージがなく、イタリア的で、時としてバレット・デイ・ブロンゾのような攻撃的で力強いパッセージも聴くことができる。サックスが導入されている為か、アルティ・エ・メスティエリ的なイメージもあり、往年のイタリアン・ロックを想起させる音だ。そして、似ているといってもコピー的なものではなく、確かなオリジナリティを持っている。これをリリースしたカリフォニア・レーベルは、他にバンコ的なC.A.P.等もあり、'90年代のイタリアでは注目の自主レーベルである。（山崎）



DEVIL DOLL
The Girl Who Was Death
?
●Hurdy Gurdy ONE
○
◉

謎の人物Mr.DOCTOR率いるスロヴェニア（旧ユーゴ）出身のDEVIL DOLLの記念すべき1stアルバム。映画のナレーションを思わせるMr.DOCTORのVocal（語り?）を中心に、混成合唱やヴァイオリンをまじえた彼らならではの重厚な壮大な楽曲は、すでにこの時点で圧倒的な完成度を誇っている。いったいどこをどうやったらこういうアルバムが作れるのだろうか?'80年代の後半にこれだけのアルバムを作れる音楽家がいることも含め、彼らに関する全ての事が全く持って信じ難いとしか言い様が無い。このアルバムは後のアルバム以上に、いわゆるプログレッシブ・ロック色が強く、泣きのギターや技巧的なヴァイオリン・ソロまで出てきて、彼らのアルバムの中では親しみ易いものとなっている。（渡部　暁）



DEVIL DOLL
Eliogabalus
'90
●Hurdy Gurdy SIX
○Hurdy Gurdy HG Number Six
◉

'90年に突如我が国に紹介され、ファンを驚愕させた彼らの2ndアルバム。前作においてさえ、驚異的な完成度を誇っていた彼らであるが、このアルバムではA・B面各1曲と言う構成が物語るように、混成合唱・オーケストラをめくるめく配置した予想もつかない場面展開を始め、さらに複雑怪奇でかつヨーロッパの歴史の深部を垣間見させるような重厚な音楽性を発展させている。しかも、それ以上にMr.Doctorの鬼気迫るような語りには戦慄さえも感じてしまう。恐ろしいアルバムだ。発売当初は「10年に1枚出るか出ないかの奇跡のアルバム」と言われていたこのアルバムであるが、実際は「まだまだ序章」であったと言う事実を2年後に発表された3rdアルバム「Sacrilegium」で我々は知ることになる。（渡部）



DEVIL DOLL
Sacrilegium

'92
●Hurdy Gurdy HG-7
○Hurdy Gurdy HG-7
◉

スロヴェニア出身のグループ「デヴィル・ドール」は「TEH GIRL WHO WAS DEATH」「ELIOGABALUS」「SACRILEGIUM」の3枚のアルバムを現在までにリリースしている。この内、1stは非常にレアー、又、2ndはファンクラヴ・オンリーの見開きジャケットのLPエディションがある。回を重ねるごとに洗練されてくる彼等のサウンドは、シアトリカル・ロックの頂点に位置するもので、Mr. DOCTORなる全てのコンセプト、作詞、作曲、ヴォーカルを担当する人物を中心とした、強固なオリジナリティーを感じる。いわゆるシンフォ系のインタリアン・ロックとは隔絶したところで誕生した彼等のサウンドはその比類なきアイデンティティで'80年以降のシーンの中で輝きを放っている。

（山崎）



(I) DIK DIK
I Dik Dik

'67
●Ricordi MRP 9035
○
◉

'64年頃に3人組としてフラスカーティで活動開始。ただしこのグループについては不明で、分裂してディク・ディクとスクァーリ66になった可能性が強い。シングル・デビューはスクァーリ66が2年遅いので、スクァーリという別バンドがディク・ディクの前身なのかも知れない。デビュー当時は、カヴァー曲が中心でLen Barryの〝1-2-3〞が最初のシングル曲。2枚目のシングルはMamas & Papasの〝California Dreamin〞で大ヒットなり、翌'67年に当ファースト・アルバムを発表した。シングル集めの内容で、カーペンターズやプロコル・ハルム、フラワー・ポット・メンらのヒット曲などが聴ける。また、モゴールとルチオ・バッティスティの曲を最も早くから歌っていたのも彼らである。

（HIRO TANAKA）



(I) DIK DIK
Suite Per Una Donna Assolutamente Relativa

'72
●Ricordi SMRL 6095
○
◉キング KICP 2218

ポップス・バンド、ディク・ディクも当時のプログレッシヴ・ロック・ブームの影響を受けてか、この異色作を製作した。音の古さは否めないものの、トータル・コンセプト作になっていて、持ち味のポップなメロディを活かしながら、メロトロンやムーグ/ストリングス・シンセサイザー等をふんだん使用したシンフォニックなサウンドを聴かせてくれる。場面展開しては壮大に、時にはかなげにイメージを託すかのように、どれ一つをとっても叙情味溢れ、また印象に残るメロディがある。後にフンカ・ムンカやマクソフォーネの中心人物2人が参加した「Volando」や、元トリップのジョー・ヴェスコヴィを迎えた「Amico」等話題も多いが、一際'70年代初期に彩られたこの意欲作には繊細で瑞々しい息吹きがある。

（松本）



(I) DIK DIK
Storie E Confessini

'73
●Ricordi SMRL 6103
○
◉

「Suite Per Una Donna Assolutamente Relativa」に続いて発表されたアルバム。前作で聴くことの出来たシンフォニックなサウンドが彼ら本来のものでないことを痛感させる内容である。メロディアスなオーケストラやギター、キーボード等をバックに優しく情感を込めて歌い上げる手法はアルンニ・デル・ソーレやイル・ジャルディーノ・ディ・センプリーチらと共通するものである。その種の作品としてはかなり出来の良いもので、見方を変えればディク・ディクの最高傑作と言えるかもしれない。イタリアの作品以外では決して感じることのない切ないまでの叙情がある。それにしても、彼らのようなグループにまでシンフォニックな作品を作らせてしまったロック・プログレッシヴ・イタリアーナの影響力は凄まじい。

（賀川）

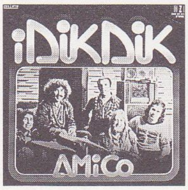


(I) DIK DIK
Volando

'76
●RifiDIK-ST 47001/A
○
◉キング KICP 2219

ディク・ディクの⑤作目。内容は彼ら得意の最良質のポップでタイトル曲はロッド・スチァートの〝セイリング〞のカバーであったりもするが、内容よりも資料的価置の方が高いように思う。まず本作より正式にグループに参加したロベルト・チャルロット。(「ある女性に捧げる愛の形」にも参加しているという説もある。)実はこの人物、フンカ・ムンカその人なのである。内容から察するにこの作品に於ける彼の役割は非常に高いと思われる。さらにロベルト・ジュリアーニとアルベルト・ラヴァシーニのゲスト参加。共にマクソフォーネの中心人物である。この3人の影響力、そしてミュージシャンとしてのレベルの高さ。これらをはっきり聞き取ることができる。

（土川）



(I) DIK DIK
Amico

'78
●Rifi D%K ST 47002
○
◉

「Volando」に続く6作目。前作がイタリアン・メロディを歌に集約した一つの好サンプルだけに、少々かすみがちなことは否めないこのアルバムである。やはりマクソフォーネ陣のサポートだったのだろうか。「洗濯女」にしてもそうだったが、何かとサポートが必要なバンドだ。前作のいい部分を継ぐ〝Un Giorno Cent'anni〞等の曲もある一方で、オルメで言えば「Verita Nascoste」のようなアメリカに楽天かぶれしたかのような〝Flowers Freedom And Love〞等の曲もあって、どこかはずしている。更にはリズムがやけにせこい割にヘヴィ・メタ定型ヴォーカル・ラインを型押ししたロック?ナンバーが出てきたりと解せない。全10曲中3曲を除けば前作の延長作になる。実は中々の好作なのである。

（松本）



DRUPI
Drupi
'81
●Fonit Cetra LPX 97
○
◉

ドゥルピこと ジャンピエロ・アメルリは'47年生まれで'60年代から活動している息の長い歌手の一人で、現在でも〝サンレモ音楽祭〞の常連でありイタリアきってのヒット・メーカーとして君臨し続けている。そのドゥルピが同じレーベル仲間であるNEW TROLLSの全面的バック・アップを受けて'81年に発表したアルバムが本作である。トロルスはちょうど後期大作アルバム「FS」を制作中だったが、どうやら平行して作られた様で同じスタジオで又プロデューサーも同じジャンフランコ・ロンバルディである。10曲中8曲がTROLLSによる書き下ろしだが、「FS」でも大活躍だったジャンニ・ベッレーノによるバラード〝LA MIA CANZONE AL VENTO〞はTROLLSのどのアルバムにも見出だすことの出来ない程の秀曲である。（片山）



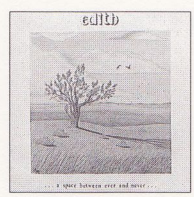
DUELLO MADRE
Duello Madre
'73
●Produttoriassociati PA/LP 47
○Mellow MMP 180
◉

IL VOLOのベーシストとして活躍したボブ・カレロ（VOLOの1stアルバムには〝OLOV〞としかクレジットされていない）が在籍したことで知られるグループDuello Madreは73年に唯一のアルバムを発表している。彼はバッティスティのミュージシャンとしても有名だが、72年には本グループのギタリスト、マルコと共にOssage Tribeなるバンドに籍を置き、やや実験的な音楽をプレイしていた。本作ではジャズロックを披露しているが残念ながらプログレファンを仰天させる様な作とは行かない。G.P.Reverberiが2曲程キーボードで参加しているが全体的にもう少しアクセントを付けたかったところだろう。リズム陣が割としっかりしている為、演奏自体は締まって聞こえるが、管楽器系のソロが幾分迫力不足のように感じる。（江田）



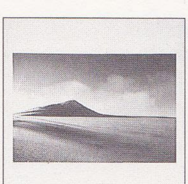
E. A. POE
Generazioni(storia di sempre)
'74
●Kansas 5300 503 A
○Vinyl Magic VM 027
◉

キーボードを中心とするグループ。グループ名からゴシック・ロマンス的なイメージをいだきがちだが、音のほうに暗さはなく、どちらかというとブリティッシュナイズされた軽快なプログレッシヴ・ロックを聴かせてくれる。タイプ的にはレ・オルメに近く、一種なごやかさもかねそなえたヴォーカルもここちよい。特に派手さがない為か、イタリアの超一流グループ――例えばマクソフォーネやクェラ・ベッキア・ロッカンダ、ピエロ・リュネール、オパス・アヴァントラ等とは比較し難しいが、ルオヴォ・ディ・コロンボ、オディッセアあたりのグループと同様の評価を与えることができるだろう。（山崎）



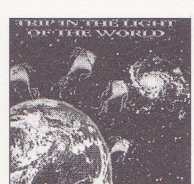
EDITH
A Space Between Ever And Never
'89
●Edith Music ETH 001
○Progressive Records PRO 003
◉

カタニア出身の4人組（キーボードはゲスト）のデビュー・アルバムで、この頃の常で自主制作。EZRA WINSTONと比較されることの多いグループなのだが、そこまでのクォリティは無いように思う。というのはテクニックに多少の差が有るからで、正直言ってあくまで自主制作レベルである。曲の方は清涼感のあるシンフォニック・タイプで、ジャケットに書かれているイラストのイメージそのままという感じ。英語による歌詞で、イタリアっぽさというのは感じられない。若々しい瑞々しさは表面に出ているので、これにテクニックが付いて行けば、それなりの評価は出来ると思う。特にややハードな展開を見せる曲のほうが、魅力的であり、好感が持てる。CDでは1曲追加しているのだが、これは音がチープでデモテープかな？（津田）



EDITH
Ice
'91
●
○Edith Music ETH 004
◉

約2年間のインターヴァルを経て届けられた2作目。正式にキーボードが加入して5人編成になっている（ファーストとは別人）。これも自主制作であり、レーベルと契約できない事が全てを物語っている。つまり、これも又自主制作レベルの作品と言わざるを得ない。さらに、ここへ来て前作で、曲作りに荷担していたキーボード奏者が変わっていて、それが良い結果になっていないのである。清涼感をベースにしているのは同じだが、アレンジや曲に変化が乏しい感じが否めない。ちゃんとしたプロデュースが施されれば、その清涼感や透明度、適度に哀愁のあるメロディが活かせるのだろうが、彼らは自分達でプロデュースする方向を選んだのだろう。あまりにも趣味的で、もったいない気がする。ジャケットのセンスはいいんだけどなぁ。（津田）



EGOBAND
Trip In The Light Of The World
'91
●
○Musea FGBG 4053.AR
◉

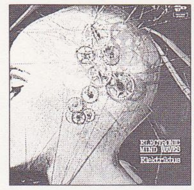
仏Museaレーベルよりのリリース。本作がデヴュー作と思われるが、先にLPリリースされていた可能性もある。音の基本路線としては、いわゆるハード・プログレッシヴ・サウンド。重厚なシンセサイザーとオルガンのバッキング、非常にメタル色の強いギター・ソロ、粗野なダミ声でシャウトするヴォーカル。録音/エンジニアリングの素人臭さと相まって、かなり野暮ったい演奏に聴こえる。リフとヴォーカルだけの凡庸なハード・ロック・バンドがときおり見せるドラマチックなアレンジの大曲。そんなテイストの曲だけを集めた印象といえるかもしれない。ストレートなパワーを評価すべきか否か。ギターとドラムは何かのパロディかと思えるほどにHR/HMのパターン踏襲色が強い。（ミワ）



ELECTRIC FRANKENSTEIN
Electric Frankenstin

'76
●Cramps 5202 201
○Artis ARCD 015
◉

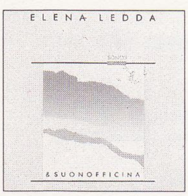
ユーロ・ロック・ファンよりも、むしろサイケデリック・ファンに人気のあるエレクトリック・フランケンシュタイン唯一のアルバム。「何が俺をいらつかせるのだ?」と言っているフランケンシュタインのジャケットから(レーベルカラーも手伝って)ハードなプロテストソングを予想させるが、意外と内容はメロディアスですっきりしたもの。粘っこいイタリア臭さはなく、むしろブリティッシュ・ロックを意識した様な、この時期のイタリアには珍しい音作りになっている。若干ミステリアスな雰囲気を漂わせながら、ハードなコード・ストロークや、ファズをかけた荒々しいギター、メロディアスなシンセを絡めた、メリハリの利いたストレートな演奏が聴ける。なお、歌詞はすべて英語である。 (須藤)



ELEKTRIKTUS
Electronic Mind Waves

'76
●PDU PLD. A 6050
○
◉

エレクトリクトゥスというのが、個人のユニットの名称なのか、あるいはグループ名なのかはっきりしない。76年に、前衛的な作品を積極的にプロモートしていたPDUレーベルからリリースされた彼等(彼)の唯一の作品である。当時、イタリア盤としても数多く紹介されていたドイツのグループ達、タンジェリン、シュルツェ、クラスター、クラフトヴェルク等の影響を受けて創られたことが想像できるエレクトロニクス・ミュージックである。なめらかな、耳あたりの良いサウンドは、ドイツのエレクトロニクス・ミュージックを消化した上での彼等の生んだ一つの帰結なのであろう。洗練されたイタリア人の感覚を反映した秀れた作品である。カヴァー・ワークも特筆に値する素晴らしい作品。 (山崎)



ELENA LEDDA & SUONOFFICINA
Sonos

'89
●Biber 66390
○Biber 66391
◉キング KICP 2088

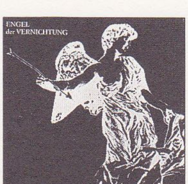
ドイツのニューエイジ系のレーベル、ビーバーから2枚の作品を発表しているサルジニア島のグループ。トラディショナルな要素とフュージョン的要素が一体化したサウンドは確かにニューエイジ的と言えない事も無いが、グループの個性は超強力な女性ヴォーカリスト、エレーナ・レッダによって決定されている。ビブラートをふんだんに効かせた気高く美しいその歌声、とにかくインパクトが強い。清涼感と妖気が渦を巻く幻想空間を鮮やかに演出してくれる。おそらく現地プレスのLPが出ていると想像されるがまだ見たことは無い。なお、この2ndCDは、1stに収録された18分の大曲を含む2曲がボーナス・トラックとして収録されている。1stでエレーナが歌っているのはこの2曲のみである。 (川辺)



ENEIDE
Uomini Umili Popoli Liberi

'91('72年録音)
●private press L.G.P. 101
○
◉

往年の名盤再発が一段落した'90年代に入ってからは未発音源の発掘が盛んだが、その中で突如リリースされたのがこのエネイドの'72年に制作されたおそらく唯一の作品である。昨今の発掘作品はその出来に大きな差があるがこれはその中でも往年のイタリアンロックのサウンドと熱気を感じさせてくれるものになっている。アルバムはコンセプト作品のようでそれを当時の名グループ達同様唸るようなハモンドやムーグとその上のフルートや熱唱するボーカル、またこれぞイタリアとでもいうべきリリカルでアコースティックな部分によって奏でられている。まさに名盤に慣れ親しんだものへの遅れてきた贈り物とでも言いたい作品である。ちなみに限定300枚の1stプレスはダブルジャケットになっている。 (島村)



ENGEL DER VERNICHTUNG
Angeli In Polvere

'90
●Angel MF 006
○
◉

「破滅の天使」という名の彼らがそのバンド名のイタリア語訳を題名に冠したのがこのアルバム。残念ながらバンドに関する詳細は殆ど不明で分かっている事といえばこれが彼らのセカンドであるらしいということやインナーに記載されているメンバーについてのこと、またリリースがエツラ・ウィンストンの2ndと1番違いであるという程度である。しかしそのサウンドは一部にニューウェイブ的な感じはあるものの全体的にはアコースティックを主体とし弦楽四重奏やコーラスなども取り入れた繊細で叙情的なものである。中でも女性ボーカルの曲はオパス・アヴァントラさえも彷彿する程の素晴らしさでイタリアの懐の広さや深さを感じさせる。なお天使を題材にしたアートを載せたブックレットが付録している。 (島村)



ENSEMBLE HAVADIA
Ensemble Havadia

?
●L'orchestra OLPS 55017
○
◉

トラッド/民族音楽をチェンバー・ロック的に昇華させた作品と言ってしまえば簡単だが、録音時期を考えると、恐るべきオリジナリティだ。バルカン半島の民族音楽からの影響をリズムや音程感に感じるが、単にカヴァーに終わっていないところは好感が持てる。編曲能力も高く、器楽編曲だけでなく、合唱編曲も凝っている(一部ブルガリアン・ヴォイス的アレンジあり)。7/4と3/4拍子のクロス・リズムのトップ・ナンバー(及びタイトルの付け方)は秀逸。欲を言えば、このクラスのインパクトを持つ楽曲がもう何曲か欲しかった。個人的にはトップ・ナンバーを抜かすとB面の国籍不明な感じの方が好きだ。本作を含むロルケストラ・レーベルのCD化を強く希望する。 (Chihiro S.)



ENSEMBLE HAVADIÀ
Specchi

'82
●L'orchestra M.I.E.P5001
○
◉

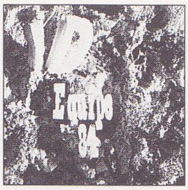
男女のボーカリストを含む9人組のアンサンブル、その編成やメンバー写真からかなり演劇的な事を行っていたと推測される。「鏡」と題された彼らの2枚目の作品は、'82年に行われた同名のシアター・パフォーマンスからの曲が収録されている。45回転のミニ・LPであるため収録時間が短いのが難点だが、内容は文句無しである。この時期各国で次々とリリースされたレコメン系傑作群にひけを取らぬ、変幻自在の素晴らしいアンサンブルを聞かせてくれる。A面は雑多な小曲集、B面は必殺の大曲を収録。チープでありながら優雅、ユーモラスなのにドシリアスなその世界は驚くほど広範囲な見境無しの音楽視野に裏打ちされている。その後、レーベルごとまとめて消息を断ち、以降長く無視され続けて現在にいたる。（川辺）



EQUIPE 84
Equipe 84

'65
●Vedette VPA 8051
○
◉

最も古くから活動していたビート・グループ。出身地のモデナは裕福な街で、'60年代初頭にはすでに多くのアマチュア・バンドが存在していたらしい。この街のバール〝GRAND' ITALIA〞がそういった連中の溜り場になっていて、その様子は後にアルバム化されている。今では有名なカンタウトーレのフランチェスコ・グッチーニもその一人で、学生仲間のアドルフォ・ソッリャーニと組んでブルー・カップスを結成した。グッチーニはソロとして独立したが仲間が増えて、エクィプ84が編成された。デビューはカラベルという無名のレーベルで、'64年にモデナのサッカー・チームがセリエAに入ったために、その讃歌として発売された。次のヴェデッテ・レーベルでは8枚のシングルと当アルバムを出し、'64年から'66年まで在籍した。（HIRO）



EQUIPE 84
ID

'72
●Ricordi SMRL 6072
○
◉キング KICP 2391

'60年代後半に〝Equipo 84〞(Vedette : VPA 8051)でアルバム・デビューを飾ったエキペ84。'60年代にはもう1枚アルバムを残しているが、当時はストーンズ・ナンバーを取り入れるなど、今聴く限りでは極く標準的なオールディーズといったところだ。しかし'70年代に入るとポップス・バンドとして着々と力を着け、基本的な路線は維持しながらもプログレッシヴロックとの融合点を模索し始めた。本作は第2期エキペの1作目に当たる。メロトロン、チェンバロ、バイオリン、ハモンド・オルガン等を随所に散りばめ、非常に柔らかな音作りとなっているが、この時点ではまだポップな要素が勝っていると言えそう。なお、後にP.F.M.に加入するFranz Di Cioccioがドラムスでゲスト参加している。



(NUOVA) EQUIPE 84
Casa Mia

'71
●Ricordi SMRL 6086
○
◉

「ID」に続く第2期エキペの2作目。この頃一時期、ドラムスがフランツ・ディ・チョッチョ、キーボードがダリオ・バルダン・ベンボに交替しており、グループ名の頭に「NUOVA」をつけていた。ヌオーボエキペは、かなり多くのシングルを出しておりこのアルバムにもサンレモ入賞曲など含んであるが未収のシングルは数知れない。全12曲だが収録時間は50分を越える。特にB面の数曲では「ID」での実験を基に後の「Sacrificio」や「Dr Jekyll」のB面で見せるポップスの域を超えたプログレッシブなサウンドの雛形を聞くことが出来る。攻撃的なギター、印象的なフルート、メロトロンを含む各種キーボード、この時期のエキペは前向きに明日を見据えている。（木下）



EQUIPE 84
Dr.Jekyll, Mr.Hyde

'73
●Ariston AR/LP12107
○
◉

アリストンに移籍したエキペ84の同レーベルからの第1弾。「ID（Ricordi SMRL6072）'70」でプログレッシヴ・ロックとしての側面も見せた彼らであるが、アルバム・タイトルが暗示するよいに、本作品もポップスとプログレッシグ・ロックの2面性を持っている。A面では男女のボーカルを中心に、ストリングスを効果的に用いた軽快なポップスを聴くことができるが、一転、B面はインスト重視のプログレッシヴ・ロックとなる。ややジャズィなサックスや乗りの良いギターのソロをメインにしてキーボード、パーカッション等が厚みを加えた演奏は非常に斬新かつ意欲的なものと言える。「ID」「Sacrificio（Ariston AR/LP12134）'74」とともに彼らの代表である。（賀川）



EQUIPE 84
Sacrificio

'74
●Ariston AR/LP 12134
○
◉

'80年前後、イタリアン・ロックの叙情性に魅せられたリスナー達が、まだ日本では情報量が豊かではなかった歌物の世界に触手を伸ばし始めたが、シンフォニック系プログレと共通の美意識を持った良質な作品群は違和感無しに受け入れられていった。彼らのアルバムの中で最もプログレ色の濃い本作などはポップス作品と受け止める向きは少なかったが、結果的にロックとポップスとの橋渡し役を担ったのは彼らとDIK DIKであった。'70年代に入って質の良い作品を次々に発表したエキペは本作で頂点を極めることになる。ストリングス、メロトロン、キーボード系の使い方もポップスの域を遥かに超えた非常に積極的なものとなっている。更にacギターやフルートの優しい音色が加わり、典型的なイタリアのカラーが現出される。

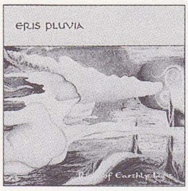
（江田）

E



ERA DI ACQUARIO
Antologia
'73
●RCA PSL 10565
○
◉

IL VOLOの初代ベーシストとなるミケーレ・セファー率いるトリオEra di Acquarioは'73年に唯一のアルバムをリリースしている。キーボードレスの上、地味なカヴァーワークも手伝ってか、廃盤ブームをよそに人気の方は今一つだったが、確かにプログレファンにアピールするものには欠ける。A、B面各5曲ずつで、肩の凝らない小品集といったイメージだ。acギターとフルートの澄んだ音色が中心になるが、殊更叙情的なパートが多い訳でもなく、もう少しメリハリが欲しかったところだろう。みずみずしさは十分に保たれている為、メロトロンを導入しても面白かったろうが、ヘヴィなプログレッヴロックを聴き続けた後、リラックスムードで締めくくるには、この程度のサウンドが適しているのかもしれない。（江田）



ERIS PLUVIA
Rings Of Earthly Light
'91
●
○Musea FGBG 4048 AR
◉

'80年代後半以降、プログレッシヴ・ロック・ファンによるレコード、CDの流通のネットワークが世界規模で確立され、イタリアのバンドもこれに乗って次々とアルバム製作を始めた。そうした一つがエリス・プルヴィアである。彼らはアコースティック・ギターを全編に散らし、フルート、リコーダー、サックスがリードを取るという一味違った編成で目をひいた。しかしそれにも増して新鮮だったのは、繊細なまでの音色の気配り、そして編み出された流れのしなやかさだった。随所に初期ジェネシスふうのリズムやP.ハミルふうのうっすらとした陰り、A.フィリップスあたりのアコースティック色が見えるものの、これらが既に消化された上でのオリジナリティが強く感じられる。近時希に見るセンスのひかる一作。（松本）



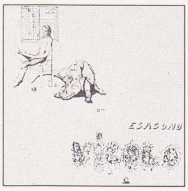
ERRATA CORRIGE
Siegfried. Il Drago E Altre Storie
'76
●67：1
○Vinyl Magic VM 001
◉

76年の自主製作。イタリア人コレクターの話によるとLPは200枚の限定プレスだそうだ。事実とすれば、市場を見る限り、その1割以上が日本に流れて来ていることになる。内容は、適度な甘さとイタリアン・ロック特有の繊細さを十分に兼ね備えた良質なもので、ファンにとっては気になる1枚だ。ただ72、3年頃の名作群の様な爆発力には欠ける。フルート、ピアノ、ac ギターの澄み切ったサウンドを核として、全面にわたりほのぼのとした手作りの温かさがにじみ出た作りになっている。派手さは無いが、キーボード類も適宜散りばめられ、時に顔を出すチェロが素朴な雰囲気を作り上げている。叙情派というよりも清澄派といった印象が強い。なお、A 面は全面費やしての組曲になっている。（江田）



ERRATA CORRIGE
Mappamondo
'92
●
○Mellow MMP 117
◉

'76年の自主制作と思われる作品の存在が知られるバンド。2ndに相当する本作には、'75年に書かれていた楽曲（Parte A）と'77年にすでに録音されていた楽曲（Parte B）が収録されており、Aのほうは完全な新録、Bのほうはリミックスされている。インスト中心のAでは、非常に奥行きのあるアコースティック・アンサンブルをからめた哀愁たっぷりのシンフォニック・チューンが展開していく。完全に曲想が異なるBではポップなヴォーカル曲が並ぶが、こちらも出来はよい。なお、Bに参加しているアルトゥーロ・ヴィターレは、アルティ・エ・メスティエリのサックス奏者も同一人物であると断定しているように思われる。'70年代のキワモノ発掘的な文脈で語ることをよしとしない、'90年代の傑出した一枚である。（ミワ）



ESAGONO
Vicolo
'76 or '78
●MU UM101
○
◉

昔このアルバムの音を聴いた時、2nd〜3rdのアルティ・エ・メスティエリぽいと思い手に入れた記憶がある。今回クレジットに目をこらしてびっくり仰天。何とアルティのメンバーが4人も参加しているのだ。1曲だけ参加のジジ・ヴェネゴーニ（G）を入れれば5人である。そのメンバーとはマルコ・ガレージ（B）、アルトゥロ・ヴィターレ（Sax）、マルコ・チミーノ（Key, Flute, Cello）、クラウディオ・モンタフィア（G. Flute）。前2者はアルティの1st〜3rdのメンバー。後2者は3rdの中心メンバー。プロデュースは元エラータ・コリージュのメンバーでもあるKeyのマルコ・チミーノ。エンジニアはヴェネゴーニ。A①のタイトル曲は、アルティ3rdのA②と同曲。これでドラムがキリコなら完全にアルティだ。（城元）



E・S・E
E・S・E
'82
●E.S.E 001
○
◉

'82年にローマで人知れずリリースされていたE・S・Eと名乗るグループの多分唯一の作品。プロデュースからジャケット・デザインに至る迄で全んど自力で成し遂げたこの自主制作盤を作り上げたのは、キーボード、ベースのChees York、ドラムスとギターのMoore James、ギターのJoule Zartmannの3人。サウンドはサイケデリックなプログレッシブ・ロックあるいはフォークとでも表現したら良いだろうか。No Strangeあたりに近い音だと思う。時に牧歌的に、時に投げ遣に歌われる英詩のボーカルと彩を添えるキーボードそして浮遊感のあるギターが溶け合うサウンドには不思議な心地良さと空虚さが混在している。尚B③〝Tehran City〟での効果音の使用法は抜群である。（鈴木伸一）



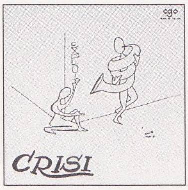
ETNA
Etna
'75
●CATOCA : CTL 1-1002
○
◉

有名なシチリアのエトナ火山をグループ名に冠した彼らはイタリア・ジャズロック界屈指のテクニシャン集団である。その高度な演奏技量はGoblin(Marangolo兄弟)、L'Uovo Di Colombo(ベースのE.Volpini)等を聴けば分かることだ。全編インストで、イタリアでは類を見ない本格派ジャズロックと言えるが、3rd以降のArti＋Mestieriの様に小手先の技術ばかりが先行する訳でもなく、迫力は十分。ホーンの導入は無く、ギターワークとelピアノが中心となる。ロック色が濃く、非常にアグレッシヴなフュージョンサウンドとでも言えば適切だろうか。なお、彼らは72年にFleaと名乗り1枚のアルバムを発表しているが、その内容は本作とは180度異なるハードロックで、かなり荒々しいものであった。 (江田)



EUROPE
Europe
'82
●Buble BLU 19609
○
◉

'80年代前半のイタリア・プログレッシヴ・ロックの中でレコード・デビュウをはたせたのはヒューマン・イクスプレッションとこのヨウロッパである。さらにこのヨウロッパはイギリス盤もリリースされるというめぐまれたグループである。プログレ＝ハード路線のグループであり、その点完全なプログレッシヴ・ファンには多少なじまぬ作品かもしれないが、安定したテクニックでおしまくる胸のすくサウンドは正にイタリアである。イエスからの影響を随所に感じるが、おそらくメンバー間で、プログレ路線とハード路線に好みが別れているのだろう。しかしその融合がここでは非常に良い方向にむかっており、一聴には値するアルバムに仕上げられている。グループの核となるのはRDMのギターだったS.Ursoである。 (山崎)



EXPLOIT
Crisi
'72
●CGO FC 1008
○
◉

キーボード・トリオ、エクスプロイトはCGOレーベルにLP1枚とシングル3枚を残している。見開きジャケながら表、裏、内ジャケとも頼りない線画が描かれており、自主製作との噂があるが真偽の程ははっきりしない。ただしプレス枚数はさ程多くない様だ。内容は典型的なオルガン・ロックで随時ピアノを併用するが電子系の音は聴かれない。英国的な泥臭いイメージも併せ持ち、プログレとしては若干地味な印象は免れないが、オルガン系の音が好きな人であれば十分に傾聴出来る作品である。曲構成はA面が3パートに分けたタイトルで全て費やし、B面は少々ポップな味付けをした6曲の小品集。フェイドアウトされているB④〝Anima Nuda〟はシングル盤で完全収録されている。 (江田)



EZRA WINSTON
Myth Of The Chrysavides
'88
●Ezra Works DWLP 01
○
◉

このアルバムは、イタリア'80年代前半の引きとり手のなかった自主製作テープの時期から遂に脱した1枚として、ファンの間に記憶されていることと思う。現在に続くイタリアン・ロックの復調、その記念すべき1作でもある。ローマ出身の彼等も結成は'82～'83年に遡る。ようやくの幸福なリリースだったことだろう。自主製作ゆえのプロデュース/録音の甘さ等未熟な部分も少なくないが、トータルなイメージでシンフォニックにアコースティックに、様々に盛り込み、しかもリスナーのイメージを重ねられるような余白をとっての作風に、とても好感が持てる。次作の構築性はまだ出ていなくとも逆にこの余白がカラーをつくったと思う。フルートや生ギターの細やかな音使いも生きる。雰囲気を大切にした作風だ。 (松本)



EZRA WINSTON
Ancient Afternoon
'90
●Angel MF 005
○
◉

'90年にリリースされたこのエツラ・ウィンストのセカンドは、'80年代以降のイタリアからのニュー・アルバム群の中で最も重要なものの1つに数えられる。この時代に出てきた作品は、ポンプ系の無国籍型サウンドが多いが、この作品は地中海音楽のエッセンスをちりばめ、イタリアらしいアイデンティティーをシンフォニック・ロックの中へと注入することに成功したものである。全体的にアコースティックなイメージの強いアルバムで、加えて室内楽団も参加しており、シリアスな側面もある。何か、イタリアの太陽の下の陰影を表現しているとでもいうような印象で、シーンに明るい光を投げかけてくれた。 (山崎)



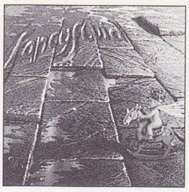
(LA) FAMIGLIA DEGLI ORTEGA
La Famiglia Degli Ortega
'73
●Carosello CLN 25029
○
◉

ポップなグループやシンガーを多く擁するCaroselloレーベルの中にあって、とても美しく思わせ振りなジャケットに包まれたこのアルバムは、ほのかにプログレッシヴの香りを漂わせた好作品である。男女二人のボーカリストを配しトータルなコンセプトに支えられたそのサウンドは、とてもイタリア然とした美しさを湛えている。取り分けA①、②B②、④あたりは白眉の出来である。少なくともラブ・ロック・ファンは決して聴いて損のない音だと思う。他にシングルが有り〝Sogno Di Una Casa〟はLP未収(B面は〝Awamalaia〟)。その他は不明であるが、内ジャケの写真を見る限りでは10名も写っており、かなり大所帯のグループだったようだ。 (鈴木伸一)



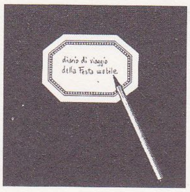
FANCY FLUID
Weak Waving
'90
●Musea FGBG 2034
○Musea FGBG 4036.AR
◉

カラフルでリリカルなジャケット・カヴァーが印象的な5人編成によるムゼアからのデヴュー作。CD化の際に2曲、追加収録されている。ムゼアからは、この後も続々イタリアン・シンフォニック・ロックのグループの作品がリリースされるのだが、まさにムゼア・カラーとでも言うべき一定の形が存在するように思える。そしてこのアルバムこそ、その中心的な存在ではないか?中期ジェネシス的なサウンドをメインに程よいポップさとファンタジックさを兼ね備えている。テクニック的にもまあまあで、イタリアっぽいところは、ほとんど無く、インターナショナル指向と言うよりもムゼアのサウンドなのである。そして大事なことはジャケットがその音世界を忠実に現していることで、買う人の目安になるだろう。 (津田)



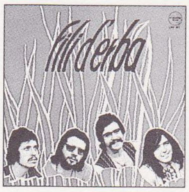
FANCY FLUID
King's Journey
'92
●
○Musea FGBG 4065.AR
◉

2年ぶりのセカンド・アルバムで、今回は多彩なゲスト・ミュージシャンを迎えて制作されたコンセプト・アルバムである。ヴァイオリンやサックスなどを使って、曲調に幅を持たせ「これがシンフォニック・ロッグだ!」と言わんだかりの展開を見せるのだが、何故か曲がどれも尻切れトンボなのだ。様々なアイデアとありあまるストックを誇示せんが為のような構成に少々とまどう。しかし、1曲目の冒頭から導かれるのは、軽快で心地よい良質なシンフォニック・ロックで、ムゼア・サウンドの中核としての貫禄は保っていると思う。ゲストや生楽器の使い方を見ても、アンサンブルを充分に活かせるだけのアレンジの素養が有りそうなので、グループにこだわらずにいろいろな方向にトライしてみてほしい。 (津田)



FESTA MOBILE
Diario Di Viaggio Della Festa Mobile
'73
●RCA DPSL 10605
○BMG Ariola ND 74120
◉

RCAレーベル系のセッションマン達により結成されたというフェスタ・モビーレ。このグループのサウンドの根幹を成すのはピアニストで、安定した、かつ正確無比のプレイは世界的にみても他に例を見ない程のテクニシャンである。他のメンバー達も安定したテクニックを持ち、軽快なプログレッシヴ・ロックを聴かせてくれる。同年、RCAからリリースされた「Jacopone(RCA DPSL 10608)」というロック・オペラ作品のバックを担当(フェスタ的な曲はなく、あくまでバック・バンドとしての演奏)し解散。その後、キーボーダーを含むメンバーは「Il Baricentro」というグループを結成し、2枚のアルバムと1枚の12インチを発表した。ややフュージョン色があるが、2枚のアルバムはやはり素晴らしい出来だ。 (山崎)



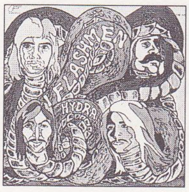
FILI D'ERBA
Fili D'erba
'72
●Italdisc LPD 197
○
◉

'72年にリリースされたFLIL D'ERBAの唯一のアルバムと思われる。メンバーはFrank Del Giudice(b、vo)、Luigi Liguori(g)、Paolo Moderato(kbd、vo)、Jean Pierre Olivas(ds)の4人編成で、メロトロンも3曲使用されている。内容的には、ハモンド・オルガン中心のヘヴィーな曲、イタリアらしい哀愁に満ちたメロトロンを伴ったバラード曲等、バラエティーにとんでいるが、'72年というイタリアン・ロック全盛期に生れ出た作品群と比較するのは難しい。しかし、端正な曲づくりと、優しく暖か味のあるサウンドには好感が持て、このまま忘れ去られては余りにも惜しいグループである。(村上)



(I) FLASHMEN
Cereando La Vita
'70
●Kansas SLP-8
○Vinyl Magic VM 025
◉

セカンドやサード・アルバムが日本では知られているのだが、このデビュー作もなかなか捨て難い魅力を持っている。ジャケットには当時のシーンを偲ばせるサイケデリックなペインティングを施したメンバー4人の写真が使われているのだが、このイメージがぴったしなアルバムである。彼らの特色でもある力強く勢いのあるオルガンのサウンドに引っ張られて幕を開けるのだが、それに絡むハードなギター、さらに追い打ちをかける哀愁のある唄が、ラフながらも独特の調和を見せている。'70年という事からもわかるようにいわゆるプログレのアルバムではないが、当時のイギリス勢と比べても劣らないハード・オルガン・ロックである。後にラヴ・ロック・グループに変身するように曲の作りは良い。 (津田)



FLASHMEN
Hydre
'71
●Kansas LDM 17001
○
◉

ラヴロックグループ、フラッシュメンは'60年代後半にデビュー、当時のシングルには有名なチャイコフスキーの「白鳥の湖」をラヴロック風にアレンジしたものも見受けられた。本作は彼らの2ndアルバム。年代的なものを考えるとまずまずの出来と言えそうだ。オルガン系の音が割と積極的に使われているため、ラヴロックという言葉から受ける〝ぬるま湯〟的なイメージを多少は払拭出来よう。ただ、本来の路線を逸脱しない部分ではかなり楽しめるのだがロック調の長い曲になると今一つ煮え切らず、若干の古めかしさ共々プログレファンには少々物足りないものかも知れない。なおグループは同レーベルに計6枚のアルバムを残している。また、タイトルの〝ヒュドラ〟とはヘラクレスが退治したという水蛇のこと。 (江田)



FLASHMEN
Pensando
'72
●Kansas LDM 17003
○
◉

フラッシュメンの3rdアルバム。彼らが本来得意とするのはいわゆるラヴロックであるが、本作では迫力十分のハードプログレッシヴ・サウンドが楽しめる。元々使用頻度が高かったオルガンに加え、ハードなギターや力強いヴォーカル等を積極的に取り入れ、彼らの作品の中では最もロック色の濃い作りになっている。メロディーライン等に本来の持ち味が見え隠れするが、70年代の熱い息吹とほとばしる躍動感で満たされたサウンドは熱心なファンにとって捨て難いところ。ただ、時に比較の対象とされるJET, JUMBO等の作品よりもスケールは小さいし、手法的にも極くオーソドックス。あくまでも、ラヴロックの延長線上でパワーアップを図った結果、好作品に仕上がった訳で、プログレを意図してのアルバム製作ではないようだ。
（江田）



(I) FLASHMEN
(I) Flashmen
'73
●Kansas LDM 17005
○
◉

結成は'67年というからイタリアでは第一期生に入る。当然、シングル・ヒットを狙っただろうし、その延長に6枚のアルバムが有った事も確かだろう。前作の「Pensando」あたりが最もアルバム指向に傾いた時かもしれない。続くこのアルバムは小粒にそしてポップな面も散見できることから、一つのピークを過ぎた頃の彼等の行先を予見している。ただし、キーボードのトーンなどを聴いていると、数多くの歌物バンドとはやはりどこか違うニュアンスを感じとれる。A②の6分強のナンバー等のそれは、当時のプログレッシヴなバンドに嗅ぐことのできる同じ鋭角さがあって、それは上塗りの覆い隠しに対して逆方向に響く。それにしてもつまらない曲も多い。古臭いビート・ポップスのコピーまがいまで現われる。
（松本）



(I) FLASHMEN
Sempre E Solo Lei
'74
●Kansas LDM 17012
○
◉

セピアがかった赤と壁絵を思わせる図が、イタリアらしく、それも片田舎を思わせる質感だ。ジャケットの落ち着きは、しかしA面2曲目までとB面の最後のナンバーあたりでなくなってしまう。前作と似たり寄ったりの内容だ。それら3曲での歌、キーボードを中心にした広がりと清涼感のある曲想は、しみじみとしたものがあって、このアルバムのポイントなのだが、あとがきつい。もともとビート・ポップスの側面を持っているバンドだから当然とはしても、少々スタイルの古さと煮え切りのなさから、中途半端に思えてしまう。長く続いているバンドにしては、曲の硬さがとれないバンドだ。次作に期待。（松本）



(I) FLASHMEN
(I) Flashmen
'74
●Kansas 5300 501
○
◉

フラッシュメン、6作目の最後のアルバム。最後にして粒ぞろい。歌物バンドとしての彼等の面がうまくまとまったアルバムとなった。2～3曲にポップな面が出ているものの、他の曲のメロディアスな曲調で許せるだろう。未だにドラムは荒削りで、ヴォーカルのべたつきも好き嫌いをわけるタイプだとしても、このアルバムは彼等らしく、それもユーロ・ロック・ファンが延長していった先に手が届く歌物ではある。フルートの控えめなサポートも落ち着いた曲調には効果があがっている。クレモナのバンド、フラッシュメンはとうとうここに落ち着いた、といった気さえする。そうは言っても、これ以後もレーベルをかわってシングルをリリースした。
（松本）



FLEA
Topi O Uomini
'72
●Fonit Cetra LPQ 09070
○Fonit Cetra CDM 2030
◉

ETNAの前身バンドFLEAは'72年に唯一のアルバムを発表しているが、全く同じメンバーによる演奏は思えない程、両者のサウンドには隔たりがある。ETNAは技巧派ジャズロック・バンドとの印象が強かったが、本作ではヘヴィなギタープレイを満載、ドラムソロまで盛り込んだエネルギッシュなハードロックが聴かれる。荒々しくかなりアーシーな音作りは、当時イタリアのロッカー達も憧れたであろうブリティッシュ・ハードのスタイルで、郷愁めいたものとは一切無縁である上、オルガンレスのためのプログレファンが聴きこなすのは若干キツイ感じだ。なお、Etnaとして再結成されるまで各メンバーはGoblin, L'Uovo Di Golombo等で独自の演奏活動を行うことになる。
（江田）



FLEA ON THE HONEY
Flea On The Honey
'71
●RCA Delta ZSLD 55026
○
◉

L'UOVO DI COLOMBOのメンツのいるバンド。DeltaはRCA傘下なのでエジソンが再発出すんじゃないかと冷や汗こいた一枚。全曲英語で唄われるものの殆んどの曲がシングルカット出来そうな程メロディアスであったりするので精力絶倫である。泣きの曲のみオルガン入。変クツな展開をしないので好感度も抜群。聴かせどころではリズム隊がここぞとばかり目立とうと根性の入ったことをしでかす。到るところに若さとか青くささが見え隠れして殆んど尿意をもよおしながらも必死こいてこらえている若い娘を見るような愛くるしさを覚える。A①、A④、B①、B③なんかもうぐっときちゃいます。FORMULA 3ほどは良くないにしろ、BALLETTOの1stとかTEOLEMIよりは遥かに良い。
（牧野　博）



FLORA FAUNA E CEMENTO
Disamore

'75
●CBS 69114
○
◉

元カマレオンティのギタリスト、マリオ・ラヴェッツィを中心に'70年に結成された。新興のヌメロ・ウノ・レーベルで、フォルムラ・トレと並んでバッティスティとモゴールの共作でヒットを狙った。'70年のデビュー・シングルはサイモンとガーファンクルの〝明日に架ける橋〞のカヴァーで、続くセカンドではフォルムラ・トレも録音した〝Un Papavero〞。'73年にアルバム「Rock」を発表したが、ラヴェッツィがヴォーロ結成のためグループを去り、それ以前に抜けていたチロ・ダンミッコがCBSに籍を置いていたのにならってグループも移籍して当セカンド・アルバムを発表した。ポップ色が強い。グループの数人はダンミッコのグループ、ダニエル・サンタクルスに加入。本体はジャンナ・ナンニーニを加えチェトラに移った。 (HIRO)



FOLK STUDIO A
Folk Studio A

'85
●Private FS-A 01
○
◉

以前マーキーに紹介されていたMUSICALIAを気に入り、トラッド・フォーク畑で他にも何かないかと探してみたら、ロックより長い伝統を持つ分野でもあり、山の様にあった。本作はその発掘過程の初期に手に入れ最も愛聴していたものの一つである。メンバーはイタリア人だが演っているのはブリティッシュ/アイルランド系のトラッドである。出て来るのは折衷物でオリジナリティには欠けるが、シンセの使用もあり非常に洗練された音創りで明る過ぎず泥臭過ぎず、控えめな哀愁と素朴な美しさは多くのプログレファンに受け入れられるものと思う。この成功に気を良くし大量のイタリアン・トラッドを買い込んだが、ここまで洗練されたものは殆ど無かった。イタリア人ディーラーは商売上手である。 (森下)



FOLK STUDIO A
Anthem

?
●Artis ARLP 008
○Artis ARCD 016

レコードのラベルにはⓅ1975とあるが、現在クランプスの再発等を行っているArtisレーベルからの90年頃のリリースであり、音の感じも新しいので〝出なかった1st〞説を捨てて、2nd であると言ってしまってよいと思う。女性ヴォーカリストとフルーティストが替わり、新たにオーボエ・リコーダー奏者が加わっている。音の方はさらに一層洗練の度合が深まり、最早ウィンダム・ヒルから出て何の違和感もあるまい。新しい女性ヴォーカリストの声質、メロディー、演奏全て問題は無いが、ここまで引っ掛りの無いキレイキレイな音になってしまうと、1stに比べてどことなく希薄というか薄味な気もする。国内盤がメジャーから出てTVコマーシャルのバックに流れても不思議じゃない位の完成度なのだが。 (森下)



FOLLI DI DIO
Folli Di Dio

'92
●
○Mellow MMP 134
◉

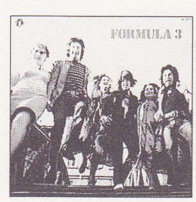
意外に潜伏しているのではないかと思うイタリア産アシッド・フォーク・バンドの一つ。ことイタリアでは多くが語られることがないものの、'70年代の初期から、こういったサイケデリック指向のミュージシャンは少なくない。アラン・ソレンティやフランコ・バッティアートの初期等にもその面がのぞくように、イタリアにも根強い流れがあるようだ。この1作以外は知られていないバンドだが、出来は好作と言っていいと思う。ピエロ・リュネールの1作目のようなイタリアふうの色づきのあるアコースティック・サウンドである。特にac-gとフルートの柔らかなトーンが印象に残る。アシッド・フォークと言うほどはみ出してはいなくて、むしろおぼろげでメロディアス。思った以上には整然としている。 (松本)



FORUMULA 3
Dies Irae

'70
●Numero Uno ZSLN 55010
○BMG Ariola ND 74271
◉

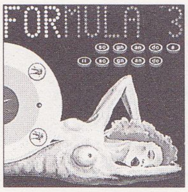
フォルムラ・トレが'70年に発表したこのデビュー作は、後の輝かしいイタリアン・ロック・ムーヴメントの先兵的役割を果たした記念碑的作品である。後の3rd、4thアルバムのような多彩なキーボード群による壮大なサウンド・オーケストレイションは未だ聴かれないものの、ラディウスのヘヴィーなギターとロレンツィのオルガンを中心とした、一味違った重厚な音に仕上がっている。その中でも特に注目に値するのは神々しい雰囲気に包まれて展開するA①のタイトル曲である。この曲は彼らの後の名作群と比しても決して見劣りしない名曲と言えよう。他の曲も音楽的に成熟したものとは言えないが、イタリアらしい情緒に満ちたものとなっている。 (城元)



FORMURA 3
Formura 3

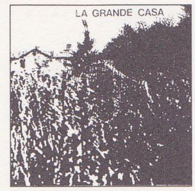
'71
●Numero Uno ZSLN 55, 013
○BMG Ariola ND 74272
◉

'71年に発表したフォルムラ・トレの2枚目にあたる本作は、全曲がバティスティ=モゴールの作品であり、またプロデュースもバティスティによるもので彼の強い影響がうかがわれる。本作は全体に荒けずりのヘヴィなサウンドで、ラディウスの引きずるようなギターとロレンツィの重いオルガン、チッコの重めのドラムが特長である。曲としてはシングルカットされた旧A①、B①が出色の出来だが、特にA①はシングルとは別のロング・バージョンとしてヘヴィなインストパートを後半にもち、彼らの演奏力をうかがうことができる。'90年に再結成されたアルバム「1990」では本アルバムのA①、B①の新バージョンを聞くことができるがいずれも今風のアレンジで本作の重厚なサウンドはそこにない。 (鈴木茂)



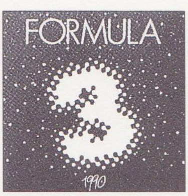
FORMULA 3
Sognando E Resognando
'72
●Numero Uno ZSLN 55152
○BGM Ariola
◉キング KICP 2705

フォルムラトレの三枚目のこのアルバムは親離れ（恩師ルチオ・バッティスティ離れ）を意識したのか、彼ら本来の持ち味である「歌心」を多少犠牲にし、大作主義に走った作品。三つの組曲と名曲「男と女のお話し」からなるこのアルバムは、分不相応（?）な大作を目指して肩に力が入っている為、ぎこちなさがあり、評価が分かれるところだが、その分、緊迫感とはかない美しさとに包まれて、愛聴盤としている人も多いであろう。多彩なキーボードワークによるめくるめく世界は見事なものだ。静寂のエンディングを迎えた後は、まるで明け方の夢を見終えた後のようにもやもやとした滓がいつまでも脳裏に残り、タイトル通り、「夢のまた夢」である。次作「神秘なる館」は力みがとれ、円熟した彼らの傑作となる。（岡崎）



FORMULA 3
La Grand Casa
'73
●Numero Uno DZSLN 55655
○BMG Ariola ND 74273
◉キング KICP 2001

フォルムラ・トレ4枚目にして最後の作品である。彼等はモゴール、バッティスティの擁護下にあったわけだが、ここにきて初めて全曲をメンバー自身が作曲している。大仰な構想がかえって彼等の未熟さを露呈してしまっていた前作「夢のまた夢」に較べ、カンタウトーレ達の持つ生と愛への渇望を率直に〝歌〟として表現しているようだ。ラディウスがアコースティック・ギターをつま弾き切々と語りかけるA①、B②等の、清楚な曲想に投影された詩情は20年を経た今でも決してみずみずしさを失うことがない。このアルバム発表後ラディウスとロレンツィはイル・ヴォーロを結成、ドラマーのトニー・チッコはソロ・シンガーとして、それぞれ素晴しいアルバムを発表している。90年には再結成され現在までに3枚のアルバムを残している。（古田）



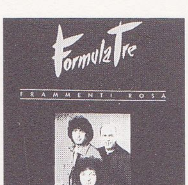
FORMULA 3
1990
'90
●
○BMG Ariola PD 74588
◉

再結成ブームの波に乗って、イタリアでは遂にフォルムラ・トレまでがシーンに復帰した。とりあえずの新生フォルムラ・トレの第一作目は昔の曲をリレコードしたもので、なつかしい曲がズラリ並んでいる。これらのオリジナル曲は'70年代前半のもので、当時のものは流石に録音も古く、こうしてクリアーなイメージで聴けることは、それなりに意義のあるものであると思う。アレンジはカチッとスタイリッシュに現代風にまとめられている。ほとんどがトレの曲だが、1曲だけ、トレとしては初録音の曲も収録されている。（山崎）



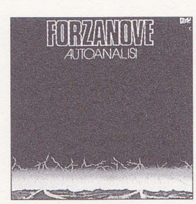
FORMULA 3
King Kong
'91
●RCA 8D 74992
○
◉

新星フォルムラ・トレの第2作目。今回は〝LA FOLLE CORSA〟や〝DIES IRAE〟といった昔の曲のリレコーディングもまじっているが、多くは新曲である。モゴール/バッティスティの手による曲は3曲にとどまり、タイトル・チューンを始め4曲はアヴォガドロの詞を採用している。曲想は前作のイメージを継承しており、フォルムラ・トレらしい印象で創作されているのが良くわかる。ブラスを加えてファンキーな感じが加わったのが新鮮である。チコのヴォーカルを中心にまとめあげたもので、'90年代に甦った旧セカンドのイメージか。昔のファンも新しいファンも違和感なくとけ込めるように創られている。（山崎）



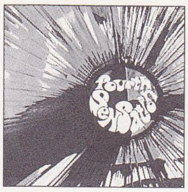
FORMULA 3
Frammenti Rosa
'92
●
○Nuova Durium NDCD 201
◉

フォルムラ・トレは'90年に突如再結成をしてから年一作のペースでアルバムを発表しているが、〝サンレモ音楽祭92〟の参加曲である〝UN FRAMMENTO ROSA〟を含む本作は、'90年代のトレの方向性を見出だす為の重要なアルバムとして高く評価したい。今回は選曲に関してはほとんどが他人によるものなので幾分ポップ度が増しているが、今回も師匠バッティスティの曲を一曲カヴァーしている〝7 e 40〟（'69年作）。全曲チコがリード・ヴォーカルだという事と、弦のアレンジを旧友ヴィンチェ・テンペラに託している事が今までと違う所か。〝サンレモ92〟の演奏ではヴォーカルに専念しているチコ、信じられない程ファズの利いたギターを弾くラディウス、デジタル・シンセの似合わないガブリエレと皆元気な姿を見せていた。（片山）



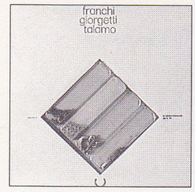
FORZANOVA
Autoanalisi
'81
●Top TPL 202
○
◉

基本的な姿勢はハード・ロックと思われる。しかし、イタリアン・ロックの宿命なのか、どこかハード・グループになりきれない、いわば中途半端なところが見受けられる。ニューウェーブ的なリズム・パターンもあり、いかにも'80年代の音作りなのは良いとしても、曲が短く全9曲これといった曲がないのは辛い。キーボードが多少クラシカルな味つけをしているのが唯一の救いと書けばいい過ぎだろうか。この時期のイタリアン・ロックの停滞を象徴する1枚であろう。g、b、ds、kbdの4人編成で、gのClaudio Causionが全曲作曲、bのPiero Biancoが作詞を手掛けている。本作1枚を残し解散したようだ。（吉瀬）



FOURTH SENSATION
Fourth Sensation
'70
●Ricordi SLIR 22046
○
◉

ギター、ベース、オルガン、ドラムスという4人編成のグループ、Fourth Sensationの唯一と思われるアルバム。Massima Catalanoなる人物が全の作曲を手掛けたインストゥルメンタル作品で、オルガン、ギターを主軸にした暗く混沌としたオルガン・ロックは荒けずりで又'60年代の古めかしさを完全には払拭しきれていない。しかしこの溢れ出さんばかりの熱気と淀んだ感触の入り混ったサウンドは最初期のイタリアン・プログレッシブ・ロックに位置付けられるのかもしれない。特に随所に聴かれる奔放なオルガン・ワークがこの作品に変化と魅力を与えている。尚、蛇足ながら収録の10曲のタイトルは全て女性の名前である。　(鈴木伸一)



FRANCHI GIORGETTI TALAMO
Volume 1°
'72
●Produttoriassociati PA/LP 49
○
◉

Danilo Franchi, Vittorio Giorgetti, Oliviero Talamaの遺した多分唯一と思われる作品。3人共ギタリストの為ベースにMaurizio Majorana, ドラムスにEnzo Restucciaをゲストに迎え入れている。そして驚くべき事にピアノ、オーケストラ指揮、アレンジは、今を時めくNicola Piovanniが担当している。全体的に地味なフォーク調の曲が中心だが、そこに華麗さと変化を与えたのは、やはりNicola Piovaniの才能に依る所が大きい。A②、⑤、B①、③等での夢見るような感触が心地良い。尚、ジャケットは4個の透明プラスチックケースの中に、ボルト、ホチキス、砂、トウガラシ(?)等が入っているという変型物の極み。保存の大変さはバンコの壺を超えている。　(鈴木伸一)



FUTURO ANTICO
Futuro Antico
'80
●Casal Gajardo Records CGR 004
○
◉

ロルケストラにGRUPPO FOLK INTERNAZIONALEがいたなら、ブラ・ブラにはAKTUALAがいた。そのアクトゥアラの中心人物、Walter Maioliを中心にしたトリオが、このフトゥロ・アンティコである。80年作のこの1枚が確認されている。マイオリが管楽器を、他の二人、Gabin Dabire(裏ジャケを見ると明らかにアフリカ系)がパーカション、Riccardo Sinigaglia(弱冠20歳台か)が鍵盤楽器を各々受け持っている。管、打楽器の多くはアフリカ系民族楽器であることは言うまでもない。そこにKbdのエレクトロニックな音が効果音調で混る。さすが〝古代の未来〟と名乗るだけあって、密教ムードのアンビエントな響きも万物流転の図だ(わけわからない)。ミニマル・ミュージック寄り。　(松本)



G. MEN
In Fondo Agli Occhi Tuoi
'73
●Edia ZSKE 55373
○
◉

G・メンには3枚のLPがある。本作が彼等のファースト・アルバムで、2ndが74年の「G. Men」(EDIA ZSKE55377)、3rdが75年の「Oggi」(EDIA ZSKE55380)である。3年間に3作という短期集中的にLPをリリースした為か、3作の間にはそれ程の差はない。オーケストラをバックにしっとり歌い上げる本作で、すでに彼等のアイデンティティーは形成されている。2ndはメロトロンを大幅に導入した意欲作。3rdはオーケストラとメロトロンを曲によって使い分け、シンセサイザーのソロ等の導入によって、最もプログレッシヴ・ロックよりの内容になっている。LP未収録のシングルもリリースしている。　(山崎)



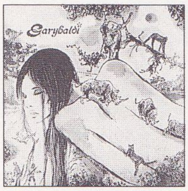
G. MEN
G. Men
'74
●Edia ZSKE 55377
○
◉

数ある歌物バンドの中で、それ程大騒ぎされはしないが、実はすこぶる良い、というのがG. MENだろう。デビュー作「In Fondo〜」、3枚目に当るシングル集の性格を持つ「Oggi」、を含めて全3作、どれも暑苦しくなく入って来て静かに広がっていく、もしくは聴けば聴く程浸みる、という地味目ながら長持ちする歌物の典型が、G. MENである。特に、メロトロンの使い方がうまい。このアルバムは、その効果がよく出た2作目に当る。歌メロにそって押しつけがましくなく入ってくるその広がりは、メロトロンという楽器の一特性を最大限に活かしたもので、控えめな歌メロを色づけしていくその色づけの仕方が実にデリケートだ。オーケストラで塗りつぶされないところに、このアルバムの魅力がある。　(松本)



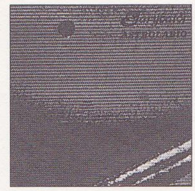
G.MEN
Oggi
'75
●Edia ZSKE 55380
○
◉

星の数ほど、イタリアには、ラヴロックグループがいるが、その中でもこのG.MENは私の大好きなグループの一つである。ラヴロックを演奏するバンドは、シングルのみで、アルバムをリリースせずに消えていくものが、多いが、3年間に、3枚のアルバムを出しているのは、運のあるバンドと言える。さて、この「oggi」1stから6曲2ndから5曲、そしてシングル曲の〝oggi〟をプラスして成っている。1枚目、2枚目からのいいとこ取りと言う事で、アルバム全体の統一感に、欠けた印象を受けるのは、しかたない所か?ヴォーカルが切々と愛を唄い上げる所など、魅力的な部分も一杯有ると言う点では、一流のグループだろう。欲を言えば、オーケストラがもっと派手に使われていれば。残念なところだ。　(堤野)



GARYBALDI
Nuda
'72
●CGD FGL 5113
○CGD 9031752622
◉MMG AMCE 560

ジミヘンの支持者と言われるギタリストBambi Fossatiをリーダとしたグループ Gleemenは70年に唯一のアルバムを出したが2年後、全く同じメンバーながらGarybaldiと改名、本作をリリースした。ジャケは3面開きで裸女に群がる動物達を描いた印象的なデザインだ。サウンドの核を成すのはやはりバンビのギタープレイでプログレ色は余り濃くないが、ジミヘン色ばかりがクローズアップされても正確な内容が伝わらない。たまに登場するピアノも仲々きれいで、B①などはイタリア色をとどめる好ナンバーになっている。2nd「Astrolabio」ではスタジオライヴを披露しているが、ベーシストが交代、キーボードのLioも正式メンバーを外れゲスト参加にとどまっている。(江田)



GARYBALDI
Astrolabio
'73
●Fonit LPQ 09075
○Fonit Cetra CDM 2036
◉

〝イタリアのジミ・ヘン〟、バンビ・フォサーティ率いるガリバルディの2nd。'70年のグリーメンや後のバンビバンダも含め、彼の周辺作品としては最もプログレ・ファン向けの内容である。A・B面共各1曲ずつでB面はライブ演奏。クレジット上はレギュラー・メンバーをはずれたリオ・マルキのオルガンが全編にかなりの比重で配されており、ジミ・ヘン命のギターも重く暗めの曲調の中でうまく響いている。全体的に構成が甘く、せっかくの大曲もインパクトの焦点がぼけているのが少々残念。しかしA面の序盤など曲調やオルガンの音色がビリエット・ペル・リンフェルノっぽく聞こえるなど、各局面は光る部分が多い。「Nuda」でこけた人も、こちらは再トライの価値があるのでは? (城元)



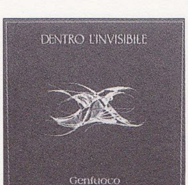
GEN VERDE
Il Mondo Una Casa
?
●Gencitta' Nuova GVL 8203
○
◉

女性ボーカルをフューチャーしたこのGen Verdeというグループのサウンドは、このアルバムの内ジャケにも書かれている通り、又裏ジャケのコンサート写真からもFolk Rock Operaという形容が相応しい。ポップな曲、ハードに迫る曲からトラッドまで多岐に渡る曲の配列は脈絡という点で首を傾けざるを得ない面もあるが、たっぷりと堪能出来る女性ボーカルは、マルチェラやミア・マルティーニ等のファンには大きな満足感を与えてくれるだろう。時折り思い出したように導入されるクラシカルな演奏や効果音の使用が良いアクセントになっている。メンバー名等不明だが、同レーベルより73年に「Molto Hai Amato/Per La Nuova Primavera」というシングルも発表している。 (鈴木伸一)



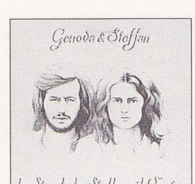
GENCO PURO & CO.
Area Di Servizio
'72
●Bla Bla BBL 11053
○Artis ARCD040
◉

ブラ・ブラ・レーベルというと実験的なイメージが強いが、このジェンコ・プーロ・アンド・コーはそれ程のアバンギャリズムを有してはいない。基本的にカンタウトーレ系のヴォーカル曲が主体であるが、バックの演奏にムーグやキーボード群を使用してプログレッシヴなイメージを出している。シンフォニック系でもアヴァンギャルド系でもなく、カンタウトーレ系のファンにアピールする内容を持っている。同じブラブラ系だと、カプシクム・レッドあたりに近いものがある。イタリア然とした好アルバムだ。グループはこれ1枚で解散したようだが、メンバーはバッティアートの「Fetus」にも参加している。リーダー格はリッカルド・ピロッリ。ブラブラに2枚のシングルも残している。 (山崎)



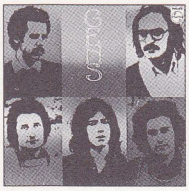
GENFUOCO
Dentro L'invisibile
'79
●Cittá Nuova (no number)
○Mellow MMP 116
◉

'79年に発表された彼ら唯一のアルバム。柔かい音色のシンセとフルートを中心に切れのあるアンサンブルの中、端正で夢見るようなサウンドが展開されている。このアルバムが発表された'79年と言えばイタリアン・ロックは完全に過去のものとなっていた時代であり、このアルバムもイタリアン・ロック全盛期のアルバムと比較するとやや線が細く影が薄い感がある。ただ、彼らの場合、この頼りなさと言うか全体を占める「淡さ」がすなわち彼ら独特の個性となっていて、味わいのあるヴォーカルとともになかなか捨てがたい物がある。一聴するとひっかかりが無く、すっと流れてしまうような作品ではあるが、一度波長があってしまえば、ふとメロディーを口ずさんでいる……そんな作品である。 (渡部　暁)



GENOVA & STEFAN
La Strada Le Stelle E Il Vento
'75
●Ricordi SMRL 6180
○
◉

ジェノヴァ・アンド・ステファンこと、ジャンニ・ジェノヴァ(vo,ギター)とパオロ・ステファン(vo,キーボードetc.)の'75年に発表されたデュオ・アルバム。全体的にソフトで優しい曲想のイメージで統一された作品で、それは内ジャケットの納屋にたたずむ2人の写真が象徴するような、肩の力をぬいて楽しめるものだ。プロデュースはイ・プーのレッド・カンツィアン。バック・バンドにはイル・ヴォーロよりボブ・カレロ(ベース)とジャンニ・ダッラリオ(ドラムス)の2人が参加しており、さらにオーケストラを配してしなやかさを増している。'70年代のイタリアらしさを堪能できる一枚。 (山崎)



GENS
Gens

'74
●Philips 6323 031 L
○
◉

ぽつんと有ったこの1枚が、とあるイタリアに心が通じるファンの一言を契機に、無数にあるシングルを一つに結びつけた。GENSはOPERAとメンバーがだぶり、マニアを唸らせる両バンドの秀曲を書いたFiliserto Ricciardiは更にOPERA在籍中にはIL DIARIOのシングル曲他をも書いていることが、本誌製作中に判った。誰もが納得した、確かにGENSとOPERAの音楽性は近かった、それも歌物として良質なものがほとんど。それはこのアルバムでも証明されている。早急、センプリーチやボッテガ等と並べて構わないだろう。尚、掲載外のアルバム未収シングルとしては「La Stagione Di Un Fiore/Fotomodelia」(Det DTP53, '70)と「Ancora E Sempre/Stamattina」(DTP56, '70)が好作。（松本）



(IL) GIARDINO DEI SEMPLICI
Il Giardino Dei Semplici

'75
●CBS 81170
○
◉

グループ系の叙情派アーティストの中でもAlunni Dei Sole, La Bottega Dell'Arteと並んで人気が高い彼らの1stアルバム。哀愁たっぷりのメロディーライン、美しいストリングスや ac ギターの爪弾き…と、盛り上げ方としてはオーソドックスな手段を用いているが、ピアノよりもオルガンの使用頻度が高いため、曲によってはロック色が若干濃くなる。また、ストリングスは余り多用せず、オーケストレーション効果にはメロトロン等キーボード系を代用するというケースが目立っている。なお冒頭に出て来た美しいメロディーがＢ面の最後で再び顔を出し、とても印象的なエンディングになっている。この後、グループは次々と良質の作品を発表することになるが、次第にポップな色合いを増して行く。（江田）



(IL) GIARDINO DEI SEMPLICI
Le Favole Del Giardino

'77
●CBS 82092
○
◉

CBS-SUGAR所属のグループは、Pooh成功の影にかくれている感があるが、カマレオンティや、プロフェティ等の他に当アルバムのジャルディーノ・デイ・センプリチがある。彼らのファースト及びセカンドは、ラブロックということばが、彼らのためにあるかのように、どこまでも哀愁を帯びたボーカルと、バックのハーモニー等、これでもかというくらいに泣かせのメロディでうめつくされている。また、その厚みのある音は、他の同系のグループとは、明らかに一線を画するものである。その後は、ポップ性が増し、軽めの音になっていった。尚、初期2枚は、マルチェラや、トッツィのプロデュースをしているジャンカルロ・ビガッツィが制作にあたっている。（山中）



(IL) GIARDINO DEI SEMPLICI
B/N

'79
●WEA T 58089
○
◉

まっくろなジャケットにB/Nとだけ書かれたモノトーンのカヴァーと、当時、イタリアにもおしよせつつあったニュー・ウェイブの時代の印象の為、ニュー・ウェイブ色の強いアルバムに変化したのでは?と思う方も多いだろう。しかし、全体のイメージがややタイトにひきしまったけれども、ファーストとセカンドの雰囲気はまだまだ感じることができる。ジャルディーノのアルバム群はどれを聴いてもそんなに失望することはないが、日本では落葉をあしらったファーストのイメージが強い為に他の作品の印象が薄いのが残念だ。特に傑作したグループではないが、イタリアらしい、それもナポリらしいといったらいいのか、南部的ないいグループだ。（山崎）



(IL) GIARDINO DEI SEMPLICI
...E Amiamoci

'82
●Flteam LP 3354
○
◉

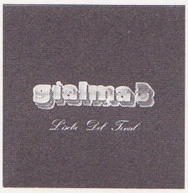
CBS時代の1stと2ndが特に人気のジャルディーノ。大手WEAから移籍したマイナー・レーベル「Fiteam」からの4thアルバム。ドラマーがTommy Espositoに替わり、今までの彼らのアルバムの中では最もリズムが前に出ており、以前よりも力強さを感じるサウンドになっている。数曲でらしくない洗練されたアレンジを見せるが(それがまたとびきりポップ!)、ジャルディーノ節とも言えるリードヴォーカル独特の節回わしや、ハイトーンを含む美しいコーラスはここかしこで健在で、アルバム一枚を飽きさせない。ラストはコミカルなインストゥルメンタルで閉めくくられる。10年以上も前の作品だが、ジャルディーノ現在形といった風情である。（木下）



(IL) GIARDINO DEI SEMPLICI
Ed E Subito Napoli

'84
●Interfonia ITF 352
○
◉

ジャルディーノ・デイ・センプリーチ、6枚目のアルバムである。熱い思いを込めて愛の世界を歌い上げた1st及び2ndアルバム以降、やや軽い感じの作品が続いたが、本作品は彼らが円熟の境地に至ったことを感じさせる快心作である。ボーカル、コーラス等、ミュージシャンとしても成長しており、また、現代的感覚を取り入れたサウンドもより完成度の高いものとなっている。1stアルバムにも収録された名曲〝Angela〞を聴く時、その表現方法こそ変化したものの、彼らが愛に対する情熱を決して失っていないことが分かるだろう。紙飛行機に乗ってナポリに向うピエロを描いたジャケット・デザインも彼らのイメージを的確に表現している。（賀川）



GIALMA 3
L'isola Del Tonal

'79
●Drums EDL 2046
○Mellow MMP 146
◉

'80年前後に発表されたアルバムの内でも、極めて高水準な内容を誇る作品。プログレッシヴ・ロックというよりはむしろジャズ・ロックの範中に入るのだろうが、彼等の奏でる清澄な音空間から喚気されるイメージは、かのArti E Mestieri の Tilt が最も近い。メンバーは Riccardo Zegna (Corte Dei Miracoli ?、同姓同名だが同一人物かどうかは不明。)を中心とする3人で、他に3人のゲストを迎えている(バイオリン2人オーボエ1人)。全編インストゥルメンタルで電気楽器は一切使われていないが、R. Zegnaのリリカルなピアノと2台のバイオリンの美しくも哀し気な音色が溶け合うサウンドは静ひつなまでの叙情を湛え、一種官能的でさえある。82年には同レーベルより2nd「Giarma Planet」をリリースしている。　(鈴木伸一)



GIALMA 3
Gialma Planet

'82
●Drums EDL 2072
○
◉

メロウ・レコーズからCD再発された「L'isola Del Tonal」のジャルマ・トレは、その後、2枚のアルバムを残している。本作と「Rain's Dream」である。1stアルバムでは弦楽器の好サポート、好録音もあってアンニュイでつややかな独特の色づきがあった。が、後の2作になると、その傾向はなくなり軽味のフュージョン・ポップスに傾いている。このアルバムでは元PIERO E I COTTONFIELDSのヴォーカリスト、Piero Cottoが共演しており、彼の英語ヴォーカルをメインにした少しブルース色を加えたポップな内容になり、イタリアン・ロック・ファンの好みからは外れていると思う。ピアノの雰囲気は前作に似ている。やはりジャズ・トリオの色が濃い。そしてイージーだ。
(松本)



(I) GIGANTI
Mille Idee Dei Giganti

'60年代末?
●Rifi RAL-LP 11002
○
◉

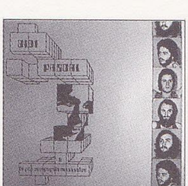
ジガンティと言えば間違いなく3作目「Terra In Bocca」イタリアン・プログレッシヴ・ロックの夜明けを告げたあの大作なのだが、本来のジガンティは、むしろデビュー作やこの2作目なのも事実。いきなり垢抜けないR & Bコーラス乗りビートで出て来るのだから、プログレ前夜も何もない。むしろ様相としては'60年代のソウル・ミュージックにさえ通じそうなサウンドだ。それでもバラード気のある何曲かでは'60年代ポップスにイタリア語が相乗りして、それらしくなる。同じ頃のオルメ辺りに比べると、ジガンティというバンドはビートが強めだ。デビュー期のエキペ84なんかに近い。ジャケットを見ると、まさしくこの時代だという気がするが、サイケデリック・サウンドにはほとんど縁がない。
(松本)



(I) GIGANTI
Terra In Bocca

'71
●Rifi RDZST 14207
○Vinyl Magic VM013
◉キング KICP 2103

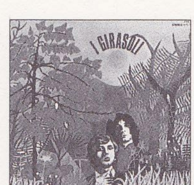
ビートグループだったジガンティは71年、ヴィンチェ・テンペラ等多彩なゲストを迎え、突如としてプログレッシヴロックの大作〝Terra in Bocca〟を発表した。全面に渡りメロトロンが満遍なく散りばめられ、ピアノ、acギターの美しい音色、哀愁たっぷりのメロディーライン、息もつかせぬドラマチックな展開等、今てに於て完璧な仕上がりである。ムゼオ等国内発売された名作群とも十分に比肩できる出来と言っていい。なお、曲は全てPiero De Rossi/Vince Temperaのコンビが書き上げている。また、彼らのこの他のレコードは、ほとんどがビートもしくはポップスでデヴィッド・ボウイの〝スペース・オディディ〟を収録した3曲入りシングルも出ている。最近、イタリアでVINYL MAGICから出たCDは何とテイク違いで当時のアウトテイクスかと思う。オリジナルのほうが迫力がある。
(江田)



GIGI PASCAL E LA POP COMPAGNIA MECCANICA
Debut

?
●
○
◉

このジジ・パスカルというアーティストの作品は日本では比較的最近までコレクターの間でさえ知られていなかった幻のアルバムだった。イタリアのプログレッシヴ・ロック専門ショップでレーベルも運営しているカリフォルニアがLPで限定再発して知られるようになったもの。サウンドはオルガンを主体としたシンフォニック系で、既にCD化されているものにたとえるなら〝パンナ・フレッダ〟あたりにやや近いかもしれない。古い音だが'70年代初期の香りを今に伝える音で、泥くさいサウンドを好む方にお勧めしたい1枚だ。筆者はオリジナルを見たことはないが、見た人の話では再発と同じ仕様であることだ。
(山崎)



(I) GIRASOLI
(I) Girasoli

?
●RCA ARC ALPS 11012
○
◉

メンバー名が書かれていないが、作詞・作曲の全んどがLucarelliとRighiniに依る事から、この二人のデュオ作と考えて良いだろう。全体を通して美しいオーケストレーションとやや翳りを帯びたボーカル、そして親しみ易いメロディー・ラインが印象的な良質な歌を聴かせてくれる。当時の典型的なポップス感覚に溢れた作品だが、A面ラストの〝Roma E' Una Prigione〟のみ異質の出来で、彼等の先鋭的な指向の一端を窺い知る事が出来る。幽玄なバックのサウンドと仄かに漂う土着の香りが相挨って、詩情豊かな音世界を創出している。深い味わいと静かな余韻がいつまでも心に残る名曲である。尚、プロデュースは Paolo Dossena。　(鈴木伸一)



(IL) GIRO STRANO
La Divina Commedia

'92('73年録音)
●
○Mellow MMP 107
◉

'73年に制作されたまま、長い間お蔵入になっていた作品。イタリアン・ロック全盛期に作られただけあって、この手の発掘物としてはレベルが高い内容である。基本的にはオルガン・ロック的なサウンドではあるが、「あの」イタリア独特の張り裂けんばかりに歌うヴォーカル、吹きすさぶフルート、サックス、うなりをあげるオルガンと、なんともはや懐かしくも喜ばしい音である。全体的に大曲揃いの割には構成が冗長で甘く、さらに一部の曲では音質の劣化が見られるのが残念ではあるが、フレーズ、フレーズにほとばしるイタリア独特の熱さにそんな事はどうでも良くなってしまう。決して名盤とは言えないこのアルバムであるが、一聴して思わず拳を握り締めてしまう…そんなあなたの気持ちが痛いほど良くわかる。（渡部　暁）



(I) GIULLARI DI PIAZZA
Sulillo Mio

'86
●Meadow Lark 106
○
◉

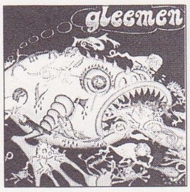
〝病めるイタリア〞という言葉がある。イタリアの南北問題を差す言葉だが、かつてイタリアの南はその貧困から多くの移民を出した歴史があり、(だからアメリカにマフィアがある)その痕跡は今も南の田舎へ行くと残っている。ジューラリ・ディ・ピアッツァは、その移民の子供達によるバンドで、これは1stアルバムに当たる。地元N.Y.ではカーネギー・ホールでコンサートを開くとあるから知名度もあるのだろう。全12曲のほとんどが17～19世紀のナポリのトラディショナル・ソングになっている。熱い躍動と深い哀愁が詰ったレコードだ。クラシカルなトーンを感じるのも、つまりは情緒的な気質が生み出す結果に過ぎないとは思うが、それらを伝え得る彼等の精神が卓越しているのだと思う。より濃い。（松本）



(I) GIULLARI DI PIAZZA
Dea Fortuna

'89
●Shanachie 21010
○
◉

イタリアのバンドがアメリカに渡ったのか、それともイタリア系アメリカ人によって結成されたのか、今一つはっきりしないのだが、とにかくこのバンドは現在ニューヨークを拠点に、歌あり踊りありの総合パフォーマンス集団として、南イタリア文化の伝導に励んでいるらしい。だが、その音にはアメリカの影はかけらも無い。これは2ndだが、南イタリアトラッドの陰りと躍動感はそのままに、泥臭さが完全に消し去られ、むしろトラッドと言うよりは古楽である。女性ボーカリストを中心とした13人の大編成、現地イタリアの同系統のバンドでもここまで洗練されている連中は殆ど無いと言って良い。A面はトラッドを、B面はオリジナル曲を収録している。余談だが、これ3、4年前は某大型店にゴロゴロしていた。（川辺）



GLEEMEN
Gleemen

'70
●CGD FGS 5073
○Mellow MMP 168
◉

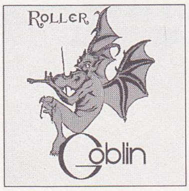
バンビ・フォッサーティ率いるGLEEMEN(遍歴の楽人達)は70年に唯一のアルバムをリリースしている。60年代の名残が色濃く漂うサウンドなガリバルディよりもシンプルなものだ。オドロオドロしいカヴァーデザインを象徴するかの様な思わせ振りのオープニングながら、間もなく威勢の良いリズムに導かれて彼らの得意とするパターンが出て来る。曲によってはブルースギターがうなりを上げる一方で、古臭いオルガンの音色はどこか頼りなげ。いずれにしてもプログレファンの嗜好にマッチした作風ではない。現地イタリアではプログレ系廃盤の価格が高騰する以前は、オールディーズ的価格が高いこの手のレコード(他にGIGANTIやTRIPの初期など)が遙かに高値を付いていた。（江田）



GOBLIN
Profondo Rosso

'75
●Cinevox MDF 33/85
○
◉キング K32Y 2112

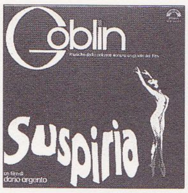
ダリオ・アルジエント監督の同名サスペンス・ホラー映画(邦題はサスペリア2)のサウンド・トラックにしてゴブリンのデビューアルバム。曲中の反復的パート等には「チューブラ・ベルズ」からの影響が見え隠れするが、本作はロック色がより強く感じられる。特に荘厳な響きを持つA①のタイトル・チューンはゴブリンの全作品の中でも最も印象的な名曲である。'74年にかけて彼らはこのゴブリンの結成、デビューとほぼ同時にチェリー・ファイブとしての活動も行なっていたが、アルバム発表までの間そのメンバーは相方クロスしている様で不明確な部分が多い。本作のドラムはボルディーニではなくドリアン・グレイにいたマルティーノの様だが、チェリー・ファイブのベースが誰かは未だ断言出来ない。（城元）



GOBLIN
Roller

'76
●Cinevox MDF 33101
○
◉キング K32Y 2053

前作の商業的成功によりモランテとシモネッティはバンドとしての活動をゴブリンに絞ることになる。本作からはドラムが元フレア、エトナでイタリア屈指の力量を持つアゴスティーノ・マランゴロに交代し、キーボードにマウリッツィオ・グアリーニを加えてツイン・キーボードとなり、確実にスケールアップしている。バンドとしてのサウンドの方向は特に変化がないが、サントラとしての制約が無い分曲作りものびのびとしてよりソリッドかつスリリングな内容となっている。ゴブリン周辺の作品を聴く場合、チェリー・ファイブの出来があまりにも突出しているためまずはそれを耳にすべきだが、チェリー・ファイブが気に入ったら本作及びもう一枚のオリジナル・アルバム「Bagarozzo Mark」を聴く事を勧めたい。（城元）



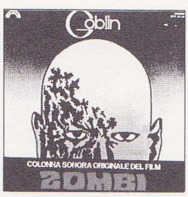
GOBLIN
Suspiria
'77
●Cinevox MDF 33. 108
○
◉キング KICP 2721

映画「サスペリア」のサントラ盤。日本での映画公開は本作が先になったが、サントラとしては2作めであり、サード・アルバムとなる。同じサントラでも1作めは結構ロック・アルバムとして聴けるが、本作はサスペンス・ホラーのサントラそのもので、かなり強力に恐怖心を煽る音に仕上がっている。一説には作曲そのものや音色の決定にコンピューターを使用して、人間の聴覚から起こる恐怖心を最も効果的に引き出す様作られているとも言われていた。確かにそんな話に信憑性を感じてしまう内容ではある。「Roller」や「Bagarozzo Mark」を気に入ったら本作を始めとするサントラを聴いてみるのも良いのではないか。なおオリジナル盤は中スリーブが見開きで、とび出す絵本式になっている。 (城元)



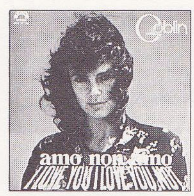
GOBLIN
Il Fantastico Viaggio Del Bagarozzo Mark
'78
●Cinevox SC 33.37
○
◉キング KICP 2213

ゴブリンのグループ活動とアルバム・リリースはかなり乱脈をきめこんでいてわけのわからないベスト物があったりするが、これは「ローラー」に続くコンセプト・アルバムの大きさも増し聴いているとハッとさせられるような研ぎ澄まされた音がある。4人の力量が最大限に生かされた中でユニークなのはM・モランテのヴォーカルである。彼は後にシェイプ・アップに成功しソロに専念、左にならってヒゲをそりおとした軽佻浮薄なナルシストC・シモネッティもソロに、「Patrick」発表後はA・マランゴロはNew Perigeoに参加、残ったF・ピニャテッリのあまりいただけない新生ゴブリンも「1st」、「Volo」のおあとは再び旧交を温め直しサントラ「Tenebre」を製作するという次第である。 (岡本)



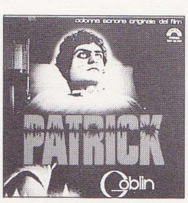
GOBLIN
Zombi
'78
●Cinevox MDF 33.121
○
◉

通算5枚目に当たるアルバムで、再びアルジェント監督のサウンド・トラックである。「ゾンビ」という映画は有名だと思うので、説明はしないが、大出世作ともいえる映画である。しかし、映画を切り放して、ゴブリンの一枚のアルバムとして聴くのは、非常に無理が有る。一曲ごとに曲調も違うし、なによりトータルな音楽性は無い。ただ言えることは映像とは見事にマッチしており、独特な世界を醸し出すのに十分役だっている。サスペリア同様、メインのテーマ曲はクォリティも高く、プログレのシングルとしては充分に魅力が有る。鼓動のようなリズムに合わせて浮遊するシンセはいかにも恐怖感を暗示して、彼らの真骨頂である。この一曲が好きならOKだが、そうでないなら考え直せ。 (津田)



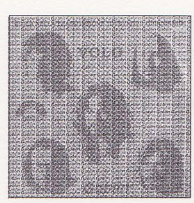
GOBLIN
Amo Non Amo
'79
●Cinebox MDF 33.126
○
◉

ゴブリンと言えば映画音楽、それもホラー映画。ヘヴィ・メタル以上に当たる媒体に乗ってゴブリンは成功を納めた。他にイタリアン・ロックの世界ではなかった事だ。作曲力や演奏力あってのこととはしても、稀に見る幸運だったことの方が大きいだろう。稼げたからこそ「Roller」や「Il Fantastico～」が出たに違いない。このアルバムはある意味でイタリアン・ロックの奇跡ゴブリンを総特集したものだ。全8曲のサントラの中には、この年にリリースされた「Patrick」の中の〝Yell〞を始め〝Zombi〞〝Profondo Rosso〞〝Suspiria〞、そして日本未公開?のサントラ〝Amo Non Amo〞〝Maniera〞〝Both-Two〞〝Funky Top〞を収録している。後者4曲についてはそれ程特徴づいたものではない。 (松本)



GOBLIN
Patrick
'79
●Cinevox MDF 33.133
○
◉

IL RITRATTO DI DORIAN GRAYがレコード発売を打ち切られた後に、そこに在籍したクラウディオ・シモネッティ(kbd)とワルター・マルティノを中心に'74年に結成されたゴブリン、その後の足取りはむしろ熱心な映画ファンの方が詳しいかもしれない。マッシモ・モランテ(ex-ERA DI ACQUARIO)とシモネッティの中核に加え'76年からはFLEAからアゴスティーノ・マランゴロも参加。このアルバムは彼等の通算7枚目のアルバムでまたしてもホラー映画のサントラ盤でもある。骨太なリズム・セクションと効果音を兼ねた強いメロディを弾くキーボードも変わりない。翌年には「Squadra Antigangstern」が出てベース奏者のバンドとなり、更に「Contamination」「Volo」を出した。 (松本)



GOBLIN
Volo
'82
●Cinevox SC 33, 45
○
◉

A.マランゴーロが再編成されたNEW PERIGEOに参加し、M.モランテ、C.シモネッティもソロ・アルバムを発表した後、ゴブリンはファビオ・ピニャテッリを中心に5人のメンバーで再編成された。このアルバムは、映画とは全く関係がなく、久びさのスタジオ録音盤である。「サスペリア」などスリラー映画で聴くことが出来たあのゴブリン・サウンドは影をひそめ、収められている全8曲はポップな仕上がりになっている。シモーナ・ピローネをゲストに迎えた〝Fortuna〞は、彼女のヴォーカルをメインに曲作りが成されており、アルバム全体もM.ルジーニのヴォーカルが中心となっている。それがゴブリンの分裂の原因だったのかもしれない。シモネッティの演奏中心のソロ作と比べると、その違いが判る。 (前田)



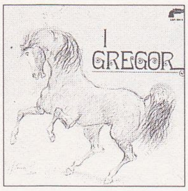
GOTHIC LUNCH
Gothic Lunch
'92
●
○CD Mellow MMP 122
◉

メロウ・レコードというと発掘音源が多いのだが、これは1990年にヤマハの4トラックで録音された、4人編成のグループのデヴュー・アルバムである。一曲だけ、ERRATA CORRIGEのMARCO CIMINOが参加して、ブルース・ピアノを弾いている。音の方はイタリアン・ロックというよりも、'70年代初期のブリティッシュ・ロックで、トラフィックなんかの影響を感じる。なんでいまさら…という感もあるが、妙にノスタルジックな印象を受けるのも事実である。部分的にはピンク・フロイドの歌物のようなところもあり、楽曲の出来もまあまあで、けっこう聴ける。先達の領域には及ぶべくもないが、内省的な表現方法や、フィーリングを確保できれば、幅は拡がりそうだ。英語で歌っている。 （津田）



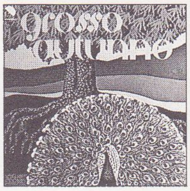
GRANDE FAMIGLIA
Una Cittá Possibile
'72
●RCA DPSL 10622
○
◉

カラフルなイラストカヴァーに包まれたグランデ・ファミリアのアルバムはA、B面各6曲を収録した小品集。基本的にフォーク/トラッド的に演奏形態を取っているが、イタリアンポップスの愛聴家であれば歌物の延長として楽しめる作品だ。曲によってはハープシコードやメロトロン、バイオリン等を活用しアクセントを付けてはいるものの曲間の格差が大きいのが難点で、一概に評価を下しにくいタイプの作品ではある。が、全体的にほのぼのとした雰囲気に満たされているため、今一つ迫力不足との感は否めない。シンフォニック通が聴けばなおさらであろう。ただ、この手のサウンドを得意とするバンドは他に余り見受けられず、案外貴重な存在と言えるのかもしれない。 （江田）



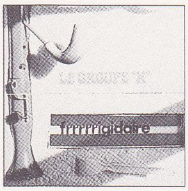
(I) GREGOR
I Gregor
'75
●Kansas 5300-504A
○
◉

E.A.ポウやフラッシュメンを配したカンサス・レーベルにおそらく唯一のアルバムであろう本作品を吹き込んだグレゴールは女性キーボード奏者を含む5人編成のグループである。当時オーヴァーグラウンドに浮上できずに消えた一例えばストラーナ・ソチエタやG・メン等と同じタイプの歌を中心としたグループで、メロディや曲は非常に良いものを持っているのであるが、彼等の最大の欠点は良いアレンジャーにめぐまれなかったことであろう。全て自分達で演奏をしているのだが、それがかなり地味な印象を与えてしまうのである。彼等がもし、ジャンピエロ・レヴェルヴェッリにめぐり会っていたら、プーやアルンニ・デル・ソーレばりの作品に成った可能性が高い。スターダムを夢みて消えた惜しいグループである。 （山崎）



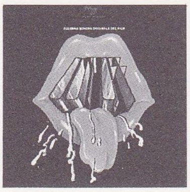
GROSSO AUTUNNO
Grosso Autunno
'76
●EMI 3C 064-18208
○
◉

'76年に本作、'77年に「Almanacco」(EMI 3C 064-18313)をリリースしたローマの5人組。聴き始めると、フォーク・ロック系の歌物バンドかと思ってしまいそうだが、一癖ある。'60's西海岸好みと言うべきか又は南方指向と言うべきか、クラウディオ・ロッキがバンドを組めばやりかねないような方向性の音楽だ。意外とカラッとした所も少なくないが、アコースティック・ギターを多用して、ウッド・ベースだったりタブラにフルートだったりする。聴き進めば、多くの歌物バンドとは一線を画していく。改めてジャケットを見ればクジャクだ。ピーコック・カラーではないにしても、雑多な点では通じるか。さり気なくエフェクト調の音使いもある。いい線を突いてはいるが決め手がないのも確か。 （松本）



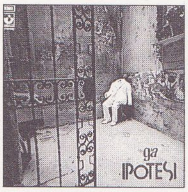
(LE) GROUPE "X"
Frrrrrigidaire
'73
●EMI C.P.T LPOK 5
○
◉

Gianluigi Pezzeraを中心とするグルッポ・エックスが'78年のサントラ「OUt Off」の5年前に発表したデビュー・アルバム。フュージョン系の音でつまらないという話だったが、それはA面に見られる軽快なリズムと明るくコミカルなメロディーラインのせいかもしれない。内容はシンセを中心としたキーボードトリオが基本的なパターンだが、中でも切れ目なく続くB面の2曲は、ジムノペティを思わせる出だしから、アコースティックギターやブラスがからみ、ホンキートンク調のピアノが出たりと凝った展開を見せる力作だ。音は軽めだが技術は仲々のものだ。'73年作だが、今でも通じる箇所があちこちに見られる。聞き所は意外に多いのではないか。 （木下）



GROUP X
Out, Off
'78
●Radio ZPLRR 34052
○
◉

グループXは'73年、〝Frrrrrigidaire〟(C.P.T.：LPOK-5)になる作品でアルバムデビューを飾っている。謎めいたバンド名と思わせ振りな変形ジャケが関心を集めたが、内容的にはフュージョン色の濃いものでプログレファンの支持は得られなかった。以来5年を経てリリースされた推定2枚目の本作は、出来としては1stを遙かに上回る。サウンドトラックとしての録音のため短い曲が多いものの、コマ切れとの印象は受けず、またキーボード系が積極的に使われているためプログレファンでも十分に聴きこなせる好作品に仕上がっている。効果音の使い方等は、サントラを数多く手掛けているゴブリンの手法を思い浮かべてもらえばいいが、シンセの音色やメロディーライン等には若干暗い陰が感じられる。 （江田）



GRUPPO D'ALTERNATIVA
Ipotesi

'72

●EMI 3C. 064 17873

○

◉

グルッポ・ダルテルナティーヴァは'72年に〝Ipotesi〟を題する個性的なアルバムをリリースしている。ピッキオ・ダル・ポッツォの1stとも共通な準アヴァンギャルド的な展開を得意とするが、混沌とした中にもフルート、オルガン等イタリアのカラーを色濃く残したフレーズが見え隠れしている。〝シンフォニック・ロック〟と呼ぶには抵抗があるが、非常にち密で奥行きの深い曲構成を誇り、意表を突く展開は常に聴く者を魅き付ける。高度な演奏技術に裏打ちされた計算ずくの曲作りとも言えよう。グループは作詞家のG. Bassiを含め8人編成の大所帯だが、本作のみで解散してしまった模様。（江田）



GRUPPO 2001
L'alba Di Domani

'72

●King Unlvarsal NLU 62019

○

◉

「明日への夜明け」と題されたグルッポ2001（ドゥエ・ミッラ・ウーノ）唯一のアルバムである。夜明けに向かって飛翔するカモメがこのレコードの内容をよくあらわしている。ロッカンダ・デレ・ファーテの持つ構成力とカンタウトーレ達の持つほのぼのとした愛の賛美が程よくブレンドされたそのサウンドはイル・ヴォーロやフォルム・トレにもその共通点を見い出すことができるだろう。切々と歌いあげるしゃがれ声のボーカルはリッカルド・コッチャンテやクラウディオ・バリオーニ風であり、とてもあたたかみのあるものだ。イタリアの黎明とでもいうべき'72年に製作され、人知れず消えていった彼等のサウンドは、しかし今尚、素敵な夜明けの歌を私達へと歌いかける。（山崎）



GRUPPO FOLK INTERNAZIONALE
Festa Popolare

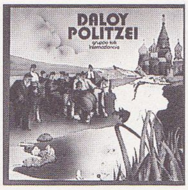
'76

●L'orchestra OLP 10005

○

◉

ロルケストラ・レーベル（'75年発足）の民族音楽部門?筆頭のこのバンドは、計3枚のアルバムと1枚の12インチ・シングルを出している。このアルバムは彼等のデビュー作になるもので、グループ名が指すように様々な地域のフォーク・ミュージックをとりあげるその第一歩である。そして様々なものをとりあげ、いとも簡単に聴かせる実力派が彼等でもある。このアルバムではトラッド以外に英トラディスト、イワン・マッコールやギリシャの作曲家、ミキス・テオドラキス等、他音楽家の自作曲をとりあげている点に特長がある。そして全曲、比較的ストレートだ。デビュー作らしく素材にばらつきを感じさせる。後のアルバム内容からすれば、〝さわり〟という気もする。女性voリードのバラッドが好まれそう。（松本）



GRUPPO FOLK INTERNAZIONALE
Daloy Politzei

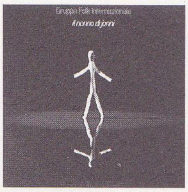
'77

●L'orchestra OLP/10013

○

◉

ロルケストラ・レーベルのアバンギャルド・トラッド・バンドが東欧トラッドに挑んだ異色の一枚。曲はブルガリアをはじめ、ユーゴ、クロアチア、マケドニア、モラビアなど東欧各地から選ばれている。これらの地の不協和音だらけ変拍子まみれポリフォニー漬けの音楽を再現するのは並み大抵の事ではないのだが、彼らは実際の東欧のグループ（例、MUZSIKAS等）と比較してもまったくひけを取らないレベルにあっさりと到達している。さらに恐るべき事には、あの東欧独特のボーカル・スタイルまで完璧にマスターしているのである。現地のトップ・クラスの女性シンガーと比較しても殆んど遜色無い。これだけは、技術があればマネできる、というものではないと思うのだが?（川辺）



GRUPPO FOLK INTERNAZIONALE
Il Nonno Di Jonni

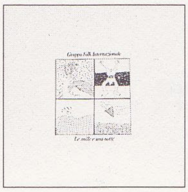
'79

●L'orchestra OLPS 55001

○

◉

前作の「Daloy Politzei」に続いて、そして同時期に発表されたマキシ・シングルと共に、彼等の本領が発揮されたアルバム。非常にオリジナリティを感じさせる1枚だ。A面2曲、B面3曲という構成だけに、1曲の中で展開する、あるいは育まれると言うべき曲の面白さが存分に味わえる。トラッドをベースにした複雑なリズムの強張、その狭間に現れる弦楽器の不協音、または異国情緒、中世音楽ふうの色相い、そして豊かなふくらみと流れ滑らかなヴォーカル等、どこをとっても自在。相当に意欲的だが余裕の成せる押さえ/押しで表現豊かだ。生き生きとした音楽の表情とは、こうしたことを言うのか。次々と移り行く中に大技小技有り、変拍子、不協音をも包み込む抱擁感有り。カトラーは大きな見落しをした。（松本）



GRUPPO FOLK INTERNAZIONALE
Le Mille E Una Notte

'79

●L'orchertra OM 101

○

◉

グルッポ・フォルク・インテルナツィオナーレは'76年に結成されたバンドで以来「FESTA POPOLARE」、「DALOY POLITZEI」、「IL NONNO DI JONNI」と3枚のアルバムをロスケストラより発表、3枚目のアルバムを発表した'79年にこのマキシ・シングルを同時にリリースする。従来のアルバムでの彼等のサウンドはイタリア、イギリス・メキシコ、ギリシャ等の民族音楽を独自の解釈でコンテンポラリーなものに変形させてしまうといったものである。しかし、このマキシ・シングルで聴けるサウンドは一段と冴えをみせているといえよう。そのサウンドはグリフォンとサード・イヤー・バンドを足したようなもので、別ないい方をすればイタリアのユニヴェル・ゼロ的なサウンドを有している。（山崎）



(IL) GUARDIANO DEL FALO
Domani

'77
●Fonit Cetra LPX 53
○
◉

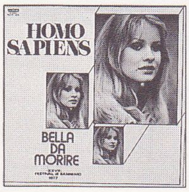
主にフォニット・チェトラに作品を吹き込んでいるグアルディアーノ・デル・ファーロ(燈台守)がいったい何枚のアルバムをリリースしたのかは僕は知らない。長く、イージー・リスニング的なロック作品を手がけてきている。バック・ミュージシャンは流動的であるが、基本的にシンセサイザー奏者を中心としたユニットである。本アルバムではドラムにトゥリオ・デ・ピスコポ、ベースにジジ・カペロットを迎え、イタリアらしいソフトなイージー・リスニング・ロックとでもいうべきものを聴かせてくれる。生のストリングス・オーケストラも導入される。プログレッシヴ・ロックとはいい難いが、そこに流れる情熱は充分にイタリアのアイデンティティーを感じることができる。一聴に値する作品であると思う。（山崎）



GUERCIA (Figura Goffa)
Guercia

'82
●Guemcia:8224 482
○
◉

ゲルチアは'82年に1枚のアルバムを自主製作しているテクニカルな4人組である。往年のプログレ名作群に比べると遜色は隠し切れないが、'80年代の作としてはまずまずの出来だ。尤も〝軽薄短小〟が主流である時代性に照らしてみても、かつての様な重々しい音作りが期待出来ないのも無理からぬこと。果たして本作でも軽やかなテンポのナンバーが中心となり、フュージョンタッチの仕上がりとなっている。時たま流れるアープオディッセイの音色や一部のメロディーラインにイタリアらしい影をかすかに伺い知ることが出来、純然たるフュージョンとは言い難いが、いわゆる〝ポンプ〟とも全く流れを異にし、プログレッシヴロックと呼ぶには若干物足りなさが残る内容である。（江田）



HOMO SAPIENS
Bella Da Morire

'77
●Rifi RDZ ST 14278
○
◉

'70年代の当時に国内盤が出たこともあってか、ホモ・サピエンスは多少なりともの知名度がある。計5枚のアルバムを出しただけあって安定感も言うに及ばず。これは4作目になる。作詞の大半、アレンジ、プロデュースをレナート・パレティが、そしてアルバムの約半分の作曲をロベルト・ヴェッキオーニが各々担当している。A面トップのタイトル・チューンが筆頭だが、10曲中2〜3曲を除いて甘いイタリアン・メロディに埋め尽くされているので、どれも大差ない。甘くとも清涼感のある歌声が良くも悪くも彼等らしく、オーケストラを使わずストリングス・シンセサイザーを使ってのバッキング等に見合いそうだが、一方で曲のスケール感が出ないのもその辺りか。小じんまりとした甘さが中堅所の印象を与える。（松本）



HOMO SAPIENS
Due Mele

'78
●Rifi RDZ ST 14294
○
◉

トスカーナ出身のホモ・サピエンスはI Tarli(毛虫)を前身とするポップ・ロック・グループで、レコード・デビュウ以前には、後にバンコのギターリストとなるロドルフォ・マルテーゼを擁していたことでも知られている。本作品は「Homo Sapiens」(74)、「Tornerai Torneró」(75)、「Parcos Bill」(76)、「Bella Da Morire」(77)に続くもので、惜しくも彼らのラスト・アルバムとなってしまった作品である。その内容は従来の作品と同様、情感を込めたボーカルとコーラスを主体としたロマンチックで親しみやすいものとなっている。なお、プロデューサー及び作詩、作曲家としてのレナート・パレーティの存在は大きく、長きに渡って、グループのサウンドの要であったと言える。（賀川）



HOPO
Senti

'82
●Game GLP 11982
○Anthology ANT 12, 11
◉

'82年という比較的新しいリリース年にもかかわらず、自主制作の為か、遂にレギュラー入荷されることなく廃盤になってしまったオポ。短い曲は多分にポップな感覚で作られているが、長い曲は甘く美しいトーンのギターを中心としたシンフォニック・サウンドである。テクニカルにせまるわけではないが、メロディを重視し、意外な展開をみせる曲想が魅力ある雰囲気を出している。'91年にMM RECORDSより事実上の2ndである「Finestra Dentro」をリリース。前作の延長線上にあり、かつ洗練度が増したシンフォニック・サウンドが聴ける。本作は長らく廃盤になっていたが、'92年にボーナス・トラックスを加えてCD化されている。（山崎）



HOPO
Dietro La Finesta

'92
●MM Records CAM 001
○
◉

'91年に制作されたHopoの2ndアルバム。これは完全にオリジナルなアルバムとして制作されたもので、いわゆるありがちな発掘物では無い。1stから約10年ぶりの作品となる訳だが、中心メンバーに変化は無く、ディジタルな響きが加わって、録音も新しめになっているが、全体的なイメージに変化は無い。それどころか、10年も経っているのにここまで変わってないと言うのも驚かされる話だ。つまり、あのHopo独特のメロディーと歌い回し、派手では無いが美しいキーボード、ある時は泣き、ある時はハートに迫るギター…と、彼らの魅力は全くそのままで残っているわけだ。決してテクニカルでもシンフォニックでも無いが、何か心に残る…Hopoとはそういうバンドなのだ。（渡部　暁）



HORUS
Stelle Di Battaglia

'93('78年録音)
●
○Mellow MMP 148
◉

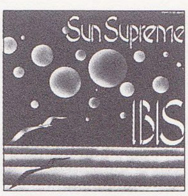
'78年に唯一のシングル盤「Respiro/Stelle Di Battaglia」をリリースし、'82年発表のティト・スキッパJr.「Concerto Per Un Primo Amore」に全面参加したトリノージェノバ圏のバンド。これはシングル2曲に未発表録音4曲を加え'93年に編集リリースされたもの。発掘物の一つ。シングル曲以外はスタジオ・ライヴなので非常にラフだが、バンドの資質を知るには十分だろう。未発表録音の内、2曲は牧歌的なヴォーカル曲の小曲、他2曲はジャズ・ロック・タッチで展開のある7〜8分のもので、どれも正式にアルバム製作されていたなら、好作になっていただろうことを予感させる。力量のあるバンドだと思う。切れのある演奏の軽快なシンフォニック・ロックになっている。録音状態は良くないが。 （松本）



HUMAN EXPRESSION
Being In The Becoming

'85
●private press HE 7
○
◉

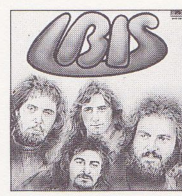
'80年代に入ってしばらくは、イタリアのみならず、ヨーロッパ全土でニュー・グループがアルバム・リリースすることは少なかった。このヒューマン・イクスプレッションあたりを契機にイタリアでも新しいプログレッシヴ・ロック・グループのアルバムをリリースしようという気運が自主制作レヴェルではあるが生まれ、以後、いくつかのグループの作品が生まれ、フェスティヴァルを行う等の発展を見るようになったのである。このグループは、あまりイタリアくささがなく、さらりとした印象のサウンドで、稚拙な箇所もあるが、全体的に夢幻的なイメージのトータル色の強いものである。新しいヨーロッパ系のシンフォニック・ロックの1つの典型がこのヒューマン・イクスプレッションだ。アルバムにはブックレットが付いている。 （山崎）



IBIS
Sun Supreme

'74
●Polydor 2448-022
○
◉

'72年、ニュー・トロルスが二つに分裂した際、ニコ・ディ・パーロ、ジャンニ・ベッレーノ、フランク・ラヴジェッリ、マウリツィオ・サルヴィの4人はヴィットリオ・デ・スカルツィと別れ連名のアルバムを発表した。その後、ジャンニがトリトンズに参加しリック・パーネルと交替、イビスと名乗り、'74年に制作されたのが本作である。ニコの音楽性を反映し、かつ、国外市場を意識したイビスの音楽は、本作では組曲となっており、ハードな音作りが中心となっている。'75年にはマウリツィオ、リックに替え、レンツォ・トルトーラとパスクァーレ・ヴェンディッテを迎え、2作目「イビス」を発表するが、ニコがヴィットリトと和解しジャンニとともにニュー・トロルスへ復帰したことにより、イビスは活動を停止した。 （松本）



IBIS
Ibis

'75
●Polydor 2448 036A
○Polydor 847 073-2
◉

ニュー・トロルスの流れを組むイビス。前作「Sun Supreme」はイタリア臭さこそあまり感じさせないが、出来ということではイタリアが生んだ数多いシンフォニック・ロック作品の中でも上位に位置するものであった。本セカンドは小曲7曲を集めた構成になっており、ヴォーカルを中心にしたややポップな曲やハードなギターを全面に押し出した曲が収められている。シンフォニック・ロックとしての醍醐味はなく、ハード・ロックとしても不足であり、ポップスとしては一般性に欠けるといったサウンドで中途半端な感が否めない。それでも、ギターのフレーズやコーラス、曲の展開にはニュー・トロルスの影響が感じられ、マニアックなファンは楽しめるかもしれない。 （賀川）



INSIEMEMUSICADIVERSA
Angelopetrpnella Paolopiselli Terziliomancinelli

'80
●Patean MPP 0300
○
◉

P.Piselli、A.Petronella、T.Mancinelli、3人の作曲名のある自主制作らしきアルバム。様々な音楽の混在を意味するインシェーメ・ムジカ・ディヴェルサというバンド名が指すように、つかみ所のないフリー・サウンドが全編に渡る。A面に3人の共作を1曲、B面には各作曲者各々の3曲を収録している。叫び声からエレクトリック・ノイズ、p、g、b、kbd、管楽器等、様々な楽器を用いてインプロヴァイズしていく。相当、行き当りばったりのユーモアさえ感じさせる。A面は流れにまかせた冗長さが所々目立つか。B面の3曲は各々にモチーフが定められていて、ピアノ弦による共鳴音、ピアノとコーラス、エレクトリック・ノイズを各々中心にしたもの。全体に集中力に欠ける硬さを感じるが…。 （松本）



IN TRE SULLA STRADA
In Tre Sulla Strada

'73
●Radio RRS 153
○
◉

イタリア・ロック絶頂期の隠れた1枚。メンバーは3人で中心人物Rinaldo Prandoniはボーカル、ギター、キーボードを担当し更に作曲、アレンジまで一手に引き受けている。テクニカルな面では語るべきものは何もないが、A①、②の美しさには無条件に感動する。爪弾かれる生ギターの調べに聴き惚れる内に知らぬ間に次曲は始まり、いつしか淡い郷愁と悔恨の彼方へと移行する。展開自体極めて単純であり、目新しいものは何もない。しかしそれでも尚この古法に則った、心の深奥に働きかけるかのような、淋し気なメロディーと愁いを帯びたボーカルは、眠りについた筈の記憶を呼び醒まさずにおかない。E.A.Poe, Formula 3等を更に私的にしたようなと言ったら少しは的を得ているだろうか? （鈴木伸一）



I. P. SON GROUP
I. P. Son Group

'75
●Utima Spiaggia ZLUS 55183
○
◉

Marco Rossi(g、fl、perc)をリーダーとするsax & fl、perc、b、vo & perc編成のアフリカン・ジャズ・ロック・バンド。2人のアフリカ人とミラノ出身の3人から成るバンドである。ジャケットからはプログレ色を期待させるが、コンガを多用した民族色の強いサウンドになっている。ヴォーカルもイタリア語ではなく、アフリカ系のそれ。スタイリッシュなジャズ・ロックでもフリー・インプロヴィゼイションでもなく、たおやかな流れのある軽味のものだ。全体に各奏者の音使いが繊細なので、とても耳なじみがいい。従って民族音楽特有の癖の強さよりも、むしろうっすらとヴェールをおびるような浮遊感を感じさせる。物静けさが漂ようような曲では、夕陽に沈むアフリカの光景が目に浮かぶようだ。　（松本）



ITALIAN SOUND
Torna

'77
●BUS 82093
○
◉

ラブ・ロックの傑作である。おそらく、男2人女1人が大写しになっただけのあまりにもお粗末なジャケットから、全く注目されていなかっただろう。私自身、某氏からこのLPを譲ってもらうまで彼らのことは知らなかった。全曲はずれなしのビューティフル・サウンドで、この手のラブ・ロックにつきもののオーケストラの導入もなく、それがかえってキーボード系の美しさを極立たせており実に好感が持てる。若干気になるのは女性ヴォーカルがやや品のない歌い方をしているところだが、トータルとしてみればそれ程のマイナスとはならないであろう。とにかくこの手のサウンドとしては一級品であることに間違いはない。なお、同レーベルにLP未収のシングルが2枚は確認されている。他にLPが有るかは不明。　（杉原）



JACULA
Tardo Pede In Magiam Versus

'75
●The Rogers TR 010001
○Mellow MMp 136
◉

'72年にディエトロ・ノイ・デゼルトという名でシングルを1枚発表したアントニオ・バルトチェッティは、次にインヴィジブル・フォース名義でシングルをリリース（これはヤクラの曲のテイク違い）し、'75年に本作を発表。Charles Tiringというキーボーダーの弾くチャーチ・オルガンを核としたサウンドで他のグループにはたとえようもないオリジナリティを持っている。ヤクラとしてはこの後、「ミッサ・ニグラ」というアルバムを録音、50枚だけプロモート盤を創ったといわれているが発表にはいたらず、メンバーが分裂。バルトチェッティはアントニウス・レックスを結成することになる。ブラック・マジックに傾倒する彼は、その後も音楽とブラック・マジックの狭間で、マイペースの活動を続けている。　（山崎）



JACULA
Anno Demoni

'92
●
○Mellow Records MMP 118
◉

ファースト・アルバム「Tardo Pede In Magiam Versus」が超然たる暗黒世界の一種の狂気じみた宗教性を醸し出しているのに対して、このアルバムでは闇の世界ではあっても緊張感は薄弱だ。チャーチ・オルガンを中心に怪奇的黒魔術の臭いはあるが、ファーストより楽器の種類も少なく地味な感じだ。各曲が年代別に録音されたものを集めたもので善し悪しがある。1曲目のタイトル曲では幻想交響曲のサバトの夜の夢の主題が使われているが荘厳さはなく割合と淡々としたものだ。オルガンの動きも面白味に欠ける。不気味さと暗く伸し掛かる雰囲気は味わえるがファースト・アルバムには及ばない。　（熊谷）



JANUS
Al Maestrale

'80, '81？
●private J-02
○
◉

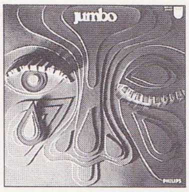
イタリアの'80年代前半は一般にプログレ不毛の時代として認識されているが、カステロ・デ・アトランテやアトンズのシングルはこの時期に発表されており、'90年代に花開くネオ・プログレの萌芽が既に存在していたのを我々が見過してしまった、という部分も案外大きいのかも知れない。このヤヌスも'80年代初頭に本作及びシングル3枚を残しているが近年まで殆ど知られていなかった。クレジットが無く詳しいことは不明。ファシズムと関わっていて表立った活動が出来無かったとの危い噂もある。シングル曲とは異り、歪んだギターを大きくフィーチャーしたクリムゾン風もあるが基本的にはフルートとキーボードをメインにしたおとなしめのクラシカルな作風。もっと良い機材があれば、と想像すると至極残念。　（森下）



J.E.T.
Fede, Speranza, Carità

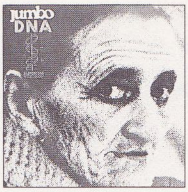
'72
●Durium ms A 77307
○
◉

ドリウム・レーベルは、イタリアン・ロック・ファンの間でも割と馴染みの薄い存在だが、イタリア本国では規模の大きい会社であるらしい。中ジャケに貼り付けられている金杯が、表ジャケのくり抜かれた部分から浮き出ているという、気品溢れるジャケットに包まれたJ.E.T.のアルバムは、全体的にハードな音創りがなされている。全盛期のユーライア・ヒープを彷彿とさせるようなA①のタイトル・ナンバーは、その代表的な存在だが、B面では、ニュー・トロルスの「UT」中の名曲「Chi Mi PuòCapire」を思わせるような、シンフォニックな趣を持った曲も聴かれ、いずれもがそれなりに魅力的である。全体的な出来としては、中堅的存在といった印象だが、忘れ去られてしまうには惜しい好作品と言えよう。　（城元）



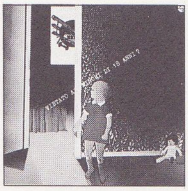
JUMBO
Jumbo
'72
●Philips 6323 012
○Philips 512 117-2
◉

ジャンボはヌメロ・ウーノからシングルデビューを飾った後、フィリップスに移り1stアルバムをリリースしている。日本ではたまたま、セッション的色彩の濃い3rdアルバムが最初に紹介されたため誤った先入観が植え付けられてしまった嫌いがあるが、本作では彼らの原点とも言うべき泥臭いブルースロックがとっくりと聴ける。ブルース特有のコード進行に渋めのギターやハーモニカが絡めば、もうそこはプログレ愛好家の守備範囲ではないが曲展開ではA.Fellaのダミ声が俄然生きて来る。ただしB面に入るとピアノ、フルートの使い方等、2ndと共通の要素も見られるようになり多少趣が変わって来る。素朴な印象さえ与えるB①の曲は、次作A③にも収録され、迫力満点となって再登場することになる。（江田）



JUMBO
DNA
'71
●Philips 6323-017L
○Philips 512 118-2
◉

ジャンボのセカンド・アルバム。サード・アルバムがゲスト・ミュージシャンを加え、緻密な構成とハイクォリティな演奏力を誇るのに対し、本アルバムは、オリジナル・メンバー自身によってのどかさを感じさせる歌を中心にしたしぶみのある曲を展開させている。クセのあるボーカルが好き嫌いを分けてしまいそうな気がするが、聴き込めば聴き込む程に深みが増してくるアルバムだと私は思う。バックに流れるピアノやフルートがとてもイタリア然とした響きを持っている。この時点でのメンバーは、アルヴァロ・フェッラ(Vo.Gui)、ヴィート・ヴァルツァーネ(Dr)、セルジォ・コンテ(Org)、ダニエーレ・ビアンキーニ(G)、ダリオ・グイドッティ(Fl)、アルド・ガルガーノ(Bas)。（山崎）



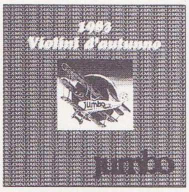
JUMBO
Vietato Ai Minori Di 18 Anni
'73
●Philips 6323 025
○Polygram 846 462-2
◉

JUMBOのサードアルバム。1曲目はいきなりのボーカルにのけぞってしまうが、それに続く間奏部が素晴しい。広がりのあるE・ギターとフルートの掛け合いからギターソロに移ったかと思うと、一転してピアノのアルペジオの上を叙情的なバイオリンが絡み、思わずQVLの2ndかと酔いしれてしまうが、それを断ち切る様に再びボーカルが入って来る。が、裏を返せば、このクセのあるボーカルが曲を魅き立たせることになろう。この曲の構成は見事。2曲目では代わったドラマーの躍動するリズムの上をヘビーなブラスとムーグとハモンドが絡むスリリングな曲。B面ではメロトンも使用されているが、全体的には妖気漂う変幻自在のボーカルが支配しており、非常にアクの強いイタリアらしいサウンドになっている。（高橋）



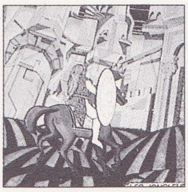
JUMBO
Live
'92('90年録音)
●
○Mellow MMP 108
◉

Jumboのパリで'90年に行われたLive。当然音は良い。内容を聞いてビックリ、なんと名作3rdからの曲が中心なのだ。あの3rdというアルバムは、彼らの持ち味であるブルース色をベースに、これ以上無いと言うぐらい緻密且つ練りにねって作られたアルバムであったが、それは当然セッション・ミュージシャンを集めて、これでもかとばかりにダビングを繰り返して作られたものだろうと思っていた。ところがこのLIVEで聞ける音は間違い無くあの3rdの音だ、しかもダビングを繰り返したサイボーグ的な音としてでは無く、恐ろしいまでに人間臭く熱い匂いを持ってJumboが目の前に迫ってくる。Fellaがアコースティック・ギターを持って歌い始める瞬間、ほとんど目の前が真っ白になった私であった。（渡部暁）



JUMBO
Violini D'autumn
'92('83年録音)
●
○Mellow MMP 119
◉

'83年に制作されたスタジオ録音音源にLIVEを加えた物である。音的にはあの名作3rdのような驚異的な集中力で畳み掛けるようなサウンドでは無く、1st～2ndの延長線にあるようなブルース・ロックを基盤にしたややPOPなものとなっている。ただし、内容的には主要メンバーが脱退したためか、かつてのようなエネルギーは無くなり、どうにも引っ掛かりの無い音作りなのが残念だ。とは言うものの、あの3rdアルバムは当時のシーンの影響を受けた彼らの本質とはややかけ離れたものであったことも事実であり、彼らが発表している多くのシングルでも聞けるとおり、このアルバムの音が彼らの本来の音により近いと言えよう。どちらかと言えばマニア向けの音源発掘である。（渡部　暁）



(LES) JONGLEURS
Canti E Balli Medioevali
?
●Pentagramma LP PG 243
○
◉

イタリアのトラッド・ミュージシャンの活動のメインはレコード・リリースよりも生演奏にある様で、小さな町々にそれぞれ趣味的なバンドがあり当地の少さな会場で演奏したまたま作った自主盤をついでに売る、というのが実情だろうと推測出来る。おかげ様でどれもこれも珍しいし高い。それでもこんな作品に出会うと再び苦労と出費を重ねる覚悟が出来てしまう（当然スカも沢山つかむ）。ムジカリアを夜、スオノフィチナを闇、メデア・アエタスとジュウラーリ・ディ・ピアッツァを世紀末的頽廃と耽美のイメージとすると、高音域の楽器を多用し清純さと愛らしさ一杯の女性ヴォーカルを擁する彼らの音楽はまさしく天上の音楽と言うにふさわさい。（森下）



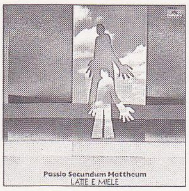
JACOPONE
Jacopone
'73
●RCA DPSL 10608
○
◉

この〝ヤコポネ〟と題された作品はフェスタ・モビーレのメンバーが参加しているロック・オペラ・アルバムということで一時話題になった作品。どういう内容なのかはイタリア語の認識不足の為、よくわからないが、わりと明るめの曲想で、他のロック・オペラの例にもれず、音楽単体として聴いた時に、それ程イメージがわかない。又フェスタのメンバーも自分達のプレイをできず、あくまでセッション・マンとしてのそつないプレイに終始している為、あの、技術的なスリリング極まるプレイを想像して聴くとがっかりするだろう。内容がわからな人には余り楽しめないと思う。（松本）



LASER
Vitf Sul Pianeta
'73
●Car Juke Box CRJLP 00032
○Mellow MMP 111
◉

少し前まではよっぽどのマニア以外は誰も知らなかったLASERの唯一のアルバム。内容はプログレッシブ・ロックと言うより、ややハードで、渋いブルース、サイケ・ロック。'70年代始めのイギリスにゴロゴロしていたあのサウンドだ。ところがこれがイタリア語で歌われると、あの独特の節回しが生きてきて、やはりこれも渋いオルガンのバックとあいまって、なんとも見過ごせない作品になってしまう。結論から言えばB級中のB級と言える作品だが、イタリアン・ロック特有の「あの感じ」は随所に見られる。多分、英語で歌われてたら見向きもされなかったであろうこのアルバム、イタリア語であると言うだけで無視出来なくなってしまう我々はいったいなんなのであろうか？（渡部　暁）



LATTE E MIELE
Passio Secundum Mattheum
'72
●Polydor 2448 011A
○
◉

新約聖書中の〝キリスト受難〟をテーマに創られたこのアルバムこそ、イタリアン・ロック史上、まごうことなき最高の名盤だ！　ヨーロッパの伝統芸術に触れる時、その精神的背景にあるキリスト教の存在の大きさを認識せずには決していられない。同じ聖書の内容にしても、ほとんど原体験に近いヨーロッパ人にとっての重み、深みは、（信仰の有無に関わらず）「知識」ないしはそれに類するものだ。そしてそこから生まれる「真実」に圧倒され、「伝統」を感じとる時に、私達はこの作品の素晴らしさを知るのだ。多彩なキーボード群とか、合唱団を使っているとかは、この作品を賛辞する上で、あくまで二次的なものにすぎない。（城元）



LATTE E MIELE
Papillon
'73
●Polydor 2448 015A
○
◉

極端にパーカッシヴなオルガンのイメージ強いためか、昔から〝E,L&P的〟と評される事の多かった2ndアルバム。空前絶後の名作の後に出た作品だけに比べてしまえば分が悪いが、本作もまたイタリアン・ロック全盛期を代表する一枚だ。目まぐるしくキーボード・オーケストレーションの展開の中を、物悲しいヴォーカル・メロディが少しずつその表情を変えながら幾度となく現われては消えるタイトル組曲は絶品。とりわけ第3楽章中の〝Rimani Nella Mia Vita〟や第5楽章〝Il Verdetto〟の後半部などは、狂おしいまでのリリカルさに満ちている。B面はクラシックの名曲を複数モチーフに用いて彼ら風に仕上げた組曲が中心。本作にはテストプレスのみの英語ヴォージョンが存在し、近年CD化された。（城元）



LATTE E MIELE
Aquile e Scoiattoli
'76
●Magma MAL 01
○
◉キング KICP 2388

ドラムのアルフィオ以外のメンバーを一新し、ツイン・キーボードの4人編成となって'76年に発売された3rd。1、2作めと比べると小粒な印象は否めず、新メンバーもオリジナル・メンバーほどの強い個性は持ち得ていない。A①からA③までが新メンバーによる歌物ナンバー。A③の出来が特に良く、〝Papillon〟のメロディーを思い起こさせる。A④の〝Opera 21〟はベートーヴェンの曲のカヴァーで、やはり「Papillon」B面のイメージ。聴き物はオリジナル・ラッテ・エ・ミエーレ以来のナンバーであるB面全てを使った大曲〝Pavara〟だ。少々構成に散慢な点はあるが、ピアノ、ハモンド、ムーグ、ソリーナが織り成すオーケストレーションはラッテ・エ・ミエーレ以外の何物でもない。（城元）



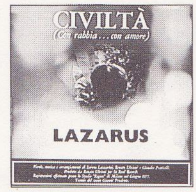
LATTE E MIELE
Live
'92
●
○Mellow MMP 110
◉

バッハの「トッカータとフーガ、ニ短調」の荘厳な調べをオープニングに幕を開けるこのライブは当時のイタリアンロック界きっての名グループであるラッテ・エ・ミエーレが彼らの絶頂期である'74年に行ったライブを収録したものである。内容も先のオープニングよりメドレーで「受難劇」の前半部分が通しで演奏され、その後のMCを経て「パピヨン」の中間部分へなだれ込む。そして収録曲の最後はなんとこのライブの数年後にリリースされる3rdの中の「パバーネ」の原曲なのである。厳しく聴けば演奏面での危なっかしさや音質の悪さなど若干の問題点はあるのだが、この内容であればファン心理として2枚組のライブ完全収録（祈！実現）で聴きたくなる程で、まさに貴重で夢のようなライブである。（島村）



LATTE E MIELE
Vampyrs
'92
●
○Mellow MMP 131
◉

これはなんと3rdを出した3年後の'79年頃にレコーディングされていたラッテ・エ・ミエーレの未発表作品をCD化したものでメンバーの方も3rdの4人からキーボードの片方のミッモが抜けた3人編成になっている。内容的にはこの時期のシングルを聴いても分かる通りほんの一部に往年のプログレ的感覚はあるものの大半は歌詞が一部英語であるのと曲作りが当時の流行によるものか多分にアメリカナイズされているのでかなり以前のアルバムとはイメージを異にしている。しかしながら、やはりそこは往年のキャリアからか全体的にそこはかとなく香るイタリアの雰囲気は感じることが出来る。というわけで、以前のイメージにとらわれずイタリアンハードポップという感覚で聴くのが正解の作品であろう。（島村）



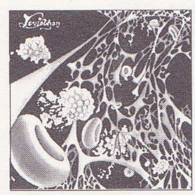
LAZARUS
Civilta (con rabbia... con amore)
'77
●Reul ZPLRE 34024
○
◉

RCA傘下のReulレコードがリリースしたこの作品は、美しくドラマチックなオーケストレーションと粘っこいギター、そしてコチャンテをやや荒々しくしたようなボーカルを絶妙に調和させたA①〝Con Rabbia... Con Amore〟を筆頭に、染々としたボーカルを清らかなメロディーが印象的な〝Il Grattacielo〟等、心に残る歌を聴かせてくれる好アルバム。作詩・作曲・アレンジはLoreno Lazzarini, Claudio Praticelliとプロデュースも手掛けたRenato Ulvioniに依る。コチャンテ、バリオーニ等のファンには絶好のアルバムとなるだろう。（鈴木伸一）



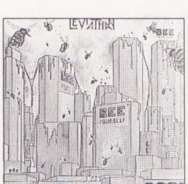
(I)LEONI
La Foresta
'71
●Ricordi SMRL 6081
○
◉

トルトナ出身のトリオ、レオーニ。荘重なパイプオルガンを配したデヴュー・シングル「Ogui Notte」が知られているが本LPも決して捨てたものではない。端正なピアノに導かれて湧き出る幽玄なオルガンとフルート、哀感を秘めた夢見心地のヴォーカル、派手さは無いが100枚目、200枚に聴くイタリアものとしては充分堪能出来るハズ。個人的にはレアーレの1stやトリアーデのB面を思い出してしまった。B面にはビートの名残りかやや散漫な曲もあるが、ゲストの女性スキャットが再び登場する最後の曲を聴いてそれも許せる。もう一枚のシングル「Baciare Baciare/Il Rinoceronte」(Ricordi SRL 10636 '71)のA面は未収だが音楽祭狙いでややポップ、B面は収録だがヴァージョン違い。（森下）



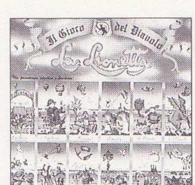
LEVIATHAN
Heartquake
'88
●Demon OMN 0188
○
◉

カラービニール仕様の300枚限定版とノーマル版の二通りのLPを制作する、というその筋の壷を押さえた(?)デビューをしたLEVIATHAN。内容もこの時代のプログレにふさわしく、クリアーな音色とインターナショナル性が特徴となっている。イタリアン・ヘビィプログレのどろどろした雰囲気も、イタリア語の歌詞に代表されるイタリア臭さはここには無い。このグループの持ち味は伸びやかなボーカルや親しみ易いメロディーであり、イギリスのグループかと思ってしまう透明な音作りである。また、デビューアルバムであるにもかかわらず、しっかりした演奏やアレンジのため安心して聞ける作品になっている。LPもダブルジャケット仕様で美しいイラストだが、ここまでやるならレーベルデザインにも凝って欲しかった。（野呂）



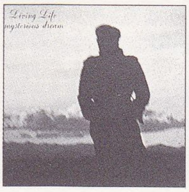
LEVIATHAN
BEE YOURSELF
'90
●
○Contempo CONTEDISC 154
◉

一年ぶりのセカンド・アルバムで、音の方がけっこうタイトな要素を増して来ている。そのせいか、ますますブリティッシュな指向が強まっているような気がする。アコースティック・ピアノを多用し、シアトリカルな展開を見せているのだが、中期ジェネシス＋アンジュといったところを目指すのだろう。構成、展開に於て、若干ひねくりすぎの部分もある気がするが、それを上回るだけの軽快さも兼ね備えていて、5曲目のような20分近い大作でも飽きは来ないし、破綻をきたすようなことはない。ただ、どこか突き放すような面が有り、もうすこし情緒が有っても良いのではないかと思う。90年代のイタリアン・グループの中でも緻密さと知的な構成では上位に位置する。（津田）



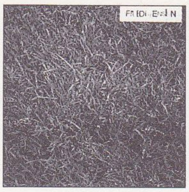
(LA) LIONETTA
Il Gioco Del Diavolo
'81
●Shirak SLN3307
○
◉

「Danze E Ballate Dell'Area Celttica Italiana」(Shirak SLM3304)が1stで本作が2ndだと思う。'84年にシングル「Marianna Rock/La Tigre Della Malaysia」(Shirak LN84035)をLionetta Scena名義で出しているがトラッドではない。本作及び前作はドトラッドだが泥臭過ぎず我々にもアピールするものがある。ダンス・チューンとコーラス・ワークが多い為些か重くゴツゴツした印象を与えるがそれでもそこかしこに滲み出る物哀しい情緒性は充分魅力的。紹介し切れなかったイタリアトラッド系作品としてLes Troubadours、Malvasia、Lou Dalfin、I Viulan、La Cantarana、Folkestralia、その前身のMandragola、等々、数え挙げれば切りが無い膨大な数の作品が、その殆どが全く知られずに、眠っていることをお忘れ無きよう。（森下）



LIVING LIFE
Mysterious Dream
'81
●Shirak SLL 3308
○
◉

オリジナル盤はそれ程多く出回ってないが、何故か一昔前に国内盤LPが出ていた。本作は彼らの2ndで、'78年に「Let : From Experience to Experience」(Shirak LL 001)という1stが出ているが、そちらは残念ながら未聴。伝え聞く所ではあまり芳しい出来ではないとの噂だが真偽は不明である。クレジットには8人、中ジャケの写真には5人のメンバーが見えるが、ドラマーでKeyも担当するジョニー・ベッティなる人物が全曲の作曲、アレンジ、プロデュースを手掛けている。バンドの音楽的方向性は今一つ摑み所がない。随所にジャズぽい演奏があるかと思えば、タイトル曲はどこかピンク・フロイド的だし、クラリカルにはじまりハモンドが活躍するB①はなるほどイタリアかな、という感じ。いずれも決め手が弱い。　(城元)



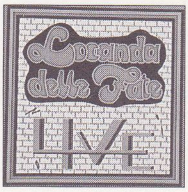
LIVING MUSIC
To Allen Ginsberg
'73
●RCA DPSL 10574
○
◉

〝Howl〟〝Song〟〝Lysergic Acid〟〝Mandala〟、'60年代のアメリカを動かした思想/実践家、アレン・ギンズバーグのこれら詩を歌った4曲を含む非カンツォーネ系の意欲作。男女6〜7人のミュージシャンが集まっている。他の曲を含めて、サウンド上ではフォーク、ジャズ、インド音楽をミックスしたもの。むしろそれよりも、ヒッピー・ムーヴメントの先導的な役割を果たしたギンズバーグへの共感が表わされたコンセプチュアルな部分に多くを負った性格のアルバムだろう。その意味で、時代の流れの中から語られるべき産物だと思う。13ページのリーフレットには、当時のいかにも知的でヒップな学生といったふうのメンバー写真や、ギンズバーグの街頭活動のドキュメント写真が、数多く掲載されている。　(松本)



LOCANDA DELLE FATE
Forse Le Lucciole Non Si Amano Piu'
'77
●Polydor 2448 055
○Polygram 519 389-2
◉ポリドール P28P 25071

西洋音楽が数百年来追い続けてきた構築美――その一つの完成された姿がここにある。ツイン・ギター、ツイン・キーボード、ベース、ドラム、ヴォーカル、そして時折ギタリストが吹くフルートも加えた、計7人のメンバーによって織り成される完璧無比なアンサンブルとテクニックには、聴く者すべてが圧倒されるに違いない。イタリアン・ロックがその輝きをほぼ失いかけていた77年にロカンダ・デッレ・フォーテは世に出た。しかし彼らは、先駆者達が持ち続けてきた〝美意識〟を見事に受け継ぎ、遂にそれを極限にまで昇華させてしまったのだ。この煌きを、一体どのような言葉を用いて伝えたら良いのか。とにかく、すべての人々にこの作品を聴いていただきたい。ただそれが願うばかりである。　(城元)



LOCANDA DELLE FATE
Live
'93('77年録音)
●
○Mellow MMP 140
◉

だせるものならなんでも出すという感じのメロウ・レコードのディスコグラフィーの中には正直いって質の低いものもあるが、良質な作品も少なくないのも事実だ。このロッカンダ・デッレ・ファーテのライヴは正に良質なものの一つ。アルバム未収録曲のライヴを含む演奏で録音クォリティーも高く、価値ある1枚である。予想通り、彼等の演奏水準は高く、いい時期のライヴなのでヴォルテイジは高い。我々は、とかくアルバムだけでグループを評価するしか手だてがないが、各グループにはそれ以外にも長い歴史があり、アルバムが全盛期に創られるとは必ずしもかぎらない。そういう知られざる側面を浮きぼりにした本作はファンにはたまらない1枚といえそうだ。　(山崎)



LOGAN DWIGHT
Logan Dwight
'72
●PDU Pld A 5054
○
◉

ジャケットを開くと登り詰めるように石造りの階段が画面いっぱいに広がっている。しかも赤紫に染められて、まるでザッパの「Hot Rats」のように刺激的だ。この感覚はどこか音に通じる。ローガン・ドゥワイトは'72年に結成され、1枚のアルバムとアルバムからのシングル・カット「Logan Dwight/Moments Of Eternity」1枚を'72年に残した。バンドはvo & g、vo、b、g×2の5人編成。dsは3人のゲストが曲ごとに担当、またトト・トルカーティが2曲でKbdに参加。'70年代初期ならではの躍動感があり、ひどくナイーブな浸み入るようなパートがあれば、オーケストラの突入やブラス導入、タル張りのフルートもある。そして英米のロック色も強い。約半分の曲で聴ける女性voも清らか。様々だ。　(松本)



LOY & ALTOMARE
Chiaro
'74
●CBS 69094
○CGD 9031742832
◉

Checco Loy、Massimo Altomareの二人はデュオを組んでCBSから3枚のアルバムをリリースしている。出来からすると1枚目の「Portoberro」が、ナイーヴさを多く感じさせるもので、3枚目の「Lago Di Vico」が、本作の延長にあるといったところだろう。1枚目ではデュオそのままの、内容もアコースティック・ギターとヴォーカルを全面に出したものだったが、2枚目になると何人かのゲストを迎えて音も派手に多彩になっている。その中にはなぜかステファン・グロスマンまでいる。アップ・テンポな曲が増えた分、1枚目の瑞々しいような空気が多少薄れているのが残念。それでも何曲かにはこのデュオのフォーク・タッチのイタリア・メロディが生きている。　(松本)



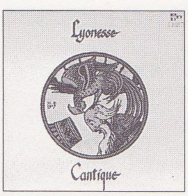
LUIS BACALOV, GIOVANNI TOMMASO
Sincretic I
'80
●General Music 803 010
○
◉

フランスのジェネラル・ミュージックからのリリース。イタリアには多くの有能なアレンジャーがいるが、イタリアン・ロック・ファンにとってみると、エンリオ・モリコーネ以上に名の通っている人が、このルイス・エンリケス・バカロフだろう。オザンナの「Milano Caribro 9」、ニュー・トロルスの「Concerto Grosso」、RDMの「Contaminazine」等は、この人がいなければあの内容には成り得なかったわけだから、そう思うと随分とロック・ミュージシャンに携った人である。このアルバムはバカロフ作曲、編曲の5曲を収録したオリジナル作の一つ。彼がピアノ、連名のG.Tmmasoがコントラバス、他に二人のPerc奏者が参加。ジャズ・タッチの少し洒落た雰囲気の作風になっている。現代クラシック寄り。（松本）



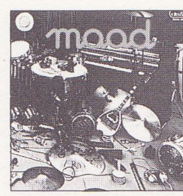
LUNA
Luna
'81
●Splash SPL 716
○
◉

元オザンナのダニーロ・ルスティチがオザンナ解散後に結成したグループがこのルーナだ。オザンナ、そしてチェルヴェッロという比類なきアイデンティティーを持ったグループ達はこのダニーロ・ルスティチがいたからこそ存在できたといっても過言ではない。それ程、オザンナ・ファミリーの中心的人物だったのである。しかし、オザンナ解散後は麻薬の為に演奏もままならないといった状態が続いたという報道もあったことがある。これがダニーロのラスト・プロジェクトとなって、このアルバム以後、彼の動向は伝えられてはいない。ヴォーカル中心のややポップなサウンドだが、僕は決して悪い作品ではないと思う。本物のロック魂を感じる作品だ。（山崎）



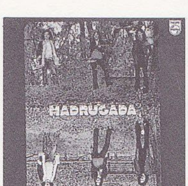
LYONESS
Cantique
'75
●PDU Pld A. 6029
○
◉

アルバム・タイトルがそのまま内容を伝えている。LYONESSは恐らくイタリア人とフランス人からなる混合グループで、過去に3枚のアルバムを残している。〝Conto〟と〝〜tique〟というとおり、ケルト系のトラッドを扱うことの多いバンドだ。これは2作目になるもので他に「Lyonesse」(PDU Pld A 5093, '74)と3rd「Live In Milan」(Pld A. 7004, '79)がある。オープニングのハンマー・ダルシマーによるメロディから女性voのアーシーな歌へ、とピアノ等のサポートをつけるなどして演奏される。基本的にはトラッド・リヴァイヴァルの中で語られるバンドだが、鍵盤楽器の多用から、土臭さの強い演奏を幾らか聴きやすくしてくれる。全体にざらっとしとブルターニュ系のサウンドに近い。（松本）



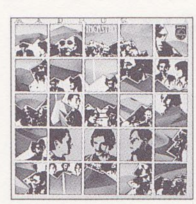
MAAD
Maad
'76
●Divergo DVAE 008
○
◉

イタリアのフリー・ジャズ・ミュージシャン、Giudo Mazzon(ストーミー・シックスも共演している人物)とのつながりを持つAttilio Zanchiとミラノのコンセルヴァトワールで電子音楽を専攻するPino De Vitaを始め計6名のミュージシャンから成るバンド。と言っても、もちろん'76年当時の事。彼等が残した唯一のアルバムがこれ。ジャズ・ロック作と言っていいと思うが、エスニックな要素やフリー・アプローチも混在して、更に曲想がアメリカを向いたりカンタベリーを向いたりする。中々多彩な仕上りだ。作曲/アレンジは上記の二人。計4曲とロング・チューンぞろい。他にスカラ座のオーケストラのティンパニ奏者もいたりと、様々なカラーを活した好作に仕上っている。（松本）



MADRUGADA
Madrugada
'74
●Philips 6323 033 A
○
◉

'76年に「インカストロ」というアルバム(PFMに加入したバイオリニスト、ルチオ・ファブリなどをゲストに迎えている。)を発表した3人組のグループ、マドルガーダのこれは1枚目のアルバムである。詩情に満ちた美しい音世界を展開するこの作品は、例えばイ・ディク・ディクやエキペ84あるいはUTといった当時の多少ラヴ・ロック的なグループが残した名作に勝るとも劣らない内容となっている。キーボード類こそ多用してはいないが美しく清らかなボーカル・ハーモニーとイタリア的な叙情的なメロディー・ラインがトータルな構成の中に泉の如くあふれ出る。夢見るような音の綴織りの中でみずみずしい生命の息吹きを感じずにいられない。（鈴木伸一）



MADRUGADA
Incastro
'76
●Philips 6323 046
○
◉

2作目。みずみずしい情感をひめたデビュー作から多少なりともトーンが洗練され、また音楽性も広がった。バンドは本来、Kbd、b、vo & dsのシンプルな編成で歌物バンドのカラーも強いが、このアルバムになるとインストゥルメンタル・パートが増え、時としてアヴァンギャルドなプレイやジャズ・ロック・タッチの演奏も聴かせる。vlnのルチオ・ファブリ他、sax、fl、el-gのゲスト計4名に負う所も見逃せない。特にデビュー作の情感を引き継ぐようなヴォーカル・パートからフリー・ジャズふうに移る1曲目12分のロング・ナンバー、切れ味鋭く軽快なB①などが印象に残る。全体を通してみるとデビュー作とは随分と傾向が変っている事に気づく。ジャズ・タッチのクリアーな響きは本作の特徴。（松本）



MALIBRAN
The Wood Of Tales
'90
●Pegaso PGO-001
○
◉

現在の本拠地はローマだが、メンバーはカターニャの出身だといわれている6人組。自主製作の本作がデヴュー・アルバムだと思われる。フルート奏者の存在が強調され、ジェスロ・タルの名が引き合いに出されるものの、全体の印象は静動の対比がよく練られたシンフォニック・サウンドである。'80年代以降のこの路線のバンドとしては楽曲に強い魅力が感じられる。反面、技術が楽曲に追いついていないのもこの手のバンドの共通項といえるかもしれない。ドラマチックな展開の山場にあって、聴くにしのびないリード楽器のソロ。重厚な展開なのにチープな音色。なお、本作にはメンバー・フォトつきカラー・レコードのリミテッド・バージョンとノーマル・バージョンの2種類がある。 （ミワ）



MALIBRAN
Le Porte Del Silenzio
'93
●
○Pegaso PGO・002
◉

マリブランの2作目。前作同様、自主レーベルからのリリースである。メンバーに変動はなく、音の方向性も前作と変っていない。要所で出てくるフルートを中心としたアコースティック・アンサンブルがいい味を出しており、楽曲のメリハリ、押しと引き、変化の多いアレンジなど、非常にアトラクティヴといえる。特に27分にもおよぶ最終曲。10のパートからなり、表現力の豊かさとドラマチックな展開には胸を打つものがある。このバンド、技術的な進歩さえあれば、後世に残る傑作を生み出せる気がするのだが、いかんせん、まだ志と情熱で技術を補っているレベルである。その情熱とは〝デディケイト〟クレジットにある通り、プログレッシヴ・ロックを愛する全世界のリスナーに向けられている。 （ミワ）



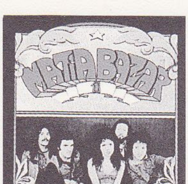
MANGO
La Mia Ragazza É Un Gran Caldo
'76
●RCA TPL 1-1224
○
◉

「Movimenti Nel Cielo」('78年)によって知られるMaurizio Fabrizioのオーケストラ・アレンジにかかると一瞬にして、深遠な世界に変わってしまう。彼の功績が多大ながらも、高鳴りを押えることができないB①は曲そのものがすばらしい出来であることは疑う余地がない。全曲Armando Mango作詞、Pino MangoとSilvano D'Auriaの作曲によるもので、1曲を除いて兄弟と思われるMangoのどちらかがヴォーカルを取っているようだ。セッション・マンとしてよく見かける人達が演奏を担当しているので、まったく破綻がない。この点がやや物足りなさを受ける原因だろうが、RCA系の歌物が好きな方は気に入るに違いないだろう。 （吉瀬）



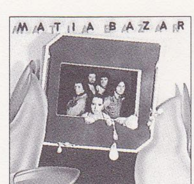
MASSIMO TERZANI E RAFFAELE DE CICCO
Non Eravamo Soli
'00
●
○
◉

A面は歌物中心、B面はインストゥルメンタルという極端な構成のアルバム。自主制作らしい安っぽいジャケットは仕方無いが音はかなり良い。イタリアらしい詩情と哀愁が堪らないボーカルを聴かせてくれるTerzani Massimoの唱法はErmano De Biagiを思い出させ、イタリアの片田舎へと迷い込んだような錯覚に落ち入る。ピアノ、オルガン、シンセ、バイオリン、マンドリン等のバックが美しく淋し気に色取りを添える。対照的にオルガンとシンセサイザーを主に創出されたB面は特に1曲目〝La Ballata〟が素晴らしい。美し過ぎる程のイタリア的叙情と清麗な響きは胸を締め付ける。哀しく果敢無い音が綴れ織りなすロマンシズムはWappasouに通底する純潔な精神にのみ産み出せるものなのだろう。 （鈴木伸一）



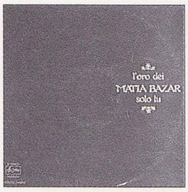
MATIA BAZAR
1
'76
●Ariston AR/LP 12283
○
◉

マティア・バザールの1stアルバムである。ムゼオやジェットに在籍したミュージシャン達を中心に結成されたバンドと聞いて、これほど現代感覚溢れる洗練されたポップ・サウンドを想像できる人はいまい。ラッテ・ミエーレ等と同様、過去のサウンドとはキッパリと訣別し、時代の流れの中に積極的に身を投じたことが結果的に成功へとつながったわけである。当時のリーダーは殆どの作曲を担当したキーボード奏者ピエロ・カッサーノ(81年に脱退)で、フュージョンタッチのソフトなナンバーから無難なイタリアンポップスまで幅広く手掛けているが、全体的に、声量豊かな女性ヴォーカリスト、マティアの歌声が十分に生かされた作りになっている。なお、2ndではライヴが聴かれる。 （江田）



MATIA BAZAR
Granbazar
'77
●Ariston AR/LP 12320
○Virgin MPICD 1010
◉キング 260E-52069

1stの翌年にリリースされたこの2ndではなんとそのA面に早くも3曲のライブを収録し、スタジオアルバムで聴かれるよりもよりパワフルでノリの良い彼らのステージでの演奏を聴かせてくれる。またこのライブではビートルズの〝イエスタデイ〟のカバーも演奏されておりそのマティア流にアレンジされたバージョンはなかなかに興味深いものとして聴くことが出来る。このように2ndで早くもライブ音源を出してくるところなどから考えると当時の彼らはかなり自信に満ちノリにノッていたのではないだろうか。また、B面のスタジオサイドでも1st同様の若干荒削りではあるものの良質で洗練されたイタリアンポップスを収録している。なおこのアルバムのオリジナルは穴開きの変形ジャケットである。 （島村）



MATIA BAZAR
L'oro Dei Matia Bazar Solo Tu

'77
●Ariston AR/LP 12326
○
◉

2ndと同じ'77年にリリースされた彼らの3rdアルバムは同年にリリースした新曲である〝Solo Tu〟をフューチャーし、その他に1stと2ndから曲を収録した彼ら初のベスト盤である。というわけで収録曲の中で新曲は前記の〝Solo Tu〟のみだが、この曲は'77年から'78年にかけて大ヒットを記録しマティアの人気を確立した重要な曲なのである。サウンド的にも初期の彼ららしいちょっと牧歌的でほのぼのした感じのなるほど親しみ易い曲である。またその他の収録曲には1stより5曲、2nd(スタジオサイド)より3曲が収録されているのでてっとり早く初期のマティアの醍醐味を味わうことが出来るアルバムになっている。なお、これのオリジナルLPはポスター付きである。

(島村)



MATIA BAZAR
Semplicita

'78
●Ariston AR/LP ?
○Virgin MPICD 1011
◉

ベストアルバムであった3rdの翌年の'78年にリリースされた久々のオリジナルアルバムであるこの4thは、彼らの現代的で斬新な部分と後のアルバムで一時色濃くなってくる、よりドラマチックでロック的な部分が非常にバランス良く結実した作品で、初期マティアサウンドの中での最高傑作だといえる珠玉のイタリアン・ポップス・アルバムである。この時期のマティアは〝チャオとひとこと〟でサンレモ音楽祭での念願の優勝を飾り、チャートの方でも年間ベスト100にこのアルバムのタイトル曲である〝TU SEMPLICITA〟を含め4曲がランキングされるなど、まさに破竹の勢いで、アルバムの出来の素晴らしさも含めまさに第1期黄金期を築いていたのであった。

(島村)



MATIA BAZAR
Tournée

'79
●Ariston ARLP 12359
○Virgin MPICD 1012
◉

マティア・バザールは75年の夏のディスク・フェスティバルで〝Stasera Che Sera〟を歌ったのが大ヒットし、76年にアリストンよりアルバム・デビューした。80年に発表した「Il Tempo Del Sole」まで斬新なアイデアによる良質なポップでヨーロッパ全体で支持を得るようになったが、キーボードのピエロ・カッサーノ脱退後はテクノ風になり面白くなくなった。このアルバムはカッサーノが目指すモダンなポップスがプログレッシヴ・ロックのエッセンスをも吸収し、最もスケールが大きな作品。彼らのアリストン時代の録音はオックスフォードという再発シリーズで出ていたが会社が倒産したために、最近ではCGDからアト・ランダムな編集で出はじめている。

(Hiro Tanaka)



MATIA BAZAR
Il Tempo Del Sole

'80
●Ariston AR/LP 12383
○Virgin MPICO 1013
◉

根本的には1stから続く第1期マティア流ポップスの範中にある作品なのだが、この5thでは前作「TOURNEE」でも聞かれたようによりロック色が強くなり、曲のイメージも演奏が若干派手になっている分よりドラマティックになっている。これはメンバーの中でもキーボードで初期の音楽面での中心だったピエロ・カッサーノの志向が強く出た結果のようだが、それによりこの当時グループ内では音楽性をめぐっての対立が表面化してしまった。そして最終的にはそのカッサーノがバンドを去り第1期マティアは終わりを告げることになるのである。アルバムの内容としては前述の通りよりドラマティックなサウンドになっているので彼らの作品の中では一番プログレファンにアピールする作品であろう。

(島村)

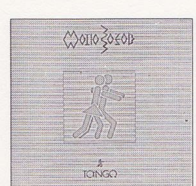


MATIA BAZAR
...Berlino...Parigi...Londra

'82
●Ariston AR/LP 12392
○Virgin MPICD 1014
◉

前作録音時に不響和音状態だったバンドは結局結成以来のオリジナルメンバーでキーボードのピエロ・カッサーノの脱退で終結する。そして後任のマウロ・サッビーネを迎えるにあたりバンドの音楽性も当時流行のエレクトリック・ポップ(テクノ)に大きな影響を受け、それを自分達流に消化した形での素晴らしいマティア流エレクトリック・ポップに変化したのである。ただこのアルバムではまだ一部に前作で聞かれたドラマティクな雰囲気も残っており過渡期的作品の趣もある。アルバムの中身では〝リリ・マルレーン〟をカバーしてマティア流エレクトリック・ポップ風に仕上げていたり、2曲のインストでは素晴らしい演奏も聞かせてくれており第2期のマティアの作品の中では聞きどころの多い傑作になっている。

(島村)



MATIA BAZAR
Tango

'83
●Ariston AR/LP ?
○Virgin MPICD 1015
◉

このアルバムと次作では前作「…ベルリン…パリ…ロンドン」の音楽性を引き継ぎ、そしてプロデューサーにロベルト・コロンボを迎えることによりそのマティア流エレクトリック・ポップを消化、発展させた作品になっている。このアルバム、イタリアでは収録曲の〝ローマの休日〟が'83年のサンレモ音楽祭で入賞その後大ヒットになるなど人々に喝采をもって迎えられ、再び彼らの破竹の進撃の契機となる印象深い作品となった。また、マティアの作品で一番最初に日本でリリースされたアルバムでもあり我々にとっても記念碑的な作品といえるだろう。実際このアルバムの売れ行きがなかなか好調だったので他の作品も日本でリリースされCM等にマティアの曲が使用されることになったようである。

(島村)



MATIA BAZAR
Aristocratica

'84
●Ariston AR/LP
○Virgin MPICD 1016
◉

これも「…ベルリン…パリ…ロンドン」よりのエレクトリック・ポップ路線だが若干次作に通じる雰囲気も感じられる過渡期の作品になっている。というのもこのアルバム制作前にマウロ・サッビーネが脱退し、次作からはこのアルバムの中の〝酌量軽減的論理〞で作曲及びシンセのソロでゲスト参加しているセルジオ・コッスが正式加入することになるからである。というわけでこの作品は正式メンバーの残り4人によってほとんど制作されたものなのである。そういったバンド内の状況を表してか音楽性も従来のエレクトリック・ポップ路線と次作からの現代的ユーロピアン・ポップスの同居したものになっている。余談だが彼らはこのアルバムを発表した'84年に世界歌謡祭に参加する為初来日している。　（島村）



MATIA BAZAR
Melanchólia

'86
●
○CGD CDS 6053
◉

'81年以前のマティアにおいて音楽面での中心であったピエロ・カッサー'は確かに才能あるミュージシャンであった。しかし、それ以後のマティアの音楽性のほうが、独自性という点では一歩、抜きん出たものであったと思う。ノスタルジアと新感覚のエレクトロ・ポップ感が融合し、さらに多分に哲学的なエッセンスをちりばめたこの音楽性はこの作品で完成されたといっても良いと思う。アントネッラのヴォーカリゼイションは冴え、それにからみあう複数のメロディーが多声的に入り混じながらバッキングを構成していく。スタイリッシュ、ファッショナブル、そしてどこかに孤独感が顔をのぞかせる。　（山崎）



MATIA BAZAR
Melō

'88
●
○
◉

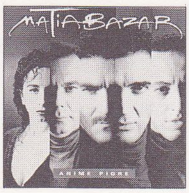
ヒット作「Melancholia」から2年降りの作品。前作で頂点を極めたかに思った彼等だが、この作品では前作の作風をさらに深化させてしまった。天才的なひらめきを持つアントネッラのヴォーカルは曲に対して、まるで神の啓示のごとくに適格なラインを持ち、セルジオのキーボード・ワークはサンプリング系の現代のイディオムを持ちながらもノスタルジアに満ちた響きをかもし出す。なによりも多声的なアトラクティヴなラインが入りみだれ、1つとして無駄のないようなアレンジ力がマティア・バザールの音楽性を比類なきものに高めている。第2期というか、新生マティアの最高作の1つに僕は数えたい。　（山崎）



MATIA BAZAR
Red Coner

'89
●CGD 20950
○CGD CDS 6139
◉キング 292E 2066

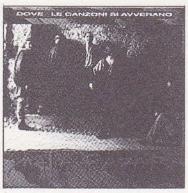
前作「メロー」の2年後にリリースされたこの作品はかのマウリツィオ・ファブリツィオをプロデューサーに迎え、前作と前々作「メランコリー」の良い部分を併せ持った華やかでありながらもどこかしっとりとした落ちつきを持った名作に仕上げられている。曲も今回は前作と違い共作を含め7曲がカルロ・マッラーレのものとなっており、セルジオ・コッスの曲は共作を含め4曲だけに留まっている。またこのアルバムの特徴としてはカルロのヴォーカルとしての久々の起用で今回は数曲においてアントネッラとデュエットしており、これが新鮮でありかつ非常にすばらしい歌を聞かせてくれているのである。この作品はまさに「メランコリー」から現在まで続くマティアの第2黄金期の中核を成す作品といえるだろう。　（島村）



MATIA BAZAR
Anime Pigre

'91
●BMG Ariola 211 543
○BMG Ariola 261 543
◉BMG ビクター BVCP-179

前作まで絶好調だったマティアだが、なんとリリース後にバンドの顔であったアントネッラが脱退するというアクシデントに直面する。その為後任として迎えられたのが現在のヴォーカルのラウラ・ヴァレンテであり、その新布陣での初のアルバムがこの「アニメ・ピグレ（怠惰な魂）」であるそのラウラのヴォーカルだが、アントネッラの凄さに比べるとさすがに若干見劣りはするものの水準以上のしっかりしたヴォーカルを聞かせてくれている。またアルバムの内容の方は従来以上にバンドサウンドを重視しているようで、「メランコリー」以来の華やかでかつ憂愁の色を持った上質のイタリアン・ポップスでありながらも、新生マティアとしてよりバンドサウンドとしての方向をうちだした作品になっている。　（島村）



MATIA BAZAR
Dove Le Canzoni Si Avverano

'93
●
○BMG Ariola 74321-13560-2
◉

このアルバムは前作「アニメ・ピグレ（怠惰な魂）」から2年ぶりに前作と同じラウラを含んだ5人のメンバーによって制作された作品で、現時点（'93年）においてのマティアの最新アルバムである。サウンドの方も基本的にはここ数年来変わらない、華やかな中にもしっとりとした憂愁の色も持つマティア節で、加えて前作以来のバンドサウンドを重視した路線になっている。しかし今アルバムでは新布陣になったばかりの前作に比べ、ヴォーカルはもちろんのこと曲創りにおいても、よりラウラがバンドに溶け込んでおり、しっかりと新しいマティアの顔としての存在感を示している。また、アルバム全体のイメージも前作以上にまとまっており、新生マティアのコンビネーションの鉄壁さを感じさせてくれる。　（島村）



MAXOPHONE
Maxophone
'75
●Produttoriassociati PA/LP 57
○
◉キング KICP 2222

マクソフォーネが残した唯一のアルバムでは、極めて高水準のシンフォニック・ロックが聴ける。各メンバーが圧倒的技量と洗練された感覚の持ち主で、そのプレイを叙情派ロックの範疇で語るには難がある。ホルン、サックス、クラリネット、フルート等の管楽器を多用した饒舌なアンサンブル、目まぐるしく入れ替わる個々のソロはジャズも包含し、加えてボーカル・ハーモニーのポップ性はバロック・ロックに耳慣れた私達には新鮮である。しかし随所に押し寄せるパッションの嵐、これこそが本作を叙情派たらしめ、パステル・カラーのジャケットも彼等のロマンチシズムを伝えるには充分である。尚、LPのドイツ/米/加盤は英語バージョン、本国イタリアではアルバム未収録のシングルがリリースされている。　（古田）



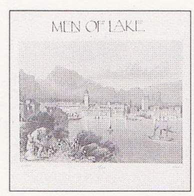
MEDIA AETAS'
Media Aetas'
'81
●PL 31605
○
◉

フォーク、女性ヴォーカルものというとイギリスを中心にスペイン、北欧等有名であるが、これからはイタリアも避けて通れなくなった。イタリアの女性ヴォーカルものというと、シリアス系、ラヴロック系に著名な作品が多いが、フォーク系にも素晴らしい作品がある。このメディア・アエタスなどはかなり上位に位置するのではないか。ヴォーカルは男女混合ではあるが、女性ヴォーカルの比重が高い。1曲目は現代音楽風の室内楽曲で、インストではあるが実にインパクトがある。ちょうどオパス・アヴァントラ1stのアヴァンギャルドな1曲目が強烈な印象を聴き手に与えるのと同じ効果である。2曲目以降は女性ヴォーカルを中心に中世的な曲をリズミカルにスローにと展開し感動をさそう。　（六井）



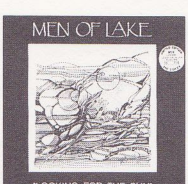
MEDITERRANEA
Ecce Rock
'81
●Amiamoci
○
◉

全曲の作曲をしたFausto Mesolella(g, kbd)そしてAgostino Santoro(pers)とPasquale Ziccardi(b, mandolin)からなるナポリのトリオ、メディテラネアの唯一のアルバム。ジャケット裏には〝このアルバムは1980年11月23日の晩に初めて着想された〟とある。この日はイタリア南部を大地震が襲った日とのことで、サウンドの民族音楽色の強いカラーとナポリという性格を考えれば、ある種、地域意識の高揚にこのアルバムの生い立ちを追えそうだ。ただし民族音楽色は味つけとして大きくとりあげられる域に止まり、あくまでも基本はトリオ編成らしくロック色が強い。もちろん手数は多い。しかし、どこか細やかさ、音楽自体の持つ躍動に欠ける嫌いがある。何かにつけて派手な音だ。　（松本）



MEN OF LAKE
Men Of Lake
'91
●Musea FGBG 2037.AR
○Musea FGBG 4047.AR
◉

メン・オブ・レイク、仏Museaよりのデヴュー作。彼らはこれ以前にもカセット作品をリリースしており、各国のファンジンからは注目されていた模様である。音の傾向としては、'60年代末期～'70年代前半までのブリティッシュ・オルガン・ロックとしか例えようがない。レア・バードをけたたましくして、さらにしつこくしたというべきか。アードバークよりははるかに叙情的かつシンフォニックである。ともかく、重戦車のごときオルガン・サウンドの洪水は、昨今のキーボードの音色がいかにチープであるか眼前に突きつけられる思いである。特にファルフィッサの素晴らしさ。後半、古えのブーガルー・サウンドかと思うようなオルガン・リフがほほえましい箇所もある。ギターのつつましさに好感が持てる。　（ミワ）



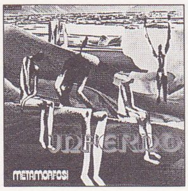
MEN OF LAKE
Looking For The Sun
'00
●
○
◉

リリースは、デビュー作となった「Men Of Lake」(Musea)以後だが、録音はそれ以前に遡るもの。カセット作「Looking For Sun」「Live At Vinile」をまとめたもので、これも限定ボックス入りLPとして出た。バンドは'87年に結成され、いわばデビュー作までの足取りをつかむことはできる。当然音質は悪い。しかも、演奏力、有名バンドのコピー入り、ともに素人の域である。バンド・サイドとしては、そこをわきまえて、あえて限定にして、それならLPボックス・セットにしよう、ということなのだろう。ムゼアからのデビュー作では、ハモンド・オルガンを多用して懐古趣味を逆手にとる程徹底しているが、これを聴くと未完成極まりなく、逆にバンドの成長ぶりを窺える。　（松本）



METAMORFOSI
... E Fu Il Sesto Giorno
'72
●Vedette VPA 8168
○Vinyl Magic VM 003
◉

メタモルフォシはヴェデット・レーベルに2枚のアルバムを残している。このアルバムの存在を知る人の多くは、これが2ndだと言っている様だが、それは本作の番号が8168で、一方の「Inferno」が8162であるためだろう。しかし、レーベルに表記されている発表年は、本作が1972年で、一方が1973年となっており、音の方と照らしてみても、本作を1stとする方が納得がゆく。と、いうわけで、このメタモルフォシはVo.＋flute, G, B, Key, Dr.の5人編成のバンド。サウンドの核は華麗なキーボード群である。A・B面とも基本的には同様の音創りがなされているが、よりドラマティックな内容のA面に彼らの持ち味が発揮されており、これが次なる名作「Inferno」へと受け継がれてゆくのである。　（城元）



METAMORFOSI
Inferno
'73
●Vedette VPA 8162
○Vinyl Magic VM 002
◉

前作のメンバーからギタリストが抜け、ドラマーも交替し、より強固なチーム・ワークによって創られたセカンド・アルバム。青を基調とした幻想的なアルバム・カヴァーとスリリングな演奏が相まってCD化されるまで、長く神格化され、高いプレミアムが付けられていたコレクターズ・アイテムであった。テクニック的にはちょっと甘いが、ピアノやシンセサイザー、オルガン等を操るキーボードがメインのサウンドで変化に富んだ組曲が全面に渡ってくり広げられている。このアルバム発表後、グループは解散し、ヴォーカリストのダヴィデ・スピタレッリはソロ名義で'80年に「Uomo Irregolare」を、又、THOR名義で'79年にDELTAITALIANAレーベルからアルバムをリリースしている。 （山崎）



MICHELE FEDRIGOTTI, DANILO LORENZINI
I Fiori Del Sole
'79
●Cramps 5207 302
○
◉

フランコ・バッティアートの旧友で、'70年代後半以降のアリーチェの作品でもしばしばキーボードを弾いているミケール・フェドリゴッティが、ダニーロ・ロレンツィーニというアーティストと共作した作品。A面は教会のパイプ・オルガン、B面はアコースティック・ピアノでシンプルな響きの演奏を聴かせてくれる。ジャンル分けをするなら現代音楽のジャンルの作品ということになろうか、響きはむしろバロック的、宗教的なもので、聴いていく内に内的イメージがどんどん広がっていくようなイメージの作品である。プロデュースはフランコ・バッティアート。 （山崎）



MO. DO.
La Scimmia Sulla Schiena Del Re
'79
●IAF LPA 90001
○
◉

最近になって発掘されたシンフォニック・アルバム。もう何もでないだろうと思っていたイタリアだが、まだ、このクラスの作品が眠っていたとは驚きである。ダルトンのセカンドをリリースしたIAFレーベルからのリリース。ハモンド・オルガンの響きを基調にしながら、時おり、フルートやオーボエ、アコースティック・ピアノが印象的なソロをとっていくタイプ。インストゥールメンタル志向で、ヴォーカル曲もまじっている。。ドラマーは変名を使っているが、ダルトンのT・ロカラッリだそうで、なるほど、全体的にダルトンのイメージに近く、時にバロック風のオルガン・プレイもまじり、結構楽しめる。 （山崎）



MONTEFELTRO
Il Tempo Di Far La Fantasia
'92
●
○Musea 4072.AR
◉

ムゼアからリリースされた二人組（ゲストが更に二人）のデヴュー・アルバム。薄緑色の時計をモチーフにしたジャケットに包まれた作品だが、その何とも言い様がない幻想感を見事に具現化している。ムゼアの作品に多い、割とタイトな感じのシンフォニック・ロックではなく、どこかとらえどころの無い独特な音世界を持ったアルバムで、ドゥルッティ・コラムのような空気感が漂うファンタジックな印象である。しかしニューエイジっぽくはなくて、血がかよって肉感のある世界であり、静なる躍動感とでも言ったら良いのだろうか、そういう不思議な感覚を持っている。けっして無理をしないで、あるがままに演奏している感じがして、好感が持てる。朝モヤの中にいるような感覚にさせる一枚。 （津田）



MORGAN
Nova Solis
'72
●RCA LISP 34154
○
◉

イギリス人モーガン・フィッシャーのグループ「モーガン」のファースト・アルバム。ホルストの惑星をアレンジしたりして軽快なプログレッシヴ・サウンドが繰り広げられている。翌年、ヴォーカルをロベルト・サプセッドからティム・スタッフェルに替え、前作同様の見事なアルバムを制作するが、これは76年にアメリカのインポートレコードからリリースされるまでは陽の目を見なかった。（BROWN OUT IMP1006）彼は後にイギリスに戻りモット・ザ・フーブル、モット、ブリティッシュ・ライオンズを経てソロ活動に入り、ロル・コックスヒルとのデュオ、ミニアチャーズの編集を行ない、又、ハイブリッド・キッズと自らを称しアルバムを一枚発表している。現在はソロ活動を行なっている。 （山崎）



(IL) MUCCHIO
Il Mucchio
'70
●Carosell SCLN 25001
○Mellow MMP 166
◉

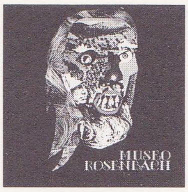
イル・ムッキョが本作を発表したのは70年のこと。他の多くのグループが活動を起こし始めながら未だあるレベルに達し得ないでいたこの早期にムキオはイタリアン・ロックの魁と言うべきサウンドを創り上げていた。詳しいクレジットがないので楽器編成が明確ではないが、おそらくVo.Keyb.×2、B.Dr.の5人と思われる。一応ダブル・キーボードのスタイルではあるが、彼らの音の特徴はそのキーボード・プレイよりむしろヴォーカルが歌い上げる哀愁漂うメロディーにあると言える。イタリアン・ロックに限った事ではないが、その土地の香りと、そしてそこに住む人々の精神の発露から生まれた音楽の魅力は、多少の年月を経て変質する様なものでは毛頭なく、むしろ時流と無関係に生き続けているのである。 （城元）



MURPLE
Io Sono Murple

'74
●Basf-Fare 20 23137F
○Mellow MMP 121
◉

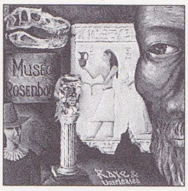
このムルプレは割と最近になって発掘されたグループなので、あまり知られていないと思う。「私はペンギン」と題されたこの作品は、12のパートから成るトータル・アルバムだ。Key.G.B.Dr.の4人という平凡な編成だが、メインはピアノ、オルガンを中心としたキーボードである。それなりに聴き所もあり、キーボード・ファンには結構受ける音だろう。しかしながら、手放しで誉めることのできるアルバムではない。作曲、演奏とも全体的に今一つまとまりを欠いており、せっかくのトータル・アルバムも企画倒れの感がある。'75年にジャンフランカ・モンテドゥーロというカンタウトーレと共作した「DONNA CIRCO」という作品もリリースしている。　（城元）



MUSEO ROSENBACH
Zarathustra

'73
●Ricordi SMRL 6113
○Contempo CONTEDISC 004
◉キング KICP 2710

ニーチェの哲学叙事詩「ツァラトゥストラはかく語りき」を元にしたトータル・アルバム。反キリスト教的思想に貫ぬかれたその内容は、偏執的なまでにヘヴィなギターや金属質のメロトロン等によって終始重々しい世界を描き出す。それは正に、カトリシズムの極致であるラッテ・エ・ミエーレの1stと対角を成す、イタリアン・ロック史上不滅の名作と言える。〝ヘヴィ・シンフォニック〞なる呼称が初めてメディアに登場したのは、筆者が認識する限りマーキー12号にイタリアン・ロック・カタログを掲載した際、筆者自身がビリエット・ベル・リンフェルノのレヴューに記したと記憶しているが、このムゼオ・ローゼンバッハこそ〝イタリアン・ヘヴィ・シンフォニック・ロック〞の神髄であると、今ここに断言する。　（城元）



MUSEO ROSENBACH
Rare & Unreleased

'92
●
○Mellow MMP 103
◉

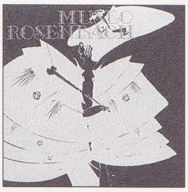
タイトルにもある通りこれはムゼオのレア及び未発表曲集でファンにとってはかなり興味深い音源が収録されたものになっている。中でも珍しいのは彼らが当時ステージで演奏していたカバーの数曲であろう。ここで聴かれるのはヒープの「対自核」、「シャドウズ・オブ・グリーフ」、ビートルズの「ウイズ・ア・リトル・ヘルプ…」（ジョー・コッカー・バージョン）、コロシアムの「ヴァレンタイン組曲」で、これらから彼らのルーツが伺えてくるだろう。また、当然その他にも「ツァラトゥストラ」収録曲のデモ、リハーサルテイクや先のライブでも演奏されていた未発表曲〝ドポ〞の別ヴァージョンや英語ヴァージョンまで収録されておりまさに玉手箱状況である。音質の方はまあまあといったところ。　（島村）



MUSEO ROSENBACH
Live '72

'91
●
○Mellow MMP 102
◉

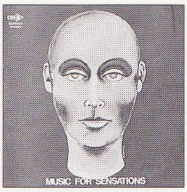
ムゼオといえば以前は幻のバンド的存在だった為、当然その活動状況などは殆ど知られてはおらず、このCDによりステージでの姿のほんの一部を初めて知ることが出来た訳である。内容の方は残念ながら音質が「アースバウンド」並だったり曲も一部途切れるなどして聞き苦しい面があるのだが、収録曲はかの「ツァラトゥストラ組曲」よりB②、③を収録、メロトロンも使用しアルバムに勝るとも劣らない迫力のライブ演奏を展開している。他にも当時の未発表曲でアルバムと同じ雰囲気の〝ドポ〞や意外ながら彼らの音楽性のルーツであろうJ・Bの曲までもが収録されており多彩な聴きどころをもったライブになっている。また、当時はチェレステのレオナルドが正規メンバーとして参加していることも興味深い。　（島村）



MUSEO ROSENBACH
Rarities

'92
●Mellow MMLP 103
○
◉

こちらのLPもムゼオのレア及び未発表曲集なのだがCDの方とは全然違う内容になっており、また貴重かつ興味深い音源が収録されている。こちらで特に興味深いといえるのはなんといっても初代のボーカルであるワルター・フランコがボーカルをとっている曲で「ツァラトゥストラ」、「永遠の回帰」及び未発表曲の「ドポ」で彼がボーカルのヴァージョンを聴くことが出来る。またA面ラストには「デランゴシア」というこのLPにだけ収録の別の未発表曲も入っている。この曲のオリジナルはなんと20分の長さだそうなのだがここでは最初の部分だけの収録になっているのが少し残念である。その他こちらでも彼らのルーツを伺えるライブでのJ・B等のカバーが収録されており十分玉手箱状況といえるだろう。　（島村）



MUSIC FOR SENSATIONS
Music For Sensations

'71
●MCA MAPS 5613
○
◉

作曲がGianni Fallabrinoなる人物があるという事以外は何も解らない正体不明の一枚。オール・インストゥルメンタル乍ら、美しいメロディー・ラインと気品溢れる演奏の醸し出す余りにもイタリア的叙情には、溜息さえ漏らしてしまう。71年という制作年の為か、稍もすればイージー・リスニング風に流れてしまいそうな部分も見受けられるものの、ピアノをメインに据え、オルガン、フルート等が絡み合う様は正に端麗の一語。おそらく最初期のイタリアン・クラシカル・ロックと形容してしまって良いだろう。　（鈴木伸一）



MUSICANOVA
Musicanova

'78
●Philips 6323055
○
◉

ナポリのトラッド・バンドNCCPかあR分派した男性デュオを母体として生まれたMUSICANOVAは、南部イタリアン・トラッドを代表するグループである。男性シンガー2人に、マウロ・パガーニのソロアルバム参加で知られる女性シンガー、テレーザ・デ・シオを加えた3人の歌手による土臭い歌が特徴だが、バイオリンや管楽器を含む演奏面のテンションの高さは、他の多くのイタリアン・トラッドとは明確に一線を画している。何と言っても、若きテレーザの熱き激情をストレートに叩きつけてくる激しい歌唱が強烈に心に残る。曲調も同様に情熱的なものばかりであるが、トラッドは一曲のみで、他の曲はすべてオリジナルである。完成度は以後の作品に譲るが、インパクトの強烈さならまずこの一作目を推す。 (川辺)



MUSICANOVA
Quanno Turnammo A Nascere

'79
●Philips 6323 078
○
◉

'79年に発売されたMUSICANOVAの二枚目の作品。一枚目は、誰がリードヴォーカルを取るかで曲想がはっきりと分かれてしまい、やや統一感に欠けるきらいがあったが、本作では小曲をスムーズに並べることにより、アルバム全体の印象を無理なくまとめあげることに成功している。曲は例により全曲彼らのオリジナルであり、イタリア南部の土着的パワーとコンテンポラリーな要素が一体化した、メルヘンティックな歌曲集に仕上がっている。本作を最後にテレーザ・デ・シオはグループを脱退、ポップに変身してソロ・シンガーとして活躍していくことになる。グループの方は新しい女性シンガーを加えて、以後もう二枚の作品を発表するが、'84年の四枚目を最後に解散する。 (川辺)



MUSICALIA
Musicalia

?
●Madau Dischi D-017
○
◉

本作はトラッド・レーベル、MADAU DISCHIからリリースされたもので、年代は'80年初期だろう。アンジェロ・ブランドゥアルディに似たトラディショナルな音作りが基本となっているが、彼らはもっと南イタリアの香りに満ちた土着的な要素を含み、それでいてコンテンポラリーなサウンドだ。特に、オペラチックな女性ヴォーカルが歌い上げるB②、B③の哀愁と美には誰しも心を震わせることだろう。ヴァイオリン、フルートも最上のアンサンブルを奏でている。僕は本作を聞くとカオス・シチリア物語に映し出される貧しくも美しい南イタリアの村々を思い出す。 (LUNA)



N.A.D.M.A
Uno Zingaro Di Atlante Con Un Fiore A New York

'73
●RCA DPSL 10579
○BMG Ariola ND 74850
◉

AKTUALAの2ndアルバム「La Terra」に参加していたOtto CorradoとMarino Vismaraに加えDavid Mosconi, 1 nes klok, Gustavo Bonora, Mino Ceretti, Franco, Rardi, Marco CristofoliniをメンバーとするN.A.D.M.Aは、Thira Ear Band, Univers Zeroを彷彿とさせる呪術的且つ秘教的な音空間を現出させる特異なグループ。鳥の囀で幕を開けるこのアルバムは、不気味でエクスペリメンタルなサウンドを中核とし乍らも、魔術的なインプロビゼーションや民族音楽的なフレーズなどを織り込んだイタリアン・アヴァンギャルド・ミュージックの傑作。幻惑と困乱と静寂が聴く者を包み込む。 (鈴木伸一)



NAPOLI CENTRALE
Mattanza

'76
●Ricordi SMRL 6187
○
◉

ナポリ中央駅をグループ名とするナポリ・チェントラーレのセカンド。グループはヴォーカル&サックス、ドラムス、ベース、ピアノという編成を基本としているが、そのサウンドを決定づけているのはヴォーカルとサックスを担当し、全ての曲を作曲しているJames Seneseである。全7曲中ヴォーカル曲が3曲あるが、いずれもファンキーでやや黒っぽいヴォーカルのメインに軽快な演奏が展開されている。一方、インスト曲ではサックス、ピアノがジャズィかつややブルーズィなソロを披露する。乗りのみを重視した演奏ではなくシリアスな側面もあるので聴き所をつかめば楽しめるだろう。ナポリらしさは勿論、イタリア臭もほとんど感じさせない、イタリアにはあまりないグループである。 (賀川)



NAPOLI CENTRALE
Qualcosa Ca Nu Mmore

'78
●Ricordi SMRL 6224
○
◉

ナポリ・チェントラーレ、最後のアルバム(サード)である。従来の作品同様、ヴォーカル曲とインスト曲に分かれるが、前者ではヴォーカルがより黒っぽくなり、バックの演奏もメロディよりもリズムを重視したものであるため、かなりファンキーな感じになっている。インスト曲でも軽快で乗りの良いリズムを基礎にサックス、ピアノがゆったりとリラックスしたプレイを展開している。その種の作品としては出来の悪いものではないと思われるが、プログレッシヴ・ロック・ファン、シンフォニック・ロック・ファンには無縁のものと言える。彼らがどのような人々を対象にして本アルバムを作り、実際にはどのくらいのセールスを記録したのであろうか。我々の全く知らないシーンがあるのかもしれない。 (賀川)



NASCITA DELLA SFERA
Per Una Scultura Di Ceschia

'78
●private 382201
○
◉

5人のヴォーカリスト、サックス、オルガン、キーボード、ベース、ギター、ドラムス等、総勢13人のクレジットがあるこのナッシータ・ディラ・スフェラというグループについての情報は余りなく、完全な自主制作という形で本作が残されているのみである。アルバムは19の小曲から成り美しいピアノのメロディーや、効果音、ヴォイス等がつなぎ合わされてコラージュ的にまとめ上げられたものである。美的なものとヘヴィーな音塊が対比しながら進行していく様は、時にエロティックに感ずる程にエモーショナルなもの。実験的な試みの中にも美的なラインを配するところが極めてイタリアらしい。見開きジャケット、厚紙のインサート付。（山崎）



NEURO TENSIVO
Neuro Tensivo

?
●Gemelli GG-ST A10-008
○
◉

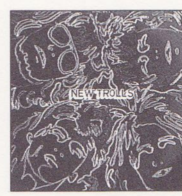
ローマのマイナー・レーベルより、おそらく現代音楽のシリーズか何かの一枚として発表されたと思われるこの作品。メンバー、制作年等一切不明。ジャケットはシングルジャケットで、デザイン、手触りからして70年前後の印象が強いが、内容の方は当時としてはかなり高い水準に達していると思う。ピアノ、シンセサイザー、バイオリン他各種楽器の奏でる不協和音が、不安と狂気、静謐さと深遠さを混在させて聴く者を異世界へと誘うかのようなサウンドは、イタリアン・アヴァンギャルド・ミュージックの先駆的なものと評価して良いだろう。Third Ear Band的な秘教的・呪術音空間を現出している。（鈴木伸一）



NEW TROLLS
Senza Orario Senza Bandiera

'68
●Fonit LPX 3
○Fonit Cetra CDM 2038
◉

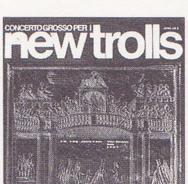
現在も活動しているイタリアン・ロック・シーンきってのベテラングループであるニュー・トロルスのデビュー作。'67年にシングル「Sensazioni」を大ヒットさせ、さらにたてつづけにヒットチャートをにぎわせたあと、'68年に発表した本作は、プロデューサーにファブリツィオ・デ・アンドレをむかえ、カンツォーネをロック的な解釈として作られたもので、当時のビートサウンドとはやや異にしている。全体はヒット曲指向の良質のポップスアルバムに仕上がっており、後のニュー・トロルスとは内容的にはずいぶんへだたりがあるが、彼らの猫の目サウンドの第一歩として、また、ファブリツィオ・デ・アンドレのプロデュースが随所に光っている分、一聴の価値がある。（鈴木茂）



NEW TROLLS
New Trolls

70
●Fonit LPX 7
○Fonit Cetra CDLP 422
◉

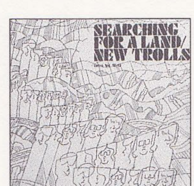
ニュー・トロルスの2枚目である本作は、前作に引き続きカンツォーネ・ロックを中心としたポップス指向のアルバムであり、前作に収録されていなかった彼らのデビュー作（旧A⑥）他、多数のシングルヒット（旧A①、B①、②、⑤）を含んでいる。シングル盤の寄せ集め的な本作は、アルバムとしてのまとまりはないが、一曲一曲がシングル的な良質なポップス、ブルース、カンツォーネ・ロックと後の彼らの多様なサウンドの原型となっているのは興味深い。なお、グループ名のニュー・トロルスとは、ノルウェー語の「troll（妖精）」と英語の「totroll（輪唱する）」を掛け合わせた言葉で、「新しい妖精達」という意味を持っている。（鈴木茂）



NEW TROLLS
Concerto Grosso Per (I) New Trolls

'71
●Cetra LPX 8
○Fonit Cetra CDM 2039
◉キング KICP

映画音楽界では相当有名である作曲家ルイス・エンリケス・バカロフとニュー・トロルスの共演盤。前半にはバカロフ作曲のバロック音楽をモチーフにした演奏が、後半にはロックのインプロヴィゼイションが収められている。前半の出来は他に類を見ない程ロックとクラシック音楽が何の異和感もなく融合している優れものであり、ユーロ・ロック・ファン必聴の一枚であるといえる。ニュー・トロルスにとっては重要な意味を持った作品であり、以後オーケストラを使用しなくなるが、'76年の再編時に、再び同じメンバー（バカロフも含めて）でその続編とも言うべき「コンチェルト・グロッソ・ヌメロ・ドゥエ」をオーケストラを使って制作している。（土川）



NEW TROLLS
Seaching For A Land

'72
●Fonit LPX 12/13
○Fonit Cetra CDLP 429
◉

ニュー・トロルスの4作目にあたる本アルバムは、旧AB面がスタジオ盤旧CD面からライブ盤の2枚組で（CDは1枚に収録）、タイトルと一曲を除く歌詞が英語となっていて、彼らが初めて海外市場を意識して制作したものと思われる。スタジオ盤では生ギター、ピアノといったアコースティックな楽器を多用し、続く「UT」の原型ともいうべきクラシカルロックを展開している。ライヴ盤では、マグマ・レーベル以降に通じるジャージーでフリーな演奏にニコのハイトーン・ヴォイスがからみあうエキサイティングな内容。特に旧D面の17分におよぶ大作は教会音楽の要素をたくみに取り入れた重厚なサウンドとなっている。オリジナル版は変型4面ジャケットで、見開きの更に上半分が開くようなつくりとなっている。（鈴木茂）



NEW TROLLS
UT
'72
●Fonit Cetra LPX-20
○Fonit Cetra CDLP 430
◉キング KICP 2704

5作目。タイトルの「UT」とは音階のドの音を指す。ヴィットリオ・デ・スカルツィは一曲も書いておらず、メンバー以外の人間が作曲に参加している。その内の一人、ダイナ・ディーニは本アルバムのヴィットリオを除いたメンバー、ニコ、ジャンニ、フランク、マウリツィオの作ったアルバム、通称「?」に参加している。実質的には「UT」もこの4人のアルバムと見てよいだろう。その後、4人がグループを離れ、イビスを作りヴィットリオがアトミック・システムを作る分裂劇の原因こそがこのアルバムなのである。A面の組曲についてはスペースがないのだが、内ジャケを訳してもらえればわかると思う。A①ではピアノ練習曲のツェルニーがそっくりそのまま使われている。　（いわね）



NEW TROLLS
Atomic System
'73
●Magma MAGL 18003
○
◉

一枚毎に音楽性が変る事で有名な(?)トロルスの中でも一番プログレッシヴ/シンフォニックよりの一作。とは言えこの時期グループは二つに分裂しており、おそらくは音楽性の相違と言った理由も有ったのだろうと思われるが、分裂した相手のIBISもトロルス系列の中では最もプログレッシヴ寄りの作品なども残しており、何を考えていたのかは良く判らない。(その後再合体するし…)それはさて置きこの作品、前記した通りトロルスの作品としては一番整合性を重視した作品となっており、そう言った意味で一番取っ付き易い作品だろう。作品/演奏能力は元々高い彼達の実力が良く判る。とは言えやはりどこか垢抜けしない所を残した唄、これが彼達の魅力の中心である事に変りないのだろうが。　（中西）



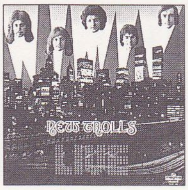
NEW TROLLS
Tempi Dispari
'74
●Magma MAGL18005
○
◉キング KICP 2054

ニュー・トロルスの初のライヴ・アルバム。全体的にジャージーなアドリブによるインストルメンタルアルバムで、彼らの他作品とは異色のものといえる。しかしながら、全員のアンサンブルは、一流のヨーロッパ・ジャズ・ミュージシャンに負けずとも劣らない完成度の高いものであり、スリリングな各パートのたたみかけるようなソロが全体の高揚感を与えている。中でも聞きどころは旧B面のヴィットリオのエレピに導びかれて演奏される〝コンチェルトグロッソ〟のテーマで、ヴァイオリン奏法によるギターはニュー・トロルス・ファンならずとも思わず涙をさそう。曲はここから更に激しさを増し、サックス、ギター、ドラムス、ベース、キーボードのからみ合いは最後のクライマックスへとつき進んでゆく。　（鈴木茂）



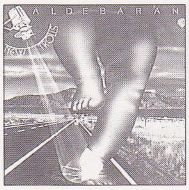
NEW TROLLS
Concerto Grosso N°2
'76
●Magma MAL 02
○Fonit Cetra CDM 2034 (N°1 & N°2)
◉キング KICP 2153

'76年、分裂していたメンバーが戻り再結成されたニュー・トロルスが再びルイス・エンリケス・バカロフ、セルジョ・バルドッティの協力を得て制作された第一弾が当アルバムである。内容は「コンチェルトグロッソ」のコンセプトを継承しつつも、5年間につちかわれた個々の演奏力を発揮したものであり、のびのびとした個々の演奏がより高い完成度のアルバムに仕上がっている。タイトル曲は、〝コンチェルトグロッソ Ⅰ〟のクラシカル・エレガンスに新しいエッセンスを加味したもので〝1〟の発展型となっている。他の5曲もそれぞれが独立した曲となっているが、全体の流れは自然で、コンセプト・アルバムとして構成されている。CSNばりのコーラスも当アルバムからの特長である。　（鈴木茂）



NEW TROLLS
Live
'79
●Magma MAL 04
○
◉キング KICP

「コンチェルト・グロッソ2」により、'76年再結成されたニュー・トロルスが、その発表に合わせて行なったライヴを収録した本作は、音質的な問題で発売が延期されていたが、'79年に陽の目を見たものだ。内容は、1stから3曲、2ndから1曲と旧ヒット作を新たにジャージィにアレンジしたもの、「コンチェルト・グロッソ2」からの4曲を中心にした全10曲で、彼らの再結成がヴィットリオ、ニコ、リッキー、ジャンニ、ジョルジョの最強のメンバーであること、再結成におけるやる気に満ちた姿勢を随所に確認できる。中でもB面の〝アダージョ〟から〝ヴィヴァーチェ〟～〝太陽王〟と続く所は、「コンチェルト・グロッソ2」が「1」のコンセプトを踏襲し更に発展させたものであることを証明している。　（鈴木茂）



NEW TROLLS
Aldebaran
'78
●WEA T 56589
○
◉

'71年から'76年までのニュー・トロルスはプログレッシヴ・ロックのフィールドで活躍していたが、この'78年のアルデバランではポップス・グループにたちもどっての再スタートを切った。多くのプログレッシヴ・ロック・ファンはとまどいを感じたと思うが、内容のほうは完成度が高く、まるで水を得た魚のように自由な発想で、又、圧倒的な迫力を持って全面が演じられているのである。様々なジャンルの音楽をそつなくこなすトロルスだが、この手のポップス・サウンドが一番自然に感じるのは僕だけではあるまい。これぞトロルス、これぞイタリアといった印象で、カプリオレに乗ってアウトストラーダを走りながらこれを聴いたら最高だ。　（山崎）



NEW TROLLS
New Trolls
'79
●WEA WB T56761
○
◉

前作「アルデバラン」でポップス・グループへと変身(というより従来のスタイルにもどったというほうが正しいかもしれない)したニュー・トロルスはたて続けに本作をリリースしてきた。前作が圧倒的な流れと力強さを持ったアルバムだったのに対し、このアルバムではいくぶんしっとりとしたサウンドに変化し、コーラスの比重も増してきた。いくらか前作より内省的に感じるのはその為だろう。全体的なクォリティーは前作と同様で極めて高い水準にあると思う。後が観音開きのちょっと複雑な形式のジャケットも、イラストに夢があり、曲のイメージを良く表現している。トロルスのポップ系作品の中でも高水準の一枚。 (山崎)



NEW TROLLS
FS
'81
●Fonit Cetra LPX 93
○
◉

ウザイ、ダダモが脱退し、4人となったニュー・トロルスが古巣フォニット・チェトラに復帰して'81年に発表したのが本作である。「FS(エッフェ・エッセ)」とはイタリア国有鉄道のことであり、ジャケットにも使用されているマークをつけた列車がイタリア全土を駆け巡っている。内容はWEA時代のイージーリスニングなポップス部分を捨て、シンフォニックなコンセプト・アルバムとなっている。FSが立ち寄る駅々における現実的な出起事や幻想へと導く世界を一つ一つの音空間にまとめあげ、列車の走るさまの効果音がその曲と曲を結びつけて作られたトータルアルバム、充実した演奏力と表現力は正にベテラングループならではのものであり、彼らの後期の代表作といってもいいだろう。 (鈴木茂)



NEW TROLLS
America O.K.
'83
●Fonit Cetra LPX 117
○Fonit Cetra
◉

余り、いただけないタイトルと、1曲目のナレーションの悪趣味さでなんとなくそんをしているアルバムである。僕もこれがひっかかって長いこと聴かず嫌いだった。しかし、それさえ目をつぶれば、これはいけるアルバムなのである。時計の振り子の音をうまくあしらった〝10 OROLOGI〞、ゆったりとした叙情的ナンバー〝ACCENDERE L'ANIMA〞等、いい曲がつらなっているのである。ニュー・トロルスのファンになると、'70年代の諸作品は聴きすぎてしまい、むしろ、このあたりのアルバムが良くなってきてしまうというのが一般的な傾向であるようだ。 (山崎)



NEW TROLLS
Tour
'85
●Fonit Cetra LPX 141
○Fonit Cetra CDM 2057
◉

'85年、しばしの沈黙の後に出たこのアルバムは、A面とB面の頭にシングル・リリースされたスタジオ曲を入れ、後はライブ録音された作品である。選ばれた曲が名曲ぞろいなので、プログレッシヴ・ロック時代以外のトロルスの音楽性を知るという意味では入門的な作品といえるかもしれない。又、〝Una Miniera〞や〝Ti Ricordi Joe〞のような、'70年頃の古い曲も演奏しており、ファンにはなつかしい選曲である。又、〝Quella Carezza Della Sera〞、〝La Nella Casa Dell'angelo〞あたりは情熱的なイタリアらしい佳曲で、ぜひ聴いてみてもらいたい曲だ。 (山崎)



NEW TROLLS
Amici
'88
●Ricordi SMRL 6384
○
◉

久しぶりにリリースされたトロルス'88年の作。タイトルの通り(アミチは友達の意)、過去に於いてトロルスに関与した多くの友人達へ捧げられたアルバム。このアルバムではコーラス・グループとしてのトロルスの側面が強調されている、メンバーはヴィットリオ・デ・スカルツィ・ニコ・デ・パーロ、ジャンニ・ベリーノの3人になっている。全ての曲は3人の共作となり、リラックスして自分達の為に制作したようなアット・ホームなイメージを感じる、ファンも、トロルスと共に歩んできた長いファンなら気持ち良く聴くことができると思う。大人の味だ。 (山崎)



NEW TROLLS
Quelli Come Noi
'92
●WEA 903177101
○WEA 903177101-2
◉

NEW TROLLSの正規盤として通算16枚目のアルバム。実に息の長いバンドで、それだけでも素晴らしい事だと思うが一枚一枚のクォリティの高さには本当に脱帽ものである。さてこのアルバムだが、「サンレモ音楽祭92」の参加曲「QUELLI COME NOI」と、昔の曲のリメイクもの等で構成されている。ハウスのリズムに乗った「VISIONI」や、弦楽四重奏風にアレンジされた「私はアイリッシュ」等基本的にはシンセを中心としたポップな音作りが成されている。サンレモ92のステージでは、NICO、VITTORIO、RICKY BELLONI、GIORGIO USAIの4人にVITTORIOの弟のALDO DE SCALZI(Key)が参加してダイナミックで重厚な演奏を披露していた。イ・プーを除いてライヴでレコードと同じ音を再現出来るのは最早彼らしかいまい。 (片山)



NICO, GIANNI, FRANK, MAURIZIO
Canti Di Innocenza, Canti Di Esperienza

'73
●Fonit-Catra LPX 22
○Fonit Cetra CDLP 423
◉

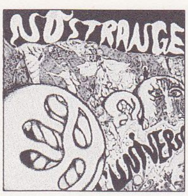
ニュー・トロルスは名作「UT」を発表後、2つのチームに分裂してしまう。ヴィットリオ・デ・スカルツィは「N.T.アトミック・システム」を製作し、残りの4人、すなわち、ニコ、ジャンニ、フランク、マウリツィオはグループ名も決まらないまま、4人の連名で本アルバムを発表する。内容は純粋なハード・ロック・サウンドであり、「UT」のB①の曲を連想していただければよいだろうが、かなりヘヴィーに仕上げられている。このアルバム発表後、ジャンニ・ベッレーノは「TRITONS」に加入してしまい、残りの3人に元アトミック・ルースターのリック・パーネルを加え、イビスが結成されることになる。 (山崎)



NICOSIA & C INDUSTRIA MUSICALE
Uha Favola Veva

'73
●Fonit Cetra LPQ 09073
○
◉

'73年の作品。プロセッションの「Fiaba」やアルミノジェニ等かリリースされたフォニット・チェトラのLPQシリーズの1枚ということで、10年程前にわくわくしながら海外から入手したことを想い出す。しかし、内容はブラス・ロック的な味わいを持つもので、バランスも良く、各ミュージシャンの力量もいいものを持っているが、残念ながらプログレッシヴ・ロックではなく、ジャンル違いの作品だったのでガッカリした記憶がある。当時のイタリアン・ロックは、もちろんプログレッシヴ・ロック全盛であったが、それ以外のロックやトラッド系の作品も少なく、好きな人に聴いてもらえば、正当な評価が得られると思うのだが。 (山崎)



NO STRANGE
L' Universo

'87
●Toast TDLP 854
○
◉

NO STRANGEは'82年、トリノで結成されたアシッド・フォーク系のバンドで、これまでに3枚のアルバム、「NO Strange」(Toast TDLP 851、'85)、本作、「Flora Di romi」と1枚のシングル「White Bird/Fiori Risplendenti」('86)他を自主リリースしている。英米、もしくはイタリアの'60年代末に影響を受けたというように、サイケデリック・サイドで扱われる音だが、イタリアらしく情緒豊かで繊細な面を見せるあたりが、SAINT JUSTやC.ROCCHI等の系譜としてイタリアのもう一面をのぞかせてくれる。この2作目は、曲自体が比較的大味なので、その点ではアピールに欠けるかもしれない。基本的にはアコースティック楽器主体なのだが、エレクトリック楽器の多用が目立ち、やや一本調子に終る。 (松本)



NO STRANGE
Flora Di Romi

?
●Toast TDLP 869
○
◉

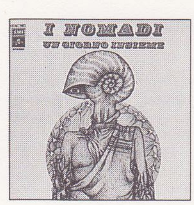
もともとはSalvatore D'ursoとAlbert Ezzuのデュオで始まった彼等も、この3作目では女性ヴォーカルを加え、また様々にアコースティック楽器をとり入れることで、多彩になった。サイケ・サイドで語るにはピアノやフルートのフューチャーも大きく、フローティングな雰囲気は強くとも同じ位のメロディアスでもある。時として「Norma Del Cielo」の頃のクラウディオ・ロッキを思わせさえする。ac & el-g、b、ds、fl、rec、p、org、sax、perc等と音色の多彩さが曲想にふくらみを持たせたという気がする。全体にアコースティックに傾き、イメージの広がりも格段に大きくなっている。ヴォーカルはイタリア語。 (松本)



(I) NOMADI
Mille E Una Sera

'71
●EMI 3C 062-17797
○
◉

このアルバムはモット・ザ・フープルの3rd「Wildlife」に収録されたI. ハンターのバラード"Waterlow"のハミング・ナンバーで幕を明ける。(思い出すのに苦労したゾ)。この曲調にムーグ音が出てくるので期待させてくれるが、勝手に自分達のクレジットにする辺りがせこい。それはいいとして、ジャケのサイケ・トーンからビート・ポップスかと思いきや、意外とそうでもない。その傾向が何曲かで残る程度で、大半は人なつっこいようなポップさのあるイタリアン・メロディと歌、時にはオーケストラを大きくまじえての作風になっているから結構聴ける。おまけにラスト・ナンバーではジャムっぽいプレイまで入っている。何曲かでのハモンド・オルガンは控えめながら当然よい。これが3作目に当たる。 (松本)



(I) NOMADI
Un Giorno Insieme

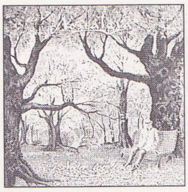
'73
●EMI 3C-064-17880
○
◉

ノマーディは実に長い活動を続けるグループである。60年代中期には結成され、筆者の持っている彼等のレコードで最も古いものが、68年のもの(EMI SCPSQ 545)一このアルバムはプログレッシヴな手法とビートルズの影響が感じられる好作品)である。その後、10年以上に渡り多数のアルバムをリリースしているが、最高作は本アルバムであろう。生のストリングス群、メロトロンをも使用して、センシティヴで情熱的な歌を中心とした素晴らしいアンサンブルを聴かせてくれる。彼等の作品には出来不出来のバラツキがあるが、本アルバムや74年のI Nomadi Interpretano Gucciniあたりが推薦盤である。本アルバムは変型ジャケット、ポスター付きと豪華なもので、彼等の頂点に位置する作品である。 (山崎)



(I) NOMADI
I Nomadi interpretano Guccini
'74
●EMI 3C064-17990Q
○
◉

74年にリリースされた作品。前作「Un Giorno Insieme」のサウンドを継承しながらも、よりプログレッシヴなアイディアを抽入した作品である。ロック・フィーリングのある曲や、オーケストラを静かに歌わせた曲、あるいは以前のように、ヴォーカリスト、アウグスト・ダオリオをメインに配した曲と、起伏に富んでおり、ノマーディが最もノマーディらしい時期の輝かしい一枚である。アレンジはヴィンチェ・テンペラ。PFMやフォルムラ・トレの出現以前、60年代に先鋭的なアルバムをリリースしていたのは、実はこのノマーディやエキペ84といったポップス・グループであった。そんな彼等が70年代中盤にプログレッシヴな作品を創り出したというのもうなずける。（山崎）



NOSTALGIA
Never Too Late
'93
●
○Mellow MMP 158
◉

サンレモからやってきたギター・デュオのデヴュー・アルバムで、MASSIMO MAZZEOとANDREA ROMANOの二人組によるコラボレーション。アコースティック・ギターのアルペジオにエレクトリック・ギター、それに内省的なヴォーカルと打ち込みのリズムがだいたいの構成である。ニューエイジ・ミュージックのような側面もあるのだが、それ以前にヨーロッパ的な、ともすると暗く落ち込むような内省的な要素が表面を覆っている。では真っ暗なのかというと、そうでもなくて、ところどころで、ラテン系のおおらかさが顔を覗かせたりする。イタリアのDAVID SYLVIANというような表現が合っているのかも知れないが、当然そこまでの深遠な世界は望めないのであしからず。（津田）



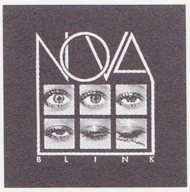
NOTTURNO CONCERTANTE
The Hiding Place
'90
●Musea FGBG 2035
○
◉

ノットゥルノ・コンチェルタンテは'80年代中期に自主制作によるカセット作品でシーンに登場したグループ。その後数年間の沈黙期間を経て'89年にレコーディングをし翌年フランスのムゼア・レーベルよりリリースしたのがこのファーストアルバムである。彼らも他の'80年代に登場した大抵のイタリアンシンフォニックロックグループ同様'70年代のグループが持っていたような強力なイタリアンテイストは感じられず、歌詞を英語で歌う等インターナショナル志向のサウンドになっている。しかしながら、このアルバムで聞かれるサウンドは彼らの持ち味であるリリカルで内省的な部分がよく生かされたものになっており、その上でハードな部分もうまくブレンドされた好作品に仕上がっている。（島村）



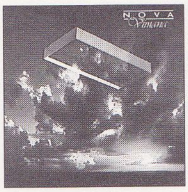
NOTTURNO CONCERTANTE
Erewhon
'92
●
○Mellow MMP 141
◉

ノットゥルノ・コンチェルタンテの音楽性はイタリアで最も純粋なものの1つであると断言できる。このピュアな感性は都会や、汚れた人生の中を渡ってはいけない種のものだと思う。例えばチェレステの音楽を始めて聴いたような無垢な魂を感じるのである。しかし、テクニック的に甘いことも事実で、それがたよりない、淋しい雰囲気をかもし出しているのである。アコースティックなイメージの小品が多く、一言でいうと素朴な曲想である。多くのメリハリのあるシンフォニック・ロックと聴き比べると、確かにちょっと聴いた印象は弱いかもしれない。しかし、ゆったりとした心でこの作品を聴く時、この清らかなイメージに心を動かされるのも事実だ。（山崎）



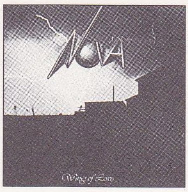
NOVA
Blink
'75
●Ariston AR/LP 12300
○Vinyl Magic VM 020
◉

ウーノがアルバムを出した後、エンツォ・ヴァリチェッリは脱退し、コラード・ルスティーチ、ニュートロルスのレナート・ロセットらが加わり、ノヴァを結成。イギリスに進出しこのファーストをリリース。プロデュースは当時クォンタム・ジャンプにジョン・G・ペリーと共に参加していたルパート・ハイン。翌年、アイソトープの「Deep End」を手掛けたロビン・ラムレイ&ジェリー・スミスのプロデュースによる「Vimana」発表。ダニーロ・ルスティーチはルーナ結成の為脱退し、パーシー・ジョーンズ、フィル・コリンズ、ナーラダ・マイケル・ウォルデンがゲスト参加。続く「Wings of Love」では元イビス、アトミック・ルースターのリック・パーネル加入。'78年には4枚目「Sun City」をリリース。（いわね）



NOVA
Vimana
'76
●UK Arista ARTY 138
○
◉

前作のメンバーよりルスティッチ兄弟の内、兄のダニロ(G)が脱退。キーボードに元ニュートロルス(アトミック・システムの頃)のレナート・ロセが加わり、Bにパーシー・ジョーンズ(ブランドX)Dにナラダ・マイケル・ワーデン(本作と同年ジェフ・ベックの「ワイアード」に参加)を向かえ、ロビン・ラムリー(ブランドX)のプロデュースにて制作された2nd。加えてフィル・コリンズ(Perc)の名前も見える。ジャズ・ロックを指向しながらもイタリア臭さがかなり残っていた1stとは打って変わり、かなり洗練された音に仕上がっている。当然の事ながらブランドX色が強いが、それでもリードを取るのは元オザンナ、チェルヴェロのメンバー、と言う訳で何とも絶妙なバランスを保っている。（城元）



NOVA
Wings of Love

'77
●UK Arista SPARTY 1021
○
◉

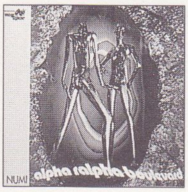
Bに黒人のバリー・ジョンソン、Dにリック・パーネルを向かえた3rd。プロデュースは前作のDであったワーデンが担当している。豪華なメンバー等の点で「Vimana」が彼らの最も有名な作品であるのは事実だが、所栓セッション・アルバム的なニュアンスが強かった。本作はメンバーを全員レギュラーとして固定した分まとまりは良く、バンドとしてのドライブ感も出ている。しかし、リック・パーネルの参加は大成功だが、黒人のBの起用は失敗と言わざるを得ない。やはりこのメンバーにアメリカン・フュージョンの乗りは似合わない。特にジョンソンが書いている曲は退屈極まり無し。A③〝Blue Lake〞ではチェルヴェロ、ウーノの幻がかい間見える。やはり彼らはこの線で行って欲しかった。（城元）



NOVA
Sun City

'78
●米 Arista AB4203
○
◉

ノヴァのラスト(フォース)・アルバム。アメリカで録音され、アメリカ盤のみのリリース、ヨーロッパ盤は在存しない。前作よりもヴォーカルを重視した曲が増え、ポップ色が強まっている。演奏自体は非常にテクニカルで彼らの並々ならぬ実力を感じさせる。ジャズィなポップスとして高く評価出来、同系統と有名グループに退けを取らない内容であるが、この種の音楽の本場であるアメリカで成功するのは難しく、結局グループは解散に至る。オザンナという最もイタリア的グループのメンバーだったエリオ・ダンナがウーノ、ノヴァと次第にイタリア色を弱め、インターナショナルな市場に挑戦した最後の記録が本アルバムである。ファンにとっては感慨深いものがある。（賀川）



(I) NUMI
Alpha Ralpha Boulevard

'71
●Polaris POLBP 708
○Vinyl Magic VM 033
◉

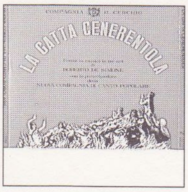
ヌーミは71年に唯一と思われるアルバムを残しているが、60年代のカラーが色濃く残っているサウンドから判断してプログレッシヴ・ロックを意図しての演奏ではない様である。たまたまチェンバロ、オルガン等が積極的に使われているため、一部の曲では準プログレ的な色合いが濃くなるが、本来得意とすべきはラヴロック/ポップス系のサウンドだろう。高水準のシンフォニックロックや甘さたっぷりのカンタウトーレ作品を聴き慣れた我々にとっては今一つ〝半熟〞とのイメージが強い作風である。ただ、イタリアン・プログレッシヴロックの黎明期に於けるフォルムラ3やエキペ84などを見る限り、この手のバンドが良質のプログレバンドに成長する可能性は有ったと言える。LP1枚での解散は彼らにとっても不本意だったことだろう。（江田）



NUOVA COMPAGNIA DI CANTO POPOLARE
N.C.C.P

'71
●Rara RAR/LP 55011
○
◉

N・C・C・P(Nuova Compagnia Di Canto Popolare)の記念すべき1stアルバム。ナポリの血と、民衆の喜怒哀楽の詰め込まれた彼らのサウンドは、陳腐な形容など必要としない迫真性に富んだ素晴らしいものだ。Roverto De Simoneをリーダーとし、Giovanni MaurielloにPatrizio Rampetti、母親もトラッド歌手であるGiuseppe Barra、紅一点、美しい喉を披露するFausta Vetere、後にMusicanovaを派生させるCarlo D'angioとEugenio Bennato、彼等の一糸乱れぬ演奏とあり余る程の熱情、そして何と言っても豊か過ぎる程の歌心は、このデビュー・アルバムに於て既に完成の域に達してしまっている。（鈴木伸一）



NUOVA COMPAGNIA DI CANTO POPOLARE
La Gatta Cenerentola

'76
●EMI 2-54 1182153
○EMI CDPM 1182158
◉

'70年代初頭から活動しているナポリの民族古謡楽団で、現地の大衆伝統音楽を現代へ継承することを理念としているようだ。初期はアコースティックなフォーク・ソングをごく地味に演奏していたのだが、この作品はオーケストラや合唱団を大がかりに導入した異色の2枚組大作となっている。どちらかといえばクラシックの歌劇のための音楽製作に彼らが参入したといった感じで、クラシカルな中にも独特の物悲しさ、明るさ、そしてドロ臭さを混じえながらナポリという街の光と影を演出していく。コンセプト・アルバムとしては非常に意欲的であると思うが、かなりアクが強い箇所も多く(男性シンガーによる会話調のアカペラ・ソングなど)、ロック系のリスナーが全体を聴くには多少キツイかも知れない。（内田）



NUOVA COMPAGNIA DI CANTO POPULARE
Medina

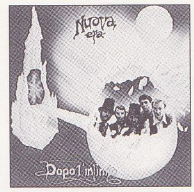
'92
●
○CGD 9031 76375-2
◉

長い沈黙の後にリリースされた現時点の最近作、発表時期がそうさせるのかサウンドはかなり洗練されたものになっており、キーボードやフルート、ヴァイオリンのメロディアスなフレーズがあの独特のドロ臭さを上手く緩和している。これまでになく「叙情性」が強く押し出された形になっており、とりわけ物悲しげなメロディを熱く熱く歌う女性ヴォーカルなどは感動的である。室内楽的な雰囲気のインスト・ナンバーも良い。一部にややエスニック・ポップ風の曲があるものの、それさえクリアできればかなり楽しめる内容である。同国のテレサ・デ・シオやスペインのマリア・デル・マール・ボネあたりに共通する部分も多く、この手が好きな人には文句なくおススメできる。本作発表時に来日公演も行った。（内田）



NUOVA ERA
L'Ultimo Viaggio
'88
●Contempo CONTE 122
○Contempo CONTE 122
◉

フィレンツェから現れた5人組(と言っても一人は作詞家)の記念すべきファースト・アルバム。全曲イタリア語で唄われており、往年のイタリアンの香りを充分にアピールしている。タイトなリズムにのせて暴れまくるキーボード、危険な香りのするギターなど、まさにシンフォニック・ロックの神髄を感じさせる。'70年代の黄金期を通り過ぎた第2世代の憧憬や情熱が、こちらまで伝わってくる。回顧趣味だと言われようと良いものは良い。もちろん新世代のグループなので熟成など望むべくもないし、多少ラフな側面もあるにはあるが、それらに目をつぶらせるひたむきさが有り、新たな黄金時代の幕開けを告げるには充分な作品である。もちろんジェネシス・タイプではなく、どちらかと言うとトリデント系。(津田)



NUOVA ERA
Dopo l'infinito
'89
●Contempo CONTEDISC 136
○Contempo CONTEDISC 136
◉キング KICP 17

期待されるうちにリリースされたセカンド・アルバムで宇宙叙事詩をテーマに持ってきたコンセプト・アルバムになっている。20分の大曲が2曲となっており、聴く者をいやがうえにも期待させる作品である。しかし、ここでは足踏み状態のような気がする。前作でトータルに貫いていた邪悪なまでのダイナミックさが薄くなっており、良く解釈すれば、落ちついて幅が出てきたようにもとれるのだが、逆にプロダクション(サウンド、テクニック等)の甘さが気になる。そうは言っても彼らが追い求めているであろう'70年代の面影は充分に昇華しているし、メロディや全体の流れはシンフォニック・ロックの(それもイタリアの)王道であると断言できる。時間をかけて熟成していってくれると良いのだが。(津田)



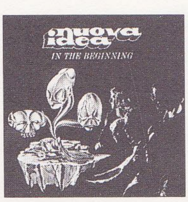
NUOVA ERA
Io E Il Tempo
'92
●
○Contempo CONTEDISC 136
◉

2年の間を置いてリリースされた3作目。CDには一曲ボーナス・トラック(小曲)が収録されている。この作品の目玉はタイトル曲である大曲で、彼らがレコードをリリースするようになる前から温めてきたものらしい。その甲斐あってか、彼らの全3枚の作品中ベストな出来に仕上がっている。ダイナミックな展開も息をふきかえし、叙情的な部分も消化しつつある。イタリアン・シンフォニック・ロックならではの熱い演奏も情熱を感じるし、全体に余裕のような物も感じられる。テクニックや録音はまだまだなのだが、そんな事はどうでも良いと思わせる勢いが有る。イタリアン・ロックのファンが作ったイタリアン・ロックを好きな人に捧げるイタリアン・ロックの今の姿がここにあるのだ。(津田)



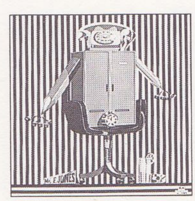
(LA) NUOVA ERA
(La) Nuova Era
'84
●LNE 0484
○
◉

Massimo Di Nunzio、Marinella Di Nunzio、Maurizio Sebastianelli、彼等3人が創出したこの作品は、美しく幻想的なジャケット同様に詩的で静厳な音世界が展開された比類無き名品である。まどろみの中を浮遊し彷徨かのような音空間は、典雅でクラシカルな響き、気高きトラッドの香りそしてプログレッシブな感性を其処彼処に漂わせて頗る心地良く又幻惑的である。全んどインストゥルメンタル乍らA③"Il Figlio Di Maria"ではゲスト参加の女性ボーカリストTiziana Sordiの清楚で虚ろ気な歌唱を聴く事ができる。高潔なる精神と純粋な創意が産み落としたこの作品は、ジャケットに描かれた十字架の如く我々の記憶の中に永遠に聳え続ける事だろう。(鈴木伸一)



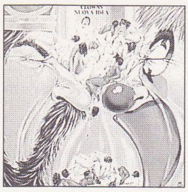
NUOVA IDEA
In The Beginning
'70
●Ariston AR/LP 12001
○Vinyl Magic VM021
◉

'70年代初期にアリストン・レーベルから3枚のアルバムをリリースしたヌオヴァ・イデアのこれが記念すべきファーストアルバム。内容的には発表年である'70年ということをみてもらっても分かる通り全体的なイメージはイタリアン・プログレ最初期のサイケ風味のあるオルガンロック風のサウンドであり、その部分では同時期の他のバンドにも共通するようにイギリスのユーライア・ヒープを想起させるサウンドになっている。ただ彼らがそのコピーに終わってないのは、その上にイタリア的なアコースティカルで唄心のあるサウンドをブレンドしたものがあるというところや一部ジャジーな部分も聴かせてくれるというところで、ここいらが後に彼らが素晴らしい作品を生み出す素養になっていると思われる。(島村)



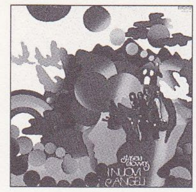
NUOVA IDEA
Mr.E.Jones
'72
●Ariston AR.LP.12075
○
◉

ヌオヴァ・イディアと言えば、残した3枚のアルバムの印象が各々あまりに違う為、最初に聞いた1枚で運命が決る。この2nd、Edgar Jones氏をめぐるトータル・アルバム。目覚まし時計のベルの音からスタートするこのアルバムは、彼らの3枚の中では最も完成度が高く聴き易い。シンフォニックに、ジャジーに、ウザイのオルガン、ピアノ、メロトロンを中心とするキーボード群がこのアルバムの色の決め手となっている。3rdではシャウトするリード・ヴォーカルが気になったが、このアルバムではコーラスを主体としており、手を抜いていないメロディラインもまた魅力だ。あえて言おう。このアルバムはイタリアン・ロックの「マジカルミステリーツアー」だ。えっ?大勘違い?それもまた正解だ。(木下)



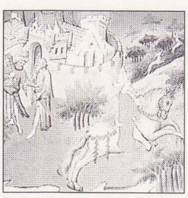
NUOVA IDEA
Clowns
'73
●Ariston AR/LP 12100
○
◉

ヌオヴァ・イデアは、アリストン・レーベルのプログレッシヴ・シリーズとして計3枚のアルバムをリリースしていたグループ。'77年にファート・アルバム「IN THE BEGINNING」(ARISTON : AR/LP-12061)を、'72年に「MR. E JONES」(ARISTON : AR/LP-12075)を、'83年に本作を発表した。キーボードのジョルジョ・ウザイを中心としたグループで、この時点ではリッキー・ヴェローニ(G)をアントネッロ・ガベッリのかわりに新加入させ5人編成になっている。ファーストは、未完成な部分が多いが、所々オザンナ風の佳作もあった。セカンドは、彼等のアルバム中、ポップ色がいちばん強いが、バックに流れるウザイのキーボードが不思議なムードを創り出していた。本作は一応、彼等の最高作といえるだろう。　(山)



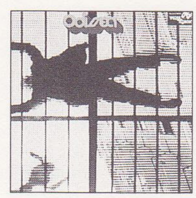
(I) NUOVI ANGELI
Stasera Clowns
'74
●Polydor 2448 033 A
○
◉

'70年代前半の伊ポリドールお得意のレリーフ・ジャケットに、色使いは緑系の「Papillon」、そしてメロトロンの壁、とは行かない。だとしたら今頃たいへんだ。ヌオヴィ・アンジェリは、GENSやZODIACO、BOTTEGAタイプのバンドだった。これは「I Nuovi Angeli」に続く2作目に当るもので、歌物バンドとしては中々の出来になっている。A①のドリーミーな雰囲気を持つイタリアン・メロディに彼等の特徴がよく出ている。甘いが暑苦しくない。そしてキャッチーなところがある。ストリング・シンセのバッキングが多いので清涼感が強く、またロック色もあまたの歌物バンドに比べれば強いかもしれない。B②など5パートからなる大曲になっている。夏の夕陽の海辺といったイメージか。　(松本)



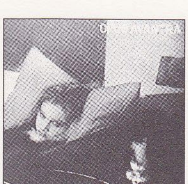
(THE) ODEJA
Winds of May
'93('87年録音)
●
○Mellow MMP 156
◉

全4曲、20分足らずのCD。それもそのはず、'87年にローマで録音されて眠っていた音源を掘り起したものだ。キーボード×2、サックス、女性ヴォーカル、ベース、ドラムスといった特徴のある編成で、リリカルさやジャジーなカラーを持ったメロディアスなサウンドを目指したバンドのようだ。もちろんシンフォニックなアレンジをしている。ピアノとサックスがいい雰囲気をつくっているので、もう少し煮詰めれば、いい線を行ったと思う。二つのロング・チューンでのイントロではそれを予感させる。しかし、この4曲を聴く限りでは、まるで歌えていないヴォーカルを筆頭に素人臭さが先に立つ部分が多く、ぎこちなさが目立つ。ジャケットのイメージは悪くなかったが、まさに駆け出しの20分という気がする。　(松本)



ODISSEA
Odissea
'73
●Rifi RDZ-ST/S 14228
○Vinyl Magic VM 016
◉キング KICP 2101

イタリアン・ロックの名作群を聴き通してきた方にとって、このオディッセアの残した唯一のアルバムは、決して衝撃的な音ではあるまい。目まぐるしく複雑な曲展開をするわけでも、超人的な演奏技術を見せるわけでもない。むしろ各曲とも小じんまりとした印象である。しかしながら、歌心を大切にし、聞かせ所をしっかり押さえた曲創りと演奏はなかなか見事で、捨て去ることのできぬ好アルバムとなっている。編成はVo.G.Key.B.Dr.の5人。誰か一人が目立つというわけではないが、A③のインストゥルメンタルをのぞけば、ヴォーカルのパートが比較的多い作品である。そのヴォーカルのロベルト・ゾラは、決して美声の持ち主ではないが、リッカルド・コッチャンテに近いタイプのなかなか渋い歌い手である。　(城元)



OPUS AVANTRA
Introspezione
'74
●Trident TRI 1006
○Artis ARCD 002
◉

オパス・アヴァントラというグループの核はヴォーカルのドネラ・デル・モナコ、キーボードと作曲のアルフレッド・ティゾッコ、そしてアイディアを出すジョルジョ・ビゾットの3人である。ロック、ジャズ、クラシック、民族音楽のモチーフを彼等流にアレンジしたサウンドで、他の有名グループ達のサウンドとは隔絶した強固なアイデンティティーのフレームにささえられた独自の様式を確立した。チェロ、ヴァイオリン、ピアノ等の生楽器を多用して進行していく各曲は、うわべだけの多ジャンル音楽の融合ではなく、それらのモチーフは彼らの様式を創り出す手段として使用されているに過ぎない為にこれだけの作品が完成したのだろう。カヴァー・アートも秀逸だ。　(山崎)



OPUS AVANTRA
Lord Cromwell Plays Suite For Seven Vices
'75
●Suono SRLP 1002
○Artis ARCD 003
◉

オパス・アヴァントラのセカンドアルバム。ドネラ・デル・モナコも参加している。「クロムウェル卿の奏する7つの大罪の為の組曲」と題され、オリヴァー・クロムウェルをめぐる一大組曲である。彼等のサウンドはシリアス・ミュージックとフリーロックの中間に位置し、しかも驚く程ポップだ。A①は原曲はハイドン、詩はドネラ・デル・モナコに依るもので英語で歌われている。前作と比較すると多少フリーな部分が増してきているが、基本的な踏線は全く変化してはいない。A③に於ける叙情性は前作をあきらかに継承しており、この曲こそ彼等本来の持ち味である。ロックとシリアス・ミュージックの融合とかいった表面的な次元ではなくもっと根深い所に彼等の「美」は眠っているようだ。　(山崎)



OPUS AVANTRA
Strata

'89
●Artis ARLP 006
○Artis ARCD 011
◉

名作を'70年代に残したまま沈黙を守っていたオパス・アヴァントラは'80年代に入って、イタリアの再発ブームと再結成ブームの波に乗って活動を再開した。ここに聴くことのできる音楽性は、オパス・アヴァントラによるオパス・アヴァントラのレプリカであると思う。彼等は遠く'70年代の自分達の青春を回想しながら、そのベスト・ピリオドの輝きを現代に甦らせようとこのアルバムを制作した。当時、ミュージック・アマルガム的な先鋭性を感じたこの音楽は、妙にノスタルジックに、淋しげに響く。帰らない過去を遠く回想するように、時にアヴァンギャルドに、時にメランコリックに進行するサウンドは、もちろん唯一無二のオリジナリティを持っている。（山崎）



(LE) ORME
Ad Gloriam

'68
●Car-Juke Box CRJ LP 00015
○Mellow MMP 135
◉

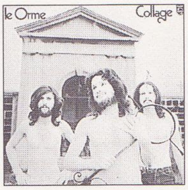
'60年代のレ・オルメは他のポップス・グループ同様、シングル主体のリリースをし、数枚出したところでアルバムを制作するというリリース方法を取っていた。'70年にフィリップスよりキーボード・トリオとして再デビュウするまでの間にCAR JUKE BOXレーベルより5枚のシングルと2枚のアルバムを出している。これが1stで見開きジャケット。ブラジル盤も出ている。2nd「L'aurora」は存在するとかしないとか言われていたが、最近になって確認された。ビートルズの影響をそこはかと感じるこの時代の作品は、当時としてはかなり意欲的なもので、メロディーの美しさもあり、現在でも一聴に値する作品と思う。当時のメンバーは5人で、内3人がキーボード・トリオ時代のメンバーとして息の長い活動を続けた。（山崎）



(LE) ORME
L'Aurora

'69
●Car Juke Box CRJ-LP00023
○Mellow MMP 151
◉

レ・オルメの幻のセカンドとしてリリースされたこの作品、数あるイタリア盤の中でもレアー中のレアー盤として我々を悩ます作品であった。その内容はカー・ジューク・ボックス時代のベスト・アルバムであった。推測するに、まずファーストがリリースされ、収録されなかったシングル曲を集めてこのベストを作り、オルメはフィリップスに移籍して再デビュウすることになるだろう。タイトル・チューン始め、美しいバラードをも含むアルバムで、オルメの歌の部分に惹かれる方になら、最初期の曲もぜひ聴いてもらいたいと思う。（山崎）



(LE) ORME
Collage

'71
●Philips 6323 007
○Polygram 842 505-2
◉

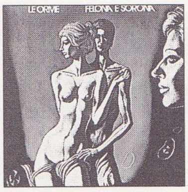
'70年代の初頭、イタリアのポップス・バンドは続々とプログレッシヴ・ロックへ転換を図ったわけだが、オルメにとってこの3rdアルバムは最初の大きな分岐点となった作品で、E, L&Pの影響の下、キーボード・トリオとして以後7作め「Contrappunti」までの間、そのスタイルで作品を発表する。オルメの演奏力は日本で言えば学生アマチュア・バンドのレベルで、この手のバンドとしては世界中で最下部に属する稚拙なものである。しかし多くの人々は彼らの事を愛して止まない。それはイタリアらしい詩情に満ちたメロディーが随所に溢れているからである。後に彼らのアンセムとなるA①〝Collage〞を聴いて、「E, L&Pの〝Hoedown〞みたいにカッコ良くないからイヤ」という方は、彼らの世界に足を踏み入れても無駄だ。（城元）



(LE) ORME
Uomo Di Pezza

'72
●Philips 6323 013L
○Polygram 832 067-2
◉

4thアルバム。キーボード・トリオへ転換後の2作めだが、前作よりも演奏面で向上し、少しはプロらしくなっている。しかしそんな事がどうでも良い程、たおやかなメロディが全編に配されており、聴いているととても穏やかな気持ちになれるアルバムだ。さらに本作からはムーグ、メロトロンをセッティングに加えており、A①〝Una Dolcezza Nuova〞A③〝La Porta Chiusa〞B④〝Alienazione〞などの曲ではキーボード・バンドならではのスリリングな展開も聴ける。そして決定打はB①の名曲〝Brave Imagine〞。3分足らずの歌物ナンバーだが、正しく怒濤のごときメロトロンに包まれ聴き手を夢幻に誘う。彼らの音に初めて触れる方には「最もイタリアらしい」という点で本作を勧めたい。（城元）



(LE) ORME
Felona E Sorona

'73
●Philips 6323 023 A
○Polygram 842 507-2
◉

5thアルバム。オルメの最高作と断言する。一応クレジットは9つのパートに分かれているが、全編通しの完全なトータル・アルバムとなっている。従来からの美しいメロディだけでなく、本作では沈み込む様な暗い音色が全編を覆い、彼らの音楽は数段深みを増している。そこには悲観的なまでに突き詰めた様な世界が表現されている。相変わらず演奏力は一級にはほど遠いが、彼らの他の作品からは想像し難い程完成度は高い。同年本作はピーマー・ハミルのペンになる英詩によるVoを差し替え、英盤（Charisma CAS 1072）がリリースされるが、オルメのメロディに英語が乗るはずもなく、英国進出は当然のごとく失敗に終わった。20年の時を経た現在、カリスマ盤は資料的価値といった程度か。（城元）



(LE) ORME
In Concerto
'74
●Philips 6323 028 A
○Polygram 846 412 2
◉

'74年初頭、ローマでのライブを収録したアルバム。純粋なフルレンスのライブ・アルバムとしてはイタリア初のものだと思う。彼らの活動の中では最も充実した時期のものなので誉め言葉の1つも書きたい気持ちは山々なのだが、お世辞の1つも出てこない。「オルメのライブ・アルバム」は前作の英語ヴァージョンと並ぶ、「大いなる感違い」が生んだ、彼らの恥部である。とにかく彼らは演奏力が貧困なのだ。それを22分に及ぶ即興中心のインター・プレイとは、恐れを知らぬもはなはだしい。B面は「Collage」から出来の良い曲を3曲と〝フェローナ・エ・ソローナ〟の最終パートを演っているが、余りにヘタで全てぶち壊し。彼らの全作品を聴き終えた人が、史実の1つとして認識すればそれで十分な作品だ。　(城元)



(LE) ORME
Contrappunti
'74
●Philips 6323 035 A
○Polygram 842 506-2
◉

7thアルバム。「Felona e Sorona」が抜けた存在で特殊な位置にある事を考えると、本作は4th「Uomo Di Pezza」と並ぶ代表作と言える。「Felona～」で多く聴かれた陰のあるキーボード音とメロディは本作にもかなり受け継がれており、「Uomo～」までの比較的暖かみのある音とは少しばかりイメージが違ってきている。以前にも一部の曲でピアノを弾いていたプロデューサーのジャン・ピエロ・レヴェルベリの名前が、レ・オルメのメンバーとしてレギュラークレジットされているが、特に大きな影響はない。ただ当然スタジオ作ではダビングにより、より構築的な音に仕上げる事が出来る訳で、A①のタイトル・チューンなどは日本編集ライブのスカスカ・テイクしか知らない人にはとても同じバンドとは思えないだろう。　(城元)



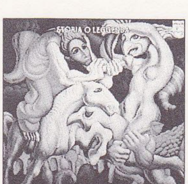
(LE) ORME
Smogmagica
'75
●Philips 6323041
○Polygram 842 5092
◉

前の「Contrappunti」が傑作だっただけに、このアルバム以降のオルメには、やや閉口してしまう。なんのためにアメリカに渡らなければならないのか(ミュージシャンの上昇志向という奴か…)とつい考えてしまうが、PFM、バンコ同様アメリカ(or世界)を目指したとたん、そのバンド本来の持ち味を殺してしまうことだけは、確かなようだ。オルメの場合キーボード・トリオ(＝ギターレス)だからこそあった彼ら独自のあの哀愁のサウンドが、ギターというリード楽器を得たとたん消失してしまい、印象をガラリと変えてしまった。曲によってはいいものもあるだけに(例えば、タイトルはイヤだが「Los Angeles」)、惜しい気がする。やはりこのバンドにギタリストは不要と、ぼくは思うのだが…。　(高見)



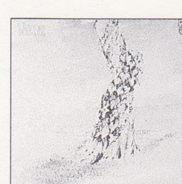
(LE) ORME
Veriti Nascoste
'76
●Philips 6323045
○Polygram 842 512 2
◉

ギタリストが加入してから2枚目、「Smogmagica」に続くアルバム。ギタリストはチェンジしている。日本では評判がありよくなく、ほとんど語られることのないアルバムだが(ジャケットがひど過ぎるのも原因のひとつ!)、なぜか一曲だけ気になる曲が収められている。3曲目のアルバム・タイトル曲で、ヴァイオリン、チェロ、フルート等をバックに従えたこの曲は、彼ら本来の哀愁味漂う美しい曲。しかし全体的には「Uomo Di Pezza」「Felona E Solona」「Contrappunti」といった傑作と比べると、アメリカナイズされた凡庸な出来となっている。とにかくギター・ソロが出てくるたびに白けてしまうばかり。オルメは、前記3枚に「Collage」、そしてライヴ・アルバムあたりで十分と言い切ってしまおう。　(高見)



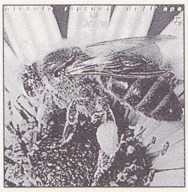
(LE) ORME
Storia O Leggenda
'77
●Philips 6323 052
○Polygram 842 5102
◉

オルメ、10枚目のアルバム。ややポップでインターナショナル指向の感もあった前2作と新境地を切り開いた「Florian」の間に位置する作品で、'70年代後半の作品の中では一番初期(フィリップス時代の)の作品に近い雰囲気を持っている。タリアピエトラのどことなく色気を感じさせるヴォーカルとメロディアスで味わいのあるキーボード、シンプルではあるがリリカルなギター、的確なリズム・セクションが見事にまとまりドラマチックや演奏が展開されている。曲の構成もベテランらしくよく考えられたものである。テクニカルな演奏やダイナミックなサウンドを期待する人には多少地味に思えるかもしれないが、イタリアならではの、そして、オルメならではの良さが十分に感じられる力作である。　(賀川)



(LE) ORME
Florian
'79
●Philips 6323 086
○Polygram 842 508-2
◉

オルメ11枚目のアルバム。最初期の2枚は別として、オルメと言うとキーボードとヴォーカルをメインにしたシンフォニック・ロックのイメージがあるが本アルバムは弦楽器(チェロ、ヴァイオリン)とヴィブラフォン、マリンバ等の打楽器を非常に効果的に使った異色作である。これらの楽器とお馴染みのリリカルなピアノとヴォーカルが一体となったクラシカルな雰囲気の演奏は決して技巧的ではないが、とても暖かみがあり、聴く者に安らぎを与える。そして、音楽は技術ではなく心であることを痛感させるだけの説得力を持っている。後期のオルメを代表する一枚であり、彼らの最高傑作の一つでもある。内ジャケのメンバー写真はサン・マルコ広場のカフェ・フローリアンで撮ったもの。　(賀川)



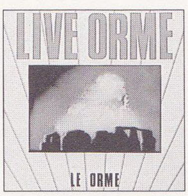
(LE) ORME
Piccola Rapsodia Dell'ape
'80
●Philips 6323 102
○Polygram 842 822 2
◉

前作「Florian」で新境地を切り開いたとも言えるオルメ。実質的には彼らの最後のアルバムである本作品も中々の意欲作である。フィリップス・レーベルの初期の作品のように、ドラマチックかつリリカルな雰囲気がストレートに伝わってくるサウンドではないため、一聴しただけでは地味な感じを与えるかもしれないが、非常によく考えられた丁寧な音作りがされている。決して複雑ではないが変化に富んだ演奏を聴き込めば、従来の作品で感じることの出来たオルメの魅力の多くが本アルバムにもあることが分かる。10年以上に渡って活動し、14枚のアルバムを発表したオルメは、ニュー・トロルスと並んで、ある意味でロック・プログレッシヴ・イタリアーナ最高のグループだったと言える。（賀川）



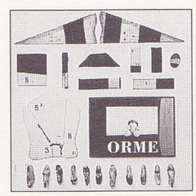
(LE) ORME
Venerdi
'82
●DDD ZPLDR 34145
○
◉

'70年代後半、オルメはアコースティック・セットのスタイルで印象的なアルバム「FLORIAN」と「PICCOLA RAPSODIA DELL'APE」を発表後消息が途絶えていたが、'82年に突如〝サンレモ音楽祭82〟への参加曲〝MARINAI〟を含む本作で復活した。結果的に元の3人編成に戻ったのだが、エレクトリック・ポップを演奏するバンドに変わってしまっていた。何故再び音楽形態を変更したのか全く分からないが、恐らくリード・ヴォーカルのアルドの意志によるものが一番大きいと思う。オルメらしからぬ明るい曲ばかりが並んでいるが、どこか田舎臭く民族調なのはアコースティックの恩恵を受けたからか。後に同年のシングル「ROSSO DI SERA/SAHARA」(DDD DDDA 2820)を追加収録、タイトルを「MARINAI」に変更して再発された。（片山）



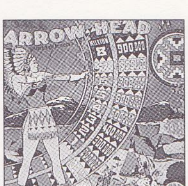
(LE) ORME
Live Orme
'86('75年頃録音)
●
○
◉キング KICP 2715/6

日本だけで発売された本ライヴ・アルバムは、日本人のイタリアへの絶え間ない熱意の賜物だと言える。以前出た「IN CONCERTO」よりも、本当のオルメの姿を聞く事が出来るし、「COLLAGE」から「VERITA' NASCOSTE」迄の幅広い範囲からの選曲は何よりの贈り物である。イタリアのバンドのライヴ録音は大抵悪いのだがこれはまあまあの方。聞き所は何と言っても組曲〝FELONA E SORONA〟あたりか、〝CONTRAPPUNTI〟の曲だろう。相変わらずのドタバタの中で結構レコードに忠実に演奏している。個人的にはアルドが唄えば「ああ、オルメなんだ。」と納得してしまうが、アルバム「UOMO DI PEZZA」からの曲は特にしみじみと聞き込んでしまう。尚、収録しきれなかった残りの音源も特典盤としてプレゼントされた。（片山）



ORME
Orme
'90
●Philips 846 410
○Philips 846 410-2
◉

アルバム「VENERDI」を発表後再び音沙汰の無かったオルメだが、'87年のシングルの後'90年になって本作を発表した。3人のメンバーは不動であるが、女性コーラスを含む多彩なゲストを迎えて実に良質なポップ・ロックを披露している。中でもアンジェロ・ブランドゥアルディのヴァイオリンでの参加は大きな話題だろう。そして何よりも重要なのはプロデューサーがマリオ・ラヴェッツィである事だ。'80年代中頃から特に女性ヴォーカルのプロデューサーとして名を馳せて来た彼が大いに手腕を発揮し、とても聞きやすく又今までのオルメには無かった都会的なセンスを醸し出す事に成功している。しかしようやくエレクトリック・ポップ路線に見切りをつけたのかと安心したのも束の間またもや沈黙に入ってしまった。（片山）



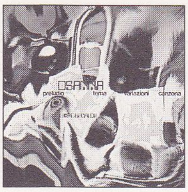
OSAGE TRIBE
Arrow Head
'72
●Bla Bla BBL 11052
○Artis ARCD 030
◉

オサージェ・トリベは、後にドゥエロ・マドレを経てイル・ヴォーロに参加するベーシスト、ボブ・カレロが在籍していたグループである。D.マドレの項では実験音楽と紹介したが、どちらかと言うとつかみどころが無いサウンドと言った方が正確だろう。プログレ色は薄く、力強いギター音の他、若干ポップなメロディーやジャジーなパートも盛り込まれている。たまにD.マドレを思わせるベースラインが出てくるものの全般的には消化不良気味。もっと変化を付けるにはキーボード系の積極的な導入が不可欠だったろう。表、内ジャケともカヴァーワークの方はなかなかしゃれている。なお、本作以外のアルバムについては未確認であるが、本作発表以前の71年、ブラ・ブラレーベルよりシングルを2枚リリースしている。（江田）



OSANNA
L'uomo
'71
●Fonit LPX 10
○Fonit Cetra CDM 2037
◉

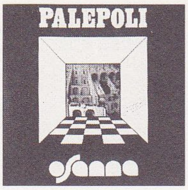
オザンナのファーストにあたる本作は、1971年に発表されたが、あの「ミラノ・カリブロ9」「パレポリ」の原点ともいうべき内容である。「ミラノ～」「パレポリ」に比べれば荒削りな点は否めないが、アコースティックな楽器を多用し、民族音楽的なエッセンスをベースとしながらもジャズ的なサウンドも加え、みごとなオザンナサウンドともいうべき独自の「ドロドロ」音空間を作りあげている。一人一人の演奏力も卓越しており、聞く側に緊張感を与えてくれる。特にタイトル曲A2で、「オザンナ」と唱いあげるさまはまさに圧巻である。なおオリジナルは縦方向への見開きジャケットで、壁掛け用のフックがついていた。（鈴木茂）



OSANNA
Milano Calibro 9
'72
●Fonit LPX 14
○Fonit Cetra CDP 420
◉キング KICP 2154

フェルナンド・ディオレ監督による同名映画のサウンド・トラック集として発表されたセカンド・アルバム。〝プレリュード〟〝テーマ〟〝ヴァリエーションⅠ～Ⅶ〟〝カンツォーネ〟の4部から構成され、定石をふまえたサントラとしての仕上りはもちろん、それを越えた普遍的な完成度の高さを誇り続けている。これは、ひとえに「コンチェルト・グロッソⅠ」の作曲・アレンジを担当したルイス・アンリケ・バカロフと、グループ自体が持つアンサンブルとの、バランスの良さにある。ロックがクラシックをなぞるのではなく、その逆でもない。あくまで流麗なストリングスと、ギターのダイナミズムを自然に橋わたしする。緩急自在なフルート。ストリングスとロックの幸福な合体の証明が、ここにある。

（奈良）



OSANNA
Palepoli
'72
●Fonit Cetra LPX 19
○Fonit Cetra CDLP 425
◉キング KICP 2703

カーニバル的な、呪術的なアルバムである。しかもA①はナポリ方言で歌われている。パレポリとは幻想としてのナポリに他ならない。オザンナのサード・アルバムであるこのアルバムで、彼らの音楽性が確立した、と言うべきか。イタリアン・ロックにおいて、いや世界のロック史上において、はじめて、地方主義的アイデンティティを前面に打ち出した記念すべきアルバムである。そしてこのアルバムを頂点として、オザンナは堕落の道をたどっていくのである。素晴しいほどにダイナミズムとロマンチシズムを兼ねそなえたグループはオザンナ以外に存在していただろうか。国内盤と原盤とはA面最後の部分のテイクが違うのであるが、入手しやすい国内盤でオザンナの秘教的世界に親しんで欲しいと思う。

（宇田川）



OSANNA
Landscape of Life
'74
●Fonit LPX 32
○Fonit Cetra CDLP 424
◉キング KICP 2216

4thアルバム。'74年4月に発表された本作はその前月に発表されたウーノとかなり近いベクトル上にあり、前作「Palepoli」の呪術的なイメージはもはや薄い。ウーノは曲そのものが秀れているが、管楽器とドラム以外のパートをすべてダニロ1人で演奏しており、弾くというよりは押さえるといった程度のKeyやペダルのみのBなどパートにより演奏水準にばらつきがある。対して本作は当然オザンナ・フルメンバーであるからして演奏内容はより安定しているが、曲の出来は7曲中4曲がウーノと同程度で残る3曲は今一つ。おそらくこの時期ダニロは自分の良いマテリアルをウーノにつぎ込み、オザンナに対しては出し惜しみしたのではないか。総合的に評価すればウーノがまさっており、バンドの分裂は必定の結果であった。

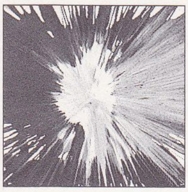
（城元）



OSANNA
Suddance
'78
●CBS 82449
○CBS 466421-2
◉

'74年のウーノ、チッタフロンターレへの分裂劇から3年の時を経て再編成されたオザンナの通算5枚目のアルバム。「パレポリ」に代表される絶頂期のサウンドとはかなり趣を異にし、オザンナ分裂一派のノヴァに近いジャズ・ロックに仕上がっている。したがって旧来のイメージが強過ぎるだけに、この作品に入り込んで行けないファンも多いのではないか。しかしそうした思い入れと別に、作品の質そのものは、このアルバムが'78年のレコード批評家賞に輝いた事実からもわかる通り、上質の作品となっている。またジャズ・ロックといっても厳密にはアメリカを指向したノヴァと違い、そこはさすがオザンナ、あくまでイタリアの音に仕上げている。リーダーのダニーロは翌'79年にルーナを結成。オザンナは、再び活動を休止した。

（城元）



OSKAR LINDOK & HIS FRIEND
Come Upstair
'73
●Picci GLA 2007
○
◉

謎のレーベルPicciのリリースした正真正銘の謎のアルバム。ジャケットはSECONDA GENESIと同様のあのハンド・メイドに依るシングル・ジャケットなのだが、こちらは何と表裏共という凝りよう。依って背表紙も含めてジャケットには一切のクレジットが無い。本当に正規発売されていたのだろうか。サウンドの方も攫み所が無く、ジャージーな曲、イージー・リスニング風な曲があったりと雑多な印象が強い。当然プログレの範疇で紹介すべきではないが、それでもキーボードをメインに据えた曲や幽玄なフルートの調べがイタリアらしい美意識を垣間見せてはくれる。

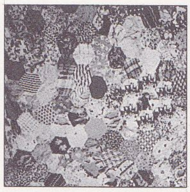
（鈴木伸一）



OVERDRIVE
The Human Machine
'91
●
○Musea FGBG 4029.AR
◉

オーバードライブは近年再び増えているイタリアの新人シンフォニック・ロック・グループの一つで'91年にムゼアよりこのアルバムでデビューしている。バンドの音楽的方向性としては最近のイタリアのシンフォニック・ロック・バンドの大多数と同様に、彼らも母国であるイタリアのイメージは余り無くどちらかというとブリティッシュ・ポンプ・ロックやプログレハードの影響下にあると思われるサウンドになっている。アルバムの内容の方はリズム隊にいまいちキレが無いことやアレンジに詰めの甘さが残っているなどの問題点はあるものの、全体的には曲もなかなかでハードな部分と女性のコーラスを効果的に使った叙情的な部分がうまく生かされていてなかなか聞かせてくれる。個人的には次作での成長を期待したい。

（島村）



(IL) PAESE DEI BALOCCHI
Il Paese Dei Balocchi

'72
●CGD FGL 5115
○Mellow MMP 167
○MMG AMCE 558

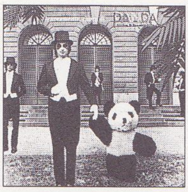
'72年に唯一のアルバムを発表したイル・パエーゼ・デイ・バロッキについて私達に伝えられている情報は何もない。生のストリングスを大胆にフィーチャーして時に力強く、時に可憐な少女のように繊細な展開をする本アルバムは、派手さこそないものの、野原に人知れず咲く草花のような味わいがある。「子供達の国」というアルバム・タイトルからもうかがいしれようが、過ぎ去りし日々を回想しているように曲は進行し、私達の幼年時代が彼等の音とともに静かに甦ってくるかのようだ。ジャケットから感じられるイメージも、イタリアの太陽の下にあるかげりといったもので、郷愁をさそう。尚、メロウ・レコーズより再発売されたCDには、'79年発売のシングル曲2曲が追加収録された。 （山崎）



(I) PANDA
Amanti Mai

'75
●RCA TPL1-1064
○
◉

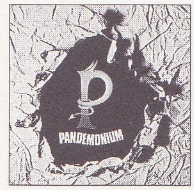
イ・パンダは現在のところ2枚のアルバムが確認されているが、他にもリリースされている可能性もある。本作は'75年に発表された、おそらくファースト・アルバムである。基本的にはポップス・グループだが、この当時の他のポップス系グループがそうであったように、プログレッシヴな印象を与えるもので、つややかな生のストリング・オーケストラをバックに配し、センティメンタルな曲想を得意とする好グループ。確認されているもう一枚は'78年の「Teneramente, Cuore Di...」(Polydor 2048084)で、同傾向のカンタウトーレ的志向の強い作品。こちらの作品はマリオ・コンヴェルティーノによるユーモラスなカヴァーが印象的。 （山崎）



PANDA
Teneramente, Cuore Di Panda

'78
●Polydor 2448 084
○
◉

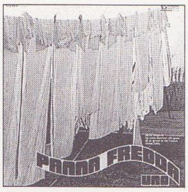
この、あんまりなネーミングどおりのユーモラスなジャケットを見れば、大方の人は尻込みするだろう。ところが、である。'75年の1stも歌物としての出来は良かったが、本作は歌物の甘さプラス抜群のポップセンスも備わってまさにポップスの金字塔のような作品。このセンスは普通イタリアにはないもので、それはイギリスの底辺に脈々と流れるポップ感覚（ブリティッシュの底力ともいう）に通じるものだ。メンバーについてはよくわからないのだが、これだけセンスがいいことからしてかなり実力のある人達のようだ。全曲が聴きもので、おまけに何回聴いてもあきない。隠し味のコーラスメロトロン裏ワザなども心憎いばかりだ。もう1枚くらいはLPを出してほしかったよなあ。 （渡辺一己）



PANDEMONIUM
Pandemonium

'76
●RCA TPL 1-123
○
◉

パンデモニウムは男女複数から成るコーラス・グループといった方がいいのだろう。それにしては音とこのジャケットは、ちょっと違うのではないか。まあそれは別にして、歌物、ラヴ・ロック、そういったイメージよりも更にポピュラー・ミュージックといった言葉のイメージに近い内容だ。曲によっては畑違いのものも少なくない。それでも3～4曲程、ソフト・タッチな印象に残るメロディがある。シングルになった〝Sicura〞と共に〝L'isola〞、〝Lunedi〞がそれ。この3曲だけを聴くものなら、随分と印象がいいのだが、〝Cocca Cola Cocca Cola...〞とコーラスも乗りで来る〝Sexy Cola〞といったアメリカ・イタリアの曲もあるから注意。バンドの正体はむしろイージー・リスニング・サイドなのだろう。 （松本）



PANNA FREDDA
Uno

'71
●Vedette VPA 8134
○Vinyl Magic VM 001
◉

キーボードサウンドをバックにガンガン攻めまくる正統派のプログレッシヴ・ロック。俗っぽい音作りではあるが非常に好感が持てる。〝幻の名盤〞などという文句に踊らされ大して良くもないレコードを買い漁っている人が突如こんな作品に出会ったなら、きっと新鮮な感動を覚えるだろう。演奏技量やコンセプト的なものばかりが目立っても、躍動感に欠ける音楽はどこか空しいものである。その点、本作は若干荒削りの演奏ながら、プレイヤー達の意気込みが直に伝わって来る仲々の秀作と言えそうだ。チェンバロやacギターを使った静のパートでは不器用さが目に付くが、一方ではグレイシャスのフレーズを導入するなど意欲的なプレイを繰り広げている。なお本作以前にシングルが2枚程出ている。 （江田）



PARADISO A BASSO PREZZO
Paradiso A Basso Prezzo

'92('73録音)
●
○Mellow MMP 128
◉

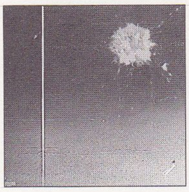
'73年の小規模なクラブでの演奏を、おそらくカセットで録音した物で、音質はブード級のオーディエンス録音。だが演奏自体はなかなかの作品で、インプロヴィゼーションが主体のハードかつアグレッシヴなモノである。荘厳な響きのオルガンと生ツバのフルート、音質が悪いこともあって誇張されて、迫力を増しているぶっといベースが、いかにもイタリア的な野武士ヴォーカルと共に、イタリアン・ロックの中でも異彩を極める邪悪な空間を形成している。テクニックも気にならないし、何よりもLIVE録音ならではの臨場感が、当時のイタリアの熱い雰囲気を伝えてくれることが非常に嬉しい。もしもスタジオ録音の音源がどこかに眠っているのなら、是非、聴いてみたいという気にさせる一枚である。 （津田）

P



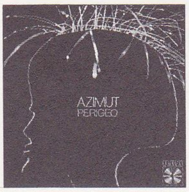
(LE) PARTICELLE
Azimut 1
'70
●CGD FGS 5081
○
◉

この〝パルティチェッレ〟というユニットは、どうもこのアルバムの為に集められたミュージシャン達によってワン＝オフ的にできたもののようだ。12人のミュージシャン達がクレジットされているが、我々になじみがあるところではマウリツィオ・エ・ファブリツィオが参加している、オーケストラやハモンド・オルガンを加えてプログレッシヴな試みをしている。ヴォーカル主体で古い音だが、イタリアの最初期のプログレッシヴ・ロックとして評価したいA③は僕の記憶では、パッティ・プラヴォがRCAのアーティストを一堂に会してのライヴ・アルバム「PIPER POP PARTY」の中で歌っている佳曲だ。（山崎）



(LA) PENTOLA DI PAPIN
Zero-7
'77
●Disco Piu DP 39010
○Vinyl Magic
◉

美しくも衝撃的なジャケットに包まれた「ゼロ-7」なるアルバムを世に送り出したラ・ペントーラ・ディ・パピンは4人から成るロック・スピリット溢れるグループである。彼等の中心を成すのはヴォーカリストを兼ねる、フェリー・ベティーニの繰る多種多様のキーボード群であり、それらにからみつくかのようなアンジェロ・レナッティの粘りのあるギターである。そしてドリー・ドリガッティの堅実なベース、ブルーノ・スタンゴニの力強いドラムスが更に現代的感覚を添える。過去のイタリアン・ロックへの憧憬とインターナショナル指向の見え隠れするチューンには一抹の淋しさを感じるが、イル・ボーロ亡き後の後期イタリアン・ロックを代表するグループである。（鈴木伸一）



PERIGEO
Azimut
'72
●RCA PSL 10555
○BMG Ariola ND 74103
◉

PERIGEOはジョヴァンニ・トマーソ(b, vo)をリーダーとして結成された当時のイタリアン・ジャズ・ロック・シーンを代表するグループだ。彼らのサウンドの特徴は、当時のイタリアン・ロックに共通する独特の感性を持っていて、しかもイギリスのジャズ・ロックをしっかりと吸収し、何か新しいものを創造しようとしていたことにある。本作は彼らのデビュー・アルバムに当たり、若々しい溌剌としたプレイが全編に漲った秀作だ。ここでは彼らが目標としていたのがSOFT MACHINEやNUCLEUSの音楽であったことが隠しようもなく明らかで、トマーソは殆どヒュー・ホッパーになり切っている。当時のヨーロッパの音楽シーンがきっちりと連鎖していた例証であり、しかも同時にイタリア独自の音楽であるのが見事。（坂本）



PERIGEO
Abbiamo Tutti Un Blues Da Piangere
'73
●RCA PSL 10609
○BMG Ariola ND 71934
◉

1stと同様、ヴォイス・ナンバーで幕を開ける。この雰囲気がもうどうしようもなくイタリアらしい。前作に聴かれたようなイギリスからの直接の影響はあまり感じられない。既に自分達のサウンドが確立しているからだろう。前作に比べるとピアノやアコースティック・ギターを多用している。PERIGEOの音楽はあらゆる面で非常にバランスがいい。メンバー5人の演奏における比重も実に巧く均衡しているし、ジャズとロックの感性が見事にマッチングしているし、端正過ぎず、暴れ過ぎず、聴く者の期待を全く裏切らない。調和と節度の上で成り立っている音楽。何でもないようだが、これは時代と彼らの才能が生み出した小さな奇跡かも知れない。目指しているものがよほどハッキリと見えていたのだろう。（坂本）



PERIGEO
Genealogia
'74
●RCA TPL 1 1080
○BMG Ariola ND 71935
◉

PERIGEOのメンバーは、ジョヴァンニ・トマーソ(b)、フランコ・ダンドレア(kb)、クラウディオ・ファソーリ(sax)、トニー・シドニー(g)、ブルーノ・ビリアーコ(d, perc)の5人。これまではメンバーだけでレコーディングを行なっていたが、ここではリズムの強化を狙い、一部マンドレークというパーカッショニストを加えている。相変わらず、よくできた曲を魅力的に演奏して聴かせる。PERIGEOはどのアルバムを聴けばいいのかと尋ねられると困ってしまうのはここだ。どれも皆同じくらいいいのだから。取り敢えず1枚目から順番に聴くのが妥当な線ではないだろうか？　但し、これからイタリアン・ジャズ・ロックを勉強しようという方にはそれより先に聴くべき重要なバンドがあることは一言忠告しておきたい。（坂本）



PERIGEO
La Valle Dei Templi
'75
●RCA TPL 1 1175
○BMG Ariola ND 71936
◉

この4作目までがPERIGEOの充実期であったと思う。イタリアン・ロック・ファンが聴いて面白いのもここまでだろう。本作では有名なパーカッショニスト、トニ・エスポジートがゲスト参加している。これまでピアノとエレクトリック・ピアノに専念していたF・ダンドレアがシンセサイザーに手を出していることもあって、演奏が幾分カラフルになっている印象を受ける。前作からG・トマーソ以外のメンバーも曲を書くようになったが、それで音楽がどう変わったかと言えば、多少明るい曲調が増えている気もするものの、再びSOFT MACHINEに立ちかえったような曲もあって、バランス感覚は揺るぎない。決して派手ではないが、メンバーの息が合っているというのがPERIGEOの最大の魅力だろう。（坂本）



PERIGEO
Non E' Poi Cosi' Lontano
'76
●RCA TPL 1 1228
○BMG Ariola ND 74099
◉

この5作目でPERIGEOは大きな質的変化を遂げた。解散してしまえばそれぞれの部品は決して変わっていないのだが、目指していた方向性が変わってしまったのだ。おそらくイタリアのバンドであることに飽き足らなくなったのだろう。カナダのトロントで録音された本作には、いつものようにゲスト・パーカッショニスト(今回はディック・スミス)を迎えるにとどまらず、オーケストラル・アレンジャーとしてピート・ペデルセンを迎えている。これによって彼らのサウンドがあっけなくイージー・リスニングに堕し、耳には心地よいが、PERIGEOである意味を失ってしまった。この後彼らは解散し、NEW PERIGEOが結成されたこともあるが、メンバーは今もヨーロッパ・ジャズ・シーンで活躍を続けている。 (坂本)



PHOLAS DACTYLUS
Concerto Delle Menti
'73
●Magma MAGL 18002
○
◉

黒地に浮き上がる顔面の不気味さが、どことなくムゼオ・ローゼンバッハに通じそうだが、中身はかなり違う。両面を通して1曲。大曲と言えばまさしくそのとおりだが、展開はしない。幾つかのパートをつないだ作風だ。語りが中心になっている。恐らく歌詩の内容に多くを負ったトータル・コンセプト作のはず。編成はvo、g、b、ds、kbd×2の6人編成ではあるものの、演奏は語りのバックといった趣きだ。全体にトーンは暗く、少々即興ふうな部分もある。録音状態が今一つということもあり、また演奏の歯切れの悪さもあって、インパクトには欠けるか。1枚を通すには力量不足に感じるが。フリー調の演奏部と幾分メロディアスに曲に仕上げた部分が印象に残る程度。'72年、ジェノバで結成されこの1枚を残した。 (松本)



PIAZZA DELLE ERBE
Saltaranocchio
'78
●Intigo ITLM 14502
○
◉

奇妙なグループである。民族音楽の香りを漂わせながらフリー・ミュージック、カンツォーネ等の要素もとり入れ、しかし知性によるオブラートがかけられ、変形させてしまっている。強いていうならば、全体の感じがジェーン・ソレンティ率いる「サン・ジュスト(Saint Just)」に似ているように思う。特に女性ヴォーカルのアンニュイな響きは通じるところがある。エドガー・アラン・ポーの作品をベースにしているようで、A面5曲、B面6曲がトータルな感じに仕上げられている。ピアノ、フルート、ギター、チェロ、オルガン、マンドリン等アコースチック楽器を多用している。サウンド・コンセプトはギタリストのアンドレラ・ベラーニがにぎり、ルチオ・ファブリがヴァイオリン等で参加している。 (山崎)



PICCHIO DAL POZZO
Picchio Dal Pozzo
'76
●Grog GRL 03
○
◉

イタリアで最も重要なジャズ・ロック・バンドはAREAだが、このPICCHIO DAL POZZOもイタリアの生んだ素晴らしいジャズ・ロック・バンドのひとつだ。彼らはカンタベリー・ミュージックの強い影響のもと、イタリアならではの非常に魅力的な音楽を作り出した。このデビュー・アルバムでは特にSOFT MACHINEやHATFIELD AND THE NORTH、あるいは『Rock Bottom』の頃のロバート・ワイアットのサウンドを消化し、ものすごく凝った演奏を実にさりげなく楽しそうに聴かせてくれる。2ndの超絶的に構築された圧倒的な音楽に比べると、交流のあったCELESTE(本作にもメンバー2人がゲスト参加)の音楽に通じる爽やかでドラマティックな抒情性が特徴的だ。これからも聴かれ続けて欲しい音楽…。 (坂本)



PICCHIO DAL POZZO
Abbiamo Tutti I Suoi Problemi
'80
●L'orchestra OLPS 55013
○
◉

ピッキオ・ダル・ポッツォはカンタベリー系のアヴァンギャルド・グループの影響を感じさせるバンドである。76年にグロッグ・レーベルよりファースト・アルバム「PICCHIO DAL POZZO」をリリースした後、しばらく音沙汰がなかったが80年に本アルバムをクランプスと並ぶアヴァンギャルド・ミュウージックの宝庫ロレケストラ・レーベルよりリリースする。ニュー・トロルスのヴィットリオ・デ・スカルツィの実弟、アルドのグループで変拍子を多用した密度の高い音楽性を誇っている。彼等はサード・アルバムを製作していたが、今だにリリースされてはいない。解散してしまったという説もある。ROCK IN OPOSITION加入グループでもありリコメンディッドのオムニバスにも彼等の曲が収録されている。 (山崎)



(LE) PICCOLE ORE
Voglio Amarti Cosi
'77
●Cetra LPX51
○
◉

ケシの花が咲き乱れる向こうに二人の後姿。いかにもイタリアのロマンスという感じに、ピッコーレ・オーレのサウンドもよく似合う。ラヴ・ロックというジャズ・ロックみたいな語呂合わせふうの言葉は、こんな所から出てきたのだろう。それにしては、甘い。ピッコーレ・オーレのラヴ・ロックは、一歩踏み出せば、ポール・モーリアの描くロマンスになる。とてもムーディーな流れが強い。ややもすると雰囲気をなぞっただけの流れになりかねない。イタリアン・ロック・ファンからすれば、もう少しアクセントになる部分が欲しいところだろうし、イタリアの雰囲気を味わいながらのバック・ミュージックにするには最適かもしれない。癖がなくアクもない。もう1枚「Le Piccole Ore」(LPX 71. '78)が出ている。 (松本)



PIERO E I COTTONFIELDS
Il Viaggio La Donna Unaltravita

'72
●Music LPM 2006
○
◉

裸婦と悪魔らしきものが独特のタッチで描かれたジャケット、ピエロ、エ・イ・コットンフィールズという一風変わったグループ名（実はピエロ・コットという名前の人をリーダーとするグループだった）によって、レコードの内容がまだほとんど知られていない頃、一部のファンの間で話題になった作品である。その内容は完全な歌物で、プログレッシヴな雰囲気はない、やや渋めのヴォーカルはイタリア的であるが、曲全体の印象はどちらかというとインターナショナル指向。どことなくグランデ・ファミリアを思わす部分もある。作品自体の質は悪くないが、イタリア、イタリアしたものを好む方には不向きかもしれない。ジャケットの絵の出来は素晴らしく一見の価値がある。（賀川）



PIERO EZIO E TINO
Carta D'identita' N°1 Mi Chiamo Piero

'71, '72？
●Rare LP55013
○
◉

Piero Cairo, Ezio Cristiani, Tino Negri、彼等3人が遺したこのアルバムを聴く度に不思議な感動を覚えてしまう。嗄れ声のボーカルはどんなに歌い上げても常に虚ろか奮囲気を漂わせているし、バックのサウンドは、かなりプログレッシヴにアグレッシブに演奏しても、決して派手に映らない。総じて地味で暗いトーンに包まれており、おそらくそれが大きな魅力を醸し出しているのだろう。一聴すると捕え処の無い展開は好みを分けてしまうだろうが、個人的にはとても気に入っている。尚、制作年に記されていないが、同レーベルのNCCPの1stと2ndの間の番号なので'71年か'72年のリリースである。（鈴木伸一）



PIERROT LUNAIRE
Pierrot Lunaire

'74
●It ZSLT 70025
○BMG Ariola ND 74114
◉

シェーンベルグの12音技法による代表作「月に憑かれたピエロ」からその名をとったピエロ・リュネールのファースト・アルバム。「ライプーレの地」、「湖に向かって」、「マンドラゴラ」等の曲名からさっするに、このアルバムも次作同様、童話をモチーフにしたトータル・アルバムなのであろう。アルトゥーロ・スタルテッリ、ヴィンチェンツォ・カポラレッティ、ガイオ・キョッキョの3人が多彩な楽器群を使いこなしてファンタジックなサウンドに仕上げている。フォーク的な色彩も強いが、すでにスタルテッリの才能は開花している。バンドとしては2枚のアルバムを発表し、スタルテッリとキョッキョがそれぞれソロ・アルバムをリリースしている。（山崎）



PIERROT LUNAIRE
Gudrun

'77
●IT ZPLT 34000
○
◉

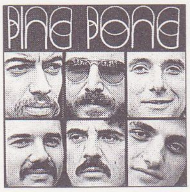
ピエロ・リュネールのセカンド・アルバム。前作時のメンバーのうち、ヴィンチェンツォ・カポラレッティが脱退し、替りに女性ヴォーカルのジャケェリーネ・ダルビィが加入した。北欧神話「サガ」の中に出てくる「グドルン」をめぐるトータル・アルバムである本作は、信じ難い展開をする。アルトゥーロ・スタルテッリの天才は、この時点に於いて見事に開花し、ピアノ、エレクトロニクス、チェンバロ、アコースティック・ギター、フルート、ヴァイオリンを自由に操り、恐ろしい程の緊迫感を伴い私達を神話の中へとひきずり込んでしまう。ジャクェリーネのオペラ調のボーカルも凄まじい。アルトゥーロ・スタルテッリはこの後ソロ・アルバムを制作するが、これ又、本作同様、素晴らしいものだ。（山崎）



PING PONG
About Time

'70
●Emiliana LP 5022
○
◉

イタリアン・ロックが、あの輝かしい時代への胎動を徐々に具現化し始めた頃、このPING PONGも混沌とし錯綜した自己の音楽表現の確立を目指していたのだろう。全曲英詩による為、イタリア然とした面が薄れてしまったのは残念だが、それでも時に軽やかに浮遊し、時に扇情的に狂舞するフルートを多用し、ジャージーにクラシカルにそしてハードに迫るそのサウンドは一聴の価値有り。特にA①は、プログレッシヴ且つアグレッシヴに展開する名演で、溢れんばかりの情熱を感じずにいられない。（鈴木伸一）



PING PONG
Ping Pong

'73
●Spark SRLP 246
○
◉

ボローニャの自主製作盤、'70年のデビュー作「About Time」から3年、幾らか整理され、ヴォーカルもイタリア語に、そしてジャズ色をうまく取り込んで、特にアコースティック・パートに洗練度が出た2作目。シングルも「Caro Giuda/Il Castello」(Spark SR 814, '73)と「Il Miracolo/Plastica E Petrolio」(SR 819, '74)の計4曲がカットされた。1曲目〝Il Miracolo〟の溜めのきいたイタリアン・メロディのヴォーカルのサビなどは歌物ファンへもアピールは大きい。全体には軽いジャズ色を添えたインスト指向で、フルートや生ギター、弦楽器、サックス等が導入される。熱いヴォーカルがある反面でたそがれた歌声も聴かせてくれる。プログレッシヴな展開の試み豊富な音作りだ。多彩さ、軽やかさが目立つ。（松本）



PLANETARIUM
Infinity

'71
●Victory VY 10051
○Vinyl Magic VM 019
◉

プラネタリウム—この驚異的なシンフォニックバンドについて語る資料は残念ながら何も無い。裏ジャケの解説によるとバンドは4人編成らしいのだが、肝心のメンバー名はベールに覆われたままだ。作品は、地球上に於ける生命の誕生とその歩みをテーマにしており、全編インストによる壮大な宇宙シンフォニーが奏で上げられるが、全曲ともA.Ferrariなる人物が書き上げている。雷鳴で始まり雷鳴で幕を閉じるまで、常にドラマチックな展開により「愛」「戦争」といったテーマが次々と描かれて行く。溢れんばかりのメロトロンワークを中心に、ピアノ、acギター、フルート、コーラス、各種効果音等をテーマ毎に巧みに使い分けてのち密な構成には全くスキが見当たらず、非常に高い完成度を誇っている。LPはプレス状態が良くないのが玉に傷だ。 (江田)



(I) POOH
Per Quelli Come Noi

'66
●Vedette VRM 36033
○
◉

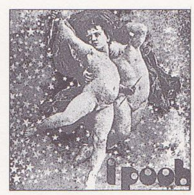
イ・プーはCBSに移籍以降ビック・ネームになり現在まで長い活動を続けているが、CBSよりのファースト・アルバムOpera Prima以前にヴェデッテ・レーベルに2枚の作品を残している。本アルバムはそのファースト・アルバムのオリジナル盤である。この時期には、80年代にはいって脚光をあびることとなるリッカルド・フォッリがメンバーとしてクレジットされている。レッドはまだ参加しておらず、現在まで在籍しているメンバーはロビー1人である。当然CBS時代のサウンドとは異なり、ビート・サウンド的なものである。しかしもちろん聴きどころもあり、初期の熱い情熱のほとばしりを感じることができる。 (山崎)



(I) POOH
Memorie

'70
●LP/Vedette VPA 8083
○
◉

デビュー・アルバムから4年を経て制作されたセカンド。この間、〝Piccola Katy〟というシングル・ヒット(ライヴ盤「Palasport」にも収録)を出したりしてまずまずの成功を収めていたが、メンバーには大きな異動があり、ヴァレリオ・ネグリーニ(ds, vo)、ロビー・ファッキネッティ(key, vo)、リッカルド・フォッリ(b, vo)、ドディ・バタリア(g, vo)という後の主要メンバーが揃う。つまり「Opera Prima」と同メンバー。しかし曲は英米のビート・ポップスのコピーと言っても怒られない程度の他愛のないもので、あの頼りなさが何ともいえず魅力的なフォッリのヴォーカルや、感情移入の激しいネグリーニのドラミングも個性を発揮できないままでいる。シングル曲〝Mary Ann〟を収録。 (古田)



(I) POOH
Opera Prima

'71
●LP/CBS S 64592
○CGD 9031705152
◉

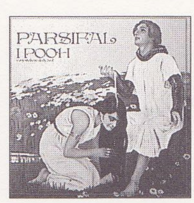
サード・アルバムながら、大手 CBS(CGD)に移籍し、'70年代のプー・サウンドの基礎を確立した、これがプーの実質的第一歩。この時点でオリジナル・メンバーはネグリーニ(次作から作詞に専念)を残すのみとなる。ジャンカルロ・ルカリエッロ(Prod.)/ジャンフランコ・モナルディ(Arr.)との協同体制による初の作品でもあり、これは「Forse Ancora Poesia」まで続き、プーにとっては最初の黄金時代をつくり上げた。粗野で熱気に満ちたバンド演奏に優雅なストリングスが融合した楽曲は強いインパクトを放ち、イタリアン・ポップスならではの『ウォール・オブ・サウンド』をかたちづくっている。〝Pensiero〟〝Tanta Voglia Di Lei〟といった超名曲をはじめ、バロックの香りが濃厚に漂う名作。 (古田)



(I) POOH
Alessandra

'72
●CBS S 69023
○CGD 9031 705022
◉

CBS移籍後2枚目にあたる本アルバムは、'72年11月にミラノで制作された。2枚のヒット曲(旧A②、B②。特にA②は日本でもシングルカットされた。)を収め、'73年1月から11月までアルバム・チャートの上位にランクされ、ゴールドディスクを受けたものである。内容は32人のオーケストラをふんだんに使い、良質なラヴ・ロックをドラマチックに仕立あげるという、イ・プー初期の傑作を世に送り出す真のスタートとなったものである。A②をはじめとする思い深いヴォーカルと重厚なオーケストラとの交錯、B⑥のドラマチックなエンディング、思わずイタリアン・ラヴ・ロックの奥深さを感じずにいられない。この流れは後に「パルシファル」へと受け継がれ、「ロマン組曲」で開花することとなる。 (鈴木茂)



(I) POOH
Parsifal

'73
●CBS S 69043
○CGD 9031 70517-2
◉

リカルド・フォッリの脱退により解散の危機にさらされたイ・プーが、カプシクム・レッドからレッド・カンツィオンをメンバーに迎え制作されたのが本アルバムであり、CBS移籍後3作目にあたる。本作は、ワーグナーの同名の楽劇にヒントを得、「ミラノの映像」で確立されたオーケストラとの融合を更に発展させたドラマチックな展開となっている。中でもタイトル曲は10分におよぶ大作で、二つのパートに分かれ、前半はロビーのピアノをバックにもの悲しげなヴォーカルが響きわたり、ドディーのギター、全員のコーラスが重なり合い、ハープに導かれ重厚なクライマックスへと続く。正にイ・プー・サウンドの結晶ともいうべき本作のストリングス群は、「コンチェルト・グロッソ」のそれにも匹敵する。 (鈴木茂)



(I) POOH
Un Po'Del Nostro Tempo Migliore
'75
●CGD 69118
○CGD 9031705232
◉キング 260E 52071

プーの長い歴史の中で「パルシファル」と「ロマン組曲」の2枚が最も強くクラシック色を打ち出したものとなっている。だからどうというわけではなく例えば「プーラヴァー」や「ブーメラン」「ヴィヴァ」以降の飛び切りポップな音創りのプーも非常に良いのである。結局プーなるバンドはアイドル・グループのくせにやること以上のことはやっていてメジャーものではしっかり聴いて良いものだ。もしも貴方がイタリアものを少しはかじっていてバッティスティとプーを軽んずる風であると、これはちょっとマズイ。バッティアートやピーノ・ダニエーレと違って日本でもちゃんとレコードが出ていたんだから「女ともだち」くらいは聴いといて下さい。パガーニだって勧めてるのですよ。　(岡本)



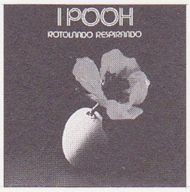
(I) POOH
Forse Ancora Poesia
'75
●CBS69212
○CGD 9031705092
◉

「ロマン組曲」に続くCBS第6作。次作「Poohlover」からはジャンカルロ・ルカリエッロ統治下を脱しバンド独自のカラーを打ち出しているから、ストリングスによる壮大なオーケストレーションが聴けるのは本作が最後ということになる。それも前作で極めたロマンティシズムの残り香といった趣きで、ジャケット・デザインも含めて控え目な印象。時代時代の色付けを施しながら常に若返ってゆく彼等の様なアーティストの評価は難しい。音楽を好きになるだけでは聴き続けられないからだ。従ってグループのファンになるか、アイドルとして無視するか、どちらかにするのが良いと思う。彼らも自分達の音楽を難しく考えられるのは嫌だろう。　(古田)



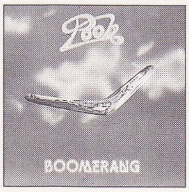
(I) POOH
Poohlover
'76
●CBS 86015
○CGD 9031705182
◉

ルカリエッロ/モナルディの下から一応離れ、セルフ・プロデュースによるバンド独自のサウンドを模索し始めた、第三期の幕開けを告げる佳作。ロビーの声は、もうバンドの顔になっている。青春の幻想と憂鬱を色濃く打ち出していた従来の作風から、まるで人生を肯定的にとらえ直すように、メジャーな曲調が次第にアルバムの大部分を占めるようになる。背景を埋めつくしていたストリングスが突然姿を消したことにより、聴くものばかりでなく彼等自身とまどっている様子が感じられる。そんな中で生まれたのが、スタンダードとしてつとに有名な"Pierre"。ビートルズの"Yesterday"にも似た至上のバラードであり、作詞のネグリーニを含めて彼等がいまだ青年の心を持ち続けていることが伝わってくる。　(古田)



(I) POOH
Rotolando Respirando
'77
●CGD 20012
○CGD 9031705192
◉

心身ともに自立を果たし、よりライブ向きのサウンドを完成させた、バンドの歴史の中では重要な作品。"Dammi Solo Un Un Minuto""Che Ne Fai Di Te"といったシングル・ヒットも生む。イタリアン・ロック・ファンには"Opera Prima" "Alessandra" "Parsifal" "Un Po Del Nostro Tempo Migliore"といったアルバムはもちろんマスト・アイテムだが、本作から"Viva"あたりまでのプーも、ひとつのポップ・グループがアイデンティティを獲得してゆくドキュメントとして、一枚くらいは是非聴いておいてもらいたいところだ。大衆性だけでなく、ミュージシャンとしての才能が、彼らにはあった。それが、一度ならず二度、三度の成功に繋がっているのだから。(古田)



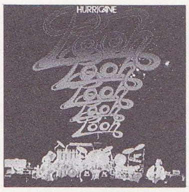
(I) POOH
Boomerang
'78
●LP/CGD 20077
○CD/CGD 9031-70507-2
◉

ウェストコースト・サウンドの影響がかなり強く感じられるアルバム。穏やかで、間の多いアレンジと、煮え切らないメロディがマイナスに作用して、印象が薄い。いろいろなスタイルを摂借する中で、イタリアらしい陰影を潜り込ませるところが'70年代後半以降のプーの真骨頂ではあるが、この作品が成功しているとは、ちょっと言い難いと思う。しかしそんな中で、"Cercami" "Ci Pensero Domani"といったタイプの曲を入れることも忘れない。実験だけではファンは納得しないことを彼等はよく知っているのだ。このあと、ダンサブルなリズムなども取り入れ、またまたヨーロッパ的な感性を取り戻すわけだが、まぁ誰にも寄り道くらいはあるもので…。　(吉田)



(I) POOH
Viva
'79
●CGD 20162
○
◉

'70年代末～'80年代のイタリアン・ミュージックの苦境を彼等がどのように乗り切っていったか、それが窺える時期の11作目。次作では例によって海外進出を狙うわけだが、その時に物を言ったのは、バンコ、PFMではないプーのポップ・センスだった。そしてこれこそ彼等の音楽の中心にあって長く宿してきたものだ。彼等はそのポップ・センスを堂々と押し出し迷いがない。その事が彼等の強さであり、それはプーの音楽である。昔に比べればディスコ調のリズムもある。しかし、それに乗って繰り広げるものが何も変らない彼等の音楽である。終盤の何曲かは、"Parsifal"のように劇場な展開さえ見せる。様々な色づけをしようとも、彼等のポップ・センスには、いつも情が感じられる。　(松本)



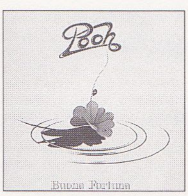
(I) POOH
Hurricane
'79
●CGD 20210
○CGD 9031 70508 2
◉

1曲目のディスコふうのリズム、そして英語のヴォーカル。このアルバムは、冒頭1分間で特徴をつかむことができる。全10曲。全て英語歌詩。要するにこのアルバムはイタリア国外に向けて製作されたものだ。録音はミラノだがミックスはニューヨークで行なわれている。10曲も1曲の新曲を除いて、過去の既発曲を英語ヴォーカルにしたもので、正式なオリジナル・アルバムとは言い難い。9曲の内わけは「Poohlover」から1曲、「Rotolando Respirando」から5曲、「Boomerang」から3曲。生粋のイタリア・ファンからすれば味薄かもしれないが、基本的なニュアンスは変っていない。1曲目にしてもそこにオーケストラを入れてしまう。このアルバムを聴くと、彼等が自分達の音楽に凝いのないことを殊更確認できる。（松本）



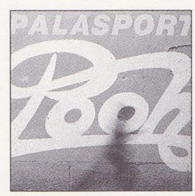
(I) POOH
...Stop
'80
●CGD 20225
○CGD 9031705202
◉

イタリアのファンタジィ文学を表す言葉として「fantasia realta」がある。つまり英米ファンタジィの今や主流を占める別世界物ではなく、現実を舞台とした幻想ということだ。〝Parsifal〞や本作の〝Inca〞のように物語や歴史に題材を取った作品もあるが、大枠ではPOOHの世界もこの言葉で説明出来るだろう。日常の中の夢や郷愁や憧れ。'80年代最初の作品となる本作は、ヨーロッパの粋を伝える洗練されたポップスから、ドラマティックなプログレ・ハード的ナンバーまで、彼等の幅広い音楽性を示す一方、明確なトータル・アルバムとしての構成もとられており、現代人のうつろいゆく渇いた心を映し出している。学生時代、女友達に本作を貸した所、彼女は詩と曲に涙したと言う。乗りの感じられる傑作。（高山）



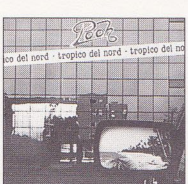
(I) POOH
Buona Fortuna
'81
●CGD 20264
○CGD 9031 70508-2
◉

「美しい幻想」（原題は「幸運の女神」の意）という邦題とは裏腹に、本作からは嘗ての幻想美は感じられない。しかしそもそも'80年代の彼等にクラシカルな様式やイタリアの地方色、哀愁を求める方が間違っている。人はPOOHの音楽を聴くためにそのディスクをターンテーブルに乗せるのだ。自伝的な内容の②、「誰が音楽を止められるんだ」と力強く歌う⑩を始め、全編余裕と優雅さを漂わす、より親しみ易く、安定した演奏とメロディに溢れた、思わず一緒に口ずさむようなポップで美しい仕上り。抜けるような明るさと一片の叙情。ピンク・フロイドのエンジニアとして知られるブライアン・ハンフリーズ起用の成果は、一音一音の深みとライヴ感の融合という形で表われている。秋に聴きたい好盤だ。（高山）



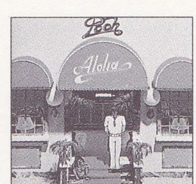
(I) POOH
Palasport
'82
●CGD 21210
○CGD CDS 6022
○
◉

'81年のツアーの模様を伝える必聴のライヴ盤。「Opera Prima」から10年、4人のメンバーだけでこれだけの音を出せるようになったのだから、単なるアイドル・バンドなどと呼ぶ人はもういないだろう。「Viva」「Buona Fortuna」というバンドの歴史上重要な作品を発表し、乗りに乗った時期の録音だけに、もう聴き所だらけと言ってもいいくらいの充実ぶり。特にオールド・ファンには、〝Parsifal〞と、〝Banda Nel Vento〞にはさまれたナツメロ・メドレーが嬉しい。オリジナルLPには、ミキサー卓を模した内ジャケットの小窓がくり抜かれ、そこから内袋に印刷されたオール・キャストが覗くという仕掛けがある。CDは3曲削られた上に曲順もシャッフルしてあるので注意が必要。（古田）



(I) POOH
Tropico Del Nord
'83
●CDG 20373
○CGD CDS 9031705212
◉

'70年代、イタリアにはアドリアーノ・パナッタというテニス界のスター選手がいて、ボルグやコナーズ等の希代の名手の陰に隠れながらもスマートなルックスと芸術的なプレイで人気を得ていた。個人的には彼等にもそうしたイメージがあり、本国屈指の人気と実力に比して少なくとも日本での一般的な認識が今一つなのも、その何処か線の細い印象が災いしているのだろう。しかし、カリブのエアスタジオで録音され、来日記念盤（世界歌謡祭のゲスト）として発売された本作では、ロビーのフェアライトを中心に、よりタイトでハードさを増した力強い面とメッセージ性が強調されている。ハードな③、徐々に盛り上がるドラマティックな④、アカペラの⑥とライヴの後らしい更なる意気込みが伝わって来る。（高山）



(I) POOH
Aloha
'84
●CGD 20437
○CGD 9031705032
◉

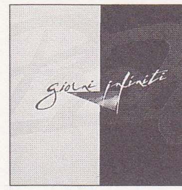
前作で顔をのぞかせた南国指向が高じたのか、なんとハワイ録音を実現させた彼等。だからといってすぐに音がトロピカルでハワイアンになったかというと、そんな訳はなくて、1、2曲はそれらしき部分があるものの「Buona Fortuna」の路線を少しずつ変化させていった結果があるだけのことだ。いかにもイ・プーなバラードも入っている。時にはファンを裏切り、重要な成果をおさめるもの、またドツボにはまってゆくもの、様々な生き方はあるが、彼等はそうではない。そこがイ・プーのいいところであり、つまらないところでもある。本作は、これといったナンバーが見られず、各自ソロ・プロジェクトが活発に進行していた時期でもあり、小休止といったところ。（古田）



(I) POOH
Asia Non Asia

'85
●
○CGD 9031705062
◉

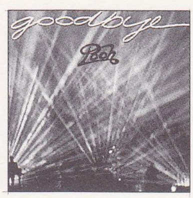
アルバムタイトルと竜をあしらったロゴが何処かのバンドを思い出させる。この時期の彼等の音楽は、イタリア語の歌詩を別とすれば快活なハード・ポップと言って良いだろうが、その心踊るメロディには所謂産業ロックとは一線を画す、変わらぬ歌心が息づいている。それぞれの時代の衣を粧いながら日和りさを感じさせないのも、この歌心あってこそだろう。数曲で聴かれる東洋的なシンセの響き、エレクトリック・ドラムの使用に加えて、得意のフレットレス・ベース、⑦での久々に引き捲るギターと、4人の演奏の試みと安定感のバランスの妙も特筆すべき。〝旅〟三部作の完結編。「コンピュータと銅鑼のアジア／ヒロシマとベトコンの夜明け」(タイトル曲より)。内ジャケの日本の歓楽街の写真は情けないが。　（高山）



(I) POOH
Giorni Infiniti

'86
●
○CGD 9031705102
◉

'86年という発表年からは信じられない超変型カヴァー(残念ながらLPのみ)で発表。トップ・グループであることを嫌と言うほど認識させられる大判振舞いである。ディジタル系キーボードのきらびやかな音、そしてゲストのクラウディオ・パスコリによるサックスがアルバムに軽妙な色合いを添える。グループがスタートしてからすでに20年、にもかかわらずほぼ年に一枚はアルバムを発表し続けている彼等であるから、当然曲は似通ったものになっている。そのマイナス面を補うのが、アレンジャー(本作ではフィオ・ツァノッテイ)やゲストの存在であろう。ロビーの曲とヴォーカルが〝プーらしさ〟をしっかりキープする中、ドディやレッドの楽曲が与えるアクセント効果も忘れてはならない。　（古田）



(I) POOH
Goodbye

'87
●CGD77001
○CGD 9031705112
◉

'82年発表の「Palasport」は初のライヴということもあって、集大成的な選曲がされていた。この3枚組のヴォリュームを誇る最新ライヴはここ10年間位の、はつらつとしたナンバーが中心である。初期の作品しか知らない方には興味が湧かないと思うが、イタリアを代表するポップ・グループの優れたライヴとして載せておきたい。今回はブラス・セクションをサポートに加え、キーボード一本やりで多少苦しかったバッキングに厚みが加わった。音像をなるべく中央に寄せて、ステージを少し遠くに設定する録音方法をとっているから、演奏と同じく歓声も良く聴こえる。つまり〝あなたも会場に居るんですよ〟という彼等らしい配慮だ。やっぱりプーは偉い。　（古田）



(I) POOH
Il Colore Dei Pensieri

●CGD
○CGD 9031705132
◉

鮮烈な色彩にあふれたカヴァー・アートが素晴らしい。「Aloha」あたりから続いている〝プーらしさ〟を残したAOR路線も、ここで頂点を迎える。特にアレンジ面での充実ぶりはケチのつけようがなく、生楽器からディジタルまで、ありとあらゆる素材をプーという土俵の上で完璧に料理している。顔の見えない不特定多数ではなく、ここ十数年明らかにファンのためにアルバムを出し続けている彼等の姿勢には時として退屈さもつきまとうが、それほどのファンでもないという人には5、6年周期で1枚のアルバムを聴く方法を薦めたい。その方が、少しずつ変化してきた音の傾向をとらえやすいからだ。'80年代後半なら、間違いなく捨て曲の見あたらない本作だろう。バラードもいい。　（古田）



(I) POOH
Oasi

'88
●
○CGD 9031705142
◉

「オアシス」と題された本作は、'80年代後半、後期の彼等の隠れた力作である。前2作の今一つすっきりしないAOR路線と比べ、ここで再び迸る若々しさはどうだろう。過去にもムーグ、フェアライト等、新しい機材の導入に意欲的だったロビーは、ディジタル系キーボードを前面に使用。ダイナミズムとスケール感を出すことに成功している。彼等と同等のキャリアを誇るバンド——フロイド、タル等——を考えれば、その若さ、或いは永遠の青さに驚かずにはいられない。ドディのギターも冴え、今回はレッドが良い曲を書いている。尚、本作発表後にアルバム未収録のインスト1曲を含む「オアシからオペラ・プリマまで」と副題の付けられたベスト「Un Altro...Pensiero」もリリースされている。　（高山）



(I) POOH
I Nostri Anni Senza Fiato

'88
●
○CGD CDLSM 100042
◉

POOHのアルバム未収録ナンバーを中心とした編集盤。英語で歌われる③(「Hurricane」に収録。元曲は「Rotolando〜」に)を除く9曲は何れもオリジナルには収められていない。彼等には多くのベスト物があるが、その意味で見逃せない一枚だろう。アルバムは〝La Gabbia〟路線のM・オールドフィールドを想わせるインストで幕を開け、'70年代前半の、アコースティックを生かしたしっとりとしたナンバーから、もう一曲のインストを挟み、'80年代の快活なポップ・ロックまでを聴くことが出来る。ラストの〝Happy Christmas〟(J・レノン)は彼等からのクリスマス・プレゼントだろうか。彼等の歩みと多彩さをコンパクトな形ながら楽しめるアンソロジーと言えるかも知れない。　（高山）



(I) POOH
Uomini Soli
'90
●CGD
○CGD 9031 71085-2
◉

冒頭からマイナー・キイの暗いバラードが流れだし、プーを聴き続けてきた者としては一体何が起こったのかと思わずにいられない。続いてレッドによる、通好みなナンバー。これに象徴されるように、全体にグレイのイメージのある、地味なアルバムである。アレンジも〝間〞を意識したベーシックなものに変わっている。6曲目になってようやく従来のプーらしい曲調が登場するものの、これも実に捨て曲っぽい雰囲気が漂っていることから、彼等自身こうした曲作りのパターンに飽きている様子がうかがえる。その他楽曲自体の質は低くないが、プーの膨大なディスコグラフィー中では、霞みがちなものになることは確か。ラストではエロス・ラマゾッティ、ウンベルト・トッツィら有名シンガーが次々にリードをとる。（古田）



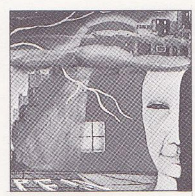
(I) POOH
Il Cielo E'Blu Sopra Le Nuvole
'92
●
○CGD 4509 90400 2
◉

前作からしばらくぶりのアルバムになる。もっとも、プーのような25年選手が長くても2年のインターバルでアルバムを出し続ける事自体、驚異的である。特定の時期を切り取ってこれが最高と言い切ることは、彼等に限ってはできない。ゆるやかなスタイルの変化と、最初から変わらないもの、これがプーのすべてだ。マイナー・キイのバラードで幕を開け、いかにもの元気ポップス、アコースティック・バラードと展開する様は前作とほとんど一緒だし、とにかくどのメロディも以前のアルバムで耳にしたようなものばかり。だが、プーに対して、ラップやブリキ缶をひっぱたく音楽を期待する者がいるだろうか? ファンと自分達の為にただ愛の歌を作り続けるその姿に、理屈を超えた感動を覚える（古田）



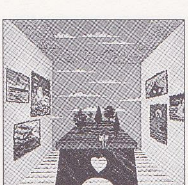
PRAENESTUM 452
Dolce Tenera Amica
'74〜75?
●Universal Sound USA LP 2004
○
◉

今までジャンボのアルヴァーロが在籍していたといわれていたが、彼自身によると、このグループとは関係がなかったことが明らかになった。このグループは73年から74年にかけてシングル3枚をリリースし（内、最初の2枚はPRAENESTUM BLOCCO 452名義）、それらの曲を基にこの唯一のLPを制作したと思われる。従って制作年は74〜75年頃だろう。いささか古くさいカヴァーものもあるが、初期のプーのような、ストリングスをたっぷりと使用したリリカルなナンバーもある。又、シングル曲でもあった「E LUI CHIE」はメロトロンを導入したプログレッシヴなナンバーで一聴の価値はあると思う。全体を通して聴くと、やや散漫な印象があるのはシングル集的なアルバムなのでいたしかたないところだろう。（山崎）



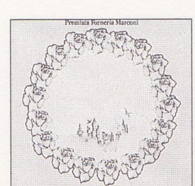
PREMIATA FORNERIA MARCONI
Storia Di Un Minuto
'72
●Numero Uno ZSLN 55055
○BMG Ariola ND 74059
◉キング KICP

'68年にクエッリが結成され、プレミアータの歴史は幕をあける。クエッリはマウロ・パガーニをむかえ、プレミアータ・フォルネリア・マルコーニと改名し、この記念すべきファースト・アルバムをリリースする。A②、〝9月の印象〞は、後に「甦る世界」としてヒットする曲。A③は有名な〝セレブレイション〞の原曲である。プレミアータは現在も活動を続けているが、マウロ・パガーニばかりでなく、キーボードのフラヴィオ・プレモリさえも失い、ドラムスのチョッチョのグループとなってしまい、低迷してしまっている。プレモリは最近ジャンジルベルト・モンティのアルバムに参加、パガーニは3枚のアルバムをリリースしている。このファーストには彼等の若い、無垢のイメージがつめ込まれている。（山崎）



PREMIATA FORNERIA MARCONI
Per Un Amico
'72
●Numero Uno DZSLN 55155
○BMG Ariola ND 71784
◉キング KICP 2718

イタリアン・ロック史上、最も偉大なる足跡を残したP.F.M.の2ndアルバム。後にマンティコアを通じ世界に発表された「Photos of Ghosts」は本作を母体とし、更に2曲を加えて作られたものである。本作はもちろん全曲伊語で歌われており、またテイクの違っている曲も2曲ある。まずA①は、大海原を思わせるメロトロンとハープの調べに導びかれて始まり、また中間部と終末部のオーケストレーション・パートも、本作ではメロトロンのみで演奏され、マンティコア盤よりも素朴な印象を受ける。また、マンティコア盤で英詩の付けられていた本作のA②は、インストゥルメンタルの曲である。なお、本作のオリジナル盤はWジャケであり、中ジャケではスタジオで演奏する彼らの姿を見ることができる。（城元）



PREMIATA FORNERIA MARCONI
Photo Of Ghosts
'73
●Manticore ANTI 2002
○BMG Ariola ND 71785
◉キング KICP 2701

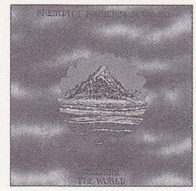
このアルバム抜きには、イタリアンロックは語れない。P.シンフィールドが彼らに目をつけて製作および詩の英訳に携わり、レコーディングにはグレグ・レイクが立ち会ったという、まさに歴史的名盤、一家に一枚のアルバムだ。当時、百花繚乱であったイタリアンロック勢の中で、唯一インターナショナルな成功をおさめた彼らの世界戦略的アルバムであり、結果、日本においてもイタリアへと目を向けさせるきっかけとなった作品である。イギリスものとは一味違う叙情性と、のびやかなメロディーラインに包まれ、ひとときの至福感を味わうことができる。英語で歌われ、前作二枚に比べれば垢抜けており、その分イタリア臭さは薄れて、フリークには物足りないだろうが、イタリアンロックの入門盤としてはうってつけである。（岡崎）



PREMIATA FORNERIA MARCONI
L'Isola Di Niente

'74
●Numero Uno DZSLN 55666
○BMG Ariola ND 71782
◉キング KICP 2702

通算4作め。本作からB.が元アレアのヤン・パトリック・ジヴァスに交代している。マンティコア盤「World Became the World」のイタリアン・テイクでこちらが1曲少ないが、基本的に演奏テイクは同じで、A①の曲でVoのオクターブが本作の方が高い点が目立つぐらいだ。美しい小曲のB②や巧みな演奏のA②、ジャズィなB③など多彩な内容だが、何と言っても聴き物は混声合唱に導かれて始まる10分以上のタイトル・チューンと彼らのテクニックと作曲能力が爆発するB①の名曲〝La Luna Nuova〟だ。特に後者は日本のKensoに多大な影響を与えたと思われ、後に「空に光る」となって結実したと見るのが妥当だろう。スリーブは中央部切り抜きの変型で、オリジナルは内袋を引き出すと下に廃墟の様が現われる。（城元）



PREMIATA FORNERIA MARCONI
The World Became The World

'74
●Manticore K
○
◉

大英帝国の宝物庫が空になりかけた頃、イタリアンロックという新たなエルドラドの存在を知らせた『幻の映像』に続く作品である。大地をゆるがす重厚なコーラスに、のっけから首根っ子をつかまれ、きらめく銀河のただなかに放り出される。あとは、彼らの構築する千変万化、気宇壮大な音宇宙を旅するだけだ。静と動の対比が素晴らしく、メロトロンの津波を頭からかぶり、胸が熱くなるほどの感動的なメロディーに包まれるかと思えば、時には戦慄すら覚えるはかない夢幻世界が繰り広げられる。まさにイタリアンロックの新骨頂、これぞプログレである。初期の作品に比べると幻想性は薄れているが、完成度はナンバーワンであろう。英語盤（ジャケット青色）とイタリア語盤（緑色）の二種類があり、レコードは変形ジャケ。（岡崎）



PREMIATA FORNERIA MARCONI
Live in U.S.A.

'74
●Numero Uno DZSLN 55676
○BMG Ariola ND 71838
◉

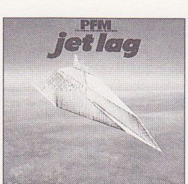
「甦る世界」発表直後の'74年8月、トロント及びニューヨークでのライヴ。プログレッシヴロックがメジャーシーンでも十分な市民権を享受していた当時、本場での公演を夢見たミュージシャンはイタリアにも数知れずいたと思われるが、インターナショナル市場進出に成功し、アメリカ公演のライヴ盤まで残すことが出来たのは彼らだけだった。その貴重なライヴ演奏が最高の録音状態でいとも簡単に楽しめるのだからこのレコードの価値をもう一度見直したいものである。英語版の曲が多いのは致し方無いが名曲〝Dove Quando〟も忘れずに収録した他、A④〝セレブレイション〟〜〝甦る世界〟では絶妙のつなぎで聴かせてくれる。ウィリアム・テル序曲まで盛り込んだB②ではパガーニの凄まじいばかりのヴァイオリンソロが堪能出来る。（江田）



PREMIATA FORNERIA MARCONI
Chocolate Kings

'75
●Numero Uno ZLSN 55684
○BMG Ariola ND 71781
◉

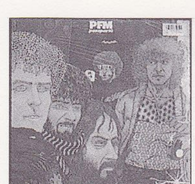
アメリカ・ツアーを経た後に発表されたアルバム。本作までのP.F.M.はシンフォニック・ロックの極点にあると言える。アクア・フラジーレのベルナルド・センゼッティ（Vo）を引き抜いて製作した本作は、楽曲の魅力という点では過去の作品に一歩譲る感もあるが、演奏は極めてソリッドで、そのテンションは全作品中最も高い。本作発表の同月に行なわれた日本公演の素晴らしさは全も伝説的に語られている。伊盤と世界向けのマンティコア盤はジャケ違いで、伊盤はふとったマリリン・モンロー（表が小さく、裏が少し大きい。表裏共たばこをくわえていない）のデザインでポスター付がオリジナル。マンティコア盤はかじりかけのチョコレートのデザイン。共にアメリカに対する皮肉に満ちている。（城元）



PREMIATA FORNERIA MARCONI
Jet Lag

'72
●Zoo ZPLZ 34408
○BMG Ariola ND 75244
◉

マウロ・パガーニ脱退後に発表された問題作。新たなヴァイオリニストとして元イッツ・ア・ビューティフル・デイのグレゴリー・ブロックが加入している。パガーニがその多くを担っていたとされているクラシカルな叙情性が大幅に後退してしまったためにファンの間ではあまり人気のない作品だが、演奏面では前作「Chocolate Kings」と並ぶ頂点にあったことをまざまざと見せつける凄絶なパワーを見せつけている。元々このグループを初期のイメージだけで「クラシカル・シンフォニック・グループ」として片付けるにはあまりに無理があり、ジャズ民族音楽までも高度に掌握するその底無しのキャンパシティにはただただ驚嘆するばかりだ。グループ間の交流が深いアレアとの接点も強く感じられる。（内田）



PREMIATA FORNERIA MARCONI
Passpartu

'78
●Zoo ZPLZ 34032
○
◉

自らのレーベルZOOを起こしての第一弾。アメリカ指向のPFMと、それを嫌ってバンドを脱けたマウロ・パーガニであったはずなのに、このZOOレコードからのニュー・アルバムは、ほぼ同時期に発売されたパガーニの傑作ソロ・アルバム「地中海の伝説」同様、アコースティック楽器を多用した民族音楽に傾倒したもの。この方向へ行くのなら、マウロは脱退しなくともよかったのでは?と思ったファンも多いはず。「地中海〜」が日本でもベスト、セラーになったのだから、PFMの本アルバムも、もっと評価されてもしかるべきとも思うが、そこはそれPFMに求めるサウンドは、少なくとも日本のプログレ・ファンにとっては、このようなものではなかったということだろう。これ以降のPFMはただ寂しい限り。（高見）



PREMIATA FORNERIA MARCONI
Suonare Suonare

'80
●Numero Uno ZPLN 34092
○BMG Ariola 74321 100812
◉

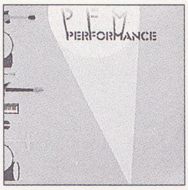
ポップス・グループ、カンタウトーレまでがプログレッシヴな作品を作ってしまうほどに、シーンに多大な影響を与えたロック・プログレッシヴ・イタリアーナのムーヴメント。その象徴的存在とも言えるPFMが本格的にポップな路線を目差すようになった最初の作品であり、'70年代のプログレッシヴ・ロックが完全に過去のものになったことを痛感させる1枚。シーンの状況が変化し、バンドのポリシーも変わっているのだから、従来と同じ視点から評価するのは間違いである。ヴォーカルを中心にしたポップスで、その安定した演奏はさすがにPFMである。多少地味な音作りのため万人が楽しめるものとは言い難いが、ベテランならではの技が光る良質の作品である。
（賀川）



PREMIATA FORNERIA MARCONI
Come Ti Va Riva Alla Citta

'81
●Numero Uno 34140
○
◉

遂にフラヴィオ・プレモリもグループを去り、4人編成になったPFMの作品。通算10枚目のアルバムである。前作以上にポップな音作りがされている。全曲イタリア語のヴォーカルであるがサウンド自体にイタリアらしさはない。かつて同じように、大物プログレッシヴ・ロック・グループと言われたニュー・トロルスは'77年に「Aldebaran」を発表した頃から本格的なポップ・グループとして活動し始め、その後、いくつかの名作をリリースし、この頃、ポップ・グループとしても一時代を築いていたが、ポップ・グループとしてのPFMが彼らに遅れを取ったことは否定出来ない。レヴェルの低い作品ではないが、あまり個性を感じさせないことも事実である。（賀川）



PREMIATA FORNERIA MARCONI
Performance

'81
●Numero Uno ZPLN 34161
○BMG Ariola 74321-100822
◉

PFM、2枚目のライヴ・アルバム。前ライヴ・アルバム「Live In U.S.A.」はプログレッシヴ・ロック史上に残る一大傑作であった。技術的には世界各国の超一流ジャズ・ロック・グループ、フュージョン・グループに勝るとも劣らぬものであり、イタリアのシンフォニック・ロックならではの叙情に溢れ、そして、ライヴならではの熱気がひしひしと伝わってきた。それから7年、'81年7月21日にフィレンツェで行なわれたライヴを収めた本作品を聴く時、時の流れを感じざるを得ない。シンプルで力強い、所謂ロック的な演奏が全編に渡って展開されている。「9月の印象」「セレブレイション」といったかつての名曲もアレンジを大きく変えて演奏されているが、当然のごとく、昔の演奏には及ばない。（賀川）



PREMIATA FORNERIA MARCONI
P.F.M.? P.F.M.!

'84
●Numero Uno CL 71789
○
◉

'84年の作。この時点での布陣はフランコ・ムッシーダ、フランチェスコ・ディ・チョッチョ、パトリック・ジヴァスの3人。完全にポップス系のビートがきいたサウンドである。ここまでくると昔のプログレッシヴ・ロック時代のファンはついていけないと思う。又、新しいフィールドのファンを得るまでサウンドが熟成していないので、音楽的にもセールス的にもやや中途半端な結果になったアルバム。決して完成度は低くないのだが、PFMがやっているのだという必然性が余り感じられないのである。'84年当時のポップス界のイディオムを取り込みながらの演奏。ヴォーカルが主体である。（山崎）



PREMIATA FORNERIA MARCONI
Miss Baker

'87
●Ricordi SMRL 6372
○
◉キング KICP 1

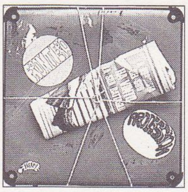
'70年代にイタリアを代表するスーパー・シンフォニック・グループとして世界中に名をとどろかせたが、プログレッシヴ・ロック・ムーヴメント衰退の後、自国での活動の中では多くの試行錯誤がみられた。民族音楽やポップスへのアプローチ等、新たなアイデンティティーを暗中模索していた印象だ。しかし、この「ミス・ベイカー」では1つのアイデンティティーを打ち出し、良質の作品になったといっていいと思う。雰囲気がフィル・コリンズ時代で成功を収めた頃のジェネシスに似ていなくもないが、古いスタイルに固執することなく、現代の音楽のイディオムを自分達なりに消化し、この時代のサウンドとして生き生きして聴こえる。（山崎）



PRIMA MATERIA
La Coda Della Tigre

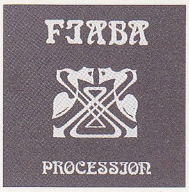
'77
●Ananda 2
○
◉

イタリアには数多いシンフォニック・グループが70年代に存在していたが、一方、アヴァンギャルド畑でもアレア、アスコルト・レーベル、ロルケストラ・レーベルを始め数多いグループが輩出されていた。このプリマ・マテリア――第一元素――と名付けられたグループは、イタリアの若手現代音楽家のレコードをリリースしているアナンダ・レーベルの第2弾として発表されたものである。この作品は4人のヴォイスのみによって演奏されるもので、タミア、ジュリー・ティペッツ、メレディス・モンク等と共通点のある音宇宙を創造している。グループ名も楽器以外の人間の持つ音声的器管をプリマ・マテリアと称したのであろう。いわば人間の肉体の可能性に挑戦した作品といえるだろう。（山崎）



PROCESSION
Frontiera
'72
●Help ZSLH 55131
○Vinyl Magic
◉

プロセッションはG.×2、Vo.B.Drというイタリアン・ロックにあっては珍しいツイン・ギター・バンド。A面終盤部を除いて基本的にキーボードはいないが、アコースティック・ギターとヘヴィーなエレクトリック・ギターを対比させて曲に起伏を生んでいる。特にアコースティック・ギターをバックに金属質のヴォーカルが歌い上げるところなどはなかなか聴かせる。しかし全体の完成度という点では今一つといったところだろう。トータルな内容のA面終盤では溢れる様なメロトロンが飛び出して盛り上がるが、これも全体の流れから見ると少々浮き上がっている。曲創りにもう一工夫欲しかったところだ。なお、彼らは74年にチェトラから2ndアルバム「Fiaba」(LPQ 09081)を発表している。 (城元)



PROCESSION
Fiaba
'74
●Fonit Cetra LPQ 09081
○Fonit Cetra CDM 2032
◉

プロセッションの2ndアルバム〝Fiaba〞は、かなり前からそのタイトルと番号のみが知られていたが、12号のカタログ作成の時点で少なくとも編集部では現物を確認していなかった。音についての憶測は多々あったが、オリジナルメンバーは2人だけ(vo. g)となり、従来のカラーはある程度残しながらもsax(fl)を正式メンバーとして加入させた他、デリリウムのE. Vigo、元サーカス2000のS.Aliotta等多彩なゲストを迎え、より洗練された演奏を聴かせている。1st同様キーボード系の出る幕は余り無いものの、トゲトゲしいイメージはすっかり消えた。オープニングの力強いパーカッションに象徴される攻撃性、フルートや曲によってはメロトロンによって生み出される叙情性、牧歌性を巧く散らし、時にはジャジーな展開までも盛り込んでいる。 (江田)



PROFETI
Era Bella
'71
●CBS S64758
○
◉

'60年代中頃にデビューしたプロフェティは揃いの派手なコスチュームをまとって歌っていた。'70年に入るまでオリジナル曲をやってもまるでイギリスのビート・グループのようだった。彼らのサウンドが変化したきっかけは恐らく'69年にリード・ヴォーカルのレナートがソロで録音した〝Lady Barbara〞がヨーロッパで大ヒットしたことだろう。このアルバムもビート色が消え、ストリングスが加わったために歌ものとして充分に楽しめる。全体を通じて愛をテーマにしたトータル性が感じられる。アルバムの最後はフォルムラ・トレが歌ったバッティスティの曲で、悪女フランチェスカを歌ったもの。攻撃的なトレとは対照的に静かなアレンジになっている。 (Hiro Tanaka)



(I) PROFETI
L'amore E...
'73
●CBS 69033
○
◉

計4枚のアルバムをリリースした中で、CBS時代の3枚はどれもジャケットが思わせぶりで、イタリアン・ロック・ファンの関心を集めやすい。でもジャケットの印象ほどには、意欲的な音作りはされていない。むしろオーソドクスな歌物バンドだ。このアルバムは彼らの3作目に当たる。アレンジはD、B、ベンボの父親、Aldo Baldan。CBS系の歌物につきまとうストリングス、女性コーラスを仕切るアレンジャーは役どころが大きい。それを思うと、今回は世代的に少し隔りがあるのだろうか。少しオーソドクスな脚色だ。次作からすれば、起状に乏しい気がする。もしくは曲自体が一本調子だからだろうか。今一つ印象に残るアクセント、決め手に欠ける。全体に焦点が絞れていないような印象を受ける。 (松本)



(I) PROFETI
Cercati Un'Anima
'75
●CBS 69144
○
◉

プロフェティは少なくとも4枚のアルバムを出している。'67年の「Bambina Sola」が多分アルバム・デビュー作になる。もともとビート・ポップス・バンドとして出発した彼等も'70年代に入って歌物バンドの色を強めた。このアルバムは「Era Bella」、「L'amore E...」に続くもので、ダニロ・ヴァオーナのオーケストラ・アレンジや女性コーラスの協力を得てふくらみのあるサウンドになっている。それでもどちらかと言えば、荒さを残すヴォーカルや、演奏に重点があって、オーケストラやコーラスは曲のサビを補助する形で加えられる。今一つ流れにつややかさが感じられないのは、その両者に差が感じられるからだと思う。決定的な歌メロに欠ける点も中堅バンドのイメージを与えている。射程距離内なのだが。 (松本)



(IL) PUNTO
Ettore Lo Fusto
'72
●Music Parade Cetra LEL 199
○
◉

クラシック、映画音楽、民族音楽等のリリースが多いMusic ParadeはFonit Cetra傘下のレーベルで、カタログを見る限りイタリアのロック・グループらしき名前を見つけ出す事は出来ない。この作品も又異なる2つの映画のサントラをAB面に分けて収録しているが、B面に収められた〝Ettore Lo Fusto〞ではI Puntoの演奏に接する事が出来る。収録曲は5曲で全て3分にも満たないインスト・ナンバーであるが、〝Il Tallone Di Acchille〞での唾吹きフルートが乱舞するヘヴィーなアンサンブルや〝Doppio Punto〞、〝Menelao Shake〞での熱気溢れるサウンドは未完成乍らも程々に楽しませてくれる。尚、彼等はPicciとBeatの両レーベルにシングルを残している。 (鈴木伸一)



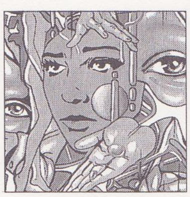
PUNTO 2
Odore Di Capra
'76
●Ghibli CD 3304
○
◉

'72年に「Ettore Lo Fusto」をリリースしたIL PUNTOの2作目と思われがちだが、別のバンドだという説も強い。PUNTOのメンバーを知る手立てがないため正確な所は判らない。こちらはジャケットのイラストをそのまま音にしたような夢見心地な雰囲気を持った歌物になっている。'76年の録音とは思えない響きだ。fl、p、ac-gのトーン、そして息使いさえ聴きとれるヴォーカルが、まるで'70年代初期そのものだ。とてもみずみずしく古き良き時代のイタリア感性がきらめく、といったふうに感じられる。あくまでも歌中心だが、バンド指向でもある。それだけに'70年代イタリアン・ロックのファンへ訴るものは、決して少なくないと思う。多少、曲に平凡さを感じるものの、物静かな曲想とそのトーンが叶うはず。 (松本)



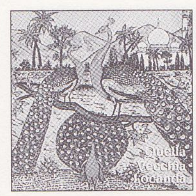
QUELLA VECCHIA LOCANDA
Quella Vecchia Locanda
'72
●Help ZSLH 55091
○BMG Ariola ND 74528
◉

イタリアン・ロック・ファンの間で、かつて幻のグループの代表格的存在だったクエラ・ヴェッキア・ロッカンダ。しかし彼らの遺した〝音〟は決して幻のまま終わらせて良いようなものではない。本作は彼らの1stアルバムだ。彼らの特徴は、何といってもヴァイオリンとフルートを前面に押し出していることだろう。後の2ndアルバムと比べると、美的感覚において若干見劣りするものの、全体に力強い音創りのなされた本作もかなりの魅力に満ちている。しかしどれにも増して素晴らしいのはB④の曲だろう。美しくも哀しげなピアノの調べに導かれて、信じ難いまでに哀しい旋律を奏でるヴァイオリンとフルート。この〝哀愁〟こそが彼らの最大の持ち味であり、私達の心を捕えて放さないものなのである。 (城元)



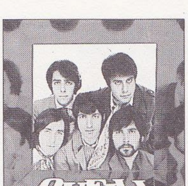
QUELLA VECCHIA LOCANDA
Il Tempo Della Gioia
'74
●RCA TPL1-1015
○
◉

CD化が行なわれる以前、ほとんどイタリア盤が入手困難な状態だったころ、それらの貴少盤の中で、叙情派サウンドのグループに話を限定するならば、このクエラ・ヴェッキア・ロッカンダのセカンド・アルバム、「イル・テンポ・デラ・ジョイア」(歓喜の時)が代表格的存在であった。特にA①の感情の高揚は他の追従を許さぬ程の圧倒的な仕上がりをみせている。ソロ・ヴァイオリンとアコースティック・ピアノが中心となったリリカルな響きは、今まで多々、イタリアのロックに親しんでこられた方にさえ、新鮮なショックを与えるに違いない。クエラ・ヴェッキア・ロッカンダ――すなわち朽ちはてた家とはそのままイタリアの古い街並みを連想させる。伝統の彼方からつながるバロックの糸は彼等によって見事に甦った。 (山崎)



QUELLA VECCHIA LOCANDA
Live
'93('71年録音)
●
○Mellow MMP 159
◉

信じられないような美しさを湛えたセカンド・アルバムが余りにも有名なクエラ・ベッキア・ロッカンダのライブ・アルバムがメロウ・レコードよりリリースされた。これは'71年の録音で、ファースト時のメンバーからヴァイオリンを除いた布陣である。ファーストの曲を1曲だけ聴けるが、彼等の最初期の録音なので、余り完成度の高い演奏は期待できない。注意深く聴くなら、ところどころに後の片鱗を感じることはできるが、このアルバムを聴くことによってあのセカンドの輝きに疑問を感じるファンが出ないことを望みたい。こういう未完成なソースをリリースすることは、いくら商業至上主義とはいえ、バンドの黄金期に対して無礼な印象がある。 (山崎)



QUELLI
Quelli
'69
●Ricordi SMRP 9053
○
◉

クェッリは'60年代後半に活躍した、いわゆるビート・グループの一つで、ジガンティ、オルメ、ノマーディ、コルヴィ等と同世代である。後にPFMを結成することになるフランコ・ムッシーダ、フラヴィオ・プレモリ等が在籍していたことが有名だが、サウンドのほうはPFMとはおよそかけ離れたもので、当時の他のグループがそうであったように、外国のヒット曲のカヴァー・ヴァージョンが多い。PFMのサウンド・コンセプトは、むしろチョッチョが在籍していたクレル(KREL)あたりからの影響があったようである。シングル・ヒットをめざしたグループなので、唯一のLPはそれらの集成的なものである。オリジナル盤は非常にめずらしい。 (山崎)



(LA) QUINTA FACCIA
Piccola Luisa
'77
●Universal International Music 5094/016
○
◉

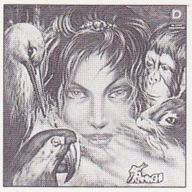
ラ・クインタ・ファッチャは、1枚のアルバムと4枚のシングル、「Tonight/Strano Uomo」(Euro International EUR 005, '74)、「Tornero/Anna Anna」(EUR 1938, '75)、「Annich/Pronto Amore」(EUR 1940, '75)、「Piccola Luisa/Abbraciti E Mi Salvi」(Universal International Music 5090/154)を残した歌物バンドである。〝Annich〟と4枚目のシングル曲2曲は、このアルバムにも収録されている。バンドの演奏が主体でオーケストラの厚塗りはほとんどない。ヴォーカルもそれ程甘くないので、全体としては清涼感がある。ソフトな曲調にそうした面がうまく出ている反面で、古臭いビート調の曲もあって、こちらはいただけない。ピアノや広がりのあるストリングス・シンセが効果的。 (松本)



RACCOMANDATA RICEVUTA RITORNO
Per...Un Mondo Di Cristallo

'72
●Fonit LPX 15
○Fonit Cetra CDM 2026
◉

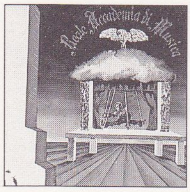
フォニット・チェトラより唯一のアルバムをリリースしたRRRは正式名をラコマンダータ・コン・リチェヴータ・リトルノといい、'72年に行なわれた大規模なイタリアン・ロックの祭典「フェスティヴァル・ポップ・ディ・ヴィッラ・パンフィーリ」で好評を博し、同年、本アルバムをリリースした。オザンナにも通じるような邪教的なイメージを漂わせ、サックス、フルート、コントラバス等の生楽器がうまく使用されて、バランスの良い作品に仕上げられている。メンバーの内、ルチアーノ・レゴリ(Vo、G.)とナンニ・チヴィテーニャ(G.)は'74年にリリースされたサマディのアルバムへと加入し、これによってグループはその短い生涯を閉じたのである。カヴァー・アートはスタジオ・アップ・アンド・ダウン。 (山崎)



RAMINGHI
...Il Lungo Cammino Dei Raminghi

'72
●Bentler BE LP1016
○

'70年にBentlerよりシングル・デビューを果たした彼等の唯一(?)のアルバム。メンバー等は不明だが、1stシングルのジャケを見る限りでは男性四人組である。サウンドはサイケ色を残したオルガン・ロックといった所だが、A①の9分を超える大作が、意欲的な展開・暗い曲調による中々の出来映えで、我々にとっては最も説得力のある曲だと思う。シングルは3枚を確認出来るが、取り分け3rdシングルのA面〝Rendini L'anima〟(Bentler : BE/NP5093)は、色彩感豊かなキーボードをバックに配した名曲で、彼等のベスト・チューンであろう。 (鈴木伸一)



REALE ACCADEMIA DI MUSICA
Reale Accademia Di Musica

'72
●Ricordi SMRL 6105
○
◉キング KICP 2005

レアーレ・アカデミア・ディ・ムジカは、I FOHLKSに在籍していたキーボード奏者、フェデリコ・トロイアーニを中心に結成され、唯一のオリジナル・アルバム(本作)と、アドリアーノ・モンテドゥーロとの共演作を残した。ディレイのかけられた(あるいは多重録音?)アコースティック・ピアノの響きや歌心を大切にして切々と語りかけるようなヴォーカルが、哀愁感に満ちて、深い味わいを残す。特に牧歌的で浸み入るような1曲目と、その流れを汲みやがて大胆な展開を見せる大曲の2曲目が珠玉の出来。後半になると初期VDGGのようなオルガンの響きの重厚な曲も収録されている。これもまた'70年代初期ならではのイタリアン・ロックを満喫できる一作。トロイアーニは後にソロ活動に入り、3作をリリースした。 (松本)



RICCHI & POVERI
Questo Amore

'78
●Cetra LPX 67
○
◉

リッキ・エ・ポヴェリのチェトラ・レーベルにおける3作目。アレンジは全てトト・トルクァーティ。歌詩はトト・トルクァーティのアルバムで詩を書いたSergio BardottiとSergepyである。歌物アルバムとしてよく出来た内容で、ストリングスと甘いヴォーカルによるアルンニ・デル・ソーレをソフトにしたかのような曲、鳴りの良いギターとやや力強いヴォーカルが印象的な曲、多少イタリア色が薄いポップでハイ・センスな曲、耳に心地良い軽めのイタリアン・ポップスなどが次々に登場する。マニア向けのサウンドではないが、後期のニュー・トロルスなどと同じところに位置する大人のポップスであり、トト・トルクァーティの力量とセンスが光っている。 (賀川)



RICORDI D'INFANZIA
Io Uomo

'73
●Fonit Cetra LPP 227
○Fonit Cetra CDLP 426
◉

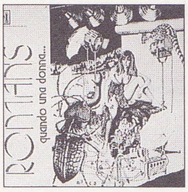
リコルディ・ディンファンツィアは73年に唯一のアルバムを発表している。ヘヴィーなプログレッシヴ・サウンドを得意とするためか、彼らの音を例える際、時にブラック・サバスの名が取り沙汰されるが、適切な例とは言い難い。ヘヴィーなギターワークのみを取れば類似性は見い出せるものの、サウンドの核を成すのはあくまでもオルガンであるし、ピアノ等を導入したサビの部分は紛れもなくイタリア的な手法に依拠しているからだ。但し全体的な音作りとしてはブリティッシュ・ロックからの影響が感じ取れるし、叙情性を求めるリスナーの耳に合うかどうかは保証出来ないが、多少なりともロック音楽の持つ重々しさに魅力を感じている人には推薦出来る作品。 (江田)



ROCKY'S FILJ
Storie Di Uomini E Non

'73
●Ricordi SMRL 6115
○
◉

サックス奏者兼ヴォーカリストのRocky Rossiを中心にしたg & fl、b & tb、ds & contrabass、4人編成のROCKY'S FILJ、唯一のアルバム。楽器編成を見てのとおり、ジャズ・ロック色が強い。さすがに'73年という時期もあってか切れ味鋭くとは行かない。el-bなど少々おぼつかない所もある。むしろ管楽器とヴォーカルのインパクトが強い。まるでロッキー・ロッシとそのバンドといったふうに思える。それくらい暑苦しく前へ前へと音が出てくる。いかにも当時のイタリアらしい熱血型の古いジャズ・ロック・タイプだ。サックスとは言えロックの荒削りな面を感じさせる。バンドは'81年に再結成されシングル「Astrocar/Come Una Nuvola」(Shirak SRF 4514)をも残した。 (松本)



ROMANS
Quando Una Donna
'74
●Disco Polaris POL/BP 715
○
◉

ロマンスは数枚のアルバムを出しながら人知れず消えていったポップ・ロック・グループである。彼らと同様のサウンドが注目されたのは'75年以降なので、シーンに登場するのが早すぎたのかも知れない。以前サン・ヴァンサン音楽祭で「愛に帰れ」('74年)で参加していたが、ヒットには至らず、結局マイナー・レーベルを彷徨うことになる。山崎氏の御好意により、合計5枚のアルバムを確認することができたが、レーベルはLovers、Polaris、Bus Recordとよく分からない名前ばかりである。それらの中で、コーラスに重点を置き、キーボード系を多く用いて作られたのがこのアルバムである。

(Hiro Tanaka)



(I) ROMANS
Promesse D'amore
'75
●Lover CD 3301
○
◉

ロマンスと言えば、プロフェティもジャルディーノ・デイ・センプリチもどれも区別なく一くくりにされるイタリア歌物バンドの一つだが、大手レーベルに所属しなかったことで、多少なりとも違いがある。'70年代中頃にはプーの成功を次に目論んで、レコード会社専属のアレンジャーにオーケストラ染めされたバンドは少なくなかったに違いない。ロマンスも〝Amore…〟と歌い上げるバンドとしての本質には何も違いはないが、その曲の抑揚も自分達でつけざるを得なかったのか、結果として5人の演奏が目立つことになる。従ってスケールは大きく感じられないものの歌とバッキングの折り合いが滑らかで、時としてkbd等がソロをとったりもする。前作「Qnando～」に比べると歌物色が強まってはいる。

(松本)



(I) ROMANS
I Ricordi Piu Belli Del Nastro Amore
'79
●BUS 20009
○
◉

一般的には「Qvando Una Donna」が代表作とされるロマンスだが、所謂ラブロックといわれるものの中でもこれぞ最良の一作!ジャケットのださらで一気に興味はそがれるが、実は愛の思い出を語る一大トータルアルバム。ひたすら甘いオーケストレーションに女性コーラス、シンセも加え凝ったアレンジも見せる。そしてラストはオーケストラによるワルツのインストで大団円。ちなみにこのアルバム「イタリアン・サウンド」のAlfred Enzo Carlaに感謝の意が記されているが、全作品を書いたPlizzyとNatiliは「イタリアン、サウンド」の唯一のアルバムやシングルでも全て手がけている。ロマンスとイタリアン・サウンド、その関係も気になるところだ。

(木下)



POMANTIC WARRIORS
Battlefield
'93
●
○Viny Magic VMNP 04
◉

元アルティ・エ・メスティエリのベッペ・クロヴェッラが〝NEW PROG 90〟の旗の基に自らのスタジオで自らプロデュースするシリーズはファンに好意的に迎えられているが、遂に自らのグループを制作した。それがこのロマンティック・ウォーリアーである。アルティ時代のメンバーも参加している。サウンドはアルティというよりもさらにシンフォニック・ロック的なスタイルで、録音の共通性もあって、今までリリースしてきたカリオペやイル・カステッロ・ディ・アトランテあたりにも通じるようなイメージだ。もちろん、ハモンド・オルガンやメロトロンを使用して、往年のいいものを現代のテクノロジーの中で甦らせようとする彼の意図はこの自らのバンドの中にも息づいている。

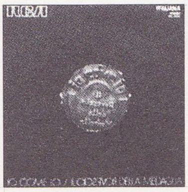
(山崎)



(IL) ROVESCIO DELLA MEDAGLIA
La Bibbia
'71
●RCA PSL 10521
○BMG Ariola ND 74112
◉

アルバム「Io Come Io」ではバンド名(メダルの裏側)を地で行く変形ジャケ(ジャケ中央に実物のメダルを組み込んだ)で我々の度肝を抜いた彼らであるが、その前にアルバムを1枚リリースしており、こちらにはメダル型ブックレットが付されている。日本ではシンフォニック色の濃い「Contaminazione」が有名であるが、初期に於ける彼らの演奏内容は同作とは相入れないものである。次作とある程度共通の音作りがなされており、インプロヴィゼーション的な幕開けながら、荒々しいギターサウンドに支配されたハードロックで大半が埋め尽くされている。ジャケットには〝dal vivo〟のコメントがあり、スタジオライヴと推定されるが、キーボードレスでもありヘヴィな面ばかりがストレートに出過ぎた作りは評価が分かれそう。

(江田)



(IL) ROVESCIO DELLA MEDAGLIA
Io Come Io
'72
●RCA PSL 10545
○
◉

イル・ロベスチォ・デラ・メダリャのセカンドアルバム。ヘーゲルの実存主義をそのサウンドコンセプトにおいているようである。ここで聴かれるサウンドは、次の「コンタミナツィオーネ」とはかなり趣の違ったもので、ラフな輪郭のハードロック的なアヴァンギャルド・ロックである。「コンタミナツィオーネ」の壮大なオーケストレイトされたスリリングなサウンドと比較すると一目も二目もおいてはいるが、それなりの楽しみ方もできよう。驚くべきはジャケットで、中央の部分は金属のメダルでできており、彼等のグループ名がさかさまにうちだしてある。(グループ名はメダルの裏側の意でそれをもじったものである。)いくら当時のイタリアは変形ジャケットが多いといってもここまで徹底したものも珍しい。英盤もでていた。

(山崎)



(IL) ROVESCIO DELLA MEDAGLIA
Contaminazione

'73
●RCA PSL 10593
○BMG Ariola ND 74511
◉

イル・ロベッシオ・デッラ・メダリャは'71年に「La　Bibbia」、'72年に「Io Come Io」、'74年に本作を発表する。'75年にはFROGレーベルに移籍して1枚のシングル「Let's All Go Back/Anglosaxon Woman(FRS3001)」をリリースし、アルバム用のマスターも完成していながらLPはリリースされることなく、'77年にグループは解散してしまった。本作ではL・E・バカロフがオーケストラ・アレンジを担当し、目のさめるようなクラシカル・ロックを聴かせてくれる。壮大なバロック・ロックというにふさわしい作品。メンバーの内、ステファノ・ウルソ(B)は'80年にグループ「ヨーロッパ」を結成しアルバムを1枚発表した。又、最近になって「...Giudivio Avrai」というライヴLPが本国で限定再発されている。（山崎）



(IL) ROVESCIO DELLA MEDAGLIA
...Giudizio Avrai

'88
●Disco Autoprodotto R.D.M.L 75
○
◉

このRDMのライブアルバムは'88年に突如リリースされたものだがおそらくイタリアのファンが極小数を限定自主制作でリリースしたもののようである。このライブ、残念ながら収録された年などの詳しいデーターが記されていない為詳細については殆どわからないのだが、サウンド的には「コンタミナツィオーネ」でシンフォニックロックに変化する以前の、1stや2ndで聞かれたようなサイケ色のあるインプロヴィゼーション的なヘヴィーロックをギター、キーボードを中心に展開したものである。そんな訳でこのアルバムでは初期の彼らのステージでの姿を聴くことが出来る。なお、表ジャケットにバンドのロゴマークが入ったものとないものがあるが、入ったものがオリジナルのようである。（島村）



RUSTICHELLI E BORDINI
Opera Prima

'73
●RCA DPSL-10594
○BMG Ariola ND 74115
◉

二人のスタジオ・ミュージシャンが創りあげたこのアルバムは、すべてのプログレ・ファンを驚嘆させることだろう。ドラム担当のカルロ・ボルディーニは縁の下の力持ち的役割に徹しており、主役は全編に渡ってメロトロン(!!)、ピアノ、オルガン、アープを縦横無尽に操るパオロ・ルスティケッリである。曲のスタイルは、Key, B, Dr.というトリオ編成のものを想像していただければよいのだが、この作品にベースは入っていない。そのかわり唸りをあげて迫ってくるアープ・シンセが圧巻で、ベース・パートを補ってあまりあるものがある。キーボードを中心としたバンドは、世界中に数多く存在したが、これ程の重厚さと広がりを持った作品はちょっと見あたらない。とにかくスゴイアルバムなのである。（城元）



SAINT JUST
Saint Just

'73
●EMI C064-17870
○
◉

恐怖のヴォーカリスト、アラン・ソレンティの姉か妹かはわからぬが、ジェニー・ソレンティの歌を一聴すれば、彼の血筋であることは疑う余地もない。このジェニー(Vo.)とアントニオ・ヴェルデ(G.B.Vo.)、ロベルト・フィクス(Sax)の3人を中心としてこのサン・ジュストは結成された。他にもドラムのアントニオ・エスポジートをはじめ、ギター、キーボード奏者の3人が参加し、レギュラーに近い活躍をしている。またアラン自身もこのアルバム作りに関わっており、B①の曲では自らのヴォイスを披露している。本作は彼らの1stアルバム。基本的にはアランの初期の作品に強く影響されており、美と狂気の交錯した空間を創出している。さらに、とてもとてもうつろな雰囲気に包まれたジャケットも最高だ!!（城元）



SAINT JUST
La Casa Del Lago

'74
●EMI 3C064-18033
○
◉

フランス革命期の人物SAINT JUSTから名を取ったサン・ジュストはアラン・ソレンティの妹ジェーン・ソレンティのバンドだ。これはセカンド・アルバムで、前作よりやや力強くなっているが、やはりアラン・ソレンティの女版といった曲展開を聴かせてくれる。バンドはこのアルバム発表後解散してしまうが、後にジェーンはジェニィ・ソレンティ(JANNY SORRENTI)というクレジットで2枚ソロ・アルバムを発表している。このうち2作目は最近のアラン・ソレンティ同様ポップな音創りとなってしまった。又、バンドのベーシスト、トニー・ヴェルデはロル・コックスヒル、デヴィッド・ボウハウス、等をむかえてソロ・アルバムを1枚発表した。（山崎）



ST. TROPEZ
Icarus

'92('77～'78年録音)
●
○Mellow MMP 105
◉

CELESTEのドラマー、チロ・ペリーノが'77～'78年に残していた未発表ソース。ライナーにも書いてあるように、ゴングやヒア＆ナウから影響を受けたスペース・ロックをやっている。女性のヴォイス(ヴォーカルではない)とヒレッジ風ギターにアープ・シンセサイザーを絡めて、その雰囲気を醸し出しているものの、やはり本家は強力で、浮遊感や混沌としたムードを作り出すところまで行っていない。その中でヴォーカル作になると妙にチェレステっぽくなる部分もある。リリース予定が有ったのか、録音の水準はまあまあ普通。メロウ・レコーズとの絡みで、ペリーノ絡みの発掘音源が少なくないが、彼自身のソロ・アルバムも2枚出ていた。どちらもスペイシーなキーボード作でテクノふうの所が気になる。（津田）



(I) SALIS
Sa Vida Ita Est
'71
●Prodduttori Associati PA/LP 37
○
◉

遠目から見ると骸骨の様に見えるこのジャケット、実は外側を女性の裸で囲って中身は髪の毛で埋めているイラスト。幻想的かつ不気味な雰囲気で内容も期待が高まる。シングル、LP共に数枚出しているこのグループの最初期のLPが本作である。AB面合わせて13曲もある小品集(シングル曲多数含む)とわかり、ジャケの良さに惑わされた。アコ・ギ、オルガンをバックにポップな歌メロの曲はあまりいただけないが、暗めのメロディーに決して重くないオルガンが流れる曲は結構いける。通して聞くと、このアルバムはフォーク・タッチのポップ・ロックで多少サイケデリックな味付の施こされている散漫だがまあまあ聞ける作品というところであろうか。コアなファンのみ対応。(六井)



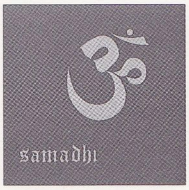
(I) SALIS
Seduto Sull'alba A Guardara
'74
●CIPITA LP OK 13
○
◉

私はこのLPと'77年にLibertyから出てるシングル1枚しか知らないがこのバンドはいいぞいいぞダッシュダッシュゴウゴウゴウゴウ体当たりだよ恋のGTなのだ。山水電気が絡んでいるだけあってこのレコードの音響は素晴らしいものがあり、それだけでおしっこちびっちゃうのにまた曲がイタリアらしくてしかも質量感もバッチリなのだ。更に声が朝一番で大便をきばる時のような男の喜びここにありといった感じの野生味溢れるイタリア声で実に壮快なものがある。Dバルダンベンボもオルガンで参加。殆ど歌物の域など越えていてシンフォニックの域に達している。日本の最先端の科学とイタリアの芸術が結びついた美しい結果を体感出来る1枚。(牧野)



(I) SALIS
Dopo Il Buio La Luce
'78
●IAF LPA 89018
○
◉

'66年にアルバムを発表しているBARRITASというグループに源を発しているらしいSALISは、その後SALIS & SALISという名儀でシングルを発表。そしてProduttori Associattiより正式にSALISというグループ名でデビューしたかなりのキャリアを持つグループ。Salis兄弟を中心にしたサウンドは、当初のフォーク的なものから次第にプログレッシブな演奏を聴かせるようになる。この作品は彼等の3作目でテクニカルにそして万華鏡の如く変化するサウンドは、ダイナミズムに溢れたとてもファタジックなものである。この後中心人物のAntonello SalisはCADMOなるグループに参加し「Boomerang」というアルバムを発表するが、内容はジャズ・ロックで、昔日の面影は無い。(鈴木伸一)



SAMADHI
Samadhi
'74
●Fonit Cetra LPQ 09080
○Fonit Cetra CDM 2031
◉

元L'Uovo Di Colombo, Raccomandata Ricevuta Ritornoのメンバーを中心に結成されたサマディは74年に唯一のアルバムを発表している。当初、「ブラスをフィーチャーしたソウルフルな音で完成度は今一つ」との変な噂が独り歩きしてしまい、正当な評価を受ける機会を逸して来たが、実際には水準以上の素晴らしい演奏が楽しめる。シンフォニック性という点では確かに疑問符が付くものの、ブラスを取り入れた曲は2曲のみで、他は流麗なピアノや透明度の高いヴォーカルを中心に無難な演奏を聴かせている。しかし特筆すべきは8分にも及ぶB面ラストの曲〝L'Ultima Spiaggia(究極の浜辺)〟だ。イタリアン・ロックの持つ叙情性を余すところ無く詰め込んだ秀曲となっている。(江田)



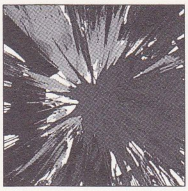
SANDEMAN
Love And Dance
'72
●
○
◉

イタリアの'72年の作品。全曲インストゥールメンタルでどちらかと言えばBGMふうであるが、大半の曲にメロトロンが使用されており、叙情的で美しい。また、イギリスのENIDやスペインのLOS RELAMPAGOSに近い印象を受ける。技術的にはごく標準的なものであるが、端正な曲づくりと、メロトロンを随所に配した曲展開には好感が持て、爽やかな感動を覚える。叙情的な曲調の好きな方に推選したい。(村上)



(I) SANTONI
Noi
'72
●Car Juke Box CRJ-LP 00026
○
◉

カー・ジューク・ボックス・レーベルと言うと真先に思い浮かぶのがLe Ormeの初期の2枚であり、更にマイナーな所では、Laserあたりだろう。共にプログレッシブ・ロックの範疇で語るには無理が有るにしても、そのイタリア然とした音楽自体の輝きは、表面的なジャンル分けとは無縁の価値を有していると思う。Santoniの多分唯一と思われるこのアルバムも又、そうした捨て難い魅力を持った好作品。基本的にはポップな感覚を全面に押し出しているものの、イタリア語のボーカルと時折入るフルート、そしてくすんだオルガンの音色が当時の雰囲気を充分に伝えてくれる。メンバーは5人。同年LPからのカットシングルがあり、前年発表のシングル「Amico Mio/Dimenticare」はLP未収である。(鈴木伸一)



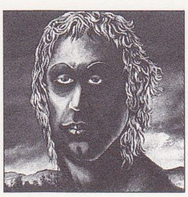
(LA) SECONDA GENESI
Tutto Deve Finire
'72
●Picci GLA 2002
○
◉

セコンダ・ジェネシ唯一のアルバム。'72年、ローマのマイナー・レーベルPicciからのリリースであるが、200枚の限定製作で、カラフルな絵の具を施した手作りのジャケは200枚全てデザインが異なる。ただ、演奏の方は純シンフォニックとは行かず、評価が分かれそうだ。サックスを積極的に取り入れ、イタリア物としては珍しくドロドロした、割とフリーな部分が目に付くが、フレンチ・ジャズロックの様な難解さは無く、一つ一つの音を取れば、かえってシンプルな印象さえ抱かせる。とくにギターとオルガンが中心になるパートではオーソドックスな展開も見られるが、一方所々でセンスの良さがキラリと光り、その美的感覚はまさしくイタリア独特の物と言える。限られた要素の割には水準の高いプログレッシヴ・ロックとなっている。　(江田)



(IL) SEGNO DELLO ZODIACO
(Il) Segno Dello Zodiaco
'74
●Rifi RDZ-ST 14237
○
◉

2枚のアルバムを残したソーニョ・デッロ・ゾディアコの1作目。2作目「Parlami Sotto Le Stelle」と同傾向ながら、こちらはデビュー作ということなのか曲の傾向にばらつきがある。何枚ものシングルが出ているのでそれらを編集した骨子のアルバムなのかもしれない。ポップ寄りの曲あり、ファズ・ギターにシャトウ気味のヴォーカル、絡みつくフルートといった曲あり、ハープから始めて歌い上げていく曲あり、と想像以上には様々だ。一とおりの歌物バンドには終ってはいない。コーラスふうのヴォーカルも大きく録られているが、演奏の方も強調される。そのきわめつけにはハモンド・オルガンをメインにした〝トッカータとフーガ〟のコピーがある。ただしどれも押えがなく表情の浅さを感じるのだが。　(松本)



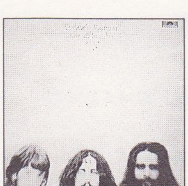
SEMIRAMIS
Dedicato A Frazz
'73
●Trident TRI 1004
○Vinyl Magic VM 007
◉

古代バビロニアの女王で、空中庭園を造ったことで知られる「SEMIRAMIS」からグループ名をとったセミラミスは'73年にトリデント・レーベルの4番として唯一のアルバムを発表して消えた神話的存在である。邪悪な匂いを漂わせるムードは彼等独特のもので、チェルヴェッロ、ラコマンダータ、オザンナ、ムゼオ等にも通じる暗のエナジーを発散している。ドラムとビブラフォーン担当のパオロ・ファエンツァ、ベースのマルチュッロ・レッダヴィーデ、ギター等のジャンピエロ・アルテジャンニ、ギターとボーカルのミケーレ・ザッリーロ、キーボードのマウリツィオ・ザッリーロの計5人のミュージシャンから成る。曲はミケーレ・ザッリーロのペンで、彼は後にソロ・アルバムを出すが完全なポップ・アルバムである。　(山崎)



SENSATIONS' FIX
Fragments Of Light
'74
●Polydor 2448 023
○Mellow/Polydor 517 854-2
◉

幻想的なジャケットに包まれたセカンド・アルバム。イタリアでは異色なスペース・ミュージックである。FRANCO FALSINI(G, SYN)を中心として繰り広げられる暖かくも伸びやかで、優しく包んでくれる心地よい世界の作品。フワーッとしたシンセサイザーと、暖かく丸いディストーション・ギターにアコースティックで時にサイケデリックなギターや、軽いパーカッションが絡むのだが、全体を通してメロディアスな事もあり、浮遊する感覚に包まれる。しいていえばドゥルッティ・コラムの原型のような感じである。刺激的なファクターは皆無と言え、物足りない感じもあるかもしれないが、覚醒したい人にはもってこいのアルバム。この後、だんだんポップな普通の音楽に変化してしまう。　(津田)



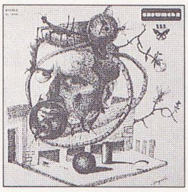
SENSATIONS' FIX
Portable Madness
'74
●Polydor 2448 034 A
○
◉

「Sensation's Fix」(Polydor AS 273)「Fragments Of Light」に続く3rd。如何にもロック的な乗りのリズム・セクションを従えて、フランコ・ファルシーニがシンセサイザーを中心に、ギターも多用して、伸びやかかつメロディアスな演奏を展開している。所謂、エレクトリック・ミュージック系のサウンドであるが、音に暖かみがあり軽快で聴き易いものとなっている。本作以降も「Finest Fingers〈同2448 048〉'76年」「Boxes Paradise〈同2448 064〉'77年」「Flying Tapes〈同2448 074〉'78年」と3枚のアルバムを発表しているが、これらは初期の2作とは異なり、いずれもボーカルを主体としたポップな作品である。なお、ファルシーニは'75年にサントラ盤「Cold Nose〈同2449 012〉」を発表している。　(賀川)



SENSITIVA IMAGINE
E Tutto Comincio Cosi
'80
●S.I./001 (Cassette)
○
◉Melos-002

'70年代後半以降、イタリアのプログレッシヴ・ロックは急速にアンダーグラウンドへと沈み込み、多くのグループは解散、そして残されたミュージシャン達も単発的にカセット作品を発表するにとどまるという「暗黒の時代」が長く続いた。これらのカセット作品は一部日本にも流入したが、多くは単に「イタリアで活動している」という事実以外にあまり特筆するものはなかった。そんな中で'80年にこのセンシティヴァ・イマジーネが発表したカセット作品のクォリティは例外的に高く、後にCDとなって陽の目を見ることになったわけである。ジェネシス影響下のサウンドではあるが、せっかちなキーボード・ワークとイタリアには珍らしい切れの良いリズム・セクションが逆に新鮮なインパクトを与えたものだ。　(内田)



SHOWMEN
2
'72
●Beautiful Black Butterfly
○
◉

'70年以前にRCAよりアルバムを発表した彼らの2nd(?)。後にNapoli Centraleへと発展するのだが、サウンド自体既に、Napoli Centraleの原型とも言えるものが随所に見受けられる。特にJames Seneseの黒っぽいフィーリングのボーカルは、とても力強く、熱く胸を焦がす。又、耳障りなサックスが残念なものの、キーボード、フルート、曲展開は仲々のもので、正に当時のイタリア然とした音で非常に魅力的である。但、方向性が違うにせよ、あのNapoli Centrale独特の重く地を這う如きサウンドの水準に達し得ず、やや中途半端な印象を拭えないのも確かで非常に惜しい出来である。尚、重量感たっぷりの見開きジャケは内側も凝っており一見に価する。
(鈴木伸一)



(I) SIGNORI DELLA GALASSIA
Qualcosa Si Crea, Nulla Si Distrugge
'78
●Magic MRLP 1004
○
◉

「ガラシアの紳士達」と名乗るこのグループは4枚のシングルとリフィから出した〝Iceman〟というLPが知られているが本作は恐らく最初のLPと思われる。美しいサウンドが好評のシングルナンバー〝Creazione〟等質の高い曲で綴られている。A、B面各6曲の小品集といった体で、プログレというよりはやはりラヴロックという感じだがピアノやメロトロンの美しい響きは圧巻で、軽めの電子音に傾倒した〝Iceman〟からは想像出来ない素晴らしい内容になっている。DIK DIKやEQUIPE 84といったポップ・ロック系の有名どころと同等の評価が下せそうだ。キーボードのフランコがリーダー格でアレンジも担当する。一部では若干重量感に欠ける嫌いもあるが、キーボード系の踏ん張りが聴き応えのある作品にしている。
(江田)



(IL) SISTEMA
Il Viaggio Senza Andate
'90('69～'71年録音)
●Mellow Records MMLP 100/101
○MellowRecords MMP 101
◉

後にムゼオとチェレステを結成するメンバー達が'69～'71年の間に録音していたものをアルバム化したもの。ハモンド・オルガンをメインにしたインストゥールメンタル中心のヘヴィーな演奏を繰り広げている。10分を超す大曲も収められており、又、後半の曲になるとサックスやフルートがからみ、当時としてはなかなかプログレッシヴな出来ではなかっただろうか。録音状態は決して良くないが、きちんとしたスタジオ・テイクではないのでいたしかたないところ。「はげ山の一夜」をアレンジした曲が最大の聴きどころ。尚、LPとCDが発売されたが、僅かながら収録曲が異なっている。
(津田)



SITHONIA
Lungo Il Sentiero Di Pietra
'89
●CR 001
○
◉

ボローニャのツイン・キーボード・バンド。自主製作の本LPがデヴュー作と思われる。ツイン・キーボードといっても重厚さはなく、全体のテイストは心やさしいライト・シンフォニック・サウンドである。チープさが極立つギターをはじめ、技術的には推拙で、一聴後の印象は決して快いものではない。ところが、徹底的にコンセントレイトして聴くと印象が一変する。A面冒頭、ジェントル・ジャイアントを意識したようなティンパニー曲、B面の管楽器アンサンブル。切ないラブ・バラードのバックがよく聴くとスカ風ビートだったり、妙な掛け声風ヒューマン・ヴォイスが拍子をとっていたり。こうしたアトラクティヴなアレンジ・センスは次作で爆発、'80～'90年代ポンプ勢とは一線を画す地平に到達する。
(ミワ)



SITHONIA
Spettacolo Annullato
'92
●
○Mellow MMP 115
◉

シソニアの2作目。'90年代のトップ作品として確実に記憶されるべき内容である。アトラクティヴな展開、表現力の豊かさでは、'70年代の著名バンドでも比肩しうるものは少ないといわざるをえない。ラストの4分半、8分半の2曲だけで、アルバム数枚分のアイディアの奔流を感じとることができる。サムラ系というには叙情的すぎ、マンダラ・バンドというにはキャッチーすぎる。ジェントル・ジャイアントというには難解さがなく、カイパというには展開が複雑すぎる。ここまで曲が面白くて出来がよいと演奏技術を問うことの必然性が揺らいでしまうという典型ではなかろうか。なお、ヴォーカリストとベーシストは前作と違うメンバー、〝シンセ・オーケストラ〟の指揮、〝コーラス・ビート〟の作者クレジットもある。
(ミワ)



SLOGANS
Photosynthesis
'84
●Private SL-001S
○Mellow MMP 147
◉

ミラノからヴェネツィアに行く列車に乗って途中パドヴァで乗り替え、そこから約40分の所にある小さな町、バッサーノ・デル・グラッパ出身の女性ヴォーカルと2人のキーボードを含む6人組。'84年のローカルプレス。音の方は伸びのあるギターを中心としたものでA③などは哀愁を帯びたピアノのイントロで始まり、アルゼンチンのパブロと音作りが似ているが、リズム陣が多少甘いことと、単調なフレーズが所々に出て来て、完成度はもう一つで、イタリアらしさもあまり感じないが、淡い色彩のジャケットと相まって、コレクターの心理をくすぐる一枚である。
(高橋)



(LA) SORGENTE
Trasparente

?
●Editrice Uomini Nuovi LP 3316
○
◉

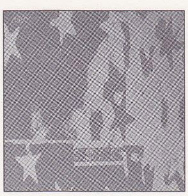
録音や機材からして比較的最近('80年代?)のアルバムだとは思うが、ほとんど知られていない。編成はvo & kbd, vo & g、flute、vln & viola、b、dsの6人編成で、これが見事な程'70年代イタリアの歌/メロディを甦らせてくれる。ボッテガ・デッラルテ等のタイプ、それも弦楽器の滑らかなトーンやピアノ、フルートを散りばめてのものだけにふくらみを感じさせる。そして室内楽のニュアンスさえ漂わせて、春の柔らかな陽差しをイメージさせる。歌物と言うよりも各メロディ楽器を活かしたクラシカルな流れに歌が溶け込んでいる、と言った方がいいのかもしれない。それだけにプログレ・ファンへのアピールも大きいはず。難を言えばストリングス・シンセの音が単調な事と音の拡がりに少し欠ける事か。（松本）



STANI LABONIA
Amarsi

'78
●It ZPLT 34056
○
◉

'78年にITレーベルから本作を出したナポリ出身のポップスグループ。7人の大所帯で、ギター×2、キーボード、ベース、ドラムス、パーカッション、サックス&ボーカル。ダミ声のボーカルは元チタ・フロンターレのENZO AVITABILEで彼が中心人物である。独特の歌い回し(これは演歌でいうコブシってやつですか)は好き嫌いを分けるかも。A③、B③、④は軽いノリのポップス。問題は残りの4曲で、バックにメロトロンが鳴る。もっとも曲調はポップで変な歌い方だから、どうしても違和感は残る。B①ではジェニー・ソレンティがコーラスで参加。調子っぱずれなのですぐわかる。そう言えば彼女はナポリ出身だった。ジャケットといい、まったく人騒がせなグループ。（渡辺一己）



LE STELLE DI MARIO SCHIFANO
Le Stelle Di Mario Schifano

'67
●BDS M&F 001
○Mellow MMP 126
◉

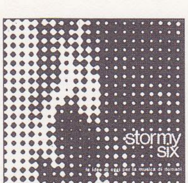
イタリアの高名な画家、Mario Schifanoの唯一と思われる作品。聴く所に依ると、550枚に満たない限定プレスらしく、又、絵画関係者等に所有されている枚数がかなり多いと想像出来ることもあり、レアー盤の多いイタリアの中にあっても、かなりの貴重品だと思う。彼自身、演奏自体には参加していないものの、ジャケット・ワーク、サウンド・コンセプト(彼の作品に基づいた曲作りであるらしい)、プロデュース等を行ない、正しく彼のイメージ通りに創り上げられたものなのだろう。音は、基本的に重厚なハード・プログレで、非常に熱気を帯びた演奏で、特にA面は中弛なく一気に畳掛ける。決して片手間では無い、非常に質の高いイタリアン・ロックである。（鈴木伸一）



(THE) STICK & STRING QUARTET
The Stick & String Quartet

'93
●
○Kaliphonia KRC 005
◉

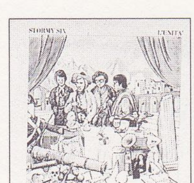
'91年秋、結成された室内楽/ジャズ路線のバンド。Gianni Daniello(ds、perc)を中心にLaura Culver(cello)、Nico Casassa Vigna(vln)、元HORUSのRoberto Freggiaro(el-b)の4人編成。これがデビュー作になる。二人の弦楽器奏者が室内楽から現代音楽にかけての色を持ち込み、他のリズム陣がジャズの色に乗せる、といった作風が多い。今一歩、この両者に共調した流れが感じられないところが、今後の方向性を決める材料だと思う。穏やかな流れをつくり、または奇数拍子をとったりと曲ごとに変化を見せるが、妙にあっさりとしたトーンの一本調子が物足らなくなるかもしれない。アンニュイな雰囲気が強いから室内楽調のサウンドに興味のある人には向く。どこかすましていてくだけがない。（松本）



STORMY SIX
Le Idee Di Oggi Per La Musica Di Domani

?
●First FR 50, 001 LP
○
◉

ストーミィ・シックスは、ロルケストラに5枚、それ以前にアリストンより3枚の作品が存在することが一般に知られているが、実はそれ以前にアリストン傘下のファースト・レーベルというマイナー・レーベルより本作をリリースしていた。「明日の音楽の為の今日の観念」というタイトルが示すように、彼等はこの時期からすでにプログレッシヴな姿勢を持っていたことがうかがえる。フルート、オルガン、チェンバロ、弦楽器等を導入し、今でいうシンフォニック・ロックの原型的なものを聴くことができる。尚、この作品にはクラウディオ・ロッキの名がクレジットされている。年代は記されていないがたぶん70年の作品ではないかと思う。（山崎）



STORMY SIX
L'unita

'71
●First FR/50050
○
◉

恐らくはイタリア最古のポリティカル・ロック・グループである彼らにとって、一つの重要な分岐点だったであろう一作。イタリア統一の光と影をテーマとしたA面、11分の組曲を含むB面とトータル・カラーを前面に打ち出している。しかしそうした歴史的意義や内容を知らずに接すれば、聴こえてくるサウンドはいわゆる「ビート・グループ」のそれであり('71年という時期を考えればかなりの高水準)、多くのイタリアン・シンフォ〜カンタウトーレ系に親しんだファンにこそ愛されるであろうアルバムとすら言える。この非常にアンバランスな状態は、まもなくリーダーシップを執っていたF・ファブリ以外のオールメンバーチェンジ、そしてロルケストラ・レーベルの設立という重大事件へ連なって行く。（山田）



STORMY SIX
Guarda Giu' Dalla Pianura
'73
●Ariston AR/LP 12114
○
◉

初期の政治色の強いバンド姿勢とフォーク・ロックふうの音楽から、後にはリコメンディッド・レーベルに合流し、複雑なアンサンブル指向のサウンドへと移行していくストーミー・シックス。その初期のバンド精神を極めたのが、この3作目である。収録曲10曲共に世界各国のレジスタンス・ソングとなっていて自作曲は1曲もない。M.テオドラキス作曲のギリシャ・レジスタンス運動に関するナンバー、E.マッコール作のベトナム反戦歌、またはキューバ革命、アイルランド闘争に関係するものなど。前作のフォーク・ロック作風ともまた違って高らかに歌う合唱集の様相だ。メンバーこそこれ以後の顔振れだが、アルバムの意図はこれ以前の彼等の思想に負っている。時に悲哀感漂よい時に力強い歌だ。（松本）



STORMY SIX
Un Biglietto Del Tram
'75
●L'orchestra OLP 10001
○
◉

前作で一つの集大成を作ったストーミー・シックスは、レーベルをロルケストラに移し、いよいよ新メンバーとの本格的な音楽作業に入っていく。このアルバムは、これまでのヴォーカル路線を残しながらも、同時に後に開花するリズムの多様性やメロディ楽器のニュアンスによる楽曲の変形等の試みがのぞいている。しかもそのどちらもが両立していて、前作からの大幅なステップ・アップを感じさせる。例えば3曲目を例にとればヴォーカルのバックをリズムが様々に変化することで歌を浮き上がらせたり、ヴァイオリンのトーンがクラシカルになったリトラッド調に変化することでヴォーカルの表情をイメージ替えしたりと多岐に渡る選択を示すことによって音楽を立体化する。更に次作での共作が一つの契機になる。（松本）



STORMY SIX
Clichè
'77
●L'orchestra OLP 10010
○
◉

個性的な作品を数多くリリースしたロルケストラ・レーベルにおけるストーミィ・シックスの二枚目のアルバム。クラシック、現代音楽、ジャズ、ロック、その他のポピュラー・ミュージックが入りまじったかのようなコンテンポラリーなサウンドで圧倒的なオリジナリティがある。弦楽器と管楽器を数多く使った演奏はアンサンブルを重視したものであるが、ジュルヴェルヌより実験的と言える。しかし、曲の流れは極めてスムーズで、ユーモアのセンスもあり、また情感に富んだ部分も少なくなく、難解な感じは与えない。アレアのようなインパクトのあるサウンドでないためか、今一つ過小評価されている感があるが、プログレッシブ・ロックを語る上で忘れてはならない重要なグループである。（賀川）



STORMY SIX
L'apprendista
'77？'78？
●L'otchestra OLP 10012
○
◉

3作目を一つのピークに、同時に以後のサウンド面での重点になるCario De Martini（vln）とTommaso Leddi（mln, vln）、Umberto Fiori（vo, g）の3人を迎えたフランコ・ファブリ率いるストーミー・シックスは、案の上、4枚目でロルケストラに移籍した。4作目では多少以前のサウンド傾向を残していたものの、再出発の感が強い。そして前作「Clichè」で明確に打ち出された方向性は、続くこの6枚目で更に具体化した。まずリズムのとり方が普通ではない。vln奏者の巧みな不協音の使い方も目立つ。両面を通してアンニュイでユーモアのある室内楽ふうのパートから変拍子のアンサンブルへと、まさしくリコメンディッド合流前夜のサウンド形態。極めて高水準だ。次作で爆発した。（松本）



STORMY SIX
Macchina Maccheronica
'80
●L'orchestra OLPS 55009
○
◉

ロルケストラ・レーベルの中心的存在であるストーミィ・シックスは8枚のアルバムを発表した。アヴァン・ギャルド・ミュージックの雄である。ニュー・レジスタンス時代から政治的なアジテート・ソングを歌っていた彼等は、ヘンリー・カウとの出会いにより、より複雑化された音楽性を持つようになり、この7枚目であるライヴ・アルバム「マッキーナ・マッケロニーカ」でその頂点を極めるに至る。見事なアンサンブルは、多種の音楽のアマルガムの様相を呈し、アレアと双璧を成すといっても過言ではあるまい。このあと、多少ポップになった最新作「VOLO」を発表するが、まだまだ彼等の創作意欲は衰えてはいない。（山崎）



STORMY SIX
Al Volo
'80
●L'orchestra MILP 70001
○
◉

ヘンリー・カウのRIOに参加していた頃の8作目。カウからの影響は当然ながら当時のオルタナティヴからの影響も感じられる硬質なアレンジの際立つ作品。イタリアのバンドだけあって歌の比重は大きいが、決して個人技に走らない重いアンサンブルに支えられてのコーラスは説得力がある。また時折ポップ感覚のあるメロディーや押びやかなギター・ソロも見せるが、そうしたポップな側面と歪んだアヴァンギャルドな曲想からは、閉塞した時代状況を打ち破ろうとする意志が感じ取れる。個人的には名作と言われる肩苦しさの残る前作「Macchina-Maccheronico」よりも精神的自由度の拡がった本作を押す。なおA②はリコメン・サンプラーに別テイクが収録されていて天上の音楽を思わせる雰囲気があって出来が良い。（高森）



(LA) STRANA SOCIETA'
Fai Tornare Il Sole

'74
●Durium MSA 77354
○
◉

後にソリストとして活躍するウンベルト・トッツィが在籍していたことで知られるストラーナ・ソチエタは3～4枚のアルバムをリリースしている。FONITのLPQシリーズとしてリリースされたファーストアルバム「Pop Corn」はムード・ミュージックを演奏するアルバムでどうひいき目にみてもあまり良い出来とはいい難いが、このドゥリウムよりリリースされたセカンド・アルバムは、うってかわり好アルバムに仕上げられている。いわゆるカンタウトーレ・タイプのサウンドで、歌を中心としたアンサンブルが非常にイタリアらしい、みずみずしい感性にあふれている。愛くるしい、ほのぼのとしたそのサウンド・イメージは彼等独特の持ち味である。 （山崎）



STRANA SOCIETA
Trifase

'92
●Drums EDC 2251
○
◉

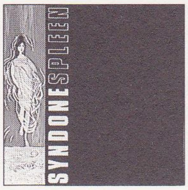
ウンベルト・トッツィが在籍していたことで知られるストラーナ・ソチエタはこのアルバム以前に2枚のアルバムがあるが、実はもう1枚あるという説もある。これは'92年にリリースされたもので全19曲もの小曲が収録されている。全体が3部構成になっていて①～⑦が〝今日〟、⑧～⑬が〝きのう〟⑭～⑲が〝わずかな音楽〟というタイトルが付いている。PART1が新録曲、PART2が昔の曲（POP CORNもやっている）の焼き直し、PART IIIが未発表曲ということなのだろうか。基本的に女性ヴォーカルをフィーチュアしたポップス・サウンドで、ムーディーなインストゥールメンタル曲もいくつか入っている。 （山崎）



(IL) SUPERGRUPPO
Il Supergruppo

'70
●Ricordi SMRL 6069
○
◉

'70年、イタリアン・ロック黎明を察知したのか、或いは画策したか、バンド名を用意したのだろうリコルディの意図が明ら様な1枚。各社のせり合いの中から出てきたとしか思えない企画である。それにしてもそこで〝スーパーグループ〟とネーミングしてしまったあたりが貪欲だ。RIBELLIのGianni Dall'Aglio、GIGANTIのMino (Giacomo) Di Martino、EQUIPE84のVictor Sogliani、DIK DIKのPietruccio Montalbetti、そしてRicky Giancoをくっつけて、'60年代さながらの前ロック・ミュージックを演らせたか。オリジナル曲はほとんどない。アルバムもこの1枚。当然だ、各々にバンドをやっている身なのだから。いかにこの頃の競争が激しくそうした動きを含めて後にひろがったか、その資料。 （松本）



SYNDONE
Spleen

'92
●
○Vinyl Magic VMNP02
◉

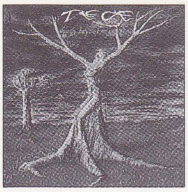
Vinyl Magicレーベルの〝New Prog'90〟シリーズ第2号バンドが、このシンドーネである。カリオペ同様、一聴したときのインパクトは非常に強い。ストラヴィンスキーで幕を開けたかと思うやいなや、エンジン全開の硬質なジャズ・ロックが展開していく。アルティ・エ・メスティエリ、アレア、フェスタ・モビーレといった名バンドを彷彿させる音作りながら、よりメタリックで押しが強い。フュージョン色、クロス・オーバー色はまるでなく、カラフルなキーボード群やフラットな呼気のヴォーカルなど、このフィールドからしか出てこないジャズ・ロックといえる。例えていえば、100拍と99拍のズレを演奏しきってしまう技術。ギター・レスのトリオ・バンドとしては当代随一のレベルである。 （ミワ）



SYNDONE
Inca

'93
●
○Vinyl Magic VMNP05
◉

シンドーネの2作目。キーボード奏者が1人増え、さらにカリオペのキーボード奏者もゲスト参加している。各曲ごとにこの3人のキーボードの割り振りがクレジットされており、あたかもリスナーに音の聴き分けを強要するかのようである。作風としては、前作をいくぶん明るく、よりシンフォニックにした感触か。バグパイプ、クラリネット、アコースティック・ギター、アカペラ・コーラスなども投入、幅広い音楽性を獲得しようとの姿勢もうかがえる。もっとも、アリのはい出るすき間もなく押し寄せるキーボード群とすさまじいリズム・セクションの前には、何をやってもムダという気もするが。ごていねいにも、「ノー・エレクトリック・ギター・アンド・ドラムス・オーバーダブ」のただし書きがある。（ミワ）



TALE CUE
Voices Beyond My Curtain

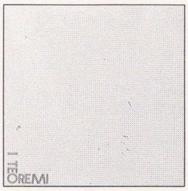
'91
●
○Musea FGBG 4030.AR
◉

女性ヴォーカルを含む5人編成のシンフォニック・ロック・グループのデビュー作品。現在のシンフォ系にありがちなジェネシスの亜流的な要素が薄く、結構、個性的である。アコースティック・ギターの独演で始まった後は、重い雰囲気が全体を支配していき、緩急を使い分け、ドラマチックに進行していく。構成やメロディ、テクニックも並の水準で、新人としてはグレード感が有る。問題は女性ヴォーカルの質で、下手ではないのだが、どちらかと言うとメタル系のパフォーマンスである。アンジュのオケにHEARTのヴォーカルと言ってもよいような感じで、ここが好き嫌いの分れ目になるのではないだろうか?ムゼアの他の作品同様に、ジャケットが音の雰囲気を良く現している。 （津田）



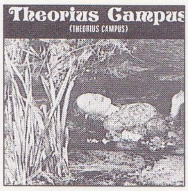
TEMPO DI PERCUSSIONE
Tempo Di Percussione
'75
●Phonotype AZQ 40031
○
◉

ナポリの超マイナー・レーベル、フォノタイプ・レコードから人知れず世に送り出されていたこの作品は、種々多様な打楽器類のみによって創り上げられた非常にユニークで独創的なものである。まるで闇の淵から湧き出でるかのようなイントロに始まり、魅力的なメロディーによる美しくも果敢無い小曲や、憂愁に満ちた女性ヴォーカル曲(但し英語)等を交え乍ら深く静かに進行し、アヴァンギャルドなクライマックスを迎えるこのサウンドには、正にプログレッシヴという形容が相応しい。尚、素晴らしいジャケット・ワークはOSANNAのLino Vairetti。(鈴木　伸一)



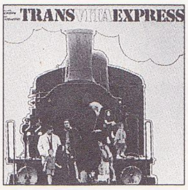
(I) TEOREMI
Teoremi
'72
●Polaris POL/BP 711
○Vinyl Magic VM 031
◉

日本ではシンフォニックファンが大半を占めているプログレ界ではあるが、イタリアン・ロックに限って言えばそうではないようである。シンフォ、ジャズ・ロック、ヘヴィプログレ、ラヴ・ロック等に分類せずにイタリアン・ロックとして愛聴しているファンが多い。さて、このテオレミであるが、そのイタリアン・ロックの中でヘヴィプログレの良質な1枚として挙げられよう。よく「海外では高いんだけどね」と言訳がましく語られることの多いヘヴィプログレの中にあって、文句なくカッコいい。重く哀愁を帯びたベースライン、ドタバタドラム(イタリアン・ロック定番)、うなるギター、熱く歌い上げるヴォーカル。まさにイタリアン・ヘヴィネスを満喫できる一品。(六井)



THEORIUS CAMPUS
Theorius Campus
'72
●IT ZSLT 70007
○
◉

A.ヴェンデッティとF.デ・グレゴリーが在籍していたイタリアン・プログレッシヴ初期に存在していたグループ。当時の気運から、シンセサイザーを効果音的に使用したり、前衛的なアレンジを聴くことができるが、全体を通して感じられるものは、歌を中心としたトラディショナルなもので、若い熱を帯びたような感覚が非常に初々しさを伝えてくれる。P.リュネールと同じITレーベル、あるいはミレーの美しいカヴァーから、典型的なプログレッシヴ・グループの音を想像した方には期待はずれかもしれないが、カンタトーレ・タイプのグループを愛する方々には好盤である。イタリアン・ロックの春に製作された1枚――テオリウス・カンプスのおそらく唯一のアルバムである。(山崎)



TRANS VITA EXPRESS
Traus Vita Express
'74
●PCC CS 0077
○
◉

魔訶不思議な作品だ。暗く淀んだ音空間は正にアヴァンギャルドと呼ぶに相応しく、かのUltima Spiaggia同様架空のサントラとでも言えば良いのだろうか。叫声、会話、語り、呟き、歌それらに絡む音群は、メロディーも単なる音も区別無く配され乍らも緊密な関連を保ちつつ進行する。悪夢の如き音の戯れ、陰髒な雰囲気、取り留めの無い展開は好みを分けてしまうだろうが、哀愁たっぷりに唄われるトラッド調のB①やB面ラストはNicolettaなる女性ボーカルに依るもので、仄かな色彩とアクセントを与えている。多彩なキーボードを操るMarcello Giombiniを中心にギターのMario Molino他多数のミュージシャンが参加している。ミラノのレーベルPCCのリリース。(鈴木伸一)



TRIADE
1998 : La Storia Di Sabazio
'73
●Darby DBR-65801
○
◉

トリアーデとは英語のトリオのことである。いわゆるエマーソン・レイク・アンド・パーマーに触発されたキーボードを中心としたトリオであるのだが、それだけではすませられない魅力を備え持っている。テクニック的にはさして聴くべきものはないのであるが、全体を支配するとりとめのない雰囲気はトリアーデ独自のものを感じさせる。ベースの代わりにチェロを使用してみたり、ギターやピアノのソロを随所にちりばめたりしているが、キーボードの持つイメージはめずらしく印象派からの影響があることも特徴といえよう。ただ難をいえばプロデュースの甘さがみられ、それが非常に残念である。彼等の残したこの唯一のアルバムは金色のジャケットに包まれている。(山崎)



(THE) TRIP
The Trip
'70
●RCA PSL 10460
○BMG Ariola ND 74111
◉

トリップの1stアルバム。多少なりともプログレッシヴな方向を志してのキーボードロックとしては、イタリアでは最初期の作品と言える。次作「Caronte」ではかなり完成された演奏を聴かせているが、本作は構成面でも若干劣り、60年代の古めかしさから完全に脱皮し切れない、〝プログレ〟としてはまさに手探りの状態であった。それでもオルガンを徹底的にフィーチャーした演奏の端々には次作と共通するスタイルが伺え、B①あたりではさり気なくイタリアらしさをアピールするフレーズも配してある。アルバム自体の完成度はともかくとして、バンド自身の原点というだけでなく、イタリアン・プログレッシヴロック黄金時代の夜明けを告げる、先駆的な作品との位置付けは許されると思う。(江田)



(THE) TRIP
Caronte

'71
●RCA PSL 10509
○BMG Ariola ND 74299
◉

トリップのセカンド・アルバム。メンバーはJOE VESCOVI（キーボード）、WILLIAM GRAY（ギター）、ARVID《WEGG》ANDERSEN（ベース）、PINO SINNOLE（ドラム）の4人で、うちのドラムスのピノ以外はイギリス人である。曲名を見ていたたければおわかりと思うが、ヘンドリックスを愛するヘヴィーなギターワークと、ジョーのキーボードワークの織り成す変幻自在のサウンドに加え、様々な効果音も加えられ、見事な内容である。スタジオ・アップ・ダウンの担当するジャケットも仲々のもの。この後、ギターが脱退し、サード「アトランティーデ」、フォース「タイム・オブ・チェンジ」（TRIDENT 1002）と計4枚のアルバムを発表して解散してしまう。（山崎）



(THE) TRIP
Atlantide

'72
●RCA PSL 10540
○BMG Ariola ND 74516
◉

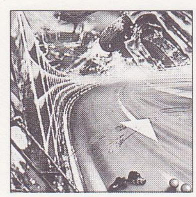
トリップのサード・アルバム。ファースト、セカンドアルバムまではギターが加入していたが、このアルバムよりキーボード・トリオ・スタイルになる。翌73年に4枚目のアルバム「Time Of Change」（Trident：TRI-1002）を発表後、解散。ドラマーのフリオ・キリコはアルティ・エ・メスティエリを結成することになる。本アルバムは幻の大陸アトランティスをめぐるトータル・アルバムであり、エレピとオルガンという地味な楽器を中心に、しかもほとんどダビングもなしで（つまりそのままライヴ演奏できるように）創られていて、そういう事実を考慮するならば、なかなかの力作といえる。アトランティス大陸を描いた変形ジャケットは「UP & DOWN」なるグループ（クエラ・ペッキアの1stも彼等による）の手によるものだ。（山崎）



TRIP
Time of Change

'73
●Trident TRI 1002
○Vinyl Magic VM 008
◉

あの超テク集団、アルティ・エ・メスティエリのドラマー、フリオ・キリコの在籍したバンドとして知られているトリップの4作目にしてラスト・アルバム。3作目の「Atlantide」と並んで、イタリアン・キーボード・トリオ（ELPスタイル）バンドの中でも人気の高いトリップの最高作としてマニアの評価もAクラスのアルバム。Tridentというマイナー・レーベルから出されたアルバムのため、昔は入手困難で、常にコレクターズ・アイテムのトップ・クラスにあった本作は、内容的にも、20分の大作にチャレンジしたり、名曲「コラーレ」も含み、文句なしの出来といえるが、なんといってもアルティ以前のキリコのドラミングを聴けるのが最大の魅力。CD化され音が簡単に入手出来る今のヒトは幸福！（高見）



ULTIMA SPIAGGIA
Ultima Spiaggia

'75
●Ultima Spiaggia ZLUS 55181
○
◉

自動車事故に会った男の心臓の音が次第に弱まり、停止してしまう。男の魂は肉体を離れ、地獄巡りが開始される、といったストーリーの元にウルティマ・スピアッジアの残した唯一のアルバムは展開されていく。構成力もテクニックも高水準の出来である。グレゴリア聖歌や、ケチャ祭りがちりばめられ、次から次へと地獄絵図が進行する。全体の展開はピンク・フロイドの「狂気」を想わせるが、曲の内容は彼等のオリジナリティーにあふれている。これまた薄気味の悪いブックレットが御丁寧に付されている。グループ名は「究極の浜辺」の意。曲名は「生への望み」、「苦しみの理由」、「妖術と悪魔の歌」等、リスナーに地獄を見せようという意志に満ちている。（山崎）



(THE) UNDERGROUND SET
The Underground Set

'70
●Radio RRS 134
○
◉

見とのとおり、サイケデリック色濃厚。それもけっこうヘヴィ。オルガンで来る。'70年のイタリアでロックがどんなものだったかを知るには、フォルムラ・トレの〝Dies Irae〞を1曲聴けばわかる。ロレンツィの溜めに溜めたまま走ってしまうあの熱の吹き溜まりのようなソロと、破れかぶれのエンディングが、'70年だ。アンダーグラウンド・セットも、とてもあそこまでは発散できていないにせよ、方向性はまったく同じと言っていいと思う。ワイルドなハモンド・オルガンとギター・ソロの突出が、バランスの悪いこと極まりなく荒削りで、おまけに曲ごとのギャップも激しい。B①を始め曲を選べば出色の出来だが、できそこないのアルバム内容だ。翌'71年には「War In The Night Before」（Tickle TLPS 5002）を発表。（松本）



UNO
Uno

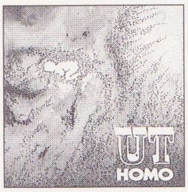
'74
●Fonit Cetra LPX 26
○Fonit Cetra CDLP 428
◉

74年に、オザンのエリオ・ダンナとダニロ・ルスティチを中心に作られたセッション・グループ、ウーノ。アルバムはイタリアとドイツで発売された。イタリア盤はイタリア語で歌われ、ドイツ語は全て英語で歌われている。ジャケットデザインも異なっているので同じグループの同じ作品とは思えないほどである。イタリア・ロックの伝統と、ブリティッシュ・ロックの残光による化合物として存在した。メロトロンを多用し、効果的なフルートの音色が哀愁をさそう。オザンナの4枚目、「ランドスケイプ・オブ・ライフ（人生の風景）」のプロトタイプとして作られたのであろうが、それ以上の出来になっている。しかし、ここでは初期オザンナの持つ秘教的雰囲気は全くない。国内盤発売が待たれるのだが。（宇田川）



L'UOVO DI COLOMBO
L'uovo Di Colombo
'73
●EMI 3C.064-17889
○
◉

このルオヴォ・ディ・コロンボは5人編成のダブル・キーボード・バンド。所々ギターも入っているが、あくまで補助的な演奏にとどまっている。"A&R Suppoter"とクレジットされたリノ・チェリという人物の担当楽器が明確ではないが、彼とエンゾ・ヴォルピーニの2人がキーボーダーであると推測される。ピアノ、オルガン、シンセサイザー、ストリングス等のキーボード群をメインに繰り広げられるそのサウンドは当時のイタリアにあっても決して目新しい物とは言えないが、このグループの場合リズム隊の好プレイのおかげで作品全体が引き締まったものとなり、他の同系統グループの作品と比べても見劣りしない出来となっている。個性に欠ける点は少々残念だが、キーボード・ファンには必聴の一枚だろう。　（城元）



UT
Homo
'74
●Erre RRL 2013
○
◉

アドリアーノ・トマッシーニ（ヴォーカル、ギター）、マウリツィオ・トマッシーニ（ドラム）、フランコ・タッラリア（ベース、ピアノ、フルート）、ジャンカルロ・グラニエリ（キーボード）から成るウー・ティは'74年にこのトータル・アルバムを発表した。典型的なラヴ・ロック調のヴォーカル・パートと甘い音色のギターやアコースティック・ギター、フルート、チェロ、チェンバロなどのアコースティック楽器による繊細な響きを折り混ぜた演奏はオーケストラと効果音を交え、程好く計算された構成となっている。全体的に余裕のある音作りのためか気負ったところもなく優しさのあるサウンドとなっているが、演奏面において取り上げるほどの緊張感はない。他にも1枚のアルバムがある。　（松本）



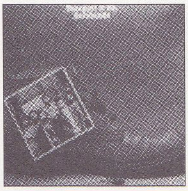
UT
La Strada Era Bella
'76
●Erre RRL 53001
○
◉

UTのセカンドアルバムであるが、その内容は「Homo」からの数曲とシングルとして発表されたものを集めた、言わばベストアルバムである。このグループはプログレッシヴロックのエッセンスを持ったポップスグループで自分達の演奏にオーケストラを重ねるというとてもオーソドックスな形態をとっている。前作はトータライズされた仕上りになっていたが、それ以降の作品はシングル用の曲である為か短かくすっきりと仕上げられている。この差以外にグループの方向性、サウンドは全く変っておらず、したがって、このLPも1作品として聞いた場合には、何の異和感もなく受け入れられる。特にこれといって派手な部分は見つからないが愛すべき好作品である。　（土川）



VENEGONI & Co.
Rumore Rosso
'77
●Cramps CRSLP 5503
○
◉

2nd をリリースした後、アルティ・エ・メスティエリは解散状態になるが、これを受けジジ・ヴェネゴーニがスタートさせたプロジェクト、カンパニーの1st。全体的にリラックスしたムードを感じさせ、硬派のアルティと無理に結びつけて考えるよりは、むしろ当時のクロスオーヴァー/フュージョンへの彼なりの返信と捉えたが方が自然な、この路線としては仲々の仕上がり様だ。ただ、一方でエスニックかつエキセントリックな要素を持ち込んだ曲ではかなり面白い成果を上げており、これに徹すれば相当な名盤になったのではという気もするが（才人だけに）。後期アレア、そしてアルティを経ての彼らの誕生は、その周囲にあって過激な言動を増すファンに際してのそれぞれの化学反応とも言える所産だった。　（山田）



VENEGONI & CO
Sarabanda
'79
●Cramps 5205 504
○
◉

アルティ・エ・メスティエリのオリジナル・ギターリストであり、曲作りにおいても中心的役割を果たしていたジジ・ヴェネゴーニは2ndアルバムを発表後グループを去り（3ndにおいても1曲のみゲスト参加している）、自らのバンド、ヴェネゴーニ・アンド・カンパニーを結成した。本作は彼らの「Rumore Rosso〈Cramps CRS LP 5503〉77年」に続く第2弾である。アルティエ・エ・メスティエリが一貫してジャズ的要素を取り入れた緊張感に富んだロックを演奏していたのに対して、彼らのサウンドはより多彩でゆとりを持ったものとなっている。曲は多少ポップで一部民族音楽的であるが、ギターを始めとしてキーボード、ドラムス、ベース等の演奏は非常にテクニカルであり、全体のアンサンブルも素晴らしい。　（賀川）



VENEGONI & CO
Nocturne
'88
●
○Dynamo Sound DYN 8801
◉

セカンド以来約10年ぶりに発表されたヴェネゴーニ・アンド・カンパニーのサード・アルバム。グループ再結成ということもあって、ジジ・ヴェネゴーニ以外の2人のメンバー（Key vo）は無名のミュージシャンである。この頃、かつての同僚フリオ・キリコはフリー・ミュージック的なものに興味を持っていたが、ヴェネゴーニはニュー・エイジ的サウンドを作り出している。シンセ・ベースとシンセ・ドラムを用いた音作りは明らかに'70年代のプログレッシヴ・ロックとは異なるが、時の流れとともに変化するシーンに対応したコンテポラリーなものだったと言える。意欲を感じさせる内容ではあるが、作品としてはまだ未完成であり、次作が期待されたが本作のみでグループは解散した。　（賀川）



VENETIAN POWER
The Arid Land
'71
●CBS S 64796
○
◉

Claudio Ambrosiniを中心にするヴェネツィア出身のバンド。これが唯一のアルバムになる。'71年というイタリアン・ロック初期の興味深いアルバムの内容だ。作曲は彼自身、そして彼をメイン・ヴォーカルに数名の女性コーラスがつき、perc、g、kbd、vib、fl他の総じてバンド編成。内容の方も歌物にカテゴライズされきらないもので、ヴィブラフォーンの響きとアナログならではのオルガン・トーンが曲想を左右したり、パーカッションが歌物らしからぬ色を加えたりと、中々聴かせてくれる。ワウを多用したギターなど時代がかっている。ジャケットも幻想的なら音の方もC.ロッキやA.ソレンティ辺りに通じるアウトサイドな空気が漂よう。全編に渡る素人臭い女性voが一層その効果を上げている。　(松本)



(IL) VOLO
Il Volo
'74
●Numero Uno DZSLN 55667
○BMG Ariola ND 74682
◉キング KICP 2215

元フォルムラ・トレのラディウス(G)とロレンツィ(Key)I Gigantiの「Terra in Bocca」で全曲を作曲していたテンペラ(Key)'72年に素晴らしいアルバムを発表したダラリオ(D)元カマレオンティのラヴェッツイ、元デュエロ・マドレのカレロ(B)。今思い返してみてもイル・ヴォーロはスーパーグループの名にふさわしいバンドだった。強く触れたら壊れてしまいそうなとてもとても繊細な美しさに満ちた曲をとてつもない程のダイナミズムのうねりの中で演奏してしまう。彼らはそんな希有の存在だった。インターナショナルでの成功を彼らが夢見ていた事は、この1stのジャケットに痛い程表われているが、その願いはかなわなかった。しかしユーロ・ロックに興味を持った方であれば一度は通るべき重要なグループだ。　(城元)



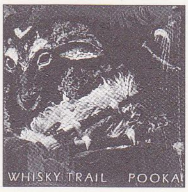
(IL) VOLO
Essere O Non Essere ?
'75
●Numero Uno DZSLN 55679
○BMG Ariola ND 74119
◉キング

6人の強者ミュージシャンにより結成されたイル・ヴォーロ。このセカンドに於いてそのボルテージは頂点に達する。制しようのない情感の奔流、信じ難いテンションの持続、そして各パートがせめぎあい高めあう様は、さながら翼を広げ今まさに飛び立たんとする男の姿に似て崇高である。前作より更に切りつめられたボーカル・パートの穴を埋めるように、ラディウスのギターが舞い、歌う。他のイタリア芸術同様、美のただ中に身を投じて顧みることのない民族の血はここにも明らかであろう。彼等は他にファウスト・レアーリのアルバム「愛の物語」でバックを務め、耐え難い程の悲哀をレアーリとともに紡ぎ出した。現在メンバーはソロ或いはセッション・マンとしてイタリアでは周知の存在である。　(古田)



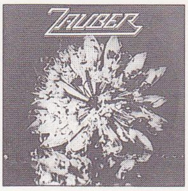
(LE) VOLPI BLU
Tu, Piccola Bimba Mia
'75
●Condor TV LP 050
○
◉

Le Volpi Bluは、ポップ感覚を基調として親しみ易いメロディー・ラインとイタリア然としたボーカル及びコーラス、そして華麗で流暢な演奏を得意とするグループ。'74年の「Un Amore Per Noia/I Will Beg」と'75年の「Tu Piccola Bimba Mia/L' Incoscienza」の両シングル曲を含むこのアルバムでは、そうした彼等の魅力を存分に楽しめる。特に"I Will Beg"を除くシングル曲と、夢幻の色彩を漂わすキーボード群に生ギター、コーラスの絡む唯一のインスト曲"Storia"は出色の出来で、凡百のポップ・グループとは一線を画した、オリジナリティーを有したグループである。尚、この後Golden Recordへと移籍し何枚かのシングルを発表している。　(鈴木伸一)



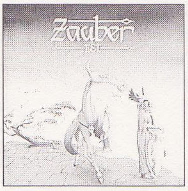
WHISKY TRAIL
Pooka
'86
●Saga 1000010
○
◉

この4人組のトラッド・グループが聞かせる音は紛れもなくケルトの音であり、恐らくケルト系イタリア人によって結成されたバンドと推測される。一聴は決して派手な音ではないが、トラッドとオリジナルを巧みにつなぎ合わせて組曲風に作り替えてしまっていて、単なる伝承歌の再現には終わっていない。実はかなりの独創性を持っているグループである。インサートを見ると、妖精や魔物をテーマにしたストーリーに基づいた構成となっている模様。たしかに随所に妖精が飛び交っている。ケルティック・ハープ、バグパイプ、ギター、女性ボーカル兼ヴァイオリンという編成だが、その紅一点の高齢ぶりには驚いてしまう。現在までにすでに数枚の作品を残しているとの事で、最近新作も出ている。　(川辺)



ZAUBER
Il Sogno
'78
●Mu UM 104
○Vinyl Magic VM 100
◉

トリノのGigi Venegoniのスタジオで録音されたこのレコード、女性2人を含む5人組によって作られた。自主製作らしく音質は悪く、サウンド的にも緊張感に欠け、女性ヴォーカルも素人臭く、第一級クラスのものと比較するとかなり聴き劣りがする。それでも、クラシカル・ロックと呼ぶにふさわしい内容を持っており、この手の音が好きな人には好意的に受け取られよう。とにかく、のっけからオルガン、ピアノ、シンセがたたみかけて来るのだから、多少不満があっても大目に見よう。その他、フルート、チェロ、ギターといった楽器も効果的に使用され奥行のある音作りがなされている。彼らは80年代にはいっても他の仲間たちと連名アルバムを作っており、ニュー・ウェーヴがかったラヴ・ロックに取りくんでいる。ヴォーカルの女性もかなり上手になって一安心。　(吉瀬)



ZAUBER
Est
'91
●
○Drums ECD2239
◉

ファーストから13年の時を経てリリースされたセカンド・アルバム。メンバーは格段にうまくなったLILIANA　BORDINI嬢と全ての曲を書いているMAURO CAVAGLIATOを残し、後はチェンジして4人編成になっている。ロジャー・ディーンを思わせるような色彩の綺麗なジャケットに包まれた一枚だが、このジャケットの世界に似たクラシカルで、美しく甘美な世界を聴かせてくれる。前作のようなプロデュース不足の部分も無く、グレードの高いシンフォニック・ロックを奏でている。泣きのメロディと哀感のあるピアノ、ギターが織り成す世界はけっして古さを感じさせるような物ではなく、ニュー・ジェネレーションの一端を担うものである。欲を言えば、スネアの音が3枚落ち。
（津田）



ZAUBER
Phoenix
'92
●
○Drums EDC 2256
◉

「EST」に続いて発表されたこのアルバムは、未発表曲7曲と新曲を合わせた物である。「IL SOGNO」と「EST」の間に「GENTLE」というカセット作品が存在するのだが、それとも曲は重ならないようだ。未発表曲の方は、1978年ぐらいの4トラックにダビングを施したもので、シンセサイザーの音や使い方に時代を感じるが、逆にノスタルジックな快感を呼び起こす物でもある。それにしても楽曲、アレンジ、演奏など、申し分無く、いまいち知る人が少ないアルバムなのが非常にもったいない。オルガンやアコースティック・ギター、ムーグを散りばめたサウンドはクラシカル・ロックの見本のようだし、構成もあまくない。これで更に、ヴォーカルに繊細さがプラスしてくれば、一級品である。
（津田）



V.A.
Concerto D'Estate
'75
●CBS 69150
○
◉

CBS系のアーティストが'75年に一堂に会したライヴ。題して「夏のコンチェルト」。マルチェッラ、ベルテ、ジャコベ等、気になるアーティストが参加しているが、何といってもB①のチコの「Notte」とB面のBBFという謎のグループが本命。このBBFというグループはイル・ヴォーロのメンバーか、彼等の内の何人かがいるグループと言われていて、何とイル・ヴォーロのファーストのA③を女性スキャット入りで演奏している。後半にはあの独特のキーボード・ソロも入る。もしも噂が本当ならば、彼等のライヴを聴くことのできる、たった一つのアルバムなのである。マルチェラもいいよ。
（山崎）



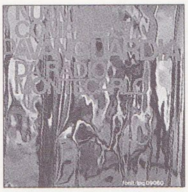
V.A.
Fafnir
'93
●
○Kaliphonia KRC 004
◉

精力的にシンフォニック系のアルバムをリリースしているミラノのカリフォニア・レーベルからリリースされたコンピレイション・アルバム。これは12バンドの曲が収録されており、内11バンドはイタリアのグループ。残りの1バンドはポーランドのコラージュである。全てアルバム未収録曲であり、デウス・エクス・マッキーナ、元プロセッションのマルチェロ・カプラ、ファンシー・フルイドあたりはファンの注目するところだろう。コンセプト・コンピレーションらしく、どのグループの曲もシアトリカルなイメージのシンフォニック・ロック系の曲であり、レーベルのカラーを強く打ち出した意欲作。
（山崎）



V.A.
1979 Il Concerto
Omaggio A Demetrio Stratos
'79
●Cramps 5203001
○
◉

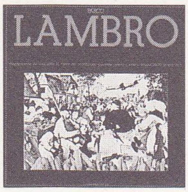
'79年6月14日、病身のデメトリオを励ますためのコンサートは急遽、彼の追悼コンサートとなった（13日逝去、34歳）。35の出演者、6万人を超す観衆を集めたライブは、彼が音楽界に与えた影響の大きさを表わすに留まらず、'70年代のイタリアンロックの集大成として一つの時代の終焉を告げた。これはその2枚組実況録音盤である。アレアの残党、バンコ、ブランドゥアルディ、ヴェネーゴーニ & Co、カルナシャリア（M.パガーニの1stソロのA①を演奏）等、錚々たる顔触れが並び、かなり硬派の内容である。主を失い、微妙なバランスのアレアの演奏も興味深い。このライブの後、イタリアのみならず'80年代のロックがどういう運命を辿ったか、もう一度思い出し、何故そうなったのか問いかけてみる必要がある。
（須藤）



V.A. (DELIRIUM, LA QUINTA FACCIA, LE MACCHINE PER SOGNARE, JIMMY M.E.C., I TIBU, etc…)
Nuovi Complessi D'Avanguardia
Da Radio Montecarlo
'71
●Fonit LPQ 09060
○

'71年当時のプログレ系新人バンドを集めたサンプラー。9バンドを収録。デリリウムはデビューシングルのA面の曲。クインタ・ファッチアはこの後少なくともシングル4枚とLP1枚を出したラヴロックよりのバンド。ジミーM.E.Cもシングルのa面（本当はB面の方がよい）、ティブは、後の名シングルで知られるピエロ・モンタナーロと組んでの曲。クレルタイプの泣きのオルガンロック。殆どが"プログレ直前"といった感じの中でディブと共に目玉と言えるのがマッキネ・ペル・ソニャーレ。シングルではAB面に分かれていたがここでは8分の大曲。他の4バンドはValerio Valerisce Group, Le Mummie, Gli Aspidi, I Cliffters。全ての曲がシングルで聴けてしまう可能性はあるが名コンピレーションと言っていいだろう。
（森下）

V



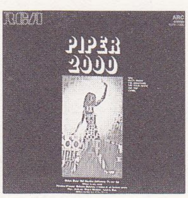
VARIOUS ARTISTS
Parco Lambro
'76
●Laboratorio LB/LP 201
○
◉

これは1976年6月26日/29日にミラノで開催された第6回青年プロレタリアート・フェスティヴァルの野外ライヴ・ドキュメント・アルバムだ。多くのミュージシャンが参加しており、大変聴き応えがある。ステージはシンプルなロック・シンガー達の演奏で幕を開けるが、AGORAが登場する辺りから俄然面白くなる。トラッド系のCANZONIERE DEL LAZIOのワイルドなステージを狭んで、SENSATIONS' FIX、トニ・エスポジートらが続く。そしてハイライトはトリで登場したAREA。彼らは『Maledetti』の〝Gerontocrazia〟を演奏し、圧倒的な実力を見せつける。収録されていないが、この集会ではストラトスのソロ・ステージが喝采を浴びたと言う。最後はAREAを中心にR&Bジャム・セッション。まだ熱い時代だった。（坂本）



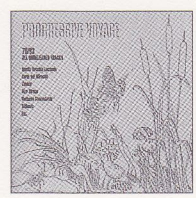
V.A.
Piper Pop Party
'70
●RCA PSL 10487
○
◉

TRIP、PATTY PRAVOを始め、JODY CLARK、MAL、PRIMITIVES、FOUR KENTSの計6アーティストを収録したローマ、パイパー、クラブでのライヴ盤。と言いたいところだが、実際にはほとんどの歓声を被せた凝似ライヴだと思う。その古臭い（わざとらしい）やり方も、ブルース・ロックや純性ポップス、ソウル・ミュージック等が並列される収録も、ミュージシャン・アナウンスも、何もかも時代がかっており、モニュメンタルな意味合いの1枚になっている。RCAと契約したばかりのトリップ、当時のRCAの新人アイドル、パティ・プラヴォあたりが親しみのあるところか。トリップはシングルにもなった〝Incubi〟、そして〝Riflessioni〟がフューチャーされている。



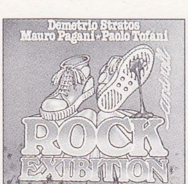
V.A.
Piper 2000
'69
●RCA ALPS 11020
○
◉

ジャケットの女然子からして行っている。パティ・プラヴォだろうか。「Piper 2000」とは、多分、ローマのパイパー・クラブから取られたタイトルだろう。他にも同レーベルから、ここに収録されたミュージシャン達を中心にしたライヴ・コンピレーション「Piper Pop Party」というしろ物も出ている。本作の方は既発曲のコンピレーションだが、'60年代後半のビート/サイケデリックのメッカでもあったパイパー・クラブの面影を伝える資料として挙げておきた。収録はトリップ、パティ・プラヴォをメインにキャメル等。どれも思っきり古臭い。純粋なポップスやソウル系、ブルース・ロックだったりする。時代まっさかりの内容だ。フロイドを始め多くの他国ミュージシャンも出演した震源地からの遺産。（松本）



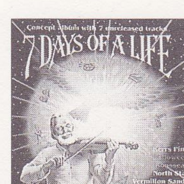
V.A.
Progressive Voyage (1970/93)
'93
●Mellow MMP 164
○
◉

Mellow Recordsの未発音源オムニバス・アルバム。'70年から'93年に至る10バンド16音源が収録されている。その資料性の高さは同レーベルの面目躍如たるところ。いかなる手練で発掘するのか、クエラ・ベッキア・ロカンダのデヴュー以前の音源やスウェーデンのユニコーンの未発曲さらには未発曲より何より存在自体が認知されていなかったバンドなど、驚嘆すべきラインナップである。そういった資料性を抜きにしても、出来のよい曲が多く、一聴には値する。おそらくはレーベル・サンプル的な意味合いもあるのだろう。新旧、有名無名のバンドをおりまぜ、曲もライブ、スタジオ録音、既発曲のアレンジ違いなど、音源形態のバリエーションを教示するがのごとき内容である。（ミワ）



DEMETRIO STRATOS
MAURO PAGANI
PAOLO TOFANI
Rock Exibition
'79
●Cramps 5205 901

デメトリオ・ストラスト、マウロ・バガーニ、パオロ・トファーニ（アレアのギターリスト）らが集まってロックン・ロールをやる。ちょっと信じ難いことではあるが、本アルバムは正しく彼らによるロックン・ロール集なのである。ストラトスは「ハウンド・ドック」やアイ・キャント・ストップ・ラヴィング・ユー」等のスタンダードを完全にロックン・ローラーとして歌っており、トファーニらもシンプルで乗りの良い演奏で彼を盛り立てている。このようなアルバムが何故作られたは不明であるが、各メンバーは伸々と楽しそうにプレイしており、ロックン・ロールも彼らのルーツの一つであることが分る。時折登場するストラトスのファルセット・ヴォイスやテクニカルな演奏はやはり彼らならではのもの。（賀川）

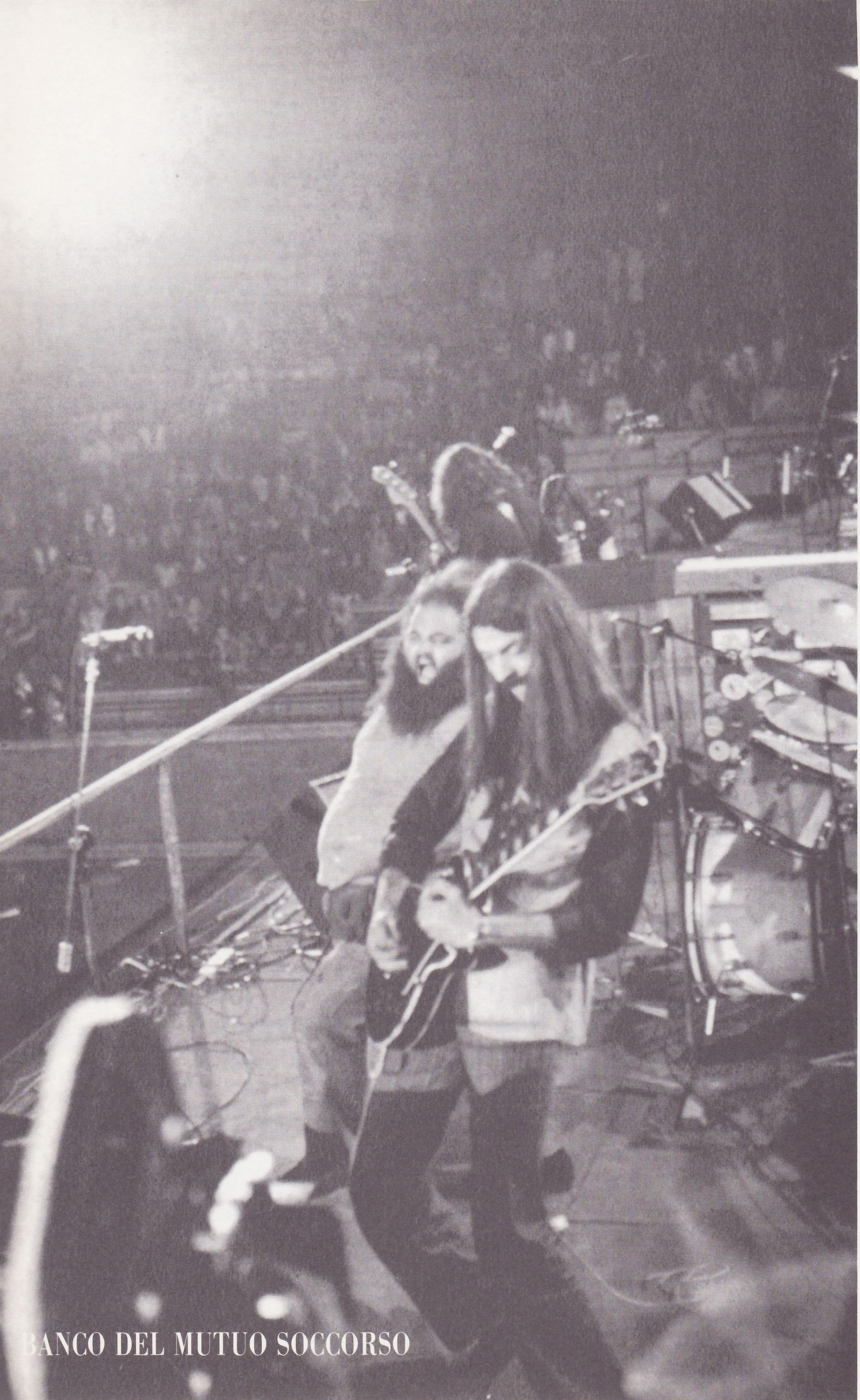


V.A.
7 Days Of A Lite
'93
●
○Musea FGBG 4073 AR
◉

仏Museaレーベルより発表されたシンフォニック・ロックのオムニバス作品。世界7カ国の俊英バンドがトータル・コンセプトに基いた秀曲を提供している。イタリアを代表するのはエズラ・ウィンストン。4つのパートからなる7分弱の組曲がおさめられている。彼らは2作目『Ancient Afterroon』において、大がかりなストリング＆ブラス・セクションを投入、重厚華麗なサウンド・アプローチに挑戦しており、当然、その後の動向が注目されていたのだが、本作収録曲も期待に違わぬ出来であった。コーラス・ワーク、フルート、オーケストレーションなど、よく練られてメリハリのある楽曲。なお、バンドはキーボード奏者以外流動的なようで、本作収録曲はG.Fl.を加えたトリオに元メンバーのDr.で演奏。（ミワ）




la TRIDENT RECORDS annuncia
il PRIMO CONCERTO
degli
OPUS AVANTRA
di DONELLA DEL MONACO
Lunedi 20 maggio al Teatro Delle Arti - Roma
gli inviti - GRATUITI - sono disponibili presso la redazione di Ciao 2001
il loro disco INTROSPEZIONE sará in distribuzione da giugno.



BANCO DEL MUTUO SOCCORSO



OSANNA





PREMIATA
FORNERIA
MARCONI



SOLISTS ▶

略号

●＝外盤LPのレーベル、規格番号
○＝外盤CDのレーベル、規格番号
◉＝日本盤CDのレーベル、規格番号



ADRIANO MONTEDURO E REALE ACCADEMIA DI MUSICA
'74
●RCA TPL1-1038
○
◉

ギタリストであるアドリアノ・モンテドゥーロとレアーレ・アカデミア・ディ・ムジーカの共演盤。この時点でのレアーレは、オリジナル・メンバーはキーボードのフェデリコ・トロイアーニとドラムスのロベルト・センサソーノの二人となってしまったが、それでもあのアコースティックピアノを中心とするレアーレ節は健在である。レアーレのアルバムでもそうであったように、歌を大切にしながらも時としてもり上がるインストゥールメンタル部の叙情は、地味ながらも甘美な調べをつくり出している。A①は後半部の演奏が素晴らしい。又A②の印象的なスキャットは私達をイタリアの街並へとさそい込んでくれるかのよう。ジャケットもとても綺麗だ。 (山崎)



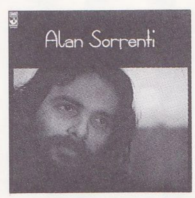
ALAN SORRENTI Aria
'72
●EMI 3CO64-17836
○
◉キング KICP 48

現在でも活動を続けるアラン・ソレンティのファースト・アルバム。最近の彼はポップ・シンガー風に移行してしまい、当時の面影を感ずることは難しいが、サード・アルバムあたりまでの彼の作品は、豊饒な空間で占められる見事なものである。特に本アルバムでのジャン・リュック・ポンティがヴァイオリンで参加するA面全てを費した大作「アリア」の肥沃な空間は素晴らしいものだ。マントをひるがえし、髪をふりみだして山野を闊歩する姿を本アルバムのジャケットで見ることができるが、この時代のソレンティの目はとても生き生きとしているような気がする。カンタウトーレの中でもクラウディオ・ロッキ等らと同じく一癖も二癖もある男である。 (山崎)



ALAN SORRENTI Come Un Vecchio Incensiere All'aba Di Un Villaggio Deserto
'73
●EMI 3C 064 17878
○
◉

'73年にロンドン録音されたA.ソレンティの2ndアルバムである。1st以来のトニー・エスポシト(per)に加え、デイヴ・ジャクソン(Sax、元ヴァン・ダー・グラフ)、フランシス・モンクマン(Kbd、元カーヴド・エア、スカイ)といったミュージシャンを迎え、1st同様、水流の様なヴォーカルを聴かせてくれる。彼のヴォーカル・スタイルは自然との合致の方向をとっており、その点自らの内的宇宙へ向かっていたP.ハミルとは見事な対照を成している。ソレンティの液体状にからみつきながらも蒼天へ突き抜けて行くような声は彼独自のものであり、夏の夕立を思い出す程の爽快さである。ちなみにジャケットは中央がくり抜かれており、リーフレットが付いているという変形物である。 (Chihiro. S.)



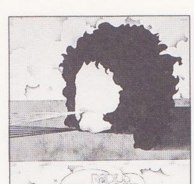
ALAN SORRENTI Alan Sorrenti
'74
●EMI 3C064-18059
○
◉

最もプログレッシヴなカンタウトーレとして評価されるソレンティの真骨頂は、1stと2ndにおけるバック陣をも巻き込んでの破天荒な歌声にあると言えるだろう。それは、メロディがあってアレンジがあって歌が唄われるのではなく、ソレンティという一つの感性の面向くままに離散集合を繰り返す演奏であり、さらにその間を自由に泳ぎ回る歌声であった。この3rdアルバムに於けるソレンティは、堅実なバック陣に支えられて歌を唄っている。最早全てのエネルギーを使い果したかの様に、少し虚ろな表情で彼方を見据えている。感傷と脱力感の入り混じるソレンティの歌声はいつに無く優しさを湛えていて、それが彼の精神的安逸と暗鬱のアンヴィヴァレンツな状態を表わしている様に思えるのだが。 (高森)



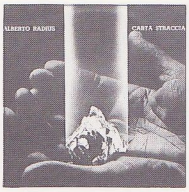
ALBERTO RADIUS Radius
'72
●Numero Uno ZSLN 55133
○
◉

フォルムラ・トレ、イル・ヴォーロを経て現在、ソロ活動を続けるラディウスが、フォルムラ・トレ在籍時に発表したソロ・アルバム。トレの、3枚目と4枚目との中間時に発表されたものである。ヴィンチェ・テンペラ、トニー・チッコ、ジャンニ・ダッラリオ、デメトリオ・ストラトス、ジュリオ・カピオッツォ、パトリック・ジヴァスと、トレ、イル・ヴォーロ、アレア混合チームの一大セッション・アルバムだが、曲としての構成はなく、トレの初期を思わせるようなアート・ロック的なセッション・アルバム。とてもヘヴィーなものである。ラディウスはこの他に6枚のソロ・アルバムを発表して現在も活躍中である。又、マルチュラ等のセッション活動も盛んである。 (山崎)



ALBERTO RADIUS Che Cosa Sei
'76
●CBS 81476
○
◉MMG AMCE 568

アルベルト・ラディウスがイル・ヴォーロ解散後に発表した、ソロとしては2作目にあたるアルバムである。前作ではインプロヴィゼイション主体の奔放なプレイが堪能できるが、彼をギタリスト、シンガー、コンポーザーを含めた一人のソロ・アーティストとして見るならばやはりこの「ケ・コザ・セイ」次作「CARTA STRACCIA」あたりを代表作としたい。カンタウトーレのアルバムとみなして軽くBGMとして聞き流すことも出来るし、また注意深く聴くならば随所に匂うトレ、ヴォーロの名残りはユーロロック・ファンにもアピールするものと思う。またもの憂いヴォーカルも絶品である。 (古田)



ALBERTO RADIUS
Carta Straccia
'77
●CGD 20008
○CGD 9031 77232 2
◉

自ら参加したフォルムラ・トレ、イル・ヴォーロ、更にはアレアのメンバー等、錚々たるミュージシャンをバックにした、ややブルーズィなソロ・デビュウ作「Radius(Numero Uno ZSLN55133)'72」、イル・ヴォーロを解散し、カンタウトーレとしての実質的スタートとなった「Che Cosa Sei(CBS 81476)'76」に続くアルベルト・ラディウスの3rd。ラディウス(g)他、トゥリオ・デ・ピスコポ(ds)、ステファノ・プルガ(key)らによるプログレッシヴ・ロックの面影を残した演奏は巧みかつ安定しており、カンタウトーレとして歌い込むラディウスを見事に盛り上げている。ボーカル及び演奏の両側面に聴き所を持った初期の代表作である。 (賀川)



ALBERTO RADIUS
America Good-Bye
'79
●CGD 20122
○
◉

ラディウス4枚目のソロ・アルバムである。オリジナル・ジャケットは見開きで、ラディウスの顔の絵の上にアニメでいうセル画が重なり、顔にアメリカの国旗があしらわれた形になるという凝った作りになっている。前作ではIL VOLOにも通じるプログレッシヴな展開だったが、〝NEL GHETTO〞が後に〝DISCO MIX 12〞(CGD 15379)として発売された事からも分かる通りリズムの部分に少々ディスコっぽくてポップな所が有りそれが本作に多大な影響を及ぼしている。唄ものとしても前々作「CHE COSA SEI」に次ぐ力作だと思うし、ギタリストではなくカンタウトーレとして十分に優れたアルバムだと言い切れるだろう。本作から〝POLIZIOTTO〞、〝COCCODRILLI BIANCHI〞、〝PATRICIA〞が〝DISCO MIX 12〞(CGD 15008)として発売された。 (片山)



ALBERTO RADIUS
Leggende
'80
●CGD 20236
○
◉

元フォルムラ・トレ、イル・ヴォーロのギタリスト、アルベルト・ラディウスの「America Goodbye」に次ぐ通算5枚目のソロ作品。最もプログレッシヴな作品と言われれば、「Carta Streccia」だろうが、それ以後の作品も、純粋にカンタウトーレの作品として評価するなら、独特のセンスを持った素晴らしいものだと断言できる。本作を例にとっても、冒頭の南部的なメロディー、アコーディオンの小粋なソロに始まって、終始生き生きとした躍動感に満ちている。このヴォルテイジは、次作の「Gente Di Dublino」まで持続されるが、最新作「Elena e Gatto」では、多少抑揚に乏しい感があるのが残念である。彼はセッション・ギタリストとしても一流の腕を持つ。 (山崎)



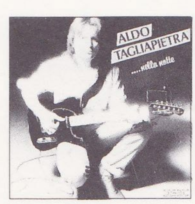
ALBERTO RADIUS
Gente Di Dublino
'82
●CGD 20333
○
◉

「ダブリンの人々」と題されたラディウス6枚目のアルバムはCP80の奏でる静かなイントロで始まる。この一曲目のバラード、〝LOMBARDIA〞は陰欝な雰囲気の曲であるがさびでは突然シンフォニックに盛り上がりハードな展開を見せる。ところがこのさびの部分、良く聞くとCHICAGOの'70年の大ヒット曲「長い夜」と全く同じであった。'70年代後半ディスコに走ったとも思える曲調でほとんどギタリストらしからぬアルバムも有った彼だが、他のアーティストのプロデュースをしたり、バッティアートのアルバムでは必ずギターで参加したりと活発に仕事をこなした甲斐があったのか、本作ではバッティアート風奇奇怪怪で大人向きの良質なポップスを披露している。本作発表後、PANARECORDに移籍した。 (片山)



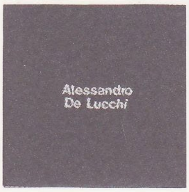
ALBERTO SOLFRINI
Alberto Solfrini
?
●PE-MI LPASF 20
○
◉

アルベルト・ソルフリーニなるシンガーのアルバムである。彼に関して詳しい事は一切分からないが、歌物の非常に良質なサンプルとして取り上げてみた。発表年は不明で、'70年代終盤とする推測も根拠に乏しい。ジャケの片隅に描かれたリアルト橋はB面ラストの曲〝Vanezia〞のイメージだろうか。叙情派のシンガー達とは一線を画すものの、イタリアの土の香が漂って来る様な手作りのサウンドで、あたかも地中海の民の喜怒哀楽を歌い上げるが如き雰囲気はブランドゥアルディの愛聴者あたりには支持されそうだ。ムーグ等キーボード類も取り入れているが、それ程前には出て来ない。むしろ、たまに顔を出すヴァイオリンや、歌心を大切にした説得力のある彼の歌唱が心に染みる。 (江田)



ALDO TAGLIAPIETRA
...Nella Notte
'84
●Holly HR 26703
○
◉

'60年代後半から息の長い活動でイタリアのメジャーシーンをリードして来たオルメだが、残念ながら'82年に発表した「Venerdi」(DDD;ZPLDR-34145)が最後のオリジナルアルバムとなった。以来2年、独り立ちしたヴォーカリスト兼ギタリストのアルド・タリャピエトラはCGD傘下のHollyレーベルより初のソロアルバムをリリースしている。「Venerdi」ではポップなフレーズを存分に活用しながらも非常に印象的な演奏を展開したが本作では更に一歩踏み込み、完全なインター指向となっている。元のメンバーはドラムのミキ・デイ・ロッシが参加しているもののカヴァーデザインにも象徴される様に、オルメカラーを期待して針を落とすことは差し控えたい。 (江田)



ALESSANDRO DE LOCCHI
Alessandro De Locchi

'78
●ADL 1
○
◉

人知れず自主制作されたシンセサイザー作品。しかし、完成度は低く、基本的な音楽のイディオムを解さない人間がシンセサイザーをおもちゃ的にプレイしたものをLP化したという印象である。当然、演奏もプリミティヴで何も意味のないものだ。これを聴くと、その昔、ジョージ・ハリスンがリリースしたシンセサイザーのソロ作品を想い出す。あの作品もシンセサイザーではこんな音が出ますよという感じの作品で、エレクトロニクスの発展の中の過度的な作品だった。この作品も、今、聴いても何の意味もない作品であると思う。
（山崎）



ALESSANDRO RAVI
L'offerta Dell'acqua

'92
●La Drogueria Di Drugolo S.r.l
262869
○
◉

アレッサンドロ・ラヴィなるアーティストの作品。参加メンバーにマウロ・パガーニ（元PFM）、アレス・タヴォラッツィ（元アレア）、リッカルド・ザッパ（ソリスト）等のクレジットがある。コンピューター・ミュージックをベースにした地中海音楽的アプローチが成されており、全体的な印象はニュー・エイジ的なものである。リズムが緩慢なので、なんとなく聴き流してしまいそうだが、リッカルド・ザッパやマウロ・パガーニの実践してきたサウンドの一部がここでも聴くことができる。
（山崎）



ALFREDO TISOCCO
Kátharsis

'75
●Suono SRLP 1001
○Artis ARCD 005
◉

オパス・アヴァントラのリーダー、アルフレッド・ティゾッコのソロ・アルバム。同じSuonoレーベルの2番はオパスの2nd〝Lord Cromwell〟であるが数曲が両作に重複して収録されている。本作は、Gruppo Italiano Di Danza Liberaなる舞踊集団のために書き下ろされたバレエ音楽らしいのだが、彼の名はジャケの下の方に小さく記されているだけで、うっかりすると見過ごしてしまいそう。〝Lord Cromwell〟との重複部分を除けば、サウンド・コラージュが大部分を占め、その凄まじい展開はオパス・ファンでなくとも思わずゾクリとしてしまうが、その過程の中で不連続的に現れる美しいフレーズが更に情趣を盛り上げている。なお、オパスのメンバーの他にPFMのジョルジョ・ピアッツァが参加している。
（江田）



ALFREDO TISOCCO
Ritagli D'anima

'88
●
○Artis ARCD 001
◉

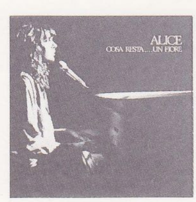
'80年代の後半になって再びシーンに浮上したオパス・アヴァントラのアルフレッド・ティゾッコだが、新たにARTISというレーベルを設立し、その第一弾としてこのソロ・アルバムをリリースした。この作品は'80年代中期に、ティゾッコが主にテレビ番組の為に制作した小品を1枚のアルバムにしたもので、一部にパーカッションが加えられてはいるが、全編、彼のソロ・ピアノが聴ける。ロマン派から近、現代のシリアス・ミュージック的なイメージを持つ曲を基本にしており、随所に彼がオパス・アヴァントラでみせたロマンティシズムを感じることができるのである。バルトーク、ケージ、フリー・ジャズ、彼のピアノには本当に様々な影響をうかがうことができる。
（山崎）



ALICE VISCONTI
La Mia Poca Grande Età

'75
●CBS 69153
○
◉

'72年（19歳当時）Caria Bissiの本名でサンレモ音楽祭に参加していた彼女。Alice Viscontiと改名して初のアルバムを発表したのは3年後のことである。この後はAlice名義で次々と作品をリリースする訳であるが、本作の内容は、人気絶頂となった'80年代前後のロック調の曲作りとはかなりの隔たりがある。柔らかな曲調を中心にストリングスをも盛り込んだ'70年代中期の作としては当然予想されるパターンの歌物。美しくも幻想的なカヴァーデザインに象徴されたソフトタッチの仕上げである。内ジャケの顔写真も薄化粧で何となく初々しい。後にバッティアート/ピオの助力を得る様になって彼女の際立った個性が浮き彫りになって来る訳だが、初期の作品に秘められた美的感覚を軽々に捨て去ることは許されないだろう。
（江田）



ALICE
Cosa Resta…Un Fiore

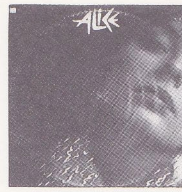
'78
●CGD 20040
○
◉

アリーチェの2nd。'75年の1stから3年目、'78年のリリース。前作同様、ルカリエッロのプロデュース、ダニーロ・ヴァオナのオーケストレイションで、ヴァオナはピアノ、ムーグ、チェンバロ、ソリーナ、メロトロンetc.と多種のキーボードも操っている。音のほうは、前作同様バロック的な色彩を強く残しながらも、徐々に都会的に変化していく過程が音に反映しており興味深い。初期のイメージが感じられるのは本作までだ。3rd以降、都会的イディオムと洗練されたサウンドイメージを発展させ、それは'85年の「Gioielli Rubati」（盗まれた宝石）にて信じ難い完成度を持って完結する。これはバッティアートの曲を歌ったもので、アレンジはカチャパッリャである。
（山崎）



ALICE
Caponord
'90
●EMI 3C064-18489
○EMI CDP 7487042
◉

'80年発表の「カポノルド」。この時期の2、3年間はアルバムのイメージが統一されており、劇的な変化もないかわりにファンはアリーチェ節を安心して聴ける時期だ。彼女は他の女性シンガーとは異なり、自ら作詞/作曲することも多い、いわゆるカンタウトリーチェである。このアルバムでもほとんどの曲を自分で書いている。アレンジはバッティアートとジュスト・ピオのコンビ。どことなく摩訶不思議な新感覚のアレンジはバッティアートによるものだ。基本的にアリーチェの歌声を全面におし出しているものの、このアレンジが穏し味になっていて、聴けば聴く程に味のあるサウンドといえるだろう。（山崎）



ALICE
Alice
'81
●EMI 3C064-18543
○EMI CDP 7487032
◉

ヒット曲である〝Per Elisa〟を含むアルバム。前作と同じ、アリーチェが作詞/作曲のほとんどを行い、アレンジをバッティアートとジュスト・ピオが行うという布陣である。ギターがラディウス、ドラムスにはワルター・カローニ、そしてOBX、E.M.S等を現代感覚で弾くキーボーダーはバッティアートのアルバムでも大活躍しているフィリッポ・デストリエリである。しかし、この時期、自らもアーティストとして大活躍していたバッティアートだが、アリーチェの作品は彼の関係者を率つれて参加しているのだから、アリーチェに対するバッティアートの評価も並々ならぬものである。（山崎）



ALICE
Azimut
'82
●EMI 3C 064-18596
○EMI CDP 7467942
◉

この作品もアリーチェの作詞/作曲が多く、前作と比べてそれ程の変化はない。アリーチェのアルバムのクレジットをみていると、いわゆるプログレッシヴ・ロック界のアーティストの名を多く見られるのも楽しい。この作品では〝Laura Degli Speccci〟が作詞/作曲/アレンジ共、エウジェニオ・フィナルディが書いている。又、その人脈だろうが、クラウディオ・パスコリが2曲程サックスで参加している。今回の作品ではバッティアートの曲は1曲しか歌っていないが、それ程の変化がないのはチーム・ワークが良くとれていた時期でもあるのだろう。（山崎）



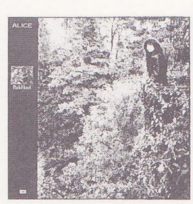
ALICE
Falsi Allarmi
'83
●EMI 64 1186291
○EMI CDP 7487022
◉

EMIに移籍し一新した感は、そのまま続いて、「Azimut」、このアルバムへ、更に次作「Gioielli Rubati」へと、実る。この頃の、イタリア情緒と英米メジャー並みのエンジニアリングとの結び合いをしてアリーチェは、イタリアのトップ・ヴォーカリストの座を得る。その上昇気運さ中の一作がこのアルバムになる。既に実力は十分だ。〝La Canzone Piu Bella〟での低音から高音までのこの人ならではの歌声が曲中の余白までをも焦がす。そういう情のナンバーもアップ・テンポなナンバーも、すっきりと通る。後に再録音された〝Notte A Roma〟を始め、洗練されたポップ・フィーリングの中にも出来のいいものが多いアルバムだ。イタリアの色つやが洗練されている。素材の美しさが磨れた。（松本）



ALICE
Gioielli Rubati
'85
●EMI64 1187091T
○EM CDP 7467952
◉

アリーチェ名義の7作目にあたる本作は、フランコ・バッティアート選りすぐりのナンバーをロベルト・カチャパリャがアレンジし、彼女に歌わせたもの。結果として声、ルックスを含めたアリーチェとキャラクターを最大限に引き出す傑作となった。1stの〝不思議の国〟を卒業した大人のアリスが、ふと旅に出、夢想にふけるといった風情である。バックは生のストリングス、ピアノ＋打ち込みによる自動演奏というシンプルさ。それだけにバッティアートの創り出すメロディー、最小にして最大の効果をあげるカチャパリャのアレンジの冴えが際立つ。'80年代イタリアの感性を象徴する1枚。A①②、B①、そして彼女の低音が幻惑的なB④が特に絶品である。（古田）



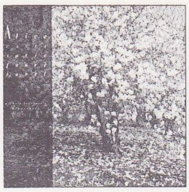
ALICE
Park Hotel
'86
●EMI IC 064 1187711
○
◉

8作目。前作「Gioielli Rubati」の出来がアルバム・カヴァーを含めて素晴らしいものだったので、当時、次作にかける期待と不安にかられた事を想い出す。バッティアートは一切協力しておらず、フィル・マンザネラとトニー・レヴィンが参加しているのが印象的。前作でのバッティアートの曲とロベルト・カチャパリャのオーケストラ・アレンジが創り出す感性の光る世界に較べると確かに見劣りするものの、比較的シンプルなアンサンブルをバックにのびのびと歌い切るアリーチェの持ち味は十分に堪能できる。フェアライトをバックに印象的に使用した旧B面が特におすすめ。蛇足ながら、一曲、カミサーシャが曲を提供している。（山崎）



ALICE
Elisir
'87
●EMI 64 7487011
○EMI CDP 7487012
◉

今回は自国人以外のゲストは止めたようで、又、オーケストラの使用もなく、すっきりとまとめた印象である。まず目をひくのが、'83年のアルバム「Falsi Allarmi」の名曲〝Notte A Roma〞をアレンジを変え入れ直しているのと、いわずと知れたビートルズの曲〝The Fool On The Hill〞が収録してあることである。前者はアレンジャーの力量の差が出て、以前のほうがはるかに良い。後者はソツなくまとめあげた感じで、仲々に仕上げられている。他の曲も過去にレコード化した曲で占められており、アリーチェ独特の顔に似合わぬ低い声をうまく歌い込ませた佳曲だが、残念なのはバックの演奏がいささか凡庸なことだ。フランコ・メッシーナのアレンジは、バッティアートに及ばずといったところか。 (山崎)



ALICE
Melodie Passagère
'88
●EMI 64 791711
○EMI 090 7917112
◉

このアルバムは曲のセレクトがちょっと変わっている。全ての曲はエリック・サティ、ガブリエル・フォーレ、モーリス・ラヴェルのクラシックの作曲家のもので、それをアレンジして歌詞を付けたものである。今回は作詞/作曲ともアリーチェのものではなく、又、歌詞はフランス語である。バックはアリーチェとミケーレ・フェドリゴッティのピアノとキーボード類が基本で、ゆったりとした雰囲気の中にアンニュイなイメージで曲を進行していく。流石、ただのかわい子ちゃん歌手ではないアリーチェのこと、コンセプトにもこだわりを感じる。新しい地平を捜して暗中模索している風にもとれる。 (山崎)



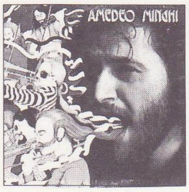
ALICE
Il Sole Nella Pioggia
'89
●EMI 66 7925201
○EMI 090 7925202
◉東芝 EMI TOCP 6291

ジャンセン、バルビエリのジャパン組をはじめ、ジョン・ハッセル、更にはピーターハミルといったイギリスの豪華ゲスト陣のバック・アップを得て製作された作品。広がりのあるアンビエント風のシンセと適度な土臭さ、そしてアリーチェの力強いヴォイスが際どい均衡を保ち、楽曲の良さも手伝って非常に充実した出来となっている。何かと物議をかもしがちなフランチェスコ・メッシーナのアレンジはここでも彼女の属性を100%引き出しているとは言い難いが(確かに一部の曲は彼女以外のシンガーでも代用がきくように思われる)、それを差し引いてもフィーメイル物としては文句なしに高得点をつけられる。大半の曲がカミサスカのペンによるという点も大きい。ラストのハミルとのデュオも素晴しい。 (内田)



ALICE
Mezzogiorno Sulle Alpi
'92
●
○EMI 074 7 98944 2
◉

「Il Sole Nella Pioggia」とほぼ同様の手法で作られており、居残りのリチャード・バルビエリ、ディヴ・グレゴリーに加え、元ペンタングルのダニー・トンプソン、そしてカンタベリーの周辺ミュージシャン、ジャッコらが参加。そのコネクションの広さには驚かされる。前作とほぼ同一傾向であるが、ギターとピアノによるアコースティックな音色はより耳に心地良く響く。長年彼女の作品に親しんできたリスナーには抑制気味のメッシーナのアレンジにもどかしさを感じる向きもあるだろうが(難を言えば本作の曲の大半はシンガーが「アリーチェ」であることの必然性が希薄だ)、それだけ前任者のフランコ・バッティアートの才能があまりに抜きん出ていたということになる。作品としての出来は極めて良質である。 (内田)



AMEDEO MINGHI
Amedeo Minghi
'73
●Apollo DZSLA55165
○
◉

コチャンテ、バリョーニといった若きカンタトゥーレ達が、より柔軟で積極的なアプローチにより伝統を見つめ直したのと同様に、この作品も又、古法と同時代を混在させ乍ら、本質的な美を追求した好例である。Amedeo Minghiの優しい唄声を包み込む豊かなオーケストレーション、花を添えるキーボード、艶やかなバイオリン・ソロ、あらゆる楽器が美しく華やかで、生命あるもの全てを心から讃えているかのようだ。尚、この同レーベルよりI Vianellaと共に2nd〝Homeide〞を発表している。 (鈴木伸一)



AMEDEO MINGHI
Cuori Di Pace
'86
●RCA PL 71141
○
◉

'73年0LP以降では'76年のミア・マルティーニとのデュエット曲が良かった。ナナナとしか歌ってないが。'80年前後の作品も何枚か聴いたが、中途半端なポップスという印象が強かった。本作も、表が羽の生えたオートバイ、裏が本人の似顔絵というジャケットと、'86年発表であるためにあまり期待してなかった。ところが聴いてビックリ。バックは打ち込みなのだが、全体に夢見るようなイメージがある。これは彼の歌心と淡い音色のキーボードのせいだろう。どの曲も好きだがA③・④・B①・②は歌とオーケストレーションの絡みがドラマチックだ。中でもA③。終わったかと思わせといて、再びキーボードが入って来るところは、夢のまた夢、という感じで言葉にならない感動が残る。 (渡辺一己)



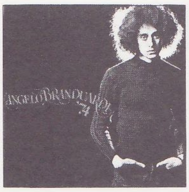
AMEDEO MINGHI
Le Nuvole E La Rosa
'88
●
○Fonit Cetra CDL 17
◉

髭を落としてシェイプアップしたジャケットを見て、やばいと思った。ところが…。感動大巨編であった。ローザという女性について歌ったトータル作なのだが、本作のキーボードオーケストレーションはすごい。究極と言ってもいい。ピアノでアルトゥーロ・スタルテッリが参加してる。①は華麗なピアノから壮大なキーボード、③はその名もローザボレロ、④は静動の対比がシンフォニック、7分を超える⑥もこれまたシンフォニックで、アコースティックギターが哀愁に満ちた⑦へとつながる。⑧は④のピアノソロ、②⑤⑨もいい曲、とたっぷり45分間おまかせCD。彼は寡作ながら現在も活躍しており、'80年以降の作品は本作も含めて手に入りやすいと思うので、是非聴いてみて下さい。（渡辺一己）



ANGELO BASILE
Un Angelo In Piu
'75
●Fonit Cetra LPX 37
○
◉

謎の人物。このまっ赤なジャケットを見ると、何か重大なメッセージがあるように思うのだが。なるほど内ジャケの写真は哲学者のようだ。全体に、曲調は明るめでほのぼのしたものだが、切々と歌うのでかなり哀愁がある。それとバンド形態で、演奏も重視していることがわかる。A①などは、いわゆる「たたみかける」展開があり、おやっと思わせる。A面は明るめの曲が続く。B②、③が、曲、演奏からいってもベストトラック。B②の切なげなボーカルとオーケストラ、B③のキーボードがいい。B④の終わりに冒頭のメロディーが出て来るあたり、トータル作の感もある。そうすると、残るB⑤はエピローグ的な曲だろうか。それまでの集大成的な明るい曲で、どこか大団円のイメージがある。（渡辺一己）



ANGELO BRANDUARDI
Angelo Branduardi
'74
●RCA TPL 1004
○EMI 0777 7 80102 2 7
◉

アンジェロ・ブランドゥアルディのデビュウ作。'74年という時期もあって、古くから活動を続けるシンガー達と比べると、どこか新しい世代のサウンドという気がする。カンツォーネに根ざしたものとはどこか視点の違う新しい息吹きである。トラディッショナル・ソングを自分流に消化して、孤独なトゥルヴァドゥールの視点で世界をみつめた繊細なサウンドはこのファーストの時点で確立されている。後のサウンドと比べると、アレンジがまだすっきりとまとめられていない感もあるが、全体のイメージはすでに往年のブランドゥアルデイそのままだ。こうして今、振り返ってみると、ブランドゥアルデイは唯一無比のスタイルを持つカンタウトーレであったし、今もそうであると思う。（山崎）



ANGELO BRANDUARDI
La Luna
'75
●RCA TPL 1160
○
◉

'75年リリースのセカンド・アルバム。〝月〟と題されたタイトルやジャケット・ワークにブランドゥアルディの孤独なイメージが明確に表現されている。サウンドのほうもマウリツィオ・ファブリツィオとブランドゥアルディのコラボレイションで、しっとりした彼独特の作風として確立されている。非常に繊細で夢みるようにファンタスティックな内容である。この作品は'80年に「Gullier, La Luna E Altri Disegni」として曲順をかえ、又、リレコーディングされて広く知られるようになった。このリエディションも完成されたサウンドでいいが、オリジナルの本作も、どこか初期の初々しさを残して捨て難い出来だ。（山崎）



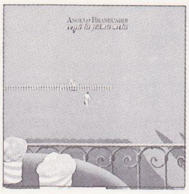
ANGELO BRANDUARDI
Alla Fiera Dell'est
'77
●Polydor 2448 051
○Musiza 825 766-2
◉

'50年、ミラノ生まれ。不出世のカンタウトーレの一人。'74年のデビュー以来、現在も活動を続ける。このアルバムはそんな彼のマスターピースとなる，そして'70年代カンタウトーレ作の、イタリアを代表する1枚として折り紙つきである。実際は以後3～4作とも同傾向、同レヴェルではある。この頃の彼は人気、気力、創作ともに充実しており、とりわけマウリツィオ・ファブリツィオ（アレンジャー）とのコラボレーションには協調を上回るイタリア音楽への洞察さえ感じとれる。地中海民族音楽のエッセンスをメルヘンに昇華し、独創的でありながらもポピュラリティを獲得したその事自体が奇跡的だ。極度にナイーヴで温もりのある音楽が、後年、M.エンデと結びつくのも最もな事。ヨーロッパ各国で発売された。（松本）



ANGELO BRANDUARDI
La Pulce D'acqua
'77
●Polydor 2448 002
○Musiza 825 767-2
◉

'77年にリリースされた通算4枚目のアルバム。もちろん従来通り、マウリツィオ・ファブリツィオのアレンジで、ジジ・カペロット、ロベルト・プレオ、アンディ・スルディ等の実力派ミュージシャン達によってサポートされている作品。初期の傑作である前作「Alla Fiera Dell'est」の後だが、ヴォルテイジは少しも落ちてはおらず、ブズーキ等の民族楽器を使用している為か、前作よりもさらに民族色の強いアルバムとなっている。このアルバムには各曲ごとに描かれた9枚のLPサイズのイラストが付されていて、これをみながら各曲を聴くのも楽しい。正に現代のトゥルヴァドールというにふさわしい内容で内省的で繊細な作品だ。（山崎）



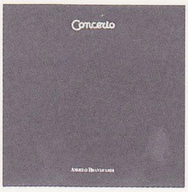
ANGELO BRANDUARDI
Cogli La Prima Mela
'79
●Polydor 2448094
○
◉

'79年、通算5枚目の作品。前作〝La Pulce D'Acqua〞では、ブランドゥアルディの民族音楽への興味がややストレートに反映されていたが、2年後に発表された本作では、それは昇華された形で楽曲に取り込まれており、より円熟した印象を受ける。彼の貪欲な多種の音楽への興味が彼自身の中でまざり合い、それが彼自身の独自性という幹についた葉のように、より自然な形で表現されているのである。アイスクリームを食べ残して遊びに行く子供達を描いたアルバム・カヴァーが、この作品の印象をとても象徴しているように思う。「Alla Fiera Dell'Est」を初期の傑作とすると、これは中期の頂点に位置するものだと思う。英語、フランス語ヴァージョンもある。(山崎)



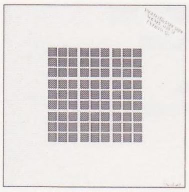
ANGELO BRANDUARDI
Gullier, La Luna E Altri Disegni
'80
●Polydor 2448 115
○EMI 0777 7 80099 2 4
◉

3作目の大ヒットもあってか、以後もヨーロッパ各国盤も発売され、大編成のキャラヴァンを組んで、つまり大規模なツアーをかけて、その名を不動にしたブランドゥアルディだが、なぜか2作目が焼き直された。人気絶頂をあて込んでのマネージャーの意向か、あるいは2作目に不満があったのか、いずれにせよ、再録音となったのが本作である。2作目はタイトル「Luna」のとおり陰ったイメージの特徴のあるアルバムだったが、再録音された本作では、3作目の延長にトーンが合わされている。それにしてもデリケートな仕上りである。夢で見たもの触れたもの嗅いだものを音に紡ぎ出す作業を、この人はしているのではないか、などと思ってしまう。オリジナルの陰りは止んだが、また一つ息吹が吹き込まれ再生した。(松本)



ANGELO BRANDUARDI
Concerto
'80
●Polydor 2675 200
○EMI 2-094 7991972
◉

ブランドアルディが最も輝いていたポリドール時代の集大成ライヴ。元々は3枚組LPとしてリリースされ、ボックス仕様に写真満載のブックレットが付されていた。'78〜'79年にイタリアをはじめ、ドイツ、ベルギー等で行われたコンサートのハイライト・シーンが余すところなく収録されており、マウリツィオ・ファブリツィオ、ジャンニ・ダッラリオ、ノチェンツィ兄弟らバンコの面々がその力量に恥じぬ素晴しいプレイで彼の独特の音世界を見事に盛り立てている。土臭さの中に漂うえも言われぬ夢想感は民族音楽に免疫のないリスナーにもしっくりくるのではないか。トラッドの「民族性」を曲げぬままにポピュラー化し、多大な成功を収めたその実績はアラン・スティヴェルと並び称されるべき偉大なものだ。(内田)



ANGELO BRANDUARDI
Angelo Branduardi
'81
●Polydor 5001 609
○
◉

'80年に彼の集大成とでもいうべき3枚組のライヴ・アルバムを発表した後、彼のレギュラー・アルバムとしては'79年の「Cogli La〜」から2年振りの新作がこのアルバムだ。新たな地平を求めたのか、他の事情からなのかは判然としないが、それまでのアレンジャーであったマウリツィオ・フォブリツィオからポール・バックマスターへとコンビが変わっている。この為、イタリア的なサウンドから、もう少し淡々としたイメージへと変化してしまった。従来のファンにとってはどこかもの足りない感がした作品で、当時の日本での評価も余りかんばしくはなかった。1つのスタイルが完成した後で、試行錯誤の時期であったのだろう。(山崎)



ANGELO BRANDUARDI
State Buoni Se Potete
'83
●Musiza 811 797-1
○
◉

'83年、「CERCANDO L'ORO」とほぼ同時期にリリースされたサウンド・トラックス・アルバム。一時の低迷を打ち払うようにブランドゥアルディとマウリツィオ・ファブリツィオのコンビは素晴らしい歌をこの時期、創り続けているが、このアルバムもサウンド・トラックスのイメージを打ち破る力作である。ここで彼は歌とギターの他、ヴァイオリン、マンドリン、フルートetc多芸ぶりを発揮している。サウンド的には従来のソロ・アルバムより趣味的な要素が強く、民族音楽色もいつになく強く感じるが、それが良い方向にむかっている為、芸術作品としての完成度は極めて高い。詞は奥さんであるルイーザのものが3曲収録されている。(山崎)



ANGELO BRANDUARDI
Cercando L'oro
'83
●Musiza 813 462-1
○EMI 0777 7 801012 8
◉

1983年にリリースされたアルバム。ポール・バックマスターを起用した前作が不評であっただけに従来通り、アレンジャーにマウリツィオ・ファブリツィオを迎えたこのアルバムの完成度の高さは嬉しく、後期の作品の中では一つの頂点を形成する作品である。彼が大々的にヨーロッパ・ツアーを行なった最後のアルバムでもある。この後、'85年にリリースされたイーツの詩に曲をつけた最新作では、小編成での演奏で、ツアーも国内だけのものであった。彼のポリシーが一徹であるだけに、時代の流れの外側に位置してしまったということであろうか。今後はサウンド・トラックスを手がける方向に進むようだ。多くのカンタウトーレ達がアメリカ志向になっている今、彼のアイデンティティーは重要である。(山崎)



ANGELO BRANDUARDI
Dieci Ballate Su Liriche Di William Butler Yeats
'86
●Musiza 829 476-1
○EMI 0777 7 80100 2 9
◉

このアルバムは彼の作品群の中でも極めて内省的なものの1枚だ。'83年前後には多くのゲスト・ミュージシャンを迎えて大がかりなヨーロッパ・ツアーを行なったブランドゥアルディだが、このアルバムでは僅か4人という最小の編成でイタリア国内だけのツアーを行なっていたのが記憶に残っている。このアルバムはタイトルの示す通り、イーツの詩にブラドゥアルディが曲をつけた12のバラードが収録されている。1つの時代が終わった後で、いま一度、自分の足もとを見つめ直した作品といえる。何か、そういう決意がひしひしとリスナーに伝わってくる作品だ。 (山崎)



ANGELO BRANDUARDI
Momo
'86
●Musiza 831-296-1
○
◉

ミヒャエル・エンデ原作の映画「モモ」のサウンド・トラック盤である。ブランデゥアルディ通算12枚目の、サントラとしては「State Buoni Se Potete (Musiza811797-1)'83」に続く作品である。作品の性質上、大部分がインスト曲で、そのバラエティに富んだ曲作りからは彼の作曲家としての非凡な才能が窺える。また、アルバム最後の曲では彼独特の透明感のあるリリカルなボーカルを聴くこともできる。本作品からカンタウトーレとしてのブランデゥアルディの素晴らしさを知ることは不可能であるが、音楽として傑出した存在であることを示した異色作と言える。なお、92年にリリースされた彼のサントラ集「Musiche Da Film」に本作の一部が、収録された。 (賀川)



ANGELO BRANDUARDI
Secondo Ponzio Pilato
'88
●Musiza 835 359-1
○
◉

プログレッシヴ・サイドで昔から語られてきたイタリアン・カンタウトーレの第一人者。彼のように早くから個性が確立されたアーティストには駄作はないし、新しいものを吸収しても独自のカラーに染めてしまうので目新しさは少なくなる。13作目。サントラ盤。大半が演奏のみである。もちろん全曲彼の作。地中海民族音楽色を溶け込ませたサウンドも洗練され、あえて民族楽器を全面に出すなど、持ち前のサウンド自体を意識的に使いこなしている気がする。オーケストラ曲あり、ピアノ曲あり、偶然の結果として、どことなくポポル・ヴーの音の響きに似たように思える。個人的にはこの落ち着きが気に入ったが、多少印象が薄いかもしれない。 (松本)



ANGELO BRANDUARDI
Pane E Rose
'88
●Polydor 837386-1
○
◉

甘く情感に富んだヴォーカルとトラッドの香りがほのかに漂うきらびやかかつ凝った演奏が見事に溶け合ったサウンドでカンタウトーレの頂点に立ち、一時代を作ったアンジェロ・ブランドゥアルディ、「Cercando L'oro」('83年)に至る多くの作品にその輝かしい軌跡ははっきりと記録されている。その後3年間、新作が発表されなかったが、その間に彼の音楽スタイルは変化した。バックの演奏がシンプルになり、彼のヴォーカルもより内省的なものとなった。本アルバムではそうした傾向が更に強まり、かつての作品に見られた叙情性がかなり後退し、暗く多少なりとも力強い印象を与える。歌詩の内容も重要と思われ、そうした意味では、我々日本人にとってはとっつきにくい作品とも言える。 (賀川)



ANGELO BRANDUARDI
Il Lardo
?
●
○Polygram 847 097-2
◉

彼のアルバムには三つのターニング・ポイントがあると思う。出生の3作目、地中海民族音楽にたぐった自己のルーツとの統合、「Concerto」、そして更に立ち入って深層探究への関心がイエイツに至り、同ベクトルでエンデの思想背景をも恐らく受けただろう「Momo」に成就、とつまり彼の音楽に強くあって他にあまりないもの、それは彼の音楽から強く感じとれる繊細で香る事の向こうにある夢見の趣向に何よりよく表れている。彼は深層心理を分析する人に似て、それを表現する才分と関心を持っているのだと思う。基本的には変っていない。しかし、近作はかつての絹の光沢のような艶が薄れたように思う。何かくすんでいる。前作に似て地味なトーンだ。 (松本)



ANGELO BRANDUARDI
Si Può Fare
'92
●
○EMI 0777 7 812332 3
◉

「Cercando L'oro」以降、アンジェロ・ブランドゥアルディのサウンドはやや変化した。「Cercando L'oro」までの作品が持っていたファンタジックな雰囲気や徐々に心に浸み入るような、しかし決して尽きることのない叙情があまり感じられなくなった。ブランドゥアルディ自身のヴォーカル・スタイルは本質的に変化していないので、やはりバックの演奏に問題があったのではないか、彼のナイーヴなヴォーカルはアメリカ的な非常に明るい演奏や、あまりにシンプルな演奏とは馴染まず、控えめでやや凝った暗めのものとぴったりくる。久々の新譜である本アルバムでは、ヴィンチェ・テンペラの協力のもと、そうした曲を何曲か聴くことができる。 (賀川)



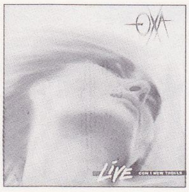
ANNA MARIA NAZZARO
Anna Maria Nazzaro
'84
●Conveyor CONLP 5002
○
◉

数年前にレギュラー入荷の予定がありオパス・アヴァントラやピエロ・ルネールを引き合いに出した宣伝も行われ、心待ちにしていたが結局入荷せず、ついに先頃某店店長さんに肉体労動と引換で譲ってもらった。ジャンニ・ナザロの妹という説は、彼がCGDなのに対して本作のディストリビュートがリコルディなので安易な理由だが違うのではないかと思う。ややオペラティックなヴォーカルと暗めの雰意気がそうさせるのだろうがオパスやピエロと比べるのは止めたい。バックはそれに徹してあくまで控え目、室内楽的趣きは薄いが透明感のあるアコギがよい。女Tito Schipa Jrと言うには深みに欠け、Armande Artai程強烈過ぎない、一風変わった上出来のポップス、であろうか。肉体労動の価値は充分あったが。 (森下)



ANNA MELATO
Ritratto
'77
●RCA PL 31303
○
◉

1952年ミラノ生まれ。'70年代に大活躍した女優マリアンジェラ・メラートの妹。'73年のカンツォニッシマと'74年のサンレモ音楽祭出場した頃がピークで、そのアイドル性の強い内容は、'74年のアルバム「Domenica Mattina」(Ricordi SMRL6134)に収められている。その後RCAに移り当アルバムを発表。アレンジは前作と変わらずジャンニ・マッツァが担当したが、内容はかなり変化している。自作の曲を歌うようになったのが主な原因で、カンタウトリーチェとしての第一作はノスタルジックな雰囲気を漂わせた意欲的なアルバム。ハスキーな声も生かされている。なお、同じRCAからは同傾向のアルバムとして彼女の先輩アイドルにあたるナーダの「1930 Il Domatore Delle Scimmie」(RCA TPL1-1157)がある。
(HIRO TANAKA)



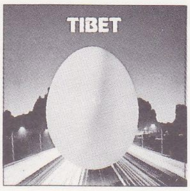
ANNA OXA
Live Con I New Trolls
'90
●CBS 466728
○CBS 466728-2
○
◉

アンナ・オクサとトロルスとの関係は89年のアルバム「TUTTI I BRIVIDI DEL MONDO」にヴィットリオ、ベッレーノ、ウーザイの3人が作曲、コーラスで参加した事に始まり、このアルバムのプロモーション・ツアーを収録したのが本作である。トロルスは'88年の「AMICI」以来ほとんど解散状態にあったが、このツアーに上記3人に加えてリッキー・ベッローニ、アルド・デ・スカルツィが参加、ステージを見れば恐らく誰もが〝NEW TROLLS CON ANNA OXA〞に見えたに違いない。唄われる曲のほとんどはオクサの'88年と前述の'89年のアルバムの中から選曲されているが、何とトロルス自身の曲〝UNA MINIERA〞、〝QUELLA CAREZZA DELLA SERA〞、〝TO DIE TO SLEEP〞等を演っていて、最大の聞き所はやはり〝CONCERTO GROSSO〞だろう。 (片山)



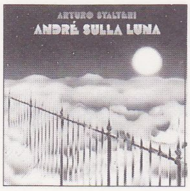
ANTONIETTA LATERZA, NADIA GABI
Alle Sorelle Ritrovate (Aux Soeurs Retrouvées)
'75
●Cramps 5205 201
○
◉

クランプス・レーベルの語られぬ一枚、Anconietta Leterzaという女性シンガーが全ての曲を書き、歌うのをライブ録音したもの。なぜ語られなかったかという、理由は実に簡単なのだ。一部にNadia Gabiという歌手が入ってデュエットになる以外は、枯れた声のギターの弾き語りが延々と続くだけ。おそらく今回の集成に掲載された全作品の中でも地味さという点ではトップであろう。その歌手の筋金入りとでも言うべき内面の強靱さに感応することが出来るかどうかが運命の分かれ道となる。フェミニズム関連のイベントの実況録音と思われ、ということは、ジャケット写真はやはりナニを意味しているのであろう。歌もの上級者向き。(私の所持する盤は仏語表示のフランス盤です。誰か伊盤知りませんか?) (川辺)



ARMANDO BERTOZZI
Tibet
'00
●RBA 004
○
◉

Armando Bertozziなるミュージシャンのソロ名義だが、実質的にはLuciano Titiとのデュオ作。ドラムとキーボードによるスタジオ・ライヴ盤になる。担当楽器がクレジットされていないので、どちらがドラム、キーボード奏者なのか判らない。一発録りとは言え曲は一通り作曲されている。全体にジャズ・ロック・タッチではある。ただし、奏者二名ということで手数は多くともインプロヴィゼイションの集中力も感じられなければ、構築性を意図した演奏にも思えない。なんとも宙ぶらりんな状態のまま続いていく。その少し冗長な流れの連続がこのアルバムのカラーにもなっている。テクニカルな演奏も多いが常に稀薄だ。自主製作なのか水色のカラー・レコードになっている。
(松本)



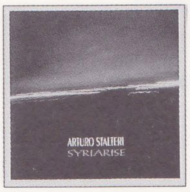
ARTURO STALTERI
Andre Sulla Luna
'79
●IT ZPLT-34062
○
◉

ピエロ・リュネールのキーボード奏者、アルトゥーロ、スタルテッリのソロアルバム。ピエロ・リュネールは'74年と'77年にアルバムをリリースしているが、これは'79年の作品である。名作「グドルン」をあきらかに継承したサウンドコラージュが展開されている。ピアノや様々な電子キーボード群、そしてリコーダーやシーケンサーを用いて彼おとくいの万華鏡のようなサウンドがところせましとかけ回って行く。彼のたぐい稀なセンスには驚くばかりで、おそらく現在のイタリアンロック・シーンの中で唯一無比の存在ではなかろうか。「月の上のアンドレ」という童話的なストーリーを持つトータル・アルバムである。 (山崎)



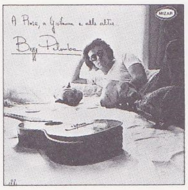
ARTURO STALTERI
...E Il Pavone Parlo Alla Luna
'87
●Lynx Z 00565
○
◉

元ピエロ・リュネールのアルトゥーロ・スタルテッリは、グループ解散後にITに1枚のソロを発表後、消息がとだえていたが、クラシック・ピアノを学び、音楽に対する自己深化の旅を続けていたのだった。この作品は彼がインドへと旅行した後に、その印象を元に制作したソロ第2作目で、東洋的なイメージのミニマル的なラインを基に、彼独特のキーボード・ワークをちりばめて創られた作品。フィレンツェで人知れず制作されていたものが、後に、レコーディングされたスタジオのオーナーが中心となって創られた〝LYNX〞レーベルからリリースされたものである。又、近く、マテリアーリ・ソノーリ・レーベルからCD化される予定である。（山崎）



ARTURO STALTERI
Syriarise
'92
●
○Materiali Sonori MASO CD 90036
◉

とっくにクラシック・ピアニスト専業になっているかと思われていた頃に出た三作目。一応、ニューエイジとの売りで出された。実際音処理等相応の物になっているとは言えソロになってから（元々?ロック色が薄い彼だからにして曲調に変化と言う程の違いは見受けられない。ピアノを中心にサンプラー等を使用する他、クラリネット、チェロ、ギター、ドラムスが曲によって色を付けるが、総じてアコースティック系の印象が強い。そう言ったシチュエーションだから独特の夢見心地でナルシスティックな内省感が生きるのだが、欲を言えば音処理のせいでBGM方向に若干引き摺られるのが不満。もう少し有機的な音造りの方が似つかわしいと思うが、とは言え好作。ファンなら一聴を。（中西）



BEPPE PALOMBA
A Rosa, A Giovanni E Alle Altre...
'72
●Mizar MZPP 01
○
◉

無名シンガー、ベッペ・パロンバの作品。傍らにペットを侍らせ、ベッドの上でゴロ寝を決め込むエルトン・ジョンみたいな青年がその人である。例によって経歴は不詳であるが、事情通のファンならクリムゾンタイプの物凄いプログレッシヴロックを演っていたと言われるBuon Vecchio Charlieなるバンド（近年CD化されて世に出た）のメンバー2人がバックミュージシャンとして参加していることに注目するはずだ。しかし本作の内容に限っては標準的な歌物である。acギターをバックにした弾き語り的なパートを初めピアノ、チェンバロ等、彼自身が奏でる音を中心に緩やかなタッチで仕上げられている。これにバイオリン、チェロが静かに絡み雰囲気作りも上々、時には陽気な地中海音楽に早変わりするなど非常に親しみ易い作品。（江田）



BILLY GRAY
Feeling Gray ?
'72
●Polydor 2448 009
○
◉

'71年、トリップは彼らの最高傑作とされる2ndアルバム〝Caronte〞を発表するが、ギタリストのビリー・グレイは同作を最後にグループを脱退、翌年ポリドールよりソロアルバムをリリースしている。ギタリストのソロのため標準的なロックサウンドが中心でプログレ色は濃いが、曲によってはストリングを導入、シングルカットされたトリップの〝Little Jenny〞の様にゆったりとした歌で聴かせる佳曲も見られる。またキーボードを絡めての泣きのメロディーも適宜盛り込まれている他、B面ラストでは凄まじいばかりのブルースギターがうなりを上げるなど多少のメリハリは認められる。全曲とも彼のペンによるもので、グループを離れ伸び伸びしたタッチでのアルバム作りではあるが、歌詞が英語であることを含めイタリア的色彩は薄い。（江田）



CARLO SILIOTTO
Ondina
'79
●Philips 6323 083
○
◉

カルロ・シリオットーイタリアン・ロックに詳しい人ならカルナシャリア、カンツォニエーレ・デル・ラツィオに参加したヴァイオリニストとして彼の名を記憶していることだろう。他にソロが出ているかどうか不明だが、本作では両バンドのメンバーを含む16人のゲストを迎え、地中海民謡に根差したたおやかな調べで水の精オンディーヌの物語を奏で上げる。彼自身が弾くヴァイオリンや語り掛ける様なヴォーカルを初め、ピアノ、マンドリン、マリンバ、各種管楽器等を駆使し、美しいジャケットや内袋のイラストのイメージそのままの甘く切ないメロディーで綴られており、〝民族音楽〞に拒否反応を示すシンフォニック通でも十分に堪能出来る素晴らしい内容になっている。（江田）



CATERINA CASELLI
Caterina Caselli
'71
●CGD FGS 5080
○
◉

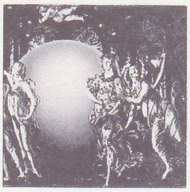
カテリーナ・カセッリには計7枚のオリジナル・リリースのアルバムと、数えられる限りで計28枚のシングルがある。一般的には'60年代のイメージが強く、しかもビート・タッチのアイドル・シンガーだった。その彼女も「Primavera」というイタリアのふくらみある情感にたけたアルバムを製作するまでに至る。これは3枚目のアルバムに当るものだが、また録音、アレンジとも古く'60年代を色濃く残している。それでも何曲かに大人びた歌声を聴かせてくれる。ビートふうの曲も、また、曲さえ良ければ、といったものもある。もともと余り上手はない歌手だとは思うが、低い声のせいか妙に気怠く愛想のない雰囲気があって、落ち着きのある曲を歌うと大人びて聴こえる。さめた哀愁を漂わせる点では独特のものがある。（松本）



CATERINA CASELLI
Caterina Caselli

'72
●CGD FGL 5105
○
◉

'46年、モデーナ生まれ。'63年デビュー。当時、青春期をローマのパイパー・クラブでならしたビート派シンガー。金髪に染めたショート・カットでも有名だった。当時としては垢抜けたファショナブルな雰囲気がある。このアルバムは26歳の時の、次作は28歳の時のものということになる。タイトルは前作に同じだが、内容、歌い方とも落ち着いてきていて、わずかアルバム指向に傾いたか。それでも次作には至らない。基本的にカヴァー集になっており知った曲が並ぶ。原曲はキャット・スティーヴンス、ユーライア・ヒープ、オーティス・レディング等々。オーケストラが絡めばしめたものである。独特の投げやり気味で哀愁をおびた歌声は充分に聴ける。〝ビートの女王〟と云われた'60年代は影をひそめている。　（松本）



CATERINA CASELLI
Primavera

'74
●CGD 69071
○
◉MMG AMCE 569

カテリーナ・カセッリは、カンツォーネ畑で活躍する女(ひと)である。場違いな印象を受けるかも知れないがこのアルバムだけは特別に紹介する必要がありそうなのでここに掲げることになった。プリマヴェーラ――「春」をテーマにするトータル的な色彩が濃く、壮大なオーケストラをバックに切々と歌い上げる彼女の歌声は、まるでイタリアの栄光の日々がさすらうかのようでもある。ジャケットはボッティチェッリの「春」をあしらったもので、外ジャケットはモノ・トーンで、そして内ジャケはフル・カラーで「春」が描かれている。プーの「パルシファル」をはるかに上回る感動を与えてくれることを確信する。'74年――往年のイタリアの芽吹きを感じさせる一枚である。　（山崎）



CATERINA CASELLI
Una Grande Emozione

'75
●CGD 69121
○
◉

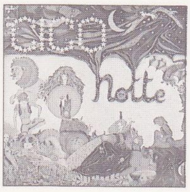
LP通算6作目。活動休止する直前のもの。タイトルは「Primavera」中のac-gが一際響くA⑤からとられている。'70年代唯一のオリジナル編集盤である。全12曲。内5曲は「Primavera」から。他〝Seguila〟〝La Casa Degli Angeli〟〝E' Domenica Mattina〟〝Nessuno Mi Può Giudicare〟がシングルからの収録。1曲は4作目から。そして残り2曲がこの編集盤のみに収録、という構成になっている。初期のビート・カンツォーネ時代からかなり「Primavera」icになった〝La Casa～〟〝Domenica～〟はデリケートな面が出た佳曲。そしてやはり前半その5曲がよく響く。曲を追うごとに染まり〝Noi Lontani, Noi Vicini〟に至りイタリアへ放たれるあのアルバムをもう何度聴いたことか。　（松本）



CATERINA CASELLI
Amada Mia

'90
●Sugar 508 100
○Sugar 508 100-2
◉

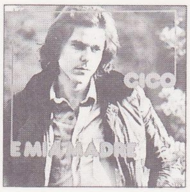
カテリーナ・カセッリは、'75年アルバム「UNA GRANDE EMOZIONE」を発売後歌手としての活動を停止し、CGD社長の御曹子と結婚、ASCOLTO・LABELを設立しMAURO PAGANIやPEPE MAINAといった有能なアーティストの発掘を始める等、話題だけの存在となっていた。'83年にDARIO BALDAN BEMBOとのデュエット「AMICO E」が有るが、本作が正式な復帰作だと言える。〝サンレモ音楽祭90〟参加曲の〝BISOGNEREBBE NON PENSARE CHE A TE〟を含むこのアルバム、ARRANGEがMAURIZIO FABRIZIOで、DAVID PATON、CLEM CLEMPSONといった英国勢も参加して中々極上のサンレモ風ポップスを全く衰えを感じさせない歌唱力で聞かせてくれる。本作最後の曲はBATTIATOとBATTISTIの曲からインスパイアされたという歌詞が光るバラードである。　（片山）



CICO
Notte

'74
●CBS 69085
○
◉MMG AMCE 567

フォルムラ・トレのドラマー、トニー・チッコはグループ解散後、チコと名を改め、初めて発表したのがこの「Notte」である。つややかなオーケストラ（P・オルミのアレンジ）をバックに、アップ・テンポなナンバーからしっとりと歌いあげるバラードまで優しい歌声で聴かせてくれる。ダブル・ジャケット、ブックレット付き。この後、同傾向の2nd「E Mia Madre」とベスト・アルバムを発表。EMIに移籍して3rd「Macchine－Macchinette」（ディスコ風サウンド）をリリース。さらに「Fantasy」というグループ名でアルバム「Uno」をEMIに残し、しばらくはシングルのみを発表していたが、'87年に久しぶりのアルバム「E Mo'Parlamm'e Musica」をRCAからリリースした。最近はフォルムラ・トレを復活させ、新生トレとして3枚のアルバムをリリースしている。　（山崎）



CICO
E Mia Madre

'75
●CBS 69205
○
◉

フォルムラ・トレ解散後ソロ・シンガーとなったトニー・チッコ改めチコ。パオロ・オルミがアレンジを担当した1st「Notte」と本2nd以降は、これといったアルバムを挙げることが出来ない。確かに甘い声とマスクの持ち主であるが、この素材を生かすプロデューサー、アレンジャーに出会えずにいるのが現状である。それだけに初期の2枚は今だ輝きを放っている。本作は1stを多少小粒にした感じの地味さはあるものの、とびきり叙情的なタイトル曲をはじめ全て本人の作曲であり、意欲を窺わせる。「秀れたドラマーになるより、良い歌手になりたい」の言葉通りに、しっとりと歌い込む。現在は名をTONY CICCOに戻し、ダンサブルな音楽に傾倒している。　（古田）



CIRO D'AMMICCO
Ciro D'ammicco
'72
●EMI : 3C 064 17818
○
◉

オレンジ色の封筒型変形ジャケ。表面には切手が貼られ消印まで押してある。一風変わった趣向のチロ・ダミコの1stアルバムであるが、叙情派カンタウトーレの作品の中ではトップクラスの出来栄えを誇る。彼自身が奏でるのであろうか、全面に施されたメロトロン、抜群の歌唱力、重厚な章作りどれを取っても2流プログレバンドがジタバタしたところで遠く及ばない崇高な世界がそこにはある。曲によってはバイオリン、フルート、acギターの美しい音色が聴く者を虜にし、ラストでは麗しいピアノを徹底的にフィーチュア、聴き終えた後も暫く余韻が争る様な印象的な終幕となっている。なお彼はこの後Daniel Santacruz Ensembleを結成、数枚のポップス作品を発表するが"哀しみのソレアード"は日本でもちょっとしたヒットとなった。
（江田）



CIRO D'AMMICCO
Gente
'81
●Durium MSAI 77424
○
◉

ダニエル・サンタクルーズ・アンサンブル（日本盤が出た作品もある）解散後にリリースされたチロ・ダミコのセカンド・アルバム。前作から10年近い年月が経っているが、チロ・ダミコの歌手としての本質はほとんど変化していない。メロディアスなストリングスやピアノをバックにやや高めの甘い声で切々と歌いかけてくる。全9曲、前作のメロトロンを効果的に使った曲のような抜群の出来のものがないため、全体としてはやや変化に乏しく、地味な印象を受けるが、イタリアならではの情熱に富んだポップスとして歌物ファンは楽しむことが出来るだろう。イタリアではこのタイプのポップスは既に過去のものになっており、我国のファン以外に支持者がほとんどいない状況では新作は望むべきもない。
（賀川）



CIRO SEBASTIANELLI
Il Buio E...
'77
●Derby DBR 20024
○
◉

少ししゃがれた声で感情を込めるように強弱をつける。R. コチャンテ程の派手さはないが、いかにもイタリアらしいカンツォーネ血筋のポップ・スタイルを感じさせるシンガーだ。このアルバムはkbdを兼任したアレンジャー、ジャンニ・マッツァを始め、g、b、ds、4人の女性コーラス等が、ちょうどダリオ・バルダン・ベンボのようなすっきりとした味つけをして、オーケストラにまみれたカンタウトーレ物から一歩抜け出している。イタリアの歌物が'70年代から'80年代にかけて移行していく、その中間にある音づくりとも言えそうだ。大掛りなアレンジや感情の勢いにまかせた起伏もないかわりに、それ程スマートでもない。決め手になる曲を欠くアルバムだが、さらりとした中にもイタリア臭さが息づいている。
（松本）



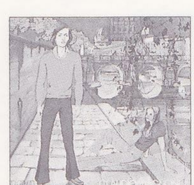
CLAUDIO BAGLIONI
Claudio Baglioni
'70
●RCA PSL 10465
○BMG Ariola ND 71660
◉

クラウディオ・バリョーニのファースト・アルバム。彼のアルバムのジャケットは凝ったものが多いが、本作品は白黒の非常に地味なものである。ジャケットとは異なり、内容は中々充実したものと言える。穏やかに語りかけるような歌い方とオーケストラをバックにした熱唱を組み合わせた展開は従来のカンツォーネに通じるものがある。当時のイタリアのポピュラー・ミュージック・シーンの主流はこのようなサウンドだったのであろうか。やはり、感情表現の大胆さ、巧みさという点で、イタリアンのシンガーは他国のシンガーにない傑出したものを持っている。こうした伝統が後のロック・プログレッシヴ・イタリアーナにも生きていることは間違いない。イタリアのポピュラー・ミュージックのエッセンスが詰った一枚。
（賀川）



CLAUDIO BAGLIONI
UnCantastorie Dei Giorni Nostri
'71
●RCA PSL 10511
○
◉

バリョーニ若き日の名作。瑞々しくも爆発的瞬発力を備えた彼の唱法はこのアルバムに於て既に開花し頂点を窮めていたと言っても良いだろう。特に"Il Sole E La Luna"に代表される。Ruggero Ciniの絶妙なアレンジが冴え渡るB面の流れは、白眉の出来で、とても新鮮な感動を与えてくれる。静寂と躍動、爽気と翳りといった若さ由の微妙な内的変化が見事に具現化されており、後に輩出される若きカウンタウトーレ達に乃ぼした影響の大きさを想像するに難くない。次作以後はよりロック色が強くアピール性では勝るかもしれないが、個人的には、この作品が最も魅力的なものである。
（鈴木伸一）



CLAUDIO BAGLIONI
Questo Piccolo Grande Amore
'72
●RCA DPSL10551
○BMG Ariola PD 70739
◉

「Claudio Baglioni」、「Un Cantastorie…」に次ぐ3枚目のクラウディオ・バリオーニの作品である。72年のリリースであるが、この時期のイタリアのシーンは、正にプログレッシヴ・ロック一色だっただけに、カンタウトーレ達の作品もシーンの影響を受けたものが多く見受けられる。本作もその例にもれず、トト・トルクァーティの全面的バックアップにより、起伏に富んだ作品に仕上げられている。同レーベルの同時期のリッカルド・コッチャンテの「Mu」などと比べても遜色ないどころか、それ以上のポテンシャルを秘めた好作品。初期のバリオーニのLPは、ほとんど変型か見開きであったが、このアルバムは4面開きという状態で初回プレスが行なわれた。
（山崎）



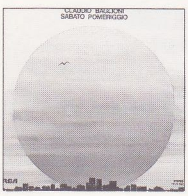
CLAUDIO BAGLIONI
Gira Che Ti Rigira Amore Bello
'73
●RCA PSL 10587
○BMG Ariola PD 70740
◉

しわがれた独特の歌声で長くファンの心をつかむクラウディオ・バリョーニだが、この頃のものはシーンの影響を受けてプログレッシヴなイメージの作品である。基本的に歌の部分は従来のバリョーニ節なのだが、効果音を配したり、又、トータルに流れをふまえてアルバムを構成する等、意欲的な音創りである。全ての作詞と曲の大部分はバリョーニ自身。オーケストラ・アレンジは、イージー・リスニング系のソロも発表しているトニー・ミンムス、キーボードはトト・トルクァーティである。オリジナルは横長に開く4面開きジャケットでさらにページのリーフレットが付されているという凝った代物。'70年代然としたいいアルバムだ。（山崎）



CLAUDIO BAGLIONI
E Tu....
'74
●RCA TPL1 1067
○BGM Arioia PD 70843
◉

バリョーニの5作目。若者の愛を描いた前2作でスターダムにのし上がった彼だが、今度はシンセ奏者として日本でも良く知られるヴァンゲリスを迎えての意欲作だ。ピアノでトト・トルカーティも参加している。これまでのストリングスに代わり、ヴァンゲリスの演出によるオーケストレーション（キーボード群）を大胆に導入しているが、派手派手しいプレイや殊更構えたところも無く、典型的なラヴ・ソング・スタイルのポップスを中心に展開する。恋をささやく男女のシルエットをデザインしたジャケットは、恋愛映画かムード音楽といった体でもあるが、作品の内容を端的に表したものとも言えそうだ。なお、オリジナルは見開きジャケットで、裏面に歌詞を綴ったポスターが付されている。（江田）



CLAUDIO BAGLIONI
Sabato Pomeriggio
'75
●RCA TPL1-1161
○BMG Ariola PD 70844
◉

クラウディオ・バリョーニはRCAイタリアーナに7枚、CBSに移籍後も現在まで多数のアルバムを発表しトップの人気を誇るカンタウトーレである。独特のコブシ回しを持つ情熱的な歌唱はそれだけで強く胸を衝かれる思いがするが、常にトータル性を持たせたアルバム作りもプログレッシヴ・ロック・ファンにアピールするものがある。本作はRCAでの6作目、巨匠ルイス・バカロフがアレンジはもとよりキーボード群で全面的に参加。バカロフというと例のバロック調を想起されるかもしれないが、主役はあくまでバリョーニ。決してアレンジャーに左右されるようなアーティストでないことだけは心にとめておいて頂きたい。どのアルバムも甲乙付け難い。（古田）



CLAUDIO BAGLIONI
Solo
'77
●RCA PL 31235
○BMG Ariola PD 71304
◉

前作、「サバト・ポメリッジョ」ではゆったりとしたストリングスのうねりの中にバリョーニの歌がバランス良くまとめられており、中期の傑作の1枚であったがこの次作もそのヴォルテイジを保ちながらうまくまとめられた作品である。作詞/作曲はもちろんバリョーニ自身、アレンジはバリョーニとトト・トルクァーティ。バリョーニの歌声は、伝統的なカンツォーネの唱法を継承しながらも彼の独特のエッセンスを加えて、新たな若いファンにアピールしたが、バリョーニのファンというのは、どこかでいい意味で伝統的なイタリアというものに愛着を持っているのだろうと思う。オーソドックスに盛り上がる彼の歌声は自らのイタリアが映るのであろう。（山崎）



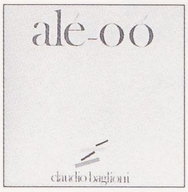
CLAUDIO BAGLIONI
E Tu Come Stai?
'78
●CBS 466532
○CBS 466532 2
◉

今やイタリアを代表するカンタウトーレの一人となったバリョーニが古巣のRCAを離れ、CBSに移籍しての第一段のアルバムが本作である。どちらかと言えば内省的でトータルなアルバム作りを続けて来た彼だが、このアルバム以降徹底的にポップスを追及していく事になる。オート・パンの利いたエネルギッシュなギターのイントロから幕を開け、いきなり一曲目から開放感に満ちた世界が広がり、今までとは確実に違うバリョーニを見せてくれる。アレンジは旧友のルジェロ・チニが復帰、レコーディングはフランスへ飛びエルーヴィーユにある〝LE CHATEAU〞を使う等、幾つかの冒険も試みている。何はともあれ、バリョーニの国民的英雄としてのスタートはこの時既に始まっていたのである。（片山）



CLAUDIO BAGLIONIABCDEFGHI
Strada Facendo
'81
●CBS 84764
○CBS CDCBS 84764
◉

CBSに移籍したバリョーニは留まる事を知らず、次々に名作を発表する。この「STRADA FACENDO」は久しぶりのトータル・アルバムで、各曲の間に短い小品が挟まれていて全体で一つの流れを作っている。又コード進行にも一貫性が現われていて、特に9th系の音の使い方に気を使っていてどの曲のさびでも一度聞けば印象に残る様に工夫されている。更に生のストリングスも効果的で否応なしに盛り上がる。そして何よりも一曲一曲の完成度の高さが素晴らしい。シングルこそ切られなかったがタイトル曲、〝I VECCHI〞、〝FOTOGRAFIE〞とどれもライヴには欠かせない名曲である。本作はイギリスに渡って録音されたが、PETE VAN HOOKE, STUART ELLIOT, ANDY BROWN, GEOFF WESTLEY等ががっちりと固めている。（片山）



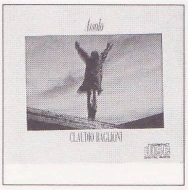
CLAUDIO BAGLIONI
Ale-Oo
'82
●CBS 88612
○CBS CDCBS 88612
◉

'70年初頭から活動を始めたバリョーニの9作目にして初のライヴ・アルバム。インナーには〝GRAZIE A UN MILIONE DI AMICI <STRADA FACENDO>〟とある様に、百万人もの動員をした、「STRADA FACENDO」の大々的なツアーの中で収録されたものである。青春時代をずっとラヴ・ソングを唄い続けて来た彼の集大成とも言えるアルバムだろう。メンバーは「E TU COME STAI？」で一緒だったMASSIMO BUZZIやLUCIANO CICCAGLIONI等、何と3人ものキーボードを含む8人編成になっている。聞き所は何と言っても二度に渡って披露されるお得意のバリョーニ・メドレーだろう。セカンド以降の各アルバムから万遍なく選曲されているが、繋ぎ目に違和感がないのは常に一貫した曲作りを続けて来たからだと感心させられる。 （片山）



CLAUDIO BAGLIONI
La Vita E' Adesso
'85
●CBS 26533
○CBS CDCBS 26533
◉

アルバム「STRADA FACENDO」、ライヴ「ALE-OO」を挟んで再びイギリスへ飛び、マナーやタウンハウスといったスタジオを使用し、PETE VAN HOOKE, MO FOSTER, JESS BAILEY, PHIL PALMER等のミュージシャン勢を従え、バリョーニはまた素晴らしいアルバムを作ってくれた。3面開きのジャケットいっぱいに広がる街を見下ろすバリョーニの後ろ姿にRCA時代の様な哀愁を顧みる事が出来るのだが、「STRADA FACENDO」でカンタウトーレとして完全に国民的歌手としての地位を築いてしまっているのに、また更に円熟度が増している。タイトル曲、人気の高い〝NOTTE DI NOTE, NOTE DI NOTTE〟も充実しているが、とりわけ〝TUTTO IL CALCIO MINUTO PER MINUTO〟での30秒にも及ぶロング・トーンは極め付けである。 （片山）



CLAUDIO BAGLIONI
Assolo
'86
●CBS 450364
○CBS 450364 2
◉

'82年にライヴ・アルバム「ALE-OO」を出したばかりのバリョーニだが、'85年のスタジオ盤一枚を挟んで再びライヴ「ASSOLO（独唱）」を発表した。個人的にはバリョーニの全作品の中で一番好きなアルバムなのだが、アナログ盤で3枚組、全47曲をたった一人で唄い抜いている。それもイタリアでも有名なコロシアム級のアリーナで、5万人は下らないだろう大観衆を前にだ。バック・ミュージシャン等もちろん無く、全てピアノとギターの弾き語りか、シークエンスされた音源のみで演奏されている。何という度胸だろう！何よりも感動を呼ぶのが、常にオーディエンスと一緒に唄おうという対話を前提に作られている事で、この「唄」こそが「ASSOLO（一人）」と「ASSIEME（仲間）」の懸け橋になっていることが素晴らしい。 （片山）



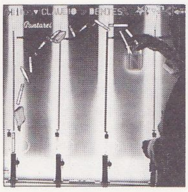
CLAUDIO BAGLIONI
Oltre
'90
●CBS 466135
○CBS 466135 2
◉

'88年にP.GABRIEL主催のアムネスティーに参加した事によって、ガブリエル・ファミリーのミュージシャン達と知り合った事が最高の刺激となった様で、4年振りでCD2枚組というヴォリュームで登場したのが本作である。全曲共完成度が高く現在のイタリアン・ポップス・シーンに多大な影響を与えた様だ。そして、MANU KATCHE、TONY LEVIN、DAVID RHODES、DAVID SANCIOUS、JOHN GIBLINといったミュージシャンに囲まれ、更にN'DOUR、PINO DANIELE、MIA MARTINI、DIDIER LOCKWOODという超豪華ゲスト陣を迎え、正にイタリアン・ポップスの金字塔的アルバムを作ってしまった。尚ヨーロッパや日本では一枚ものに編集されて残りはシングルのB面になったり、又スペイン語盤（SONY CDZ-80787）も発売された。 （片山）



CLAUDIO BAGLIONI
Assieme
'92
●Columbia 472069
○Columbia 472069 2
◉

大好評だった「OLTRE」を引っ提げて、バリョーニは長期国内ツアーを行なったがそこで録音されたのがこのライヴ「ASSIEME」（92年）である。初回のみライヴ写真のスリーヴで、「STRADA FACENDO」がシングル・カットされた。バリョーニのライヴ・アルバムはこれで3作目だが、選曲・演奏共にこれがベストだろう。彼がCBSに移籍してからの名曲がずらりと並んで、差し詰めライヴによるベスト・アルバムとしてとらえても良い。同じ年にジェネシスがライヴを二枚に分けて出した事に刺激されたのか、バリョーニもアンコール・ツアーを行ない「ANCORASSIEME（COLUMBIA472774）」として暮れに発売した。尚「ASSIEME」ではベースがトニー・レヴィンだったが、こちらではジョン・ギブリンが担当している。 （片山）



CLAUDIO DENTES
Pantarei
'78
●Mirto 6323 752
○
◉

'55年、ロンドン生まれのギタリスト。これが唯一のアルバムになる。同レーベルのカルナシャリアと並ぶ意欲作。ペペ・マイナに通じる内容がある。地中海民族音楽を下地にし、ac-gを中心にしたサウンドを程良くエレクトロニクス処理して、とてもコンテンポラリーな響きに変調している。バンド形態の演奏部をも含めて、たおやかな流れがあり、これが土臭さに向かわずイマジネイティヴな広がりになる点では、マイク・オールドフィールドが、トラッドをエッセンスとして扱い夢想化した作業に似たニュアンスを感じさせる。地味な作風だがとても音楽的な地道な作品である。この後、Alberto FortiらとMERCENARIESというバンドを組み、ライヴ活動したそうだが、アルバム製作をしたかどうかは不明。 （松本）



CLAUDIO FUCCI
Claudio Fucci
'74
●Trident TRI 1007
○
◉

セラミスやオスパ・アヴァントラ等、少数先鋭だけにかつては相当な話題になったトリデント・レーベルの中で、唯一忘れられている1枚が、このアルバムである。それもうなずけるか、派手なアレンジや感情表現の大きなイタリアにあって、このアルバムは地味過ぎるからだろう。プロデュースがEugenio Finardiとなれば、それも納得できるところか。実際はピアノがいい感じで入っていたり、耳を凝らすならアコースック・ギターのアルペジオ響いたりもするのだが、声質がべたつき気味なうえ癖のある歌い方をするので、歌詞のわからない我々には少しそりが合わないのかもしれない。Maurizio Montiの2nd等に近い。MAADの中心人物、Attilio Zanchiも参加している。（松本）



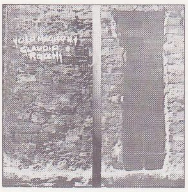
CLAUDIO MATTONE
Un Uomo Da Buttare Via
'75
●RCA TPL 1-1102
○
◉

アルバムの冒頭がプログレッシヴな展開で始まるのでびっくりさせられるが、トータルイメージはそれ程派手なものではない。しかし、いくぶんしゃがれた声で歌われる淋しげなメロディーや、ストリングスの寡黙な流れに無垢な男の情熱を感じ、アップテンポの楽曲の中に往年のイタリアン・ロックのエナジーを発見したりと様々な楽しみ方を提供してくれる。マットーネは作詞、作曲、アレンジ、キーボード、ヴォーカル、ギターを担当するという多芸ぶりで、単に歌を歌うだけではなく、作品自体が彼の監視下で練り上げられたという感が強い。これはという佳曲がないのが残念だが、全体的に一定の水準は保っている。（山崎）



CLAUDIO ROCCHI
Viaggio
'70
●Ariston AR/LP 11020
○
◉

1970年というイタリアン・ロック黎明期に発表された1st。基本的にはギターによる弾き語りだが、時代を反映してか、SEやエレクトロニクスを導入した実験的な試みも見られる。特にオープニングでのテープの逆回転やリズム・ボックスの使用・無調的な弦の響きなど、驚く程プログレッシヴな感覚を披露してくれる。時代を考えると完成度の高いものである。またロッキは後にインド音楽への傾到を強めていくのだが、すでにタブラを使った東洋志向の曲も聴くことができる。そのやや線の細い内省的で醒めた歌声は他のカンタントーレと一線を画す独特のものだ。なお、マウロ・パガーニが数曲で参加しており、その美しいヴァイオリンとワイルドなフルートを聴かせてくれる。（高森）



CLAUDIO ROCCHI
Volo Magioo N° 1
'71
●Ariston AR/LP 12067
○
◉

観音開きの白黒ジャケットに包まれたクラウディオ・ロッキの、これは2ndアルバムである。彼のサウンドは正にプログレッシヴであり、エレクトロニクスに興味を示した後期の作品よりも初期の唄を大切にした作品の方がイタリア然とした美しさを伴って我々には親しみ深い。この作品はサイケデリック／プログレッシヴロックからの影響がロッキ自身の中で昇華され、混沌と静寂が一つになり、それでいて美しく、親しみ易いメロディーに仕上げられている。特にタイトル曲は、カンタウトーレの中では異色の19分にも及ぶ作品で、唄を中心にギター、コーラス、ピアノ、メロトロンらが絡み合いながら少しずつ感情が高揚し、登りつめるという構成になっている。（土川）



CLAUDIO ROCCHI
La Norma Del Cielo
'72
●Ariston AR/LP 12088
○
◉

前作では天駆ける熱唱を聴かせてくれたロッキだが、再び本来（?）の幾分醒めた思索的な歌声に戻っている。ロッキの感性はさらに磨きがかかり、それは美的なるものへ全て注がれている。ピアノやアコースティック・ギターの静謐なる響きは、水面に落ちる水滴が波紋を拡げていくように聴く者の内面へ共鳴していく。メロトロンやヴァイオリン、コーラス等を効果的に使った1曲目は、深い森に木霊するかのように美しさを湛えた深淵なる曲だ。そして思索の奥深い森を彷徨うリスナーは、ラストの春の訪れを感じさせるような幾分明るいタイトル曲で、天へゆっくりと飛翔してゆく天使達の幻影を見るだろう。ロッキの繊細で鋭敏な感性の生んだ心洗われる初期の傑作。（高森）



CLAUDIO ROCCHI
Essenza
'73
●Ariston AR/LP 12112
○
◉

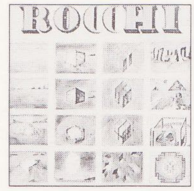
この4作目も音の響きを大切にした非常に美しいアルバムだ。だが前作の静謐な味わいとは対照的に、シンセサイザーやエフェクト類の多用によじ明るく艶やかなサウンドへと変化している。太陽の恵みに感謝し、月の光に酔い痴れるかの様な自然崇拝が感じられる。それは内ジャットやタイトル曲での娘（と思われる）とのおしゃべりからも窺えるように、家庭を持った喜びを何よりも表現しているだろう。タブラを始めとするパーカッション類の頻度が高いが、それがほのかに大地の香りを運んで来る。B①のような極めて躍動感に満ちた祝祭（ハレ）の喜びを全身に表わしたかのごときサウンドは新境地だ。オザンナのエリオ・ダンナがサックスとフルートで参加している。（高森）



CLAUDIO ROCCHI
Il Miele Dei Pianeti Le Sole Le Api

'74
●Asiston AR/LP 12135
○
◉

風が吹くままに水が流れるままに、より自然との合一感を表現した5th。空に舞い上がり畳の流れに身をまかせるかのように軽やかで静涼感に満ちている。音響効果はさらに冴え渡り、ロッキの歌声は本当に気持ち良さそうだ。この感覚は自ら手がけたジャケットに端的に示されているように宗教的な法悦感か、それともドラッグによるものなのか判断仕難いが、少なくともロッキは天国を見たのだろう。しかし、このまばゆいばかりの豊饒感に溢れる音を聴いていると、何か地に着いていない不安定さも見受けられてしまう。アルバムの出来は悪くないのだが、物足りなさも感じるのだ。それは恐らく、現実感の希薄さからロッキの姿が見えにくくなってしまっているからではないだろうか。（高森）



CLAUDIO ROCCHI
Rocchi

'75
●Ariston AR/LP 12279
○
◉

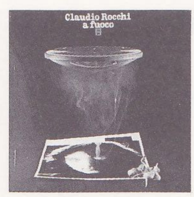
これまでのアルバムに散見していたロッキの東洋志向とエレクトロニクスへの興味が結実したアヴァンギャルドな作品。パオロ・トファーニ、エリオ・ダンナ、フランコ・バッティアートなど多彩なゲストを迎えての1曲目〝Zen Session〟は、とりとめもなく現われては消えてゆく情景の音による綴れ織りといった感じだが、瞑想的かつゆらぎの空間が繊細な感覚で表現されていて興味深い。このゆらぎはアルバム全体に流れている感覚で、時にはエレクトロニクスで、時にはコーラスで、時にはバラライカなどの民族楽器によって醸し出される。何処となく同時期に発表されたエドガー・フローゼの「アクア」に通じる茫漠とした感じがある。ロッキはギターの他各種弦楽器や鍵盤楽器・パーカッションなどマルチ振りを発揮。（高森）



CLAUDIO ROCCHI
Suoni Di Frontiera

'73
●Ariston AR/LP 12293
○
◉

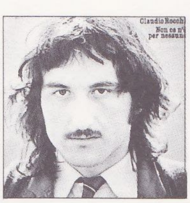
元ストルミー・シックスのクラウディオ・ロッキは、早くから東洋志向や他ジャンルの音楽への興味を持ち、文学通りプレグレッシヴなシンガーであった。夢幻的なナルシスティックな作品群を経て、本作では何とエレクトロニクス、ミュージックへ挑戦している。ミニマル的要素をそこはかと感じるサウンドで彼のセンスが投影されていて感覚的には非常に楽しめる内容だ。彼は従来のシンガーとしてのソロ・ワークの他の、このエレクトロニクス・サウンドやアレアのパオロ・トファーニとのコラボレーションでみせた前衛的な試み等、非常に幅の広いアーティストとして注目する必要がある。（山崎）



CLAUDIO ROCCHI
A Fuoco

'77
●Cramps CRSLP 5451
○
◉

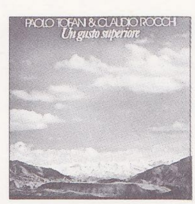
アリストンからクランプスに移籍しての初作。それまでの東洋志向やプログレッシヴな感覚は影をひそめ、一介のカンタウトーレとして出発した作品。オーケストラやフル・バンドといった言わば常道のバック陣を従えて歌うロッキは、叙情派としての新しい側面を見せながらも、ホーン・セクションの鳴るポップな曲など今一つそぐわない面もさらけ出している。また一部でエフェクトによるお遊びも見られるが必然性を感じない。それでも1、3曲目での優雅なオーケストラを配して語りかけるように一語一語かみしめて歌うロッキの内なる情熱は充分伝わって来る。このアルバムで初めて気が付いたが、ロッキの唱法はティスト・スキパJrに近い。ただ理性でコントロールされている分、ドライな感じがする。（高森）



CLAUDIO ROCCHI
Non Ce N'e Per Nessuno

'78
●Cramps 5202 452
○
◉

ロッキの最もポップなアルバムである。シャウトして歌うロッキに、最早初期の内省的な翳りなど見る影もないが、A③、B④など彼独特の繊細な節回しには幾分救われる。だが一枚通して聴くにはつらいものがある。乗りが軽過ぎる。アレンジも平凡だ。プログレッシヴ・ファンに薦められるものは何も無いと言ってしまっては実も蓋もないが、この時期のロッキの対象としているものが見えて来ない。ヒット性があるとも思えないし、深く掘り下げた思想性も感じられない。例によってパオロ・トファーニがギターとシンセサイザーで参加しているが手慰みでしかない。ついにロッキの感性も擦り切れてしまったとしか思えない。はっきり言って駄作だ。（高森）



PAOLO TOFANI & CLAUDIO ROCCHI
Un Gusto Superiore

'80
●Iskcon KC108003
○
◉

裏ジャケを見ると僧侶になって微笑むロッキの姿があり驚かされるが、どうやら本当に僧侶になってしまったらしい。表ジャケットの雄大な大自然の風景写真と合わせて考えるとこれは瞑想的な仏教音楽でも演っていそうだが、完全に肩透しである。軽快でポップな曲とフォーク・タッチの曲が並ぶ。1曲目など歌い方も声も別人のようだ。聴くのがつらい曲もある。唯一の救いはラストの大曲で、インド風のメロディとパーカッションを多用したほのぼのとしたクリシュナ賛歌を聴く事ができる。しかしインパクトは無い。初期の真理を希求するかのような切々とした歌声と僧侶となっての淡々とした無表情な歌声は、ロッキという一音楽家にどう重なり合うのか。ロッキは真理を見い出し得たのだろうか？（高森）



CLAUDIO SIMONETTI
Claudio Simonetti

'81
●Banana PLBAN 5033008
○
◉

ゴブリンのクラウディオ・シモネッティが81年にリリースした1stソロアルバム。彼はこの他にもソロを出しており、また同じゴブリンの主要メンバー、マッシーモ・モランテのソロアルバムも存在するが、本作が最も出来が良い様に思われる。美しいピアノで幕を開け、ストリングスがフォローするオープニングは透明感溢れる作風を象徴するかの様であるが、全体としては現代的な軽いタッチで仕上げられており、また女性ヴォーカルを取り入れたかなりポップなメンバーも含まれるなど往時のゴブリンを知るリスナーには若干物足りないかも知れない。しかしB面ラストには、あの名曲〝Profondo Rosso〟が収録されており(もちろん別テイク)、感動的な終幕が約束されている。最近はハウスの作品もリリースしている。　(江田)



CORRADO CASTELLARI
Gente Cosi...

'75
●Ricordi SMRL 6181
○
◉

'73年には、今は亡きリフィ・レーベルに「Cioe...Voglio Dire(Rifi RDZST S14225)を1stとして残したコラード・カステラーリは、'75年、リコルディに移籍してもう一枚アルバムを制作した。本作である。このアルバムのバックを努めるのは全員マクソフォーネのメンバーである。彼等のアルバム制作と同年ということもあり、プログレッシヴな演奏を期待するだろうが、ここでのマクソフォーネは歌のバックということを考慮してか、オーソドックスな演奏である。部分のソロにマクソフォーネらしさが現われる程度だ。コラードの歌は情熱的に高揚するタイプではないが、思索的な歌い込むもので味わいがある。1stも良作だ。　(山崎)



D'ALESSANDRO
L'Aeroplano

'73
●Cinebox SC15
○
◉

チェリー・ファイブとサントラで有名なチネボックスから'73年という怒濤の時代に、その名もニューサウンドシリーズとして出たGIULIO D'ALESSANDROのたぶん唯一の作品は、一言さわやか。人なつこいポップなメロディーは、この時期のイタリアではなかなかお目にかかれない。しっとりした曲想(ボサノバの影響か、B①のタイトルはその名もJOBIM)、やさしい歌声(高音もきれい)、そして何と言ってもメロディーが。それにからむオーケストラとの相性もいい。バックはヴィンチェ・テンペラ、マッシモ・ルカといったところが控えめにこなしてる。オーケストラがきれいなA①、②、④、B②、④、⑤が好きだが他の曲もいい。で、結局全部いい。純粋歌物として満点。　(渡辺一巳)



DALLAGLIO
Sera-Mattina

'72
●LOVE 5360 001A
○
◉

ジャンニ・ダラリオはIL VOLO加入前の72年、自らのバンドを率いて本作を発表している。内容的にはプログレというよりも歌物としての色彩が濃く、カンタウトーレの一連の人気作に劣らぬ出来栄えを誇っているが、ストリングス等で盛り上げていく叙情派タイプとは一線を画す。きれいなメロトロンや彼自身が奏でるピアノを絡ませながら、あくまでもヴォーカルパートを中心に据え、非常にマイルドな仕上がりを見せている。作曲は全て彼が手掛けているが、キーボードばかりを突出させた安易な〝泣き〟に走る気配もなく、曲の端々ににじみ出たセンスの良さは目を見張るものがある。もっとも一流セッションマンの彼がこの程度の作品を作り上げるのは朝飯前?のことだったかも知れない。　(江田)



DARIO BALDAN BEMBO
Aria

'75
●Come Il Vento ZSCVE 55742
○
◉

1時期エキペ84に在籍したこともある(その頃のエキペは頭に〝Nuova〟とつけていた)アレンジャー、作曲家としても一流のミュージシャン、ダリオ・バルダン・ベンボのソロ・デビュー・アルバム。3rdの「Migrozione」と並ぶ彼の代表作と言える傑作で、美しいメロディーに彼の操る様々なキーボード、オーケストラに女性コーラス、ロックの持つ躍動感と、幻想的で甘美なサウンド、どれを取っても熱く、ゴージャスであり聞く者をうっとりとさせてくれる。3rdに比べると幾分派手さで劣るが、その分彼の本質にふれることができる。タイトル曲である〝Aria〟はヨーロッパ系のイージーリスニング・オーケストラがこぞって取り上げた名曲。　(木下)



DARIO BALDAN BEMBO
Crescendo

'76
●CIV ZSCVE 55744
○
◉

ダリオ・バルダン・ベンボは'75年のこのアルバムにして非常に洗練されたトーンを打ち出している。「Migrazione」のそれに似て実に爽快だ。アレンジャーとしても既に知られる人だが感覚的には'80年代を先取っている。ポップなメロディとタイトなリズムもすっきりとラインが通り、間奏部では教会オルガン張りにキーボードが鳴り響く、或いは真青な大海原を見降しながらゆったりと遊泳するように波打ち続ける、といった曲想やその音響効果が群を抜いている。透明感の強いトーンに浸み入っている郷愁感が、新鮮で爽快極まりない。音の広がりが違う。またシンガーとしての素質もキーボードやアレンジに劣らず冴えたものを持っている。比較的ポップな曲が多いが、次作と並らんで彼を代表する1枚にあげたい。　(松本)



DARIO BALDAN BEMBO
Migrazione
'77
●CIV ZPLC34013
○
◉

ダリオ・バルダン・ベンボは、キーボーダー、アレンジャー、ソロシンガーとして幅広い活動をしている才人で、又、作曲家としても一流のミュージシャンである。レコード・デビュウは'75年にリリースされたアルバム「Aria」で、本作は'76年の「Crescendo」に次ぐ3枚目のソロ作品である。美しいキーボードをバッグに切々と歌うファーストも魅力的な好作品であるが、最もシンフォニックで印象的な曲の多い本作こそが彼の最高作である。多種のキーボード、生のオーケストラと色彩豊かなバックに天才的なひらめきのメロディー・ラインわのせられる様は筆舌に尽くし難く、情熱的であり、又甘能的であり、上質のイタリアン・サウンドが楽しめる。（山崎）



DARIO BALDAN BEMBO
Dario Baldan Bembo
'79
●Polydor 2448097
○
◉

ダリオ・バルダン・ベンボは自らがキーボーダーでもある為か、イタリアらしい情熱的な曲をぶ厚いキーボードでおおう、いわゆるシンフォニック・ロック的なアプローチの作品を多く制作しているので、シンガーの作品だからといってユーロ・ロック・ファンは無視しないようにしてもらいたいものだ。これも彼の全盛期の1枚。アレンジを、バロック的なイメージを出すことで定評のあるジャン・ピエロ・レヴェルベッリに委ね、その情熱的なイメージには拍車がかけられている。本当にイタリアらしい叙情を聴くことができる作曲として、特に往年のイタリアン・ロック・ファンに推したい作品。（山崎）



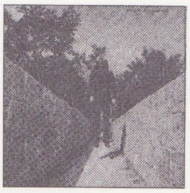
DARIO BALDAN BEMBO
Spirito Della Terra
'82
●CGD 20328
○
◉

イタリアのシンフォニック・ロック・ファンは、このダリオ・バルダン・ベンボの作品群ばかりは注意したほうがいい。何故なら、彼は作曲/アレンジをこなすばかりでなく、キーボーダーとしても一流のミュージシャンであるから、他のポップス系アーティストと比べてキーボードの使用度が高いのである。目のさめるような、抜けたアレンジと演奏で、しかもイタリア的に感性で創られた作品群で、どの作品も高水準だ。ルチオ・ファブリ、マルチェラ・ベッラ、リッカルド・フォッソ等々、多くのゲストを迎えて、自然いっぱいのスタジオで実にのびのびと創られたイメージの作品。（山崎）



DARIO BALDAN BEMBO
Etereo
'82
●CGD 25034
○
◉

'70年代から現在までのイタリア歌謡シーンを支えてきた重要人物の一人。ミュージシャンとしての出発点は、アドリアーノ・チェレンターノのレーベルであるクランでオーケストラのキーボーダーを務めたことだった。そのオーケストラのアレンジャーは映画音楽の仕事でも有名なアウグスト・マルテッリで、彼の影響を受けアレンジャーとして活躍するようになった。'71年にはエクィプ84の一員としてサンレモ音楽祭に出場。しばらくは作曲者としても活動していたが、シャーリー・バッシーによって"Aria"が国際的ヒットとなってから大物カンタウトーレとして知られるようになった。当アルバムは彼の作曲したヒット曲を集めたインスト集。正式にはBANBO'S ORCHESTRAのアルバムとなっている。（HIRO TANAKA）



DAVIDE SPITALERI
Uomo Irrengolare
'80
●Ciao CIA 1004
○
◉

メタモルフォーシのヴォーカリスト、ダヴィデ（ジミー）・スピタレッリのソロアルバム。針を落とすと間もなく彼の歌声が聞こえて来るが、かすかにヴィブラートのかかった独特の唱法は昔のままだ。しかし作品の内容は典型的なカンタウトーレ路線、プログレとはすっかり縁を切ってしまったらしい。7年間の空白については推測するしかないが、タイトル曲などでは現代風のアレンジもすっかり板に付いており、見事な変貌ぶりと言ってもいいだろう。もちろん歌物としては水準を超えた出来で、かつては余り聴かれなかった高音域で畳み込む歌唱が冴える。数曲でM.パガーニの弾くヴァイオリンが聴かれるが、かつてのバンド仲間の参加は無い。なお彼はニックネームの"Thor"名義でも作品を発表している。（江田）



DEMETRIO STRATOS
Metrodora
'76
●Cramps CRSLP 6205
○Cramps CRSCD 065
◉

デメトリオ・ストラトス――1945年4月22日、エジプトに生まれる。アテネのコンサルヴァトワールでピアノとアコーディオンを学び、'62年イタリアに渡る。'72年にAREAを結成。'79年6月、ニューヨーク記念病院にて白血病のため死亡。志し半ばで逝ってしまった彼のことを思うと、今も心が痛む。彼は間違いなくイタリア音楽界の最重要人物だったのみならず、世界の前衛音楽シーンにおいても最重要人物だった。AREAのメンバーは皆前衛音楽に深い見識を持っていたが、中でもストラトスが実践して来た実験は本格的だった。本作では彼の声による多重録音を駆使した多様な実験が繰り広げられている。パオロ・トファーニもシンセサイザーで参加しているが、これは声の変調に使用されているようだ。（坂本）



DEMETRIO STRATOS
Cantare La Voce
'78
●Cramps 5206 119
○Cramps CRSCD 119
◉

D・ストラトスはジョン・ケージに傾倒し、'78年にはケージに招かれ、ニューヨークでマース・カニンガム・ダンス・カンパニーと共演。アムステルダムやパリではケージとともにコンサートに出演した。そんな彼が真剣に取り組んでいた声の研究成果はこのアルバムにも刻まれている。『Metrodora』は声による音楽の形態への関心が見え隠れし、その分複雑な様相を呈していたが、それに対しこのアルバムは明快に声そのものをテーマにしている。モンゴルの伝承音楽、ホーミー(hormie)で知られる、同時にふたつの声を発する特殊唱法の可能性を極限まで追求した作品だ。一部ライヴ音源も含んでいる。もしストラトスの実験音楽に興味があるなら、まずは判り易い本作をお勧めしておきたい。 (坂本)



DEMETRIO STRATOS
LUCIO FABBRI
Recitarcantando
'80
●Cramps CRSLP 5206 501
○
◉

D・ストラトスの死後発表された1978年の貴重なライヴ音源だ。後にPFMに加入するルチオ・ファブリ(vln)とのデュオというのが意外かも知れないが、ふたりの相性は非常にいい。ストラトスは勿論声に徹しており、ソロ・アルバムの実験成果を応用した歌唱を聴かせる。ソロ・アルバムの曲も採り上げる中、AREAのナンバー、〝Cometa Rossa〟(『Caution Radiation Area』1曲目)や〝Return From Workuta〟(『1978』3曲目)の原曲(?)までたったふたりで演奏してしまう。ファブリのプレイは乾いた哀愁とトラッド色のあるもので、不思議なほどストラトスの声と響き合い、しみじみとした表情を演出する。アヴァンギャルド・ミュージックを敬遠していると聴き逃してしまう名演。 (坂本)



DONATELLO
Il Tempo Degli Dei...
'75
●Intingo ITGL 14004
○
◉

1947年トルトナ生まれで本名のジュリアーノ・イリアーニでも'78年にアルバムを出している。兵役中に当時のポップ・スターのジャンニ・モランディと親しくなり、デビューのきっかけとなった。'70年代前半はサンレモ音楽祭の常連で入賞もしている。デビュー当時はカヴァー曲を多くアルバムに収めていたが、その後EQUIPE 84のリーダーのマウリツィオ・ヴァンデッリの協力を得て、メロディアスな歌を得意とするようになった。当アルバムはリコルディから移った彼が本格的にカウンタウトーレとして再出発を目論んだもの。リッキー・ジャンコのプロデュースで、彼の作曲したラストの〝Sogno〟はシングル・カットされたプログレッシヴな曲。全体的には地味ながら有名人が参加している。Roxyはロッサナ・カザーレのこと。 (Hiro Tanaka)



DONELLA DEL MONACO
Dodici Canzoni Da Battelo
Su Melodie Veneziane Del Settecento
'77
●Italia ITL 70030
○
◉

「18世紀、ヴェネツィアの12の舟唄」、これがオパス・アヴァントラ、トリデント〜スオノ時代以後、彼女の初の作品だった。既に知られているように今世紀最高の、また〝カントの帝王〟と云われた人物、マリオ・デル・モナコの姪に当る彼女らしい内容である。一方でオパス・アヴァントラの前衛に興味を持ち、本来は声楽教育を受けた筋の彼女だけに、むしろソロ活動こそ自身の中心フィールドなのだろう。その彼女は積極的にヴェネツィアをとり挙げる。次作を除くと全てそうだ。視点としては古楽に近い。歌う事と同時に伝統を伝える作業をしている。そこにこだわる彼女の意思は学究的なものと愛着を兼ねているだろう。歌い回しがバンドの時とよく似ている。彼女の特徴だ。隠やかな曲が多く弦楽器がサポートする。 (松本)



DONELLA DEL MONACO
Schonberg Kabarett
'78
●Cramps 5207305
○Artis ARCD 012
◉

'82年に亡くなったイタリアの名テノール、マリオ・デル・モナコの姪であるドネラ・デル・モナコのソロ・アルバム。彼女はオパス・アヴァントラの一員として'74年と'75年にそれぞれアルバムを発表したが、その後バンドは解散してしまう。以後、ITALIA、CRAMPS、HOLLYと3枚のソロ・アルバムを制作し、また、イタリアの現代音楽家の作品を集めた「Musica Contemporanea」というチェトラから'80年に出た2枚組でも一曲、ソプラノを担当している。本作はシェーンベルクが20代の時に書き下ろしたロマン派の色彩の濃い作品集である。この作品は後にCD化されているが、LPの片面分がオリジナル・アルバムからのもので残りは新しいソースから成っている。最近は新生オパス・アヴァントラの録音にも参加している。 (山崎)



DONELLA DEL MONACO
Il Carnevale Di Venezia
'85
●Holly HR 26706
○
◉

「Schönberg Kobarett」に続くドネラ・デル・モナコのソロ第三弾。今回は彼女の生まれ故郷のヴェネツィアで18世紀から19世紀にかけて活動した作曲家(複数)の作品を歌っている。前半はリズム感のあるピアノをバックにクリアーなソプラノ・ヴォイスでかなりシリアスに、後半はフルート、ギター、チェロのメロディアスな演奏を受けてかなり演劇的に、また、ややポップに歌い上げている。ここで聴くことの出来る音楽はオパス・アヴァントラのようなロック色は全くないし、前作のようなクラシックとしてはポップな感覚もない。しかし彼女の作品をずっと聴いてきた人達の何人かはきっと共感出来るだろう。それは我々と接点を持つ彼女の内側から涌き出てくるものの成せる業なのであろうか。 (賀川)



DONELLA DEL MONACO
Canzoni Veneziane
'93
●
○Artis ARCD 054
◉

早くからヨーロッパ芸術の中心として栄えたイタリアは、様々な造形美術、もしくはその影響が現在に至るまで息づいている感があるが、音楽においてもそれは、いわゆる「シリアス・ミュージック」からの人脈、またはディスコグラフィーの連なりが他国（ドイツ、フランス等）に比べ顕著であり、一つのシーンを形成している事だ。そうした代表例であるドネラ・デル・モナコの'93年の作。18世紀のヴェニスの香り漂う小作品を時にバロック期の楽器を従え、彼女は充実した技量で再現している。まさにこれが当時のポピュラー音楽だった事も考えれば、イタリアン・ロック～カンタウトーレ系のファンが本作に親しむ事は決して難しくない。（山田）



EMILIO LOCURCIO
L'Eliogabalo
'77
●Una Sors Coniunxit ZPLU 34023
○
◉

派手なイラストカヴァーに包まれたエミリオ・ロクルチォ名義のアルバム〝レリオカバーロ〟は、彼自身の他、ルチオ・ダッラ、テレサ・デ・シオ、クラウディオ・ロッリを配役に据えたオペレッタが収録されている。イタリア語で早口にまくし立てる唱法が好みを別つ感があるが、非常に完成度の高いプログレッシヴ・ロックが聴かれる。Pierrot Lunaire, Crash, Odeonの3グループがバックを務めているが、注目のPierrotは主にアコースティック・パートを担当、ピアノやメロトロンの奏法に面影を伺い知ることが出来る。が、彼らの演奏ばかりを前提とした評価はこの際避けるべきだ。どのパートに針を落としても、ズッシリとした確かな手応えは同じなのである。'70年代後期を代表する好作品と言えるだろう。（江田）



ENZO CAPUANO
Storia Mai Scritta
'75
●Divergo DVAE 002
○
◉

Mario Panseri参加のこのアルバムはアコースティックで地味な印象が強いサウンドである事にも拘わらず、聴く度に、新鮮な感動を与えてくれる。別段キーボードが縦横無尽に飛びまわる訳でもなくむしろその役割は色彩を添える程度に止まっているのだが、それでも尚、全編を包む言葉にならぬ余情と奇妙な温もりはCapuano自身のボーカルとPanseriの素晴らしいアレンジ能力に因るのだろう。8つのパートに分けられ、トータル・アルバム的色合いの濃いこの作品は、ボーカリストのアルバムであり乍、極端にボーカルパートを抑え、その展開の妙、構成力には驚きを禁じえない。（鈴木　伸一）



ENZO STAVOLO
Nel Villaggio Di Saint Cloud
'80
●BCE BCC 38600
○
◉

かつては〝Fiaba Poporale〟のシングルのみが知られていたエンツォ・スタヴォーロ。その内容の素晴らしさからLPの存在が気になっていたが、一枚のみが確認された。これは80年発表の作品でシングルの曲も収録されている。（但し、アレンジの異なる別テイクである。）シングルがメロトロンとオーケストラの使い分けによる見事な仕上りなのに対し、LPの方は、より新しい感じにアレンジされていて洗練し、さわやかになった分だけ心の奥深くにしみ入るような説得力が少なくなった。それでも十分に一級品であり、ファンタジックなジャケットデザインも内容と良くマッチしていて、イタリアの片田舎の小さな村の情景をかざらずにそのまま伝えてくれる好作品。（土川）



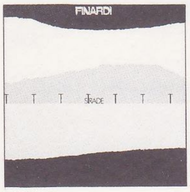
ERMANNO DE BIAGI
L'Albero Della Pazzia
'79
●Polydoy 2448082
○
◉

先ず断っておくが、シンフォニック・オンリーという人は避けた方が良いかもしれない。しかしここで聴かれるサウンドは充分プログレッシヴな意欲に満ちたものである。極端にイタリア的で、まるでイタリアの片田舎にでも放り出されたかのような音作りは、その根本に於て、かのBranduardiやR.De Rmioneらと同位の次元から表出されたものなのだろう。総勢10名にも及ぶミュージシャンが創出する世界は一見派手さからは縁遠い。が、温かく渋みのある彼の唄声と美しいオーケストレーション、決してロックの魂を失わないバックの演奏は、奇妙な整合感としっとりした情懐を伴ない胸を打つ。それにしても彼自身の弾くピアノは美しく、邪心なく静寂を伴なう。（鈴木伸一）



EUGENIO FINARDI
Sugo
'76
●Cramps 5205-152
○Polygram 8464632
◉

現在も活躍中のカンタウトーレの一人。デビューはヌメロ・ウーノで、このアルバムはクランプスに移籍してのファースト。バックを全面的に盛り上げているのはアレアのパトリツォオ・ファリセリ、パオロ・トファーニ、アレス・タヴァラッツィの3人でこれにルチオ・ファブリ、アルベルト・カメリーニ。ルチオ・バッティスティもよく起用する売れっ子スタジオ・ミュージシャン、ウォルター・カッローニとヒュー・ブレン等の豪勢なゲストが参加している。タイトルの「SUGO」とはスパゲッティ・ソースの商品名。詩の面ではフランチェスコ・グレゴーリの様なプロテストソングのタイプだが音楽的には日本でもイタリアでも彼自身の最高作と評される程の実力を充分に発揮した快作。
（いわね）



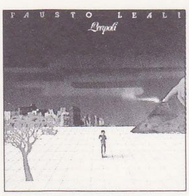
EUGENIO FINARDI
Strade
'83
●Fonit Cetra LPX125
○
◉

エウジェニオ・フィナルディというと、アレアのメンバーが参加した「SUGO」が有名だが、その後のアルバムは日本ではほとんどといっていい程無名である。これは'83年の11月に録られたライヴ作品。当時、非常に新感覚派のポップスとして印象に残った記憶がある。レゲエのリズムを取り入れたり、センスの良いバック(ベースは元イル・ヴォーロのボブ・カレロ)によって洗練されたイメージのポップスに仕上げられている。唱法はどこかティト・スキッパJRに通じるものがある。 (山崎)



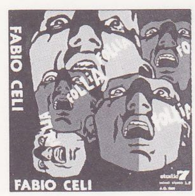
FAUSTO LEALI
Amore Dolce, Amore Amaro, Amore Mio
'75
●CBS 69173
○
◉

カンタウトーレであるファウスト・レアーリが、バックをセカンド・アルバムを出した当時のイル・ヴォーロに託したアルバム。レアーリは他にも「LEAPOLI」等数枚のソロ・アルバムがある。独特のしゃがれ声を持つレアーレとイル・ヴォーロのサウンドは見事に一体化して生き生きとした印象を受ける。特にタイトル・チューンであるA③が典型的な例といえるだろう。B面ラストではイル・ヴォーロのみのインストゥールメンタル・チューンが収録されているが、恐らくこの曲はイル・ヴォーロのセカンド・アルバム録音時に於ける未発表テイクであろうと思われる。ラディウスの12弦ギターが印象的である。尚、旧国内盤にはアルバムの未発表テイクが収録されていた。(山崎)



FAUSTO LEALI
Leapoli
'77
●CGD 20011
○
◉

「Amore Dolce～」でイタリアン・ロック・ファンに知られている彼の次作に当たるもの。'70年代前半のフィリップス時代から、そのしゃがれ声を聴かせていた彼もCGDに移り、ロック系ミュージシャンをバックにしてよりその声に張りを感じさせる。このアルバムも前作に続いてアルベルト・ラディウスが参加し、更に約半分の曲では替ってステファノ・プルガ(kbd)がバック・アップ、一層の彩りを見せる。前作以上にタイトなサウンドになり、力強い。CBS/CGDにありがちな大掛かりなストリングス・オーケストレーションはなく、彼の歌で聴かせる。それ程、手助けを必要としない個性のあるカンタウトーレである。辛口だ。熱唱する彼の歌をぬうように出てくるラディウスのあのトーンも存分に聴ける。 (松本)



FABIO CELI
Follia
'73
●STUDIO 7 LP1101LG
○
◉

Fabio Celliなる人物については、この自主制作による作品以外には何等知る術も無いのが残念だが、INFERMIERIというグループと共に創出したそのサウンドは、ダイナミズムとリリシズムの交錯する凄絶なイタリアン・ロックである。魂の雄叫びのような、又時に虚しい呟の如きFabioのボーカルに、彼自身とC.Ciscognettiによるダブル・キーボードが、ミステリアスにスリリングにそしてクラシカルにと変幻自在に絡み付きせめぎあう様は圧巻!逞しい生命力と狂おしい美意識の発露が、何処迄も何時迄も熱く切なく胸を焦がす。傑作である。 (鈴木 伸一)



FABIO CONCATO
Storie Di Sempre
'77
●Harmony LPH 8017
○
◉

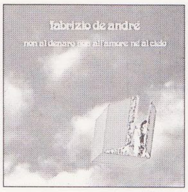
'80年代を代表するカンタウトーレ。今でもしばしばチャートに顔を出すので、日本でもポップス系のファンにはよく知られている。ところが反対に新人時代は程んど知られていない。当アルバムは地味な印象があり、歌詞を重視するタイプのもの。タイトルが示すように普段の物語を淡々と語っていく進行はフランチェスコ・デ・グレゴーリのスタイルにも似ている。ただし、このアルバムを多くのカンタウトーレの作品と十把一からげにできない理由がある。それは、ヴォーロ時代のキーボード・プレイを色濃く反映したヴィンチェ・テンペラのアレンジである。主役がコンカートなので、ヴォーロそのものを期待することは難しいが、4曲程度面白いアレンジを楽しめる。

(HIRO TANAKA)



FABIO FERRIANI
Foto Di Nennuno
'77
●Cetra LPX 55
○
◉

唯一のアルバムだと思う。ジャケットの見開き体裁等がチュトラの一連のバンド作とまったく同じ感触なので、ソロとは言え、なんとなく"Amore"物の多くとは違って見える。どちらかというと地味なカンタウトーレ物ではある。ろくにオーケストラも出て来ない。全曲の作詞/作曲も彼自身。そして控えめなバック・ミュージシャンもなんとなく分っているような演奏だ。このアルバムには安受け合いの泣きがない。曲も派手さには欠けるし、必ずしも歌い上げるわけではない。スタンスとして初期のクラウディオ・ロッキなんかに近いものを感じる。英米で言うシンガー・ソングライターの質なのだ。自作自演する事の痛みと喜びを知っているというか。kbdや弦楽器等のサポート陣の理解も大きい1枚だと思う。 (松本)



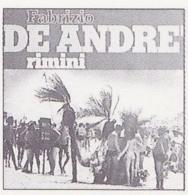
FABRIZIO DE ANDRE
Non Al Denaro Non All'Amore Né Al Cielo
?
●Produttoriassociati PA/LP 40
○Ricordi CDOR 8920
◉

デ・アンドレはとても地味な歌手である。彼に影響を与えたのがフランス・シャンソン界の三大巨匠の一人、ジョルジュ・ブラッサンであることも一つの要因になっているようだ。彼は後期ジェノヴァ派カンタウトーレに属し、現在まで歌詞を重視する傾向は変わりがない。そのなかでもコーラスやストリングスを加えた当アルバムが、サウンド面において最も充実した内容になっているように思われる。最大の貢献者はアレンジャーのニコラ・ピオヴァーニで作曲にも手を貸している。ピオヴァーニは現在イタリア映画界で多くの仕事をこなしており、最近のフェリーニやタヴィアーニ兄弟の作品などの音楽も担当している。 (Hiro Tanaka)



FABRIZIO DE ANDRE
Vol. 8
'75
●Produttoriassociati PA/LP 54
○
◉

'75年の作品。タイトルの通り8作めにあたる。彼はデビュー以来このプロダットリアソチアティでアルバムを出し続けて来た。ここまでの作品は1st「Tutti Morimmo a Stento」(PA/LPS32)、2nd「Fabrizio De Andrè」(同33)、3rd「La Buina Novella」(同34)、4th「Fabrizio De Andrè」(PA/LP39)、5th「Non Al Denaro Non All' Amore Nè Al Cielo」(同40)、6th「Storia Di Un Impiegato」(同49)、7th「Canzoni Di Fabrizio De Andrè」(同52)、である。アコースティック・ギター中心の彼の曲は、ブランデゥアルディ的だが、さらに地味で素朴な響きを持っている。ヴァイオリンやフルートの調べに導かれる〝Oceano〟、〝Giugno '73〟、ライブでクライマックスに演奏されていた〝Amico Fragil〟などはとりわけ輝いている。 (城元)



FABRIZIO DE ANDRÉ
Rimini
'78
●Ricordi SMRL 6221
○Ricordi CDOR 8897
◉

「リミニ」とはイタリアの観光地の名で、夏には多くの人々が訪れるのだそうだ。〝リマール〟というレコード店を訪れるために同地へ赴いた事のある熱心な収集家氏も多いのではないか。本作はリミニに集う人々の様々な表情を淡々と歌いあげる様な作風で、彼の有名なライブ('79年1日に収録)の直前作であり、半分以上の曲がそのライブにも収録されている事からもわかる通り、楽曲、演奏ともヴォルテージは高い。バック陣の名前にまだ残念ながらP. F. M.関係の者はないが、レ・オルメのプロデューサーであり、一時そのメンバーでもあったジャン・ピエロ・レヴェルベリ(Key)の名が見える。スリーブは見開きで、各曲ごとのイメージ・フォトを載せた8ページのリーフレット付である。 (城元)



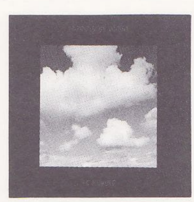
FABRIZIO DE ANDRE + PFM
In Concert Vol.1 2
'79
●Ricordi SMRL 6244
○Ricordi CDOR 8921
CDOR 8431
◉

バック、PFM。ファブリツィオ・デ・アンドレはこの頃大人気のカンタウトーレ。そしてこの盤は当時の成功ぶりをライヴで伝える。PFMは時期としては「Suonare Suonare」の頃。今一つ食い足らなくなってきた時期だが、デ・アンドレ独特の語り並らべるようなヴォーカルを、うまく浮き立つように控えては、ここぞという時に出ながら、好バッキングをつける。チョッチョ、ジヴァス、ムッシーダ、プレモリ、そして加入直前のファブリ、更にロベルト・コロンボのゲストで、節々に彼等らしい演奏が聴けるので、ファンは心聴。ムッシーダがいいソロを弾いている。一瞬、二瞬、三瞬とPFMになる。「Vol.1」「2」を合わせて選曲は「Rimini」からも6曲と最も多い。少しとっつきにくいデ・アンドレの歌だが、入門編にも最適。 (松本)



FABRIZIO DE ANDRE
Creuza De Ma
'84
●Ricordi SMRL 6308
○Ricordi CDMRL 6308
◉キング KICP24

前作から2年半の歳月を経てリリースされた本作〝邦題:地中海への道程〟はイタリアの地中海音楽に挑んだ意欲作である。ジェノバ出身のアーティストであるデ・アンドレはこのアルバムで正面からジェノバを通した地中海音楽に挑み、何と全てジェノバ方言で歌われているという凝り様。元PFMのヴァイオリニストで、グループ脱退後は地中海音楽の研究家としての活動を続けるマウロ・パガーニと、同じくPFMのフランコ・ムッシーダの助けをかりて制作されたアルバムだ。デ・アンドレとPFMは古くからの交流があるが、彼等のコラボレイションの中で、地中海音楽を現代的に演奏を融合させた本作は最も水準の高いものである。アレアのファン等もこのアルバムは耳にしておいたほうがいい。 (山崎)



FABRIZIO DE ANDRE
Le Nuvole
'90
●Fonit Cetra TLP 260
○Fonit Cetra CDL 260
◉

ファブリツィオ・デ・アンドレは'60年代から地道に活動を続けてきたがこのあたりの作品は、おりしもワールド・ミュージックの流行とシンクロナイズし、そちらのファンの方にも耳にしてもらいたいような作品といえるだろう。彼の作品にはうわついたところがなく、常に誠実に制作された印象が強く、一聴して派手さは決してないが、何度も聴き、彼のサウンドを理解するにつれ、徐々に彼の世界にひきずり込まれていくのである。言葉が1つの障害になっていることは確かだが、時間をかければきっと良さがわかってくれるはずだ。ぜひともトライしてみてほしい。 (山崎)



FEDERICO TROIANI
Strade
'78
●Ricord SMRL 0223
○
◉

元レアーレ・アカデミア・ディ・ムジカのキーボード奏者フェデリコ・トロイアーニの1stソロ。既に往年の流麗なピアノプレイは消えてしまい、標準的なカウントーレの道を歩み始めた様だ。77年にレアーレ時代をほうふつとさせたが、他のソロ作品を聴く限り大勢に変化は無く、昔の演奏形態に戻ることはなさそうだ。バックの演奏が少々スマート過ぎるのが気に懸かるが、そこはA.モンテドゥーロとの共演盤であれ程ファンタジックな内容をのなした実力者、雰囲気作りも心得たもので、切々と歌い上げるナンバーで真価を発揮。たまに奏でられるacピアノ以外は殆どヴォーカルに専念、Sandroのキーボードやコーラス陣が専らバックアップに回る。なおレアーレからの参加はD.Cappa1人だけ。 (江田)



FIORDALISO
Dal Vivo Per Il Mondo
'86
●Durium ms AI 77455
○
◉

日本のSHIHOの杏子と同じく、苗字をつけないフィオルダリーソは、ダミ声のポップ・シンガーですが、いい曲が多いです。代表曲「Non Voglio Mica La Luna」は、日本でも昔、車のCMに使われていました。さて、このライヴ・アルバム、特に有名な人はいませんが、バックがハリキッていて、中でも前述の曲のアウトロなど、スタジオ盤には入っていない5+4拍子のソロがついています。バンコを簡単にした感じです。また、観客の、歓声だけでなく歌声も、所々よく聞こえるのですが、それが女のコばかりで、しかも声が異様に幼いのです。まるで女子中高生の親衛隊のようです。彼女は、本国では「女のコが憧れる。強くたくましい女性」つまり、クラッシュ・ギャルズ的存在なんですね。 (斎藤)



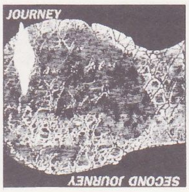
FLAVIO GIURATO
Per Futili Motivi
'78
●Ricordi SMRL 6240
○
◉

参加ミュージシャンの多彩さで期待させておきながら肩透かしを喰うアルバムが多いのだが、この作品は期待を裏切らない素晴らしい仕上がりとなっている。それも偏えにキーボード、アレンジ、オーケストレーションを支配するAmedeo Tommasiの才能の成せる業なのだろう。(1曲のみFederico Troianiが参加しているが完全に霞んでいる。)Flavio Giuratoのボーカルも語りのようなものからバラード調、絶唱型と実に変化に富み、表現力の巧みさと説得力はかなりのものがある。全曲、飽きのこない深みのある唱法、演奏が魅力的だが、取り分けB面ラストを飾る曲が、最高の聴き物である。その音空間の清冽さは少なくとも私を満足させるには、充分なものである。 (鈴木伸一)



FLAVIO PREMOLI
Flavio Premoli
'83
●CBS 466422
○CBS 466422 2
◉

アルバム「SUONARE SUONARE」('80年)を発表後、フラヴィオ・プレモリはPFMを脱退した。前作「PASSPARTU」からはイタリア国内のみのマーケットを考えて、民族調の雰囲気を持った渋めで落ち着いた音楽を演奏するバンドになったが、決してそれがプレモリの脱退の理由では無い気がする。いずれにせよ彼はバンドを辞め、唯一のソロ・アルバムを制作した。時代を反映したポップなサウンドで全編占められているが、流石キーボーディストのアルバムらしく美しいピアノを聞かせる曲やシンセの音色のセンスの良さも見逃せない。PRODUCE, ARRANGEはBAGLIONIでお馴染みのGEOFF WESTLEYで、バックはPETE VAN HOOKE, MO FOSTER, PHIL PALMER, ROSSANA CASALE等が固めている。彼は現在CM音楽を仕事にしている。 (片山)



FRANCESCO BUCCHELI
Journey
'79
●Edizioni Musicali 2000 79 L.P.
○Mellow MMP 114
◉

フランチェスコ・ブッケッリというマルチ・キーボーダーによるアルバム。シンセサイザーによるメディテイショナル・ミュージックがくりひろげられているのだが、そこはイタリア人らしくメロディーを聴かせるもので、多種のキーボードの上を鳴り響く生ピアノが印象的である。若干テクニックの甘さ、シンセサイザーの音色に問題が残るが、センスは十分合格点を与えられる。同系統のイタリアのバンド「サンジュリアーノ」と比較すると多少見劣りがするが、決して二流にまで落ちることはないであろう。自主製作らしい。尚、'92年にCD化されたが、CDには2ndにあたる未発表アルバムが加えられている。これも同傾向のサウンドである。 (山崎)



FRANCESCO DE GREGORI
Francesco De Gregori
'74
●RCA TPL1-1033
○
◉

このジャケットの不思議な動物はいったい何だ。それにしてもこの人も地味だ。どれくらい地味かと言うと、あるRENZO ZENOBIが派手に聴こえる位だ(本作には彼も参加している)。'73年の「ALICE NON LO SA」もいい作品だが私はこのLPが好きだ。あっちはオーケストラとか入ってるが本作はシンプルそのもので、そのシンプルさがメロディーを際立たせている。ほとんどの曲はギターの弾き語りなのだが、たまにしか入らないキーボードが余計印象に残る。B①の曲はバックがピアノと静かに広がるストリングスシンセだけなのだが、呟くようなやさしい歌声を包み込む感じが好きだ。この1曲のおかげでこのLPが何度もターンテーブルに乗ることになった。地味だが好作品。 (渡辺一己)



FRANCESCO DE GREGORI
Rimmel
75
●RCA TPL 1 1107
○
◉

1951年ローマ生まれ。'70年代に入ってフォーク・スタジオでジノ・パオリやエンツォ・ヤンナッチらジェノヴァ派カンタウトーレのヒット曲を歌っていた。その頃にボブ・ディランの影響も受けた。デビューはまだ無名だったためにレコード会社(RCA)の意向により、もう一人の無名歌手とのジョイントの形式をとることになった。そのアルバムは「Theorius Campus」となり、アントネッロ・ヴェンディッティが相当としてレコーディングされた。完全なソロ・アルバムとしては次作「Alice Non Lo Sa」が第一作目となる。その後はヴェンディッティ、コッチャンテやバリョーニらと共に'70年代の代表的カンタウトーレとなる。'79年にはルチオ・ダッラとツアーを共にし、大物シンガーの仲間入りをした。 (HIRO TANAKA)



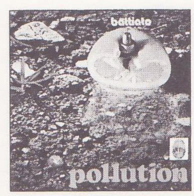
FRANCESCO DE GREGORI
Terra Di Nessuno
'87
●CBS 4605241
○
◉

デ・グレゴーリはローマ生まれで幼い頃から詩をつくるのが上手かったという詩人肌のカンタウトーレである。こういった類の歌手は音よりも歌詞を楽しむものなので語りに近い彼の歌はあまり好まれないようだ。彼はカピトロ・セイなど幾つかのグループで活動したのち、新しいカンタウトーレとしてRCAから「Roma Capoccia」('72年)というアルバムでアントネッロ・ヴェンディッティと一緒に紹介された。その後彼はルチオ・ダッラとのジョイント・コンサートのライヴ盤を含め多数のアルバムを発表している。これは近作に当るアルバムで、メロディーは今風であるが以前よりかなり聴き易くなっている。 (Hiro Tanaka)



FRANCO BATTIATO
Fetus
'72
●Bla Bla BBXL 10001
○Artis ARCD 025
◉

鬼才バッティアートの記念すべき第1作。クラシック、民族音楽、ジャズ等のモチーフをロックのフィールドで再構築する手法はまさにプログレッシヴ・ロックであった。この傾向は次作「Pollution」まで続き、3作目「Sulle Corde～」以降8作目「L'egitto Prima～」まではミニマルから現代音楽系のサウンドへと変化していったが'79年以降はポップ・フィールドへと方向転換し、大ヒットを飛ばすことになるが、彼のアイロニカルな視点で創り出すポップスは独特のものであり、プログレッシヴ・ロック・フィールドでも十分通用する良質のものだ。同時にロック・オペラ等、自らの創作意欲を正直に表現させたシリアスな作品も制作しており、今だに現役で活動している姿勢には脱帽である。 (山崎)



FRANCO BATTIATO
Pollution
'72
●Bla Bla BBXL 10002
○Artis ARCD 026
◉

初期のバッティアートは英米のサイケデリック意識と同じ内面的な突き詰めをストレートに音にした激しさがある。しかも音楽的だ。でも所が違えばこうも音楽のニュアンスは違うものか、イタリアの熱っぽく密度の濃い音と地中海的な開放感が本腰でアヴァンギャルドな方向へ向かった時の逸脱のスケール度も、また段違い。まずリズムが違う。彼の現代音楽の素養が露見する、そして彼の奥にあるイタリアの土着性や郷愁感が噴出する。魂は思う存分感覚的という意味でロックでも、手法のコラージュや反復は現代音楽肌。この安易に情緒耽溺しない厳しさが、今日の彼、知名度を築いているのだと思う。2作目。初期の傑作。収拾のつかない際までにロック・サウンド、前衛アプローチ、郷愁等が脹らみイマジネイティヴだ。 (松本)



FRANCO BATTIATO
Sulle Corde Di Aries
'73
●Bla Bla BBXL 10003
○Artis ARCD 036
◉

'46年、シチリア島カターニャの生まれ。'68年"Balla Raggaza"でポップ・シンガーとしてデビューするが、既に後を予感させるものがある。(シングル項参照)。'70年代初頭の最も先鋭的なレーベル、Bla Blaにあっても、その地中海民族音楽色とエレクトロニクス・インプロヴィゼイション、サイケデリック・アプローチが混然となった音楽は、異様に密度が濃く底知れない。この3作目になると、1～2作目での折衷感が取り払われ、反復の中に溶解して流れ続けるといったふうで、独特のラーガと化している。この頃から彼は更に反復のスタイルを強め、後年、これが「Genesi」やカミサスカの近作などへと結びつく。アヴァンギャルドな姿勢にのぞく、堀り下げられて見つかったようなイタリア色はもはや普遍的。 (松本)



FRANCO BATTIATO
Clic
'75
●Bla Bla BBXL 10006
○Artis ARCD 037
◉

バィティアートの4枚目の作品。前作でみせたサウンド・ポリシーの変化はこのアルバムで完成をみせたといえるだろう。ここで聴くことのできる音楽は、キーボード類を使用したミニマル・ミュージックである。非常に耳障りの良い、ここちいいサウンドであるから、これ以後の実験的作風と較べるとはるかに聴き易い。'70年代に様々に試みをブラ・ブラ・レーベルの中で展開していったが、この経験が'80年代のポップス作品のアレンジのかくし味になっていることを感じる。例えば、このミニマリズムは'85年の作品。「Mondi Lontanissimi」の中でさりげなく生かされている。 (山崎)



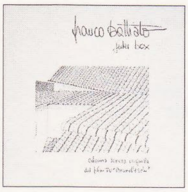
FRANCO BATTIATO
Melle Le "Gladiator"
'75
●Bla Bla BBXL 10008
○Artis ARCD 041
◉

ブラブラからの最後のアルバム、5作目。作風はこれまでに同じく、反復とサウンド・コラージュを軸にしたもの。旧A面前半部のコラージュはかなり派手にやっている。そして3作目あたりに顕著な清涼感のあるエレクトロニクス・サウンドから、教会オルガン張りに響き続ける後半へと、この大曲は、'70年代の彼の手法がコンパクトにまとめられている。旧B面も旧A面後半部に似たサウンドで、更に展開されたもの。こちらはイコライジングされた響きの中にも恐らく教会オルガンと思われる壮厳なトーンが多々現れるので、多分に聴き易いと思う。ポポル・ヴーの「In Den Garten Pharaos」後半に似たサウンドだ。いずれにしても数理的な整合さよりも感性にまかせたような奔放さが音に感じられる彼である。 (松本)



FRANCO BATTIATO
Franco Battiato
'77
●Ricordi SMRL 6201
○
◉

バッティアート、全20作のうち、多分一番硬派な内容を持つアルバム。タイトルもずばり「Franco Battiato」。実際の所はブラ・ブラを離れて大手リコルディに移籍の第一弾だからのタイトルだろうが、それでなおかつこの内容ということは、彼の意識は間違いなく作曲家に有って、彼を見る目も音楽家としてとらえていたに違いない。この音楽から「L'era Del〜」は予測のつかない事だ。A面はAntonio Ballistaの一定のピアノ打音とわずかなエレクトロニクス・サウンドを重ねた完全なミニマル・ミュージック。B面はBallista(p)、Alide Maria Salvetta(喋り笑いながらのソプラノ)にクラウディオ・ロッキ(スタジオ内の音)という組み合わせで編集効果も加味。ピアノの甘い響きとコラージュが中心。 (松本)



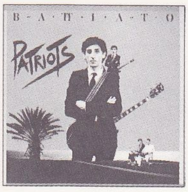
FRANCO BATTIATO
Juke Box
'78
●Ricordi SMRL 6218
○
◉

かつてはブラブラから出た5作の希少度と'70年代末以後の彼の知名度との間に抜け落ちていた感のあるバッティアートの'70年代後半だが、ごく一部のリスナーが知っていたとおり、このアルバムはその中でもかなりのクオリティを誇っている。カミサスカ、カチャパリャ、ジュスト・ピオなど強者が一同に会していて、現在の創作の原点になった頃の一作でもある。コーランとも病理的とも言えそうなカミサスカの歌、Alida Maria Salvettaのソプラノ、ピオのアンニュイさを醸すヴァイオリン、そしてピアノの単音などを中心に、滑らかでたたずむような曲調が素晴らしい。この室内楽の異形とも思える作風は、参加ミュージシャンの近作にさえ通じるものがある。これまでには目立たなかったふくよかさの出た一作。 (松本)



FRANCO BATTIATO
L'era Del Cinghiale Bianco
'79
●EMI 3C064-18285
○EMI 7467962
◉

BLA BLAレーベルの時代、実際的プログレッシヴ・ロック〜ミニマル、現代音楽系と変化してきたバッティアートは、'79年に突然、ポップス・シンガーとして再デビュウする。その記念すべき第一作である。タイトルは白イノシシの時代という意味。後にアリーチェが唄ったり、自ら別テイクで再録したりした曲が多いので、今、聴くとプリミティヴな印象は否めないが、驚くべきことは、再録したものでも、各曲の重要なアレンジは9割方、この時点で完成していることだ。それを気付かせない、のんびりとした印象が彼の損をしている部分でもあり、大いなる魅力でもあるのである。 (山崎)



FRANCO BATTIATO
Patriots
'80
●EMI3C064-18521
○EMI CDP 7467972
◉

アルベルト・ラディウスのスタジオで録音された新生バッティアートの第2弾(通算10枚目)。このアルバムでは、後のアルバムへと続く明確なビート感覚が確立されている。このビート感覚は多分に当時のニュー・ウェイヴからのフィード・バックではあるが、このビートの上に風変わりなアレンジが加えられると独自のバッティアート節ができあがるというわけだ。彼の創る曲は、ユーロ・ロック・ファンには余りにポップ、一般のポップス・ファンには余りに風変わりという複雑な位置にあるが、その内容は非常に高度であり、深い洞察力と天才的なひらめきがないと成し得ないものである。タイトルは「愛国者達」の意味。 (山崎)



FRANCO BATTIATO
La Voce Del Padrone
'81
●EMI 3C064-18558
○EMI CDP 7463572
◉

古くからBLABLAレーベルの主宰。次に現代音楽畑の作品を発表し続けていたフランコ・バッティアートは、'70年代の終わりに突然カンタウトーレとして再出発し、バッティスティをも凌駕し、スターダムにのし上がった。過去の経験を生かした、ちょっと風変わりなポップ作品を得意としているが、その独特のセンスはとびきり上等で誰にもまねはできない。近年アリーチェがアルバム「Gioielli Rubati」(盗まれた宝石)でバッティアートの曲を歌い大評判になったが、本アルバムにはその内3曲のオリジナル・ヴァージョンが含まれている。聴き比べるのも楽しい。'80年代のイタリアン・シーンを云々するならバッティアートを聴いてからにすべきだ。 (山崎)



FRANCO BATTIATO
L'arca Di Nòe
'82
●EMI 3C 064-18597
○EMI CDP 7467982
◉

「ノアの箱舟」と題された通算12作目。本作品ではフェアライトを使用して、今までの作品よりも音に厚みが増し、色彩感も強くなった。フェアライトの使用により、音のイメージだけなら最もシンフォニックな味付けが成されている一枚である。異国的、宇宙的、神秘的といったバッティアートの興味がストレートに開花した作品で、やりたい放題やっている印象。きらびやかな音の洪水が次から次へとおしよせてきて、リスナーはその音壁に圧倒されてしまうだろう。こういう、リスナーのうけをねらう云々というのではなしに、ストレートに自分を表現してしまうバッティアートの音楽性がファンにはたまらないのだろう。（山崎）



FRANCO BATTIATO
Orizzonti Perduti
'83
●EMI 641186461
○EMI CDP 7467992
◉

前作でフェアライトを大面的にフィーチュアして話題をまいたバッティアートだが、この次作ではフェアライトの使用法が一層巧みになり、サウンドポリシーはさらに明確化した。打ち込みによる恐ろしくシンプルなビート、フェアライトによる多彩なキーボード・サウンド、カット・インする効果音。このオリジナリティと、曲を透かして見えるバッティアートの人間味の奥深さはどうだろう。彼の音楽は、単にチャート・インをねらう為のものではなく、彼自身の為の芸術的表現でもあるのだ。この一見、あいいれない二つの要素を融合させてしまうところにバッティアートの才能がある。タイトルは〝失われた地平線〟の意味。（山崎）



FRANCO BATTIATO
Mondi Lontanissimi
'85
●EMI 64 1187071T
○EMI
◉

タイトルは〝遠くの世界〟とでも訳せばよいのだろうか。'80年代のバッティアート・サウンドをこれから聴こうという方には、僕は最初にこのアルバムを推したい。ルネッサンス風のメロディーが淡々と歌われたかと思うと胸のすくようにバッティアート・ビードで切る〝TEMPORATY ROAD〟、ぶ厚い中低感のストリングス音が違う〝IL RE DEL MONDO〟を始め、バッティアートの'80年代の典型的なスタイルを聴くことができる。古色あるストリングス音とコンピューター・ミュージックの融合＋アルファがバッティアートの最大の持ち味である。伝統と最新テクノロジーをこうも見事に融合させてしまうあたり、何か、イタリアのスーパーカー達にも通じる粋なものを感じる。英語ヴァージョンのアルバムも出た。（山崎）



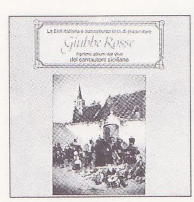
FRANCO BATTIATO
Genesi
'87
●Fonit Cetra LMA 3031
○Fonit Cetra CDC 33
◉

'80年代に入ってからはシンガーとしてのイメージがすっかり定着した感のあるバッティアートだけに、'87年に突如としてリリースされたこの60分を越えるオペラ大作にはファンならずとも驚かされたに違いない。本作は「創生」をテーマとして製作された前衛舞台演劇（美しくもシュールな映像との調和が見事）のための音楽集であるが、純音楽的にも見ても極めて高いポテンシャルを秘めた恐るべきものだ。オペラ・ミュージックとはいっても、コンピューター・プログラミングを駆使した斬新としか言いようのないトリックがそこかしこに仕掛けてあり、「クラシカル」の一言では到底片付けることはできない。Bla-Blaの時代から一貫して持っていた彼の「芸術家肌」が最大限に発揮された力作。何とライヴ録音。（内田）



FRANCO BATTIATO
Fisiognomica
'88
●EMI 647903141
○EMI 090-7903142
◉

バッティアート・ポップス会心の一作。彼の歌物系作品が一連の「カンタトゥーレ」と一線を画すのは、この手の大部分に見られるストレートな「感情発露」が希薄で、むしろ「冷めている」という印象すら与えるという点だろう。つまり、クラシックや前衛音楽すらも抱き込む彼の「芸術家魂」のホコ先がポップスに向けられたといってよく、特にアレンジの緊密さはポップ系作品としては類を見ぬ凝ったものである。本作は従来ではあまり気を配られていなかったメロディ面にも細心の配慮がなされており、トリッキーなアレンジとの間に不思議な均衡が保たれている。これまで彼の作風に困惑していたりスナーでもスンナリと聴くことができそう。ソプラノ・ヴォイスをフィーチュアしたラスト曲は感動的だ。（内田）



FRANCO BATTIATO
Giubbe Rosse
'89
●
○EMI 2-070 703425
◉

'88年のヨーロッパ・ツアーを収録した2枚組ライヴ・アルバム。彼のヨーロッパでの人気は絶大なものがあり、イタリアのみならずスペイン、ベルギー、ドイツなどでも大会場が超満員になるほどである。ステージはオーケストラ（ジュスト・ピオの指揮による）を配した大がかりなものであり、独特のバッティアート・サウンドに厚みを加えている。一方でリズムやキーボードのパーツではプログラミングを大担に使用しており、オーケストラとの対比、調和が実に面白い。「スタジオ仕事の産物」的なイメージの強い楽曲がその持ち味を損わず、そしてしっかりと「ライヴ・サウンド」となっているところなど、彼のアレンジャーとしての並々ならぬ才能を再認識せずにはいられない。選曲もベストゆえ入門用に最適。（内田）



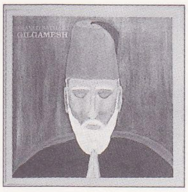
FRANCO BATTIATO
Una Vita Scellerata
'90
●
○EMI 66 7956201
◉

Benvenuto Colliriの映画「Una Vita Scellerata」のためにフランコ・バティアトが作曲したサントラ集。作品の性格上、1分足らずのものから3分程度のものまで、19曲を集めた小品集になっている。近時の彼の作品に見られるポップな曲は少なく、やや重々しい雰囲気のアンビエント・ミュージック調のものがメインになっている。アヴァンギャルドからポップスまで、幅広い音楽性を持つバティアトならではの力作であり、映画なしでも楽しめるが、曲が短く、聴き込もうと思っているうちに終ってしまうのは残念である。やはり、この種の作品は映画と一体となって評価されるべきものなのであろう。バッティアートのファンには一聴の価値があると思がれるが、初めて彼の作品を聴く方向きではない。 (賀川)



FRANCO BATTIATO
Come Un Cammelo In Una Grondaia
'91
●EMI 090-7981211
○EMI 090-7981212
◉

「Fisiognomica」で強まった「静」の部分を抽出し、さらに押し進めた作品。打ち込みビート等によるトリッキーなアレンジは影を潜め、替わってピアノと弦楽四重奏によるクラシカルなバッキングが内省的な響きを醸す(一部で見られるキーボード・プログラミングによるアレンジもこれまでになく控え目に聞こえる)。前半は自作曲、後半ではベートーベン、ブラームス、ワーグナーらの楽曲に詞をつけて歌っているが、曲想は見事に統一されており、アルバムとしての完成度も極めて高い。「Fisiognomica」でシンガー路線の頂点に達したと思っていただけに、本作でさらなる深化を呈示してきたその底力には恐れ入る。はからずも最も「シンガーらしい」作品となった。(内田)



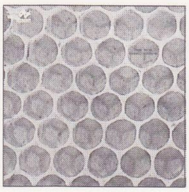
FRANCO BATTIATO
Gilgamesh
'92
●
○EMI 07777 54759 20
◉

「Genesi」と全く同様の手法、コンセプトをもって製作されたオペラ・アルバムの第2弾。あれほどの前例があっただけに一聴した時の衝撃度はあまりないものの、相当の時間と労力をかけた高密度の作品であることに変りはなく、二番煎じ的なイメージなどかけらも感じられない。コーラス・パートに重点が置かれており、よりシリアスでクラシカルなムードが強くなっているのが特徴である。ジュスト・ピオ、サロ・コンセンティーノ、そして名パートナーのユリ・カミサスカからおかかえのメンバーがこぞって参加しているが、いずれもシンガー系の肩書きを有していながらこうしたシリアス畑の作品にあっさり溶け込んでしまうあたりは、その前身や経歴を考えると皆ただ物ではあるまい。是非映像を見たいものだ。 (内田)



FRANCO DANI
E Ti Svegli Con Me
'79
●Vedette MLP5561
○
◉

ジャケットを見てしまうと、触手を伸ばすのを躊躇ってしまいそうだが、裏面記載の参加メンバーを見てビックリ!Gianni D'allaglio, Vince Tempera, Miro等実力者揃いで弥が上にも期待が高まる。そしてそれは次第に満足感へと変る。ポップだが良く練られた曲作りと流石に巧みな演奏、そして表現力豊かな典型的なイタリア語のボーカルが織り成す洗練されたサウンドは非常に見事な調和を得ている。IL VOLO的フレーズが其処彼処に現われるこのアルバム、Fausto Leali, Lavezzi, Miro等のファンには特にお薦め。尚、Miroは演奏こそしていないが、作曲・編曲、プロデュース、更にはジャケ写までと、隅から隅まで至れり尽くせりの献身振りである。(鈴木伸一)



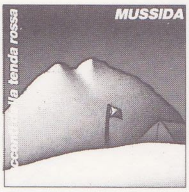
FRANCO LEPRINO
Integrati ... Disintegrati
'77
●Eleven ELC 25133
○Vinyl Magic VM 022
◉

Leprinoの作り出す音楽は、寄せては引く波の如く反復をくり返し、聴く者の内面に向って語りかけてくる。時には安らぎを与え、時には意識をめざめさせてくれる。イタリアにあってはこの種の音楽はほとんどなく貴重な存在であろう。それだけにとどまらず、内容的にも成功していると思われる。彼の本業はギターらしく多種多様に使いこなしており、他にもシンセサイザー、ヴァイヴなどの演奏も行いセンスの良いところを見せている。両面で1曲という大作ながら、ピアノ、フルート・オーボエ、効果音を盛り込み単調さを克服している。このアコースティック楽器の使用がメカニックな感じをなくし、彼のめざしているサウンドを一際輝けるものにしているようだ。また、このElevenレーヴェルはFonit Cetra系でファンの興味をそそらせる。 (吉瀬)



FRANCO MARIA GIANNINI
Affresco
'74
●Aris AML 4000
○Mellow MMP 182
◉

'74年にリリースされた男性シンガー、フランコ・マリア・ジャンニーニのアルバム。自主製作の噂もあり、「シンガー系では随一のコレクターズ・アイテム」(イタリア人コレクターの話)だという。音の方は、表面的な派手さに欠けるもののキーボードやヴァイオリン、チェロ等の導入により十分にプログレッシヴな形態が保たれている。ストリングス等による爆発的で一気の盛り上がりは余り見られず、acギターをバックにした歌を中心に丁寧な音作りでじっくりと聴かせるタイプで、繰り返し耳にする度に味わいを増して行く。緩やかな作風ながらもバックの演奏にはプログレ全盛時の輝きが見て取れる。特にヴァイオリンが効果的だ。これにacギター(ピアノ)、シンセ系の音が絡み溢れんばかりのみずみずしさを醸し出している。 (江田)



FRANCO MUSSIDA
Racconti Della Tenda Rossa

'91
●Virgin VDICD 124
○
◉東芝EMI VJCP-28070

PFMのギタリスト、フランコ・ムッシーダ初のソロ・アルバム。'84年以降ミラノの音楽学校に於て現代の音楽表現の研究と教育に携わっていたが、'87年のPFMの「ミス・ベイカー」の頃からその音楽表現の発表の場を求めていた様だ。〝赤いテント〞というのは登山の時に自分の目印として張るものだそうだが、それはムッシーダ自身の音楽的方向性を象徴している様にも見える。自慢の声をフルに活用したヴォーカル曲も有るが、全体的にはギタリストらしくアコースティックなギターの響きを大切にした作りで、曲調こそ違うがJAN AKKERMANの一連のアルバムにも似た安らぎを感じ取る事が出来る。偶然同じ年にMAURO PAGANIの10年振りのアルバムが出たが、往年のミュージシャン達が頑張ってくれるのは嬉しい限りである。

（片山）



FRANCO SEGRE
Canti Della Stroda

'78
●Cetra LPX 68
○
◉

強いて言えば、本当に強いて言えばRoberto Ferriに似ているだろうか。それ程暗い曲調ではないのに滲み出る哀愁、がその共通する所なのだろう。ただしバックはフェリのそれの様な迎々しいものではなく、抑えの効いたアレンジはMaurizio Fabrizioと曲によってはRodolfo Griecs。Segre自身のヴォーカルも決して叫ばず歌い上げず泣きに走らず沈み込まない。アルバムを通して、親しい友人と話を続ける様に端々と歌われるが、それぞれの曲やフレーズが日常生活の微妙な感情のゆらぎに触れる様で飽きさせない。彼の歌う彼自身と等身大の世界は私達の世界とも近いものがあるのだとも言えるか。このLPから「Julie/Per Una Piccola Donna」(Cetra'77 SP1664)のシングル・カットがある。

（森下）



GAETANO LIGUORI
La Cantata Rossa Per Tall El Zaatar

'76
●Edizioni Di Cultura Popolare VPA 113
○
◉

ジャズ・ピアニスト、Gaetano Liguoriの作曲を各々なミュージシャンが演奏したアルバム。なんと言ってもデメトリオ・ストラトスとの共演が見逃せない。1曲のみの参加だが、G. Liguoriのピアノの鍵盤とピアノ線を使ったフリー・インプロヴィゼイションに絡むストラトスの語りがもはやインプロヴァイズド・サウンドとなっていて圧巻。その勘の良さには美学を感じさせるものがある。他にはLiguoriのトリオにやはり詩の語りを乗せたものなど、フリー・ジャズ色の強いものが多い。声を扱うミュージシャンが計3名、詩の語り手が1名いる。尚、ストラストが参加したアルバムで恐らくこの手のものと思われる「O Tzitziras O Mitziras」というタイトルのアルバムがあるが、そちらは未確認。

（松本）

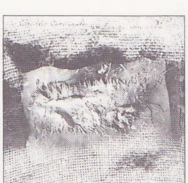


GAIO CHIOCCHIO
Londra

'80
●Una ZPGU33409
○
◉

トラッドからエクスペリメンタルまで、アルトゥーロ・スタルテッリ、ジャクェリーネ・ダルビィとともにピエロ・リュネールとしてプログレッシヴ・ロックの真髄とも言うべき「Gudrun」を発表したガイオ・キョッキョ。スタルテッリの話を聞き、ダルビィとスタルテッリのその後の活動を見る限り、2人の類いまれなる才能を引き出し、作品としてまとめあげたのはキョッキョの仕事としか思えない。そんな彼の唯一のソロ作品が本ミニ・アルバムである。全4曲、3分から4分の小品が収められている。いずれもキョッキョのヴォーカルをメインにしたもので、バックの演奏もそれなりに楽しめるが平均的で特筆すべき点はない。一風変わったポップスではあるが、彼の本領が発揮されたものとは言い難い。

（賀川）



GERARDO CARDINALE
Un Lungo Cammino

'88
●Stile Libero SLLP002
○
◉キング KICP-35

'88年にヴァージン傘下のニューエイジ・レーベルから発表されたこの作品は、北イタリアのトラッド・バンド、キャパ・ルーサに在籍していた管楽器奏者のソロ・アルバムなのだが、中身はというと、「YS」みたいなオープニングから始まって、後は次々と目まぐるしく変化する曲展開に乗って超絶技巧のリコーダーやフルートが自由自在に駆け回るというぶっ飛んだ音。トラッドはもはや一素材でしかないし、ニューエイジと呼ぶにはテンションが高すぎる。特に切れ目無しのA面は、地中海的躁状態がフルパワーで跳ね回っている。プログラミングされたシンセの音に嫌悪感を示す人もいるだろうが、演っている中の凄さでは'80年代後半のイタリアにおいて間違いなくトップクラスの作品。

（川辺）

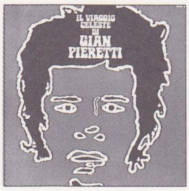


GIACOMO SIMONELLI
Inferno E Paradiso

'79
●Fonit Cetra LPX78
○
◉

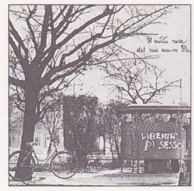
このジャコモ・シモネッリは一体何者なのであろうか。声質はフランコ・カリファノあたりに近く、喉に詰ったような苦しそうな歌いかたをする人である。どうみてもポッと出の新人ではなさそうで、二曲のロドルフォ・グリエコによるアレンジ以外は全て自らアレンジも行なっている。歌がメインだが、キーボード系の音も結構面白い。活動歴がはっきりしないので断定はできないが、バレット・ディ・ブロンゾの「Sirio 2222」に曲作りでクレジットされているG. Simonelliが同一人物かどうか気になるところである。どちらにしてもこのアルバムは歌ものとして楽しむものであるようだ。

（Hiro Tanaka）



GIAN PIERETTI
Il Viaggio Celeste
'69
●Ricordi SMRL 6068
○
◉

感傷的で染々とした情懐に溢れる彼の独特のボーカルがたっぷりと堪能出来るこのアルバムは世界の主要都市を各曲のタイトルに冠した旅をモチーフにした作品。嬉しい事に京都についても歌ってくれている。曲調は変化に富むが、やはり淋し気で哀愁を帯びた曲が素晴らしく無条件に感動してしまう。優しく包み込むような美しいオーケスレーションはNatale Masara。Ricky GiancoとFranco Mussidaが参加している。尚、この後「Il Vestito Rosa...」を挟んで'74年にDig Itより発表された「Cian Frusaglic」は佳曲を含むもののポップな曲が多くやや物足り無い出来。又彼の活動歴はかなり古く、'60年代半ばには〝LE PIETRE〟というグループを率いていたこともある。　（鈴木伸一）



GIAN PIERETTI
Il Vestito Rosa del Mio Amico Piero
'73
●Ricordi SMRL 6112
○
◉

ジャン・ピエレッティは'60年代後半から'70年代前半にかけて数枚もアルバム及びシングルをリリースしているが、本作が最も出来が良いと思われる。派手さは無いものの聴き込むにつれて味わいを増して行くタイプだ。彼の優しい歌声と効果的なオーケストラ導入、更にはピアノ、フルート等を絡めて、時には春の日差しの様な暖かさを、またある時はセピア色のカヴァーデザインに象徴される秋、冬の淋しさを、非常にツボを心得た盛り上げ方で演出している。〝掘り出し物〟という感じが強いものの、プログレッシヴ一辺倒のリスナーに対しては若干アピール力が弱いという感じもする。A面は全面費やしての組曲だが、アルバム自体トータル的な内容を持っていると思われ、B面ラストではオープニングと同じテーマが登場し、静かに幕を閉じる。　（江田）



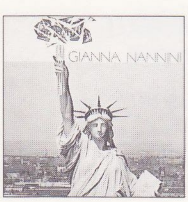
GIANLUIGI DI FRANCO
Gianluigi Di Franco
'90
●
○
◉キング KICP 42

オザンナ一派の一つ、チェルヴェッロのヴォーカリストであったジャンルイジ・ディ・フランコのソロ第一作目である。と、言ってもこのアルバムの中にチェルヴェッロの持つあの呪縛的な暗さや重々しさは全く無い。バンド解散後ジャンルイジはトニー・エスポジートと行動を共にし、数々のアルバムにヴォーカルとして参加、独特の高くきらびやかな声でロック・ファンを魅了して来た。このバンドで得た地中海的リズムやポップ・フィーリングを存分に発揮して作られたのが本作で、音楽プロデュース・アレンジはチェルヴェッロのリーダーで現在はズッケロのプロデュース等で有名なコッラード・ルスティーチが担当している。尚ジャンルイジは現在もTONY ESPOSITO & LADRI DI BICICLETTEで活躍している。　（片山）



GIANNA NANNINI
Una Radura
'77
●Ricordi SMRL 6206
○
◉

1995年シエナ生まれ。音楽院でピアノとヴァイオリンを学んだ。74年にミラノのミュージシャンと組んでシングル盤でデビュー。'76年に女性に関する問題を扱ったアルバム「GIANNA NANNINI」でメジャー・デビューを果たした。更にカンタウトリーチェ（女性自作自演歌手）としての成長をみせたのが当セカンド・アルバム。P.F.M.が3曲にクレジットされている他に、トゥリオ・デ・ピスポコ、ボブ・カッレロ、ジジ・カッペッロット、クラウディオ・ファビ、クラウディオ・パスコリなど良く知られているスタジオ・ミュージシャンが名を連ねている。サード・アルバムからは、男勝りの声質を生かして女性ロッカーとしての地位を不動のものにした。　（HIRO TANAKA）



GIANNA NANNINI
California
'79
●Ricordi SMRL 6254
○Ricordi CDOR 8689
◉

「California」と来てジャケはニューヨーク、1曲目はフェイセズのロックン・ロール張りに〝America〟と来る。もう誰もイタリア・ファンは、このアルバムを聴かないかもしれない。デビューを経て思い切った脱皮をした脱皮をした彼女は、多くのイタリアの若者が憧れるアメリカを実現してこの後すぐに大人気をとる。有名レーサーを兄に持つ彼女らしくボーイッシュなイメージもイタリアでは極端に珍しい。イタリア語でここまでアメリカナイズしたミュージシャンは未だいない。しかもダミ声。バックにStefano Pulgaもいるが関係ない。タイトなバック陣の演奏も存分に、彼女の生き生きとした声が、アメリカだらけの中にイタリアの情感を見い出す。切っても切れないイタリアというものの濃さ。最後に泣ける。　（松本）



GIANNI BELLA
Sogni Di Un Robot
'76
●Derby DBR81254
○
◉

シチリア生まれで、妹がマルチェラであることはよく知られている。グループのコンテンポラネイ時代に作曲をするようになり、以後マルチェラやビーンズ、ジェンスなどのために曲を書き続ける。彼のデビューは'73年頃で'74年の夏に〝Piu Ci Penso〟が大ヒットする。このアルバムは'76年までのヒット・シングルを集めて作られたファースト・アルバムである。そのため次作の「僕は歌う…そして君は」に比べかなり聴き易い。だが、長い時間をかけて制作されただけに、彼のこのアルバムに対する思い入れが伝わってくるようだ。最近の作品は、モゴールと組んだりしているが、曲調が英米系のポップスに近いため、どこにでもある音楽という印象が強くなってしまった。　（Hiro Tanaka）



GIANNI D'ERRICO
Antico Teatro Da Camera

'75
●Ariston ARLP 12268
○
◉

Equipe 84の〝Sacrificio〟にその名が見えるジャンニ・デリコ畢生の傑作。彼の華麗で色彩感豊かなキーボードと哀愁を帯びたボーカルが、明と暗、静と動を織り混ぜ乍らポップにそしてクラシカルかつシンフォニックに絡み合う様は正に高雅の極み。しかし哀しむべき事に彼はこのアルバムの発表を待たずに事故で他界。Maurizio Vandeliのスタジオから帰る途中での悲劇であったという。'70年のデビュー・シングル〝Anima Nera〟で初々しい唄声を聴かせてくれた彼がたった数年の短か過ぎる歳月の中で遺してくれた作品は哀惜の念と共に永遠にその光彩を失わないだろう。尚'72年のシングル〝La Vestaglia〟は当時のプログレの嵐をもろに受けた必聴の傑作。　(鈴木)



GIANNI NAZZARO
Questo Si Chè E Amore

?
●CGD 69080
○
◉

ジャンニ・ナッザーロは今ではもう忘れ去られた歌手である。'66年にフォノタイプからデビューしたが当時の人気歌手のコピーばかり歌っていた。'70年にCGDに移籍してからはカンタウトーレのロベルト・ヴェッキョーニやサンドロ・ジャコッベなどの曲を歌うようになり、サンレモ、カンタジーロと入賞し、ナポリ音楽際で優勝を飾りスターの仲間入りを果たす。日本にも数回来日しており、オリジナル曲「傷あと」を発表した。このアルバムはジャコッベの作品集で歌ものとしては良質なものである。クラシカルなアレンジはアリーチェのファースト、カセッリの「Primavera」などCGDやCBSの'70年代の歌ものの名作の多くに関わったダニロ・ヴァオナである。

(Hiro Tanaka)



GIANNI NERI
Sono Nato Per Errore

'77
●Dig It PL3010
○
◉

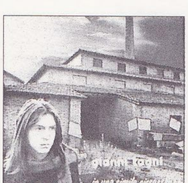
ニンニ・カルッチがアレンジにキーボードにと忙しいアルバム。ジャンニ・ネリについては何もわからない。ロごもったような歌い方をするカンタウトーレだ。アップ・テンポな曲あり、地中海民族色を加味した曲あり、バラードあり、と様々で全体としては平均的な印象を受ける。バックにはカルッチを始め、ステファノ・プルガ(kbd)、トゥッリョ・デ・ピスコポ(perc)、ルチオ・ファブリ(vln)らが曲ごとにいる。やはりオーケストラをまじえたナンバーの抑揚が気を魅くところだが、女性コーラスの彩りも同じ役割を果たして効果的。しかし、それもどちらかと言えば控えめだ。　(松本)



GIANNI NOCENZI
Soft Songs

'93
●
○Virgin 7 86574 2
◉

'78年のバンコが「...Di Terra」だったことで、G・ノチェンツィのソロは早読みできると思う。イタリア音楽事情が苦境に入ったその時期、ノチェンツィ兄弟の才能と意欲はバンドBANCOを突き抜けてしまったのだから。早急、腐った音楽事情はほどほどにして独自の音楽観を温める事、その選択は正解の部分が多いと思う。イタリアは日本のように余裕がない。ノチェンツィのような方向性を持つ人が「Empusa」をイタリアで製作する以上、もうイタリア国内だけに視線を向けているわけにはいかないだろう。2作目のソロでは機材の事を通して日本と近密になった末、坂本龍一を始め、こちらのミュージシャンが参加した。クリアー・トーンの中にノチェンツィのソロが駆け巡るのを聴いて未だ衰えを感じない。　(松本)



GIANNI TOGNI
In Una Simile Circostanza

'75
●IT ZSLT-70026
○
◉

1981年に来日し、ヤマハの世界歌謡祭で最優秀賞を受賞した〝Vivi〟のように、アップテンポの曲を得意とする彼が、1975年にITより17歳でデビューしたのが本アルバムである。ここでは彼はギター片手に弾き語りをやっており、多少ジャズのエッセンスもとり入れた曲づくりである。歌詩はグイド・モッラによるもの。この後、プーの前座としていっしょに活動していたが、ジャンカルロ・ルカリエッロとの出会いから、ピアノ中心の現在の彼のスタイルへと大きく変化したのである。尚、この作品は、B①でアルトゥーロ・スタルテリのキーボードを、またB②でカルロ・シリオットのバイオリンを聴くことができ、彼の曲作りが大きく変ったことをうかがわせる。　(山中)



GINO D'ELISO
Il Mare

'75
●Numero Uno ZSLN 55683
○
◉

'76年に本アルバムでアルバム・デビュウしたジノ・デリソは現在までに4枚のアルバムをリリースしているカンタウトーレである。本作は海をイメージしたイタリア然としたイメージの作品でかなりシンフォニック・ロック的なアプローチで制作された高水準のもの。2枚目「Ti Ricordi Vienna?」はつややかなストリング・オーケストラを加えた作品で、約半数の曲は叙情的な素晴らしい出来である。3枚目以降はビートを強調したポップス・アルバムとなってしまった。本作での彼の自由な歌声も素晴らしいが、このアルバムの仕掛人はフルート、サックス、キーボードを担当するクラウディオ・パスコリであろう。雄大なストリングスのうねりはかのイル・ヴォーロを想起させる。(山崎)



GINO MAURIZIO JR
Musica Ed Elettronica

?
●SR Records SR-SP 131
○
◉

ジャケット写真の古めかしさ、録音状態から言って70年前後の作品と思われるが詳細は不明。Gino Maurizio Jrというキーボード奏者も他に見かけた事が無いが、時折聴く事の出来る感性の閃きに非凡なものを感じずにいられない。勿論、技術的な未熟さや稚拙な表現も散見出来るが、冒頭女性ボイスをフューチャーした〝Elekton Chor〞なる3分程の曲を、Opus Avantraを想起させると言ってしまったら誉め過ぎだろうか。しかしエレクトロニクスの音の波間に漂う女性ボイスの妖しさと、現われては消える不協和なピアノの音色が印象的なA面の水準は高い。Roberto Donniniの諸作に通じる音といえば多少的を得ているだろうか。但し残念乍らB面は凡庸。尚SRレコードはローマのレーベル。（鈴木伸一）



GINO PAOLI
Amare Per Vivere

'72
●Durium ms AI 77309
○
◉

最近でも元気にアルバムをポツポツ発表しているジノ・パオリだが、この'72年の作品ではブームのあおりを受けてかプログレッシヴな曲を多く歌っている。この頃の歌声はマウロ・ペロシのそれによく似ており、ストリングス・オーケストラやアコースティック・ピアノが前衛的なバックを担う曲では曲想までもペロシのそれである。又、アレンジによっては、かのジャンニ・デリコのアルバムを想起する曲もある。基本的にポップス・シンガーなので、曲によってという感があるが、かなりプログレッシヴ・ロック愛好家にアピールする内容だと思う。オーケストラ・アレンジはピヌッチオ・ピラゾーリによるもの。（山崎）



GIORGIO GABER
Anni Affollati

'81
●Carosello CLN 25094
○
◉

10数枚ものアルバムをリリースし続けてきた彼については殆んど紹介されていないようなので、この81年の作品を取り上げてみた。私自身他のアルバムを聴いていないので比較は出来ないが、ここに於て聴くことの出来るサウンドは時にエマニュエル・ブーツを彷彿とさせるボーカルが非常に魅力的である。その唱法は派手さこそ無いものの我々を惹き付けるには充分な表現力を備えている。ただ、今ひと息の説得力とパワー不足が残念。あと一歩アレンジその他思い切りがあれば、統一感あるより素晴らしい作品となっていただろう。（鈴木伸一）



GIOVANNA
Una Corsa Pazza

'71
●Ariton ARILP 12058
○
◉

同じくアリストンからの「Ho Passato Un Brutto Inverno」が傑作の誉高いジョバンナのデビュー作。「ドナドナ」をはじめ、キャット・スティーブンスの「ムーンシャドウ」マーク・ボランの「ホットラブ」等ほとんどの曲がカバーだが、そのどれもが、ジョバンナのアクのない落ち着きのある素直な表現力で唱い込まれている。'71年の作品でありながら、古臭さや、やぼったさは感じられない。穏やかなアレンジ、オーケストレーションが、彼女の歌心を際立たせている。英米のカヴァー曲が中心の為メロディーにあまりイタリアっぽさが感じられないが、反ってこのアルバムの時代性を希薄にしている。20年以上たった今聞いても新鮮な響きに満ちている。（木下）



GIOVANNA
Ho Passato Un Brutto Inverno

'73
●Ariston AR LP 12104
○
◉

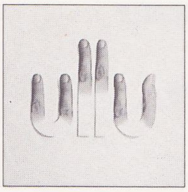
達者なバック陣を従えて、Giovannaは我々に唄心の大切さを再認識させてくれる。確かに豊かな広がりのあるオーケストレーションや、メロトロンまで使用したDario Baldan Bemboによるキーボード群の極上の美しさは、この作品を語る上で決して欠かすことの出来無い要因ではあるけれども、心の深奥に潜む諸々の感情を、その起伏や微動のままに多様なメロディーに織り込んでゆく彼女の唱法が、何と言っても魅力的だ。つくづくの表現力の豊富な歌い手だと感心してしまう。尚、彼女はこの他にも何枚かのアルバムを発表している。又、デビュー曲は、〝Io Voleve Diventare〞。（鈴木伸一）



GIOVANNI POGGIALI
La Sciarpa Di Lana

'75
●Polydor 2448047
○
◉

民族の血に根ざしたボーカルは、そのアプローチの仕方に違いがあるにせよ、どこか淋し気で哀し気である。歴史とは血生臭く、怒りと諦らめに彩られてきたものなのだろう。希望はいつか忘れられ、そこには悟りにも似た境地だけが残ってしまうのかもしれない。「毛織りのショール」と題されたこのアルバムも又、そのモノトーンのジャケットが語りかけるかのように、悲哀に満ちたノスタルジックな感慨を呼び醒ます。素朴で哀調を帯びたボーカルはあくまでもさり気なく、バックの演奏も決してそこから逸脱することは無い。この救いの無い世界はかのマウロ・ペロシの辿り着いた虚無な地平への、より民族的な帰結なのかもしれない。（鈴木伸一）



GIOVANNI ULLU
Ullu
'78
●RCA PL 31322
○
◉

ORFE9への参加、パティ・プラヴォに曲を提供、と'70年代初期から活躍してる人。キャリアからいって他にも作品はありそうだ。本作はメロディーメーカーとしての才能が十分に感じられる傑作。A①は演奏主体のノリのいい曲で、彼のきれいな高音にはあわないようだ。それ以外では、たおやかな歌が聴ける。メロディーの良さと優しい歌声を損なわないようにバックも控えめ。ナイーブな感性が感じられるB①、②は特にお薦めで、B②のサビのオーケストラ、サックス、ボーカルの絡むところなどたまらない。演奏主体のB③もノリのいい曲だが、A①と違ってメロディー、アレンジがいい。言い忘れたけど本作のバックはあの神出鬼没のジャズロックグループ、ペリジオでした。　(渡辺一己)



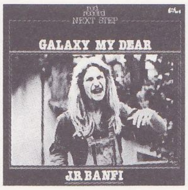
GIOVANNI VENOSTA
Olympic Signals
'85
●Raw Material RM 002
○
◉

'84年、ミラノでの録音。例によってカンタウトーレ物かと思いきや、ジョヴァンニ・ヴェノスタなるキーボード奏者によるソロ・アルバム。曲によって、フルートやサックス等のゲストが加わるが、ほぼ全編、彼の弾くピアノをメインにした鍵盤楽器の多重録音になっている。現代音楽とは行かないまでも反復を基調にしたサウンドで、メロディ自体は親しみやすい。少しおぼろ気な雰囲気の少し甘さのあるトーンなので、堅苦しさはない。どちらかと言えば、リラックスした流れが強い。構築性を追うというよりも、流れをつくっていくタイプのサウンドだ。エレクトロニクス・サウンドに並行するピアノ・ミュージックといった作風が目立つ。自主製作にありがちな内容ではある。　(松本)



GIULIANO SORGINI
Zoo Folle
'74
●Ricordi SMRL 6141
○
◉

〝Zoo　Folle〞というテレビ番組の為のサウンド・トラック・アルバム。Giuliano Sorginiなる音楽家が如何なる人物か知る由も無いが、この作品に於ける作曲・編曲・オーケストレーションの非凡さは凡庸では無い。トータルなコンセプトの中で、所謂プログレ的な曲、アヴァンギャルドな曲、室内楽的な曲、そして仕方無い事だが、ややイージー・リスニング的な曲等が、無理無く配置されている。勿論オール・インストゥルメンタルだが、凡百の映画音楽やムード音楽とは隔絶した仕上がり。尚、この作品以前'71年にFamaなるレーベルより「Scappo Per Cantare」という作品をリリースしており、これも又、テレビ番組の為のサントラであるが、年代同様やや古さを感じさせるサウンドである。　(鈴木伸一)



GIUSEPPE "BAEFO" BANFI
Glaxy My Dear
'78
●Red VPA 123
○
◉

元ビリエット・ベル・インフェルノのキーボードプレイヤー、バフォ・バンフィは最近ではベテラン歌手ミーナのバックを務めるなど、スタジオミュージシャンとして活躍中だ。本作はビリエット解散以来4年ぶりに発表した1stソロアルバムである。しかし、昔のシンフォニックな面影は既に無い。裏ジャケにシュルツェの言葉が記してあることからも分かるように、完全に彼を意識したエレクトロニクス作品となっている。モノトーンの寂しさは無く、割と活発なシンセ音が飛び交う。レベルとしてはヴァルター・クリスチャン・ローテのソロあたりと同程度で部分的には晩期のエルドンを思わせるパートも。なお、この後ドイツのICレーベルから2枚の作品を出すが、やはりシンフォニック色は薄い。　(江田)



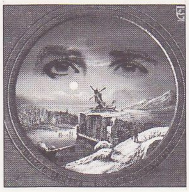
GIUSTO PIO
Motore Immobile
'79
●Cramps 5207 304
○
◉

バッティアートやカチャパリャに関係するヴァイリオン奏者として知られている人。元々はヴァネツィアのコンセルヴァトワール出身で幾つかのオーケストラの奏者でもある人物。写真からしても初老といっていい年齢だろう。従ってどのくらいのレコーディングがあるのか正確な所はわからない。このアルバムはプロデュースにバッティアート、A面をMichele　Fedrigotti(org)、Danilo Lorenzini(org)、Martin Kleist(vo)とのコラボレーション、B面を前2者のピアノとオルガンのみ、という構成になっている。共に持続音にほぼ一定のアクセント(フレーズ)を挿入することで持続音がそのたびに新鮮に聴こえる、といった聴覚上の記憶に関わる作業を作品化したものと言えそうだ。　(松本)



GIUSTO PIO
Legione Straniera
'82
●EMI 3C 064-18589
○
◉

前作「Motore Immobile」とは打って変って、バンド編成での録音。バッティアートの変化が及んだのだろうか、といった内容になっている。percにAlfredo Golino、bにPaolo Donnarumma、kbdにFilippo Destrieri、gにはAlberto Radius。画一ビートの上でピオがクラシカルともトラディショナルともつかないトーンでソロをとる。更にコーラス調のヴォーカルまで加わる。わずか、バッハの有名曲を下地に腕曲させた語りを加えた〝Giardino Segreto〞や、ラディウスのソロが聴ける〝Totem〞あたりに関心が向くか。アレンジはバッティアート/ピオとなっており、'79年以後のバッティアートの方向性に関連する一作と見るのが妥当なところだろう。　(松本)



GIORGIO LANEVE
Amore E Leggenda
'71
●Philips 6323 008L
○
◉

カンタウトーレ、及びラブ・ロック系のファン、その中でも叙情派サウンドの愛好者であればマークするであろうアレンジャー、ジャン・ピエロ・レベルベリ。その彼が'71年にジョルジオ・ラネーベなるカンタウトーレをプロデュースした作品である。本作はそのレベルベリの芸術世界をたっぷりと湛能することができる。例によって美しいオーケストラに乗せて語り掛けるような渋いボーカルが流れるように展開されていく。それに加えて時々登場する女性コーラス、チェンバロ、フルート等が何とも上品である。レベルベリに関する作品の中でも極めて高度な位置にあることは間違いなく、ファンにとっては絶品の宝物となることは請け合いである。　(井波)



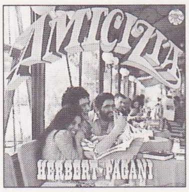
GRAZIA DI MICHELE
Cliche
'78
●It ZPLT 34029
○
◉

クリシェ、と言っても大貫妙子ではない。本作はアルトゥーロ・スタルテッリ全面参加。内容はポップスなのだが、ところどころ「あれっ」となるのはアレンジのスタルテッリのセンスだろう。ジャケットはどこか物憂げなところがあるが、曲想・声ともまさに「アンニュイ」という言葉がピッタリ。しかし、ポップスとしてはこの元気のなさは当時のイタリアでは受けなかったのだろう。最近はコンスタントに作品が出てるようだが、このデビュー作以後しばらくブランクがあったようだ。どこか影のあるポップスというのは私は大好きなのだが。本人が弾くのだろうか、A④は'80年代初期のアンテナあたりのノリと同じだ。　(渡辺一巳)



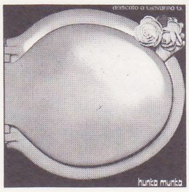
GUIDO BALLO
Metràpolis
'72
●Rare RAR LP 55019
○
◉

このアルバムはGuido Balloなる人物の演説を記録したものである。これが単なるお話のレコードであれば、日頃イタリアン・ロック・コレクターの集収ぶりに胸を悪くしている人々にさらに追打をかけることになるが、実は本作品はアヴァンギャルドかつシリアスな名作なのである。話手をヴォーカリストとして見ることは違うと思うが、例えばブーツやサーガドラグナの様なトーキング・ヴォーカルものと同等の評価をしても良いと思われる。Kbd, ds(IL BALLETTO DI BRONZO)、女性コーラスがバックを盛り上げる中、淡々と語る様子を聞いていると感動さえ覚える。同様のバックミュージシャンで語りのレコードがシリーズ化されているので、参考までに付加えておく。　(六井)



HERBERTO PAGANI
Amicizia
'69
●Mama PM/LP 1969
○
◉

Mamaというマイナー・レーベルに在籍していたHerberto Paganiは69年に本作、そして73年には同レーベルより「Megalopolis」という近未来を扱ったコンセプト・アルバムを発表、その後76年にはライブ・アルバム「Paloscenico」をRCAより発表している地味だが着実な足跡を残したカンタトゥーレ。知り得る限りでの最も古いレコードは、「Cin Cin Con Gli Occhiali」というシングルである。ここに紹介する作品は一応何らかのコンセプトに基づくストーリー性の強い内容で、A・B面共に切れ目無く続き、曲間には語り、会話、効果音等が挿入されている。やや散漫な構成は否めないもののバラード調の曲での優しく語りかけるような彼のボーカルは中々魅力的なものである。　(鈴木伸一)



HUNKA MUNKA
Dedicato A Giovanna G.
'72
●Ricordi SMRL 6096
○
◉

元アノニマ・サウンド・リミテッドのキーボーダー、ロベルト・カルロットはグループ解散後、初のソロ・アルバムをフンカ・ムンカという変名でリリースした。こぶしのきいたイタリア然としたヴォーカルに加え、アルバム中約半数の曲ではシンフォニック的なアレンジで色彩感覚豊かなサウンドを聴かせてくれる。シングルも3枚あり、内2枚はLP未収曲である。このアルバム発表後、ディク・ディクの「Suite Per～」にゲスト参加し、さらに後のディク・ディクに正式メンバーとして加入することになる。オリジナル・カヴァーは便器をあしらったもので蓋の部分が開くようになっている変型物。A④はメロトロンと生のストリングスを併用したテンションの高い佳曲。　(山崎)



IVAN GRAZIANI
La Citta Che Lo Vorrei
'73
●Freedom FLP 0201
○
◉

Anonima Soundのリーダーであった Ivan Grazianiの、おそらく1stソロ・アルバムと思われる。現在までにかなりの枚数のアルバムを発表しており、特に77年Numero Unoからの〝I Lupi〟は多彩なゲスト陣に支えられた佳作であったが、Anonima Sound時代の同僚でもあるHunka Munka全面協力の下で創り上げられたこの作品を彼のベストとして挙げたい。一聴してそれと解るHunka Munkaのキーボードはあくまでも華麗で極めてドラマチックであり、このアルバム最大の聴き物である。Ivan Grazianiには申し訳ないが、歌もHunka Munkaが唄っていたらそれこそ最高だったのに…。シチリア民謡でも演っていそうなジャケからは想像も出来ない秀作。　(鈴木伸一)



IVAN GRAZIANI
Ballata Per 4 Stagioni

'76
●Numero ZSLN 55687
○
◉

'77年の「I Lupi」が有名だが、これは'76年の作。暗い感じのジャケットで損をしているが内容は保証付き。アレンジはクラウディオ・パスコリで、同年のジノ・デリソの「イルマーレ」同様凝っていてあきさせない。タイトなリズムセクションに叙情的なメロディー。A①のタイトル曲はコロコロと鳴るピアノがいい。中間で入る混声合唱も斬新だ。A③はピアノとバイオリン(ルチオ・ファブリ)で切々と歌うバラード。B③もきれいな曲で、B⑤はオルガンをバックになかなか聴かせる。A⑤、B④のようにリズムセクションを活かしたノリのいい曲もある。特にB④は、これぞフュージョンという典型的なインスト。たまにこういうの聴くと気持ちいい。イタリアの'76年でこの音は珍しい。（渡辺一己）



IVAN GRAZIANI
I Lupi

'77
●Numero Uno ZPLN 34004
○
◉

'72年にリコルディよりリリースされたフンカ・ムンカの名作「ジョバンナに捧ぐ」において、多くの作詞、作曲及びオーケストラの指揮などで貢献したグラツィアーニの2ndアルバムである。1stはフンカ・ムンカ風の曲が数曲ありマニアに人気があったのに対し、本作は軽く見られがちである。内容は以前のものとは曲想が違うがセンスのよい良質のロック作品として認めることができる。A面前半のスピーディなギターに乗せて切れ味のよいヴォーカルで歌う様はなんともカッコよく、またA④の叙情的な曲には心打たれるものがある。共演者にはあのジノ・デリソなども参加しており演奏面でも楽しめる作品である。（井波）



IVANO ALBRTO FOSSATI
Il Grande Mare Che Avremmo Traversato

'73
●Fonit Cetra LPX21
○Fonit Cetra CDM 2039
◉

デリリウムのリーダーであったイヴァノ・フォッサーティのソロ1stである。デリリウム時代の彼のフルートそして、歌い回しは変わっていないが、曲全体を通して、ジャズのエッセンスをもり込みながら、ときどき顔をだす生のストリングスが曲の流れに変化をつけデリリウムよりも聴きやすくなっている。曲からくるイメージは、ジャケットの海辺と、街並みの風景をよく表わしており、あの郷愁をそそる。けだるい感じのヴォーカルが不思議な魅力をかもしだしている。その後、現在まで数枚のアルバムを発表するが、彼が作った曲はロレダーナ・ベルテなどに歌われヒットし、ライターとしての力を発揮している。（山中）



IVANO ALBERTO FOSSATI、OSCAR PRUDENTE
Poco Prima Dell'Aurora

'73
●Cetra/Numero Uno LPX24
○Fonit Catra CDP 415
◉

デリリウム直後の1stソロに並行するイヴァノ・フォッサーティ絡みのアルバム。ヌメロ・ウーノ所属のカンタウトーレ、オスカー・プルーデンテを立てたデュオ・アルバム。レーベルも二人の所属を表してわけのわからない番号だ。ジャケは「Time Of Change」がたそがれた?。プルーデンテの落ち着きのある作風を反映してか、フォッサーティもヴォーカルにフルートにとデリリウムが見え隠れするものの、おとなしい。ドラムにジャンニ・ダッラリオ他多数のゲスト。ミディアム・テンポの曲が多く、またアコースティック・ギターのフォーク感覚が出てくるあたりに、プルーデンテの色を感じる。さらりとしたプルーデンテ、少し冷えたが暑めのフォッサーティ、両者が歩み寄りを見せバランスのある1枚。（松本）



JENNY SORRENTI
Suspiro

'76
●EMI 3C 064-18174
○
◉

アラン・ソレンティの妹、そしてSAINT JUSTのヴォーカリスト、ジェニー・ソレンティの1stソロ。混沌の躍動そのものナポリが育んだミュージシャン一派の中でも紙一重の所を彷徨したかのようなソレンティ・ファミリーの花だけに期待を負わされるこのアルバムだが、グループの2作目が予感させたように、意外にオーソドックスなので注意。それでも十分に面影を残すナンバーはある。そして全然イタリアらしくない。というよりも、こうした側面もあるということだろう。上ずったような歌声をルチオ・ファブリ(vln)やトニー・ヴェルデ(b)、ピノ・ダニエーレ(g)ら数名がバック・アップする。好作だと思う。冴え渡るウンベルト・テレスコのデザインも素晴らしいが、アウトサイドな彼の姿も納得した。（松本）



JENNY SORRENTI
Jenny Sorrenti

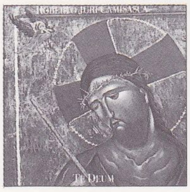
'79
●RCA PL 31425
○
◉

ソロ第2弾。SAINT JUSTのフォーク・ロック・ルーツがうかがえる。このアルバムを捧げた3人の内の一人はサンディ・デニーとある。ジェニー・ソレンティの魅力は、思うに女性の未分化な情緒の揺れにあって、SAINT JUSTはその特性を揺れのままに彩ったおおらかさで成り立っていたと思うが、「Suspiro」を経て、彼女はこのアルバムですっかり落ち着いているように感じる。長い髪も短く小綺麗になった。演奏も歌もずっと安定感がある。何かが落ちた。その何かが幸運にも記録として残っているからには、これは予測できるとは言え凡庸に映る。代替に成り得るアピールに欠ける。SAINT JUSTは再現のきかないその時かぎりの刹那さがあまりに眩し過ぎるのだ。今見返しても稀有の産物だと思う。（松本）



(ROBERTO) JURI CAMISASCA
La Finestra Dentro
'73
●Bla Bla BBXL 10005
○Artis ARCD 028
◉

今や大スターとなったフランコ・バッティアートだが、'70年代にはBLA BLAレーベルを設立し、意欲的、前衛的なポリシーを持つアーティスト達の作品をリリースしていた。これらのグループにはカプシクム・レッド、アクチュアラ、オサージェ・トリベetc. がいるが、このユリ・カミサスカなるシンガーもBLA BLAが世に送り出した極めて個性的なソングライターである。ギターの弦をかきむしるような神経症的な歌声で独特の世界を演じている。本作発表後、しばらく活動は伝えられていなかったが、'80年代になると再びバッティアートと組み、作曲を手がけたり、ミサ曲風のソロを2枚(「Te Deum」、「Il Carmelo Di Echt」)リリースして活動を続けている。バッティアートの名作「Fisiognomica」中、〝Nomadi〟は彼の曲。 (山崎)



(ROBERTO) JURI CAMISASCA
Te Deum
'88
●L'Ottava 64 7915291
○
◉

ユリ・カミサスカは、バッティアートが'70年代にブラ・ブラ・レーベルを主宰している時、1枚のソロをリリースしたことがある。15年降りにリリースされたこのミニ・アルバムではモノフォニーのミサ曲をラテン語で静かに歌い、バックはパイプ・オルガンのイメージを持たせたエレクトロ・キーボードによる持続音である。ポップス界とは全く無縁の音で、むしろポポル・ヴフや、あるいはグレゴリオ聖歌のようなイメージで接すれば良いだろう。いつの時代にも、氾濫した情報の中に身をさらしながら音楽を聴く者にとって、何らかの精神を浄化できる音楽を持つことは必要なことではないか。音楽自体には決してメッセージは持たぬが、そういう意味で大切な音であると思う。 (山崎)



(ROBERTO) JURI CAMISASCA
Il Carmelo Di Echt
'91
●EMI 66 7972022
○EMI 66 7972021
◉

'70年代にはアヴァンギャルドな唱法のカンタウトーレとしてブラブラよりソロをリリースしたユリ・カミサスカだが、'80年以降はバッティアートに曲を書いたり、又、風合いの変わったソロ・アルバムを出したりとチラチラと僕達の目に止まっていた。これは'91年リリースの久々のソロ・アルバムで、フル・アルバムとしては実に18年降りのことである。このアルバムのイメージは何と「FISIOGNOMICA」の頃のバッティアートそのもの。あの中の彼の曲〝NOMADI〟と同傾向の曲が収められているといえば、わかる人にはわかるはずだ。久しぶりに心にしみるイタリア系の作品に出会えたという印象が強い。 (山崎)



KAY HOFFMANN
Floret Silva
'85
●Belle Antique 8502
○
◉

フロレット・シルヴァはドイツ人女性ケイ・ホフマンを中心にフィレンツェで結成されたグループで、ピエロ・リュネールのジャクェリーネ・ダルビィやガイオ・キョッキョ等を迎えて77年にアルバムを一枚制作した。中世歌謡カルミナ・ブラウナを原曲に彼等独自の解釈をほどこしたもので、ピエロ・リュネールやオパス、アヴァントラ等と同等に評価されて然るべき作品である。彼等個々のメンバーの音楽的素養は多岐に渡るが、それが良くこなれた形でサウンドに反映しているのが素晴らしい。このアルバムはリリースされることなくオクラ入りになっていたものを本誌ベル・アンティーク・レーベルが85年にリリースしたものである。グループ解散後はメンバー達はソロ活動を続けている。 (山崎)



LEANO MORELLI
Leano Morelli
'77
●Philips 6323 047 A
○
◉

このLPはフォノグラム時代のシングル曲を4曲加えてデビュー盤として発表された。6曲目の〝Nata Libera〟は彼の初ヒット。フォノグラム時代の曲で、シングルのB面は〝La Voglia Di Te〟。両曲とも当アルバムゐ収められているが、このシングルが彼の最高作といえるだろう。カンタウトーレとして'80年代はフォニト・チェトラからアルバムを発表し続けたが、ロマンチックな歌は不得手だったために、名前を知られることなく現在に至っている。プログレッシヴ・ロックの影響はあまり顕著ではないが、アルバムのB面の流れはイタリアン・ロック・ファンに強くアピールするものがあるだろう。翳りのある曲が秀逸。 (HIRO TANAKA)



LEANO MORELLI
Leano Morelli
'78
●Philips 6323 061
○
◉

全体に1stより洗練され、スケールアップした感のある2nd。それは曲が良くなったのはもちろんのこと、バックメンバーを固めてプラスを除いたことによる。A①・B②はメロデイアスなアコースティックギターと弾むようなオーケストラが印象的。A②〜⑤はリズムセクションをはじめバックの充実ぶりが耳につく。特にオーケストレーションも含めてキーボードは、アレンジャーで有名なあのRUGGERO CINIである。B③・④の2曲ではルチオ・ファブリ、ステファノ・プルガ、ジャンニ・ダラッリオらによるメロディアスな演奏が聴ける。前作よりは曲に統一感があり粒揃いになったことはいいのだが、前作のB①のような印象に残るメロディーがないのが残念である。 (渡辺一己)



LENA BIOLCATI
Ballerina

'87
●CGD 20625
○
◉

POOHのドラマー、ステファーノ・ドラツィオがプロデュースを手掛けた女性ヴォーカル作品。10曲中8曲の作詩も彼の手に依るもの(因みに他の2曲はそれぞれモゴール／バッティスティ、ビオルカティ自身の詩とPOOHのドディ・バッタリアの作曲)。他の3人がソロ・アルバムを発表しているのだろう。ディジタル系キーボードを主体としたアレンジの本作は、この頃のPOOHやMATIA BAZAR、アリーチェが聴ける人ならば充分に気に入る筈。特にしっとりとしたバラードの出来が良い。彼女は本作以後にもアルバムを発表しているが、前後の活動については残念ながら筆者は未詳。女性ヴォーカルの好きな方にお薦めしたい。 (高山)



LEO NERO
Vero

'77
●EMI 3C.064 18272
○
◉

IL BALETTO DI BRONZOのキーボード・プレイヤー、ジャンニ・レオーネはレオ・ネロと改名して77年に1stソロアルバムを発表した。その存在自体は早くから知られていたが、地味なカヴァーが災いしてか日本に初めて入って来たのは意外に遅かった。様々な憶測が流れていたが出来としてはほぼ期待通りのものと言ってよさそう。A面は歌を中心にしたちょっと意外な展開であるが、典型的なイタリアンサウンドで、十分に楽しめる。圧巻はB面のプログレパートだ。多種多彩なキーボード群を自在に操り、若干ヘヴィな面が失われつつあるものの、バレット時代を彷彿とするプレイで聴く者を陶酔の世界へいざなう。なお、3年後に発表した2ndソロ〝Monitor〟はニューウェイブ色の濃いものになっている。 (江田)



LEO NERO
Monitor

'80
●EMI CBL 1004
○
◉

レオ・ネロ生き残りをかけた2nd。絶対の自信作だった1stソロ「Vero」が全ったくといっていい程売れず、プレスの評判も悪かったことから、試行錯誤の末アメリカはハリウッドでの録音。音の方はなんと！パンキッシュ・テクノ・ポップ!?A面はバンドを従え、B面は彼の操るキーボードとリズムボックスによるソロ録音。ポップで耽美的なサイキデリック色を持った内容は、数曲でヨーロピアン・デカダンスとでも言える部分も感じられる。しかし、この時期にこの内容、録音場所はニューヨークロンドン又は、東京を選ぶべきだったのでは?インナーフォトのハリウッド・ブルーバードで気どって見せるレオ・ネロが何故か悲しい。この後彼はシーンから完全に姿を消した。 (木下)



LEONE TIERI
Un Fiore Sulla Mondezza

'70
●Produttori Associati PA-LPS 35
○
◉

当り前のことだが、肉声とはなんと素晴らしく深く広大な可能性を秘めているのだろう。とてつもなく暗く、測りようもない悲しみを背負いながらこの異端のボーカリストは、我々に未経験の地平を垣間見せてくれる。地を這い、時に呪文のような重く切々たる彼の怨念の如きボーカルが、全体を支配し覆い尽くす中、後にバンコの要と成るVittorio Nocenziの奏でるキーボードの音色が、とても不思議な彩りを添えている。極めて主観的で個人的な好みの為、異論の出ることを覚悟して言うなら、'70年前後のアルバムの内、最も特異で重要なものである。存在自体信じ難く奇蹟的なこのアルバムはイタリアン・ロックの大いなる遺産の1つとして語り継がれるべきである。
(鈴木伸一)



LINO CAPRA VACCINA
L' Attesa

'92
●Lynx Z 00841
○
◉

AKTUALAのオリジナル・メンバーだったリノ・カプラ・ヴァッチーナは、'70年代にはカミサスカやバッティアートのアルバムに参加し、その後もアリーチェやジョルジュ・ガベール等への参加を通してイタリアでは最も重要なパーカッショニストの一人として高い評価を受けている。これは'80年の1stソロ「Antico Adagio」に続く2ndソロになるもので、地中海音楽のエッセンスをプログレッシヴ・ロックのイディオムに抽入したようなたおやかなイメージがある。AKTUALA以来の彼の目指す方向性が、洗練された響きと流れによく出ている。ヴァッチーナのヴィブラフォーン等を中心に、カミサスカ(vo)、ロベルト・コロンボ(kbd)他多数のサポートを得て製作された。
(山崎)



LINO RUFO
Notte Chiara

'78
●Una ZPLU 34035
○
◉

ギター：Danilo Rustici、ドラム：Massimo Guarino、2曲のヴォーカル・クレジットにジェニー・ソレンティ等、雑然とした裏ジャケットを見ていると、更にアラン・ソレンティやトニ・エスポジト、ウンベルト・テレスコと次々と名前が見つかる。ナポリ・ファミリーの1枚らしく少しごった煮の作風になっている。曲が途中で切れてしまったり、スタジオ内や屋外のマテリアルがコラージュされたりもする。歌メロで聴かそうとしたカンタウトーレ物とは少し性格の違ったアルバムだ。B③を始め「Suddance」製作中のD.ルスティーチがたっぷりとソロをとってくれるし、J.ソレンティの声も聴ける。特にルスティーチがオザンナそのままで熱も入っている。コネクションの楽しさを味わえる。 (松本)



LOREDANA BERTÉ
Streaking
'74
●CGD 69073
○CGD 9031 77234-2
◉

とても美しいカヴァーデザインが印象的なロレダナ・ベルテの1stアルバム。アクタ・フラジーレの1stより一回り大きい6面開きのジャケの内部はタイトルからも想像がつく様に彼女の全裸写真で綴られており、話題性も十分と言える。ただ、薄手のジャケのため傷み易いのが難点。ジャケのイメージとは裏腹に、音の方は軽快なノリで押す割とオーソドックスなロック調のナンバーが目立つが、彼女の持ち味であるハスキーヴォイスが十分に生かされた展開で、元デリリウムのイヴァノ・フォッサーティ参加の下、現代風の音作りで迫る近作とは異なる素朴な味わいが感じられる。2nd〝Normale O Super〟ではロック色が薄まり、歌物としての体裁もかなり整ってくる。(江田)



LOREDANA BERTE
Normale O Super
'75
●CGD 81178
○
◉

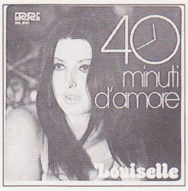
マルチェラの〝ベラ〟と共にイタリアン・ポップスの女性シンガーの名作となれば本作を外す訳にはいかない。デビュー作〝ストリーキング〟はとりわけ秀れているはいえず、彼女のヌード写真によるジャケットの方が評判を呼んでしまった。セカンドに当る本作ではマルチェラと同じくヴォーロのメンバーが全員でないにしろ演奏を担当しているのも話題のひとつ。A⑤は正しくヴォーロ・サウンド。時には激しく、時には優しく歌いかけるヴォーカル、曲の完成度共に申し分無い。その中でもしみじみと歌われるオスカー・プルーデント、イヴァノ・フォッサーティ(元デリリウム)作詞・作曲によるA③は涙の名曲である。その後、年に1枚ぐらいのペースでアルバムを発売し続けている。

(吉瀬)



LORETTA GOGGI
Pieno D'amore
'82
●WEA 2400401
○
◉

このロレッタ・ゴジッという人は、'60年代からつい最近まで、ひょっとするとまだ現役かも知れない、女性ポップ・シンガーです。イタリア人女性としてはごく平均的な、少し低めの歌声です。C.カセッリなどが辿った変遷を彼女も辿り、若い頃はベレー帽を被るなど可愛いぶってポップスを歌っていたので、段々「大人の歌」(ヘンなの.／)を歌うようになり、その中にストリングスの導入などで音が厚くなったのが1枚あったというのが本作です。特に有名な人はついておらず、ストリングも控え目ですが、ゆったりとした歌物の好作です。特にシングルにもなったタイトル曲のサビの「ア〜ア〜モ〜レ」という節回しは、心底イイです。他のアルバムも、私が聴いたものには、大ハズレはありませんでした。美人ですよ。(斎藤)



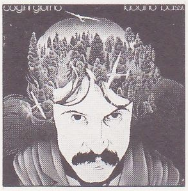
LOUISELLE
40 Munuti D'Amore
'73
●Erre RRL 2010
○
◉

'60年代はカテリーナ・カセッリやパティ・プラーヴォのようにビートを歌って人気があった。特に映画音楽で知られるエンニオ・モリコーネのアレンジの曲が多かったので、ビート時代のものはコレクターズ・アイテムになっているものもある。'70年代に入ってビートが下火になると、トラディショナルに方向転換したが他のアンナ・イデンティチやオリエッタ・ベルティのような成功を得られなかった。RCAを離れてからはマイナー・レーベルを転々とし、次第に忘れられてしまった。当アルバムは再度ロックに取り組んだもので、カセッリが変身したのが同時期なのも時代を反映して面白い。ただしこのルイゼルはトラッドから先祖返りしたような形となった。幾曲かプログレッシヴなアレンジのものがある。(HIRO TANAKA)



LUCIANO BASSO
Voci
'76
●Ariston AR/LP 12288
○
◉

ルチアーノ・バッソはシリアス・ミュージックの素養を生かして麗美なサウンドを創り出すアーティストである。'76年にリリースされたこの1st「Voci」では、バッソの奏でるピアノ、メロトロン、チェンバロ、オルガン等を中心に、ヴァイオリン、チェロ、コントラバス、ギター等のリード楽器を巧みにからませて見事な叙情美を創り出すことに成功している。'78年に2nd「Cogli Il Giorno」(ゆったりとした曲想で幻想美を表現した名作)、'79年に3rd「Fram Menti Tonali」(サティ風の室内楽小品集)、'80年に4th「Luciano Basso」(より難解な現代音楽風)の計4枚の作品をリリースしている。実力あるコンポーザーだけにその後の動向が気になるアーティストである。(山崎)



LUCIANO BASSO
Cogli Il Giorno
'78
●Ariston AR/LP/12333
○
◉

1stのバンド形態は引き継ぎつつも、木管やストリングス・アンサンブルにソプラノを加え、ドラムレスの編成とした2nd。エレクトリック・ギターやシンセを含めたアンサンブルの融和度は力闘型クラシカル・ロックだった前作からは長足の進歩を遂げており、その軸となる彼の流麗なピアノが実に生きている。全体に漂うイメージはパストラルな情景でこそあれ、細部に渡る精錬ぶりはまさに「造形美の妙」とでも言うべきものだが、それはヨーロッパ文化の一つの核であったイタリアならではの美意識を感じさせる。もしこの場で「チェンバー・ロック」という表現を使う事をお許しいただけるなら、この作品はイタリア最高峰の一枚であり、全世界的にみても極めて高水準のものと言える。

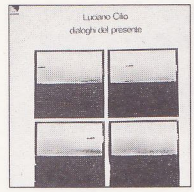
(山田)



LUCIANO BASSO
Frammenti Tonali

'79
●Ariston AR/LP 12354
○
◉

現在まであまりその存在を語られる事のなかった一枚。製作年やレコード番号との関連で考えるに、恐らく本作が彼のサード・アルバムだと思われる。A面はピアノ・ソロ集、B面はオーボエ、ファゴットとのリリカルなトリオとゆったりとしたストリングス・アンサンブルがそれぞれ収められている。バッソの作品群を総括すれば、「シリアス畑のミュージシャンのロック的アプローチ、そして回帰」と言えるだろうか。いかにサウンドがそれ風ではあっても、彼の根本となる音楽性はロック・スプリットやパッションとは異質のものだ。本作はそうした彼の「回帰」の部分を象徴する様なやや現代音楽にも近い作風のため、ロック系リスナーが聴くにあたっては多少視点のシフトが必要かと思われる。（山田）



LUCIANO CILIO
Dialoghi Del Presente

'77
●EMI 3C 064-18253
○
◉

とても感覚的な音楽だ。心象風景を音でスケッチしたような稀薄さがある。フリー・ミュージック、チェンバー・ミュージック、現代音楽等、それらの言葉がイメージする音楽の境を曖昧にしていく感性の作品だ。五つの曲が収録されており、トニ・エスポジトを始め数人のミュージシャンとのつかず離れずの演奏が続く。ピアノ、オーボエ、ヴァイオリン、ソプラノ・コーラス、生ギター、パーカッション等による静謐で時としてアンニュイなサウンドが思いをめぐらせるように淡々と続く。意味合いづけの堅苦しさは無縁だから展開もしない。イタリアには非常に珍しいタイプのアルバムだ。楽器の音数や種類こそ多いもののローデリウス等と似た方向性を持っている。ゆったりと気を静めると更にイメージが広がる。（松本）



LUCIO BATTISTI
Lucio Battisti

'70
●Ricordi SMRL 6063
○
◉

1943年リエティ近郊のポッジョ・ブストーネ生まれ。モゴール（ジュリオ・ラペッティ）と組んで作られた彼の曲は'60年代からのイタリア歌謡界に多大なる影響を与えた。ミラノのリコルディ・レーベルで仕事を始めた頃は作曲が中心で、ディク・ディクは〝Il Vento〟、エクィプ84は〝29 Settembre〟を歌いそれぞれヒットさせた。'68年からは自分で歌うことを決心し、カンタウトーレとして本格的に活動を開始した。'69年あたりから曲調が大きく変化し、それに取り組むために自らヌメロ・ウノ・レーベルを開設。音楽祭出場拒否を宣言しコマーシャリズムとの縁を絶とうとした。すぐ後にリコルディとの契約が切れ、本人もヌメロ・ウノに移った。プログレッシヴ・ロック・シーンに多大な影響を与えた人物。（Hiro Tanaka）



LUCIO BATTISTI
Amore E Non Amore

'70
●Ricordd SMRL6074
○Ricord CDOR 8030
◉キング KICP 2105

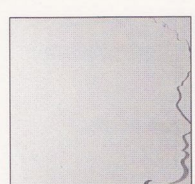
バッティスティが'70年に発表した本作は、イタリアン・ロックの原点としてその歴史的な評価を下すべき一枚。当時カンタウトーレとして新しい試みを始めたバッティスティの回りに、後にPFMを結成する4人、トレのラディウス、そして後にアレンジャー、ソリストとして頭角を現すダリオ・バルダンが集まりこのアルバムを制作したのである。ヴォーカルナンバーとインスト・ナンバーが交互に配され、特に後者は、バック・ミュージシャンの才能が凝縮した当時としては大変先鋭的なものであった。もっと評価されて然るべき作品。オリジナルのファースト・プレスはコーティングされたダブル・ジャケット。現在はもちろんCDにて入手可能。（山崎）



LUCIO BATTISTI
Emozioni

'71
●Ricordi SMRL
○Ricordi CDOR 8199
◉

この人がいなかったら、PFMとフォルムラ・トレはなかった。当然イル・ヴォーロもなかったことだろう。カンタウトーレ（英語で言うシンガー・ソングライターのこと）の第一人者としても測り知れない人だが、イタリアン・ロック・ファンにとってみれば、その事柄はあまりに大きすぎる。それ以上にバティスティを知らないイタリア人はいないわけだから、まさにイタリアのドンといった存在である。このアルバムは彼が巣立つ前のリコルディ時代のもので3枚目のアルバムに当る。まだオーソドクスに歌ってはいるが、すぐ様彼と判る癖はある。DIK DIKをバックにした曲もある。例えば歌謡曲と別路線をとった当時の井上陽水のような存在のこの頃の彼である。ビートも名残るが、バラードにもたける。（松本）



LUCIO BATTISTI
Vol.4

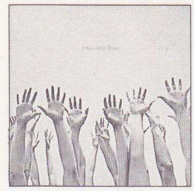
'71
●Ricordi SMRL 6091
○
◉

バッティスティのヴォーカルは上手い下手、声質云々を超えたところがある。声量があるわけではないし音程も怪しい、声質も冴えないものだろう。字あまりなはずしが様になる歌い方をする。リコルディ時代最後になるこのアルバムではそうした面がいよいよ出てきて、加えてバックもアグレッシヴな面がある。A②の7分を超える彼のヴォーカルとハモンド・オルガンの弾き込みが、ハード・ビートの上でかけ合うなどは、その典型。この曲を含めてほとんどがモゴールとの共作になっている。その中でも感動的な歌い上げがしみったれるように濃い〝Pensieri E Parole〟〝Mi Ritorni In Mente〟等は出色。他にブルース・ベースのハード・エッジなB③等、曲の粒/個性がそろっている。gは多分ラディウス。（松本）



LUCIO BATTISTI
Umanamente Uomo : Il Sogno
'72
●Uumero Uno ZSLN 55 060
○BMG Ariola PD 74009
◉

傑作。彼のヌメロ・ウーノからの再デビュー1作目。このアルバムはイタリアのポピュラー・ミュージックが急速に開けていった流れに同調して一際初々しい。リコルディ時代にのぞいていた私的感情はもはやアルバム全体に行き渡り、息使いも感じ取れる程リアルになっている。想いを焦がすような1曲目の曲想に早や彼の色を見れるが、一転してコケティッシュなタッチで爽やかさを振りまく2曲目へ、更に鼻歌で曲想をつくりあげてしまうタイトル曲等、自在に彼が動く。そこに曲ができあがる。モゴール＝バッティスティの共作を印づけたこのアルバムに捨て曲が1曲もない。それと判るチコのドラミングもかけ出しのD.B.ベンボのキーボードも彼の自由気ままな歌声に吸収される。心に残るアルバムだ。 （松本）



LUCIO BATTISTI
Il Mio Canto Libero
'72
●Numero Uno ZSLN 55660
○BGM Ariola PD 74010
◉

ヌメロ・ウーノ時代でもっとも穏やかさを感じさせてくれるアルバム。穏やかで少しアコースティックなニュアンスが、同年ヌメロ・ウーノからリリースされたPFMの「Per Un Amico」や、やはり弟子分に当るフォルムラ・トレの「La Grande Casa」に通じる。バックにはGianni Dall'Aglio、Cicco、Lavezzi、Radius、Lorenzi……とトレ、イル・ヴォーロのメンバーが大きく絡んでいることもあるのだろう。前作には、トレが取り挙げた〝Sognando E Resognando〟の原曲を収録していたが、本作のタイトル曲などは「La Grande Casa」やイル・ヴォーロの1作目あたりに入っていておかしくない曲想だ。バッティスティの音楽は喜怒哀楽を歌うというよりもそれを感じさせてくれるそこにらしさがあると思う。 （松本）



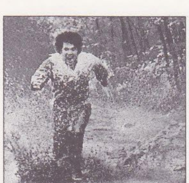
LUCIO BATTISTI
Il Nostro Caro Angelo
'73
●Numero Uno ZSLN 556600
○BMG Ariola PD 74011
◉

非常に内省的な、ブラジルから帰っての一作。例によって、ダラリオやボブ・カレロ、レヴェルベリが参加しているが、むしろ音作りは簡素で、文明批評や人生に対する深い洞察をストレートに訴えた、とても素晴らしい作品だ。これはおそらくブラジルでの経験からであろうが、虚飾の人生と訣別し、シンプルで地に足のついた生活への強い意志が全編に渡って表現されている。どこかで邦盤（RCA 6247）を見つけたら歌詞を読んでごらん。なお叙情的なA④タイトル曲は絶品。また音作りも重厚なB④は、見かけは幸福そうな男女の間に潜む〝毒〟を歌った、鋭くも実に艶かしい作品。（その名も『バラ地獄』）次作「アニマ・ラティナ」で音の完成度は増すが、シンガーとしての彼の最高作は本作だ。 （須藤）



LUCIO BATTISTI
Anima Latina
'74
●Numero Uno DZLSN 55675
○BMG Ariola PD 74012
◉

〝ラテンの魂〟というタイトルに掘り下げが読める。集約されたタイトルだ。このアルバムは熱狂と郷愁の入り混るスピリットを音に反映したに止まらず、彼個人の追求がルーツへ立ち返ろうとするアーティスティックな方向性としてよく出ている。非常に濃い内容だ。故フェリーニの密度に近いものがある。オープニングの7分間、彼はもはや歌を歌っていないと言っていい。その息の漏れやハミングのかすれでさえ多くを語ってしまう存在感、イル・ヴォーロ並みに胸の透く音の拡がり、強い郷愁感、そしてカタルシス。あらゆる要素が入り混り一つのカラーになってやがて透き通るまでに浄化される。非常に複雑な音作りにして簡潔な内容の究極作。ラディウスやラヴェッツィも参加し献身度大。形式を超えた非凡の作。 （松本）



LUCIO BATTISTI
La Batteria, Il Contrabbasso, Eccetera
'76
●Numero Uno ZSLN 55685
○
◉

前作「Anima Latina」で一つの決算をした感のあるバッティスティ。それが窺えそうな次作になるアルバム。身軽になった気がする。もしかすると、アルバム指向に片寄った前作の反動か、もしくは本来のシングル指向の作曲に戻らざるを得なかったのか、いずれにしても前作があって、このアルバムとその後暫くの彼の音楽があることは確かだろう。ちょうどこの頃はロックへの近接期を過ぎて、尚かつRicordi時代からの作風に戻っているので、音作りにわずか抜けが出て一回り大きくなったことの余裕が感じられる。「Un Donna Per Amico」あたりまで行くともう少しふっきれるので、その点では移行期という気がしないでもない。もう一歩曲を書き込んでほしかった。 （松本）



LUCIO BATTISTI
Io Tu Noi Tutti
'77
●Numero Uno ZPLN 34006
○
◉

前作からそれまでのトレ、ヴォーロ系のミュージシャンの起用をやめたようで、それは前作のやけに洗練されたKbdのバッキングなどによく出ていた。今作のクレジットを見ると英米系の人々で固められている。ギターのバッキングにしても、なるほどファンキーだったりもする。イタリアに多い甘い流し、起伏が少ない。もともとその点ではオーケストラを使わず一種フォーク・シンガーのようにシンプルなバッティスティだから、歌詞が判らない以上は通好みのカンタウトーレではある。このアルバムはそれにも輪をかけるようにインターナショナルな方向性があり、イタリアからは遠のいたかに思える。そこをくい止めて染め返すところが、彼の歌、その一声聴けばバレてしまう存在感である。前作の延長線上にある。 （松本）



LUCIO BATTISTI
Una Donna Per Amico

'78
●Numero Uno ZPLN 34036
○BGM Ariola PD 74181
◉

初期の作風から徐々に抜け出してきたバッティスティは、この'78年リリースの〝女友達〟で1つの完結をみたように思う。どことなく泥くさく、又、プログレッシヴ・ロックからのフィードバックによってアイデンティティーを形成していた初期の作品群に比べると、このアルバムは都会的なイメージである。アレンジもいらないものを再整理して、明確な感じになっている。バッティスティのように、長いキャリアの中で各時代の中で確かなアイデンティティをつかむことのできるアーティストはそうざらにはいるものではない。（山崎）



LUCIO BATTISTI
Una Giornata Uggiosa

'80
●Numero Uno ZPLN 34084
○BMG Ariola PD 70079
◉

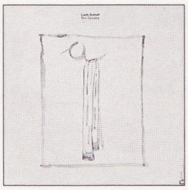
ルチオ・バッティスティが自作の中で作詞家モゴールと組んだ最後のアルバムである。'70年代後半、アメリカで2枚のアルバムを制作したが、前作「UNA DONNA PER AMICO」からはイギリス系ミュージシャンを起用しPRODUCE, ARRANGEはGEOFF WESTLEYでバックはPETE VAN HOOKE, STUART ELLIOT, ANDY BROWN, PHIL PALMERという様にCLAUDIO BAGLIONIのアルバム「STRADA FACENDO」と全く同じラインナップに、MEL COLLINS, MAURICE PERT, JOHN GIBLINといった客演が見事に成功した好アルバムに仕上がっている。バッティスティはFORMULA TREやPFMを育てた存在としてのイメージが強いが、ポップスとして聞けばバッティアートと並んで最高峰だろう。CDのみ〝CON IL NASTRO ROSA〟がマルチの最後まで聞く事が出来る。（片山）



LUCIO BATTISTI
E Gia

'82
●Numero Uno ZPLN 34182
○
◉

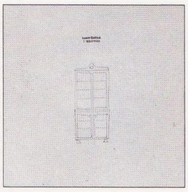
'78年作の「Uno Donna Per Amico」までは'70年代的なイディオムでアルバムが制作されていたが、前作「Una Giornata～」あたりから徐々に新しいイディオムを楽曲に取り入れ出した。そしてその新イディオムが色濃く現れたのがこの'82年作の「E Gia」だ。フェアライト系のディジタル・キーボード群とドラム・マシーンの組みあわせの上にバッティスティの歌がのるタイプ。このスタイルは「Don Giovanni」で完成されるので、この作品は過度期の作品といえると思う。難をいえば、こまかいことかもしれないが、カヴァー・デザインがヒプノシスのそれに似すぎていること。バッティスティ程の大物の歌を包むパッケージに、このコピーもどきは似つかわしくないと思うのだが……。（山崎）



LUCIO BATTISTI
Don Giovanni

'86
●Numero Uno PL70991
○
◉

ルチオ・バッティスティ近年のアルバムは、'60、'70年代の作品群とは作風が極端に異なる。いわゆるカンタウトーレ色は姿を消し、代わって最新鋭の機材による今日的なリズムに乗って淡々と歌われるナンバーの数々には驚かされる。本作は通算14作目、まさにこうした傾向の直中にあるアルバムである。一聴すると単なる都会派ポップス、二度、三度と聴き込むうちに独特の空間に引き込まれてゆくのがわかる。最後には、これはバッティスティ以外の何者でもないのだ。と納得させられてしまう。よく聴くと気付くはずだが、ここには彼が20年来培ってきたスタイルが、微妙な穏し味としてのみ使われているのである。軽いフットワークの中に、さすが大物の風格が漂う。（古田）



LUCIO BATTISTI
L'apparenza

'88
●Numero Uno PL 71850
○BMG Ariola PD 71850
◉

'86年の作品「Don Giovanni」は現代的なキーボード・サウンドとバッティスティの歌が見事に融合した傑作であった。それから2年、このアルバムに聴くことのできる作風は「Don Giovanni」の延長線上のものだ。同じロビン・スミスのアレンジながら、今回のアルバムは、あまりに簡素化が進んだ為に、必要であるはずのものまでがそぎとられてしまったような感じで、あいかわらず洗練されてはいるが「Don Giovanni」の頃の豊かさが欠けてしまったように感じる。最も20年近くも活動をした後、現代のイディオムを自分に従属させてしまった「Don Giovanni」自体が奇跡のようなアルバムであった為に、後のアルバムが色あせて聴こえるのかもしれない。（山崎）



LUCIO BATTISTI
La Spoca Occidentale

?
●Columbia CDS 466727 1
○Columbia 466727 2
◉

「DON GIOVANNI」で'80年代の頂点を極めたバッティスティは、その後、さらにサウンドがシンプル化してきた。「L'APPARENZA」そしてこのアルバムとアレンジは恐ろしい程にシンプルになっていく。それに伴ってカヴァー・アートもシンプル化されてきた。僕にとっては、古色あるストリングス系キーボードとディジタル・サウンドが見事に融合した「DON GIOVANNI」の印象が余りに強い為に、そのサウンドを骨だけにしていくような後の2作の制作意図がつかめない。バティスティの時代は去ったのか？それともこれはとてつもない作品の前の静かな前兆なのだろうか？（山崎）



LUCIO BATTISTI
Cosa Succedera Alla Ragazza

'92
●
○Columbia 472328 2
◉

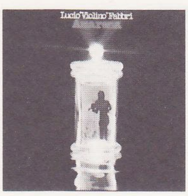
師匠の「打ち込みモノ」第3弾。ハウスの虚無的唯物空間に限りなく近づいている。しかしヴォーカルは昔ながらの、やけに人間臭いあの声だから、その違和感たるやただものではない。もう、売れる、売れないの次元をとうに超えてらっしゃるだろうから、我々凡人がどう詮索しても無駄である。しかもディジタルに変身してからの師匠は、お顔さえお見せにはならない。一見、アーパーなダンス・ビートの奥に何を見るかはあなた次第。お若い方に、驚愕の事実をひとつ。バッティスティはフォルムラ・トレ、PFMの師であった方だ。さすが、師匠。（古田）



LUCIO DALLA
Terra Di Gaibola

'71
●RCA PSL 10462
○BMG Ariola ND 74270
◉

ルチオ・ダッラはコッチャンテ、バッリョーニ、デ・グレゴーリらと共に70年代のカンタウトーレ・ブームを担う一人である。大御所バッティスティがあまり人前に姿をあらわさないのに対し、彼はライヴを精力的に行っている。そのために現在でも圧倒的な人気を誇っている。さて彼の名が一般的になったのはサンレモ入賞曲〝4 Marzo 1943〞という曲であり、そのときのパートナーはエキペ84だった。当時この曲はアメリカ兵とその情婦であったイタリア娘との間に生まれたダッラ自身のことを歌詞にしていたために、同情票が集まったものと思われた。しかしこのアルバムからはその後のダッラ独自の世界を展開することが暗示されている。あまりにもイタリア的な人である。（裕生）



LUCIO "VIOLINO" FABBRI
Amarena

'78
●Cramps 5205 851
○
◉

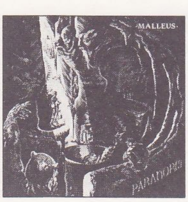
マロウ・パガーニに替わってPFMのメンバーとなり、また、クランプス・レーベルの数多くの作品でも巧みなサポートを見せたルチオ・ファブリのソロ。Walter Calloni（ds）、Hugh Bullen（b）、Claudio Pascoli（sax、fl）らの協力を得て、ファブリが才人ぶりを発揮した力作である。ファブリはバイオリンを始めとしてヴィオラ、チェロ、ギター、シンセ、ベースを見事に使い分け、バラエティに富んだ演奏を展開している。ジャズィに、ポップに、そして、クラシカルに、いずれの形態においても彼の演奏は極めてテクニカルである。種々の音楽的要素を取り入れたためアルバムとしての統一感にやや乏しく、また、一部リズム・セクションがファンキィーなため軽い感じを受けるが、音楽的完成度の高い作品である。（賀川）



LUIGI CINQUE
Tarantula

'81
●In-Contro IN 12002
○
◉

LUIGI・CINQUEなるサックス奏者のソロアルバムだが、音は完全にバンドの音だ。一言で言えばアヴァンギャルド・ジャズ・ロック、スピーディーなリズムの上を管楽器群、ヴァイオリン、女性スキャットが舞うという作風であり、かなかな面白い。室内楽的要素やエスニックな要素も随所にちりばめられていて、ザオ、セファー系を思わせるような箇所もある。トーキング・ボーカルが炸裂するA面一曲目、ミニマル風オルガンに乗ってヴァイオリンとスキャットのバトルが展開するB面一曲目あたりが聞き所。意外にアイデア豊富。だが例によって、メンバー等に関しては何もわからないというお決まりの結論に至ってしまう。発表元もほとんど初見のレーベルであり、まだまだイタリアには開拓の余地がある。（川辺）



MALLEUS
Paranorm

'88
●MCM 06-W1
○
◉

このアルバムはマレウスというアーティストがフェアライトを主に駆使して創り上げげた壮大なイメージを持つエレクトロニクス系のシンフォニックロック作品である。残念ながらこのアルバムの主人公であるマレウスというアーティストに関しての詳細は殆ど分らないのだが、その恐ろしく構築されたサウンドから察するに同じイタリアのサンジュリアーノ辺りと同程度の高い能力を持ったアーティストではないかと思われる。アルバムの内容は前記したように高水準に構築されたエレクトロニクス・シンフォであるが、不気味な感じのSEや混声合唱などもうまく取り入れており暗黒的なイメージも聞かせている。またジャケも作品の内容を表わすような白黒の暗黒なイメージのイラストになっている。なお限定No入り。（島村）



MARCELLA
Tu Non Hai La Piu Pallida Idea Dell'amore

'72
●CGD 69028
○
◉

'52年、シチリア島カターニャ生まれ。13歳で歌い始め、'69年、CGDよりデビュー。当時RCAのナーダと共にカンツォーネ界を賑わせた張本人。兄はジャンニ・ヴェッラ、カンタウトーレ。かつてはカテリーナ・カセッリに憧れたというから'70年代を背負ったカンツォーネ歌手である。当時から日本でも紹介され人気があった。これはデビュー・アルバムになるもので、後に日本で紹介される頃の〝ネグロ〞路線、つまり情熱的でビートの強いポップ路線とは違って、むしろイタリアン・ロック・ファンの好む'70年代前半の端々しいストリングスに包まれていた頃のもの。まだ彼女の歌も強くない。しなやかな曲調が多い。淡いイメージの何曲かなど、特にアピールすると思う。この時既に知名度急上昇中の彼女だった。（松本）



MARCELLA
Mi...Ti...Amo...
'73
●CGD 69045
○
◉

このマルチェラのセカンド・アルバムは三面開きのジャケットになっているが、アイドルのブロマイド集のようで芸がない。このジャケットも含めて、人気上昇に乗じて急いで作られたような印象を受ける。ファースト・アルバム発表前後、彼女はサンレモやヴェネツィア音楽際など数多くのフェスティバルで入賞し、たちまち人気スターとなった。もちろん彼女のアルバムは殆ど全てがポップであるが、CGD時代のバック・ミュージシャンはヴォーロの面々がクレジットされている。大人っぽくなるのはCBS時代のアルバムで、その後「'88」はリコルディから発売された。再び昔風の歌唱に戻ってきている。どうやらまだメジャーに残れそうだ。　(Hiro Tanaka)



MARCELLA
Metamorfosi
'74
●CGD 69082
○
◉

アルベルト・ラディウスの「Che Cosa Sei」を思わせるジャケットだ。髪と唇の部分がレリーフになっている。ジャケットには何のクレジットもないが、同じCBS Sugar系の会社だから同一デザイナーによるものなのかもしれない。曲のほとんどは兄貴のジャンニの作曲、バックはこれもクレジットはないが、ギターは少なくともラディウスだろう。恐らく前後にならってIL VOLO絡みのはず。1曲目のアップ・テンポなポップ・ナンバーがマルチェラらしい。やはり当時の若手としては歌唱力のある本格的シンガーという気がする。全体としては落ち着いた曲が多い。ただしディスコから取ってきてくっつけたような安オーケストラがひどい。ベースは、これは……ボブ・カレロか。テンペラ、いるか。元気か。　(松本)



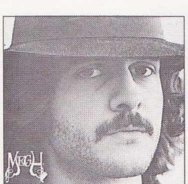
MARCELLA
L'anima Dei Matti
'75
●CDG 69178
○
◉

4作目にしてライヴ・アルバム。アルバムを出す以前からイタリア国内の音楽祭で入賞していただけにスターダムに乗って、ということなのだろう。ライヴ録音だけあって、アップ・テンポなタイトル曲等は、相当情熱的で暑い。バラードとのギャップも激しい。イタリアン・ロック・ファンにしてみれば、イル・ヴォーロの何人かの演奏が聴けることは幸いだ。当時、人気シンガーだった彼女のバックでしかないとしても、ライヴ録音はほとんど有り得ないことを思えば貴重なものだろう。〝E Vuoi Di Piu〟等で聴けるkbdともgとも区別のつかないソロは、まさしくヴォーロのアルベルト・ラディウス。彼のギター・プレイが至る所で聴ける。もちろん〝ネグロ〟も収録。　(松本)



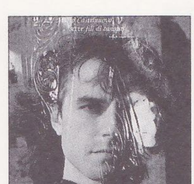
MARCELLO CAPRA
Arif Mediterranea
'78
●Mu UM 103
○
◉

あのプロセッションのギタリスト、マルチュロ・カプラのソロ・アルバムである。ここではシンフォニック・ロックのイメージはなく、彼の肌理細いアコースティク・ギターを中心に、フルート、ヴァイオリン、ベース、パーカッションを加えた地中海ロックをやっているのだが、これがちょっとやそっとの出来ではない。軽くこの手の五指に入ってしまう程の内容である。どのパートも時には繊細、時には躍動感溢れ、青空に吸込まれてゆくような不思議な爽快感が味わえる。地味な音作りではあるが、70年代後半にこんな作品があったなんて。プロデュースはマルチェロ・カプラ自身、音響技術にG.ヴェネゴーニを迎えて作られた傑作。　(須藤)



MARIO BARBAJA
Megh
'72
●Ariston AR/LP 12076
○
◉

アリストンの残したカンタウトーレの一人。彼の1st「Argento」に続く2ndアルバムである。前作は地味で面白みに欠けていたが、本作では磨きをかけた。プログレ・ファンにはB面10分余りの曲が受けるであろうが、本作は全編に渡り素晴らしい音楽を繰り広げている。部分的なシタールやギターに当時のG・ハリスンの影響が見え隠れするが、けして単純なメジャー作品の類似作とはなっておらず、独特な世界をかもしだしている。冒頭のオルゴールで幕を開けるとバイオリン、女性ヴォーカルそしてメロトロンなどの楽器を絡めながらその世界が進行されていく。最後に冒頭と同じオルゴールが登場し終わりをとげた後、あなたもきっとこの作品のいずれかのメロディを知らずのうちに口ずさんでいることでしょう。　(井波)



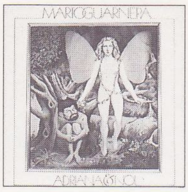
MARIO CASTELNUOVO
Sette Fili Di Canapa
'82
●It ZPLT34159
○
◉

イタリアのレコードを買いまくっていた時期、80年代のレコードに不満を持ち始めていた。その中で、まったく例外ともいえるレコードが本作である。さすがIT、大手からは到底望み得ない美しさ、哀愁に満ちている。キーボードとヴォーカルを担当していると思われるカステルヌオヴォ自身がシューベルトの曲を編曲したB②を除き、全曲作曲を手掛けている。クラシカルな要素が全曲に渡って行き届き、並々ならぬ才能を感じるのは私だけでないだろう。最後の曲に至ってはイル・ヴォーロ調の演奏まで飛び出し度胆を抜く。ヴォーロが空のイメージなら、こちらは海のイメージではあるが。セカンドLPは未聴のため、その後の彼の活動についてはまったく分らず。　(吉瀬)



MARIO DI FORTUNATO
Un Buco Nel Muro
'75
●Fonit LPX 43
○
◉

イタリアの古びた風情が浸み入るという点で、このアルバムに収録された少なくとも3曲は屈指だと断言したい。とりわけアルバムのオープニングを飾るインスト/コーラス・チューンは、いきなりエンディングを迎えたような高揚感に目がさめる。ピアノ、フルート、オーボエから女性コーラスに移り、ストリングス・シンセサイザーのバッキングが、その二度と忘れられないような素朴メロディを高揚させる。B①、④のメロディ・ラインもその素朴さが魅力になっている。懐しむような、思い出という無拓で柔かな感触をそのまま音にしたような曲作りに、この無名のカンタウトーレの素質を感じる。全曲がいいというわけではないが、ここまでリアルにひなびたイタリア情緒を感じさせる曲もそう多くはない。 （松本）



MARIO GUARNERA
Adriana & Noi
'75
●PDU PLD A 6038
○
◉

PDUレーベルと言えばミーナくらいしか知らない。ミーナもジャケットはすごいが内容はオーソドックスだ。その地味なPDUから'75年に出た本作も渋い内容だ。メンバーはオスカー・ロッキ、ジョルジオ・バイオッキなどの中堅どころ。しゃがれ声で切々歌う曲とポップな曲が半々で、ジャケットどおり「アドリアーナとノイの物語」仕立てのようだ。やはりA②、③、④、B②、③の切々と歌う曲の出来が良く、随所にちりばめられていたアコースティックギターが印象的。また、オーケストラもここぞという時の盛り上げに一役買っていて効果的だ。特にB③での使い方は曲の静動の対比とあいまって見事。本人に関するデータがないのだが、活動は'70年代中ごろのみだったようだ。 （渡辺一巳）



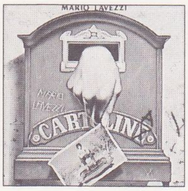
MARIO LAVEZZI
Iaia
'76
●CGD 81382
○CGD 9031772332
◉

カマレオンティ、FF & C.イル・ヴォーロといったグループを渡り歩き、ヌメロ・ウーノ設立にも立ち会ったギタリスト、マリオ・ラヴェッツィのソロ第1作。彼のくぐもったヴォーカルにV・テンペラのフェンダー・ローズ、ダッラリオ+ボブ・カレロの重いリズムとくれば、どうしてもヴォーロを想起せずにはおれない。あのグループでの活動がメンバー自身にも大きな影響を与えていたことを窺わせるアルバムである。ヴォーロはとりあえず脇に置いても、各人の間で交わされるミュージシャンシップ。彼独特のおぼろげなリリシズムなど楽しみの多い作品に仕上がっている。彼は2nd「Filobus」あたりから次第に軽さを備えるようになっていった。 （古田）



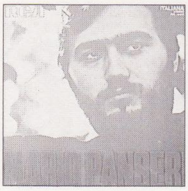
MARIO LAVEZZI
Filobus
'78
●CGD 20022
○
◉

マリオ・ラヴェッツィの名作「IA IA」に次ぐソロ第二弾が本作である。前作では〝イル・ヴォーロの..〟という肩書きを意識した様な作りで、唄よりも先に演奏に耳が行ってしまったが、本作ではカンタウトーレとしての力量を存分に発揮した好印象を受ける作品に仕上がっている。前作の頃からロレダナ・ベルテ等に作曲、編曲、プロデュースと関わり始め、成果をあげた事がラヴェッツィにとって一番の自信に結びついた様だ。独特の声質に好き嫌いは有るかも知れないが、ラディウスと並んでアーティストとしても既に立派に一人立ちしている。得意のフェイズ・ギターがうなるタイトル曲、ローズの調べの美しい〝MI SENTO MACCHINA〟、印象的な〝AMICO GIORNO〟、〝KITTI〟等どの曲も懐かしさと味わい深さがある。 （片山）



MARIO LAVEZZI
Cartolina
'79
●CGD 20173
○
◉

元イル・ヴォーロのもう1人のギタリスト、マリオ・ラヴェッツィのソロというと、1曲、インストゥールメンタル曲の収録されているファースト「Ia Ia」が有名だが、ソリストとしての円熟という意味では後の「Filobus」やこの「Cartolina」あたりが最高作といえるのではあるまいか。作曲はラヴェッツィ自身。詞はアヴォガドロとダニエーレ・パーチェによるもの。ステファノ・プルガ、ヴァルター・カローニ、ユサウス・ファーマー、トゥリオ・デ・ピスコポ等の実力派セッションマンを迎えてラヴェッツィ節とでもいうべき歌声を聴かせてくれる。カルトリーナとは〝葉書〟のこと。彼からファンにむけられた私信というイメージの作品。 （山崎）



MARIO PANSERI
Mario Panseri
'70
●RCA PSL 10453
○
◉

'70年代初期、イタリアを吹き荒れたプログレッシヴ・ムーヴメントの影響を受ける前に発表された彼の1stアルバムである。2ndと比べプログレ的要素は薄く地味な内容であるなど、その手のファンには物足りないものであろう。しかしアレンジャーはジャン・ピエロ・レベルベリ、ただの作品にはなっていない。なめらかに、そして物哀しく弦楽器類を中心として渋みのあるヴォーカルが漂っていく。本来の私の歌物の好みとしたら、そのような物哀しい陰りのある雲の中から太陽の日差しが少し覗いた様子を描いたようなものが好きなのだが、本作の太陽の日差しはそれよりもいくらかひかえ目と言ったところだろうか。本格的な大人の孤独を表現した作品である。 （井波）



MARIO PANSERI
Adolescenza
'73
●RCA DPSL 10585
○
◉

一部のファンの間で非常に評価の高いカンタウトーレ、マリオ・パンセーリは、知る限りではRCAに2枚、ポリドールに1枚のアルバムを残しているが、2ndと思われる本作は、歌物の中でもチロ・ダミコ等と並び高水準の出来栄えを誇る。作詞作曲、アレンジ全てが彼自身の手によるもので、みずみずしい旋律とともに〝青春(Adolescenza)〟ストーリーが綴られている。他の2作に比べ多分にプログレッシヴな要素が濃く、ストリングス、ピアノ、acギター等の他、曲によっては力強いギターソロやホーンも導入しているが、どのパートに針を落としても聴く者を温かく招じ入れてくれよう。美的感覚という点でもシンフォニック勢に後れを取ることはあるまい。なおバックミュージシャンについてはクレジットされていない。　（江田）



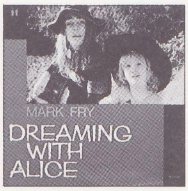
MARIO PANSERI
Sulla Spiaggia D'Inverno
'78
●Polydor 2448067
○
◉

マリオ・パンセーリには3枚のアルバムがある。'70年の「Mario Panseri」、'73年の「Adolesoenza」、そして'78年の本作である。ファーストではオーソドックスな唱法で特筆すべきものはない。セカンドは周知のように、美しいピアノのアルペジオによって幕をあける名作として名高い作品。本作になると曲の起伏はなだらかになっているが、歌というものに焦点を絞ったような姿勢が感じられ、プログレッシヴ色こそ感じられないものの、情感を込めて歌い込む曲々は、やはり魅力ある輝きに満ちている。「冬の浜辺にて」と題された、マリオ・パンセーリのラスト・アルバム。膚寒い、小春日寄りの海岸をあしらった二ッ折のカヴァーも素敵だ。　（山崎）



MARIVANA
Marivana
'83
●DDD 25409
○
◉

男っぽい表情に似つかわしい太い声が、裏腹に柔かく流れ出す。Marivana Viscusoという少しばかりポップスからはみ出た女性シンガーのソロ。このバックならはみ出してもいたしかたない。ベースに元AREAのアレス・ダヴォラッツィ、そしてこのアルバムに独特の色をつけるカルロ・シリオット(vln)とジョルジョ・ヴィヴァルディ(perc)はCANZONIERE DEL LAZIO〜CARNASCIALIA。ベース・プレイも大きく出るが、地中海民族音楽族の特にシリオットはアルバムを仕切っていると言ってもいい。大味なドラムの勢いに乗ってマリヴァナの歌共々、みんなでポップスからアラビアへ向ってしまう。今一つ中途半端でもないが、ソロ・アルバムというよりも総合力のアルバムだけにバックも楽しめる。　（松本）



MARK FRY
Dreaming With Alice
'72
●It ZSLT 70006
○
◉

イギリス人シンガー、マーク・フライの知られる限りの唯一のアルバム。イタリアン・ロックの文脈では無名作だが、英米のサイケデリック・サイドではここ何年か語られているイタリア・リリースでもある。ほとんどアコースティック・ギターと息使いもとれそうなヴォーカルによる内容で、フルート等のフォローがある程度のシンプルなサウンドになっている。録音に特徴があり、フル・レヴェルまで音を響かせたようなそれが独白ふうの陰にこもった雰囲気を作ったとも言えそうだ。また曲間につなぎとして用いられる暗く漂うような小曲が何度か出てきたり、シタールふうのアコ・ギの奏法があったりと、〝アシッド・フォーク〟そのままのよたりがある。バック・ボーンはやはりイタリアではない。　（松本）



MASSIMO MORANTE
Abbasso
'80
●BUBBLE BLU 19601
○
◉

マッシモ・モランテは伝説のバンド、チェリー・ファイヴをクラウディオ・シモネッティと共に結成、それがゴブリンへと発展して行きオカルト映画の代名詞的役割も果たすが、「マークの幻想の旅」という実に質の高いオリジナル・アルバムを制作後脱退、'80年にソロ第一弾である本作を発表した。一曲目からいきなりディスコ調の乗りの良さを強調したリズムで始まり、聞き覚えのあるあの声でヴォーカルをとるのだが、〝ゴブリン〟という枠から外れた途端こうも明るく軽快になれるものかと耳を疑うくらい痛快なナンバーが続く。ゴブリンでの制約が無い為かここではギターを弾きまくっていて、意外にAC. GUITARの使い方が上手い事にも気付く。期待して聞くとスカを食らうが、シモネッティの参加が唯一の救いか。　（片山）



MASSIMO RANIERI
Via Del Conservatorio
'71
●CGD FGL 5093
○CGD CDLSM 100038
◉

イタリアの布施明、とは言われていない。かつては多数の国内盤が出ていたが最近は出ていない。典型的な絶唱型のため好き嫌いが別れると思うが本作は曲がいい。全曲のアレンジとA①、②、⑤、⑥、B③、⑥、の作曲がエンリコ・ポリト、B①があのエンニオ・モリコーネ。A①のタイトル曲はピアノのアルペジオとオーボエが印象的。サビの裏メロのピアノもいい。A②はオルガンのイントロ。共にサビで聴かせる名曲だ。B④は「ベニスに死す」で有名。4曲のカバー曲は置いといて、それ以外はいい曲ばかり。'70年代初期の作品を編集したCDには本作の曲が多数収録されているが、A②が入ってないのが残念。　（渡辺一巳）



MAURIZIO ANGELETTI
Windows Over The Stream

?
●Old Tenis Shoes OTSC-1001
○
◉

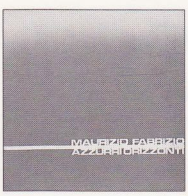
オールド・テニス・シューズ・レーベルというボローニャのレーベルから出たこのマウリツッオ・アンジェレッティというアーティストに関しては、このアルバム1枚のみしか全く資料がない。このアーティストはアコースティック・ギター弾きで、印象的なギター・ソロで埋めつくされたのが本作品だ。トラッドという程には土くさくはなく、ジョン・レンボーンの一連のソロ・ワークあたりをイメージしてくれればいいと思う。夕陽の沈む草原にたたずむ貴婦人がパステル調の淡い色彩で描かれたカヴァー・アートのイメージそのままの世界だ。音こそ違え、後のドゥルッティ・コラムあたりにも共通する雰囲気も持っている。（山崎）



MAURIZIO ARCIERI
Trasparenze

'73
●Polydor 2448 014 A
○
◉

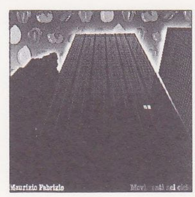
マウリツィオ・アルチェーリは後にイタリアン・ニュー・ウェイヴ・シーンで人気を得るKRISMAを結成した人物だが、このアルバムはそれ以前の録音になる。ラウドな録音状態や英米スタイルの影響等で、イタリア・ファンにはあまり人気がないとは言え、この時期のソリストにしてここまではみ出した方向性を持つミュージシャンは少ない。どこかでしっかりとイタリアに根づいているくせに、とりとめのなさが一方で傾向のばらつきに出ているように思う。これはスタイルの折衷を狙ったのではなく明らかに彼の持つ気質が容赦なく飛び散った事によるがさつさだろう。その意味で非常にアーティスティックな作風だ。アコースティック、エレクトリック、イタリア、海外もごった煮する個性作。（松本）



MAURIZIO FABRIZIO
Azzurri Orizzonti

'75
●CIV ZSCVE 55743
○
◉

S. FabrizioとM. Fabrizioの兄弟デュオ、MAURIZIO E FABRIZIOから一人立ちし、これがMことマウリツィオ・ファブリツィオのファースト・ソロになる。異色作「Movimente～」に先立つ事3年、後々の洗練されたソロとも一味違って、むしろデュオ時代の延長にあるとてもナイーヴな感触の内容になっている。8曲中2曲は二人の共作によるもの。ac-gのアルペジオを活した曲などそのままだし、それは水滴が落ちて輪が広がるような瑞々しさを感じさせるものだ。そしてアップ・テンポになるとフォーク・ロックふうになる。少しC.S.N&Yみたいだ。あまり甘くない。この頃、既にミア・マルティニを始めアレンジャーの力量も見せ、後にはアンジェロ・ブランドゥアルディの立役者ともなる。（松本）



MAURIZIO FABRIZIO
Movimenti Nel Cielo

'78
●Polydor 2448 074
○
◉

アンジェロ・ブランドゥアルディ、リッカルド・フォッリらの名アレンジャーとして知られるマウリツィオ・ファブリツィオは、古くはディク・ディク「風のように」、ドナテッロ「恋のとりこ」等の作曲家として活躍していた。ソロ・アルバムを現在までに4枚リリースしているがこれはその2枚目にあたる。スカラ座オーケストラ、ロベルト・プレオ（セッション・ギタリスト、87年12月に来日した）、そしてアンジェロ・ブランドゥアルディがヴァイオリンで参加し、見事なバロック・ロックを披露してくれている。B①太陽は、マウリツィオ自身のピアノが美しい佳曲。彼はすべての作曲、オーケストラ・アレンジ、指揮を担当している。来日の経験もある。（山崎）



MAURIZIO FABRIZIO
Primo

'79
●Polydor 2448 091
○
◉

Grazie A Dario Baldan Ed Angelo Branduardi …。このクレジットには納得してしまう。この人とD. B.ベンボこそイタリアン・ミュージックを'70年から'80年へとスライドさせ、しかもカンツォーネをロック/ポップスの文脈に新生させたイタリアの立役者の二人だと思う。このアルバムを聴くと、彼の感性がベンボにとても似通っていることがわかる。洗練されながらも'70年代に育まれたイタリアン・メロディをしっかりと内に宿したポップ感覚、それがアレンジャーとして、またこうして自身のソロ・アルバムへと流れ込んでいる。清涼感のある音、輪郭がぼけないかわりに細やかさを忘れない音使い、その持ち味が坦々とポップな小曲を形作っていく。リズミックな曲もアコースティックな曲もkbdプレイもそのとおり。（松本）



MAURIZIO FABRIZIO
Personaggi

'80
●Come Il Vento CDE 20221
○
◉

前作といい今作といい、おおよそイタリアの〝物語〟から脱したジャケットだけに、内容を期待しないリスナーは少なくないと思うが、実はどちらも素晴らしい。D. B.ベンボを知っているのなら尚更再評価されるべき彼のソロ・アルバム群である。作風は前作の延長にあり、それ以前からのものだ。一方でアレンジャーとして渡り歩く途中で若き意欲が「Movimenti Nel Cielo」という、そのポジションを自身の創作へと昇華させた大作をつくらせたが、むしろ日頃の彼のミュージシャン像は、前作や今作のような所に自然な形として出ているように思う。〝物語〟はないが、脚色を剝いだ所にあったものは、やはりイタリア情緒だった。ただし、それはより個人の言語に基づいた、ある意味で自在、身軽なものだ。（松本）



MAURIZIO MONTI
L'Amore

'73
●RCA DPSL 10586
○
◉

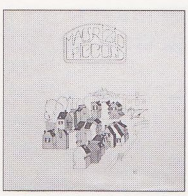
マウリツィオ・モンティはルスティケッリとボルディーニが参加したアルバムが知られているが、当アルバムのほうが親しみ易い内容のようだ。'60年代から伝統的にカンタウトーレの面白いアルバムを出し続けているRCAレーベルは、無名アーティストにも寛大だった。まだ知られる前のカンタウトーレでもRCAレーベルでは有名なアレンジャーと組んでアルバムを制作できた。アレンジャーとしてはエンニオ・モリコーネ、ルイス・バカロフ、パオロ・オルミといった映画音楽でも巨匠と呼ばれる人たちが仕事をこなしていた。当アルバムでも名アレンジャーのパオロ・ドッセナが担当し、内容を濃いものにしている。 (HIRO TANAKA)



MAURIZIO MONTI
Diavolo Custode

'76
●RCA TPL 1-1222
○
◉

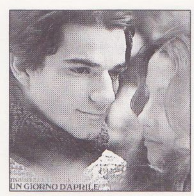
2枚のアルバムを残しているマウリツィオ・モンティの2作目。参加ミュージシャンのC. Bordini、R. Rustichelli、A. Montedurocのクレジットにむしろ目が行く。内容自体は、どちらかというと地味だ。フォーク・タッチのカンタウトーレ作といった音になっている。派手な脚色がない分、モンティの内省感情が通るのだが。参加ミュージシャンが目立った演奏をしているという程でもない。3曲目の静かな弾き語りを広げていくシンバルの響き、漂うような薄すらとしたキーボードのトーン、そしてそこでの歌に入り込んだ感情の動く様、そうした面にこのアルバムの特徴がある。謳歌するのではなく独白するような歌が全体を通している。曲によってはマウロ・ペローシ等に通じる。 (松本)



MAURIZO PICCOLI
Giu Per Queste Strade

'77
●Catra LPX 59
○
◉

ひげ面の人の良さそうなお兄さんという言葉以外思いつかなかった彼の写真を見て、このジャケットと音の方を合わせると、これが絵に描いたようにピッコリ。などと睡眠不足な事を言っていてはピッコリさんに悪いが、彼は中々渋く優しい歌声をしているのだ。アップ・テンポな今一脳天気な何曲が何だか、アコースティック・タッチの物静かな曲では、一番行く所で、アンソニー・フィリップスがイタリアの陽を浴び地中海の青を見てカンタウトーレになった所まで行く。とても繊細な、ミラノの雑踏とナポリの騒動だけはさけて通ってほしいサウンドに仕上がっている。ひなびたオルガンの音やピアノの柔らかなタッチ等の好サポートも見逃せない。温かでさらりとした優しさのある作品だ。他には「Pace」が出ている。 (松本)



MAURIZIO TATALO
Un Giorno D'Aprile

'77
●RCA PL 31255
○
◉

このジャケットには参った。さすがイタリア人だ。レコード探してて(うーん、懐かしい言葉だ)これ見たら「何でここにこんなもんがあるんだ」と首を傾げるだろう。写真が本人かどうかはわからない。いずれにしても、このジャケットでは典型的なラブロック、しかもとびきり甘いやつを想像するだろう。まあ当たらずとも遠からずなのだが、彼の場合その歌唱力からいっても、甘さよりもドラマチックな指向があったようだ。A①・③の2曲にそれがハッキリ出ていて、この盛り上がりはかなりのもの。ただしA①のオーケストラ部分は、松崎しげるの愛のメモリーのサビとどうしてもダブってしまう。この2曲以外もいい曲なのだが、どうもリズムアレンジで失敗してるように思う。 (渡辺一己)



MAURIZIO VANDELLI
L'Altra Faccia Di Maurizio Vandelli

'70
●Ricordi SMRL 6077
○
◉

Equipe 84のリーダーM.Vandelliの「ID」発表直後のソロ・アルバム。サウンド自体、今となっては古めかしい印象は拭えないものの、非常に美しくファンタスティックで、"ID"をよりポップに簡潔にしたものである。当時の彼の活動は幅広く、Equipe 84の統括は勿論の事、Dik DikやFholksの各シングルや、Reale Accademia Di Musica, Dik Dik「Suite Per Una Donna...」更にはGianni D'erriccoの「Antico Teatro Da Camera」等への関与、そしてその間に映画音楽の為のサントラ制作等、75年頃まで休む暇も無い程の充実振りである。60年代中盤から10年以上も第一線で活躍した彼のイタリアン・ロックへの貢献は、より大きな評価を得るべきである。 (鈴木伸一)



MAURO PAGANI
Mauro Pagani

'78
●Ascorto ASC 20093
○CGD 9031742842
◉MMG AMCE 557

マウロ・パガーニのファースト・ソロ・アルバム。彼はプレミアータ(PFM)のメンバーとして著名であるが、このアルバムでは、プレミアータ、アレア、カンツォニエーレ・デル・ラッツィオ等のメンバーを起用して、アレアの硬質なサウンドとたおやかな地中海音楽をブレンドしたような純度、完成度の高い、独自の領域を創り出した。従来のいわゆるシンフォニック・ロック・グループ達のサウンドとはやや一線を画すが、もう一つのイタリアン・プログレッシヴを代表する一枚。アレア、カンツォニエーレ、カルナシャリア、アスコルト&ロルケストラ・レーベル周辺のアーティスト達のサウンドも決して忘れることのできない重要なものなのである。 (山崎)



MAURO PAGANI
Sogno Di Una Notte Destate
'81
●Fonit LPX 99
○Fonit Cetra
◉

マウロ・パガーニのセカンド・アルバムは、デッレルフォ劇場で行なわれたシェイクスピアの〝真夏の夜の夢〟のサウンド・トラックスとして制作されたものである。この為、多くのミュージシャンをゲストとして迎え個々の才能のぶつかり合いによって高められたデビュウ・アルバムと比べると、ややおとなしいイメージである。サウンド・トラックスとしての制約がある為、この点はやむを得ないところだろう。元来、パガーニは学究肌のミュージシャンであり、PFM脱退後は民族音楽の研究に余念がなかった。この研究の成果はこのアルバムにも表現されている。（山崎）



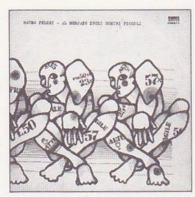
MAURO PAGANI
Passa La Bellezza
'91
●Philips 848 444
○Philips 848 444-2
◉

マウロ・パガーニの実に10年振りの3枚目のソロ・アルバムである。PFMを脱退後、地中海音楽の研究に没頭しその成果は彼自身の1st「地中海の伝説」やファブリツィオ・デ・アンドレの「地中海への道程」「雲」等に顕著に現れているが、もう一つ重要な事はパガーニはロック・ミュージシャンでありシンガーである事だ。前作「真夏の夜の夢」ではソング・ライター、プロデューサーとしての役割の方が大きく、又演奏よりもヴォーカルに比重がかかっていた。本作はあらゆる才能の全てを発揮し、FABRIZIO & CRISTIANO DE ANDRE、FLAVIO PREMOLI、MARK HARRIS等の協力で地中海風エッセンスを盛り込んだ、痛快で明るめのイタリアン・ロックを熱唱と共に聞かせてくれる。もちろんヴァイオリンも健在だ。（片山）



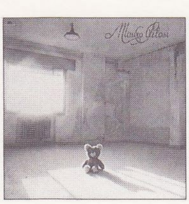
MAURO PELOSI
La Stagione Per Morire
'72
●Polydor 2448 010L
○
◉

全編に亘って重苦しく絶望的な雰囲気に支配されたマウロ・ペロシの1st。あまりに痛々しいヴォーカルは、地味ではあるが効果的に配された演奏や間を取る事に依って、決して感情に流されては行かずに聴く者の内にとどまる。特にラスト曲の不気味なメロトロンをバックに分裂した人格が出現する様は尋常では無い。時として息詰まる思いに駆られながらも最後まで聴き通してしまうのは、自己と真剣に向き合ったペロシの悲痛な歌声に日頃忘れかけている〝生と死〟という普遍的テーマが思い起こされるからかもしれない。優れた芸術や文学がそうである様に。歌が単に歌唱力や表現力、メロディの美しさや或いは楽しさといった側面で評価されるとしたら、ペロシの様な歌手は無視され続けるのだろう。（高森）



MAURO PELOSI
Al Mercato Degli Uomini Piccoli
'73
●Polydor 2448 017A
○
◉

マウロ・ペロシはポリドールにアルバム4枚を残している。若干ポップなカラーを増した4thが今一つ不人気だが、G.レオーネ参加の1stを始め質の高い作品ばかりだ。とりわけ2ndに当たる本作は評価が高い。他作にも共通であるが、とにかく彼の創り出す音空間は他に類を見ない特異なもので、一度針を落すや、外界とは完全に隔絶された世界に引き込まれるが如き感覚にとらわれ、容易には抜け出せなくなる。ストリングス、ピアノ、acギターそれに悲壮感さえ漂う彼のヴォーカルによって演出される暗さは尋常なものではなく、聴く者の双肩にズッシリとのし掛かり、押し潰されてしまいそうな錯覚さえ起こさせる。なお、ポリドールからベスト盤が出ている他、シングルも数枚存在するものと推定される。（江田）



MAURO PELOSI
Mauro Pelosi
'77
●Polydor 2448056
○
◉

マウロ・ペローシの3rd。前2作の延長線上にある作品であるが、一部ポップな箇所もあり、また、メロディアスなストリングスの使用等、全体の印象は従来の作品より多少ではあるが明るいものとなっている。ペローシのうら悲しくも説得力のあるボーカルは不変であり、聴く者の心に染み込んでいく。薄汚れた空っぽの部屋に唯一つ残された大きな熊の縫いぐるみ。そして、それをいとしそうに抱きかかえるペローシ。正にジャケット・デザインからイメージされるままの哀愁を帯びたサウンドである。なお、79年には4thアルバム「Il Signore Dei Gatti (Polydor 2448 092)」を発表。その後、レコードはリリースされていない。（賀川）



MAURO PELOSI
Il Signore Dei Gatti
'79
●Polydor 2448 092
○
◉

マウロ・ペロシ、4枚目、最後のアルバムである。セカンド・アルバムを頂点とする悲壮感さえ感じさせるサウンドはやや影を潜め、多少なりとも暖かみを感じさせるものになっている。その辺りが本アルバムの評価を分ける所である。しかし、彼の線が細いながらも切々と歌いかける説得力のあるヴォーカルは健在であり、聴く者を否応なしに彼の世界に引き摺り込んでしまう。ジャケットの絵の描かれたイヤリングをした猫、サングラスをした猫のピラミッドなどが登場するかのごとく曖昧模糊とした白日夢のような印象の作品であり、イメージの広がりということでは他の作品を凌いでいる。一聴した時の衝撃こそあまり強くないが、聴き込めば前三作に決して退けを取るものでないことが分かるだろう。（賀川）



MERSIA
Forse
'77
●Polydor 2448 652
○
◉

マルシアじゃなくってイタリアのメルシアって、いったい誰でしょう。本作は'73年～'77年のベスト盤。オリジナルを2枚見たことがあるので、結構出てるのではないか。A①、④は'77年レナード・ゼロの作、ほとんど語りのようなボーカル。A⑤は'75年マリオ・ヴァルネラ、A⑥はバルサモの曲で、さすがにいい曲。B④はパティ・プラヴォも歌ってた、サビでやたら盛り上がる名曲。さて、1番のお気に入りはA②、B①で、共'76年G.P.FELISATTIという人の曲なのだが、シンフォニックなオーケストレーションが最高。ベスト盤だからいい曲ばかりなのはもちろんだが、あまり一般受けしないような曲が選ばれていておもしろい。結論、'76年のLPを見かけたら絶対買い。

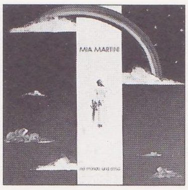
（渡辺一己）



MIA MARTINI
Oltre La Collina
'71
●RCA PSL 10516
○BMG Ariola ND 74550
◉

記念すべきデビュー・アルバム。まるでキーフがデザインした「Local Anaethetic」をイタリアで行くジャケットに目をうばわれるが、内ジャケットを見ると、これがまた白塗りの聖女姿に宗教がかったオーラも出て、少しTRIPの仮装に似る。これでRCAの同所属ともなれば、もしやクレジットのないバック・ミュージシャンは、と増々興味も湧いて、そう言えば、このアルバムは以後の音作りと違って室内楽ストリングスとロック系楽器陣が今一つこなれていない事も、クローズ・アップされてくる。というふうに単なる歌物に終らない要素の多いアルバムだ。曲のアレンジも古めかしく、マルティニの歌もまだまだ粗野だ。曲想もばらつきが激しい。そこが逆に興味を魅く。おとなしく納まっていない。

（松本）



MIA MARTINI
Nel Mondo, Una Cosa
'72
●Ricordi SMRL 6101
○
◉

確認できる限りで15枚のアルバムをリリースしている古株のシンガー。暫らく表立った活動をしていなかったようだが、'90年頃に再活動し、そのシングルを聴いた覚えがある。このアルバムは2作目に当たるもので、感情を込める歌い方に'70年代を色濃く刻んでいる。オーケストラ・アレンジは3分の2をナターレ・マッサラが、残りをダリオ・バルダン・ベンボが、各々担当している。どちらもそれ程派手にならない。むしろベンボの弾くピアノとオルガンがいい味付けをしている。そして静かに切々と歌いかけるような彼女の歌声がいい。J. レノンやE. ジョンの曲も歌っているが、もう少し抑揚のある曲も欲しい気がする。ジャケットの青/白の油絵タッチがREALE ACCADEMIA～ふうだが……そんなことはない。

（松本）



MIA MARTINI
Il Giorno Dopo
'73
●Ricordi SMRL 6114
○
◉

前作以上に落ち着きのある曲が目立つ。半分はマウリツィオ・ピッコリの曲、他にはD.B.ベンボ、エルトン・ジョンの"Your Song"のカヴァーもある。中でもベンボ=フランコ・カリファノ作によるA⑥"Minuetto"が出色の出来。ピアノやオーケストラ、混成コーラスをつけての抑揚の大きさでもって、印象的な展開を最後バックのテンポを落としてコーラスに持ち込むアレンジは、あのカセッリの「Primavera」を思わせるところがある。そこで声をふりしぼるように歌うマルティニ節が見事にはまっている。この頃のアルバムはどれも似たりよったりのイメージがあるが、曲の良し悪しで見ていくと、このアルバムを代表作の一つに挙げていいと思う。イタリア流に感動させてくれる。

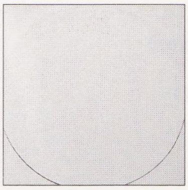
（松本）



MIA MARTINI
È Proprio Come Vivere
'74
●Ricordi SMRL 6126
○
◉

このアルバムから音が垢抜けた。そう言えばマルティニ自身の歌い方もこれまでとは違って爽やかさが増している。オーケストラ・アレンジは同じくナターレ・マッサラなのだが、控えめだ。かわってダリオ・バルダン・ベンボ(kbd)、マウリツィオ・ファブリツィオ(g)らの演奏がクリアーな印象を残す。時期的な事とは思うが、曲も落ち着きのあるものは余韻を残すような趣きがあり、またアップ・テンポな部分では、リズム陣が曲を走らせてすっきりとした趣きを出している。より新鮮さが増した感じだ。思うに上記二人の影響が大きいのではないか。計10曲中ベンボが4曲を、ファブリツィオが2曲を書いている。メロディの押しよりも引きの余韻が瑞々しく響く好作だ。

（松本）



MIA MARTINI
Sensi E Controsensi
'75
●Ricordi SMRL 6154
○
◉

以前、某知人が言っていました。「スタックリッジがあんなに騒がれてるのに、どうしてこういうのじゃダメなんだろう?」その時かかっていたのは、キンクスの「パーシー」でした。私は答えたした。「プログレの人は、プログレ以外のフィールドで売れたものは、安心できないんですよ。プログレの中だけで評判なのでないと」…という訳で、ポピュラー界で売れたミア・マルティーニですが、少なくとも'70年代の作品は、そこそこゴージャスな音ですから、聴いてみて下さい。ところで「意識と誤解」という本作のジャケットは、テンペストの1stのように、上からフタが被さっているもので、そこにアーティストとタイトルが浮き彫りになっています。また、レコード大の丸い「歌詞カードと彼女の写真」が付いています。

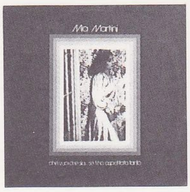
（斎藤）



MIA MARTINI
Un Altro Giorno Con Me
'75
●Ricordi SMRL 6174
○
◉

ミア・マルティーニは、ロレダーナ・ベルテの実姉である。デビュー当時はミミ・ベルテと名乗っていた。後から妹がデビューし、次第に馬鹿げた歌詞をだらしなく歌うという特異なスタイルを確立するのに対し、マルティーニはもう少し大人しい歌い方を続けた。アレンジャーは、常にM.ファブリツィオ、D・B・ベンボ、L・バカロフといった人たちがあたっていた。このアルバムで主に彼女の歌をサポートするのはナターレ・マッサラ。彼もまた有能なアレンジャーである。話は脱線するが。このアルバムのジャケットは家を組み立てるようになっている変形である。窓や猫なども切りぬかれ、底が無いとんでもない代物。かつての国内盤は勿論平ジャケだった。

(Hiro Tanaka)



MIA MARTINI
Che Vuoi Che Sia…Se T'ho Aspettato Tanto
'76
●CIV ZSCVE 55745
○
◉

トロルスの「コンチェルト・グロッソ」でお馴じみの、ルイス・エンリケス・バカロフがアレンジ(曲によってキーボードも)を担当していますが、オーケストラは全曲で渦を巻いている訳ではなく、曲によって控え目に入っているくらいです。また、3分の1くらいは軽いノリの曲ですが、残りの曲は聴かせてくれます。イタリア人としてはクセのない方に入るであろう歌声も、多くの人に気に入ってもらえると思います。それから、Ninni Carucciが書いている2曲はまずまずなのですが、Dario Baldan Bemboの書いているタイトル曲は泣けます。なお、レーベル名は「Come Il Vento」といいますが、略称の「CIV」でロゴまで出来ているので、これに合わせました。

(斎藤)



MICHELE ZARRILLO
Sarabanda
'80
●CBS 84701
○
◉

たった1枚のアルバムを残して消えて行ったセミラミス。その後のメンバーの活動については謎に包まれた部分が多いがヴォーカル兼ギターで全曲を作曲していたミケーレ・ツァリッロは'80年に初のソロ作品を発表、アーバンポップシンガーとして歌謡シーンに殴り込みを掛けている。往時の面影を期待するファンには関係のないレコードながら、A④"Piu Forte"がシングルカットされちょっとしたヒットとなるなど当時のシーンでは十分に受け入れられた模様。タイトル曲を初め軽快なナンバーが目立つが、一方ではストリングスを多様、アルンニ・デル・ソーレの様な"しっとり派"とは全く違う垢抜けた盛り上げ方が図られている。

(江田)



MILVA
Tra Due Sogni
'86
●Ricordi SMRL 6362
○
◉キング KICP 210

ミルバは'81年の「ICH HAB' KEINE ANGST(女心)」(KING KICP 209)と本作に於てヴァンゲリスの曲を唄った。ヴァンゲリスはこれまでイタリアのアーティストにはCOCCIANTEやBAGLIONI等ARRANGEで関わり名作を残して来たが、作家として曲の提供のみは初めてではないだろうか。ミルバは「女心」で"IT'S FIVE O'CLOCK"、"SO LONG AGO, SO CLEAR"、"TO THE UNKNOWN MAN"等聞いた事の有る曲ばかりを独語で熱唱、ARRANGEはNATALE MASSARA、PRODUCEはKLAUS EBERTだ。そして本作は"SPRING, SUMMER, WINTER & FALL"以外は耳馴染みが無いが、その分ヴァンゲリスの作曲家としての手腕が問われて逆に楽しめる。こちらは伊・独語盤と在り、3曲のみヴァンゲリスのARRANGEが聞けるがやはりシンセを使ったセンスは抜群である。

(片山)



MIRO
Per Conoscermi
'73
●ZEUS BE 0054
○
◉

IL VOLOのファンなら誰でも持っているという「REAL LIFE GAMES」で一躍名の知れ渡ったミーロは、'70年代初期または'60年代から既に歌手としての活動を開始していた様だが、何枚かのシングルのリリースを経て'73年に本作をナポリのゼウス・レーベルより発表、どうやらこれがファースト・アルバムの様である。ミーロのロッカーとしての才覚が発揮されたのは「REAL..」からであるのは間違い無いと思われるが、本作でのミーロは完全にカンタウトーレである。軽くてかすれた声と少し甘ずっぱい唄い方は初期のリッカルド・フォッリやバルサモの1STあたりを思わせる。唄も演奏も未だ荒削りな所が有るが、"SERE DI PIOGGIA"、"SE NON C' E PIU LEI"等語り継がれるべき名バラードも収録されている。

(片山)



MIRO
Real Life Games
'77
●Vedette MLP 5551
○
◉

実力派シンガー、ミーロの作品の中で、元イル・ヴォーロのジャンニ・ダラリオ、ヴィンチェ・テンペラ等をゲストに迎えて製作された本作は一際光っている。V.テンペラの奏でるキーボードがイニシアチヴを取るバックの演奏は、時にイル・ヴォーロの面影が見え隠れするほどで、'70年代前半のみずみずしい感覚が色濃く残されている。加えて、テンペラによるストリング・アレンジも見事なもの。一方でA③の様にファンキーでポップなナンバーも聴かれるが、イタリアンロックのファンであれば十分に傾聴できる作品となっている。難点は全曲とも英語で歌われていること。'79年発表の"Amniguitá"という作品を聴いたが、よりポップで軽やかな音作りがなされており、むしろ本作よりも英語が似合いそうな雰囲気である。

(江田)



MITA MEDICI
Per Una Volta

'74
●CGD 69098
○
◉

このジャケットを見ればすぐに思い浮かぶものがある。チコの「Notte」である。デザインは同一人物でカルラ・ヴィスタリーニという。さらにこの人はこの2つのアルバムのすべての歌詞も書いている。そして彼女はこのアルバムの主人公ミタ・メディチの実姉である。音はなかなか説明しにくいが、メディチの声が元気になったり、静かになったりとジャケットのイメージ通りの摑み所がない。アレンジのダニロ・ヴァオナはアリーチェのファースト、カセルリの「Primavera」、ジャコッペの「Bimba」などを手掛けた名手であり、このアルバムも静かな部分では本領を発揮している。素人臭いが厭味のない素朴な作品。 (Hiro Tanaka)



MUZZI LOFFREDO
Tu Ti Nni Futti !

'70
●IT ZSLT 70031
○
◉

ムッツィ・ロフレッドというシンガーのアルバム。ピエロ・リュネールのA.スタルテッリ、G.キョッキョが参加している。裏ジャケには、グループとしてのPierrot Lunaireの名が見て取れるが、中心はあくまでもMuzzi。一聴してピエロと認識出来るナンバーは1分にも満たない2、3曲のみだ。基本的にはアヴァンギャルド・トラッドといった趣で、大半がギター伴奏をバックにした悲痛な叫びとも言える歌声で埋め尽くされている。全編を支配する重々しく陰鬱な雰囲気で好き嫌いが分かれそうだが、甘さと切なさの大盤振る舞いに飽食気味のリスナーにとっては耳を傾けてみるのも一興だろう。尤も、その特異な世界を垣間見た時は少なからずショックを受けるだろうし、針を落としたまま終幕まで付き合えるという保証は出来ないが。 (江田)



NADA
Ho Scoperto Che Esisto Anch' io

'73
●RCA DPSL 10619
○
◉

本作は6面開きジャケット。ヌードじゃないよ。好きな女性ボーカル物が他の国に比べ圧倒的に少ないイタリアだが、これはその中の1枚。私は何と言ってもミア・マルティーニが好きだ。さてNADAだがデビュー当時の国内盤を見ると、ヒット曲のカバーだったりしてアイドル路線だったようだ。しかし、生まれつきのジプシーの血が騒いだのか、本作は歌い方も自由奔放な感じでうまくはないが、曲、アレンジがドラマチックなため聴ける。特にA①、②、④、⑤、B①は。アレンジとほとんどの作曲はGIANNI MARCHETTIという人。どこかで見かけた名だ。B⑤などは7分を超える曲なのだが、「狂気」の〝虚空のスキャット〟に〝アスアンドゼム〟を足したような曲でビックリ。 (渡辺一巳)



NINNI CARUCCI
Il Buio La Rabbia Domani

'73
●Two Nuns TNN 35003
○
◉

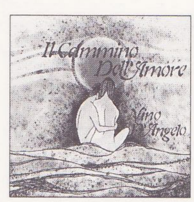
ジェットのシングルや女性シンガー、ジョヴァンナのアルバムでアレンジを担当しているニンニ・カルッチは、自らも少なくても2枚のリーダーアルバムを作製している。1stと思われる本作ではかなり良質なプログレッシヴ・ラヴロックが楽しめる。ピアノ、acギター、ストリングス等によるきれいなメロディーが持ち味だが、露骨なイタリア色は抑えめ。同国の歌物作品によく見られる叙情的なフレーズの〝波状攻撃〟は余り無く、どちらかと言うとサビの盛り上げ方で勝負する実力派の作品だ。驚く程ポップで、それでいて全く俗っぽいところが無いのもいい。もう一枚のアルバムは75年にUltima Spiaggiaから出された〝Da Bambino Di Hanno Detto〟だが出来としては本作の方が上。 (江田)



NINNI CARUCCI
Da Bambino Mi Hanno Detto...

'75
●Ultima Spiaggia ZLUS 55184
○
◉

ピンク・フロイドを想わせたコンセプト・アルバム「Ultima Spiaggia」で活躍した後、同じレーベルから発表された彼の2ndアルバムである。Ultimaでは暗く深刻な内容であったが、時々見せた明るくユーモアのあるところが本作では彼の持ち味として目立っている。中だるみのする部分がいくらかあるものの、節々に彼のアレンジャーとしてのセンスのよさを感じることができる。私個人として特に好きなのはB面後半の2曲で、情熱的に歌いあげるパートと物哀しく静かに進行していくパートとが交互に絡み合い。表面的な陽気さの中での孤独が上手に表現されているところである。最後は水の中にブクブクと沈んで本作は静かに幕を閉じる。彼のソロ・アルバムもこれで幕を閉じたのであろうか? (井波)



NINO D'ANGELO
Il Cammino Dell' Amore

'88
●Ricordi SMRL 6392
○
◉

ロマンティックなイラストが気を魅きそうだ。'70年代物なら甘いヴォーカル作にぴったりだろう。でも、こちらは'80年代も後半、キーボードもドラムも非常に洗練された響きをしている。少しドラムの録音が大味なのが耳につく。それでもイタリアらしさのあるポップなメロディに歌に変わりはない。ニノ・ダンジェロは既に何枚かのアルバムを出しているカンタウトーレのようだ。歌に込められる感情のべたつきのなさが、少しリカルド・フォッリなどに似て、しっとりと伝わってくる。このアルバムも、リズムが控えめな曲での彼の歌が滲みる。それにしても味気ないリズムとその録音なのが残念。洗練されている事はそのままに、もう少しダンジェロの歌味を活かす表情の豊かさが欲しかった。 (松本)



NINO TRISTANO
Suonate Suonatori

'72

●Fonit Cetra LPP 205

○

◉

60年代から活動していたNino Tristanoのこのアルバムはむせかえるようなイタリアの叙情に満ち溢れている。淋し気で憂いを帯びた彼のボーカルと民族音楽的フレーズに彩られたサウンドはあくまでもアコースティックで、決してフォークの域を脱するものではない。しかしここに於て昇華された音世界は、極めて純粋でかつ非常に前向きな、彼の内的世界を音に転化・表現し得た、見事なものである。各楽器の音色が、とても美しく悲し気で、民族の、否、人間の悲しみ、苦しみを分かち合ってくれているかのようだ。Gigi Belloni, Alberto Camerini, Eugenio Finaldi等が参加している。 (鈴木伸一)



OFELIA
Cancerto In Stereo

'71

●DISCO TEC TCLS-6661

○

◉

黒地のシックなデザインのジャケットは絹目の変形三面開きという凝った作りで、その上品な面持ちが馨しい。内容もジャケット同様美しいもので、豊かな表情を見せるOfeliaの歌唱がバイオリン、チェロ、フルート、ヴィオラ、コントラバス等によって奏でられる室内楽的な響きの中に溶け合う様は正に至福の音楽空間と言って良いだろう。美しいメロディーを極立たせるオーケストラ指揮とアレンジを担当するのはDanilo Vaona、何とあのCiro Dammiccoがドラムスで参加している。Caterina Caselliの「Primavera」やMia Martiniの初期の作品等と並ぶ女性ボーカルの名作として今尚忘れ得ぬ光彩を放ち続けている。 (鈴木伸一)



ORNELLA VANONI
Piu

'76

●CGD (Vanilla) CDLSM 100030

○

◉

ミーナ、ミルバと共に3大プリマ(何でイバ・ザニッキが入ってないのだ)と呼ばれた彼女が、自らのバニラレーベルから出した本作は、なかなかの好作品。艶やかな声で歌唱力もあるが、上記4人の中では絶唱型なので好き嫌いが別れるかも。本作はそんなドラマチックなボーカルとシンフォニックなバックが絶妙にかみあった作品である。プロデュースがGEPY＆GEPY、アレンジがトト・トルカーティ。それよりも作曲のD.FARINAという人がすごい。①③⑤⑩の4曲がシンフォニックな曲なのだが、全部彼の作品。特に③の静から動の展開、サビのすごいオーケストラは鳥肌もの。他もほのぼのとした曲などいろいろ。メンバーはわからないが、まだニュー・トロルスとは一緒ではないようだ。 (渡辺一巳)



OSCAR PRUDENTE
Un Essere Umano

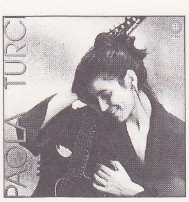
'73

●Numero Uno DZSLN 55154

○

◉

'67年から'69年にかけて数枚のシングルを出していたデリリウムの前身サジッタリというポローニャのグループに関わったことから音楽界入りし、'71年にヌメロ・ウノからシングル盤でデビューした。'73年には兵役でデリリウムを抜けていたイヴァノ・フォッサティと組んで2枚目のアルバムを発表。同年に当アルバムを出し、ジェノヴァの個性派カンタウトーレとして本格的にデビューした。かなり土くさいサウンドで、シングルカットされた『イエス・キリストが今生まれたら Gesũ Cristo Se Nescesse Ore』と『Oè-Oà』が特徴的。各曲のバックコーラスはウンベルト・トッツィらダータのメンバーが参加し、泥臭さを和らげている。翌年には彼の最高作、「Infinite Fortune」を発表する。 (HIRO TANAKA)



PAOLA TURCI
Paola Turci

'89

●It ZL 74154

○

◉

たとえイタリア語でも、この醒めた歌声を聴いていると、若い世代がどんどんとカンツォーネ以外のものをも吸収して、いつの間にかグローバルな視野の中で歌っている現在に気付かされる。伝統といういい響きの言葉は因習でもあって重荷になりかねない。そこを直観的に嗅ぎとっていくことは洋の東西を問わないはず。イタリアにだけ伝統を期待するのは、と考えれば、彼女の歌とそこに見え難くなってもついて回っている空気を、より身近に感じとれると思う。彼女はカンタウトリーチェではないが、かつてその言葉がイメージするイタリアを感じさせない。単にシンガーである。Roberto Righini、元ゴブリンのA.Marangoloらのサポートを受けてそのシンガー振りを初めて披露したこのアルバム。既に2ndも出た。 (松本)



PAOLO FRESCURA
Bella Dentro

'75

●RCA TPL 1-1144

○

◉

確認されているところで、これがパオロ・フレスクラの1作目に当る。アコースティックなサウンドに瑞々しさをたっぷりと含んだ曲想が持ち前のカンタウトーレである。汗臭さのない、イギリス流に言えば、木陰派のサウンドだ。作を追うごくに少しづつバックが多彩になり、最後は3人もの有名キーボード奏者をバックにしての作となるが、このアルバムはまだそれほど色づいていない気がする。そこがこの人の繊細さを浮き上がらせているとも言える。タイトル・チューンのA①を始め、ほぼ全曲とも言っていい割合で、盛り上げやアップ・テンポな部分があったとしても内省さの強い部分の方がよく印象に残る。決して地味ではなく従来のカンタウトーレ物の曲調なのに、やはり彼のカラーなのだろう、ナイーヴだ。 (松本)



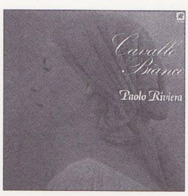
PAOLO FRESCURA
Tu Cielo, Tu Poesia
'76
●RCA TPL 1 1208
○
◉

'70年代中期から活動を始めたパオロ・フレスクーラは'75年にファースト、そして翌'76年に本作をリリースした。キーボードの比重が増して、最もシンフォニックな音となったサード「PAOLO FRESCURA」が最も有名だが、そういった衣をはぎとった歌の本質的な部分では彼の3枚のアルバムはどれも同格に扱ってもいいと思う。優しさと清涼感に満ちた彼の歌声は、まるで大人になっても大切な子供の視点を失わずに、又、都会の中でも汚れることをしらないような無垢なもので、心を打たれる。メロディー・メーカーとしての才能もなかなかのものである。基本的にアコースティック系のバックが中心のアルバムだ。（山崎）



PAOLO FRESCURA
Paolo Frescura
'78
●RCA PL 31363
○
◉

RCAにはCocciante,Baglioni等、若きカンタウトーレの作品が数多く遺されているが、このPaolo Frescuraもそうした一人。少なく共3枚のアルバムを確認出来るが、他にも出ていそうだ。1st'75年、2nd'76年で、どれもが優しさと清涼感の漂う音作りでとても静かで綺麗な印象に溢れ、好感が持てる。基本的にアコースティックなサウンドでそれが彼の声質とも合い魅力となっているのだが、この3rdでは今まで以上にキーボード類を取り入れ、又参加メンバーも凄いので最もアピール性が強いかも。特にL. Bacalov, C.Dammicco, C.Simonettiの3人がキーボードでクレジットされているのは驚きの一語。但しあくまでも唄物なので念のため。（鈴木伸一）



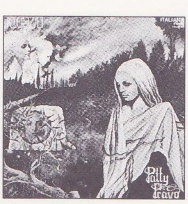
PAOLO RIVIERA
Cavallo Bianco
'80
●Yep YEPL 004424
○
◉

夕暮れどきに遠くをみつめるという女性のジャケにひきつけられ、針を落すと、弦をつまびく音につづいて、美しいキーボードの盛り上がりに、ハッとさせられる。そして、無名のシンガー、パオロ・リヴィエラの渋めの歌声が優しくはじまる。全て聴き終えたとき、イタリアの風景が目に映るのは私だけだろうか。この国のシンガーの多くは、それぞれ独特の歌いまわしと、声の表情があるのであるが、彼の場合も美しいメロディとうまく溶けあい不思議に親しみを覚える。他に作品を残しているかは不明であるが、たぶんあるものと思われる。尚、美しいキーボードとオーケストラアレンジは、あのトト・トルクァーティである。（山中）



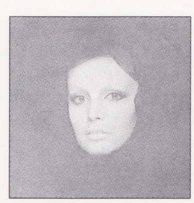
PATTY PRAVO
Concerto Per Patty
'69
●RCA ALPS 11013
○
◉

ヴェネツィア出身。1948年生まれ。'60年代からローマのビート・シーンで歌っていた人。パティ・プラヴォというと、どうもかみつかれそうなイメージがあるが、とにかく感情移入の激しい歌い方をする人だ。'60年代の末にはRCAを根城にロック・サイドとも仲良く活動、一方でアイドル的な所も見せて、やはり派手なイメージが強い。これは2作目に当るアルバムで、ビート時代さ中にあって、A面全てを費した大曲〝Concerto Per Patty〞が異色の作。作曲、ジャンニ・メッチア、作詞、ザンブリーニという'60年代の大物の協力を得て、オーケストラとの共演になっている。時代がかったポップスの中にあって、落ち着きのある情感豊かな面がずばりと出た大曲である。最初期の彼女の記念すべき作。（松本）



PATTYPRAVO
PattyPravo
'70
●RCAPSL10461
○
◉

パッティ・プラヴォはカンツォーネ歌手であるが、70年頃、バレット・ディ・ブロンゾを従えてツアーをしたという噂や、ヴァンゲリスにアレンジを任せてLPを創る等、プログレッシヴ・ムーヴメントとまんざら無縁ではないアーティスト。本作は70年に発表されたベスト的なもので、今聴くといささか古いスタイルであるが、それ故の魅力を備えた好盤。A②、A⑥はRCAのアーティスト達（トリップ参加）のライヴを集めた「Piper Pop Party」でも演奏されている名曲。A④はピアノ、フルートを入れた最もプログレッシヴな味付けの曲。油絵タッチのカヴァーアートも魅力的な出来。この時期のものとしては73年の作品、「Pazza Idea」もプラヴォらしさの良く出た好アルバム。（山崎）



PATTY PRAVO
Per Aver Visto Un Uomo Piangere E Soffrire Dio Si Trasformo' In Musica E Poesia
'71
●Philips 6323 010 L
○Polygram 842 824-2

RCAからフィリップスへ移籍してのアルバム。とりあえずユーロ・ロック・ファンにはアルバムのトップを飾るルイス・エンリケス・バカロフ作曲の〝Morire ... Dormire ... Forse Sognare〞に耳が行かざるを得ない。つまりこれはニュー・トロルスの「Concerto Grosso」の替え歌になっていて、プラヴォの低音で迫る。ヴォーカル以外がほとんど瓜二つだ。プラヴォの歌は典型的な感情移入型の、しかも迫力を利かせるところがあるので好き嫌いが分かれるタイプだが、聴けば彼女と判る個性は強い。このアルバムはRCA時代以上にメジャー指向を感じさせる曲が並んでいる。低音域から熱唱型のシャウトまで、更には英語歌詞のものまであって、甘さや切なさといった歌にはあまり縁がない。（松本）



PATTY PRAVO
Si... Incoerenza

'72
●Philips 6323 014 L
○Polygram 842 823-2
◉

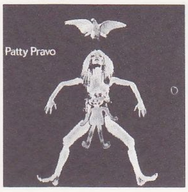
乳白色の肖像画ふうのジャケットが印象的だ。持ち前の髪が白銀に輝き絹のようだというイメージの良さもある。ビル・コンティのオーケストラ・アレンジに導かれて幕開けするこのアルバムは、スタンダード・ナンバー〝My Way〟で始まる。前作「Per Aver ～」に似て、〝ポピュラー・ミュージック〟というイメージではあるものの、実はしっとりとした曲が多い。オーケストラも随分と効いていれば、プラヴォの歌も派手ながら同時に落ち着きを感じさせる。特に物哀しさ漂う時のオーケストラとの一体感は、'60年代イタリアのメロドラマふうに堂に入ったものだ。そう言えば全体にどこか映画音楽ふうだ。アルバムは再び最初のテーマに戻り幕をとじる。（松本）



PATTY PRAVO
Pazza Idea

'73
●RCA DPSL 10591
○CGD CD FM 513663
◉

ずばりユーロ・ロック・ファンに叶う彼女のアルバムはこれだろう。これまではアレンジにしても一昔前の旧態然としたところがあったが、この頃から急に洗練された。このアルバムもバックがすっきりとして、またp、ac-gなど細やかさが感じられる。トータルに彼女の歌をとり込むアレンジが、これまでの伴奏を遠ざける。加えて曲も粒がそろっている。特にタイトル・チューンは彼女を代表する曲の一つと言っていいと思う。泣きおとしをしない、それでいてイタリアらしい、ぬくもりのある曲だ。プラヴォの感情移入ぶりを活かしながら柔らかに脹らむその曲想が、アルバムを象徴するかのようでもある。全体にアコースティック・タッチのほのぼのとした仕上りのアルバムだ。（松本）



PATTY PRAVO
Patty Pravo

'76
●Ricordi SMRL 6193
○Ricordi
◉

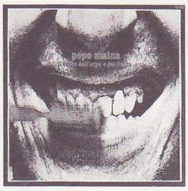
パティ・プラヴォはヴェネチア出身の中堅女性歌手。'60年代後半にRCAよりデビュー、往年のカトリーヌ・ドヌーヴを思わせる金髪がとても印象的だった。当時のアルバムでは割とスタンダードなナンバーを披露していたが、'70年代に入るとLPの片面を全て使った歌物語や、ルー・リードの曲を取り入れるなど徐々にレパートリーを広げていった。本作は'76年、リコルディからのリリース。バックにG.ダッラリオ、A.ラディウス等の著名なスタジオミュージシャンを揃えロック色の濃いサウンドを聴かせる。一方ではしっとりとした歌唱を中心にじっくりと聴かせる曲も配してあり、イタリアン・ロック/ポップスの愛好家なら無難に聴きこなせそう。だが、'70年代終盤から'80年代にかけては現代風なサウンドが中心となり少々ボルテージは落ちる。（江田）



PATTY PRAVO
Tanto

'76
●RCA TPL 1-1195
○
◉

アイドル/カンツォーネ歌手として出発したパティ・プラヴォも'70年代中頃にはロック寄りのアレンジの中で歌っていくことになる。そんな中でも芯の強そうな、色気と感情をふりまく彼女の歌だけが変らない。このアルバムはヴァンゲリスが全面協力したもので、彼独特のキーボード・トーンが効いている。A面トップのタイトル曲の起伏の激しさなど、プラヴォの熱唱、ヴァンゲリスのプレイ、各々半々といった具合だ。大掛りなアレンジに彼女の歌となれば食傷気味かとも思うが、清涼感のあるキーボード・トーンが以外とそこを回避する。また何曲かの落ち着きのある曲での彼女の抑えが印象に残る。比較的各曲ごとのカラーもあり、曲のサビが練られている為か、メロディの覚えやすい曲が多い。好作だと思うが。（松本）



PEPE MAINA
Il Canto Dell'Arpa E Del Flauto

'77
●Ascolto ASC 20004
○
◉MMG AMCE 566

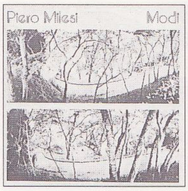
前衛的な作品を世に送り出し、注目をあびたユニークなレーベル、アスコルトからのデビュウ・アルバム。ペペ・マイナはミステリアスなヴェールに包まれたマルチ・ミュージシャン。国内盤もリリースされたので日本の知名度はあるが、本国では極めてマイナーな存在であったことは想像できる。ハープ、フルート、ギター、ピアノ、ピッコロ、パキスタン・ベル、リラ等を使用して、たおやかな地中海音楽のうねりを雄大に表現したペペ・マイナの音楽性は唯一無比のものであり、プログレッシヴ・ロックの持つ、もう1つの側面を見事に描き切った意欲作である。あまり知られていないが、彼は'79年にIMBROGLIOレーベルから「Scerizza」という2ndアルバムをリリースしており、同傾向の好作である。（山崎）



PEPE MAINA
Scerizza

'79
●Imbroglio MP007
○
◉

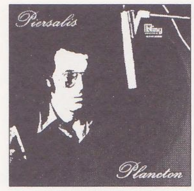
'79年に発表されながら200枚とも300枚とも言われる超限定自主制作故か全く知られていなかった2nd。録音は1stと同じNonsense Studio。彼以外にクレジットされている4人の演奏者の内ベースのMassimo Spinozaは1stアルバム中のライヴ録音〝Two Balls〟と〝Africa〟の2曲でも演奏している。元々1人で多重録音を重ねて創造するマルチ・インストゥルメンタリストであり、音が個人的で趣味的になるのは仕様がないとして、本作は1stに比べて個人的・趣味的傾向が強過ぎるきらいがある。本人にとっては知ったことではないのかも知れないが聴き手の事を考えていない。それ故かの革新的レーベル、アスコルトも発売を考慮しなかったのではなかろうか。まあ、1stが好きな人には気に入ってもらえると思うが。（森下）



PIERO MILESI
Modi

'82
●Cherry Red BRED 42
○
◉

古くはGRUPPO FOLK INTERNAZIONALEに在籍し、最近では米Cuneiformからソロ・アルバムが出ている作曲家。このアルバムは前記グループの「Daloy Politzei」発表後の'77年から'78年にかけて書かれた〝Modi I〟と'80年夏作曲の〝同II〟を収録している。ともに反復を基調にした室内楽曲でゆるやかな流れと細やかな音使いが特長の2曲だ。前者でのチェンバロの反復とその上に繰り広げられる弦楽四重奏、そして後者の、東洋的なニュアンスを感じさせるたおやかさ(ソプラノ、ハープ、弦楽器、クラリネット他によるもの)、どちらも緻密ながら豊かな感性に支えられたものだ。演奏/楽曲のクオリティと同時にイメージの広がりを感じさせるあたりが魅力。カチャパリャの近作等に通じるか。　(松本)



PIERSALIS
Plancton

'75
●King Universal NLP 114
○
◉

SALISの1作目が'71年に出た後、この4兄弟から成るバンドからkbd、ds奏者がぬけた。kbd奏者は同年GRUPPO 2001を結成、ほぼ全曲を書いた唯一の彼等のアルバム「L'alba Di Domani」が'72年に出る。そのkbd奏者こそPiero Salis、このアルバムの主人公である。'75年、GRUPPO 2001は活動中だったが、シングルの内容はひどいものだった。ところが本作は彼の歌を中心にした「L'alba〜」を思い出させる仕上りになっている。全編ストリングスが静かに流れる歌物で、中にはフルート・メロトロンとの併用もある。「L'alba」のvoは彼だ。未だGRUPPO 2001の他メンバーが判らないだけにb、g、dsの3人が気になる。このつば吹きフルートのゲストは誰?kbdの感じはあのまま。まさかこれが実質的な…。　(松本)



PINO SANSANELLI
Pino Sansanelli

'77
●RCA PL 31262
○
◉

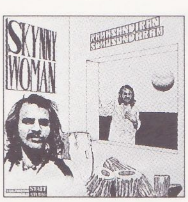
Federico Troiani、Roberto Puleo等が参加しているとは言っても決してプログレを演っている訳ではない。それでも堅実なバック陣に支えられながら展開する独特のしゃがれ声と清らかなオーケストレーションの絡みは、時に劇的なまでの感動を伴って、聴く者に不変の美を思い出させてくれる。この味わいの深さ、メロディー・ラインの美しさ、そして唱法の巧みさは、かのRiccardo Coccianteの「Concerto Per Margherita」を彷彿とさせるどころか、むしろ凌駕してしまっている感さえある。唄物として非常に密度の高いアルバムであり、Cocciante、Baglioni等のファンには宝物になると思う。　(鈴木伸一)



RAF D'ALI
Luce E Ombre

'73
●Zeus BE 0058
○
◉

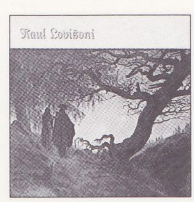
ゼウス・レコードという、余り聞いたことのない自主レーベルからリリースされたアルバム。ナポリで製作されたものである。ペカ・リエン・ローラなる人物が作詩作曲、アウグスト・ヴィスコのアレンジ、そしてラフ・ダーリが歌を歌っている。声は特に特徴のあるものではなく平均的だが、オーケストラのアレンジが興味深い。オーボエやフルートなどをひかえめに使用して、トゥッティは少なく、寡黙な印象だが、それがほのぼのとした好印象を与えてくれる。早春のイメージが全体を支配しているのはおそらくそのせいだろう。ナポリの田舎で、人知れず創作をする男達の姿が目に浮かぶようだ。タイトルは「光と影」の意。　(山崎)



RAMSANDIRAN SOMUSUNDARAM
Skynny Woman

'74
●Magma MAGL 18006
○
◉

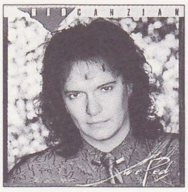
ラムサンディラン・ソムスンダラム。ニュー・トロルスの分裂期、ヴィットリオ・デ・スカルツィの方のトロルス、「Atomic System」に参加していたパーカッショニスト。名前のごろ合わせからしてイタリア・ファンにはそっぽを向かれていたアルバムだが、クォリティは高い。ただ大きく畑が違うだけ。しかし、ほとんどがトロルスのGianni Belleno(ds)との共作。おまけにスカルツィ=ベッレーノという曲もある。kbdのトーンもまるであの時のトロルス。ほとんどは彼のコンガの連打をフューチャーしたファンキーな曲想だが、歪んだエレクトリック・ビートとツバ吹きフルートの勢いの凄じいA④などA.ブラウン張りのvoまで絡んでジュリアナ東京を圧倒する。多分トロルスのメンバーが絡んでいるはず。　(松本)



RAUL LOVISONI
La Gnove Lune

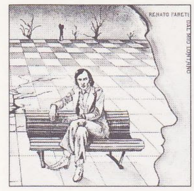
?
●AVF 985
○
◉

ライナーには'81年にバッティアートのプロデュースによるアルバムがクランプスから出ている(Cramps 5207 303)とあるので、これは彼の2作目ということになるのだろうか。内容はオーボエやピアノ、アコースティック・ギター、ハープ、ソプラノ等をフューチャーして、室内楽色を感じさせる静かなヴォーカル作に仕上げられている。既存のカンタウトーレ作とは視点の違う静けさを持ったユニークな内容だ。ほとんどの曲で数多くのそれら参加ミュージシャン達の創り出すたおやかな流れに彼のヴォーカルが溶け込んで、とてもうつろな雰囲気が出ている。朝もやに包まれたかのような静けさだ。トータルにコンセプトされたオリジナリティのあるアルバムに仕上がっている。　(松本)



RED CANZIAN
Io E Red
'86
●CGD 20498
○
◉

何処かプライヴェイトな趣きのあったロビーのソロとは対照的に、ベーシスト、レッド、カンツィアンのソロは、プロフェッショナルな意識の下に制作されたような気がする。バックにはジャズ／フュージョン系のサックス奏者ビル・エヴァンスを始め、伊の女性シンガー、ロレダナ・ベルテ（ビヨン・ボルグとのゴシップで話題となった）等、多くのミュージシャンが顔を揃え、POOHのメンバーも一曲ずつ参加している。音の方は制作年もあってか「Asia No Asia」や「Oasi」に近い力強さとスピード感があり、イタリア独自の物という訳ではないが、紛れもないプロの作品。バンドのアルバムでは1,2曲しか自らの曲が収められない立場を晴らすかのような、やる気と勢いが全編から伝わって来るようだ。（高山）



RENATO PARETI
Dal Mio Lontano
'73
●Ducale DUC 8
○
◉

Homo Sapience, La Strana Societaのメンバーとして、又はFili D'erbaのプロデュース等幅広い活動を行なっていた彼の1stソロ・アルバム。後にPolydor, Fonit Cetra、最近ではHarmonyとレーベルを変えているが、若々しくみずみずしい感性が惜しみなく流露されたこの作品こそ彼の音楽性を評価するに相応しい。クラシカルでシンフォニックな側面も随所に見受けられるが、それもそのはずでPiscopo始め当時の腕達者達がバックを務めている。取り分けアレンジ及びキーボードのSergio Parisiniなる人物は謎の実力者である。ジャケは見開きで歌詞がブックレット型式で折り込まれている。ジャケのイラストも美しい仕上がりでとても丁寧に作られたアルバムという印象が強い。（鈴木伸一）



RENATO ZERO
Invenzioni
'74
●RCA TPL 1-1052
○
◉

独特の容姿で一部で人気の高いレナート・ゼロといえば、オザンナのエリオ・ダンナが参加ということでマーキーにも紹介された「Aetide Antartide」が比較的知られている。本作は彼の初期のLPでサウンドに多少まとまりがなく、暗中模索といえないこともない。あえてここに登場となったのは、傑出した曲があるからである。そのA①は、ギターの弾き語りから始まり、力強く劇的な展開を迎える。どこか人を喰ったような節回しに好き嫌いがありそうだが、カンタウトーレ系のアルバムでは滅多に体験できない緊張感のあるサウンドである。続く曲は、ほのぼのとしながらもとても美しいメロディを持っている。その後ヒット曲に恵まれスターの道を歩み始める。（吉瀬）



RENZO ZENOBI
A Silvia
'75
●RCA TPL1-1136
○
◉

このLPは裏ジャケの方がいい（本人のアップ）。私の部屋には壁に好きなLPのジャケットが飾ってあるのだが、マルチェラの「BELLA」とかといっしょに、この裏ジャケがドーンとある。MAURIZIO TATALOと並べたらおもしろいかも。A①の静かなピアノの入り方からして、語りかけるようなか細い歌声。少しばかり盛り上がるのはタイトル曲だからか。他の曲も優しさに満ちている。ギターの弾き語りに少しバックがつきオーケストラが加わる、といったふうなのだが、みんないい曲だ。これ以前の作品を聴いてないが、これがデビュー作だとすると裏ジャケの写真はいったい。肌の張りからするとまだ20代のようだが、髪の毛が…。そうか、歌の繊細さはここから来てたのか。納得。（渡辺一巳）



RENZO ZENOBI
Chiari Di Luna
'76
●RCA TPL1-1198
○
◉

ジャケットの地味さにかけては、私の知っているLPの中でもトップクラスだろう。これは何かある、と思って裏ジャケを見ても曲名だけ。まあ、この人のはいつもメンバークレジットとかないから。A面とB①、②まではすべて好きだ。どこかはかなげな曲調と消え入りそうな歌声がマッチして、何とも言えぬ「もののあわれ」を感じる。オーケストラを省いてバックをシンプルにした分、余計強調されている。それに彩りを添えるキーボード、パーカーションのアレンジもいい。ストリングスシンセの、オーケストラの抱擁感と違ってじわーっと浸透する感じは、本作にピッタリ。特にB①、②での使用は効果的。B②はピアノが夏の日の恋みたいなのだが、さわやかな印象が残る。（渡辺一巳）



RENZO ZENOBI
Danze
'77
●RCA PL 31239
○
◉

本作はジャケットがちょっと奇をてらった所があるが、内容はいつもどおり謙虚とも言えるほど地味だ。このころは年に1枚ずつアルバムを発表していたのだから充実した時期だったのだろう。しかし、どう聴いてもシングルヒットしそうな曲はない。逆に全曲シングルカット可能とも言えるが。A④、B③のコミカルな曲以外は全部好きだ。彼の淡々とした歌にピアノ、アコースティックギター、オーケストラといういつものシンプルなスタイル。本作は特にオーケストラの響きがきれいだ。結局彼の地味な曲は、私の知る限り誰にも取り上げられることはなかったようだ。そのためかどうかはわからないが、次作では一気に爆発、超ド級の作品を発表。その後はポップスへと向かう。（渡辺一巳）



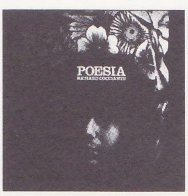
RENZO ZENOBI
Bandierine
'78
●RCA PL 31401
○
◉

ラッテミエレの1stを想わせる女性合唱からこの作品は幕を開ける。混声合唱とストリングスを全面的にフューチャーしながらも、決して感情に流されることのない抑制されたアレンジが、月の光りに照らされたガラス細工のような、他に類を見ない繊細さを浮き彫りにしている。まさに奇跡に近いといえよう。時折り爪弾かれるチェレスタ、リコーダー、ハープの調べが郷愁を誘う。全編を通じて名曲揃いといえるが、特筆すべきは、やはりA①であろう。これほど美しい女性合唱も希有ならば、それをバックにZenobiが温かく語りかけるように歌うメロディーもまた、余りにも美しいものである。幾重にも合唱が交差しつつ、静かに消えていくエンディングの無垢な透明感と余韻には、感嘆のため息を禁じ得ない。（長砂）



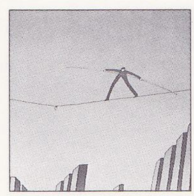
RICHARD COCCIANTE
Mu
'72
●RCA DPSL 10549
○BMG Ariola ND 71913
◉

'72年にリリースされたコッチャンテの作品。複雑な変形ジャケットといい、そのサウンドといい、当時のプログレッシヴ一色だった熱いシーンが想像できるシンフォニックなアレンジが成された作品である。ゲストも多数プログレッシヴ畑のアーティストを起用しており、Rustichelli & Bordini のキーボーダー、パオロ・ルスティケッリ、ANONIMA SOUND のデレク・ウィルソン、BRAINTICKET のジョエル・ヴァンドローゲンブローグ、キャロル・ムリエル etc. が色どりを添えている。この時期には多くのカンタウトーレがプログレッシヴ色を強めた作品を残しているが、その中でも完成度の高い一枚である。尚、この頃のコッチャンテは名のスペルをイタリア風にRiccardo とはしていない。（山崎）



RICHARD COCCIANTE
Poesia
'73
●RCA DPSL 10578
○BMG Ariola ND 71912
◉

リッカルド・コッチャンテは現在までに10数枚の作品をリリースし、今尚、第一線で活躍している人気シンガーである。この作品は「Mu」と「Anima」の間に発表されたものだが、作風は後者に非常に近い。ここではオーケストラは使われておらず、その代わりにとても美しいソリーナが全面にフィーチャーされている。地味でしっとりとした哀愁ある内容で是非とも聴いてもらいたい一枚である。彼はこの作品までリチャード名義で発表しているが、おそらくはインターナショナルな市場を目指した為であり、その思惑は見事、隣国フランスで開花し次作「Anima」は、フランス語ヴァージョンも発売されるに至った。（土川）



RICCARDO COCCIANTE
Anima
'74
●RCA TPL-1-1060
○BMG Ariola PD 74842
◉

リッカルド・コッチャンテの中で最もプログレッシヴな作品は、パオロ・ルスティケッリらを加えた Mu であろうが、より、内省的な作品として何を選ぶかといえば、Concerto～か、本作である。Concerto～ではヴァンゲルスをアレンジャーを迎えたが、ここでは E. モリコーネのつややかなオーケストラ・アレンジが彼のしゃがれ声と一体となり美しく悲しい愛の世界を描いている。オリジナルはこのダブル・ジャケットのもので、フォロンの絵のものは再発。フランス語ヴァージョンもフランスでリリースされており、それはフォロンの絵でダブル・ジャケットである。尚、彼の良質な作品にふれたい方は、'76年までの作品を一聴することをお勧めしておく。サイゴン生まれの情熱的なカンタウトーレである。（山崎）



RICCARDO COCCIANTE
L'Alba
'75
●RCA TPL1 1167
○BMG Ariola ND 74894
◉

コッチャンテの4枚目のアルバムである。「MU」の頃からのパートナーであるマルコ・ルベルティが作詞・プロデュースをしているので、常に変わらない一定した作品を聞くことが出来る。ルベルティとの関係は'79年の「..E IO CANTO」まで続く。本作の聞き所はずばり〝唄〟で、全編がバラードで構成されている事も関係しているが、ピアノを主体とした静の部分を強調したアレンジはコッチャンテのささやく様な声をも漏らさず聞き手に伝えてくれる。雰囲気は「POESIA」に近いがこちらの方が若干地味か。本作はギリシャのAPHRODITE'S CHILD の一員で同じRCAの所属であるルーカス・シデラスをアレンジで起用、彼が'75年イタリアでアルバム「PAX SPRAY」（TPL1 1081）を録音した事が直接のきっかけと思われる。（片山）



RICCARDO COCCIANTE
Concerto Per Margherita
'76
●RCA TPL 1-1220
○BMG Ariola PD 78041
◉

サイゴン生まれのカウタウトーレ、コッチャンテはそのルックスにもかかわらず常に抒情的な心に残る作品を顕わし続けている。マルゲリータなる清らかな少女に捧げられたこのアルバムは、Lucia（これも女性名）と並びリリカルな美しさではちょっと白眉。それもそのはずアレンジをヴァンゲリスやE・モッリコーネという巨匠が手がけている（とてもE・バカロフの比じゃない）。彼はアレンジにこだわる人でペリジェオの G・トマーゾ、D・ローズ、P・バックマスターらを起用し雅やかな有能性を醸し出している。Poesia、Anima、L'alba、Concerto per Margherita、Riccardo Cocciante、Mu、…e io canto、Cervo a primavera、Coccianteのいずれも質の高いものばかりだ。（岡本）



RICCARDO COCCIANTE
Cervo A Primavera
'80
●RCA PL 31546
○RCA PD 74933
◉

コッチャンテの8枚目のアルバムである。本作で初めてマルコ・ルベルティとのコンビを解消、作詞に巨匠モゴール、アレンジ・プロデュースにはシェル・シャピロ、ペリジェオのジョヴァンニ・トンマーソ、フランスの大御所ダヴィッド・ローズを起用する等新境地を開いている。特にダヴィッドは'79年に結成したばかりの自己のバンド、〝ROSE〟の全員で演奏に参加、確かな腕を披露している。前作あたりからだんだんとポップな作風になって来ていたが、タイトル曲といい〝TU SEI IL MIO AMICO CARISSIMO〟といい、この抜群の開放感は今までに無かったものだ。カヴァーに挑戦している事も見逃せないが、それがPFMの名曲〝SUONARE SUONARE〟と言うのも面白い。尚同時期にフランス発売のみの新曲も制作された。

（片山）



RICCARDO COCCIANTE
Cocciante
'82
●RCA PL 31623
○
◉

前作「Cerve A Primavera」に引き続き、ルチオ・バッティスティの作品などで知られる名作詞家モゴールを迎えて、作詩モゴール、作曲コチャンテのコンビで全曲つくりあげられ、また、アレンジャーにはシャル・シャピロ（元ロークスのリーダー）、プロデューサーにはポール・バックマスターと豪華なメンバーがコチャンテを盛り上げている。コチャンテのつくりだすメロディ・ラインは相変らず美しく、以前より張り上げる事が少なくなったヴォーカルがうまくマッチし、落ち着きを感じさせ、独自の世界をつくりあげた気がする。これまで以上にリズム・ラインがはっきりしているのは、ポール・バックマスターのためだろうか。ますます充実してきている。現在も活動中。

（前田）



RICCARDO FOGLI
Ciao Amore Come Stai
?
●RCA DPSL 10617
○
◉

'80年以後、マウリツィオ・ファブリツィオとの共作により、イタリアの人気歌手として活躍している彼が、イ・プーの4作目「Alessandra」を最後に、ソロに転向しての第一段である。ソロ活動としての不安も感じられるこの作品は、アレンジャーにトト・トルクァーティを迎え、プーと違った彼の魅力をひきだそうとしており、後の作品にない初々しさも感じられる好作品である。これを発表後、3年ほどの低迷期があったのであるが、ジャンカルロ・ルカリエロのプロデュースによる2作目より、着実にヒットする男性歌手へと成長していったのは、周知のとおりである。

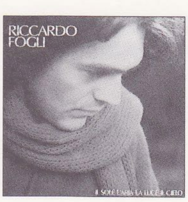
（山中）



RICCARDO FOGLI
Riccardo Fogli
'76
●CBS 81284
○
◉

プーから独立後のソロ第2作。ウンベルト・トッツィ他の作曲家から提供を受け、曲の魅力が1stより飛躍的に向上した。プロデュースはアリーチェの1st同様ジャンカルロ・ルカリエッロ。初のヒット曲B④を聴けば、狙う所はほぼ同じであったことがお分かり頂けると思う。フォッリはこの後75年作「Che Ne Sai」あたりからマウリツィオ・ファブリツィオの協力を得るようになり、以前にも増して親しみ易いメロディーと軽快なビートを打ち出し、82年度サンレモ音楽祭ではグランプリを獲得する。従ってしっとりした味わいなら本作や3rdに軍配が上がるが、M.ファブリツィオの旋律とアレンジが光る80年前後の作品もまた極上のユーロ・ポップスである。

（古田）



RICCARDO FOGLI
Il Sole L'aria La Luce Il Cielo
'77
●CGD 20001
○
◉

シングル・カットされたオープニングの〝Ricordati〟で早や120%に達する代表作の一つ。フォッリのソフトな歌声で十分なところを、ダニロ・ヴァオーナによるソフト・フォーカス気味豊満なオーケストレーションはこれを包み込んで、声の高なりと共にスロー・タッチにこむら返りを起こさせ、更に一テンポ引き伸してダメ押しする。それはもうカタルシスそのもので、'70年代後半のイタリア表現を極める。うるさすぎてもう泣き笑いしてしまう程、手がつけられない。前作とほぼ同じコンセプトの3作目になるが、相変わらず霧がかったような中にのぞくフォッリのナイーヴな歌/感性が素晴らしい。とても柔らかな仕上りを見せる。ヴァオーナは各種kbdをも弾いているが、音が溶け合い何だかよく判らない。

（松本）



RICCARDO FOGLI
Che Ne Sai
'79
●CGD PRD 20151
○
◉

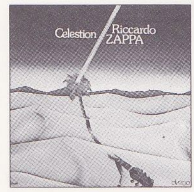
第32回サン・レモ音楽祭でグランプリを獲得したリッカルド・フォッリ。元、イ・プーに在籍していたフォッリだが、アイドル・グループの一員の座を捨てて、見事ソリストとして大成するまでには確かに紆余曲折があった。しかし、'76年頃からは〝MONDO〟のヒットもあって徐々に成功への道を歩み始めた。'77年には〝STELLA〟が、'78年には〝IO TI PORTA NA〟がヒット、そして'79年には本アルバムの曲〝CHE NE SAI〟（伝えよう僕の心を）がヒットして活動が軌道に乗ってきた頃の作品。〝CHE NE SAI〟はマウリツィオ・ファブリツィオとの共作である。他にはヒットした「SCENE DA～」や「TI AMO PERO」等も収録させており、名曲揃いのアルバムだ。

（山）



RICCARDO FOGLI
Campione
'81
●CGD PRD 20265
○
◉

'79〜'80年頃のリッカルド・フォッリは大活躍の時代で3曲がチャート・インした他、夫人のヴィオラ・ヴァレンティーノも2曲をチャート・インしている。'79年から始めたCGD傘下の独自のレーベル〝PARADISO〞も、彼等夫婦の作品の他、ジャンニ・トーニ等のスターをかかえ、非常に充実した時代だった。そして'81年に本作をリリースし、変らぬ歌声は好意的にファンに迎えられたのである。この年の男性歌手のランクでは、前年の14位から6位に浮上している。作曲をマウリツィオ・ファブリツィオに委ね、甘いトーンのフォッリの歌声は円熟の極みで、ヒット曲〝MALINCONIA〞他、名曲が多いアルバムだ。（山崎）



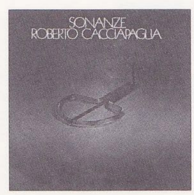
RICCARDO ZAPPA
Celestion
'77
●Divergo 5335 516
○
◉

クランプス、ロルケストラ等と同様に前衛的、あるいは意欲的なアーティストを多く輩出していたディヴェルゴ・レーベルからデビュウしたリッカルド・ザッパはオヴェイション・ギターを中心とした美しい調べを紡ぎ出すアーティスト。タイプとしてはペペ・マイナあたりと近いもので、彼ほど、オベイションのセミ・アコースティック・ギターの音色を大切にアルバムを作ったアーティストも少ないだろう。マイク・オールドフィールドの持っていたリリシズムと地中海サウンドがミックスしたような好作品。本アルバムにはキーボードとしてヴィンチェ・テンペラ、又ベースにはジュリウス・ファーマー等が起用されている。尚、彼は'80年代になっても生き残り、ソロ作品をリリースし続けているたのもしいアーティストでもある。（山崎）



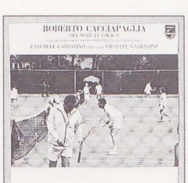
RICCARDO ZAPPA
Chatka
'78
●Divergo 5335 521
○
◉

ソロの2作目。内容も前作の延長にある。良質のギタリスト・アルバムになっている。タイプとしてはアンソニー・フィリップスやスティーヴ・ハケットに似て、トラッドを再現するのではなく、そのニュアンスをほのかに感じさせながら、常にコンテンポラリーなアコースティック・トーン主体のサウンドを聴かせてくれる。そういう点では、むしろマイク・オールドフィールドに近いかもしれない。ただし大作指向はなく、シンプルなスタイル。そして地中海民族音楽をベースにしていること。地中海という言葉が醸し出す開放的でたおやかなイメージもそのままに、その落ち着いた響きとコンテンポラリーに洗練された響きの接点に、彼の音楽がある。素朴さに耳を傾け心安まる音楽だ。（松本）



ROBERTO CACCIAPAGLIA
Sonanze
'75
●PDU Pld.SQ 6025
○
◉

'72年から'74年に書かれた〝Sonanze〞を収録したアルバム。このアルバムが彼のアルバム・デビューになるようだ。エレクトロニクス・サウンド、イコライズド・ヴォイス入りのオーケストラ曲、静謐なピアノ曲、ソプラノによる無調曲、ミニマル・サウンド等、非常に多彩な構成になっている。初期のバッティアートに似てフリーな感性に従った作風だが、より情緒指向にある。流れや浮遊感を感じるのもその為だろう。イコライジングには、'70年代前半のジャーマン・エレクトロニック・ミュージックに通じるものを感じとれるが、チェンバロやオーボエ等の細かな音使いで色彩感は出ている。様々な色が細かな粒子になって混りあっているような感覚だ。バッティアートらと共に伊アヴァンギャルドを代表する人物。（松本）



ROBERTO CACCIAPAGLIA
Sei Note In Logica
'79
●Philips 6323 081
○
◉

セカンド・アルバム、基本的に現代音楽的なアプローチで制作されている作品。室内楽団と4人のコーラス隊の為の作品をオーディオ的に工夫をこらしたフィルターを通して電気的処理をほどこしている。両面を通して1曲という大曲である。プロデューサーはミルト・レーベルからソロもリリースしているクラウディオ・デンテス、協力者として、後にチェリー・レッド・レーベルからチェンバー的な室内楽作品をリリースしたピエロ・ミレーシの名もある。非凡な才能を持ったアーティストで、後に「Generazione Del Cielo」では自らの才能を古典的な室内楽手法とロックとの融合の中で素晴らしい作品を作り出したのは周知の通り。過渡期の作品ではあるが意欲作である。（山崎）



ROBERTO CACCIAPAGLIA
Generazioni Del Cielo
'86
●Fonit Cetra LPX 155-2
○
◉

ロベルト・カチャパリア、3枚目のアルバム。カチャパリアの作曲、Giada Manca Di Villahermasaのイタリア語、フランス語、ドイツ語、英語を取り混ぜた詩、ソプラノ2人、メゾ・ソプラノ、テノールから成るヴォーカル、ピアノ、30人を越えるメンバーのオーケストラが一体となった大作（LP2枚組）である。手法としては完全にシリアス・ミュージックに属するものであるが、サウンド自体はリリカルかつ穏やかで暖かみがある。ロック・ミュージシャンの感性を生かしながら、オーケストラ、ヴォーカルの特性をうまく使ったドラマチックな音作りであり、彼のもくろみは成功したと言える。イタリアのロック・ミュージシャンが幅広い音楽性を持っていることも見せつける一枚。（賀川）



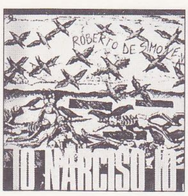
ROBY FACCHINETTI
Roby Facchinetti
'84
●CGD　20395
○
◉

ドイツのミュージシャンを起用して作られた、POOHのキーボーディストであり、リーダーでもあるロビー・ファッキネッティのソロ・アルバム。プロデュースを手掛けるのはPOOHの仲間であるステファーノ・ドラツィオ。ドラムスのカート・クレスはJ・ウェットンのソロやSAGAのアルバムでもその名を見ることが出来る。自身のキーボードを中心に、軽快なインスト、叙情的なヴォーカルを満載した本作は、さすがにバンドのメイン・コンポーザーであるだけにファンの期待に背くことはない。娘さん(「Alessandra」でお馴染み。今や20代か)とのデュエット⑥も心暖まる。尚、②には得意のフレットレス・ベースでレッド、③には流麗なアコースティック・ギターでドディがそれぞれ参加している。　(高山)



ROBERTO COLOMBO
Sfogatevi Bestie
'75
●Ultima Spiaggia ZLUS55185
○
◉

PFMの後期のアルバムにも参加しているロベルト・コロンボのファースト・アルバム。全ての曲を作曲、アレンジし、キーボードをメインとするコロンボがヴァイオリン、サックス、ドラムス、ベース、ギター、各種パーカッションらと行なった演奏は、あたかもヴィデオを2倍速で見るかのように次々と変化し、聴く者を知らず知らずのうちに取り込んでいく、所謂ジャズ・ロック調のサウンドであるが、非常に個性的で多様性に富み、ユーモラスかつ小気味がよい。各曲の雰囲気は異なるが、どこか暖かみを感じる部分があるところがイタリアらしい。コロンボは本作以後も2枚のアルバム「Botte Da Orbi」「Astrolypix」を発表しているが、残念ながら本作ほど密度の濃いものにはならなかった。　(賀川)



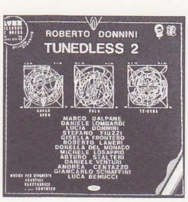
ROBERTO DE SIMONE
Io Narcisolo
'77
●RCA PL 31254
○
◉

ナポリの前衛民衆オペラグループN.C.C.P(Nuova Conpagnia Di Canto popolare)は、現在までに10枚を超えるアルバムを発表し続ける貴重なグループである。(蛇足乍らMusica NovaはNCCPの分裂から生れたグループである。)彼等の大衆歌劇はロック雑誌に於てさえ好意的に紹介され、Osanna等と同列に言及された記事も見かけられる程だ。そんな彼等のリーダーであるR. De Simoneのこの作品はNCCPから泥臭さを除き、よりソフトな仕上がりとなっている。そのサウンドからBranduardiを思い出してしまうのは私だけだろうか。哀愁を帯びた夢見るようなサウンドは、まるで童話の世界そのままで、無垢で純真な心を呼び醒ましてくれる。なお、A①は悲哀感に満ちた名曲である。　(鈴木伸一)



ROBERTO DONNINI
Tunedless
'80
●Lynx Z 00112
○
◉

これまで3枚のアルバムをリリースしたミニマリスト、ロベルト・ドンニーニのデビュー?作。'77年に書かれ、'78年(A面)と'79年(B面)にフィレンツェで録音されたもの。次作「II」に続くのでこれで半分ということになる。AB面は彼の弾くエレクトリック・ピアノを下地にしてそこにチェロやサックス、ハーモニカ、肉声等が重ねられていく。両面とも実演されているので、楽器の絡みが多くなるとピアノのピッチが狂いやすくなる。それはまるで血液の流れのような自律神経系統の変化のようで面白い。時間感覚云々というよりも、人間のそうした自然な肉体変化をミニマル化していく作業ともパフォーマンスの所在を見極めようとする作業とも言えそうだ。低音の肉声はジャクリーヌ・ダルビィが担当している。　(松本)



ROBERTO DONNINI
Tunedless 2
'87
●Lynx Z 00188
○
◉

芸術の町フィレンツェで活動するロベルト・ドンニーニの、独得の手法による「Tunedless」の続編。まずベーシック・トラックはコンピュータの発信音によるシーケンスを録音し、セカンド・トラックはこれに対比した彼のel-pが収められる。そして各ミュージシャンはそれぞれベーシック・トラックのみの先導により、おだやかでリリカルな即興を繰り広げ、こうした集積による全体のイメージは、終わりなくゆっくりとした運動を続ける音の回転体といった感がある。スタルテッリやロベルト・ラネーリ等、馴染みの顔も見られるが、あまり真剣に個々のプレイを云々しない方が得策。ただドネラ・デル・モナコのソプラノは生の声ならではの豊かなニュアンスで、地味ながらサウンドに彩を添えてはいる。　(山田)



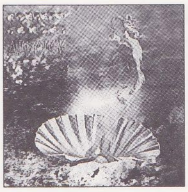
ROBERTO DONNINI
Fluxmar
'92
●Lynx Z 00856
○
◉

アルトゥーロ・スタルテッリのソロがリリースされたことのあるLYNXレーベルはこのR・ドンニーニのレーベルで、彼のソロ・ワークは既に3作目になる。今回は彼のコンピューター・トラックを基に計9名の演奏者が個別にインプロヴァイスしたものを編集したもので、前2作に通じるドローンが、またも情熱豊かな流れを感じさせる。非常にたおやかな、そして腹想色のあるサウンドだ。B面にはドネラ・デル・モナコも参加しているので、これを期に聴いてみてもいいと思う。様々な音が起っては絡まり、消えてはまた絡まりと流れを紡いでいて、そこに醸し出されている個々の素材の色が薄っすらと全体に漂い広がっていく様が秀逸。　(松本)



ROBERTO FERRI
Se Per Caso Un Giorno La Follia...
'77
●Ariston AR/LP 12324
○
◉

Aristonにはあの天逝の天才Gianni D'erriccoやRocchi, Simon Luca, Mario Barbaja等プログレッシヴな名作を生み出したアーティストが多いが、このRoberto Ferriのアルバムも知る人ぞ知る魅力溢れる名盤。特にA面1、2曲目の流れはプログレファンを十二分に魅了することだろう。時にエマニュエル・ブーツを思い起こさせるボーカルとロックの攻撃性が、悠大なオーケストレーションの広がりの中で絡み合う様は圧巻である。そしてB面ラストに至るまで比類無き美しさを湛える佳曲を散りばめ一枚のアルバムとして纏め上げた才能は賞賛に値する。'70年にシングルをPDUより発表して以来、長い活動の末、遂に成し得たRoberto Ferri渾身の傑作。（鈴木伸一）



ROBERTO LANERI
Anadyomene
'87
●ISMEZ/Polis Mushc I.S.25002
○
◉

ジャンフランコ・サルヴァトーレによる〝Sounding Islands〟というプロジェクトの一環の作品で、これはその第2作（1作目を手がけたのはスティーヴ・レイシー。このプロジェクトは神話やそのメタファーの考察から地中海音楽の根源を辿るといった学術的なものの様で、ここではロベルト・ラネーリがその音楽化の任にあたっている。彼は中近東、東洋やアフリカ音楽の要素をも持ち込み、女性Vo、そして彼自身によるエレクトロニクスの大胆な使用により、かなり自由な形で「地中海音楽の原型」のイメージを増幅させており、摩訶不思議な音宇宙を形成する上での鍵となっている。パガーニの1stやカルナシャリアあたりとはまた異なった空間軸を持つ作品。ジャケット・ワークはボッティチェルリの引用。（山田）



ROBERTO MERCANTI
Il Viaggio Di Una Mente
'74
●Fonit Cetra LPX 34
○
◉

本作はキーボードオーケストレーションが最大の魅力である。キーボードはいったい誰が、とジャケットを見てもメンバーすら書いてない。歌物にはよくあるパターンだ。とにかくこのストリングスシンセはいい。と言っても1曲が4分の世界だから最初から最後まで鳴りっぱなしというわけではなく、あくまでオーケストラの代用として使われている。しかし、この人は曲によって差が激しい。それと歌い方に癖がある（こういうのは訛りと言うのだろうか）。それでもA①、③、B①、②、③の叙情はたまらない魅力だ。響き渡るストリングスシンセ。マリオ・パンセリの「アドレッセンツァ」もまっ青。特にB③はサビがいいから最高に好きだ。カラオケがあったら（絶対にない）、ぜひ歌ってみたい。（渡辺一己）



ROBERTO SANESI
Viaggio Verso Il Nord
'72
●Rare RAR LP 55020
○
◉

ロベルト・サネシ、1930年1月18日、ミラノ生まれ。詩人?小説家?あるいは郎読家か?内ジャケットには初老の眼光鋭いその人のスナップ写真がある。恐らく詩を郎読したものだ。全編に渡り彼の静かな語り口を収録している。そして効果音ふうにバック・ミュージックがつく。テープの逆回転やメロトロン、ピアノ、女性コーラス等が不安気な空気をつくり出している。クレジットはバレット・ディ・ブロンゾのジャンニ・レオーニ、ドラムには同じくブロンゾのジャンキ・ストリンガ。レオーニのメロトロンが至る所で大きな効果を出す。まるで「YS」の不安感をのみとり出し、効果音ふうに使った感じだ。まったく素性の知れないこのレーベルには、少なくとももう1枚のレオーニの参加したやはり郎読作がある。（松本）



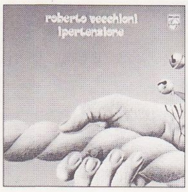
ROBERT SOFFICI
All'improvviso L'incoscienza
'77
●Fonit Cetra LPX57
○
◉

ロベルト・ソフィーチに関しては72年にリコルディ・レーベルよりリリースされたアルバムIn Queste Ore Chiare（Ricordi SMRL 6106）と'77年にフォニット・チェトラからリリースされた本アルバム、及びその後のチェトラからの2枚の今日風のサウンドの計4枚しか資料がないが、おそらく他にもアルバムがあるだろうと思う。しっとりとした歌声を持つカンタウトーレで、生のストリング・オーケストラを加えて優しい歌を歌いかける。彼は歌の他にギターとアレンジも手がけ、その才能の冴えを聴かせてくれる。バックにはアンディ・スルディやサイモン・ルカ等が参加しており、曲によってはリリカルなインストゥールメンタル・ナンバーもあり変化がつけられている。（山崎）



ROBERTO SOFICI
Il Canto Della Scorpione
'78
●Fonit Cetra LPX 65
○
◉

ハスキーボイスで時にはポップに、そして時にはありったけの熱い想いを歌に託すロベルト・ソフィーチ。タイプとしてはクラウディオ・バリョーニかリッカルド・コッチャンテなのだろうが個性という点に於て、彼も又十分な魅力を持っている。このアルバムが彼にとって何枚目の作品なのか知らないが、ジャンピエロ・レベルベッリをアレンジャーに迎え壮大なオーケストラをフィーチャーした「In Queste Ore Chiara」（Ricordi SMRL6106, '72）、「All'improviso Lincoscienza」（Cetra LPX57, '77）そしてこの作品は、どれも良く出来ている。彼も新しいリズムを取り入れて流行に付いて行こうとする姿勢が見られるが、それによる作品の劣化はない。（土川）



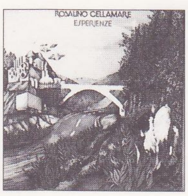
ROBERTO VECCHIONI
Ipertensione
'75
●Philips 6323 040
○
◉

'77年の「サマルカンダ」で有名な彼だが、これはデビュー作と思われる。かなりの作品を出しているのだが、地味というか、洗練されてないというか、好みがはっきり別れるようだ。音楽性も含めてレナート・パレッティとかアントネラ・ベンデッティと共通点があるように思う。本作も、ところどころ野暮ったさはあるものの、キーボードの踏ん張りで、何とかもっている。それはA①、②、B③のバックで鳴ってるストリングスシンセ。特にB③は9分を超える曲で、同じメロディーの繰り返しなのだが、ストリングスシンセがしだいにオーバーラップしてくるところは、結構聴かせる。ジャケットは人間と悪魔(死神)が綱引きしてるというもので、B①の演劇性の強い曲に、そういった内容が表れている。　(渡辺一己)



ROSALINO CELLEMARE
Il Bosso Degli Amanti
'73
●It DZSLT　70010
○
◉

おそらくデビュー作であろう本作は、ルチオ・ダッラをアレンジャーに迎え、'73年に制作されている。本作が取りざたされるのは、何といっても、メロトロンの使用だが、1曲目に針を落とすと、やさしく語りかける様なヴォーカルスタイルにメロトロンが響きだす。この一曲目だけを、きいているとPAOLO FRESCURAに、以ているが、2曲目以降、ロック色の強い曲が多くなる。B面に入るとまた、又、メロトロンが、大活躍(とは言っても、あくまでもバックで静かに流れている程度)。コチャンテやバリョーニ程、ダミ声では、ないせいか、声の線が細い様な気もする。何かひとつ、きこうと思う時などリラックスしてきけるアルバムではある。本作と次作との間にもう一枚LPが有るとの噂。　(堤野)



ROSALINO CELLAMARE
Esperienze
'75
●RCA TPL 1-1137
○
◉

どれも不完全な情報で申し訳ないが、このロザリノ・チェラマーレも、現在のところ2枚の作品しか確認できていない。一枚は73年にリリースされた「Il Bosco Degli Amanti」(IT DZSL70010)。この作品は、どの曲も抜きん出た名曲こそないものの、全編に渡ってバックに使用されたメロトロンの比重の多さが話題になるに違いない。やや渋めの歌声を効果的なサポートしている。もう一枚が75年にリリースされた本作。曲の完成度としてはこちらのほうが良く、特にB面の3分の2程を費した組曲は、コーラス、オーケストラ等を意欲的にアレンジしたプログレッシヴな内容で、どことなくコッチャンテの「Mu」を想わせる料理の仕方である。　(山崎)



SANDRO GIACOBBE
Signora Mia
'73
●CBS S65847
○
◉

芸歴も長く、いいアルバムを沢山出している割に、そんなには騒がれないカンタウトーレ、サンドロ・ジャコッベ。Daniele Paceという人の作詞、彼の作曲によるコンビの作品は、オーケストラの導入もあって、ラヴ・ロックの王道を行くようなものに仕上がっています。所々オルガンが出て来て、曲によってファンキーな、あるいはジャーズィーな演奏をするのがヘンと言えばヘンですが、1曲目のタイトル曲が、サビに女性コーラスを加えてアルバムの最後にまた出て来るなど、一枚通した作りもそれなりに考えられています。なお、この1stのジャケットは、後にCGDがいろんなアーティストのベスト盤を「Aシリーズ」として出した中の、彼のベスト盤のジャケットにも使われています。　(斎藤)



SANDRO GIACOBBE
Il Giardino Proibito
'75
●CBS 69115
○
◉

「Proibito」は、ジャケット裏でよく目にする「Prohibite」に当たるイタリア語の、受け身の形なので、「禁じられた庭」というタイトルになるこの2nd、ジャケットが、生い茂った木立ちの写真で色調がこげ茶色なので、何だか暗い感じがしますが、いつもどおりのラヴ・ロックです。1stの内ジャケも、「僕のいい女」とイチャついている写真のコラージュでしたし、この2ndは外も内も、二人でナイショしている写真なので「いい加減にしろ」というカンジですが、内容の方は、それほど泣き泣きで分厚い音の曲ばかりではありませんが、オーケストラはそよそよと、メロディーは爽やかに泣いた佳作です。なお、本作から作詞にOscar Avogadroという人も加わっています。　(斎藤)



SANDRO GIACOBBE
Metto All'asta...
'76
●CBS 81312
○
◉

水をかぶった彼の写真のジャケットのベスト盤のタイトルにも使われた、彼の代表曲"Gli Occhi Di Tua Madre"を含む3rd。ムーグと思われる「ビョンビョン」という音が、時代を感じさせてウレシイです。本作はオリジナルもシングル・ジャケットで、本人が写っているだけですし、また一時期けっこう出回ったためか、プログレ・ファンにアピールする初・中期のアルバムの中では、最もプレミアがついていません。ですが、1st、2ndに4分の1くらいずつあった。ノリが軽くなって音が薄くなる曲がなくなり、全編フワーッとした、暖かくしかも厚めの音なので、オーケストラがソリーナと思しきキーボードに代わったものの、私はこの3rdが特に気に入っています。滅法荒らすか?　(斎藤)



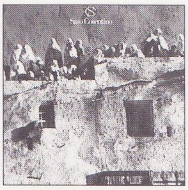
SANDRO GIACOBBE
Bimba
'77
●CBS 81962
○
◉

サンドロ・ジャコッベは'78年に来日しているが、その後は勢いが衰えてしまった。実際に、彼の魅力は頼りなげな歌い方にあったように思われるが、アップ・テンポの曲を手懸けるようになって失敗した。このアルバムは73年にシングル・デビューして以来、しばしばヒット・チャートに顔を出していた頃の最後の作品。通算4枚目のアルバムで、以後は叙情が失われていく。デビュー盤「Signora Mia」あたりではジェノヴァ派カンタウトーレの新世代の歌手と思ったが、このアルバムまでが彼の個性が生かされているように思う。バックはラディウスやマッシモ・ルカなど一流を揃え、アレンジャーには歌ものの巨匠ダニロ・ヴァオナが起用されている。
(Hiro Tanaka)



(ANTONIO) SANGIULIANO
Take Off
'78
●RCA PL 31361
○
◉

電子楽器類、ピアノ、ヴォイスが複雑化されたシンフォニーを奏でる。スタイルはいわゆる近代的な管弦楽法のモチーフを電子的に処理するというものである。ピエロ・リュネールに近い感性を持ちあわせてはいるが、決して似ているわけではなく、あくまで全体の「感じ」としてである。的確な表現をするとすれば「後期ロマン派の叙情をサウンドコラージュとして電子的処理のもとに新解釈するグループ」とでもいえるのだろうがこれではたしてこの作品の持つ特異性を正確に伝えることができるのだろうか。壮大な空間はワーグナーからシェーンベルグの前期に致る刹那的な叙情に満ち満ちている。サンジュリアーノはイタリアという枠を越えた一つの偉大な感性の塊である。アドリアノ・モンテドゥーロのプロデュース。
(山崎)



SARO COSENTINO
Saro Cosentino
'88
●L' Ottava 50 7904321
○
◉

'80年代後半の新興レーベル、ロッタヴァのクォリティの高さを認識させてくれるシンガー作。4曲入りのミニ・アルバムなのが、なんとももったいない。少しプログラミングされたキーボード・トーンの出方が画一的で味気ないものの、弦楽四重奏＋kbd、そしてサックスの参加が生ぬるさのない情緒豊かな流れをつくり、コクを感じさせる。'80年代のバッティアートがとったポップ・アプローチを一歩発展させたサウンドとも言えるかもしれない。バッティアートもちょうどこの頃に、ディジタルなビート感やイタリアン・ポップス(歌)のシフトを提示し終え、洗練された音楽性を更に歌い込み始めていることから、コセンティーノの同調がうかがえる。ロッタヴァはEMI傘下でバッティアート・ファミリー色が強い。
(松本)



SERGIO ENDRIGO
Nuove Canzoni D'amore
?
●Cetra LPB 35038
○
◉

バカロフの協力を全面的に得て作られたアルバム。美しいモザイクのジャケットの中身は、ほとんどの曲に配されたバカロフのオーケストレーションをバックにエンドリゴが淡々と歌ってゆくもの。中には所謂イタリアン歌謡といった風情のものも数曲あるが、中でもショパンのピアノ曲をアレンジしたA⑤や、コンチェルトグロッソ張りのストリングスが胸を打つB①あたりが、我々から見たこのアルバムのハイライトか、しかしロックというカテゴリーの中で聴けるアルバムではないことは確かで、長いカンツォーネの歴史の中での1枚としてとらえるべきであろう。ジャン・ムジーの名前も見ることが出来る。
(木下)



SERGIO ENDRIGO
Elisa Elisa E Altre Canzoni D'amore
'73
●Cetra LPB 35048
○
◉

'71年の彼のアルバム「Nuove Canzoni d'amore」を母体として、曲順の入れ替えと数曲の新曲をプラスしジャケ違いで作られたものである。イタリアの歌物レコードには時々こうした形が見うけられる。イタリア式セールスの手段なのであろうか。しかし本作は母体となった作よりも数段上のランクに仕上げられた。アレンジャーは奇才バカロフ。それだけでもいかにクラシカルで素敵なものであることが想像できるであろう。最大の聴きものタイトル曲〝Elisa Elisa〟当時のイタリアのほのぼのとしたよき時代、真夏の熱き青春を想わせる名曲と言えるだろう。それにしてもこの曲何度Elisaと呼ぶのか。激しい恋の表現、これもイタリア式恋の手段であることは言うまでもないだろう。
(井波)



SERGIO ENERIGO
Donna Mal D'Africa
'78
●Vanilla VAL2010
○
◉

エンドリゴはパオーリを中心とするジェノヴァ派カンタウトーレの中では少し遅れて注目されることになる。デビューは'60年の〝Bolle Di Sapone〟という曲。このシングルでイタリアのシナトラと呼ばれるようになった。彼の曲がよく知られるようになったのは'70年代前半のチェトラ時代。サンレモで優勝した'71年前後はカンタウトーレとして最も充実していた時期で、アルバムではバカロフなども関わっている。さて、このアルバムは彼の情報がなかなか伝わらなかった頃、ヴァノーニのレーベル、ヴァニラから発表されたもの。元レアーレ・アカデミアのトロイアーニがアレンジャー、キーボーダーとして活躍し、彼の美しいピアノがエンドリゴの歌声を引き立てている。
(Hiro Tanaka)

S



SIMON LUKA & L'E NORME MARIA
E La Mia Mente?
'73
●Ariston ARLP 12102
○
◉

Simon Luca3枚目にして最高の1枚。'71年Victoryからの1stはNinni Carucci、Stormy Six等の参加を得ながら、アコースティックな趣きが強く、又2ndは、パワフルなロックに終始しプログレッシヴな方向性を持ち得なかったのだが、このアルバムに於て彼の才能は一気に開花する。黒っぽいフィーリングの彼のボーカルはより柔軟な表現力を身に付け、又バックを務めるL'enorme Maria(Gigi Belloni, Ronnie Jackson, Flavio Cuffari, Claudio Bazzari等という超豪華なメンバー。)の演奏も無駄が無くアルバム全体を引き締めている。この後Ricordi, Spaghettiとレーベルを転々とするが、さ程興味を惹く出来ではないのが残念。(鈴木伸一)



STEFANO PULGA
Suspicion
'79
●CGD20118
○
◉

ステファーノ・プルガの名を知ったのは、マリオ・ラヴェッツィのLPからだった。優秀な人材を揃えているラヴェッツィが、サウンドの要であるキーボードに無名らしき新人を抜擢したのだから、一部のファンはプルガの名に注目していたにちがいあるまい。その彼のソロ第1作はラヴェッツィの協力を得て、'79年に発表された。イタリアの音楽シーンを巻き込んだプログレッシヴ・ロックの波が消え去り、次の世代に当たるプルガには、もはや変なわだかまりは微塵も無い。元気はつらつとした彼の演奏の前ではラヴェッツィも、ダッラリオも、ピスコーポも影が薄い。ファンキーな曲には驚くが、ある意味ではヴォーロ、ラヴェッツィの継承者ともいえよう。第2作「Indio」も同傾向。(吉瀬)



STEFANO TESTA
Una Vita Una Balena Bianca E Altre Cose
'77
●Disco Piu DP 39007
○
◉

ペントラ・ディ・パピンと同じDisco Piuレーベルからリリースされたステファーノ・テスタというシンガーのアルバム。歌物の持つ叙情的な味わいとプログレッシヴな緊張感が良く調和した好作品である。特に、幻想的なフルートの調べで幕を開けるA①の組曲(オペラに題材を求めている)はアコースティックなパートと、ストリングス、フルート等を駆使した動きのあるパートのコントラストが際立つ秀作で、最もイタリア的なタッチで仕上げられている。他のナンバーは多少、歌の占める比重が大きくなるが魅力的なものばかりで、春のうららかな日差しを感じさせる素朴な作風、叙情的なストリングスやacギターをバックに切々と歌い上げるイタリア特有の手法と、2通りの楽しみを提供してくれる。(江田)



SUSY BELLUCCI
Nel Paese Di Susy
'78
●RCA PL 31407
○
◉

トラッド・バンドCARTA CANTAのヴォーカリスト、スージー・ベルッチのソロ・アルバム。ほとんどの曲はFabrizio Federighiとの共作になっている。童話のイラストもそのままに、内容の方も子供向けの作品を思わせるやさしげなものだ。歌詞はイタリア語だが、いわゆるイタリアン・メロディとは縁がなく、アコースティック・ギターを多用したフォーク色が強い。歌が語りや笑い声になったり、オペラの真似になったり、とコミカルにもなる。だから印象としては自作自演の童話集といったあたりか。聴くには静かなフォーク・タッチの何曲かが狙い目だが、それ以前に、このアルバムには演出された作風を感じる。アルトゥーロ・スタルテリがピアノで参加しているもののあまり関係ない。(松本)



TERESA DE SIO
Villanelle Popolaresche Del'500
'78
●Philips 6323 069
○
◉

ナポリを代表する歌姫、テレーザ・デ・シオの'78年発表のおそらくファーストアルバム。MUSICANOVAのファーストと同等期に録音された作品であり、同グループのEngenio Bennatoの全曲的協力によって製作されている。まるでMUSICANOVAのハードな部分のみを凝縮したような壮絶無比な作品に仕上がっている。それにしても初期テレーザのボーカルは本当に凄い、そして熱い。灼熱化した情念の塊が火を吹きながらリスナーに波状攻撃を仕掛ける、とでも言ったらよいだろうか。ただし泥臭さも相当に強いので拒否反応を示す人も多いだろう。今回聞き返してみて、'80年代中期のサベージ・ローズに近い印象を持った。後にポップ化するなんてまったく信じられない。(川辺)



TERESA DE SIO
Africana
'85
●Philips 824 810-1
○
◉

これが確かソロ5作目になると思うのだが確証はありません。MUNICANOVAや初期のソロでのトラディショナルで情熱的な彼女と比較すると、とても同じ歌手とは思えない。曲想がまるで違う。全編アップ・テンポなリズムに貫かれた完全なポップスであり、歌声もすっかり角が取れてしまい、聞き手は180度視点を変える必要がある。まあこれはこれで大正解、抜群の歌唱力に支えられたハイセンスのポップス、これ以上何が要るというのか?マティア・バザールとかアリーチェあたりを引き合いに出すと理解しやすいと思うが、事実匹敵する内容である。あのブライアン・イーノが参加して、最後の曲で遊んでたりするが、だからといって大した意味はありません。(川辺)



TERESA DE SIO
Toledo E Regina
'86
●Philips 830 542-1
○
◉

ポップ化して久しいテレーザ・デ・シオのルーツ指向が数年ぶりに爆発した一枚。今世紀前半に書かれたナポリの歌曲を録音したものと聞くが、この息苦しいほどの大叙情はいったい何なのか。初期のトラッド路線とも前作までのポップ路線とも全く異なる。ピアノとオーケストラ(アレンジはポール・バックマスター)が中心のノスタルジックな調べに乗って、テレーザのまるで水棲生物のようにしなやかに蠢くボーカルは、気味悪いほどに優しく滑らかだ。彼女の本道からはやや外れる作品と思うが、'80年代のシリアス系の歌ものとしては、カチャパリアの2枚組や、アリーチェの「Melodie Passagere」あたりと並ぶ屈指の大傑作。イタリアン・ロックの持つ叙情歌メロのルーツを知るうえでも貴重な一枚。　(川辺)



TERESA DE SIO
Sindarella Suite
'87
●Polygram 834 301-1
○Polygram 834 301-2
◉

前作でシリアスな新境地を開拓したテレーザ・デ・シオのLP2枚組の大作。再びポップ路線に舞い戻っているが、前作の残り香的部分もかなり耳に残る。曲によってメンバー、アレンジャー等が異なるが、エルンスト・ビットリオ、ロベルト・フィクスといった以前からの仲間、さらにポール・バックマスター、イーノ等も顔を揃え、ソロ活動の集大成的な内容と言う事ができる。LP3面目には7つのパートからなる16分ほどの組曲が納められているが、小曲をコラージュ的に組み合わせたものであり、緻密で畳み掛ける展開などを期待してはいけない。曲が収録されているのはこの3面目までで、4面目は美しい線画のイラストが彫り込まれているというアナログ・ファンにはうれしいアイテム。　(川辺)



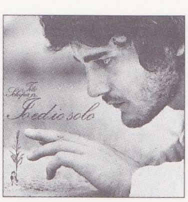
THOR
Thor
'79
●Delta Italiana ZPLDE 34054
○
◉

大作「Inferno」以来7年、MetamorfosiのヴォーカリストDavide SpitareliがMauro Paganiらをゲストに迎えてソロ作品、「Uomo Irrengolare」を製作した事は知られているが、実は79年にもニックネームのThor名義で非常にポップ色の強い作品を発表している。冒頭から弾ける様なピアノとヴァイオリンに乗せて〝San Francisco…〟のリフレイン。インター指向の強さという点で「Uomo…」とは決定的な作風の違いを見せる。ホーン陣の導入も活発ながらあくまでも歌中心の構成。3、4分台の肩の凝らない小曲を連ねた標準レベルのポップアルバムと言え、彼の実力を知るファンにとっては緊迫した展開が盛り込まれていないという点で物足りなさが残る。　(江田)



TITO SCHIPA JR.
Orfeo 9
'73
●Fonit LPX 16/17
○Fonit Cetra CDLP 427(2)
○
◉

Tito Schipa Jr.主演のポップオペラ〝ORFEO 9〟の音楽を録音したもの。オペラの初演は1970年1月だった。このアルバムは、1971年秋から1972年夏にかけてレコーデングされた。Tito Schipa Jr.自身が主役(と思う)のOrfeo(オルフェウス)を演じている。もちろんアルバムではTito以外の人のボーカルの比重も高く、その意味ではこのあとに紹介されている二枚のソロアルバムの出来に比肩できる物ではない。とは言えTitoのあの独特の、ちょっと憂いを帯びた歌声は健在であり、あの声で切々を歌われるとそれだけでじーんと来てしまう人にはやはり欠かせないアイテムだろう。オペラの宿命か、Titoの歌をもっと聞きたい、という人にはやはり残念な部分も多い。また、全体を通した印象もソロ・アルバムに比べると弱い。　(野呂)



TITO SCHIPA JR.
Io Ed Io Solo
'74
●Fonit Cetra LPX 31
○
◉

ティト・スキーパ・ジュニアは'73年に発表した2枚組のポップオペラ・アルバム〝Orfeo〟(Fonit Cetra : LPX 16/17)が割と良く知られており、日本でも人気がある様だが、翌'74年に同レーベルからリリースされた本作もその叙情的な内容が高く評価されている。アルバムには'70年から'73年までに作られた曲が収録されており、B面は組曲編成になっている。acギターをバックにした、独特の語りかける様な歌唱がたまらない魅力となっており、それをピアノ、ストリングス等が見事に引き立てている。ポップな面はさ程見受けられず、M.ペロシの暗さとも一線を画した、〝感傷的〟とも言える音作りが支配的となっており、歌物の中ではチロ・ダミコ等と並び非常にアピール力のある作品となっている。'79年、スペシャル3000シリーズで再発されている(Fonit Cetra : SFC218)。　(江田)



TITO SCHIPA JR.
Concerto Per Un Primo Amore
'82
●Gattocicova LP 33604
○
◉

あの名作〝Io Ed Io Solo〟を創りあげたこの天才アーティストは、その後'80年に芳しくない3枚組ポップ・オペラ〝Er Dom Pasquale〟に参画。その後の動向を知る由も無く新録音など思いもよらなかったのだが、このアルバムを突如発表。A・B面通してトータル性が感じられるが、とくにA①、16分を超す組曲は感動的なフレーズに包まれた傑作である。又、B①は貴重なライヴ録音でしみじみと訴えかけるかのような涙の名曲。全編を通じて往年の姿を彷彿とさせ、繊細にして緊張感を伴う劇的な唱法は、今もなお神のみに成せる業である。'80年代に於て群を抜いたアルバムであるのは勿論のこと、'70年代の名作と同列に扱うべき逸品である。尚、バックを務めるHorusというグループについては、近年メロウ・レコーズよりCDが発売された。　(鈴木伸一)



TONI ESPOSITO
Rosso Napoletano

'74
●Numero Uno DZLSN 55677
○
◉

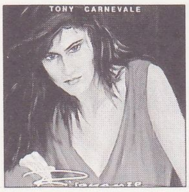
エスポシトはノルマン系ナポリっ子である。イタリアでは特にピーノ・ダニエーレと共演するようになって以来、彼とトゥリオ・デ・ピスコポの株が異常に高い。2人共割合どこにでも姿を現わす人だが、もともと彼はソレンティと仕事を始めたようだ。Rosso Napoletano、Processione Sul Mare、Gente Distratta、La Banda el Sole, Tamburoを製作した経歴にはP.バックマスター、ジジ・デ・リエンツォ、ロベルト・フィックス、フランチェスコ・ブルーノらの協力がものを言い、特に後者3人らと共にテレーザ・デ・シオのアルバム作りに参加する等、ナポリ・パワーの一端を担う者として活躍のおとろえを知らぬパーカッション・マンである。（岡本）



TONY ESPOSITO
La Banda Del Sole

'78
●Philips 6323 058
○
◉

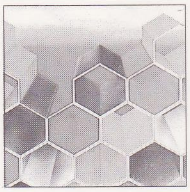
オパス・アヴァント等、数多くの作品にゲストとして参加しているパーカッショニスト、トニー・エスポジットの5枚目のアルバム。キーボード、サックス、マンドリン、ベース、コンガらと共に彼が作り出したサウンドは明るく輝いており、正にアルバム・タイトルの「太陽のバンド」による演奏である。軽い乗りのテクニカルなフュージョンと言えないこともないが、アメリカのものと明らかに異なる雰囲気を持っており、彼の出身地であるナポリの青い空と海をイメージさせる音作りになっている。前面には出ていないが、エスポジットの各種パーカッションは中々凝ったもので、パーカッショニストとしての実力と才能を感じさせる。実力派ミュージシャンによる味わいのある一枚。（賀川）



TONY CARNEVALE
Risonanze

'91
●
○Artonica ARTCD 1/91
◉

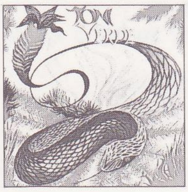
元RDMのキーボーダー、トニー・カルネヴァーレの作品、画集とCDが一体化した、一つのマルチ・メディア的な試みで創られた作品。この作品を聴いてすぐに想起したのはサンジュリアーノだ。この作品を形成しているエレメントもサンジュリアーノのそれを良く似ている。十分な音楽的素養と作曲、演奏、録音を含めたテクノロジーの完成度の高さ。そして、それらを司り、下僕とする情熱の深さ。時にエロティックに、時とセンシティブに展開するこの作品には5つの小曲と20分に及び大曲が収められている。緻密に構築されたこの壮大なシンフォニーは、かのマーラーをも想起させるような雄大なスケールを持っている。（山崎）



TONY TEOLI
Una Storia Di Oggigiorno

'77
●Cubifi DM 071055
○
◉

カラフルなジャケットに包まれたこのアルバムを聴く度に、若々しく、健全な感動が呼び醒まされる。明快にして爽快なボーカルが色彩豊かなキーボードの音色に導かれ、朗らかに、そして清純に唄い上げられる様は、例えば、IL GIARDINO DEI SEMPLICI, POOH, ALUNNI DEL SOLEといったラブ・ロックの秀れた作品にも匹敵するものだ。澄み切ったそのサウンドは、ほのかな感傷をも思い出させながら、聴く度毎に我々の胸を打つ。作詩・作曲・ボーカルは勿論のこと、アレンジ、ギター、ムーグ更にはプロデュースと、オーケストレーション以外全て彼自身に依るもので、多彩な才能が見事に開花したアルバムである。（鈴木伸一）



TONY VERDE
Tony Verde

'77
●EMI 3C 064-18239
○
◉

ジェーン・ソレンティ率いるサン・ジュストのベーシスト、トニー・ヴェルデのソロ・アルバム。サン・ジュストからの影響を感じさせる曲想である。意外な人間が参加しているので書いておこう。ロル・コックスヒル・ホワイトハウスのデヴィッド・ボウハウス、そしてヴィンセント・クレーン、元ニュークリアスのブライアン・スミス等。いったいこんな雑多なジャンルの人間が参加してどんな音になっているのだろうと首をかしげる人もいるだろうが、彼等はあくまでサポートとしてバッキングを担当しているので決して散漫になってはいない。ほとんどがインストゥールメンタル・チューンで、浮遊感のあるセッション的なイメージに統一されている。サン・ジュストでのトニー・ヴェルデの役割は重要であったようだ。（山崎）



TOTO TORQUATI
Gli Occhi Di Un Bambino

'73
●RCA DPSL 10573
○
◉

キーボード奏者トト・トルカーティのリーダーアルバム。ローガン・ドゥワイト、クラウディオ・バリョーニ、ミーナ等の作品に質の高いポップ・プログレが聴かれ、73年という百花りょう乱の時代に於ても埋没することなく十分な自己主張をなし得たことだろう。残念ながらブームの最盛期でさえも日本のリスナーとは疎遠であった。トトのキーボードワークと美しいオーケストレーションをメインに、曲想は割と多岐に渡る。クラシカルなストリングスから突如ロック調のフレーズが出て来たかと思うと、哀愁たっぷりの歌から緩やかなバラード調のナンバーへ、といった具合だが、どのスタイルの曲も円熟した演奏とアレンジでキメ細かに仕上げられている。（江田）



UGOLINO
Nudo E Cruno
'73
●Music LPM 2007
○
◉

60年代後半にRCAよりソロデビューし後にRicordi、Music等を渡り歩いたUgolinoの代表作。ハードでポップな曲も含まれてはいるものの、バラード調の曲、プログレッシブな展開を見せる曲は、充分な満足感を得られる出来である。一風変った歌唱は時折珍奇な印象を与えてしまう場面もあるが、豊かな表現力を備えた歌手であるのは確かで、バラエティーに富んだ曲を難なくこなしている。ギターとベースはRonny Jackson、キーボードとドラムスは何とあのGianni D'All'aglio。彼は作曲、アレンジそしてプロデュースまで受け負っている。特に彼の弾くキーボード類、取り分けメロトロンがこのアルバムに一層の深みと酷を与えている。　(鈴木伸一)



UMBERTO BALSAMO
Passato Presente E Futuro
'74
●Polydor 2448 025 A
○
◉

デビュー・アルバム。ジャケットの構図こそ「ヌートピア宣言」だが、トーンはそのまま次作「Natali」に通じて、アレンジももちろんジャン・ピエロ・レヴェルベリ、そして何よりバルサモの歌が既に有る。近年再びアルバム・リリースして抜けた歌声をきかせてくれる彼だが、初期の頃は孤独を地で行くような説得力があった。とてもナイーヴな感性を歌声に託し得る人だから、派手なアレンジで泣き落すことなく、さらりとした中にどこか寂しさを漂よわせる、そういうタイプのどちらかというと玄人好みのシンガーだった。「過去・現在・未来」と名づけられたこのアルバムもその傾向が出ていて、作を重ねてより具体化される。夜の静けさにどこまでも浸み入って止まない「Mai Piu'」の原点がある。　(松本)



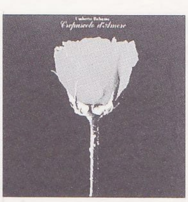
UMBERTO BALSAMO
Natali
'75
●Polydor 2448 039
○
◉

「Passato Presente E Futuro(Polydor 2448025A) '74」に続くウンベルト・バルサモの2nd。ヒット曲「ナタリー」(A①とB⑤にテイク違いで収録されている)をメインにした作品である。'70年代後半以降の円熟期に至る以前の作品であり、彼の9枚のアルバムの中でも最もセンチメンタルな内容となっている。切々と愛を歌い上げるナイーヴなボーカルは若き日のバルサモならではのものと言える。ジャン・ピエロ・レベルベリのオーケストラ・アレンジも巧みであり、曲をより一層魅力的なものとしている。本作以後、バルサモはより大人とカンタウトーレに成長し、そのサウンドも感情を内に秘めた洗練されたものとなっていく。　(賀川)



UMBERTO BALSAMO
Malgrado Tutto...L'Angelo Azzurro
'77
●Polydor 2448 054A
○
◉

'42年、シシリーはカッターニャ生まれのカンタウトーレ。'69年頃から作曲家として知られ、後に自らもカンタウトーレとしてデビュウ。'75年にサンヴァンサン夏のフェスティヴァル入賞作品〝ナタリー〟が有名。本アルバムは'77年の作品で、ナタリーと較べると、都会的で、感情の起伏がなだらかになり、悲しみを赤裸々に悲しみとして表現してしまわない昇華された人生観がしっとりとしたストリングスをバックに表現される好作品である。僕個人としてはこの作品以降の彼のスタイルを好む。以後一年に一枚程の割合でアルバムをリリースしていたが、その後暫く新作の発表の噂を聞かなかった。日本でもキングより「愛を置き去りにして」がリリースされた。このアルバムも彼の持ち味を生かすことに成功した素晴らしい作品である。この作品に何も感じない方にはバルサモの良さはわかるまい。　(山崎)



UMBERTO BALSAMO
Crepuscolo D'Amore
'78
●Polydor 2448 068
○
◉

前作から一歩抜けた感のあるバルサモの歌世界は、今作も続いている。1～2作目の〝歌ってしまう〟ある種の若さからすれば、これは彼の音楽の成長と見ていいのだと思う。もともと内に秘める情感がなんとも酔わせてくれるタイプのカンタウトーレだったが、ここへ来て、更に彼のオープンな、言い方をかえれば、余裕のある姿勢が音楽/歌として実を結んできたという気がする。ジャン・ピエロ・レヴェルベリのオーケストラ・アレンジもとても控えめで、表面的には端々としているが、それだけにバルサモの多くを語らずとも伝えうる情感、その微妙な揺れ、香り立つようなニュアンスがよく感じられる。歌にナイーヴさ以上に優しさが感じられるのだ。そしてとても静かだ。ゆっくりと聴きたい。　(松本)



UMBERTO BALSAMO
Balla
'79
●Polydor 2448 093
○
◉

ウンベルト・バルサモの歌はファースト時から基本的に変化していない。アレンジというコスチュームが時代の流れの中でゆるやかな変化をみせているだけだ。そういう意味でアルンニ・デル・ソーレなどと共通点があるかもしれない。このアルバムは、アルバムのカヴァーをみても感じられる通り、夏のイメージの作品である。真夏に海辺で寝そべっていると、太陽の光で目がくらみ、隣の恋人の姿も光に包まれて良くわからない。そんなイメージをカヴァー・アートからは感じる。極めてイタリアらしい夏の情熱を僕はこのアルバムから感じるのだ。生命の躍動に満ちた、力強い愛の歌達を聴いていると、すぎさった思い出が目の前をよぎっていく。　(山崎)



UMBERTO BALSAMO
Mai Piu'
'82
●Fonit-Cetra LPX-107
○
◉

シチリア島カターニャ出身の彼の作品は、全て地中海のかおりを感じさせ、叙情的な美しさと都会的なセンスがバランスよくまとめられている。本アルバムは、10年余在籍していたPolydorを離れ、Fonit Cetraに移って発表されたものである。アレンジャーも Gien Reverberi にかわり、Gianfranco Lombardiをむかえ、オーケストレーションのスケールはこれまでになく大きく素晴らしいものである。A①、A②はシングルカットされた彼の良さがでているが、B①とB③の曲にも奥行きと暖かさあふれる彼の声に長い間活躍してきたカンタウトーレとしての円熟を感じさせられる。「Natali」、大ヒットの「L'Angelo Azzurro」につぐ傑作である。（山中）



UMBERTO BALSAMO
Pianeti
'80
●Polydor 2448 107
○
◉

'80年にリリースされた作品。コンスタントにアルバムを発表してきたバルサモだが、このアルバムはそれまでのアルバムとはジャケットの印象がやや異なる。このマリオ・コンヴェルティーノの手によるジャケットをみて、バルサモも遂にニュー・ウェイヴ色のあるアルバムを制作したのか?と思ったものだが、サウンドのほうはそれ程変化があるわけではなく、従来通りのバルサモ節が聴ける。作詞/作曲はバルサモ自身。アレンジはポール・バックマスター。キーボードにはピーター・ロビンソンが参加している。やや、イタリア臭が薄らいだかなと思うのは、こういった布陣による印象もあるのかもしれない。（山崎）



UMBERTO BALSAMO
Respirdndo La Notte Luna
'90
●
○CGD 9031 710861
◉

「Pianeti」以来、長い間沈黙していたウンベルト・バルサモが本当に久しぶりに発表した作品。今回のプロデュースはバルサモ自身が担当している。アレンジの雰囲気が今日風のイディオムで形成されてはいるが、それ以外に過去の作品群と比べてもさほどの変化はみられず、バルサモのファンは、そういう意味では安心して聴くことができるのではないだろうか。又、このアルバムには、〝L'angelo Azzuro〟〝Natali〟〝Ball〟等、昔のアルバムからセレクトされた名曲がリレコーディングされており、大変なつかしい曲が再び聴けるのは嬉しい。（山崎）



UMBERTO BINDI
Con Il Passare Del Tempo
'72
●West Record WLP 102
○
◉

本作をリリースしたウェストレコードなんてマイナーレーベル、知らない。彼は60年代から活躍するカンタウトーレ。サビで聴かせる、歌物の王道を行く作品だ。曲ごとのメリハリがはっきりしているので、聴いててあきない。曲もそうだが、アレンジのビル・コンティも一役買っている。感動は保証されたようなものだ。A①は当時ヒットした曲のようだ。A②のクラシカルなオルガン、A③の静かなピアノとオーボエ、A④の流れるような展開、A⑤はピアノの転調がおもしろい。B①のオーケストラ、B③のドラマチックなサビ、B⑤はラストを飾るやさしいメロディーそしてエンディング、と各曲それぞれ核となる部分がある。残念なのは、私の持ってる盤の状態があまり良くないことだ。（渡辺一己）



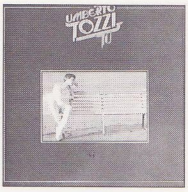
UMBERTO BINDI
Io E Il Mare
'76
●Durium AL 77374
○
◉

本作は、海をテーマにしたトータルアルバム。派手さはないが、メロディー（培ってきた自分のスタイル）を大切にしているのがわかる。しかし、リズムと女性コーラスがあまじにオーソドックスなため、イージーリスニングっぽく聴こえてしまい、甘過ぎるという印象も否めない。それをカバーしているのが、インストとボーカルを交互に配するという構成である。A①の華麗なオープニング、A③のチェンバロとフルート、B②の哀愁あるハーモニカのメロディー、A④のオルガンを多用した凝った展開、とインスト曲が耳に残る。特にB④は、波の音からクラシカルなオルガン、ストリングスシンセと女性スキャット、オーケストラ、またはオルガンと展開する7分40秒の曲で、見事としか言いようがない。（渡辺）



UMBERTO TOZZI
Donna Amante Mia
'76
●CGD 81333
○CGD 9031706522
◉

ウンベルト・トッツィのプロとしての歩みは、バッティスティとの出会いに始まる。彼の口利きでダータ、ストラーナ・ソチエタとグループ活動を経、ソングライターとして頭角を現わしたトッツィの、ソロ・デビュー作がこのアルバムである。彼はアレンジや雰囲気よりも、メロディーの充実に徹底してこだわるタイプと言えよう。多くの歌手が本作中の曲をグレード・アップしたアレンジで歌い、ヒットを飛ばしているが、本作はいわばそれら名曲のオリジナルが聴ける貴重なレコードなのである。この後「E'Nell'aria...Ti Amo」('77)、「Tu」('78)、「Gloria」('79)と快調にヒット作を発表、4th中の〝Gloria〟は別の歌手によるヴァージョンが米で大ヒット('82年)、一躍名を上げる。（古田）



UMBERTO TOZZI
Tu
'78
●CGD 20058
○CGD 2292448442
◉

プログレッシヴな名作「Donna Amante Mia」から2年後に発表された3rd。いきなり目一杯の明るい弾けたサウンドが飛び出して来て、面喰ってしまうが、この突き抜けた感覚はまさにイタリアならではの恐いもの知らずである。思わず一緒に「へいっ、そ〜れ」(Hei Sole-2曲目のタイトル)と口ずさんで踊ってしまいそうだ。1曲目から3曲目にかけての切り返しは心憎いばかりで、プログレ感覚の成せるところか。全体としてはふっ切れた乗りの良いポップ・アルバムである。多少の力の入り過ぎとも思える歌唱も目立つが、そこがイタリア人気質、走り出したら止まらない良さでもある。「Donna〜」に通じる、物憂い叙情性も随所に散りばめたセンスの良さも捨て難い。 (高森)



UMBERTO TOZZI
Gloria
'79
●CGD 20144
○CGD 9031707532
◉

ヒット曲〝Gloria〟を含む4作目。乗りの良いヒット性のあるポップな曲と、美しいオーケストラをバックにしっとりと歌い上げる曲が半々に納められている。トッツィの物憂げなヴォーカルの魅力が最大限に発揮されるのはやはり後者である。初期の頃の胸の締め付けられるような切なさは薄れたが、メロディ・ラインは相変らず訴えてくるものがある。幾分アンニュイな②、クラシカルな味つけの⑥あたりは佳曲である。もちろん、このアルバムは完全にポップス・アルバムなので、プログレ的なめくるめく展開は期待すべくもないが、1st「Donna Amarte Mia」が気に入った人ならば、充分に聴けるアルバムである。 (高森)



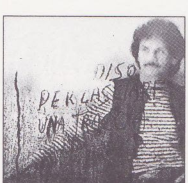
UMBERTO TOZZI
Tozzi
'80
●CGD 20207
○CGD 9031707542
◉

相変らず快調にポップス路線を走るトッツィの5作目。③のようなかなり激しいロック調の曲も納められていて気合いが窺える。それまでのオーケストラに替ってソリーナ系のストリングスやシンセが導入されていて全体的に軽めな印象を受けるのは、時代の流れとしていたし方ないところが、それにじっくりと歌い上げる曲が1曲しか納められていないのも不満が残る。ラスト曲が物悲しげで切々とした情感をたたえていて、久々の感動ものかと思いきやいきなりアップ・テンポになって肩透し。タイトルが〝光と影〟で納得したようなしないような。それでも、一プログレ・ファンとしてそれなりに楽しめるアルバムではある。 (高森)



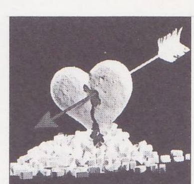
VITO PARADISO
Noi Belli Noi Brutti
'78
●Durium MSAI 77399
○
◉

De De Lind在籍時から、その渋く虚無的なボーカルが、個人的に非常に好きで、ボーカル・パートだけをよく聴いていたものだった。このアルバムはそうした彼のボーカルの魅力が余す所無く披瀝された名作である。まるで語りかけているかのようなボーカルがじわじわと感性の深奥に入り込み、感覚を麻痺させ、得も言われぬ感動で包み込む。Giorgio Baiocco, Ellade Bandini, Massimo Luca, Ares Tavolazzi等は勿論のこと、キーボード、アレンジを担当するVince Temperaが、彼の持ち味を殺すことなく、非常に巧みなサポートで盛り立てている。次作「Per Lasciare Una Traccia」(80年)はより攻撃的なアプローチで個人的には魅力薄。 (鈴木伸一)



VITO PARADISO
Per Lasciare Una Traccia
'80
●Durium ms AI 77411
○
◉

元デ・デ・リンドのヴィト・パラディーゾは、グループの時のイメージは泥くさいヘヴィーなイメージであったが、ソリストに転向してからはスタイリッシュな歌声で都会的な雰囲気へと変化した。時代の求めるものが変化したのであろう。当然のことながら、このアルバムにはデ・デ・リンドの面影はないが、シンガーとしての力量は相当なもので、個人的には彼の2枚のソロ・アルバムは評価している。2枚のアルバムはそれ程の変化はなく、どちらか1枚が気に入れば、もう1枚も入手して間違いはないだろう。何か水を得た魚のように生き生きとしたサウンドで、この辺はプロデューサーの腕であろうか。シャープな印象が残る。 (山崎)



ZUCCHERO
Zucchero
'74
●Fonit Cetra LPX 33
○
◉

'74年にフォニット・チェトラより本アルバムをリリースしたこのツッケロ(砂糖の意)は、このLPに関する限り、グループとしての作品である。いわゆるラヴ・ロック的な音創りをしているが、美しいメロディー・ラインとそれをサポートするオーケストラ、ハモンド・オルガンやフルート等がかもし出すサウンドは、十分に叙情的であり、プログレッシヴな側面もそれ程多くはないが感じることができる。若い、生命の躍動感に満ち溢れる新鮮な音を聴くことができることと思う。録音の仕方も、当時のチェトラ独特のはりのあるもの(サマディやプロセッション等に通じる)で、それが魅力の一つにもなっている。演奏力も仲々のグループである。 (山崎)


il successo della tournée con
GARY GLITTER
conferma i
LATTE E MIELE
gruppo
dell'anno
Polydor
Polydor
Distribuzione Phonogram s.p.a.
2448 015A LP
LP 2448 011A 3172 019
3172 014 3838 008


LATTE
E MIELE
Buoni propositi
per
il futuro



FORMULA 3


orme
orme
orme
FELONA E SORONA
LE ORME FELONA E SORONA
PHILIPS 6323 023 A
disponibile
anche su Musicassetta
e Stereo 8
Distribuzione Phonogram s.p.a.
La loro eccezionale tournée che ha girato l'Italia sta per concludersi. Non perdete gli ultimi concerti:
9 GENNAIO TEATRO VERDI SASSARI
10-11 GENNAIO TEATRO MASSIMO CAGLIARI
16-17 GENNAIO TEATRO BRANCACCIO ROMA


IBIS
Nico Di Palo
Maurizio Salvi
Frank Laugelli (Rhodes)
Ric Parnell (Spyder)
Sun Supreme
Polydor Disco 2448 022 L
disponibile anche su Musicassetta e Stereo
Prima parte tournée IBIS
21 aprile Napoli Teatro Queen Elizabeth
22 aprile Benevento Teatro Comunale
23 aprile Avellino Teatro Partenio
24 aprile Cosenza
26 aprile Caltanissetta Teatro Supercine
27 aprile Catania Teatro Ambasciatori
28 aprile Gela Teatro Royal
29 aprile Marsala Teatro Impero
30 aprile Palermo Teatro Biondo
2 maggio Taranto Teatro Alfieri
3 maggio Brindisi Teatro Astra
4/5 maggio Milano/Torino
Distribuzione Phonogram s.p.a.


IN SOLI 15 GIORNI
UNA CONFERMA!
PHILIPS
Jumbo
Distribuzione Phonogram s.p.a.
"far musica" lottando per un ideale di vita non é
VIETATO AI MINORI DI 18 ANNI
?
disco PHILIPS n° 6323 025A
PHILIPS


L. P. «L'isola di niente» della P. F. M.
primo da due mesi nella classifica italiana
ora nella versione inglese dal titolo:
«The world became the world»
PREMIATA FORNERIA MARCONI
THE WORLD BECAME THE WORLD
Prima di partire per una lunga tournée negli U.S.A.
la PREMIATA FORNERIA MARCONI terrà una serie di concerti nelle seguenti città:
2 giugno ASTI DANCING LIDO ore 21
3 » VERONA TEATRO RISTORI » 16-21
4 » ROMA PALAZZO DELLO SPORT » 21
5 » PESARO PALASPORT » 21
6 » MILANO PALALIDO » 21
7 » UDINE PALASPORT » 21
8 » S. DONA' DI PIAVE STADIO COMUNALE » 21
10 » NOVARA PALASPORT » 21
11 » MODENA TEATRO STORCHI » 16-21
dischi NUMERO UNO

SINGLES ▶



ADRIANO MONTEDURO
Non E' Felicita'
Tempo Di Andare
'71
●Mimo ZM 50169
○
◉

レアーレ・アカデミア・ディ・ムジカと共演する3年前のシングル。フォーク・ロックを吸収したかのようなアコースティック・ギターのスタイルから漂い出るカラーが特徴のカンタウトーレ。そのルーツらしき曲調はこのシングルのB面に追える。曲としては段然A面に譲るものの、後の彼を解く上では興味深い。A面はオーケストラをバックに彼のカラーが出たナンバーで、後の淡い感覚からすれば色も強く、少し暑苦しい気もするが、それでも晴れやかな印象を与えてくれる。この晴れやかさが繊細さを増し、牧歌的と言われるあのレアーレ・アカデミア・ディ・ムジカとの共作に実を結ぶという気がする。

（松本）



ADRIANO MONTEDURO
Piccole Dosi
Rio Grande
'78
●RCA PB 6246
○
◉

'74年にリリースされたレアーレ・アカデミア・ディ・ムジカとの共演盤が有名なアドリアノ・モンテドゥーロだが、プロデュース等の仕事の外、'78年にもこのシングルを人知れずリリースしていた。'74年のアルバム時もアコースティックで繊細な曲を聴かせてくれたが、その感性はここへきてさらに鋭角化されたという感が強い。イタリアのかげりを表現したようななんとも物悲しいイメージの作品で、彼のナイーヴな内的情景が静かに挽き出される秀作である。陽の暮れなずむ町の風景を音に託したような感じで、人々が大人になる過程で忘れさっていくあの淋しいとも美しいともつかぬ孤独なやるせなさをこれ程明瞭に表現できた作品も少ない。両面とも素晴らしい出来だ。

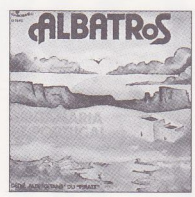
（山崎）



ALAN SORRENTI
Le Tue Radici
Le Tue Radici (Strumentale)
'75
●EMI 3C 006-17983
○
◉

4作目以後のソレンティは別人のようだ。音が変ったという以前に人が変ったという気すらする。このシングルは3作目の頃のもので、プログレッシブ・ロック・ファンにアピールする時期のもの、シングルとしても3作目、つまり「Vorrei Incontrarti / Un Fiume Tranquillo」(EMI 3C 006 17852, '72)、「Una Luce Si Accende / A Te Che Dormi」(3C 006 17881, '73)(共にアルバムからのカット)に続くものである。幾らかは小粒になったとは言っても、ソレンティの広がりのある夢遊病的音世界に変りはなく、kbdを多用したインスト曲のB面では、よりそのカラーが出ている。本当に変った音世界を持つ3作目までの彼である。他に類がない。天才の成せる事としか言いようがない。

（松本）



ALBATROS
Santamaria De Portugal
La Mia Isola
'78
●Carosello C 120461
○
◉

アルバム「Volo AZ 504」が以前にこのマーキー紙上でも紹介された彼らのシングル。B面のナンバーがなかなかのもので紹介する。彼らのサウンドは、正直言ってプログレッシブ・ロックと言えるようなものではなく、ラブ・ロックあるいはイージーリスニングに近いものと言えるとは思うが、メロディーラインには時として印象的な光るものが有る。B面のナンバーは正にイタリアならではの佳曲。例えば、日本でもちょっとしたヒットとなったCIRO D' AMMICCO率いるDaniel Sentacruz Ensemble〝Soleado〟等を思い起こさせる。語りが入るのもいかにもイタリアと言えそう。A面のナンバーは評価に値しない駄作とだけ言っておこう。

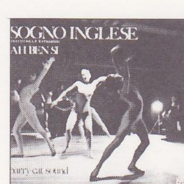
（杉原）



ALBUM
Per Sempre Noi
Dolce Segreto
'77
●Eleven EL 65
○
◉

イレヴン・レーベルには比較的地味なタイプのアーティストが多く、トラッド色の強いもの、牧歌的なものなどに興味深いものがある。そのほとんどはアルド・パガーニというプロデューサーの手によるものである。恐らくパガーニがこのレーベルのなかで重要な役割を担っていたのだろう。そのなかで、当シングルは'70年代に入ってからのプログレッシヴ・ロックと'70年代後半のポップ・ロック・グループの影響を受けた異色作である。プロデューサーはパガーニではなく、ニコ・アネージという人物があたっており、彼の意向が取り入れられたものなのだろう。グループ名は、アルバムだが、今のところアルバムは確認されていない。

（HIRO TANAKA）



ALFRED TISOCCO
(BARRY-CAT SOUND)
Sogno Inglese
Ah Ben Si
'75
●Suono SRNP5001
○
◉

アルフレッド・ティソッコのソロLP「Kətharisis」発表時のシングル。A面はLP未収録で、インストゥルメンタル曲。彼の弾く独特の音色はピアノに、清らかなる女性スキャットが天上から響き、フルートがアクセントをつけるというクラシカルな曲。マネージャーのマリオ・パンチェーラ曰く、感情の放逸と共にショパン風ともいえるピアニズムを感じさせてくれる曲。一方B面は、LPA面ラストに収録されていた曲だが、このテイクでは、冒頭の掛け声と展開部を中心にボーカルを被せたものとなっている。こちらの方がメリハリの効いた内容となっている。

（高橋）



ALICE C BATTIATO
I Trenidi Tozeur
Le Biciclette Di Forli
'84
●EMI 06 1186627
○
◉

既成のポップスとは、少しちがった風変わりな音楽を作りだすバッティアートと、そのバッティアートによって、スターシンガーの仲間入りを果たしたアリーチェとの音のデュエット・ナンバー。'84年のユーロ・フェスティバルのための曲で、コンピューター・プログラミングによる見事なエレクトロニクス・ポップチューン。アリーチェの'85年リリースのイタリアン・ポップスを代表する名作中の名作「Gioielli Rubati」をほうふつさせる。オーケストレーションを、バックに余裕を感じさせる二人のかけ合いがきける。曲づくりには、バッティアートの片腕的存在のジュスト・ピオも参加している。尚B面はアリーチェ作の軽快なインスト・ナンバー。このシングル、アリーチェ・ファンならぜひ持っていたい一枚である。　（堤野）



(GLI) ALISEI
L'amore Non Ha Eta'
Emigrazione
'77
●Durium Ld A 7965
○
◉

Duriumレーベルのシングルには興味深いものが多いが、このAliseiのシングルもジャケットこそ窮まりなく平凡なものの、内容に関する限りラヴ・ロックの水準を遥かに超えている。B面はこの時期では考えられないくらいのプログレ調のイントロで始まり、正に往年のイタリアン・ロックの音だ。めまぐるしく曲想が変わり4分35秒があっという間に終ってしまう。いかんせんフェードアウトが早過ぎる。A面はいわゆるジャルディーノ・デイ・センプリッチ調のラブ・ロックの佳曲。作詞・作曲はC・Luca、F・BenenatoでA面はさらにCaldarellaが加わっている。　（吉瀬）



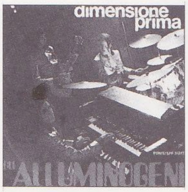
(GLI) ALISEI
Cresce L'erba Nasce Il Sole
Piccola Amante Mia
'79
●Durium LdA 8044
○
◉

アリセイは、秀れたラヴ・ロック・グループを数多く擁しているドゥリウム・レーベルの中堅グループだ。1973年にデビューして以来、2年に1枚の割り合いで、シングルを3〜4枚と、シングル・ナンバーを寄せ集めて作られたアルバム1枚を発表している。ここに取り上げた1979年にリリースされたシングルは、彼らのナンバーの中でも群を抜いた秀曲。スリリングでドラマチックな曲構成の中で擦り出されるアナログ・シンセやヴォイス・メロトロン、フルートが奥にカッコ良い。この多彩・華麗さは、イタリアン・プログレの土壌の中でしか生まれないポップ・アレンジである。なお、このナンバーもアルバムに収録されている。　(Numero Ueno)



(GLI) ALLUMINOGENI
L'Alba Di Bremit
Orizzonti Lontani
'70
●Fonit SPR 31262
○
◉

イタリアン・プログレッシヴ・ムーヴメント最初期のグループであるアルミノジェニは、キーボーダーのパトリッツィオ・アルミニオを中心に、ギターとドラムスと言う変則的なトリオ編成のグループである。1970年に本シングルでレコード・デビューを飾り、商業的にはある程度の成功を収めた様である。1970年と言うこともあり、本格的なプログレッシヴ・ロック・サウンドは望めないが、ややポップではあるものの、オルガンをメインにしたそのサウンドは、当時としては仲々意欲的であったのではなかろうか。両面とも曲のまとまりは良く、水準以上の出来である。ただ、ワイルドさや重量感には欠けるので、全体的に少々物足りない印象を与えてしまうことも事実である。（中島）



(GLI) ALLUMINOGENI
Dimensione Prima
La Vita E L'Amore
'70
●Fonit SPF 31273
○
◉

アルミノジェニのセカンド・シングル。前作と同様に、パトリッツィオ・アルミニオのオルガンを中心としたややポップなサウンドであるが、前作に比べてギターの比重が増し、全体的にハードでドラマチックなプログレッシヴロック色の濃い仕上がりとなっている。全盛期のイタリアン・プログレッシヴ・ロックの様なスリリングに畳み掛ける展開では無いが、両面ともハードなイントロから始まり、クラシカルな雰囲気のオルガンをバックにヴォーカルが歌い上げる仲々の佳曲である。特にB面ではテクニック的にやや見劣りするものの、ドラマチックな展開を織り込みながら曲が進行して行く所など、プログレッシヴ・ロック・ファンに十分アピールするものがある。この機会に再認識を促したい一枚である。　（中島）



(GLI) ALLUMINOGENI
Solo Un Attimo
Psicosi
'71
●Fonit SPF 31280
○
◉

アルミノジェニは、1970年〜1972年の間にアルバム1枚、シングル4枚を残しているが、唯一のアルバムが凡庸な出来であったため、イタリアン・ロック・ファンの間では低い評価に甘んじている様に思われる。しかしながらシングルは、いずれもややポップではあるものの、オルガンを中心とした水準以上のサウンドであり、無視してしまうには少々惜しい気がする。このサード・シングルも、インパクトにやや欠けるものの、両面共まとまりの良いヴォーカルナンバーである。前作で見せたハードな色合いは後退し、ファースト・シングルの路線に立ち戻っているが、B面でのストリングスの導入等、着実にヴォルテージは向上している。彼らの代表作と言えるシングルである。　（中島）



(GLI) ALLUMINOGENI
Troglomen
Costruendo Astronavi
'71
●Fonit SPF 31291
○
◉

アルミノジェニの4枚目のシングル。従来のシングルとは少々趣にが異なり、A面は映画音楽として、B面はテレビ番組用として作られた曲である。A面はコミカルでやや脳天気なポップ・ナンバーであり、何ら聴くべき所も無いが、B面は彼らのナンバーの中ではトップクラスの佳曲である。相変らずのポップ色が顔を出すものの、曲調がアップ・テンポからスロー・テンポへと巧みな展開を見せ、オルガンが雰囲気を盛り上げる所など、今までのサウンドから一歩抜け出た感がある。この後、グループはアルバム1枚を発表(そこからカットの片面別アーティストのプロモーション・シングルも有る)して解散、リーダーのパトリッツィオ・アルミニオは、ソロ・シングルを1枚発表している。 (中島)



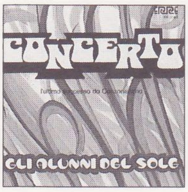
ALPHA CENTAURI
Dai Treno Dai
Immagine Bianca
'70
●Numero Uno ZN 50007
○
◉

アルファ・ケンタウリという名のバンドには2枚のシングルがある。一つはこのシングル、そしてもう一つは'73年にErreから出た「Deserti Di Creta/Stasera Che Si Fa」(RR 3060)だが、どう聴いても別のバンドに聴こえる。わずかなクレジットを見ても一切重なっていない。Erreのアルファ・ケンタウリは中性的な甲高いヴォーカルとストリングスをフィーチャーした歌物バンド、こちらの方はオルガン＋ブラス・ロックふうの古めかしいサウンドになっている。A面などはビート・サウンドの亜流のようだ。B面ともに'60年代ふうのオルガンが入ってはいるが、あまりロックぽさを感じさせない。ツェッペリンのコピー・バンドだったという話も聞く。 (松本)



(GLI) ALUNNI DEL SOLE
Fantasia
Fiori
'70
●Liberty LIB 9063
○
◉

アルンニ・デル・ソーレ(太陽の徒弟とでもいう意味)は実に息の長いグループである。60年代中期から活動を続け、現在でも活動中であるから、足かけ20年近くも活動していることになる。彼等のサウンドは、イタリアを象徴するといっても過言ではない程、南欧の哀愁に満ちて悲しい。このシングルは彼等のLPデビュー以前のもので、70年にリリースされたもの。最初期の叙情と初々しさを感じさせるサウンドで、パオロ・モレルリを中心とした彼等独自のサウンドは既に確立されている。A面はファンタジアという佳曲。B面「花(Fiori)」はPAレーベルより後にリリースされる2ndアルバム「E Mi Manchi Tanto...」の中の曲だがテイクもアレンジも全く違う。アルバムの録音より若さを感じさせる好テイクに仕上がっている。 (山崎)



(GLI) ALUNI DEL SOLE
Concerto
L'aquilone
'73
●Erre RR 3063
○
◉

〜デル・ソーレ、プロドゥトーリ・アソチアーティ時代さ中の'73年、アルバムで言えば「E Mi Manchi Tanto」、なのになぜエッレから…?と思えば、やはり2曲共テイクが違う。ともに上記アルバム収録の曲だが、シングルのテイクは明らかにそれ以前の録音だ。まるでビート・ロック版デル・ソーレみたいに曲がはね気味。もしかすると1st以前の録音かも。B面曲はパレードから出たシングル「L'aquilone/Con L'aiuto Degli Dei」と同テイク。アルバム・テイクの柔かさはまだなく、コーラス部では女性コーラスが加わり少しコミカルに聴こえる。A面の"Concerto"も同傾向でアルバム・テイクのつややかさは出ていない。彼等のルーツを追える。そしてアルバムの成長ぶりも同時に確認できる。 (松本)



ANNA E MANUELA
Donna Per Meta
Sono Le Sette Di Sera
'76
●UP 10001
○
◉

そうか、とうとうミーナもオザンナに加入したか、そうだろう、そうだろう、と思って聴くと、おもいっきりはずす一枚。ひっくり返すと、なんとイザベル・アジャーニが二人もいるではないか。悪いはずがない。'76年というには洗練された音だが、二人の声を活すにはこれで尚よいのではないか。両面とも曲に変化があって、ストリングスは入っていても薄化粧、プロデュースにNuova Ideaと有って意味不明、更にソフト・タッチな流れに二人の声が溶け合うようで、とても落ち着きのあるヴォーカル作だ。過度な転調→盛り上げもなく感情移入もしない、が、地味な中にもイタリアン・メロディが薄すらと色づく。それ程実力があるとも思えないが、他にシングルやアルバムがあるのなら是非聴いてみたい。 (松本)



ANONIMA SOUND LTD
Io Prendo Amore
Cerchi
'71
●Arcobalene ARC-NP 2071
○
◉

「Red Tape Machine」の前年にリリースされたアルバム未収シングル。「Red Tape Machine」は英語で歌われていたが、こちらは伊語でイタリアらしさあるいは叙情的な面ではアルバム曲を遙かに凌駕している。特にA面"Io Prendo Amore"が素晴らしく、翳りを帯びたボーカルをメインにピアノ、ギター、オルガン等が渾然一体となって畳込む様は美しく正に圧巻の一語。Anonima Sound LTDのイメージを一新せざるを得ない名曲であり、イタリアの数有るLP未収シングルの中でも、屈指の名品である。 (鈴木伸一)



ANSELMO E (GLI) ANEMONI
La Mente Mia
L'Organista
'73
●Erre RR 3055
○
◉

歌物、と言っても'70年代の後半に多いオーケストレーションたっぷりのタイプではない。'73年という古さもあるとは思うが、もっとロック・バンド寄りの内容だ。A面ではヴァイオリンが、またB面ではフルートが、各々ポイントになっている。曲としてはA面の方が出来がよく、アコ・ギやピアノがヴォーカル・パートをサポートする。そのアップ・テンポが途切れるとヴァイオリンがソロをとる。といった曲作りに工夫が感じられる。なんとなく抑揚の少ない曲調やリズムの走りから、ビート・サウンド、ポップス等の背景が見えそうなのだが、資料/情報とも何もない。唯一のシングルとなっているが。（松本）



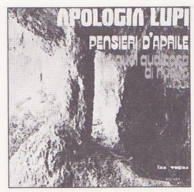
ANTENATI
Il Mondo Di Lucia
Pialogo
'74
●Derby DBR 2138
○
◉

アンテナティというグループは、1974年にTRIADEと同じCGD傘下のDERBYレーベルから当シングルを1枚リリースしたのみで消えてしまった超マイナーグループだ。A面のナンバーは平均的なカンタトウーレなのだが、B面のナンバーには驚かされてしまう。デミニッシュ・コードを多用したコード進行によるアンニュイな歌メロのバッグに流れるソリーナのストリングスの音色にあれっと思ったら、中間部やエンディングに飛び出してくる早いパッセージのクラシカルなオルガン・フレーズまでくると〝これって、TRIADEじゃないの?〟と思わず、言いたくなってしまう。TRIADEのキーボード奏者とのつながりを勝手に想いを巡らせるのは皆さんにまかせましょう。とにかく屈指の名曲です。（N.Ueno）



ANTONELLO RONDI
Dopo Di Te
Nostalgia
?
●ATA ND 877
○
◉

このシングルを発表しているレーベル〝ATA〟は、これまで発見されたアルバム数枚から判断して、ラブ・ロック専門レーベルと言えそうである。そんな中で、このシングルは出色の出来と言えそうである。言うまでもなくラブ・ロックサウンドではあるが、バックに大幅にオーケストラを配し起伏に富んだアレンジはなかなかのものである。イ・プーの最盛期のクラシカルな味わいがある「パルシファル」「ロマン組曲」当時の最良なサウンドが思い起こされる。両面とも出来が良く、LPの存在が気になるところである。（杉原）



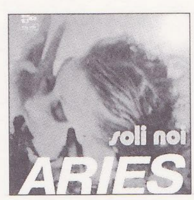
APOLOGIA LUPI
Pensieri D'aprile
Quel Qualcosa Di Nuovo
'74
●Las Vegas 5001064
○
◉

アポロジア・ルピは1970年〜77年まで活動していたグループで、かの、1974年にドリア・パンフィリで行なわれたイタリア最大のロック・フェスティバルにも参加していたグループである。このフェスティバル当時の彼らのサウンドはフルートをフィーチャーしたデリリウムやオザンナに通じるサウンドであり、一部のマニアから注目されていたが、このシングルは、フルート、チェンバロ、オルガンをフィーチャーした暖か味溢れる朗々としたスローテンポのナンバーでIMPRESSIONIに近いサウンドといった所。ぜひともアルバム制作して欲しかったグループの1つであった。尚、彼らは後にグループ名を〝LUPI〟と改めて、シングルを2枚、リリースしている。（Nmero Ueno）



AREA
L'internazionale
Citazione Da GEORGE L. JACKSON
'74
●Cramps CRSNP 1703
○
◉

A面はライブ盤やデメトリオの追悼2枚組ライブ盤で既にお馴じみ、左翼思想と共鳴しあっていた頃のナンバーのスタジオ・テイクである。筆者はこの手の思想に全く詳しくなく、またうろ覚えで申し訳ないが、原曲は世界史で出て来た『インターナショナル（第何次かな知らないぞ）』のテーマ曲と思われる（間違っていても刺したりするなよ！）。極端にアレンジされた圧倒的なパフォーマンスが聴ける。入手困難な人は、80年に出た廉価盤のクランプス復刻シリーズ「Successo」（9279 594）がお薦め。B面は彼らのベスト盤に収録。なおアレアには 1st 時に出されたシングルが1枚確認されており（CRSNP 1701）、〝自由への叫び〟〝ツェッペリン号の崩壊〟が収録されている。（須藤）



ARIES
Soli Noi
Donna Straniera
'77
●PDU : P.A. 121
○
◉

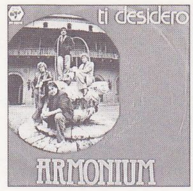
プログレッシヴ・サイドから見た場合、はっきり言って余り大した事の無いのがこのレーベルPDUなのだが、それでもこんな思わせぶりなシングルに出会うこともある。多分別人なのだろうけれど、そのボーカルは余りにもAlvaro Fella（Jumbo）に酷似し過ぎている。A面はポップ指向乍、このボーカリストの独壇場で思わず聴き惚れてしまう。B面は構成のしっとりとしたかなりプログレッシヴな作品。前半は清らかなボーカルでたおやかに流れるのだが後半に差し掛かるや否や、突如としてあのボーカルが叫び、キーボードの高鳴りがそれに続き、一気に終局へと流れ込む。Jumboの活動が伝えられていない頃だけにかなり気に懸かるボーカリストでありグループである。（鈴木伸一）



ARIES
Vivere Come Noi
Io Adesso

'78
●PDU P.A.1127
○
◉

'77年に発表され、JumboのAlvaro Fgllaに似たヴォーカルの入ったシングル「Soli Noi/Donna Straniera」でファンの間では有名になったAries。本作は、前年発表シングルのA面タイプのラブ・ロックだ。けっしてJumbo張りのヴォーカルは入って無いが、女性ヴォーカルとのデュオ・ヴォーカルが良い出来のラヴ・ロックだ。イ・プー、ジャルディーノ、ボッテガと聞き終ったファンに聞いてほしいシングルだ。適度な甘さ(これが重要)としっとりした構成力に十分に満足してもらえるだろう。ほら秘そかに笑みが漏れている。（長谷部）



ARMONIUM
Ti Desidero
E Penso A Lei

'80
●Baby Records BR 50210
○
◉

'80年Babyレコードからの1枚。ジャケットを見るといい年したおやじが写っているのでいささか心配であったが、内容の方は極上のラブロック／ A面は甘すぎないオーケストラをバックに晴れやかな気分にさせてくれる好ナンバー。しかし、ここではB面だ。クロスするコーラスと、ベートヴェンのメヌエットをマイク・オールドフィールド風にプレイした間奏がなかなか印象的。ほんと、いい曲だよ。（木下）



ARPA DI VETRO
Lei La Donna Mia
Ma Forse In Fondo

'78
●Fontana 6026033
○
◉

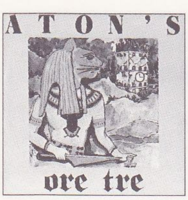
ガラスのハープという名のグループ。'75年あたりからイタリアではメロディアスな曲を演奏するグループが次々と誕生した。その時期にサンレモ音楽祭に出場した主なグループは、EVA 2000、G MEN、KRISS & SARATOGA、QUINTA FACCIA、VOLPI BLU、DANIEL SENTACRUZ、STRANA SOCIETÀ、PROFETI、NUOVA GENTE、SANTO CALIFORNIA、などで、77年はHOMO SAPIENS、78年はMATIA BAZARとグループが2年続いて優勝した。メロディ重視のポップ・ロックが主流になったが、メジャーに浮上できなかったものも多く、当グループもその一つ。当時はグループが過剰になって複数グループを掛持ちしていたメンバーもいた。このシングルの作曲陣はALISEIと共通し、後にメイゾン・レーベルからも同じ顔ぶれでALISEIのシングルも出る。（Hiro）



ARTI E MESTIERI
Managua
Lemon Vodka

?
●Edizioni Musicali Augusta MS 2011
○
◉

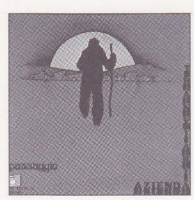
録音時期が正確につかめないが、4th「Acquario」('83)以後であることは確か。もしかすると5th「Children's Blues」('85)以後なのかもしれい。アルティ・エ・メスティエリにはこれ以前に2nd「Giro Di Valzer〜」からのシングル・カット「Valzer Per Domani/Saper Sentire」(Cramps CRSNP 1901、75)があるが、当然、本シングルの方はその音を望むべくもない。しかもいきなりリズム・ボックスに軽いフュージョン・タッチときて、キリコは居るのか、と不安になる。B面になると軽いタッチだとは言え彼のドラミングが聴ける。まあ、どちらの曲もとりたてるようなものでもない。政情不安極めたニカラグア、その首都マナグア。「Tilt」の時からの硬派ぶりを感じさせるタイトルだ。（松本）



ATON'S
Ore Tre
Sogni

'83
●Bajona Records B.J. 014
○
◉

'90年頃になってようやくアルバムを製作したアトンズの何年も以前のシングル。'80年代の前半と言えば、イタリアン・ロックにとって暗黒時代だったわけだが、BARROCK、NOTTURNO CONCERTANTE、ARLEQUIN、PARCO NORD、LEVITATHAN他、意外に多くのバンドが既に自主テープ作をリリースしていた。そんな中でEUROPEとHUMAN EXPRESSIONがなんとかアルバム製作にこぎつけた。アトンズは埋もれた多くの一つだったということになる。メンバーは近年の4人に加え更に4人がいて計8名。両面とも素人臭い内容とは言え、ポンプ・ロックに影響を受けたようなシンフォニック・ロックを演っている。'70年代のイタリア色はほとんど継いでいないサウンドだ。当時の苦境が見える1枚の資料である。（松本）



AZIENDA TRANVIARIA
Passagio
Parole Inutili

'74
●BASF 05 13315-0
○
◉

イタリアンBasfといえばMurpleしか紹介されていないようだが、その手のマニアには謎めいた魅力を持っている。今回紹介するこのシングル、まずジャケットが良い。私がもう1枚持っている同じBasfのPolifeno(こちらはプラス・ロック)と同じ人の手によるものだろう。音の方もB面はプラス・ロック風で好みではないが、A面の「Passagio」は仲々の秀曲である。イタリアン・ロックには珍しくフルートがメインを取っており、バックに美しいストリング系シンセが流れる。ラヴ・ロックと呼ぶには、ヘヴィーな感じで、改めてイタリアの層の深さを思い知らされる。このレーヴェルにはまだ他のシングルがあると思われるが、水準が高いのではないかと想像される。（吉瀬）



(IL) BALLETTO DI BRONZO
Neve Calda
Comincio'Per Gioco
'69
●RCA AN 4193
○
◉

彼らのデヴュー・シングル。A面は「Sirio　2222」に収録。B面は未収でLPと同じ路線のハードロック。この曲のインスト・ヴァージョンが〝Il Re Del Castello〞というタイトルで同名の編集アルバムに収録されている。またこのインスト・ヴァージョンが当時プロモでシングルカットされたとの噂もある。本作及び「Sirio 2222」で曲を書いているGiacomo Simonelliは'69年以前から'80年以降も活動を続けているシンガーでリリースも多数あり、バレットのメンバーではなかったのではないかとの疑問も浮かぶ。いずれによバンドは、後に参加するジャンニ・レオーネによってその音楽的傾向を決定され、この時期のイタリアでは珍しかった非プログレロック・バンドはプログレ・バンドとして世に知られることとなった。　（森下）



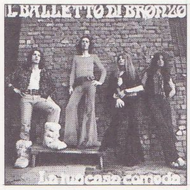
(IL) BALLETTO DI BRONZO
SI, Mama Mama
Meditazione
'70
●RCA PM3549
○
◉

バレット・ディ・ブロンゾ、「Sirio 2222」発表時の2ndシングル。A面はLP未収録曲で、〝SIRIO〞の曲調と同系統の音、鋭いE・ギターとA・ギターの対比を生かし、ポップなタイトルフレーズが印象的な好ナンバー。B面は1st LP中唯一シンフォニック・ファンを唸らせた名曲。途中のチェンバロが半分カットされ、最後の弦奏もカットされており残念。現在に至るまで、かなりの線まで解明されて来たイタリアン・ロックであるが、Gianni Leoneファンにとっては、〝Meditazione〞は、やはり彼が歌っているものと信じて聴いていたかったと思ってしまう程、プログレ・ファンをとりこにする曲である。　（高橋）



(IL) BALLETTO DI BRONZO
La Tua Casa Comoda
Donna Vittoria
'73
●Polydor 2060 053
○
◉

シングルが3枚確認されているバレット・ディ・ブロンゾ。1枚目は1st Sirio 2222からのNeve CaldaとLP未収曲Comincio' Per Giocoシングル。ハード・ロックである。2枚目は両方ともSirioからのカット曲で、1st時の名曲「Meditazione」が収録されている。（残念ながら最後のリリカルな生楽器によるエンディングがカットされている。）そして本作が3枚目のシングル。名作YS時のもので両面共未収録曲。YSが多少ポップになるというようなセンスの良い作品で、レオ・ネロのヴォーカルが絶妙の好盤である。往年期のバレット・ディ・ブロンゾのLP未収作品としてその価値は高い。ジャケットはYSのジャケットと同じコスチュームを着た彼等が川辺にたたずむものでこれ又、必見の価値あり。　（今）



(IL) BALLETTO DI BRONZO
La Tua Casa Comoda
Donna Vittoria
?
●
○
◉

写真は同名シングルのブート再発のものである。ジャケ・ラベル共に原盤とは異り、ジャケ裏には日本コロムビアのYX7586とあるがこれは坂本竜一の千のナイフの番号。スリーヴ写真は格好良いし日本盤を装っているのも面白いが音質は良くない。彼らのシングルでは他に、2ndからのプロモカットの「Primo Incontro/Secondo Incontro」（Polydor'72 AS176）、雑誌RaRoのオマケで付いた400枚限定の片面シングル「Neve Calda」（ARC AN4193）、アルバム「YS」からあっちこっちをつまんで継ぎ合わせた、異様な展開を見せるジュークボックス用プロモの「YS」（Polydor'72 AS164）（このB面はフィリップスのデミス・ルソス／）等があるがいずれもノースリーヴで内容も一応他で聴けるものである。　（森下）



BANCO DEL MUTUO SOCCORSO
Canto Di Primavera
Circobanda
'79
●Ricordi SRL 10896
○
◉

プログレ・ファンの間で人気のあるのは、このシングルが収録されている「春の歌」までであろう。両面ともLP収録だが、最初に聴くと思わず「あれっ?」と言ってしまう、ショート・ヴァージョン。初期の様な複雑なアレンジではなく、ジャコモおじさんの歌を中心としたアレンジの為、無駄を省き、LPでは少々長すぎたエンディングをカット、イントロも短かくされ、かえってスッキリし完成度アップというところか。ジャケの方は、ファンには不評の、プールでジャコモおじさんが子供を抱いている写真を使用しているが、一枚のシングルとして考えると音とジャケが見事にマッチングしている。又、LPから「Niente/Sono La Bestin」のシングルもあるが、共にショート・ヴァージョンである。　（長谷部）



BANCO
Grande Joe
Allons Enfants
'85
●CBS A6034
○
◉

バンコは'80年代に入るとリッコルディを離れCBSに移籍したが、音楽まで変わってしまいポップスを演奏するバンドになってしまった。'80年代に5枚のアルバムを発表しているが、どれもポップスという枠の中で考えれば上質なテクニカル・ロックと言えるだろう。A面は〝サンレモ音楽祭1985〞に参加、スター部門22組中15位だった曲でＬＰ未収曲である。シンセのアルペジオで始まり、ジャコモおじさんの暖かいヴォーカルが優しくメロディーを奏でるほのぼのとした曲調である。尚この曲には8分にも及ぶ12インチ・シングル（CBS A12 6034）が有る。'80年代後半頃からあまり音沙汰がなかったが、'90年に突如復活しサム・ムーアとの共演盤や1st & 2nd Albumを再録する等、現在も活発に活動を続けている。　（片山）



BELVE DENTRO
Cronaca Nera
Subito Dopo
'70
●First FR 5025
○
◉

FIRSTというレーベルは、'60年代後半〜'70年代初頭にかけて、ビート&サイサ的なグループのシングルを多数発表したレーベルであるが、このベルヴェ・デントロ唯一のシングルも1970年にリリースされたもの。ガレージ風なリヴァーヴに包まれた録音はいかにもサイケ・グループの一発録音であるが、ミサ風なオルガンをバックに歌い上げる前半パートから一変して、パトカーのサイレンやサイケ＆プログレまる出しのドラミンがくり出される中、攻撃的なオルガンとギターがうなりを上げる怒濤のエンディングは圧巻!!アーサー・ブラウンズ・キングダム・カムのイタリア版といったこのシングルは、正にイタリアン・プログレの輝かしい"夜明け"を象徴している。'70年という年代を考えれば屈指の1枚だろう。（N Ueno）



BLACK SOUND
Smog
Chissáchi, Chissáche
'74
●Bang Bang BG 024
○
◉

'70年代初期のイタリアではブリティッシュプログレが現地以上に人気があり、その影響下で生まれたバンド達は皆プログレ指向であり、ギターメインのストレートなハードロックアルバムは'69年のバレットの「シリオ2222」位しか思い浮かばない。テオレミ、プロセッション、カピトロ・セイ、フレア等もハード系だがプログレ色が全く無いとは言い難い。アトランティーデはイタリア人だが活動はドイツだったし。ブラックサウンドは例によって向の資料も無いバンドだが本シングルでは典型的なABAB形式のハードロックを聴かせてくれる。共におとなしめだがギターとオルガンがヴォーカルを盛り上がっている。B面はイタリア演歌組の泣きの入ったバラードでこちらも仲々の出来。LPが見つかれば5万円は付くだろう内容。（森下）



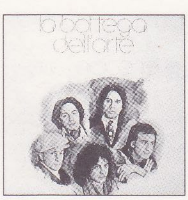
BLOCCO MENTALE
L'amore Muore A Vent'anni
Lei E' Musica
'73
●Titania TA 101
○
◉

レアー盤の多いイタリア・シンフォニック・ロックの中でもより入手が困難なブロッコ・メンターレであるが、彼等はティタニア・レーベルにアルバム一枚とシングル一枚を録音している。本シングルは両面ともLP未収録曲で、サウンドはアルバムと同じような清涼感のある良質なプログレッシヴ・ロックである。決して派手さはないが、イタリアらしいグループで、そのせいか、多々イタリアを聴き込んだマニアの間ではその評価は高い。A面は生ピアノやアコースティック・ギターにヴォーカルがのるのどかな曲、B面も同タイプのメンバーだがマイナーな感じのする切々とした曲。共に往年のイタリアの息吹を感じさせる好ナンバーである。（山崎）



(LA) BOTTEGA DELL'ARTE
Amore Nei Ricordi
Mare Nustrum
'76
●EMI 3C 006-18185
○
◉

たおやかなメロディー・ラインと多種のキーボード群を絶妙に使いこなした見事な演奏力で、トップ・クラスのボルテージを誇る作品をリリースしたボッテガ・デッラルテ。特に初期2枚のLPは素晴らしい作品である。そんな彼等のシングルはLP未収録曲が多い。このシングルはA面が未収でB面はファースト・アルバムからのインストゥルメンタル・ナンバー。他にも「Che Dolce Lei/Pastelli」(B面が未収)、「Bella Sarai/Restà Co L'occhi Chiusi」(両面未収)等、LPのボルテージと同等の名シングルを残している。サラリと歌い流している為か日本での評判はまだまだ低いグループであるが、この機会に再評価を促したい。イタリア人の持つ叙情と素晴らしい演奏力をかね備え持つグループ、それがボッテガ・デッラルテである。（山崎）



(LA) BOTTEGA DELL'ARTE
Che Dolce Lei
Pastelli
'77
●EMI 3C 006-18115
○
◉

彼らの2枚目のシングル。A面は「Dentro」からのカット。名曲だ。B面の「Pastelli」は、アルバム未収のインストゥルメンタル・ナンバーのとりたてて、大騒ぎする程の作品ではないが、コミカルで優しさあふれるシンフォニックな小品は確かにボッテガである。軽いウォーミングアップと言ったところだが、へたなイージーリスニングの100倍は感情移入出来る。心を落ちつかせて「さあ、明日もがんばるぞ!」といったところですか。（木下）



(LA) BOTTEGA DELL'ARTE
Bella Sarai
Resta'co'L'cocchi Chiusi
'78
●EMI 3C 006-18325
○
◉

9枚まで確認されているボッテガのシングルの中でも、両面未収ということを含めてはずせない1枚。両面とも「Dentro」そのもので、A面は得意のパターン、静かに始まり優しく盛り上ってゆく典型的なボッテガサウンド、B面も優しさに満ちた切なく静かな曲で地味な作品ではあるが、つぼを押さえたサウンドはしっかりとボッテガしている。ところで、ボッテガを語る時の、レノンorマッカートニー論はあまりにナンセンスで、グロテスク。人生の哀しさを分ってらっしゃらないと見た。（木下）



(LA) BOTTEGA DELL'ARTE
Piu'Di Una Canzone
Finisce Qui
'80
●EMI 3C 006-18464
○
◉

あの3rd「L'Avventura」発表の翌年の作品でありながら1st、2nd期のボッテガサウンドを聞くことが出来る。やはり、3rdアルバムはレコード会社の圧力だったのだろうかと思わせる程、いつもの優しさに満ちあふれたメロディー、ハーモニー、を主体としたサウンド・アンサンブルが、弱冠アップテンポのリズムにのって繰り広げられる。この後、ボッテガ・サウンドは2度と復活しなかった。ボッテガ最後の輝きがここにある。B面は3rdからのカット。

（木下）



(LA) BOTTEGA DELL'ARTE
Vecchio Rock
Via Del Grano
'81
●EMI 3C 006-18534
○
◉

'81年、EMIからの、そして5人ボッテが最後のシングル。タイトル、ジャケットが不安を誘う。ジャケットのメンバーの出て立ちと比すればサウンドの方は印象が違う。これはゴスペルですな。メロディーといい、ラストの大合唱といい、レイ・チャールズがピアノの弾き語りで歌えば名曲となったかもしれない。などどアホなことも考えたくなる。これを最期にフェルナンド、チュッチ脱退。そうか、彼がボッテガだったのか。正しくボッテガの鎮魂歌　B面は3rdからのカット。

（木下）



(LA) BOTTEGA DELL'ARTE
Nelle Stelle Nel Vento
Domani Verrá
'82
●B.D.R 5020 001
○
◉

'82年ポリグラム配給下での、おそらく自らのレーベルと思われる、ボッテイガ・デラルテ・レコーズからの唯一のシングル。扇の向うに、五線譜と音符のかわいいレーベルマーク。4人になっての最初の曲でもあり、大手レーベルを離れた開放感と、意気込みを感じる。がっちりとまとまった新しく生まれ変わったそのサウンドはボッテガでなければ、とも思わせるが後に出る4thアルバムを少々骨太くした音は、再出発にふさわしいものだったと言える。この時期のアルバムも聞きたかった。

（木下）



(LA) BOTTEGA DELL'ARTE
No Stop To America
Verso Est Verso Il Sole
'83
●RCA PB 6698
○
◉

おっ？　これはELOの「コーリング　アメリカ」だ！　それもELOより3年も早いぞ！　83年RCAからのシングル。B面も軽快な曲で、両面とも所謂デジタル・ポップといったところか。ボッテガ史上最強のポップ・シングルと言えよう。しかし、この後またマイナー・レーベルへ移ることになり、この試みは成功しなかったと思われる。尚、4thのジャケ違い、曲順違いのフィンランド盤にはこのシングルのA面曲が追加収録されアルバムの中でなかなかいいアクセントになっている。

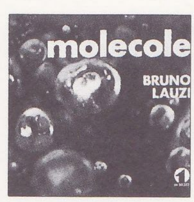
（木下）



BOTTEGA DELLE VERITA
Umanita
A Modo Suo
'77
●Rifi RFN-NP 16710
○
◉

一部のあいだでポッテガもどきと呼ばれていたグループ。よく知られているボッテガ・デッラルテに似たサウンドを持ち、名前もまぎらわしいためで、彼らの個性が無視された形で日本で紹介されてしまった。前作にあたるシングルの曲が、演奏は上手いとは言えないが、肌の色を気にせずに暮らすユートピアを歌った内容で、道徳心あふれるグループという印象だった。当シングルはもっとロック風になっている。コーラスのVERONA FOLKを従がえていて、サウンド面でも進歩している。カンタウトーレとしても知られる作詞作曲家のアンドレア・ロ・ヴェッキォが一枚絡んでいるために、それほどお人好しの内容ではなくなった。アレンジはエンリコ・イントラが担当。

（HIRO TANAKA）



BRUNO LAUZI
Molecole
La Memoria Di Quei Giorni
'74
●Numero Uno ZN 50327
○
◉

ブルーノ・ラウツィはイタリアには珍しくブルース・フィーリングを身につけたシンガーだと思う。だから余計に渋さが目立つ。その渋さでなんとイル・ヴォーロのナンバーが甦ったのが、このシングルだ。A面の〝Molecole〟はヴォーロの1stアルバムに収録された〝Il Canto Della Preistoria〟の副題でもある。思い浮かべれば、この曲はアルバム中でもアコースティック色が強く、弾き語りタイプの彼には見合っている。アレンジはレヴェルベリが担当。当然、原曲の漂ようような透明感あるムードは消えてオーソドックスに感じられる。ヴォーロの特性を確認しながら別ヴァージョンを楽しめるというお得盤。むしろB面の方がラウツィらしさが出ているか。こちらはTV番組使用の曲のようだ。

（松本）



(I) CAMALEONTI
Piccola Venere
Gimcana
'75
●CBS 2914
○
◉

シングル5作目。A面はオリジナル・ベスト・アルバム「Piccola Venere E Altri Successi」(CBS 69149)のトップを飾り収録された曲、B面は'74年発表の4thアルバム「Amicizia E Amore」で10分に渡り異彩を放っていた曲のショート・ヴァージョン、おおよそ歌物ではないプログレッシヴ・ロック・ナンバー。イギリス人ギタリスト、デイヴ・サマーのハード・ロック・リフがバンドに与える影響は大きく、こうしてイタリアン・メロディの中で聴くと色合いの違いがよく見える。A面は彼のヘヴィなリフでサビをかためながらオーケストラと共調するというカマレオンティでしかない佳曲。塗り込められるような泣きメロが、大きく盛り上がりを見せる。典型的なイタリアン・メロディだ。
(松本)



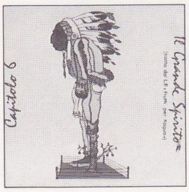
CANZONIERE DEL LAZIO
Suballu
Tarantella Dei Baraccati
'76
●Intingo Intingo ITG 410
○
◉

ラツィオの3rd 発表後に出されたと思われる、現状では確認できた唯一のシングルである。A面は3rd「Spirito Bono」のA①だが、B面はアルバム未収録。静かに始まりリズム・セクションで盛上げるいつもの手法を取っているが、他のアルバムで2つのライブバージョンを聴く事が可能である。一つは76年のオムニバスライブ「Parco Lambro」B①。もう1つは、vo をクララ・ムルタスに変えて演奏した77年東独ライブ A ②である。特に後者の出来は素晴しく、スタジオ・テイクのシングルと聴き比べるのも面白い。(須藤)



CAPITOLO QUINTO
Sensazioni Di Un Passato
Che Noia
'76
●ec Record 725
○
◉

カピトロ・クイント'76年の作品。生のオーケストラではなく、ストリングスシンセで押し通したそのサウンドは、良く言えばグレゴールの感じに似ている。いいメロディラインを持っていながらも、バックのアレンジが薄っぺらく持ち味を生かしきれていない。それでも甘口のラブロックを聴いた後では新鮮に響く。おそらく、彼らは所謂ラブロックとは異なる方向を目指していたのではないか。B面はどうでもいい妙なポップナンバー、出来ればジャケットの女性は仮面をはずしていただきたかった。
(木下)



CAPITOLO 6
Il Grande Spirito
Sole Di Notte
'72
●It ZT 7034
○
◉

カピトロ・セイはイタリアで、「Cool Jerk/Please Please Please(Atco'70 90175)、「M'innomoro Di Te/L'amavamo In Tre」(It'71 ZT7015)、そして本作の3枚を、スペインで「M'innamoro〜」のスペイン語がヴァージョン「Me Enamoro De Ti/Te Anabamos Tres」(RCA3-10664)、デリリウムのカヴァーでしかもスペイン語ヴァージョンの「Jesahel/Te Quiero」(RCA'72 3-10713)の2枚の計5枚のシングルを残している。本作のA面はLP収録だがB面は未収でしかもLPのB面に並べても遜色がない変拍子フルートがカッコイイ名曲。スリーヴはLPと同デザインだがカラーでコレクター心をくすぐる。2ndシングルもヘヴィーで熱苦しいサウンドで傾向は違うが内容は良い。1stシングルは未聴だが期待薄。
(森下)



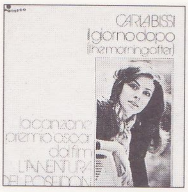
CARLA BISSI
Il Mio Cuore Se Ne Va
Un Giorno Nuro
'72
●Carosello CI-20314
○
◉

'72年アリーチェ若き日の思い出、本名のカルラビッシ名義で発表したデビュー作。さすがに現在の彼女とくらべて唄いまわしなど、まだまだ未熟な部分が多くあるが、それはそれで若々しいはつらつとした魅力にあふれている。何回聞いても飽きがこないのは、まだ変なクセがついていないからか?このシングルより3年後にデビューアルバムを発表する訳だが、わずかの時の間に数段の進歩をとげているのはやはり彼女の才能であろうか。第22回サンレモ音楽祭の入賞でデビューするといった所は、現在、私が愛聴しているLAURA PAUSINI(MMC AMCE-592)と非常によく似ていると言う事はLAURA PAUSINIも将来はアリーチェの様なスター歌手に育っていくのか楽しみだ。
(堤野)



CARLA BISSI
La Festa Mia
Fai Tutto Tu
'72
●Carosello CI-20331
○
◉

人は自分が好意をよせているものには、興味がわいて、未来より過去を探求したくなる。この深層心理があるからこそ今、この本が存在するのであって、その気持ちの強い者が多くのマニア達である。かくいう私もその一人なわけで、アリーチェが、1stアルバム以前にシングルを出していると、知った時からミラノのレコードフェアで実物を手にするまでの間、どんな曲なのか?と、想いをはせたのも、マニアならではの楽しみだ。話を本作に戻そう。カルラビッシ名義による第2弾、前作より約7カ月の間にリリースされた物だが、内容はさらに明るく、オーケストレイションも派手で、日本でも大人気だったカテリーナ・ヴァレンテ風の楽しげな中にも、哀愁のただようイタリアンポップスに仕上がっている。
(堤野)



CARLA BISSI
Il Giorno Dopo
Vivere Un Po' Morire Un Po'
'73
●Carosello Cl 20357
○
◉

アリーチェ・ヴィスコンティは'75年にCBSよりアルバム・デビュウする以前、本名であるカルラ・ビッシ名儀で3枚のシングルをリリースしている。後にバッティアートの協力の基で個性的な作風へと至ることになるが、このカルラ・ビッシ時代はアイドル的な路線をねらっていたようで、特に極だったものは感じられないが、歌声は間違いなく後のアリーチェに通じるもので、バッティアート/アリーチェ系のファンの方にはコレクターズ・アイテムとして人気が出るだろうと思う。このシングルも、他の2枚と曲的には大差なく、後のアルバムのようなバロック的なバックはなく、平均的な出来だと思う。 （山崎）



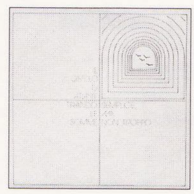
CARLO RUSSO
Scusa Amore Mio
Eri Tu
'76
●PDU P.A. 1111
○
◉

張りのある声が一本調子に続くので随分とオペラふうにも思うが、いずれにせよ特徴のあるヴォーカル・スタイルだ。A面の出来はイタリアン・ロック・ファンを魅きつけるかもしれない。その特徴のあるヴォーカルで歌われるメロディには、〝ラヴ・ロック〟というよりも、イタリアン・ロックの哀愁感を感じる。サポートする荒いフルート・トーンやキーボードのアクセントもその要因かもしれない。AB面ともどこか古臭い印象を受けるのも、例えばメタモルフォシのダビデ・スピタレリのような張りが声にあるからだろう。加えてドラムの録音もそれふうだ。歌物と片付けるには、おとなしくない力強さがある。（松本）



CARMEN VILLANI
Bambino Mic
Una Donna Sa
'71
●RCA PM 3621
○
◉

カルメン・ヴィラーニの残したシングルは単なるカンツォーネと呼べない捨て難い魅力があるので紹介しておきたい。語りかけて来るヴォーカルは一瞬時間が止った様な錯覚をもたらす。淡々とした中にも、バックの演奏は妙にロック調というか、プログレ調というか。作曲も担当しているGianni Marchettiのアレンジ・プロデュースの手腕によるところが大きい。B面はおなじみPaollo Ormiのオーケストレーションが聴けるしみじみとした好曲。美声ではないが、パティ・プラヴォに近い独自な世界を持っている個性派といえよう。 （吉瀬）



(IL) CASTELLO DI ATLANTE
Tirando Le Somme
Semplice, Ma...Non Troppo
'83
●1956A
○
◉

'92年になってようやくアルバムのリリースを果たしたIl Castello Di Atlanteの、何と10年近くも前のシングル。両面共アルバム収録曲だが、勿論テイク違いで、その原型とも言うべき姿を見せてくれる。その溌剌とした演奏はよりテクニカルで熱気を帯びた印象が強い。多彩なキーボード群が縦横無尽に駆け巡る〝Tirando Le Somme〟、艶やかなバイオリンが大活躍する〝Semplice, Ma... Non Troppo〟共に洗練された透明感溢れるプログレッシブなサウンドで、既にかなりのポテンシャルと実力を備えていた事が解る。Aldo Bergamini, Massimo Di Lauro, Paolo Ferrarotti, Dino Fioreというライン・ナップで, Roberto Giordanoの名はこの時点では見る事が出来無い。 （鈴木伸一）



CATERINA CASELLI
La Casa Degli Angeli
Adagio In Sol Minore
'71
●CGD 120
○
◉

「Primavera」は本当にいいLPで青盤（これがぱっと見黒盤なのだが光に透かすとほのかに青いといううさんくさいもの）まで買ってしまう程です。さて、このシングルなのですが、それとはまた違った良さがある。B面はブライアン・オーガーで有名なアルビノーニのアダージョ。冒頭夕閑マダムっぽいうらぶれた雰囲気で声がなまめかしいぶんルネッサンスよりは良い出来ぐらいにしか思わないが中盤のくさそうなセリフの後にミアマルティーニと並ぶイタリアのくの一としての本領を発揮。いきなりオルガンと泣きのギターがストリングスを交えてのたうちまわる狂乱悶絶の展開。北陸の荒海で見た女相撲を思わせるド根性シンフォニックだ。 （牧野）



CATERINA CASELLI
E'Domenica Mattina
Il Nostro Mondo
'72
●CGD 1105
○
◉

「プリマベーラ」を聞き、カッセリのファンになった方も多い方だろうが、そういう方にお薦めしたいシングル。おそらく両面他LP未収と思われるが、「プリマベーラ」同様にオーケストラが大々的に使用される。同年に発表されたカラリーナ・カッセリ名義のLPは他人のカバー曲が多く以前のノリの良いポップス歌手という感じであるが、このシングルの路線が発展し、「プリマベーラ」が出来上るが、「プリマベーラ」の評価はイタリア本国でも良くなかった様だが、内容的には皆さんがご存じのような素晴らしいの一言につきる。このシングルも、その「プリマベーラ」に一歩も引けを取らないと私は思う。 （長谷部）



CATERINA CASELLI
Momenti Si Momenti No
Ricordi e Poi...
'74
●CGD 2324
○
◉

多くのアルバムを残すカテリーナ・カッセルリだが、ユーロ・ロック・ファンに最もアピールする作品は、バロック的なオーケストレイションをほどこした'74年の作品「Primavera」であろう。このシングルは「Primavera」とほぼ同時期にリリースされたもので、A面はアルバム収録曲だが、B面が、なんとアルバムのイメージそのままの曲想の未収録曲なのである。あの、終始、花の咲きみだれるような美しさのオーケストレイションとのままにカッセルリが歌う曲で、やはり春のイメージの強い作品である。春の生命の躍動感を感じるこのみずみずしい感性は、やはりイタリアならではのもので唯一無比の世界だ。（山崎）



CHARISMA
L'Ultimo Fiore
Da Ora Senza Te
?
●Bambara VB 7778
○
◉

アルバム未収録シングル、シングル・オンリーのバンドのもの、の中では間違いなくトップ・クラスの内容だろう。これは内容がある。シングル用の曲という感じがしない。資料/情報は皆無。Maurizio Arcieriが'70年代から始めたカリスマ（後にKrismaと改名）と関係があるのかないのか。少なくとも音楽性での関連はないように思えるが。A面はフルートを全面に出して始まり、'70年代前半張りのKbdにいかにもイタリアン・ロックふうのサビを持つヴォーカルが来る。ac-gも雰囲気があってsaxも入る。B面はsax、vo、kbdを中心にしたヘヴィな趣き。AB面での傾向の違いから幅のある音楽性を持ったバンドに思える。オザンナ系の音が浮かぶ。レーベル名も聞いたこともない。本当にアルバムはないのか。（松本）



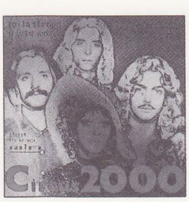
CHERUBINO E I CHERUBINI
Signor Uomo
Era Cosi...(Prima)
'72
●Philips 6025 074
○
◉

メロトロンの入ったポップ・グループとしてEquipe84、Gens、G・Mem等がファンの間では人気が高い。このCherubino E I Cherubiniも1972年、プログレー色となったイタリアンロックの影響を受け、積極的に当時の最新機材、メロトロンやシンセを取り入れている。両面供、明るめの曲調の為、メロトロンが少々浮いているといった感じもあるが、曲そのものは十分合格点をつけられる。曲のアレンジがもう少し良ければメジャー・グループにも成りえたかもしれない。グループの意気込みが伝ってくる好盤である。（長谷部）



CHETRO & CO
Danze Della Sera
Notturno
'?
●Parade PRC 5053
○
◉

Stanza Della MusicaのEttore De Carolisをリーダーに、Franco Coletta、Gianni RipaniによるトリオMOCHETRO&COのこのシングルは、サイケデリックな浮遊感とイタリア独特の夢想感漂う捨て難い作品。特にパゾリーニの詩を歌った"Notturno"はClaudio Rocchiを想起させる沈んだ音色と仄かな色彩感に包まれた、当時としては先鋭的な秀曲。イタリア・ロックのルーツと言ってしまえばそれまでだが、今聴いても色褪せないこの雰囲気は充分魅力的だ。蛇足乍らジャケットは5つ折りで幅80cmを超えるもので、彼等の意気込みがひしひしと伝わる豪華な作りとなっている。（鈴木伸一）



CIRCUS 2000
Lo, La Strega (I Am The Witch)
Pioggia Sottile (I Can't Believe)
'70
●Rifi RFN NP 16424
○
◉

ジェファーソン・エアプレインの落とし子、サーカス2000ほどイタリアらしくないバンドもいない。全ての乗りが当時の西海岸を向いていて、ロックが舶来物だった視点は、まるで昔の日本を見ているようだ。これはデビュー・シングルになるが、アルバム「Circus 2000」のテイクとは違ってイタリア語ヴァージョンになっている。国内向けということなのだろう。どちらにしても曲の作り方が輸入物なので、あまり差がない。各々LPのAB面トップに収録されていた。曲としては"Lo, La Strega"の方が面白い。イコライジングされたコーラス部がアラブ/イスラムふうの雰囲気を持っていて効果的だ。（松本）



CIRCUS 2000
Regalami Un Sabato Sera
Ho Regalato I Capelli
'71
●Rifi RFN NP 16444
○
◉

こちらは翌年'71年の2ndシングル。A面が未収録曲、B面は1stアルバム中の"Sun will Shine"のテイク違い。A面はシルヴァーナ・アリオッタの古めかしいロック・ヴォーカルをメインに飛ばす。と言っても素直にハード・ロックにならず割切れなさが尾を引く、そこが彼等らしい。その筋ではB面の方が具体化しているか。翌'72年の2ndアルバム中のロング・チューンを予感させる。多分、当時の新録音なのでは。特にアルバム・テイクのリズムのせこさが取り払われて曲が大きく見える。尚、翌'72年には2ndアルバム「An Escape～」が出て、「Hey Man(Paroe 1)/(Parte 2)」(RFN NP 16466)が、シングル・カットされている。こちらは曲作りも地についた感がある。ジャケットも一番いい。（松本）



CIRO D'AMMICCO
Cosi'Era E Cosi'Sia
Autunno
'72
●EMI 3C 006-17863
○
◉

1stアルバムと同じく、ダリオ・バルダン・ベンボのアレンジによるチロ・ダミコ'72年のシングル。メロトロンの替わりにストリングスシンセを使い、あくの強さをやわらいだ分アルバムの曲より聴き易くなっている。しかし、チロ・ダミコ本人の歌は相変わらず熱のこもったもので、ボルテージは同レベル。彼自身のメロディーメーカーとしての才能とアレンジの良さが光る佳作になっている。ジャケットもアルバムとの関連性から、切手がシートとしてあしらわれている。B面はアルバムからのカット。ラストのインストゥルメンタル・ナンバー。 (木下)



CIRO D'AMMICCO
Un Uomo Nella Vita
Dolce Jenny
'73
●EMI 3C 006-17879
○
◉

'73年のチロ・ダミコのシングル。彼の個性を生かしたまま、見事にあくを抜ききった傑作だ。ここでもメロトロンは使わず、オーボエ、ピアノ、ホルン、女性コーラス、シンセサイザー、そのいずれもが印象的に使われており、彼のメロディーメーカーとしての才能とともに、ダリオ、バルダン・ベンボのアレンジ力の素晴らしさも、改めて認識せざるを得ない。彼の作品の中では最も完成度の高い仕上りになっている。押さえて歌う彼のヴォーカルもいいものだ。B面はアルバムからのカット。 (木下)



CLAUDIO BAGLIONI
Fratello Sole Sorella Luna
Preghiera Semplice
Canzone Di S.Damiano
'72
●RCA PM 3648
○
◉

バリョーニ・ファン必携の本シングルは'72年4月に発売された。フランコ・ゼフィレッリ監督の映画「ブラザー・サン、シスター・ムーン」のイタリア語版のサウンド・トラック曲である。本家英語版は日本でも公開されたが、オリジナルはスコットランド出身のドノバンが歌っている。作曲は映画音楽の大家であるリズ・オルトラーニの手によるもので、オーケストラの指揮にもあたっている。この作品を聞く事が出来たのは最近のことであるが、20年以上も前にこの映画を観た時の事を鮮明に思い出させられた。未だ子供だった時分であっても、主人公の偽善でなく報酬の為でも決して無い奉仕の心にとても感銘を受け、涙を流した覚えがある。バリョーニの声もきっと多くのイタリア人の心を掴んだに違いない。 (片山)



CLAUDIO BAGLIONI
Avrai
5(Una Casa Nuova)
Avrai(Strumentale)
'82
●CBS A2546
○
◉

アルバム「STRADA FACENDO」(81年)の流れをそのまま汲むシングルとして翌年発売された。「AVRAI」は生まれて来る初めての子供の事を歌った感動的なバラードで、彼にとって思い出の曲になった様だ。オランダ盤のベスト・アルバム「CLAUDIO BAGLIONI」(CBS 26672)にはこの曲のメンバーがクレジットされていて、PETE VAN HOOKE(Dr),ANDY BROWN(Ba),PAUL KEOGH(G),GEOFF WESTLEY(Key,Arrangement)、そしてスタジオがロンドンのエアーだ。「STRADA FACENDO」は各曲が短い小品によって挟まれているが、それぞれ1、2、3、4とタイトルが付けられていて、このシングルのB面が5になっていて、その後〝AVRAI〞のインストへと続きとても綺麗な展開になっている。尚アンナ・オクサが93年にこの曲をカヴァーしている。 (片山)



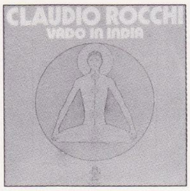
CLAUDIO ROCCHI
Indiscutibilmente
La Televisione Accesa
'70
●Ariston AR 0341
○
◉

クラウディオ・ロッキはデビュー期からその繊細さの度合いが大きい。それは後に東洋指向を強め僧侶となることで尚のこと納得できる。彼にとっての音楽は精神世界に関わるもので、まず第一に自分自身の心象や態度から出てきたものだろう。数多くのカンタウトーレが〝amore〞を歌っていた時から彼はどこか異質だった。謳歌してしまう以前に自身を見つめようとしていた。そんなニュアンスが音楽に出ている。このシングルは1stアルバムの頃のものだが、比較的オーソドクスな中にも早や彼の繊細な面を聴きとることができる。特にB面のイコライジング処理されたイントロ/アウトロに挟まれて漂うようなヴォーカルと生ギターに具体化されている。この2曲ともアルバムには収録されていない。 (松本)



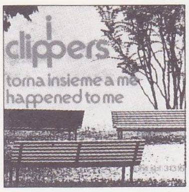
CLAUDIO ROCCHI
Grazie
Cerchi
'71
●Ariston AR. 0506
○
◉

2作目「Volo Magico N°1」の頃の2曲。アルバム未収録。この2作目から続く「La Norma Del Cielo」、そして「Essenza」の頃のロッキは、音楽を自身の内的世界の表現として、彼自身、ミュージシャンとしてまだリスナーを前提にしていたように思う。以後、電子音楽、サウンド・コラージュ等に自身の精神世界を開くべくスタジオ作業へと外界を閉ざし、やがて僧となり、音楽は彼の日常の一部となる。だから後期の作はオーソドクスで軽いのだと思う。依り所が音楽だったからこそ'70年代の前半は、あの異質なまでの繊細さが出ていたのだろう。その頃のシングルだ。当時のアルバムの世界への窓口といった小品になっている。彼のカラーに共感する人はともかく、とりたてる程の内容でもない。さわりといった感じだ。 (松本)



CLAUDIO ROCCHI
Vado In India
Vado In India
'72
●Ariston 45 AR/0559
○
◉

'72年のシングル。この頃のクラウディオ・ロッキは東方志向が強く、東洋思想をベースにしたコンセプトにプログレッシヴなアレンジをほどこした曲を多く書いていた。この曲もその例にもれず、効果音的なバックにベルの音やアコースティック・ピアノの音をフリー・フォームに配し、アコースティック・ギターをさらに加えて、その上をエコーをかけたロッキのヴォーカルが語りかけるようにして、浮遊感のある夢幻的な作風を形成している。アルバムは大曲志向でもシングルはチャート入りをねらうのが普通だった当時のシーンにおいて、両面で1曲という大担な構成でリリースしたことも特筆に値するだろう。ジャケットは4面開きのポスター・カヴァーで、別にノーマルのジャケットに入っているという凝ったもの。 （山崎）



(I) CLIPPERS
Torna Insieme A Me
Happened To Me
'75
●Fonit SPF 31316
○
◉

このシングルは珍しく語りから歌が始まる。まるでフランス流の演出だ。その仕掛振りを含めて、透き通るようなストリングス・シンセサイザーをバックにアコースティック・ギターが柔かなタッチを見せる等、繊細なイメージを大切にして曲想に好感が持てる。たよりないようなヴォーカルと隠やかなメロディもイメージに見合っていると思う。べたつきのない曲だ。ところがB面になるとバス・ドラがディスコ前夜、ギターもそれに沿ってチャカチャカと言う。これではA面のイメージも半壊してしまったも同然だが、熱心なイタリア・ファンならA面の1曲で何とか持ちこたえることができると思う。イマジネィティヴな歌物だけに惜しい。 （松本）



(IL) CORALLO
Si Bella Tu
Si Bella Tu
'77
●Bella Records ZBN 10001
○
◉

A面がヴォーカル・ヴァージョン、B面がインストということで、この1曲では判断がつかないものの、歌物とロック物の中間を行くようなタイプのように思える。中々興味深いとろだ。自主製作だが録音は良好。リュートのような響きのアコースティック・ギターが常に鳴っていて、これがとても印象に残る。オープニングの深く沈むキーボード・オーケストレーションにしてもそうだが、全体に想いをめぐらせるようなおぼろ気な雰囲気がある。まるで映画のワンシーンを回想するかのようだ。途中に入る甘く伸びのあるギター・ソロも曲想を高めている。あと、少しヴォーカルの声質がアルザ・ファラックスに似ているか。何にしても謎だらけのシングルの世界だが、その中で静かな好作という気がする。 （松本）



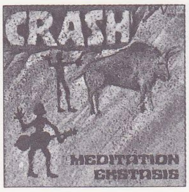
CORRADO RUSTICI
Chiuppete Chiappete
Riturn to Silence
'83
●WEA 24 9561-7
○
◉

オザンナ関係の中心人物コッラード・ルスティチは近年はズッケロ・フォルナチャーリらのプロデュースを手がけるなど活躍中。1955年ナポリ生まれで、数多いナポリ派ミュージシャンの一人。彼はジェノヴのミュージシャンの交流もあり、ルチアーノ・ミラネーゼやフランコ・レプロヴィーテらとの協力関係もあった。フュージョン系グループのノヴァ解散後はジョン・マックラグリンなどアメリカのミュージシャンと行動を共にし、その頃にこのシングルを発表した。同時にロング・ヴァージョンもレコーデングした。歌はトゥリオ・デ・ピスコポやトニー・エスポジトなどと同様ナポリ方言と英語を混ぜたもので、サウンドは風変わりなディスコといったところ。 （HIRO TANAKA）



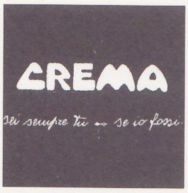
(THE) COUNT
Abracadabra
Magic Drops
'76
●RCA TB 60-1270
○
◉

前回のシングル編で私の持っている貴重盤はかなり紹介されてしまったので、今回自分のレコード棚を物色していると某氏よりもらったこのシングルが目に止り聴き直してみた。盤にオリジナル・キャストと書いてあることから、ラジオかテレビの番組のテーマ曲かもしれない。音はイージー・リスニング風なジャズ・ロックとでもいえそうな軽めの感じであるが、キーボードの使い方などプログレ然としており謎を呼ぶバンドである。一切手掛かりになるようなことがジャケットに記入されておらず書きようもないのだが、RCAということもありひょっとして有名な人でも参加しているのではないかと想いをめぐらせるのも楽しいことだ。 （吉瀬）



CRASH
Meditation
Ekstasis
'77
●Valiant ZBV 7073
○
◉

イギリスの有名なパンク・バンドにCLASHがあるが、こちらは彼らとは何の縁もないイタリアのCRASH。彼らについての資料がないので、正式なグループであったのかどうかは定かでない。また手元にあるこのシングル以外のレコードが存在するのかも不明だ。さて、この謎多きレコードのサウンドの方であるが、A面のナンバーは爪弾かれるピアノとオルガンをバックに優雅なフルート、泣き泣きのギター、そして後半のハイライトに華麗なヴァイオリン・ソロが次々とオーバーラップされて行くクラシカルな秀作。クェッラ・ヴェッキア・ロカンダの2ndやルネッサンス的な味わいのある作品だ。シングル数毎だけをリリースして埋れてしまった多くのグループの中にも素晴らしいサウンドを持ったグループがいるという好例である。 （UNO）



CREMA
Sei Sempre Tu
Se Io Fossi
'76
●New Star NSR 1138

黒地に白文字でグループ名及び曲名が入っているだけの表ジャケ。裏ジャケは黒白が反転しているだけといった実にシンプルかつお粗末なジャケットに包まれた自主製作盤。演奏もジャケットに劣らずお粗末そのもので、更に録音も悪いといった、B級マニアさえ首をひねる代物だと客観的には思う。しかし、曲がとても良いのだ。内容的には正にシンフォニック・ロックと言っても良いもので、特にA面はゆったりとメロディアスに進行して、繰り返されるテーマが非常に印象的である。まあ、ギターがあまりにもヒドいが……。B面はよりヴォーカルに重点を置いた感はあるが、基本路線は同じ。当然のことながら、このレベルではLPの存在は望むべくもないであろう。酷なことを書いて来たが、実は私には貴重な存在である。（杉原）



(I) CUCCIOLI
La Strana Che Cerco
Il Non Sai
'67
●Vedette VVN 33144

Hunka Munka即Roberto Carlottoの記念すべきレコード・デビューがこの I Cuccioliのシングル。'67年と言えばDik DikやPoohの1stアルバムのリリース年であり又、前後してEquipe 84やLe Orme等も登場している。言わば、後のイタリアン・ロックの隆盛へと通じる種蒔き的な時期に当るのだろうが、にも拘らずこのシングルが与えてくれる満足感はかなり大きい。A面はあのHunka Munka節を充分堪能させてくれる佳曲。なんとこの時点で彼独特の唱法は既に開花してしまっている。B面はよりポップな乍ら、結構積極的なオルガン・プレイをも披露している。ともあれ後の彼の作品を彷彿させる好シングルである。（鈴木伸一）



DALTON
La Donna E Il Bambino
Vuoto
'74
●IAF 1902

'60年代後半から活動を開始したイ・ダルトンは数枚のシングル（これらはいわゆるビート・グループ・スタイルの作品）をレーベルを点々としながらリリースした後、'72年に名作「Riflessioni；Idea D'infinito」をMusicレーベルにて製作。そして2nd「Argiali」をIAFレーベルよりリリースして解散してしまうわけだが、本作は両面共に、2nd LPからのカット（A面は改名されている）である。ジャケット・カヴァーの絵が非常に印象的なのでここにあげておくことになった。この時期には、すでにプログレッシヴ色は後退しているが、ほのぼのとした歌を全面におし出したもので、切々とした哀愁がイタリア然とした叙情をかもし出している。それはメタモルフォーシにも通じる泥くさいものだ。（山崎）



DALTON
Presto Tornerò
MaMa Dog
'79
●Rifi IAF RFN-NP 16787

2枚のアルバムでは、メタモルフォーシ・タイプのやや泥臭いクセのあるシンフォニック・ロックを演っていたダルトンであるが、この'79年発表のシングルでは、良くも悪くもアカ抜けたサウンドに変化している。A面は優しくたおやかなラヴロックナンバーで、この手のサウンドの中でも仲々の秀曲である。B面はうって変ってディスコティックでダンサブルなナンバーとなっている。軽やかなストリングスの導入が見られるものの、聴き所は少ない。しかしながらこの曲は当時の流行とマッチしていたと見え別にもう1枚「Monia」と言う曲とのカップリングのシングルも発売されている。流行と共にシンフォニックロック→ラヴロック→ディスコと変化して行った彼らの本当に演りたかったものは何だったのであろうか。（中島）



DARIO BALDAN BEMBO
Piccolina
Week End
'78
●CIV ZBC 7065

名作「Migrazione」発表後の作品である本シングル、Bembo自身が作詞・作曲・アレンジを行っている。基本的には「Mi～」の延長上のサウンドであるが、LPの魅力を凝縮させたかのような感動的な高揚感に満ちた名曲である。可憐な女性のスキャットにはじまるイントロから、感情を押さえたBemboのヴォーカルがからみ、一気に雄大なサビに突入していく構成は見事の一言。この曲に文句をつけるイタリア歌ものファンがいたらお目にかかりたいものだ。それほどまでにこの曲は僕たちが求める要素、つまり、シンフォニックなアレンジ、美しいメロディー、そして何よりも「愛」を歌う情熱をたっぷりと楽しませてくれる。秋から冬、温もりが恋しい季節に、心を優しく包み込んでくれるような一家に一枚の名作。（長砂）



DARIO BALDAN BEMBO
Da Quando Non Ci Sei
Alberi D'inverno
'85
●CGD 10600

イタリアン・ポピュラー・ミュージックには切っても切れないアレンジャーの存在。そのアレンジに新風を吹き込んだ一人。しかも、それが洗練されたものながらも、この上なくイタリアの香るものだったところに、この人の持ち味がある。'70年代に何枚かのアルバムをも残して、胸のすくようなアレンジと歌、キーボード・プレイを聴かせてくれるが、このシングルも等しく彼らしいものだ。目のさめるようなあのキーボード・オーケストレーションこそないものの、ナイーヴさの混る余韻を引くようなヴォーカルとソフト・タッチのピアノを中心にとてもさりげない。特にB面は傑作「Migrazione」のB③"La mia Casa"に似た独特の音運びがあって、なごむようなイメージ、春が香るような曲想が心憎い程だ。（松本）

D



DARIO BALDAN BEMBO & CATERINA CASELLI
Amico E'
Cammina, Cammina
'83
●CGD 10445
○
◉

'70年代からセッション・キーボードとして、又自らもソロ・アーティストとして活動をして来たダリオの、「SPIRITO DELLA TERRA」からのシングルがカテリーナ・カセッリとのデュエットに変更しているのだが、このシングルの話題は何と言ってもカテリーナの方にある。'70年代後半に歌手を引退したと言われた彼女が、ここでしっかりと存在を知らしめている。TV番組「SUPERFLASH」のテーマ曲とあるが、地中海音楽の雰囲気とサンレモ的味わいの有るほのぼのとした曲である。尚B面の方はクレジットに「coro Spirito Della Terra」とあるが、このコーラス隊こそがイ・プーである事はあまり知られていない。イ・プーの数少ない外部での仕事の中でもベストの、本当に美しいコーラスを聞かせてくれる。　（片山）



DE DE LIND
Mille Anni
Ti Devo Lassiare
'70
●Mercury 6227001
○
◉

デビュー・シングルか。両面とも自作曲、アルバム未収録。どちらもビート・サウンドの域にあるものの、後々を予感させるトーンや曲作りの面白さがある。元気のいいビートにまるで"太陽に吠えろ"エレキ・ギターのリードが入ってきて臭くなるA面は、それでもサックスやフルートが特徴づいている。もっと面白いのは、ストリングスの使い方で、オーケストレーションにはならず、バッティアートか"Glass Onion"（ビートルズ）の薄気味悪さか、といったコラージュとも言っていい効果をあげている。この頃から何か変だ。B面は落ち着きのあるナンバーになっていて、フルートも更にフィーチャーされている。たかが何分かの収録にしては、アイディアの盛り込みを感じさせる。それも'70年の事と思えば。　（松本）



DE DE LIND
Signore Dove Va?
Torneremo Ancora
'71
●Mercury 6047003
○
◉

表情豊かなvito Poradisoのボーカル、シンプルでヘヴィーが其処彼処にイタリア的詩情を織り込んだサウンドをたっぷりと聴かせてくれるDe De Lindの唯一のLPには不思議な存在感があって、妙に引き付けられてきた。そうした彼等のサウンドの萌芽が窺えるのが、'70年のシングル「Mille Anni/Ti Devo Lasciare」とこのシングルだ。両面共に語りとも唄ともつかないVito Paradisoのボーカルと翳りを伴った躍動的な演奏（あの唾吹きフルートも頻繁に顔を出す）が奇妙な調和を見せている。シングルである為、多少のポップさはあるもののその積極的な音作りは、イタリア・プログレの先駆的グループとして充分評価出来る内容である。　（鈴木伸一）



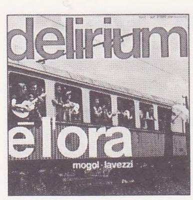
DELIRIUM
Canto Di Osanna
Deliriana
'71
●Fonit SPF 31284
○
◉

デリリウムのデビュー・シングル。A面はフェスティバル参加曲で、オムニバムアルバム「Nuovi Compressi D'Avanguardia」にも収録されている。この曲は商業的にも成功し、彼らは一躍注目される様になった。オザンナが、この曲をヒントにチッタ・フロンターレからオザンナへと改名したと言うエピソードも知られている。曲自体は、フォーク・タッチのポップ・ナンバーで、とり立ててどうこうと言った所は無い。むしろ曲としてはB面の方が、デリリウムらしいジャージーでクセのあるサウンドを聴かせており、この時点で概にオリジナリティが確立していた事が伺える好ナンバーである。この後、彼らはこの路線でメジャー・グループへと成長して行くことになる。　（中島洋一）



DELIRIUM
Jesahel
King's Road
'72
●Fonit SPF 81293
○
◉

デリリウムは3枚のレギュラー・アルバムの他に僕の知りうるかぎりでも9枚はシングルをリリースしている。71年から75年の間にリリースされているが、それらのほとんどはLP未収録曲である。本作品もその例にもれず、両面未収録曲で、ことにB面は彼等の全作品中、最もプログレッシヴで叙情的なナンバーである。インストゥール・ナンバーであり、もの悲しげなピアノがメロディーをとる前半部から、ややジャージーなアドリブを展開する中間部（やはりピアノがメイン）、そしてためにため込んだ後に登場するメロトロンの洪水と力強いシンフォニック・サウンドである。イタリアの重鎮でありながら遂に国内盤がリリースされずじまいのデリリウムであるが、彼等はオリジナリティーあふれる良質なグループである。　（今）



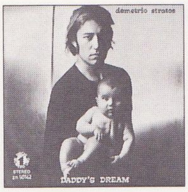
DELIRIUM
Treno
E' L'Ora
'72
●Fonit SPF 31330
○
◉

デリリウムはデビュー当時、イタリアの哀愁を唄うバンドとして日本人にも受け入れられる音楽を演奏していたが、それは多分にリーダー格でほとんどの曲を書いていたイヴァノ・フォッサーティによるものと考えても良いだろう。民謡の様なメロディーや独特のフルート等、フォッサーティならではだ。「CANTO DI OSANNA」「JESAHEL」「HAUM!」等、シングルのほとんどがＬＰ未収でどれも名曲である。本作はフォッサーティがバンドを脱退する直前のシングルでやはり両面共ＬＰ未収である。Ａ面はＴＶ番組「IL SUO NOME PER FAVORE」のテーマとあるが、相変わらずのドタバタ・リズムとメロトロンと民謡という妙に懐かしい曲で、Ｂ面はMOGOL-LAVEZZIの曲を哀愁たっぷりでプログレッシヴに盛り上げている。　（片山）



DELIRIUM
Signore
Buana, The Rainbow
'74
●Fonit SPF 31313
○
◉

'74年3枚目のアルバムを発表したデリリウムは突如本作を発表、両面共LP未収である。A面はシングルにしては珍しくプログレッシヴでドラマティックな展開を聞かせている。リード・ヴォーカルを新加入のサルバトーレ・ディモポリが担当している事も影響しているのか、ブリティッシュ・ロック寄りのサウンド、派手なオルガンに女性コーラス隊の起用等、新境地を見せている。B面はお得意のドタバタ・リズムによるややジャズ・ロック調のインストに女性コーラス隊が絡む。デリリウムはこの後も活動を続け、「LEOA DE LAOA/PANE VERO VINO PURO(AGUAMANDA AG9002)」、「JILL/LIVE LOVE AND BE FREE(AGUAMANDA AG9007)」、「COWBOY/CORRI BAMBINO(CETRA SPB36)」を出した後解散したものと思われる。 (片山)



DEMETRIO STRATOS
Daddy's Dredm
Since You've Been Gone
'72
●
○
◉

デメトリオ・ストラトスはヒューマニストであったのだと思う。アレアの時代に肉声の限界に挑戦したりしたのも彼の人柄によるものだと僕は思う。アレア結成以前の彼のルーツはブルースだ。それも黒人による心の中から沸き出るブルースを愛していたに違いない。このシングルに聴けるサウンドも黒人のそれに近づこうとするデメトリオの心が透けてみえる。人は笑うかもしれないが、僕はアレアでのデメトリオとこのブルースは質的に同格のサウンドだと思う。共にデメトリオの心の叫びが聴こえてくる。ミュージック・アマルガムの様相を呈したアレアだが、その根底には人間のぬくもりが流れている。その心が彼等をやむなく共産主義へとむかわせたのだと僕は信じたい。 (山崎)



(IL) DIARIO
Piccolo Pierrot
Cristalli
'78
●Up UP 10.028
○
◉

いわゆるラブ・ロックサウンドではあるが、一言では方付けたくない素晴らしい出来のシングル。かつて人気を集めた、ボッテガ・デラルテ、ジャルディーノ・デイ・センプリチと同等あるいはそれ以上の資質を感じる。ぜひともLPの存在が確認されて欲しいものである。A面はヴォーカルナンバー。短かいイントロに続く美しいメロディーのヴォーカルパートにチエンバロが加わってくると私などは簡単に納得させられてしまう。ヴォーカルの声質及びアレンジも申し分がない。更にB面は曲は短いものの哀愁のインストゥルナンバー。単純な曲創りだが、メロディーの美しさが際だっているし、しっかりと曲に起伏をつけているので、まずは文句なし、現在のところ別のシングルがあるかどうかも私には分からない。 (杉原)



DIETRO NOI DESERTO
Dentro Me
Aiuto
'71
●Decca C 17017
○
◉

JACULAの結成以前にANTONIO BARTOCCETTIが在籍していたグループ。編成は4人でサウンドの要はボーカルも兼ねるオルガニストのLUCIANO LUCAと作曲、ベースのANTONIO。両面共に単なるオルガン・ロックの域を出ず、聴くべきものは殆んどない。所謂コレクターズ・アイテムであり、後に開花するANTONIO BARTOCCETTIの非凡な才能は未だ混沌の中に埋もれていたのだろう。蛇足ながら、ジャケットの美しさだけは、特筆ものである。 (鈴木伸一)



(I) DIK DIK
Vivo Per le
Dove Vai
'70
●Ricordi SRL 10. 613
○
◉

やはり実績と知名度というものは自然と後についてくるものなのか、と納得させられるシングルだ。'70年の録音その古さもいい方向に向くというのもその証明か、というシングル。これが'70年ということを考えると、「Volando」というアルバムは、彼等のながい活動の中から磨かれてきたピュアリティだという気がする。こちらではオルガンや、一瞬「洗濯女」を思わせるピアノ等、ストリングスにしても古めかしいに過ぎず、歌の芯は何一つ変っていない。むしろ今となっては古めかしささえもカラーに感じられる。メロディ・ラインの特徴あるつなぎにまたしてもイタリアン・カラーの良質さを嗅ぎとれるA面、静けさのあるB面ともに佳作。A面の盛り上がる曲調にさえどこか内省さがある。そこが持ち味。 (松本)



DOLCE STIL NOVO
Un Anno Un Mese Un Giorno
Il Tuo Dolce Ritorno
'76
●Erre RRN 13012
○
◉

ドルチェ・スティル・ノーボというグループはシングルを数枚リリースしている、イタリアにはあまたいる平均的なラヴ・ロック・グループの1つ。しいて彼らの特徴を挙げるとすれば、演奏力がロック・グループ並にしっかりしている事と、ボーカリストがボッテガ・デラルテに似ていて好みという事だろうか。ただ、このシングルの"Un Anno Un Mese Un Giorno"というナンバーは格調高い室内弦楽アンサンブルが加わり、仲々の秀品である。100や200ではきかないくらいの天文学的数字の様に存在するラヴ・ロック・グループ。当時のイタリアは日本のGSブームどころではなかったんだろうなァー。PS.ドルチェ・スティル・ノーボというグループは美しい響きで好きだなァー (N.Ueno)



(I) DOLCI PENSIERI
E' L' Eta'
Silvia, E Poi
'76
●Yep 00671
○
◉

ラヴ・ソングといった古臭い言い方では済まされないイタリアの歌の世界でも、このシングルのA面は特に甘い。甘いと言うよりも、まどろむようにおぼろげだ。ここまで来た歌物というのもあまり記憶がない。女性ヴォーカルがコーラスふうに入っていて、キーボードがゆったりとオーケストレーションをとるその一部に男性ヴォーカルが乗る。果たしてバンドなのだろうかと思ってしまう程危い。流れているだけといった印象さえする。その点ではジャケットのイメージそのままだ。B面になると多少バンドらしくなる。それでも基本的な趣は変らない。これを夢見るようなと感じるか、イタリアの歌物のうわずみと解釈するかは別としても、そのどちらをも含めた傾向が、もはや特徴になってはいる。（松本）



DON BACKY
Sognando Fumo
Via Marconi 44
'73
●Love　9000 102
○
◉

1939年中部イタリアのサンタ・クローチェ生まれ。本名はギャングと同じアルド・カポネ。ロックンロール歌手のアドリアーノ・チェレンターノにスカウトされた。後にバッキーの作った曲をチェレンターノが横取りして裁判になり別れた。彼の作った曲は多くの歌手によって歌われ、サンレモ音楽でも常連だった。バッキーの歌はブームとなったが、それが収まった72年頃からは目立ったヒットもなくアルバムを出さなくなった。当シングルを出した頃は最も苦しんでいた頃で、内容も暗いものだ。ただし、ヒットを狙ったものではなく、カンタウトーレの曲として個性的な曲として認められるべきものである。この後に自己のレーベルを設立し、アルバムを出すようになり現在に至る。（HIRO TANAKA）



EDIZIONE STRAORDINARIA
Distrazione
Continua A Vestirti
'76
●Hello ZEL 50493
○
◉

全体にストリングスが被さってはいるが、ハモンド・オルガンのアナログ・トーンが利いている歌物だ。そしてナルシスティックな声質のヴォーカルに特徴がある。A面ではこの声で力をふりしぼるかのように歌うので、歌物としてはインパクトのある方だろう。この二つの要素で、もう少し古い時期のシングルのように思えるが、'76年だ。今一つどこかスマートではなく角っぽさがある。そこが目立つ。ジャケットを見れば、そう言えば5人の顔が浮き上がるこの図は、ビートルズを真似たのだろう。なるほど、A面のサビの所での強い歌い方は、〝ツイスト＆シャウト〟張りだ。そこでイタリア流のメロディ・ラインなのだから、印象を残すには上手い作り方だと思う。少し辛口の歌物。（松本）



ENZO STAVOLO
Fiaba Popolare
Mater
'78
●BCE PO 4942
○
◉

エンツォ・スタヴォーロには1枚のLPと2枚のシングルが確認されている。（もう1枚のシングル〝Amo/Dimmi Tu〟(BCE 34600)はLPからのカットでジャケットもLPに同じ）。さて内容だが、いわゆるカンタウトーレであって、国内盤がリリースされていたGRUPPO2001を想わすような清涼感のあるヴォーカル、バロック調のアレンジをほどこされた演奏が一体となり極めてイタリア然とした雰囲気をかもし出すことに成功している。ことに生の弦楽器とメロトロンを併用したバッキングがなんとも絶妙なアンサンブルを聴かせてくれる。A、B両面共好作であるだけにLPがリリースされているとすればそれにかける期待は非常に大きいといわねばなるまい。数あるカンタウトーレの中でも出色の一枚。（山崎）



EPOCA
Volerai Volero
Volerai Volero (Orchestrale)
?
●Universal International Music
50901 156
○
◉

闇の仕掛け人Giacomo Simonelliが関わっていたEPOCAの残した2枚のシングルの内の1枚。発表年が分らないのだが、まるで靄に包れた様なストリングスと、それにかぶさるシンセサイザーに、夢見心地なコーラスワークが、この作品の魅力を裏付けている。B面は、もう1枚のシングル「Svegliandomi」と同様A面のインストで眠気まなこラブロックを一層際立たせている。この浮遊感に満ちたサウンドもまた個性だ。もしアルバムがあれば、私は確実に眠りにつくでしょう。（木下）



EQUIPE 84
Sogni Senza Fine
Meditazione
'?
●Arinton AR 00682
○
◉

エキペ・オッタンタ・クアトロはLP6枚と多数のシングルを70年代に残したが、基本的にはポップス・グループである。しかし73、74年頃の彼等は他のポップス・グループがそうであったように一度はプログレッシヴ・ロックの影響を受けた時期があった。LPでいえばSACRIFICIOであり、シングルでは本作品あたりが一番、プログレッシヴな内容ではないだろうか。本作品は両面ともメロトロンを大幅に導入して、曲構成こそ単純ではあるがメランコリックなムードを出しており、情緒あふれる見事な仕上がりである、プログレッシヴ・ロックがイタリアで隆盛を極めたこの時期にはポップス・グループまでもがそのイディオムを吸収して百花爛漫であったのだということを想い出させる一枚。（今）



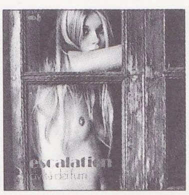
ERA DI ACQUARIO
Hold On
Oampagne Siciliane
'72
●RCA PM 3686
○
◉

'73年に1枚のアルバム「Antologia」を残しているエラ・ディ・アクアリオのセカンド・シングル。ちなみにもう1枚のシングルは「Geraldine/Arabesque」(RCA PM 3650、'72)。A面の〝Hold On〞がアルバム未収録。B面はカット。それはあの物静かなアルバムを知る人なら、すぐ様、未収録だとわかる。似ても似つかぬアップ・ビートのポップス。女性ヴォーカルがリードしてロックン・ロール張り。でも作曲者はリーダーのミケーレ・セファーだから、きっとエラ・ディ・アクアリオなのだろう。B面はアコ・ギ、フルートを活したみずみずしい響きで、シシリー島パレルモのバンドらしくタイトルも見てのとおりだから、やはりエラ・ディ・アクアリオだ。(松本)



(GLI) EROS
Amanti Noi
Senza Lei
?
●SIRIS QCS 5001
○
◉

イタリアン・サウンドとは逆に、こちらは女性2人に男性1人の3人組。とにかくメロディーがよい!大甘のストリングスが全編に配された典型的ラブロック。この手の音楽は何よりもまずメロディー・ラインが魅力的でなければならないことを教えてくれる。B面の間奏での語りもまるで映画のワンシーンだ。この手の音楽が巷にあふれたら犯罪はなくなるかな?しかし、労働意欲もなくなるな、きっと。(木下)



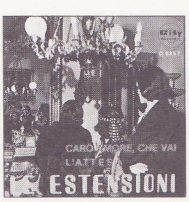
ESCALATION
Civilta Dei Fumi
La Valle Di Brigadoon
?
●Rex 70 r.n.p.015
○
◉

ラベルのはっきりとした〝Stereophonic Sound〞の正し書きと、盤の重さからして、'70年代前半か中頃か。ジャケットの印象からストリングス漬けのイタリアン・メロディを想像しがちなこのジャケットは、予想に反してロック・バンドのものだ。シングル盤短かしとオルガンやドラムの動きが激しい。それにもまして女性エコー・コーラスを伴ってメタモルフォシ時代のダビデ・スピタレリ張りに力強く迫るヴォーカルが、シングルに収めるには惜しい。繰り広げる内容の音楽だ。それも暗い。従って重い。熱気がある。このヴォーカリストは個性が強そうだ。ギターが力量不足だとしても、シングルでこれくらい特色を出せていれば、相当なものだろう。曲のクレジットにはM.Barabino、R.Carboneと有る。(松本)



(GLI) ESSERI
Il Corpo Di Una Madre
Un Mave Di Tranquillita
'72
●Picci LG 1001
○
◉

Picciレーベル記念すべき第一弾シングル。〝Il Corpo Di Una Madre〞は冒頭生ギターの爪弾きに期待するもののその後は賑やかなまま終ってしまうハード・ロック。〝Un Mare Di Tranquillita〞はモノトーンに統一されたヘビー・プログレの秀作。抑揚の無いボーカルにまるで闇の淵から湧き出るようなコーラスと無表情なピアノの音色が纏わり付くサウンドはひたすら暗く、絶望と虚無に覆い尽されているかのようだ。LucchettiとCassiaなる人物が、作詩・作曲、プロデュースを担当。両者共にSeconda Genesi, Oskar Lindok & His FriendsあるいはOfficina Meccanicaのデビュー・シングルでもその名を散見する事から、同レーベルの重要人物であったと推測出来る。(鈴木伸一)



(LE) ESTENSONI
Caro Amere, Che Vai
L'attesa
?('71〜'73)
●City C 6257
○
◉

ジャケットに後向で写っている男性4人がメンバーであろうと思われるが、他の詳細については全く謎。これだからシングルのみのグループは困る。編成は、ヴォーカル、ギター、ベース、ドラムの他にフルート、オルガン、ストリングス、ハープで正式メンバーが何を担当しているか不明であるが、曲の方はAB面とも素晴しいできである。A面はフルート、ストリングス、オルガンがからみながらゆったりと始まり、ヴォーカルも同じペースで加わってサビで一気に盛り上がるラヴ・ロック調の曲。B面はうって変わってヘヴィーシンフォニック・ロックの名作となり驚く。ギター、フルート、オルガン、ストリングスが一体となって盛り上がって行く様は。歌メロも秀逸。LPはどうなっているの?(六井)



(LA) FABBRICA DI STELLE
Quando Un Amore
Un Attimo Per Noi
'77
●Ricordi SRL10845
○
◉

星の工場というファンタジックな名前をもつラヴ・ロック・グループ。4枚のシングルを確認している。2枚は未聴の為何とも言え無いが、本シングル、1980年にCiawから発表された「Bnan Compleanno/Anna」の両シングルとも素晴らしいラヴ・ロックを聞かせてくれる。タイプとしてはジャルディーノに近いのだが、ヴォーカルがジャルディーノの様にハイトーンでは無い。但し、一級品のメロディを作るグループであるが、不幸なことに'77年から'80年というのは、世界中を巻き込んだディスコ・ブームであった。ブームの影に隠れ消えてしまったグループに合掌。(長谷部)



(LA) FABBRICA DI STELLE
Primavera Britannica
Come Va
'81
●Itaca 001
○
◉

「Buon Compleanno/Anna」に続く4枚目のシングル。'77年、リコルディよりの「Quando Un Amore」が彼らの最高作だと思うが、こちらも、もちろん方向性は変っていない。ただし、時期的な事柄なのかレーベルの規模からの事なのか、スケールが少し小さくなった気がする。どちらかというと前作シングルを引き継ぐ傾向にある。もう少しオーケストレーションが欲しかった気もするが、もともとボッテガ・デッラルテのように自分達の演奏によるバンドなので、その点では当シングルのA面曲の方がカラーが出ているかもしれない。ヴォーカルもグッと甘く、kbdによるファンタスティックな脚色もより強い。4枚の中では最も演奏にひきしまりがあり、グループ名のイメージする所を突いている。 (松本)



(LA) FAMIGLIA DEGLI ORTEGA
Awamalaia
Sogno Di Una Casa
'73
●Carosello Cl 20347
○
◉

LP一枚、シングル2枚をフォニット・チェトラ傘下のカロセッロ・レーベルに発表し消えていったバンド。1972年にジェノヴァ・ポップ・フェスティバル、サンレモ音楽祭に参加し、メジャー・デビューのきっかけを掴んだ。1973年にLP・本シングルを発表し、翌年シングル「Stanlio E Ollio/Una Vecchia Corriera Chiamata」を発表する。本シングルA面はバンドの方向性とは異った、少々プログレシッブな作り。リヴァーブの掛ったギターとピアノをバックに女性ヴォーカルが淡々と歌ってゆきコーラスの絡み、サビで一気に男性ヴォーカルが入り盛り上がる。但し基本的に歌物バンドの為、怒涛のごとくとは言えないが、満足していただけると思う。 (長谷部)



FEDERICO TROIANI
Lupo Solitario
Tarantella
'77
●RCA PB 6014
○
◉

レアーレ・アカデミア・ディ・ムジカのキーボード演奏、フェデリコ・トロイアーニが、ソロLP「Strada」に先がけて発表したこのシングルは、レアーレ・アカデミア・ディ・ムジカの蘇生を思わせる貴重な1枚。特にB面「Tarantella」には、ただただ驚嘆あるのみ。深遠かつ幽玄なピアノの音色に導かれ、物悲し気なメロディー・ライン、唄心充分なボーカルそして華麗にしてダイナミックな演奏が交錯する様は、正しくあのレアーレ節の再来。イタリアン・プログレ・ファンを満足させうる名曲・名演である。 (鈴木伸一)



FEDERICO TROIANI
O.E.
Le Luna Sul Treno
'83
●General Music GM 30008
○
◉

彼が参加した最初のグループ、フォルクスは'68年に結成され、ジミヘン・スタイルのものをローマのティタン・クラブを中心に演っていた。'70年にエクイプ84のヴァンデッリの協力でシングル・デビューし、翌年は英詞によるアルバムも録音したが発売されなかった。その後はグループ名をレアーレ・アカデミア・ディ・ムジカとしてようやくアルバムを出すことができた。最も目立ったのが彼のキーボード・プレイで、グループ解散後のシングルも傑作。スタジオ・ミュージシャンとして活動するが自己のアルバムも発表を続ける。ソロになってからはポップス性が強く、彼の特徴にでもある。当シングルも彼の個性を生かしたもので、ラジオ番組の主題歌として使用された。O.E.はオリエント急行のこと。 (HIRO TANAKA)



(I) FHOLKS
Mi Scorri Nelle Vene
Cerchi
'70?
●Ricordi SRL 10621
○
◉

'68年にローマで結成された5人組。唯一このシングルをリリースしたに止まったが、メンバーには後にレアーレ・アカデミア・ディ・ムジカを結成するFederico Troiani(kbd)とルオヴァ・ディ・コロンボへ参加するRuggero Stefani(ds)を抱えており、バレット・ディ・ブロンゾ、RDM系の音になっている。トロイアーニのとオルガンがいい味つけをしている上に、リズム・セクションもまとまっていて、更にエッジの立つトーンのギターが冴えている。ヴォーカルもそつない。アルバムを聴いてみたかったバンドだ。'70年にして、しかもシングルで、これ程の特徴が出せるのだから相当なものだ。A面はアイアン・バタフライのカヴァー、B画はマウリッィオ・ヴァンデッリ作。非常にセンスが良い。 (松本)



(I) FIORI
Miraggio
Compro Tanti Soldi
'71
●RRC RN 021
○
◉

RRC(正式にはRoman Record Companyと言う)と言えば、かのFabrizio De Andreの初期の作品をリリースしていた謎のレーベル。ここに紹介するI Fioriなどグループについても、詳しい事は何一つ解らないのだが、内容の方は非常に良い。特に〝Mirragio〞は、美しいピアノに導かれて、切々としたボーカルが哀し気なメロディーを唄い上げる名曲。バッグに従うオルガンやイタリア然としたコーラスが弥が上にも感動を掻き立ててくれる。Alunni Del Soleの最良の部分を抽出したような若々しい輝きと古風な情趣が清々しい。 (鈴木伸一)

F



(I) FIORI DI CAMPO
Fuori Citta'
Due Bambini Nel Cortile
'70
●Apollo ZA 50014
○
◉

1968年～74年まで活動していたグループ。1970年にナイスの〝The Thoughts…〞をカヴァーした当シングル「Fuori Citta」をリリースした後、BASFレーベルを仮契約してアルバムとシングルを制作する予定であったが、野外ロック・フェスティバルなどで共演していたバンコにギタリストのマルチェロ・トダーロが誘われて、グループを脱退してしまい、解散へ追い込まれてしまった。音の方はいかんせん、ナイスのカヴァーなので、彼らの本当のサウンドを知るには充分ではないが、乱暴な言い方をしてしまえば、歌はビートルズ、演奏は〝ダサイ〞オルガン・ロックといった具合であまり、かんばしくない。やっぱり、トダーロさんが、バンコに加入したのは正確だった様で…。 (N.Ueno)



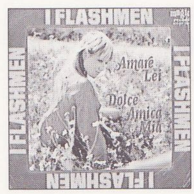
(I) FLASHMEN
Una Parola
L'incertezza
'70
●Kansas DM 1133
○
◉

かなりの数のシングルを発表していると思われる彼らの1stアルバム発表当時のものと思われるシングル。彼らのサウンドは基本的にはプログレッシブと言えるようなものではなく、初期はビート・ロック、後期はラブ・ロックと言ってしまっても誤まりではないように思う。しかしながらキーボード系はかなりの励張りをみせるために我々の心をくすぐるのではあるが。このシングルは年代からして、かなり古臭い音ではあるのだが、A面で聞けるオルガン・ワーク等は、後の彼らの代表作「Pensando」を思わせるものが有り捨て難いものである。 (杉原)



(I) FLASHMEN
Guarda
Mes Amis
'72
●Kansas DM 1157
○
◉

3rd「Pensardo」の頃の未収録シングル。フラッシュメンというとロックと歌物とを掛け渡しするバンドとして、カマレオンティやUT等に似たところがある。この手はややもすると中途半端になりかねないが、UTのようにその掛け渡しを独自のカラーに染め上げたケースもある。音のタイプこそ違えど、フラッシュメンもこの頃は両立して独自のカラーを放っていた。その典型的なシングルがこれである。特徴として荒いトーンの少しエッジの立つキーボード・トーンを多用する彼等のカラーが両面に渡って聴ける。A面はヴォーカル入り、B面はロック色のあるインスト・ナンバー。角のあるサウンドはイタリアン・ロック全盛時にふさわしい迫力を感じさせる。彼等の数有るシングルの中でもカラーの強い1枚。 (松本)



(I) FLASHMEN
Amare Lei
Dolce Amica Mia
?
●Magic MR NP 1000
○
◉

少し整理しておこう。彼等のシングル計10枚中、未収録は4枚、「Il Mondo Aspetta Te/La Donna Che Ho」(Decca C 17005, '69)、「Guarda/Mes Amis」、「Piccolo Amore/La Stagione Dei Fiori」(Joker M 7190, '75)そして本作。アルバムについては1st「Cercando La Vita」に3rdシングル「Puoi Dirmi T' Amo/Un Anno Nero」の2曲を加えたものが2ndアルバム「Hydra」。ただし1stから2ndへの間一部ヴォーカリストが交代しており、そのパートのみ録音し直されている。さてこのシングルだが、録音年度が不明。10番目のシングルという説が強い。後半のアルバムでは曲の良し悪しの差が激しかったが、「Puoi Drmi～」と共に本作は瑞々しさの漂う歌物に仕上げられている。好作。 (松本)



FORMULA 3
La Folle Corsa
La Folle Corsa
'71
●Numero Uno ZN50.115
○
◉

フォルムラ・トレは多数のヒット曲を出したグループであるからして当然シングルの数も多い。しかしそれらのシングルの中でも最も話題性のあるのがこのシングルである。両面を通して一曲という異色の作品でライヴ・レコーディングである。71年であるから2ndアルバム頃の作曲で、アルベルト・ラディウスのヘヴィーなギター・ロック、ラフなガブリエレ・ロレンツィのオルガン・トーン。ホットなトニー・チッコのドラミングとライヴ演奏の熱いムードを良く伝えた好盤。演奏はアート・ロック的なヘヴィーなものである。他にもソニャンド・エ・リソニャンドの別テイクというような話題シングルもあるが、こちらのほうは彼等のベストに収録されているテイクなので今でもなんとか入手できるだろう。 (今)



FORMULA 3
Nessuno Nessuno
Eppur Mi Son Scordato Di Te
'71
●Numoro Uno ZN 50117
○
◉

フォルラ・トレを集約するなら1stが〝Dies Ires〞,2ndがこのA面曲、3rdがアルバム・タイトル曲、4thが〝Rapsodia Di Radius〞、この線で落ち着くと思う。〝Nessuno～〞はアルバムでは10分を超える収録になっていて、〝Dies Irae〞のインパクトを2作目に伝える要の曲でもある。重いドラムと唸り上げるオルガン、ギターのトーンがとにかく粘つく。ヘヴィ。メジャー・イタリア初の本格的なロック・バンドらしくとても熱っぽい。シングルはアルバム・テイクの前半をカットしたものだが、彼らの流れを見る上ではずせない曲だ。記載外のアルバム未収録シングルとしては他に「Questo Folle Sentimento/Avevo Una Bambola」と「Io Ritorno Solo/Nananano」がある。



FORMULA 3
Sognando E Risognando
Storia Di Un Uomo E Una Donna
'72
●Numero ZN 50148
○
◉

最もプログレッシヴな作品として評価の高いフォルムラ・トレのサード・アルバムからのカットである本シングル。しかし、A面Sognando e RinognandoはLPとは別テイク。どちらかといえばこちらのほうがスリリングなテイクに仕上がっていて出来は良いと思う。このテイクは後にヌメロ・ウーノ・レーベルからリリースされた彼等のベスト・アルバムに収録されているものと同テイクである。フォルムラ・トレが従来のサウンドと、当時流行したプログレッシヴ・サウンドを非常に高いレベルで結合させた珠玉の名作ということができると思う。テクニック云々という壁を越えて、今、尚、良質のグループであったと僕に確信させる、素晴らしいロック・ユニット、フォルムラ・トレの名シングルである。（山崎）



FORUM LIVII
Space Dilemma
Homesick
'72
●Mimo ZM50199
○
◉

ミノ・レーベルからシングル2枚リリースした(LPがあるという説もあるが筆者は未だ見ていない)フォルム・リヴィは70年代前半に活動していたグループである。ヘヴィーな部分とプログレッシヴなアイディアが交差するプログレ=ハード路線のグループで、このシングルから全てを推測するのは余りに危険であるが、おそらくライヴではノリの良いホットな演奏をしていたものと思われる。ギター、ベース、ドラムス、キーボードの編成でメインになるのはやはりギターである。A面が様々なアイディアを盛り込んだ仲々の曲で、B面はブリティッシュナイズされた完全なハード・ロックの曲。イタリアにはまだまだシングルのみで終わったバンドの名盤が埋もれているようである。（今）



FRANCESCO RINALDI
Introspezione
Gedeone
'75
●Ariston AR 00667
○
◉

Francesco Rinaldiというカンタウトーレについて、今のところこのシングル以外何の知識も持ち合わせていないのだが、彼独特の粘りと濃のある歌唱は深い味わいを感ずる一級のものである。ギター、女性コーラス、バイオリン等をバックに重く引き摺るように歌われる〝lutrospezione〟、ギター、フルート、女性コーラスが、幽玄な静のパートと躍動的なパートを交錯させる中、彼のボーカルが呟き、呻く〝Gedeone〟共に訴求力の強いボーカルが最大の魅力だが、バックの演奏も当時のプログレッシブな精神を踏まえたサウンドで見事な引き立てぶりである。特に〝Gedeone〟はイメージとしてアラン・ソレンティの〝アリア〟を思い出してしまう。（鈴木伸一）



FRANCESCO SALE
Per Tornare Insieme A Te
Solo Se Potessi
'78
●CBS 6727
○
◉

このフランチェスコ・サーレというシンガーは、低音の少しかすれた声をしていて中々雰囲気がある。シングル1枚を取り出して云々というのも無理があるが、彼のどちらかと言えば地味な歌声のおかげで、ありがちな曲調もひきしまって聴こえる。両面とも曲自体は練られていて演奏もタイトだ。A面はグロッケンシュピールによるワン・フレーズがアクセントとして何度か出てきて、サーレの歌が全体を盛り上げていくのが特徴。熱気が入ってきても、声質の為か渋さがあって落ち着きがなくならない。甘味に飽き気味な時にはいいかもしれない。この人は曲を選べば、うまくそがれた雰囲気を出せるタイプだと思う。小粒だとは思うが、捨てられない味のあるシングルだ。（松本）



FRANCO BATTIATO
Bella Ragazza
Occhi D'or
'69
●RT Club RT 1563
○
◉

'60年代中頃から歌い始めたバッティアートが、イタリアン・アヴァンギャルドに立ち入る以前の貴重な音源。自身の作曲によるA面のバッティアートゆえに目のさめるようなオーソドックスな歌物がブラブラを打ち貫くがごときまばゆい? 写真映りからすると知的な若僧なりが、まるでヴェルヴェッツ張り。その行方はB面に追える。妙なオーケストラ・パートからティンパニの大仕掛、軽音楽ドラムにピアノがクラブ流れ、彼のヴォーカルもブラブラ前夜、後半からはエコーもかかってサイケデリックなギター・ソロも響いているし、シンバル音はイコライジングに逆回転、とバレットもジョン・ケイルも真青なイタリアの胎動が早やここに。早熟な人だ。そう言えば肩の辺りに妙なマンダラも見える?（松本）



FREE LOVE
Sandy
Ii Tempo Di Pietra
'70
●Vedette VVN 33190
○
◉

グループ名が1回転半した今となっては現代的だったりするから恐い。もちろん、こちらは現役?の'70年。当時の英米オルガン・ロック、ビート・サイケの亜流と言えそうだ。A面のハモンド・オルガンを活かしたメロディアスなナンバーなど、そのまま'70年という趣き。B面になると更に切れ味鈍くビートも強い。特にA面が雰囲気あって、ミニ・スカートの長い髪の女の子〝Sandy〟(ホントか?)のことを切なげに歌う哀愁感がハモンド・オルガンに彩られて狂おしい、と相場も決まる。たっぷりと時代にひたれる好ナンバーだろう。バンドはもう1枚のシングル「Roy Colt/Dove」(Cinevox MDF 019、'70)を残している。こちらはサントラ。更に更に鈍く腐りかけか。〝Sandy〟は2ndシングルのもよう。（松本）



FURIO BOZZETTI
Se Fossiio
Celeste
'77
●Cetra SP 1658
○
◉

元SALISのドラマーであるFurio Bozzettiは、Dario Baldan Bemboの「Migrazione」のプロデューサーとしても、その名を見ることができる。「Mi〜」を名盤たらしめたその手腕が、遺憾なく発揮されたものがこの作品といえよう。煌めくないようにリリカルなピアノに導かれ、Fulioのハスキーな声が幼想的なメロディーを歌いはじる。中盤からのストリングスとコーラスによる盛り上がりは尋常ではなく、これほどの厚みと広がりを感じさせるヴォーカル作品というのも珍しいのではなかろうか。包み込まれるような温かさに満ちた名曲といえよう。さてB面だが、こちらもピアノをメインに深い美しさをたたえた素晴らしい出来である。間奏のチェレスタの響きが、タイトルそのままに、透明な秋の空に優しく木霊する。 (長砂)



G. MEN
Sensazione Di Un Mattino
Quando Sono Conte
'72
●Boston BEN-19 '72
○
◉

EDIAレーベルからのLP3枚、シングル2枚が確認されているが、それ以前に、Bostonレーベルからシングルが4枚出ている。その内1枚が両面アルバム未収、他の3枚はB面がアルバム未収、そしてA面はアルバムには収録されているが、なんとテイクちがい。こういう事をされると、本当にマニアはつらいよ寅次郎になってしまう。Bostonレーベルの3枚は(BEM004)「Se Milasci/11 Canto Dei Ragazzi」、両面アルバム未収(BEM10)「Santa Maria/Nei Sogni Miei」、(BEM14)「Tu Sola/Il Ragazzo Di Heidelberg」で、どれも優しく愛を包みこむ様に唄い、微笑ましい曲想、中でもこの曲は、フルートがより一層穏やかさを増し、理屈抜きで素直に「ええ曲やないか!」と思わせる。 (Alessandro Amore　堤野)



G. MEN
Oggi
Riflessioni
'75
●Edia ZE-50286
○
◉

このシングルは、彼らの代表曲である。もちろんほかのラヴロックの名曲群と比べて遜色のない魅力あるものだ。このグループは、どの曲も音が薄くアレンジも中途半端な感じの物が、多いのだが、この曲だけはメロトロンを大幅にフューチャーして、他のオルガンを中心としたキーボード群も大活躍、これ程の曲を作れるのならどうしてもっと他の曲も?と、思ってしまう。エンディングまで何回もリフレインされるメロディーは、フェイドインしていっても、いつまでも頭の中で繰り返される素晴らしい歌メロで、彼らの曲のほとんどを書いているTin Caralliの才能が見事に開花した名曲だ。この後、グループは、'76年に両面アルバム未収のEP「Qualcosae'Rimasto/Tramonto」(EDIA ZE　50288)をリリースする。 (Amore　堤野)



GARYBALDI
Marta Helmuth
Corri, Corri, Corri
'71
●CGD 130
○
◉

ガリバルディのデビューシングル。LP「NUDA」に先立つこと1年、1971年発表。両面ともLP未収で、「NUDA」でプロデュースを担当していたIvo Callegariのペンによるもの。ギターの音はハードであるが、ジミヘン風のフレーズは鳴りひそめており、オルガンの音とマッチした音作りとなっている。A面はビート調の面影の残るポップな曲。B面の方は、静かなオルガンとピアノによるイントロから、ボーカルが入り、リズムが刻まれると重量感のあるギターとハモンドが登場したかと思うとブルージーなボーカルパートへと移る。中間部では、ややクラシカルなギターのフレーズにハモンドがユニゾンで絡み、ブルージーなギターソロも聴ける。71年にしては仲々の出来映えとなっている。 (高橋)



GATTI ROSSI
Il Mondo È Grigio
Non Finisce Più
'68
●Durium CN A 9275
○
◉

ジェノヴァ派カンタウトーレ(自作自演歌手)ジノ・パオリのバック・バンドとして'60年代半ばに活動を始めた。68年にLP(ms a 77194)も発表して、ある程度は知られていた。後にアレンジャーとして活躍するニニ・カルッチを中心とするグループで、72年にはロケッティのリード・ヴォーカルのサンティーノ・ロッケッティを加えてプログレッシヴ・ロックの名曲を発表する。当シングルは彼らしいビートの名残りがあるメロディアスなものでA面はフランスの曲。イタリアではニコラ・ディ・バリがヒットさせた。当シングルもそのヒットにあやかって、ルイス・バカロフに近いアレンジになっている。余談ながら、彼らのようにカンタウトーレと強い結び付きがあったものにピノ・ドナッジョとムュキォがある。 (HIRO TANAKA)



GATTI ROSSI
E Dire Che A Maggio
Se Ne Va
'72
●Philips 6025 076
○
◉

60年代からビート・グループとして活動していた彼等は68年1st LPを発表する。編成はNinni　Carucciを含む4人。サウンドは当時のDik　DikやEquipe 84と同様のもので、Moody Bluesの〝サテンの夜〟なども取り上げている。LP同様シングルもヒット曲路線で大したものはないが、唯一これだけは別格である。両面共プログレッシヴな演奏・展開が極めて魅力的である。特にA面はあのMauro Pelosiの記念すべき1stの名曲で、彼の唱法から完全に離れ、ダイナミックで劇的な曲へと変貌している。高揚するボーカル、華麗なキーボードそして感動的な旋律。全てが我々の感性に訴えかける。真に偉大なる曲であったと再認識させられると共に、最盛期イタリアの底深さを感じずにはいられない。 (鈴木伸一)



GENOVA & STEFFAN
Cosa Farai Di Me ?
Quei Giorni Vanno Via
'77
●Ricordi SRL 10829
○
◉

故ジャン・ギャバンを扱ったTVシリーズの主題歌のようだ。厚目のストリングス・シンセサイザーが流れ続ける中で、デュオの歌が盛り上げたかと思うと、ハーモニカが郷愁を誘う。これがとても印象に残る。映画ファン、J.ギャバン・ファンなら尚更のことだろう。懐かしいような、それでいて晴々とした気分にさせてくれる。'75年に1枚のアルバムを残したこのデュオには少なくとも2枚の未収録シングルがある。1枚がこれ、もう1枚が「L' altro Domani/Anna」(Ricordi SRL 10873, '78)である。両シングルともプロデュースはアルバムに同じくレッド・カンツィアン。当シングルのB面(自作曲)もそれに延長する作風。A面の最初はフランス語で歌われる。好ナンバーだ。（松本）



GENS
Per Chi
Piccolo Grande Amore
'72
●Philips 6025 056
○
◉

'60年代から活動しているGENSが、驚くべきことに、メトロンを使用していた頃のシングル。フィリップスのLPは極平均的ポップスの為、無視されがちな存在だが、このシングルを聴いた後ではそうした彼等のイメージを払拭せざるを得ない。ポップでドラマチックなメロディー・ライン、イタリア的なハーモニー、それらを包み込む重厚にしてダイナミックなメトロンの彼、全てが一つの極点に流れ込む様は圧巻の一語である。他にもこの作品に前後して同傾向の良質なシングルを2、3数えることが出来る。ラブ・ロック、ポップス系のグループにも隠れた名曲が有り得る好例である。（鈴木伸一）



GENS
Anche Un Fiore Lo Sa
La Nostra Realta'
'72
●Philips 6025 072
○
◉

正に驚異的な出来のシングル。彼らのメロトロン使用のシングル3部作中の最大の話題作は、2作目に当たる本作であることに異論はあるまい。もし、このシングルのヴォルテージで、彼らがLPを製作してくれていたら、GIGANTIの「Terra In Bocca」に匹敵するアルバムが完成していたのではと思う。A面冒頭のいきなりの異常な盛り上がりから圧倒される。途中、彼ら本体の歌の部分を聞かせながらも、壮大なメロトロンを織り込んだ展開は正にプログレッシブ。イタリアのシングルに名曲は数多いが、これは最上位する名曲である。B面も良い。A面と同傾向の曲ながら、メロトロンに加えシンセの大胆な導入が有り、よりプログレッシブな印象さえ受ける。両面ともにスケールの大きさは特筆ものである。（杉原）



GENS
Cara Amica Mia
Quella Sera
'73
●Philip 6025 089
○
◉

GENSのシングル中メロトロンの大幅な導入が話題となった3枚のシングルの最終作と思われるのが本作。前作の「Anche Un～」はシングルとしては圧倒的な出来であったため、期待はいやが応でも盛り上がる。実際の出来は前作の派手なシンフォニック・サウンドに比較してかなり地味な印象を与える。しかしながら、聴くほど味わいが増してくるのは彼ら本来の持ち味が充分に出ているように思う。メロトロンにばかり耳を奪われがちではあるが、ここに収められた2曲はアコースティックなサウンドが実に魅力的である。そして何よりもそのサウンドに暖かさを感じさせるのが嬉しい。（杉原）



(I) GENS
Piccolo Grande Amore
Ti Perdono
'72
●Amico ZF 50272
○
◉

耳にした人ほぼ全員が「何で他の曲も全部メロトロンにしなかったんだ」と泣き叫ぶ程(ウソ)、彼らの3枚のメロトロン入りシングルは非常に非常に素晴らしい出来だが、彼らにとってはメロトロンは単にストリングスの代用だった様で、本質的にはストリングスバックのラヴロック・バンドである。で本作は、マニアの思いとは裏腹に、メロトロン入りの曲をストリングスで演り直したもの(メロトロンヴァージョンは4月、本作は11月)。聴いてみると意外に良い出来で、もしやと思いLPを聴き直すとやはり良い。彼らは曲造りのうまいバンドだったんだな、と納得させられる。ややビート寄りの初期('70年頃)のシングルも同様。でもやっぱり全部メロトロンだったら、という空想は止まないが。（森下）



GIACOMO SIMONELLI
Ho Negli Occhi Lei
Per Il Tuo Amore
'71
●Decca C 17016
○
◉

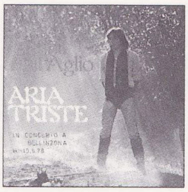
'79年にチェトラから「Inferno E Paradiso」を発表しているG. Simonelliの'71年のシングル。彼は、バレット・ディ・ブロンゾの1stのアレンジと全作品を手がけたことで知られているが、後に全ったく正反対のEPOCAにも関わっている。このシングルは少々古臭い所謂イタリアン・ポップなのだが、バロック風ストリングスがちらっと顔を出したり、ヘヴィーなアレンジを見せたり、B面の出始めがそれっぽく思わせぶりで、そのままつっ走ってくれればと惜しまれる。EPOCAの曲と同じくPinna-Simonelliの共作である。（木下）



GIAN PIERETTI
Io Sono Un Re
Non Dimenticare

'71
●Ricordi SRL 10643
○
◉

Gian Pierettiの3ndアルバム〝Il Vestito Rosa Del Mio Amico Piero〞は詩情と憂愁に包まれた名作で大好きな作品の1枚だが、このLP未収シングルでもそうした彼の魅力を心ゆくまで堪能出来る。〝Io Sono Un Re〞は語りかけるようなボーカルを美しいオーケストレーションが静かに盛り立てる心和む作品。一方〝Non Dimenti Care〞では彼にしては珍しく本格的な歌唱で迫って来るのだが、これが又非常に良い。哀感たっぷりのメロディーを、悲壮感に満ち満ちたオーケストレーションをバックに歌い上げる様は極めてドラマチック。この一曲を聴いただけでも、彼が素晴らしい表現力と確かな実力を備えた一流の歌い手であったことを窺い知る事が出来るのである。 (鈴木伸一)



GIANNI DALL'AGLIO
Aria Triste
Mai Bambole

'78
●CGD C6010046
○
◉

Il Voloのドラマーとして著名な彼も1st LPの「Sono」で名ソング・ライターぶりとヴォーカルを披露してくれた。もともと彼のグループDall'Aglio Sera Mattinoを聴いた人なら分る通り、メロディアスでドラマチックな曲を書ける人なのである。'78年発表されたこのシングルのA面は彼のちょっとたよりないヴォーカルを活かしたラヴ・ロック調のすばらしい曲。女性スキャットが絡むあたりの美しさは彼のファンでなくても気に入ることだろう。この曲その他の聴き所も多いのだが、それはCGDの優秀なスタッフの力によるところが大きいかもしれない。作曲はGianni Bella、G.Bigezziと彼の手によるもので、B面はリズムを押出したポップス調。 (吉瀬)



GIANNI DAVOLI
Amore E Favole
Ragazzina

'78
●Cinevox SC 1110
○
◉

春の息吹きを想わせる温かなピアノに導かれ、優しいGianniの声が「愛」を語りはじめる。印象としては、ボッテガやラッテミエレに最も近く、特にサビの盛り上がりは、Che Dolce LeiやTanto Amoreなどといった名曲群に勝とも劣らないほどの美しさに満ちている。艶やかなストリングスと、バックで控えめに囁かれる女性ヴォーカルが、この曲の魅力をより深いものとしている。温かさ、美しさ、流麗さ、情熱、実直さ、可憐さ、そして優しさなど、イタリアンラヴロックの美点をまんべんなく散りばめた、隠れたる名曲と断言してしまおう。厳しい冬が終わり、花々がいっせいに咲き誇りはじめる頃、生命の煌めきに満ちた陽射しにつつまれて、静かに聴き続けていたい曲である。少女を描いたスリーブも素敵だ。 (長砂)



GIANNI D'ERRICO
Anima Nera
Mi Stracci Il Cuore, Mi Stracci l'anima

'70
●CGD N 9782
○
◉

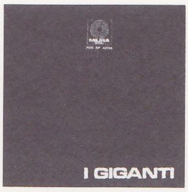
傑作として名高い「Antico Teatro Da Camera」('75年)のD'Erricoのデビュー作と思われる。両面とも、F. Monaldiのプロデュースのせいか、ドラマチックな盛上がりは殺気めいたものを感じないわけにはいかない。ジャケットのウラ面には6枚他のシンガーのシングルがジャケット写真付で紹介されているが、このジャケットと余りにも違い過ぎる。太陽とも、血液とも見える赤い円は彼の熱い情熱を現わしているのかもしれない。その後のすさまじい世界にはまだ到達しておらずカンツォーネ的表現に止まっているが、興味深い1枚ではある。 (吉瀬)



GIANNI D'ERRICO
La Vestaglia
Precipitando Verso Dio

'72
●Ariston AR.0571
○
◉

ジャンニ・デリコやマウロ・ペローシといったカンタウトーレの歌は、やはり一対一でしか入って来ないものだと思う。独白的だ。ジャンニ・デリコは'75年の唯一のアルバムの中で、深く陰るその典型的な空気を宿していて、リスナーの好みを分けているが、このシングルはむしろ彼の陽の面が出ていると思う。A面のオルガンからの始まりは、アルバムの陰りを予感させても、女性コーラスとともに高なる彼のヴォーカルには力強さがある。アレンジも抑揚が大きい。唯一、彼の虚し気な含みのある声が通じるか。B面も傾向としてはA面に似る。シングル曲だからろう。A面はオーケストラが加わり彼のヴォーカルが印象的なリフレインをつくり出す好ナンバー。 (松本)



(I) GIGANTI
Charlot
Voglio Essere Una Simmia

'70
●Miura PON 40106
○
◉

ケッコと呼ばれたフランチェスコ・マルセッラはフォルリ出身で、他の3人はミラノ。'64年の結成当時はケッコの加入で、パオロ・ヴァッロネがオルガンを担当していた。メンバーのうち、リーダーのジャコモ・デ・マルティノはセルジョの兄。'67年頃まではビートの中にエレガントな雰囲気を加えた独自のスタイルでブームを作った。'67年のサンレモ初出場最後に人気が衰えたが、メンバーは離散して人気の回復を計った。ミノ(ジャコモ)とセルジョはデュオで'69年に2枚、ケッコは'69と'70年に各1枚、パペスは'69年に2枚それぞれシングルを出した。結局ケッコの所属したミウラ・レーベルに再び全員が集まり再結成し、作曲にヴィンチェ・テンペラをむかえ、ルックスも長髪となり、当変形ジャケのシングルを発表した。 (HIRO TANAKA)



GIGANTI
Sono Nel Sogno Verde Di Un Vegetale
Sul Tuo Letto Di Morte
'72
●Rifi RFN 16487
○
◉

ミウラ・レーベルでの新生ジガンティは、新らしいものを試みた。同レーベルの2枚目のシングルは、3曲入りでディヴィド・ボウイのカヴァーやモゴールの作詞したものもふくまれていた。次作はサンレモ出場曲で、あまり知られていない歌手ファビオ・トリオリと組み選外曲となり、古巣のリィフィ・レコードに戻るきっかけとなった。ただし、この時点で作曲家としてヴィンチェ・テンペラと知り合い、彼らの最終アルバムの名作「Terra In Bocca」のコンセプトが生まれた。これはピエロ・デ・ロッシの詩をもとにした大作で、アルバムと同じジャケットのシングル・カットも発売された。こうしてプログレッヴ・ロックの仲間入りをしたが、当シングルが最後のものになった。B面はLPからの曲。 (HIRO TANAKA)



GIGI PASCAL
Ricominciare
Tanti Auguri Senora
'75
●Zeus BC 5033
○
◉

Gigi PascalのLP未収シングル。〝Ricminciare〟は彼の力強い歌唱が光るイタリアらしいドラマチックな佳曲。〝Tanti Auguri Senora〟はクラシカル且つプログレッシブな演奏をバックに配したGigi Pascal渾身の名曲、名唱。イタリア南部の漲るパワーを伝統的な美意識がダイナミックに交錯し熱く胸を焦がす。迸る感性の煌きは、一級のグループに勝るとも決して劣るものではない。尚、この後発表されたシングル(こちらもLP未収)「Amarti Come Non Mai/La Terza Luna」(ZEUS : BC 5036)ではより歌に重点を置いた作りで、多少の物足り無さは否めない。 (鈴木伸一)



(IL) GIOCATTOLO
La Mia Mano
Ti Ho Vista Piangere
'79
●Ciao 567
○
◉

ジョカットロは、'70年代後半～'80年代前半に活動していた中堅ラヴ・ロック・グループで、シングル枚数をリリースしている。彼らは仲々、実力のあるグループで演奏力もアレンジもしっかりとしており、ここに取り上げたシングルのサウンドなどは、美しいプロフェット系のシンセ・メロとギターのくり返し出てくるリフが印象的で、ロカンダ・デッレ・ファーテのポップなサウンドに近い。イタリアのラヴ・ロックを僕個人的に分類すると、①ドゥリウム系、②チェトラ＆トロルース系、③リフィ系、④CGD＆CBS系、⑤リコルディ系(わかる人にはわかる分類でしょ?)に太別できるが、ジョカットロは、オデッセアやデイク・ディクの後期、フラッテリと共にリフィ系の典型的なサウンドである。 (Numero Ueno)



GIOVANNA
Cronaca Nera
Un Momento Nella Sera
'70
●Ariston AR 0372
○
◉

ジョヴァンナの'73年作「Ho Passato Un Brutto Inverno」も見かけないが、BELVE DENTROの'70年作唯一のシングル「Cronaca Nera」はもっと見かけない。お互い見かけない同志が'70年ド廃盤お見合いしたこのシングルの行方は中々興味深い。A面はベルヴェ・デントロのシングル曲にジョヴァンナが加わった形で、オルガン・ロックがハスキーで瑞々しい歌声を乗せながら両陣営をそそりそう。イタリアン・ロックと言っていいリズムとナイーヴな感触のオルガン・トーン等、当時からすれば非常にプログレッシヴなものだ。ここに内省さを感じさせる彼女の歌声が加わるのだから出来も読めるというもの。B面はポップス・スタイル。こちらにはバンドは加わっていない。 (松本)



GOBLIN
Chi ?
Chi ?(Parte Seconda)
'76
●Cinevox SC 1090
○
◉

ゴブリンと言えばオカルト映画、オカルト映画と言えばゴブリンと言う程映像と音楽がぴたりと当てはまるバンドは他に無いだろう。「サスペリア」や「ゾンビ」といった日本でも大ヒットした映画の先入観の為か、彼らの数少ないオリジナル・アルバムを聞く時でさえ怖く感じるのは妙な感じだ。二枚目のアルバム「ローラー」発表の後、TV番組「CHI ?(誰?)」のテーマとして作られたのが本作品で、おそらくゴブリン唯一のLP未収シングルである。針を落とした瞬間からチェンバロによる不気味なアルペジオが迫り来る恐怖を予感させ、息もつかせぬ展開で心臓をどきりとさせられる。この手の音楽好きには必携のアイテムだろう。尚作曲はNEW TROLLS等でもお馴染み、TV番組のテーマはお得意のG.CARUSOだ。 (片山)



GRUPPO 2001
Avevo In Mente Elisa
Quella Strana Espressione
'71
●King Universal NSP 56127
○
◉

グルッポ・ドゥエミッラウーノは'72年に1枚だけアルバムを発表したが、グループ自体は少なくとも'70年頃から'70年代後半まで存在していたようで、数枚のシングルがそれを物語っている。これは'71年のリリースだからアルバムより以前の録音と推測される。もちろん両面ともLP未収録曲である。グルッポというと、アルバム冒頭のたたみかけるようなシンフォニックな演奏の印象が強いが、彼等の持ち味はソフト・タッチな甘い歌にあり、そんな彼等のポップス・グループとしての側面を表現しているのがこのシングルだ。どちらの曲もそれ程情緒的なナンバーではないが、のびのびした歌を聴かせてくれる。 (山崎)



GRUPPO 2001
Messaggio
Una Bambina ...Una Donna
'72
●King Universal NSP 56134
○
◉

グルッポ2001にはシングルが7枚あるようだ。このシングルは第2弾に当たるもので、A面が未収録、B面がアルバムからのカットになっている。掲載外では他に「Navigando/Il Mio Paese」(CP CPNP 03)がある。さてA面だが、いかにもシングル曲らしくポップ色が強い。それでもアルバム当時の彼等らしさはある。らしさという点ではむしろB面の方がファンのイメージには合うはず。アコースティック・ギターの響きとヴォーカルが醸し出す瑞々しさは、古さを伴って懐しむような趣きを湛えている。よく有るようで意外にないサウンドだ。'71年にSALISから脱退したPiero Salis(kbd)とPaolo Salis(ds)の目指した音がグルッポ2001だったと思える程の絶妙な響き方をする。（松本）



GRUPPO 2001
L'anima
Angelo Mio
'73
●King Universal MSP 56140
○
◉

国内盤もリリースされていたグルッポ2001(ドゥエミッラウーノ)は'70年頃から'70年代後半までLP1枚と少なくとも7枚のシングルをリリースしており、内〝Una Bambina..."以外は全てのLP未収曲である。本シングルは73年にリリースされたもので彼等の歌の部分が強調された出来の良い作品である。イタリアらしい清涼感あふれる名曲といえそうである。KINGレーベルに3枚のシングルを残した後、Mercury, CP, Stregaレーベルを点々としながらシングルを発表するが後の作品になる程、ヴォルテージは落ちていき、最後の作品はテクノ色がある作品となってしまった。彼等の盛期は71～75年頃までと推測される。（山崎）



GRUPPO 2001
Addio Primo Amore
Carla
'74
●Mercury 6027 004
○
◉

グルッポはアルバム発表後もしばらく活動を続けていたことは他のレビュウでも書いたが、これはマーキューリー・レーベルに移籍しての'74年の作品。もちろんアルバム未収録曲である。基本的な曲想はそれ程、アルバム発表の頃とは変化しておらず、やや都会的な印象が加わった感じだ。我々はとかくアルバムだけでそのグループを評価しがちだが、こうしてシングルを追っていくとグループの遍歴がわかってより理解度が深まるのではないだろうか。アルバム以降のシングルとしては、他にも「Navigand/Ii Mio Paese」(CP CPNP 03)、「Chi Sei ?/Stratosfera」(La Strega C.M. 0015)等がある。（山崎）



GRUPPO 2001
Per Un Momento
Nella Tua Mente Sono Lui
'75
●Mercury 6027 008
○
◉

グルッポには僕の知る限り7枚のシングルがあり、そのシングルから推測するに'70年代後半まで活動していたようである。これはマーキュリーよりの2枚目のシングルで通算5枚目のもの。出来としては平均的なものであるが〝PER UN MOMENTO"のほうがストリングス・オーケストラの使用によって叙情的な作風となっている。これだけの時期に渡ってシングルをリリースしていながら、どうしてアルバムは1枚しかリリースされなかったのであろう。その間、グループはどのようにして存続していたのだろうか?各グループのシングルを追っていると、ふとそんな想いになることがある。（山崎）



GRUPPO 2001
Chi Sei ?
Stratosfera
'75
●La Strega Record C.M 0015
○
◉

キング・ユニヴァーサルを離れ、マーキュリーを離れ、とうとうLa Strega Recordという所までやってきた。音の方も随分と遠い所までやって来たものだ乗り自主製作レベルの録音で、曲の内容がこれまたひどい。シングル・ヒット指向のバンドにアルバム1曲目の畳み掛けは異色だったとしても、持ち味だった歌物バンドとしてのメロディすら、ここにはない。B面はインスト・チューン。両面ともひどい録音のディスコ・リズムがまずい。A面曲は、ギターが歌メロに合わす形で細かくソロを入れるが、各楽器のバランスが悪く、曲想も何もない。B面はもう書きようがないのでこれ以上触れない。もう少しなんとかならなかったものだろうか。「L'alba Di Domani」が懐しい。（松本）



(IL) GUARDIANO DEL FARO
Il Gabbian
Infelice
?
●Ricordi SRL 10671
○
◉

イル・ガァルディアーノ・デル・ファーロは一言でいうとイージー・リスニングを演奏するユニットである。アルバムもシングルも多数リリースされているので、一度くらいは輸入盤店で名前をみかけた人も多いものと思う。ジジ・カペロット(ベース)やトゥリオ・デ・ピスコポ(ドラムス)が在籍していたこともあるが、基本的にはシンセサイザーをメインにイージーリスニングを奏でている。本作はそんな彼等の代表的なサウンドであまりプログレッシヴとは関係ないが、彼等の代表的な作品としてリストアップしておく。彼等の多数の作品の中にはプログレッシヴな佳曲もあり、シングルとして聴くとハッとするものもあるが、LP全面を通してのプログレッシヴはない。（山崎）



HORUS
Respiro
Stelle Di Battaglia
'78
●Shirak SHO 4516
○
◉

'81年録音のTito Shipaの名盤「Concerto Per Primo Amore」でセンス抜群のアレンジと演奏を聴かせてくれたKeyのAntonio Valentiが中心となって活動していたHORUS唯一のレコード。こちらは78年録音で同じトリノのG7スタジオである。同一メンバーはKeyとDsのみ。A面は軽快なインスト曲だが、出来は今一つ。しかしB面は往年のイタリアサウンドが甦るシンフォニックな秀曲。アップテンポな冒頭から、リズムチェンジしたかと思うと、畳掛ける様に続くKeyとGのソロと圧倒的な展開を見せる。手に汗を握ったまままあっという間に曲は終ってしまう。美しいWジャケに包まれたマニア泣かせの一枚。最近、仲々の出来のデモを含んだ形でCD再発されたが、Il Voloの出来には至らなかった。（高橋）



HUNKA MUNKA
Fino A Non Poterne Più
E'Pura Fantasia
'71
●Ricordi SRL 10647
○
◉

Hunka Munkaの本名はロベルト・カルロット。彼は1967年に〝Anonima Sound〟というビート・グループの一員としてデビューし、1972年にリコルディから初のソロ・アルバム1枚と2枚のシングルを発表。同時にディク・ディクのアルバム「Suite Per...」の制作を協力したのがきっかけとなって、ディク・ディクに加入し、「Volando」、「Amico」の2枚のLPに参加後脱退し自らのグループを率いて活動する傍ら、1981年にヌメロ・ウノよりソロ・シングル1枚を発表し、現在アレンジャーとして第1線で活躍しているアーティストだ。そして1971年にリコルディからリリースしたLP未収録曲の1stソロ・シングルは美しいストリングスと独得の音色のオルガンが印象的な「Volando」をしのぐ秀作。思わず涙してしまう。（UNO）



HUNKA MUNKA
Dolce Mela
Sull'aereoplano
'81
●Numero Uno ZBN 7214
○
◉

'72年に「Dedicato A Giovanna G」というアルバム（歌の情感とプログレッシヴな演奏がブレンドされた好作品）をリリースしたフンカ・ムンカ（元アノニマ・サウンドLTDのロベルト・カルロットの変名）であるが、それ以後の彼の活動は一切わかってはいない。がしかし、'81年になって、突然シングルをヌメロ・ウーノよりリリースした。それがこのシングルである。両面共、アレンジをひき受けたエンリコ・リッカルディの曲。フンカ・ムンカはヴォーカルをメインに録音している。特にAサイド、ドルチェ・メーラがたおやかなヴォーカルを主体にした秀曲。プログレッシヴな演奏こそ期待できないが、それをおぎなってあまりある熱唱。本物のイタリアの歌というものを感じる。（今）



IBIS
Passa Il Tempo
Noi
'74
●Polydor 2060 083
○
◉

イビスには2枚のシングルがあり、1枚目が、2ndLP制作前に録音された本作で、2枚目は2ndLPからのカット、「Dedicated To Janis Joplin/Keep On Movin'」である。本作のA面は2ndのA面ラストに収められているので、B面の〝Noi〟のみがLP未収録曲となっている。音の方はニコの個性が全面に出たハードながらもポップな曲で、こちらの方をA面に持って来た方が良かった様な曲。冒頭からニコお得意のハモるギターが飛び出し、激しく歪んだギターのリフにマウリィツィオのハモンドが絡み、元気一杯の陽気なボーカルが入る。トロルス・ファンならやはり持っていたい一枚。（高橋）



ICE
Questo Amore In Due
Stai Meglio Libera
?
●Pinciana PR 2021
○
◉

僕が個人的に注目しているマイナーレーベル〝PIANCIANA〟からシングル2枚をリリースしているICEの1stシングル。僕は俗に言う〝ラヴ・ロック〟というのが、あまり好きではない。根っからのプログレ・ファンな訳だが、このシングルには、ちょっとばかりグラッときた。歌唱力はお世辞にもあるとは言い難いが、ジャルディーノ・センプリッチ近いメロディ〝を作曲する彼らのメロディー・メーカーとしての手腕は仲々なもの。まして、そのナンバーを実に多様なシンセ群でアレンジして聴かせてるのだ。まるで、ジェットがセンプリッチの曲をやっている様と、僕は勝手に解釈して気に入っている。もう少し歌が上手だったら、彼らもスターダムに上がれたのに…（N.Ueno）



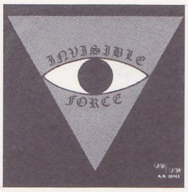
(LA) IMPRESSIONI
Il Prete Rosso
E'La Fine Della Vita
'71
●It ZT 7023
○
◉

インプレッショーニのデビュー・シングル。A面はクラシックのカヴァーのインスト・ナンバーで、原曲はヴィヴァルディである。原曲の美しさを損なわずに、イタリア・プログレッシヴ・ロックに共通する独特の情緒を織り込んできれいにまとめている。B面は巧みな曲展開を見せる、これ又イタリアン・プログレッシヴ・ロック然としたヴォーカル・ナンバーである。しかしながら、アクが強く、それ故泥臭くなりがちなグループが多い中で、彼らのサウンドは、清楚なイメージでまとめられており、その辺りが、このグループの特徴となっている。だが、多少物足りない感のあることも事実で、多少強引な展開等が見られれば、より素晴しいサウンドとなったのではないかと思われる。（中島）



IMPRESSIONI
Appasiona Tamente Lei
Promenade
'72
●It ZT 7032
○
◉

アルトゥーロ・スタルテッリが参加しているとの噂もあるセカンド・シングル。メンバー等詳細については不明な点が多いグループであるが、本作はシングル・オンリーの作品の中では、上位にランクされるであろう秀作である。A面は前作と同様に、イタリアン・プログレッシヴ・ロックに共通する独特のアクの強さを漂わせながら、それを泥臭くならずに上手にまとめたヴォーカル・ナンバー。前作に比べ曲・アレンジ共に進歩が見られる。B面はチェレスタとジェスロ・タルを設わせるややかすれたフルートが印象的なインスト・ナンバー。初期PFMにも通じる清らかで叙情的なイメージの佳曲で、このグループの本質を最も良く表わしている曲と言えよう。この路線でアルバムを作っていたらさぞやと思う惜しいグループである。　（中島）



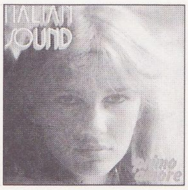
INVISIBLE FORCE
Morti Vident
1999 Mundi Finis
'71
●Unifunk AR 02143
○
◉

アントニオ・バルトチェッティの音楽の全て、と言い切れる程集中されたJACULAの「Tardo Pede In Magium Versus」。その前身がこのINVISIBLE FORCEになる。「Tardo Pede～」より1年前のリリース。バンド名こそ別ながら、メンバーもJACULAにほぼ同じく、収録曲2曲ともアルバムに再収録されている。ただしA面はアルバム中の〝Praegentia Domini〟の別テイク、B面はやはり〝U.F.D.E.M〟のショート・ヴァージョン。A面は後にA.レックスの「Zora」にも再々収録された彼のマニフェストで、教会オルガンの轟きに導かれ成句のような詩が唱えられ、そして轟きに終わるというもの。ミサの始まりを告げる曲なのだと思う。彼の信仰の為に作曲された宗教曲である。　（松本）



(GLI) IRRESTIBILI
Va Amore
Le Strade Del Sole
'68
●CBS 3671
○
◉

印象的なピアノのフレーズに導かれて美しいメロディーを端正にそして爽やかに歌い綴る〝Va Amore〟はイタリアン・ポップスの隠れた名曲。何と言ってもJean Claudricなる人物によるオーケストラ・アレンジが絶妙で、若々しくも陰影を帯びた彼等のサウンドに見事に調和している。勿論プログレではないが、当時のシーンに於ては群を抜く仕上がりである。尚〝Le Strade Del Sole〟は明るく軽快な曲で〝Va A move〟の出来に遠く及ばないが、その和やかなサウンド、歌心は耳に優しく、ジャケット写真から受ける純真なイメージそのものである。　（鈴木伸一）



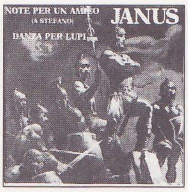
ITALIAN SOOND
Primo Amore
Occhi Grandi
'77
●BUS 10033
○
◉

イタリアンサウンドという、自信たっぷりな名前のラヴロック・トリオ。楽器を本人等が演奏しているかは定かでないが、女性1名、男性2名のコーラス・グループと考えた方が妥当だろう。同レーベルより'76年にシングル「Torna/Il Gabbiano」（両面LP収録）、'77年LP「Torna」、本シングルを発表後、Cinevoxに移籍しシングル「Domani Partiro'/Poveri Innocenti Innamorati」を発表する。いずれの作品も甲乙つけ難いが、本作品がLP未収でもあり、一番シンフォニックでもあるということで良いだろう。　（長谷部）



J. PLEP
La Scala
L'Anima del Mondo
'69
●Carosello Cl 20232
○
◉

ジャンフランコ・レヴェルベリのプロデュースによる発音不明のグループで、'70年に入ってレーベルをオレゴンというところに移り、ヌォーヴァ・イデアとした。A面に記されているGILはジョルジョ・ウザイのこと。こうしたクレジットは当時の流行で、レナート・デイ・プロフェルティヤ、マリオ・デリ・ショウメンなども同様である。B面はグループのみの名義になっている。彼らをふくめて、ジェノヴァのグループはニュー・トロルス、ガリバルディ、デリリウムを中心にメンバーを互いに補いながら、プログレッシヴ・ロック・ムーヴメントを形成していくことになるのである。　（HIRO TANAKA）



JANUS
Note Per Un Amico (A Stefano)
Danza Per Lupi
'81
●private GEI 004
○
◉

ヤヌスが残した3枚のシングル及びLP1枚はいかにも自主盤らしい001から004までの続き番号だが、それがリリース順ではないのでややこしい。1st は「Pescatori Di Sogno 1 parte/2 parte」（J 003, '80）で、2ndはACROAMA名義の33回転7インチ3曲入ミニアルバムの「…Ogni Giorno…Evocando Immagini Di Una Cavalcata, Nol Reale…Al Cospetto Del Solo/…E Diventeremo Di Nuovo Limpidi」（001, '81）、続いて内容・ジャケ共に彼らの最高作とおぼしき本作が出た様だ。いずれの作品も自主故の安っぽさがあるものの叙情性を大切にした優雅な曲調で、1st のA面後半、2ndのB面冒頭の語りを除いて全てインスト、1stのB面ではヴィヴァルディのフレーズも顔を出す。男ヴォーカルの Zauber という感じもする。　（森下）



JERIKO
Basta Cosi
Tu Bambina Io Bambino
'76
●Rifi RFN-NP 16658
○
◉

JERIKOは、女性と男性による2人のボーカルを擁したラヴ・ロック・グループ。男女のデュオによるポップスというと、日本人の悲しい性か、すぐにカラオケ・デュオを思い浮かべて、とても悪い先入感があるのだが、(特に僕はカラオケが大キライなのでなおさらなのだが…)このジェリコのサウンドは、そんなダサイものじゃない。雪が舞い降る様なピアノと美しいストリングス・シンセ、ムーディーなオルガンをバックに切なく歌う2人のボーカルは実に美しい。特におばさん風や油ぎった歌い方の多いイタリアの女性シンガーの中にあって、仲々、僕好みの〝はかなさ〞のある女性シンガーは大きな魅力である。尚、このグループは他にもシングルをリリースしている。

(Numero Ueno)



JET
Vivere In Te
Vomo
'71
●Durium Ld A 7711
○
◉

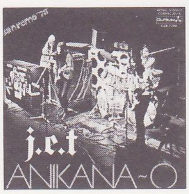
JETのデビューシングル。彼らには5枚のシングルがあるが、プログレ・ファンには一番アピールする内容を持つのが本作。A面ではアコーステック・ギターをバックに穏やかにボーカルが入り、徐々に盛り上がって行くおおらかな曲調。B面も同じ様に始まるが、サビの部分では泣き泣きのボーカルが入って来て思わずのめり込んでしまう。後半のアコースティックギターのソロも良い出来。両面ともコーラスワークがしっかりしていて、トロルスに似ているが、彼等ほど受け入れられず、短命で終わってしまったのが残念。尚キングより国内発売されたCDにはこのシングルの曲は収録されなかった。

(高橋)



JET
Il Segno Dalla Pace
Non La Posso Perdonare
'72
●Durium LdA 7758
○
◉

アルバム発表の'72年に出た両面未収録シングル。アルバムの音を期待しては少し辛いが、それでもB面はハモンド・オルガンが薄すらと流れる中、メロディアスに歌われる。そして間奏部ではアルバムのカラーを決めているギター・ソロが出てくるので、結構聴ける。A面はトリップ、デリリウム、ジャンボあたりがやりそうなヴォーカル・ナンバーを収録していて、これが臭い。ミディアム・テンポの垢抜けないコーラスが続く。'60年代末に結成されたことは、これでよくうなずけるが、後にマティア・バザールに成るかと思えば、随分と遠い。他に掲載外のアルバム未収録シングルとしては「Gloria Glorio/Sinfonio Per Un Re」(Durium LdA 7805、'73)がある。(松本)



J.E.T.
Anikana〜O
Guarda Con I Tuoi Occhi
'72, '73 ?
●Durium LD A 7796
○
◉

変型ジャケットのほうが先行して活題になっているふしのあるジェットであるが、彼等のサウンドは基本的にはプログレ=ハードであるといえる。しかしそこにはやはりイタリアらしく、地中海の太陽につかれたような甘美なメロディーラインと流れるようなサウンドを持ち、不思議な魅力を放っている。本作品は73年のサンレモ音楽祭で彼等が歌った作品がA面に収録されたもので、ホーンセクションを加えたポップな好ナンバーと生ギターとヴォーカルのからみが哀愁をそそるナンバーを収めたLP未収作品である。従来のスタイルとは少々傾向が違うが、その核はやはりジェットであるといえる。尚、ほぼ同ジャケットで英語ヴァージョンの〝Anikana〜O〞と別タイトルのB面からなるシングルも出ている。

(今)



JIMMY M.E.C.
Il Messia
Quegli Occhi Chiari
'71
●Fonit SPF 31288
○
◉

新人プログレバンドを集めたオムニバス「Nuovi Complessi D'avanguardia Da Radio Montecarlo」に収録されていたバンド。ブラスを導入しビートポップまがいのA面が収録されていたのだが、オルガン、フルート、ピアノをバックにしたB面の方がはるかに良い出来。「Nuovi〜」の項では書けなかったがラジオ・モンテカルロという放送局は当時、出始めのプログレ流行を後押ししていたかコンテストを催したかしたらしい。「Nuovi〜」は収録の9バンド9曲の内少なくとも3曲がシングル・リリースされているが、結局生き残ったのはデリリウムと'77年にラヴロックのLPを残しているQuinta Faccia、それにTibúと組んでいたPiero Montanaro位だった様だ。

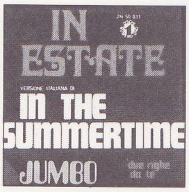
(森下)



JUDY KAROL
O.K. Prendimi !
Night Rock
'80
●Unifunk AR 3480
○
◉

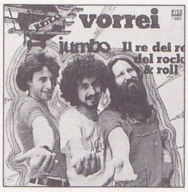
B面のアレンジがA.Rexなどでの取り上げた一枚。レーベルのNaifunkは、やはりA.Rex絡みのインヴィジブル・フォース、アンタレスをリリースしている所。ヤクラが余りにもレアだった為か神格化されてしまったバルトチェッティ、実はヤクラはほぼバッハからのパクリで、その後のA Rex、Doris Norton等での活動を見てもヴォルテージは低下する一方、元々音楽的才能に乏しい人なのだと断じざるを得ない。その異様な信仰のせいか彼がこだわり続ける邪悪なあるいは端的に言って反キリスト教的な音楽も、その能力に欠ける為ごく雰囲気的なものに終わってしまっている。ただ、その背後にたくまずして滲み出る、彼の異端の徒としての病んだ様なわびしい哀感が個人的には魅力的ではある。青盤。

(森下)



JUMBO
In Estate
Due Righe Da Te
'70
●Numero Uno ZN 50 033
○
◉

デビュー・シングル。フィリップスと契約する以前の'70年のリリースになる。ジャンボと言えば、どうしても3rd「Vietato Ai Minori Di 18 Anni」に人気が集中するが、バンド自体の本道は、やはりブルースにある。3rdが異色なのであって、むしろこのシングルなどの方がオーソドクスといったところか。それだけに本来あまり好まれないタイプなのだろう。A面はカントリー・ブルース・タッチのヴォーカル・ナンバーで、思いっきり臭い掛け声と共に端々と進む。非常におっさん臭い。B面になるとおとなしめのR&Bスタイルにギターやピアノのソロを込みで進んで行くが最後の方で、またもA面の曲を演奏し始めて、こわい。よく聴くと大昔のR.ステュワートなんかの渋さに近いものがある。 (松本)



JUMBO
Vorrei
Il Re Dei Re Del Rock & Roll
'75
●Atlantic T10672
○
◉

JUMBOはLP3枚をリリースしたことが知られているが、そのブルースをルーツにするあくの強いプログレッシヴ・サウンドは一部に強いファンを持つ。牧歌的な渋い味わいを持つセカンド「DNA」、多彩なゲストを迎えて重厚なシンフォニック作品に仕上げられたサード「Vietato...」は特に素晴らしい作品である。サード・アルバムを録音した'73年にメンバーの一部がPrenestum Blocco 452というグループ名でシングル3枚とLPを1枚発表するが、JUMBO自体、その後も活動を続けていたようだ。'75年にAtlanticレーベルから本シングルを発表した。おそらくこれを最後にグループは解散したものと思われる。ここではすでにプログレッシヴ色は失なわれてしまっていて、本来のオーソドックスなロック・バンドとなってしまった。 (今)



JURI CAMISASCA
La Musica Muore
Metamorfosi
'75
●Bla Bla BBR 1339
○
◉

A面がLP未収録。B面はアルバム「La Finestra Dentro」からのカット。弦楽器(vln)をフィーチャーしたポップなヴォーカル・ナンバーのA面は、彼にしてみれば異色気味。それでも○×節調のリズムにずばりとヴァイオリンのつややかな響きを持ち込むミス・マッチが、やはりこの頃のカミサーシャらしく、異様だ。イーノの〝タイガー・マウンテン〟中華ポップス並みに異和感がある。B面はアルバムの内省的なナンバーで、バッティアートのコズミックなシンセサイザーやリノ・カプラ・ヴァッチーナのインドふうパーカッションのサポートが、カミサーシャの歌をひきたてる。アラン・ソレンティ、デメトリオ・ストラトスらと共に声を使っての表現力にとめどのないミュージシャンだ。 (松本)



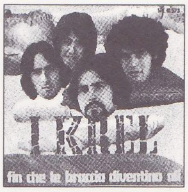
JURI CAMISASCA
Himalaya
Un Fiume Di Luce
'75
●Bla Bla 1341
○
◉

最近でその洞察力を感じさせる影の深い音楽を聴かせてくれるロベルト・ユリ・カミサーシャだが、'70年代のかつては暗中模索の混乱した心理が音楽に出ていたように思う。デビュー作「La Finestra Dentro」の混乱はアラン・ソレンティにも似て更に過敏でもある。このシングルはB面が、そのデビュー作からのカット、A面が未収録になっている。ヒラマヤだ。もう何も言うことはないカミサーシャのヒマラヤ音頭とも言うべき、居心地の悪い変形具合。女性コーラスをまじえ曲が進むとカミサーシャの邪心めいたヴォーカルがひときわアップで迫ってくる。とてもこの時期の彼らしさが出た未収録曲だ。これでも曲自体はすっきりしている方なのが、そしてさすがブラ・ブラからのリリース。 (松本)



KATIA RICCIARELLI
Il Profumo Del Tempo
C'Era Una Volta La Terra Mia
'85
●RCA PB 6807
○
◉

彼女は有名なソプラノ歌手で、日本でも多くのファンを持つ。ただし、このシングルはカンタウトーレのアメデオ・ミンギとのデュエットのA面は普通の歌手としての登場だ。元パンデモニウムのリーダー格だったミンギはマリオ・カステルヌォーヴォのデビュー盤のプロデュースをしたことでも知られている。この曲では元ピエロ・ルネールのガイオ・キョッキョも曲作りに参加している。また、このシングルのもう一人の主人公は映画音楽の巨匠エンニオ・モリコーネで、両面共にアレンジを担当している。プラチド・ドミンゴやアンナ・モッフォらのオペラ歌手とも幾度かレコーディングをしているので、モリコーネのアレンジはクラシカルなものも一級品である。B面は映画『ウエスタン』のテーマ。 (HIRO TANAKA)



(I) KREL
Fin Che Le Braccia Diventino Ali
E Il Mando Cade Giu
'70
●Ricordi SRL 10573
○
◉

PFMの前身グループとして〝QUELLI〟はあまりにも有名であるが、PFM=QUELLIという単純な図式は成り立たず、QUELLIに在籍していたのはKeyのプレモーリとギターのムシーダの2人のみで、例えばベースのG.ピアッツァは自らのグループを率いて活動し、アルバム1枚をリリースした後にPFMへ加入している。ここに紹介するクレルもPFM関係の重要なグループであり、ドラムのF.チョッチョが在籍していたグループだ。シングルという限られた枠内であり、しかも1970年という年代の制作であるので当然、本格的なプログレは望めないが、重厚でスリリングなハモンド・オルガンを中心としたポップ&ロックでビート・グループであったQUELLIよりPFMのサウンドへの直接的な影響は強いと思われる。 (UNO)



KRISS & SARATOGA
Piccolo Bambino Caro
Evadere
'75
●Osi Records OSI 0003
○
◉

おそらくこのミラノの5人組はLP製作を絶望視してこのシングルの一撃に全てを賭けていたのであろうことがこのＢ面を聴くと痛い程伝わってくる。例えていうなら見合いで実にいい女が出てきたにも拘らず全く話も合わず脈がなさそうだがこの千載一遇の機会を逃がしてなるものかどうせ2度と会わないのだからやりたいことをやってしまえ、冥土で俺に会ったことを後悔するのだなと乳、臀部等に捨て身のタッチ攻撃を仕掛ける私の心境を音にした感じ。ELP風イントロからオルガンとギターの壮絶な絡み合い等めまぐるしい展開でこちらが喜びそうなことを全て演ってのける。開いた口が閉さがらなくなる程素晴らしい捨て身のイタリアンシンフォニックの一撃を受け止めてくれ！ （牧野博）



LANDO E LUCA
Il Nostro mondo
Gocce Di Rugiada
'77
●Rifi RFN Np 16695
○
◉

LA VERDE STAGIONE. TAVOLA ROTONDAの中心人物、IHLEの兄弟による秀逸なる1枚。特にB面に於けるあまりにも美しいサウンドは70年代後期イタリアの中にあって一際清純な音世界を展開してくれる。どこまでも清らかな彼等のサウンドは、何百のラブ・ロック、ポップスとは一線を画し、それらが決して辿り着くことの出来ない夢想と哀愁と感傷の空間となる。決してLPをリリースする機会を持てなかった悲運の兄弟、LANDOとLUCA。しかし彼等が'60年代から遺してくれた何枚かのシングルは、今もなお、我々の感性を擽り、忘れかけていた感動を呼び覚ましてくれる。聴く度に味わいが増す彼等のサウンドは決して派手ではないが、とても大事なもののように思えてならない。 （鈴木伸一）



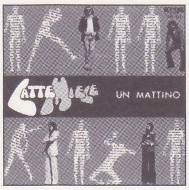
LANTERNA MAGICA
Aria D'estate
Lo Vuole Il Corpo, Lo Vuole Il Cuore
'78
●UP 10,023
○
◉

「魔法のランプ、幻燈」というファンタジックな名のラヴ・ロックグループ。私の知っている限りでは77年に出た「Sottovoce/Acquerelli」と本作の2枚のシングルがある。音的にはポッテガタイプだが、ポッテガと比較すると少々キーボードが薄い。如し、プログレファンの大好きな女性ヴォールも入っている。男性、女性ヴォーカルの掛け合いには思わず「胸キュン」ものだ。曲、アレンジ共に良く一流グループになっても不思議は無いのだが、既に時代は世界的にディスコブーム。デビューが一年早ければ人気グループになっていただろう。後レコード会社がもう少し大手であれば良かったのに。77年発表のシングルも内容的に甲乙付けがたい。2枚とも買うというのが正しいラヴ・ロックファン？ （長谷部）



LATTE E MIELE
Mese Di Maggio
Tanto Amore
'74
●Polydor 2060 085
○
◉

ラッテ・エ・ミエーレは3nd LP発表後も活動を続けており、レーベルを点々としながらもシングルのみはリリースしてきた。もちろん3ndまでの時期もLP未収シングルをリリースしており、その中には佳曲も少なくない。本作は74年のリリースで、2ndパピヨンの一年後のもの。おそらくポリドールからの最後のシングルと推測される。曲は両面LP未収録曲で、たおやかなイタリア然としたヴォーカル曲。例えば1stのB-2のヴォーカル・ナンバーを想い出してほしい。あの叙情が同ヴォルテージで演奏されていると思えば大かた想像がつくのではないだろうか。正にイタリアン・ロック往年期を謳歌する名盤である。彼等の初期のシングルについては未だ良くはわからず、他にもLP未収曲があるのかもしれない。 （山崎）



LATTE MIELE
Un Mattino
Pavana
'76
●Magma GR 02
○
◉

Latte E Mieleといえば1st LPの印象があまりにも強くあの面影を追って行くと失望してしまうことのほうが多い。このシングルは1st LPにこだわって聴かなければ、水準以上の出来であるといえる。キーボードを多用したラヴ・ロック・サウンドで翌年発表されたシングル（Magma MAG 06）と比べるなら新メンバーのためかアンサンブルの点で物足りなさが残る。とはいえ、時代の波に流されず自分たちの音楽をやりとげた彼らの執念に敬服する。B面はLPからのカットでだらだらと長くやっているよりこの方が聴き易い。まあ、LPのさわりをB面に持って来たということだろう。 （吉瀬）



LATTE MIELE
Un Silenzio Diviso In Due
Per Poter Vivere
'77
●Magma MAG06
○
◉

ラッテ・ミエレは1971年にDuriumレコードからシングル・デビューして以来、同レーベルから2枚、1972年にPolydorに移籍して3枚をリリースした後、1976年にGrogから2枚と1977年にMagmaから1枚リリース。以降、移籍を繰り返してRCAから2枚、さらにEMIから2枚リリースして現在までに12枚ものシングルを発表しており、その大半のものはLP未収録曲シングルで、その中でも77年までにリリースされたものはどれも甲乙をつけがたい程、好ナンバー揃いでマニアでなくとも収集意欲をそそられる訳だが、その中でも77年にMagmaからリリースされた本シングルは出色の作。スリリングなストリング・アンサンブルを大幅に導入し、甘く切ない〝ラッテ・ミエレ〟の世界を華麗に演出している。 （UNO）



LATTE MIELE
Sto Volando Con Te
Restiamo Insieme
'78
●RCA PB 6250
○
◉

リズムがワン・パターンだなと思っているうちに、清涼感のある歌声とストリング・シンセのそつのないバッキングに浮き上ってくるメロディが印象づいてくる。3枚目のアルバム以後もシングルを出し続け、最近になって実態が明かされたように翌'79年には未発売に終わる4枚目のアルバム(「Vampyre」)を製作していたラッテ・ミエーレは、この頃になると無駄のないすっきりとしたアレンジで聴かせる。両面ともカヴァー・ヴァージョンになるこのシングルも、そうした彼等のポップスという気がする。甘さはおさえめ。このセンスで充分にアルバムを製作できたと思うし、しかもそれは好作になったと思う。 (松本)



LATTE MIELE
Fiore Di Strada
Severamente Proibito
'79
●RCA PB 6350
○
◉

ラッテ・ミエーレは'70年にリリースしたサード・アルバム後もRCA～EMIとレーベルを移りながら、シングルをリリースしている。テレビの司会等を手がける等、彼等も時代の波を泳ぐ為には苦労をしてきたようだ。'77年以降は完全なポップス・グループとして再出発した彼等だが、過去のプログレッシヴ・グループというレッテルにとらわれなければ、良質な作品を歌っているといっても良いと思う。本作品はそんな後期のラッテ・ミエーレを代表させる一枚で、都会派ポップス的サウンドが両面を占めている。後期のラッテ・ミエーレを聴くと、往年のイタリアン・ロック・ムーヴメントへの想いが募るが、古い概念でこの作品を評価するのは彼等にとっても無礼であろう。良質のアーバン・ポップスである。 (山崎)



LATTE MIELE
Ritagli Di Luce
Metro
'80
●EMI 3C 006-18470
○
◉

いかにもラッテミエーレと言えそうな音色で始まるこのシングル、一般には評価がもう一つの'80年後期の作品であるが、これが、仲々いける。イントロの後すぐにヴォーカルが入ってくるが、これもいかにもラッテミエーレ。この頃にはポップスグループがすっかり板についた感じだが、ベテランの仕事とでも言おうか、そつなくまとめている。出来ればもう一つ盛り上がりが欲しい所だが、これ以上やると初期のアルバムの様になってしまう恐れがある。(プログレファンには、その方が有り難い。勿論私もだが…)この頃にアルバムを作っていれば、結構いい出来の、どの曲もシングル・カット出来そうな物を作っていたんじゃないかと思ったりしてしまう。
(Alessandro Amore 堤野)



LM SPECIAL
Funky Prugna
Avventura
'77
●Grog CR03
○
◉

数年前からマニアの間で噂されていたグループにLM・スペシャルがある。これはラッテ・ミエーレの改名したグループでレコードが残されているらしいという曖昧なものであった。それがこのシングルなのである。サード・アルバムの翌年77年にグロッグ・レーベルに残されたこのシングルで聴くことのできるサウンドは、キーボードをメインにしてはいるものの、ディスコテックな作品であり、出来はそれ程良くはないが、読者への解答という意味でここにリストアップしておく。明らかに商業的視野にたっての作品であり、彼等の持ち味はここでは後退してはいるが、ヴォーカルラインにそのなごりをとどめている。 (山崎)



LEO NERO
Fremo
Sono Stanco Anche Io
'78
●EMI 3C 006 18364
○
◉

レオ・ネロことジャンニ・レオーネは、'70年代前期にバレット・ディ・ブロンゾのキーボーダー及びセッションマンとして活動していたが、バレット・ディ・ブロンゾ解散後はソロ活動を行なっていた。高水準の演奏技術と天才的なひらめきを持つ独得のヴォーカル・スタイルで、イタリアン・ロック・ファンの心を動かす名作アルバム「VERO」を'77年にEMIに録音する。'80年にはCBOレーベルよりセカンド「MONITOR」をリリース。前作の名ごりを残しながらもニューウェイヴ・グループへと変容していった。本シングルは'78年のものでA面はLP未収曲でポップな中にもセンスの光る曲。B面はアルバム「VERO」よりのカットで、たおやかな彼のヴォーカルをフィーチャーした叙情ナンバー。共に彼の才能の開花した好作品。 (山崎)



LEO NERO
Stanchiamoci Insieme
Indossa Il Mio Colore
'82
●CBO CBNP 109
○
◉

レオ・ネロことジャンニ・レオーネのソロ活動におけるシングルには、「Fremo/Sono Stanco Anche Io」「Strade/Piangi Con Me」(CBO CBN 102, '80)と当シングルの3枚がある。尚、2ndシングルは2ndアルバム「Monitor」からのカット。〝Strada〟は今でもレオーネ自身が気に入っている曲だという。さて、当シングルは、前作よりアダルトな表現となり、サックスやトロンボーンを導入することによってしっとりとした仕上がりになった。特に〝Indossa～〟は今までにない豊かな感情表現が現れている。この時期にアルバムがあったなら、きっと上質のポップスを聴かせてくれたに違いない。その後、元バレット・ディ・ブロンゾのメンバーがいるストックホルムで録音をし、現在もローマではトリオで活動中という。 (山崎)



(I) LEONI
Ogni Notte
Le Bottiglie
'70
●Ricordi SRL 10.612
○
◉

このシングルの翌'71年にリコルディからアルバムをリリースしているが、そのアルバムからは想像もつかないレオーニ渾身の一撃! 出だしから全編をおおう重厚なパイプオルガン、中間部のリコーダーによる混沌とした静と部分。タイトル通り正に「各々の夜」をイメージさせるそのサウンドは、恐怖と空虚を同時に描ききった強烈な個性だ。製作は'70年、信じられない大傑作! イタリアンロック、黎明期の逸品! B面はいりません。アルバムもパスして下さい。 (木下)



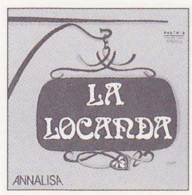
LIMOUSINE
Camminero'Solo
Limousine Arancio
'78
●Valiant ZBY 7089
○
◉

ブロッコ・メンターレの後身と言われていたBloccoは、シングル「Fumetto Rock/Canapa」(Italian Records '80 HMSP010)で見る限り全く関連が無い。このリムジンのシングルではArena, Angeletti, Bianchi, Lazzariの4人の名前を確認出来、ブロッコ・メンターレの5人中4人がいれば後身と呼んでも差し支え無いと思う。ただし6人の名前がクレジットされていながらジャケでは5人しか写っておらず正確には何人在籍したのか不明。ヴォーカルは同じ人だと思うが。A面はロック寄りのラヴロックで出来は良い。B面はポップ寄りで出来も今一つ。もう一枚のシングルは未聴。下世話な話だが'73年の「ポア」の後5年もどうやって食っていたのだろうか。「ポア」が5、6万で売れるのは10年後、CDが出るのは20年後だ。 (森下)



LISA GASTONI
Chi Mai
Chi Mai
'71
●It ZT 7013
○
◉

A面で歌っているリサ・ガストニは'60年代前半にかけて銀幕で活躍した人。セクシー女優として人気が高かった。当シングルは、彼女主演の〝Maddalena〟という映画のテーマ曲で、同サントラ・アルバムには彼女の歌は収録されていない。音楽担当者はエンニオ・モリコーネで、LP(General Music ZSLGE 55063)はかなりなレア・アイテム。ブルノ・ニコライのオルガンやヴィンチェンツォ・レストゥッチャのパーカッションが面白く、3曲もある10分近い曲などはプログレッシヴな展開をみせる。当シングルのB面はシングル2曲目のテーマ曲。モリコーネの個性溢れるクラシカルな作品。なお、この曲は映画とは無関係にミレイユ・マチューやミルヴァなどもモリコーネのアレンジで歌っていた。 (HIRO TANAKA)



(LA) LOCANDA
Annalisa
Volare Un Po' Piu' In Alto
'80
●Rifi RFN-NP 16802
○
◉

Locanda(宿屋)と名のる彼らの作り出す音は、軽快な中にもどこか哀愁を感じさせる。典型的なイタリアン・ラブ・ロック、言葉を変えればこれといった特徴のないグループともいえる。曲の出来からすれば平均的点以上の曲ではあるが、ここぞというメロディがないのが致命的である。両面ともBoero Luciano、Micheie Conta、Ezio Veveyの曲によるもので、人気が出ずこのシングルだけで終ってしまった可能性が高い。LOCANDA DELLE FATEの後身バンドと云われている。 (吉瀬)



LOCANDA DELLE FATE
New York
Neve Lune
'78
●polydor 2060-169
○
◉

ロカンダ・デレ・ファーテには3枚のシングルがあり、1枚は1st LPからカットされた「Non Chiudere A Chiave Le Stelle」1976/Polydor:2060-148」、もう1枚はこの7インチ・シングルに1曲加えた12インチ・シングル。そして最後の1枚がLP発表の2年後にリリースされたLP未収録曲の「New York, cw:Neve Lune」。ツイン・キーボードの片割れであったオスカーとボーカルのレオナルドが脱退し、代わりにサックス奏者とボーカリストが新加入して録音されたこのシングルのA面は、いかにも彼らしい甘いポップなスローバラードで、B面の方はアルバムの名曲であるA①に非常に近いナンバー。今回紹介したシングルの中で1、2位を争う名曲だ。 (UNO)



LOUISELLE
Grande Sei Tu
Teatro
'75
●Erre RR 3078
○
◉

'60年代はモリコーネのアレンジでビート歌手として成功したが、その後のトラッド・ブームに乗り遅れ、再びロックを歌って巻き返しを図った。ただしそのときイタリアはプログレッシヴ・ロックの渦中にあり、自然にアレンジが70年代風になっている。同レーベルからのアルバムもその傾向にあるが、再度のメジャー入りを目指して夏のディスク・フェスティヴァルに参加した当シングルは'70年代プログレッシヴそのものの味付けになっている。歌詞は当時の標準的な内容だが、夏のヴァカンス向けの曲調ではなく、彼女の声も相変わらず暗い翳があったので、ヒットには至らなかった。完成度は、アルバムより当シングルの方が優れているようだ。 (HIRO TANAKA)



LUCIO BATTISTI
Anche Per Te
La Canzone Del Sole
'72
●Numero Uno ZN 50132
○
◉

バッティスティは自らの音楽探求のため、モゴールと共にヌメロ・ウノ・レーベルを70年に設立し、本人はリコルディとの契約が切れた71年に移籍した。契約アーティストは、リコルディ時代最後のアルバム「Amore E Non Amore」に参加していたメンバーなどで、新レーベルではフォルムラ・トレ、PFMとなってプログレッシヴ・ロック・シーンを展開する。他にもトラッド系やポップス系のアーティストも加入したが、ブルーノ・ラウツィやアドリアノ・パッパラルド、オスカル・プルデンテといったカンタウトーレが主軸だった。当シングルはそういった多くのカンタウトーレの牽引車の役割だったバッティスティのヌメロ・ウノで第一弾で、レコーディングは'71年の秋に行なわれていた。 (HIRO TANAKA)



LUNA
Hallo
Siliah Era Diversa
'77
●Ariston AR 00786
○
◉

針を落すや否やディスコ調のイントロに思わず身を乗り出してしまう。終りまで聴けば特に悪い出来でもなく、キーボードを中心としたテクノ・ポップとディスコを取り入れた一般受けしそうなサウンドを持っている。レコードをひっくり返すと別人の如き哀愁のラヴ・ロックの名曲「Bimba」というLPを想い出してしまった。泣きのフレーズで盛り上げて一気に聴かせてしまうというその手のファンにはこたえられない1枚であろう。Danilo Rusticiのグループのシングルと思い買ったわけなのだが、同じバンドらしいということ以外わからない。'78年にはもう一枚のシングル「Iron Far/Stay Here With Me」(Ariston AR. 00831)が出ている。



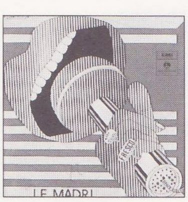
LYDIA E (GLI) HELLUA XENIUM
Guai A Voi?
Invocazione
'73
●Rusty RR 204
○
◉

Scorpyoの前身バンドであるLydia E Gli Hellua Xeniumは、当時の底知れぬイタリアン・パワーに溢れた素晴らしいグループだった。特に紅一点Lydiaのボーカルは扇情的でありながらも虚ろなか細さを兼ね備え、刺激的且つ破滅的なサウンドの要となっている。共にミステリアスで不安気なコーラスで幕を開ける"Guai A Voi!"と"Invocazione"は、終局へと傾れ落ちるかのような暗くヘビーな音作りで胸に迫る。効果音の導入が絶妙で最もプログレッシブな展開をみせる"Diluvio"とLydiaの沈み気味の歌唱が光る"Conoscevo Un Uomo"をカップリングしたもう一枚も高水準の出来で、シングルのみのリリースは残念の一語に尽きる。各曲共聖書をモチーフにしている。 (鈴木伸一)



(LE) MACCHINE ROSSE
Il Vento Della Notte (Anthem)
La Mia Stagione
'71
●CGO AR542
○
◉

エクスプロイトで知られるCGOレーベルからのリリース。A面はディープ・パープルのカヴァーで、原曲もそうなのかどうか知らないが、コンチェルト・グロッソばりの派手なストリングスで幕を開ける。ストリングスにオルガン・ギターが絡み、おおおっと唸るがそれっきりで後は尻下がる一方。B面はブラス入りで興味無し。当時はラジオに出たりもしたらしいこの6人組、'69年にもう一枚リリースしておりこちらが1st。「Luca/La Corsa」(CGO '69 LMR 529)で、A面はアンダーグラウンド・セットをもっとぐっとチープにした様なオルガン・ビート、B面ではかろうじてオルガン・ロックと呼べそうな、ワイルドな展開を見せる曲を聴かせてくれる。 (森下)



(LE) MADRI
Fresco
Mary Flying
'70
●EMI 3C 006-17717
○
◉

'71年に結成されるPERIGEOのオリジナル・メンバー、Tony Sydney (g)が在籍していたイタリアン・ロック黎明期のバンドの一つ。これが唯一のシングルになるもよう。後にIL VOLOに参加するヴィンチェ・テンペラとの共作。A面はポップなメロディ・ラインを持つオーケストレーションも派手な歌物ふう、B面がバレット・ディ・ブロンゾ、RDM張りのヘヴィ・ロック・ナンバー。どちらもシングルの割には決っている。裏声のヴォーカルを重ね、リコーダーを入れたA面曲には、'60年代のブリティッシュ・ポップスをうまくイタリア流にアレンジしたようなところがあって、ほのぼのとした雰囲気がある。打ってかわるヘヴィなギター・リフで固めるB面曲も本格的。早々と実力がのぞいている。 (松本)



MADRUGADA
Katmandu
É Triste Il Vento
'76
●Philips 6025 164
○
◉

2枚のアルバムを発表しているマドルガーダ。このシングルは2nd「インカストロ」当時のもの。A面はひどい。プログレ・ファンは100%ノーだろう。ところがB面になると、本当に同じグループかと思うような哀愁のシンフォニックナンバー。泣きのヴァイオリンをフューチャーして曲を徹底的に盛り持げている。バックに流れるオルガンも美しく、ヴォーカルも実にイタリア然としたやさしさをたたえている。ただし、ラストに取っ付けたようなサックスによるインプロビゼーションは蛇足。彼らのその後の消息は不明。このシングルのB面の傾向でLPを製作して欲しかった。両面とも2ndアルバムに収録。(杉原)



(IL) MAGAZZINO DEI RICORDI
Bugiarda E Sola
Ritorneró
'77
●Insieme INS 5508
○
◉

イル・マガッツィーノ・デイ・リコルディには、'76年から毎年一枚の間隔で4枚のシングルをInslemeという無名レーベルから出している。グループでの基本的な方向性は非常にポップなもので、音も時代の流れに沿い変化していく。1stシングルのA面と本作の両面は、ピアノにストリングスというラヴロックの常套手段を用いているが、ジャルディーノやボッテガと比較すると見落りしてしまうが、ラヴロック・ファンには十分に満足してもらえるであろう。強いて言てば、アルンニ・デル・ソーレに近いかもしれない。但し、3rdシングルは時代を反映し、ディスコ的なノリの曲。（長谷部）



MARIO SCRIVANO
In Un Solo Momento
La Nostra Bandiera
'74
●Kansas 5100 406
○
◉

'65年にSaphirというレーベルからシングルをリリースしたI 4 AngeliというグループのボーカリストだったMario Scrivanoは、'69年にKansasレーベルより〝12 Canzone D'amore〟というアルバムをリリースしているが、このシングルはそんな彼の本領が遺憾無く発揮された好作品。暗い色調のメロディーを世捨て人のように歌う彼の声は虚ろだが滋味に溢れ、深い哀しみを秘めているかのようだ。この後'76年には、同カンサス・レーベルより「Se Non E Amore Che Cos'E/Isabelle」を発表。ロック色は無いが、穏やかで淡々とした歌声が魅力的な好シングルである。（鈴木伸一）



MASSIMILIANO BARATA
Qual Cosa Che Si Butta Via
Pover Uomo
'70
●Help ZH 50067
○
◉

いかにも一時代昔の俳優のような写真のジャケットは、ヘルプ・レーベルのいつものいただけない所なのですが…マッシミリアーノ・バラタもC・パグーノと同じくヘルプ・レーベル専属のマイナーなシンガー。シンガーのシングルと言えば、展型的なカンタトゥーレを想像しがちなのですが、このシングルは一味、違う。もちろん、シンガーであり、シングルという枠ではあるので、基本的には、売れ線のメロディーを持つポップスなのですが、そのサウンド、そこらのプログレ・バンドより〝ロック〟しているのです。女性スキャットとオルガン、ギターがドラマチックな幕明けを演出し、デカタンスを醸し出すピアノと弦楽アンサンブルによる中間部、そしてピストルの発砲音を合図に一気に狂い動くエンディングは圧巻!!（N.Ueno）



MATIA BAZAR
Raggio Di Luna
Pero Che Bello
'79
●Ariston AR/00853
○
◉

垢抜けない5人組が横一列になった「Semplicta」のジャケット。その頃のシングル。A面は'79年のユーロ・フェスティヴァル参加曲。この手のアルバム未収録曲は、他にTV番組用の「Mister Mandarino」、サンレモ音楽祭の優勝曲「E Dirsi Ciao」等がある。B面は「Semplicita」からのカット。後にはもう少し洗練され、ファッショナブルで独特の感情表現を音にあやつる彼等だが、この頃はまだその幅が狭いか。2曲とも、どこかユーモラスな曲調をそなえているポップス。A面よりも、むしろB面の方が印象に残るかも。おどけたようなチェンバロのフレーズの楽しげな曲調にふっと物寂しさが漂よう。このあたりの曲作りあって知名度を得るのは当然。アンネットの癖がそつなく活かされている。（松本）



MAURIZIO E FABRIZIO
Come Il Vento
Neve
'70
●CBS 5205
○
◉

バンコの「…Di Terra」と並ぶイタリアン・ロック管弦楽「Movimenti Nel Cielo」を創作したマウリツィオ・ファブリツィオは、それ以前には兄弟で〝MAURIZIOとFABRIZIO〟というデュオを組んでいた。M. FabrizioとS. Fabrizioである。手元には他に「Andata E Ritorno/Marzo」(CBS 7045, '71)、「Campagna Senza Fiori/Attenzione Occasione」(7427, '71)のシングルがあるが、どれもアコースティック・タッチの小品に仕上げられている。その中でも当シングルは後のCIVレーベルのネーミングになったこのデュオの作品とあって意味深い。両面ともac-gとナイーブなvoで綴られる。オーボエを入れたA面曲など一際デリケートな仕上りだ。一方は独立しシーンを切り開いていった。（松本）



MAURIZIO FABRIZIO
Candy
Piccola Canzone
'76
●Come Il Vento ZCVE50424
○
◉

'78年の2ndアルバムで素晴しいシンフォニック・ロックを発表しプログレファンを魅惑したマウリツィオ・ファブリツィだが、本筋は1stアルバムや本シングルの様な美しいイタリアン・ポップスである。本シングルA面はアルバム未収の佳曲。ピアノをバックに歌いあげ、曲は進行し、女性コーラスが入り曲が盛り上るという王道スタイル。両面供、非常に良いアレンジ(特にストリングス)がされ素晴らしい内容である。余談だが、マウリツィオとファブリツィオの2名のデュオだという説がある。事実、1971年発表のシングル「Attenzione Ouasione/Campngna Senza Fiori」ではMaurizio E Fabrizio名義になり、ジャケにも2名の人物が写っている為、今後の課題となる。（長谷部）



MAURO GALATI
Il Sogno
Un Volo
'76
●Rifi RFN-NP 16657
○
◉

このあたりのカンタウトーレ物、歌物を追い出すと、本当に切りがなくなる。それ程、層が厚い。というよりも、これがイタリアの〝普通〟なのだから当然と言えば当然だ。マウロ・ガラーティというカンタウトーレについては何も判らない。A、B面とも典型的なイタリアン・メロディを持つ曲だ。バックのリズム・セクションもしっかりしている。A面のつややかなオーケストラの連なり方は、さすがイタリアらしい。ヴォーカル・ラインをずらしていくようにしては近づき連なるようにして歌を高める。有りがちな手法だが、このシングル曲はそうした成功例の一つだと思う。B面もその傾向がある。少し「Milano Caribro 9」「Concerto Grosso 1」に通じるつややかさと音の動きの大きさを感じさせる。 (松本)



MAURO LUSINI
...E Le Stelle...
Notte Di Luna Bianco Latte
'72
●Mimo ZM 50258
○
◉

「C'era Un Ragazzo Che Come Me Amava I Beatles E I Rolling Stones/Amo La Liberta」(ARC：AN 4103)がデビュー・シングルと思われるMauro Lusiniは、その後Mimoレーベルと移籍し、何枚かのシングルを発表するのだが、その中でも最も積極的なアプローチを見せるのが、'72年のこのシングルだ。特にB面〝Notte Di Luna Bianca Latte〟は、吹き荒ぶフルートと強いボーカルが主導する重量感溢れる超弩級のプログレッシブ・ロック。美しくも凄絶なるこの曲には完全に打ちのめされてしまう。尚、高度なテクニックを披露するバックの演奏は4+4 di Nora Orlandiというグループ。美しい色彩のジャケットはUp & Downに依るもの。 (鈴木伸一)



MAXOPHONE
Il Fischio Del Vapore
Cono Di Gelato
'77
●Produttoriassociati PA/NP-3267
○
◉

彼らは'75年に唯一のLPを出しているが本作がリリースされたのは、'77年。この2年間の空白について語る資料は何もない。LPが高水準のシンフォニック・ロックだったため若干ポップな色合いを増した本作は音無く聞こえるかもしれないが、A面は仲々の秀作といえそう。メロディーライン等に彼ら特有の持ち味を残しながらも、とても美しい歌物に仕上がっている。ac.ギターによる静かな幕開けながら後半の盛り上がり方などは往時の面影を忍ばせる。一方B面に入ると澄み切った音色は相変わらずだが現代風でかなりイージーな作りになっており、後半部分のピアノ、サックスなどはともすればジャジー。もっとも、ジャズ風の音作りも彼らの守備範囲であることはLPのA1の曲中程で顔を出すパートを聴けば判ることではある。 (江田)



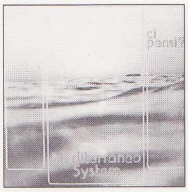
MAYA
Salomon
Yucatan
'72
●Joker M 7142
○
◉

イタリアでプログレッシヴ・ロック・ムーヴメントが定着したのは、各地で音楽祭が催されたことも一因となっている。シチリア島のパレルモで行なわれた〝パレルモ・ポップ'72〟ではデリリウムが〝オザンナの歌〟でデビューしている。このマヤというグループも同じ音楽祭に出演していたが、注目されるまでには至らなかった。結成は70年で、雑誌〝チャオ2001〟がオーガナイズした新人のためのコンサートでデビューした。2曲ともにニュー・トロルス関係の人物によって手掛けられている。音楽祭参加曲のA面はジョルジョ・ダダモの名があり、両面にはアルファタウラスに協力するファンキーのクレジットがある。ただし、5人のメンバーは、ニュー・トロルスの活動とは無関係だったようだ。 (HIRO TANAKA)



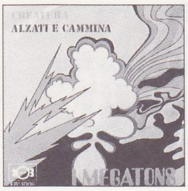
MEDEA
Adieu Jaqueline
Un Riflesso Su Di Te
'77
●Fontana 6026029
○
◉

このシングルの主人公、MEDEAについては例によって何も知るところはない。B面については、平均的なラブ・ロックサウンドで特筆すべきものではない。しかし、A面の出来は素晴らしい。曲調はイタリアというよりも、シャンソン風なのだが、ピアノ、オルガン、ストリングス系シンセ等のキーボード等の配し方が巧みで、起伏に富んだアレンジも適切でかなり上質のシンフォニック・ロックナンバーだと思う。願わくばLPで聴きたいグループだが、その存在について知る由もない。 (杉原)



MEDITERRANEO SYSTEM
Ci Pensi ?
Mezzanotte A Maggio
'77
●VIP 4917
○
◉

メディテラネオ・システムというグループを始めて見た時、これはきっとマウロ・パガーニやカルロ・シリオットの様な地中海風のアコーステック・サウンドだろうと思って、買ってみたのですが、聴いてみてびっくり。まるでガロのヒット曲「ロマンス」の様な明るい爽かなポップスが飛びだしたのだから、もう。(ちなみに僕はガロが大好きで、イタリアン・ポップスはガロに似ている、と思っているので悪い代名詞で言ったのではない、あしからず)イタリアって、やっぱり、ラヴ・ロックの国なのだと、つくづく思い知らされてしまった1枚。このグループは他にもう1枚シングルが出ていたが、こちらは未聴なのでわからない。 (Numero Ueno)



MEGATONS
Creatura
Alzati E Cammina
?
●Centotre FB/1006
○
◉

グループ名とジャケットのイラストを見ると、さぞかし重量級のサウンドだろうと期待してしまうが、そうした印象とは裏腹にとても繊細で美しいサウンドを聴かせてくれる好シングル。やや嗄れたボーカルに絡み付くオーケストレーションが広く伸びやかで、プログレ云々、構成云々といった次元とは切り離して評価したい。それは初期Orme、MucchioあるいはDik DikやEquipe 84等からも感じられるのと同様の淋しさと感傷そして温もりの混在したサウンドで、古さは否めないものの充分観賞に耐えるものである。（鈴木伸一）



(I) MENO UNO
Piccola Mia
Te
'70
●Cormorano ZC-50038
○
◉

MENO UNOは'70年から数枚のシングルを発表した、ラヴロックグループである。1stとも思われる本作にはグループ名に I が付いている。内容の方は'70年の作で、当時、最盛期であった、サンレモ音楽祭で流れていたような曲をイメージさせてくれるタイトルどおりの可愛らしい曲で、聞いている内にVedette時代のイプーを思い出してしまった。この他のシングルとしては、EMIより'74年に「Per Un Momento/Immaginarti」(3C006 17969)'75年「Non sei felice(Non sei sincera)」'76年「Che strana donna/Ecco e l'amore」(このジャケットは、あのキーボードトリオ、SFFのシンフォニックピクチャーズとうり二つ)と四枚確認されているが、'70年～'74年と間があいているこで、他にあるかも知れない。（堤野）



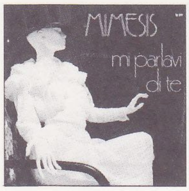
MENO UNO
Non Soi Lellce
Non Sei Sincero
'75
●EMI 3C006 18087
○
◉

I POOH大好きBOTTEGA一番の私が、超お薦めする。このMENO UNO何といってもメロディーラインが大変美しく、ヴォーカルも絶品。これぞまさしくイタリアンシュガー。このグループを語ると誉め言葉しか出てこないのだが、とにかく一度だまされたと思って聞いてみてほしい。I NOMADIや、DIK DIKの好きな方なら絶対に満足していただける事うけあい。BOTTEGAと同じEMIからのリリースだが、さすがに大手レーベル、録音もしっかりしているし、アレンジを含むプロデュース面も派手になりすぎず聞いていても何か安心感の様なものが有る。個人的には、'76年のChe Stranadonnaが一番気に入っているのだが、もちろん他のシングル曲も佳曲ぞろい。尚この曲B面はカラオケヴァージョンである。（堤野）



(I) MIGRANTS
In Una Sera
Fiore
'?
●Bla Bla BBR 1304
○
◉

プログレ・イコール大作というお考えの方にはシングルはあまり魅力がないかもしれない。だが、実力はありながらもシングルだけで終ってしまったグループは数多い。それでも無視するか、それとも、その一端にでも触れようとシングルを買い集めるか、迷うところである。このBla Blaレーベルより発表されたMigrantesの多分唯一のシングルは70年というまだ早い時期にありながらかなりの完成度の高いサウンドを持っていた。オルガンのイントロから始まりヘヴィーなギターとドラムが加わり、ヴォーカル・パートになると叙情的になる。B面もイタリア独特の生ギターのつま弾きから始まる叙情的な面を持ったヘヴィー・サウンドの秀曲。（吉瀬）



MIMESIS
MI Parlavi Di Te
Lascio Qui
'80
●Eleven EL89
○
◉

「Tu Grande Amote Mio/Le Mia Ingenuita」(Harmony H 6020, '77)に続いて本シングルを発表し、その後の消息は不明。イタリアによくある経歴を持つグループ。本シングルA面では、ボッテガの4thアルバムにも通じる良質のラヴロックを演奏している。初期のボッテガやジャルディーノのような、凝ったアレンジは'80年代になり影を潜めるという時代に沿ったアレンジが施され、大袈裟なオーケストラなどは無いシンプルな音だが、各楽器が効果的に配置される。特にマンドリンのトレモロ、ギターのヴァイオリン奏法等は見事である。B面は明るめのポップスだが、イタリアン・ポップスもOKという方には十分お薦め出来る。（長谷部）



MIRROR
US Woman
Sailor's Wail
'73
●Ariston AR 0507
○
◉

元トリップのビリー・グレイのバンドとの触れ込みで入手したシングル。確かに両面共彼の名がクレジットされているが、実際に演奏しているのか、あるいは彼のバンドであるのか、不明。というのも手元にあるもう一枚のシングル「Fire"In My Life"/Secret Convension」(Cipiti '74 CPTNP 1031)には彼の名前が無いからだ。A面はごくごく平均的なオルガン入り普通のロック。B面は厚めのキーボードをバックに女性がヴォーカルが歌い上げる。我々プログレバカが好きそうな曲。この内容を聴いてしまえばビリー・グレイがいるかいないか気にする必要も無いだろう。秀曲である。もう一枚シングルを出していると記憶しているが今回は確認出来無かった。御存知の方は御連絡下さい。（森下）



MOSÉ
Auxilium
Come Ho Voluto Io
'72
●Philips　6025 071
○
◉

彼らは、ヴォーカルのタイプがアリエスに近いが'60年代の雰囲気を残しているので'70年代のグループのように目まぐるしい曲展開はない。ジャケットやグループ名が思わせぶりだが、比較的オーソドックスなものである。当シングルに関わっているのは'60年代のビート・グループ出身の2人。プロデュースはイギリス人とシェル・シャピロで元ロークスのリーダーだった。プロデューサーとしてよりも作曲家として今でも大活躍中。もう一人は元リベッリのキーボーダーのマッシモ・サレルノ。リベッリ時代は、ジャンニ・ダラッリョやデメトリオ・ストラトスらも一緒だった。サレルノは当シングルではアレンジャーとして重要な役割を占めている。彼もまたシャピロと同様今でも第一線にいる。　(HIRO TANAKA)



(IL) MUCCHIO
Lei Se Ne Andra
Il Giullare
'73
●Carosello CI 20358
○
◉

'60年代にポップス・バンドとして出発したというムッキョには、'70年の唯一のアルバムの他、3枚のシングルがある。'70年の「Per Una Liberta/Qualcuno Ha Ucciso」はアルバムからのカット、'72年の「Un'Estate Senza Caldo/Quanto Vuoto C'E'」(Carosello CI 20317)と'73年のこのシングルがアルバム未収録だった。と言うのもメロウ・レコードからのCD再発時に、これら未収4曲とも追加収録されている。アルバムでのヴォーカル中心の曲作りは、これら4曲でも変わりはないが、といってつけたようにKbdが入るなど、当時の流れをも読めそうだ。その点ではB面曲の方が興味深い。垢抜けないポップ感覚が時としてほのぼのとした味わいにも感じられたアルバムに比べるとどこか無理がある。　(松本)



MYOSOTIS
Dietro La Finestra
Un Cuore Da Dividere
'70
●Cat Records LMD 4
○
◉

今となると古さが幸いして新鮮に聴こえる、と言わないまでも瑞々しく聴こえるということがある。この錯覚(誤読)は意外と人を魅きつける。20年も経てばシミ跡も興味深い模様に見えるということか。このシングルなどは、まさにそれである。コーラス・デュオらしく妙に当時最新鋭の機材を使わず声でオーソドクスに仕上げた事が、まず幸いしているように思う。音数が少ないので響きや空間ができている。そしてメロディ・ラインと来て、最後はルイス・エンリケス・バカロフのアレンジで仕上げ。チェンバロが下地になってよく響く。そこにアコ・ギやフルートが入る。遠くに回ったストリングスも功を奏しバカロフの正解が今に。このデュオはもう1枚のシングル「Tu Non Hai Piu Parore」がある。　(松本)



NAT ROMAN
Il Sole Del Poeta
Ambabaia
'72
●Cetra SP 1500
○
◉

NAT ROMANというのがグループ名なのかどうか、全く情報もなく良く分からない。A面のナンバーがシンフォニックでとても良いので紹介する。インスト・ナンバーで曲自体は非常に単純な構成ながら、バックに広がるストリングス系のシンセが美しく、メロディーラインも印象的。ただし、プログレッシブ・ロック的な展開はなく、イージーリスニング的と言えなくもないが、こういった音楽もまたイタリアが得意とするところだ。イタリアのシングルらしく、このシングルのB面も例によって評価に値しない出来。どうも音楽性に一貫性がないのも、またイタリアならではといったところか。　(杉原)



NEW IMPRESSION
Non Eri Un Giglio
Povero In Canna
'72
●Las Vegas LVS 1058
○
◉

当時星の数程を有ったと思われるポップス、ラブ・ロック系のグループの一つと言ってしまえばそれまでだが、それでも初期ニュー・トロールス的な親しみ易いポップ・サウンドの合間に、突然顔を出すP・F・M的清澄さはユニークで、心惹かれるものがある。もう一歩踏み込めれば、大化けしていたかもしれない惜しいグループだ。メンバーは4人で、I TrollsのPino Scarpettini, Il SintomのBilly Calati, La Pantere NereのMarino Regina, HippyのGigi Rizziという顔触れ。他に2枚のシングルを確認出来る。
(鈴木伸一)



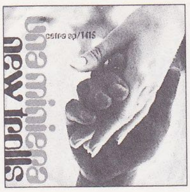
NEW TROLLS
Sensazioni
Prima C'Era Luce
'67
●Cetra SP1355
○
◉

NEW TROLLSのデビュー曲である。'67年と言えばアメリカン・サイケの代表であるヴァニラ・ファッジが同じくデビューを飾っているが、トロルスはアレンジに於いて多分に影響を受けている事が容易に伺い知れる。日本では初め彼らの事を「アート・ロック」として紹介していた様に、A面では魔訶不思議な世界を披露してくれるが、LP未収のB面になると一転ストレートなロックン・ロールを聞かせてくれる。翌年「VISIONI(幻想)/IO TI FERMERO'」(SP1369)で"夏のディスク・フェスティヴァル1968"に参加、見事入選を果たした。この曲には珍しいプロモ・フィルムが残っていて、若かりし頃のメンバーの演奏シーンを見ることが出来る。LP未収のB面はヴィットリオの熱唱が聞ける重々しいバラードである。　(片山)



NEW TROLLS
Cristalli Fragili
Ehi Tu Ritorna
'68
●Cetra SP1381
○
◉

TROLLSの3枚目にして初のサウンド・トラック盤。A面は映画〝BANDOLERO !〟をモチーフにしているとスリーヴに書かれているが、イタリアのマカロニ・ウェスタン特有のガンマン達が並ぶ写真を見れば、自然と音の想像がつくと言うものだ。普段は耳に付くニコの弾く粉っぽいギターの音もここでは妙にハマっていて、ファルセットによるカウンター・メロが西部の山岳地帯をほうふつとさせてくれる。B面もサウンド・トラックであるが〝I DANNATI DELLA TERRA〟と言うタイトルから察するに、どうやらサスペンスものの映画の様だ。イントロの緊張感から一気に盛り上がって行く展開はお手の物だろう。この曲で既にジャンニ・ベッレーノの超裏声が活躍している。以外と知られざる名盤じゃないだろうか。　(片山)



NEW TROLLS
Una Miniera
Il Sole Nascera
'69
●Cetra SP1415
○
◉

A面〝鉱山〟は名曲である。誰しもが一度聞けば決して忘れる事の出来ない懐かしいメロデイーを持っている。僕の知る限りではライヴ、再演と合わせて5回もLPに収録されている所を見ると、メンバー自身そうとう気に入っている様だ。しかし、このシングルの本当の価値は実はB面の方に有る。あの「コンチェルト・グロッソNo.1」のB面全てを使った大作〝空間の中から〟で、唯一ヴォーカルの入るパートの部分の元になったのが何を隠そうこの曲なのである。LPの方はあっと言う間に別の展開になるが、シングルではこの最も印象的なさびが繰り返し登場し、聞き手を攻め立てる様にドラマチックに盛り上がる。この辺りの畳み掛ける様は、トロルスならではのもの。グロッソ・ファンは必携のアイテム。　(片山)



NEW TROLLS
Annalisa
Allora Mi Ricordo
'70
●Cetra SP1427
○
◉

TROLLS9枚目のシングル。A面はブリティッシュ・ロック的重厚さを持つ今までに無い曲調だが、間奏のメローなギター・トーンはさながらクイーンを連想させる。(御存知の事と思うがクイーンのデビューは72年である。)B面はLP未収だが乗り乗りのロックン・ロールで、後奏のオルガン・ソロがやたらと盛り上がる。プログレでもシンフォニックでも無いがハモンド好きやブリティッシュ好きにはたまらないシングル盤になりそうだ。この頃既に彼らはヒット・メーカーとして数多くのヒットを飛ばしているが、〝夏のディスク・フェスティヴァル1969〟には「DAVANTI AGLI OCCHI MIEI(瞳にうつる君)」、〝サン・レモ音楽祭1969〟には「IO CHE HO TE(君だけのぼく)」で参加している。　(片山)



NEW TROLLS
La Piu' Bella Sei Tu
Come Cenerentla
'70
●Cetra SP1445
○
◉

TROLLS11枚目のシングル。当初5人編成でスタートした彼らだが、ここに来てキーボードを担当していたマウロ・キアルージが抜け、初期黄金の4人組が出来た。ニコ・ディ・パロ(Vo, G)は特にデビュー時に於いてリード・ヴォーカルを担当、独特の高音域の声質はイタリア人特有のもので、ヴィットリオ・デ・スカルツィ(Vo, Key, G, Fl)の持つバリトン・ヴォイスと好対照を成している。この二人とジョルジョ・ダダモ(Ba)の3人がトロルスの大半の曲を書いていて、ジャンニ・ベッレーノ(Dr, Vo)の奇声にも似た超ファルセット・ヴォイスがコーラスに絡み、色彩を加えている。A面は珍しく女性コーラスを導入したサンレモ風ポップスで、B面は〝幻想〟を意識した明るめのロックである。　(片山)



NEW TROLLS
Autostrada
Il Nulla E La Luce
'70
●RCA BM3563
○
◉

TROLLSのLP未収シングルは20枚近くあるが、入手の困難さと楽曲の良さで比較すればこのシングルがダントツだろう。映画「TERZO CANALE」のサウンド・トラックとして制作されていて、このシングルの両面を収録したアルバムも存在する(RCA PSL10485)。レーベルがチェトラではなくRCAなのはサントラ盤の都合なのだろうが、面白い事に彼らのシングルでは初のステレオ盤である。又他にも新しい試みが成されており、A・B面共ジャンニ・ベッレーノ初の書き下ろしであると共に、ジョルジョ・ダダモとの共作でJODY CLARKやTHE FOUR KENTSといったアーチスト達に曲を提供しているのが興味深い。曲の方は流石にドラマーの曲らしく、タイトなロック＋オルガンで両面共最後まで一気に聞かせてくれる。　(片山)



NEW TROLLS
Una Storia
Il Vento Dolce Dell'estate
'71
●Cetra SP1449
○
◉

「UNA STORIA(ある物語)」は〝サン・レモ音楽祭1971〟参加曲でLP未収である。自作曲では無いがアレンジに於いて、かなりプログレッシヴに処理されている。特にここ数作の中で大活躍しているオルガンには目が離せない。この曲はI PROFETIによっても唄われたが、全く別の曲に聞こえてしまう程である。B面もLP未収で、トラッド・フォーク調のさわやかな曲だ。同年〝夏のディスク・フェスティヴァル1971〟参加曲である「VENTI O CENT'ANNI(20又は100年)/UNA VITA INTERA」(SP1453)を発表、〝ある物語〟をよりハードにした展開を見せてくれるが、この曲をモチーフにあの〝ほほを濡らすしずく〟が生まれたと言っても過言では無いだろう。両面共LP未収だが、B面はこれまたフォーク調の陰鬱なけだるい曲。　(片山)

NEW TROLLS
La Prima Goccia Bagna Il Viso
Parte-2
'71
●Fonit Cetra SP 1460
○
◉



多数、LP未収シングルがあるニュー・トロルスだがそんな彼等のシングル群の中から本作を代表してあげておく。'71年、ヴェネチア音楽祭のライヴ・レコーディング作品でAB面あわせて8分半の演奏が収録されている。日本ではA面が'71年に、B面が'79年にと別々に発表されている。初期ニュー・トロルスのハードな側面をかいまみることができるだろう。聴く曲々によって、多少統一感のないグループだが、どのアルバムもそれなりに素晴らしい作品であり、いぶし銀のようなしぶさを秘めた玄人好みのグループであるといえるだろう。トロルスを軽視している向きにはこの機会にぜひ再評価をうながしたい。 (今)

NEW TROLLS
Black Hands
Percival
'72
●Fonit Cetra SP 1494
○
◉



B面が「Searching For The Land」からのカッティングなので72年頃の発売だろう。Font は発売年が明記されていないので困る。次々と名作を発表する以前とはいえ、この「Black Hand」の出来はすばらしい。TVドラマのテーマ曲のためか、いままでの彼らのサウンドと多少異なる部分があるが、メロディの感じは前述のLPの1曲「Searching」に良く似ている。さらにロック調でドラマチックな曲作りにしたという感じ。(ドラマチックな曲が好きなので、私の担当にはこの言葉が多くなってしまう。)ジャージーな感じの Gianni Belleno のドラムがいい。曲全体をひきしめている。さらに効果的なピアノといい、ヴォーカルのメロディーラインといい New Trolls ファンでなくても魅力的なシングルにちがいない。 (吉瀬)

NEW TROLLS
Una Notte Sul Monte Calvo
Somewhere
'74
●Magma MGL48007
○
◉



TROLLSの長い歴史の中で最も重要な時期が、この分裂の時期だろう。ヴィットリオ・トロルスはそのメンバーからも分かる様に、ややアヴァンギャルドなロックへと傾倒しているが、以前にも増してインストルメンタルな部分が多くなったのは致し方無い。「禿山の一夜」はそういった流れの最終到達点なのではないだろうか。シングルではシンセサイザーを強調したＰＦＭばりの大胆なミックスが展開されているが、このテイクはこれとドイツ盤の「NIGHT ON THE BARE MOUNTAIN」(PAN88278)の中でしか聞くことが出来ない。B面の"SOMEWHERE"は名作「見知らぬ桃源郷の探索」の世界に近いバラードだがイタリア語で唄われており、この英語バージョンはオムニバス・アルバム「REVIVAL」(MAL06)で聞ける。 (片山)

NEW TROLLS
Bella Come Mai
Lei
'76
●Magma MAG01
○
◉



TROLLS和解後初のアルバム「コンチェルト・グロッソNo.2」に先行して発売されたシングル。ヴィットリオの父が設立したマグマ・レコードから出された。この時からリッキー・ベッローニ(G,Vo)が加わり5人組となった。A面は「グロッソ2」の中でも印象的な曲だったが、とりわけB面のバラード"LEI"の美しさは他にたとえようが無い。新メンバーのリッキーが早速リード・ヴォーカルをとっている。翌年「SOLAMENTE TU/LET IT BE ME」(MAG07)が出たが、A面はワーナーへ移籍する為の布石ともとれるポップな仕上がりを見せている。B面は「グロッソ2」よりジルベール・ベコーの名曲。尚この2枚と"禿山の一夜"の別ミックスを収めたオムニバス・アルバム「REVIVAL」(MAL06)も発売された。 (片山)

NEW TROLLS
It's Downtown
I Can See The Rain
'78
●EMI 006-061944
○
◉



'78年WBに移籍し、史上最強の6人編成となったトロルスにスペインでサントラ盤の仕事が舞い込んだ。世界中で大ヒットした映画「サタデイ・ナイト・フィーバー」の煽りでスペイン国内でもディスコものの映画を作ろうと言う事になったらしい。タイトルは「NUNCA EN HORAS DE CLASE」(EMI 062-061953)で、このアルバムからカットされたのがこのシングルと、「HA HA HA/GOOD MORNING PEOPLE」(EMI 006-062358)である。全曲共英語で唄われており、全くの新曲であると同時にビージーズの"ステイン・アライヴ"に意識的に似せた曲調や、ニコの驚くほど高いファルセットなど聞き所は多い。尚、同時進行で制作されたアルバム「アルデバラン」もスペイン語ヴァージョン(HISPAVOX 60230)が発売されている。 (片山)

NEW TROLLS
Anche Noi
Prima Del Concerto
'79
●WB T17342
○
◉



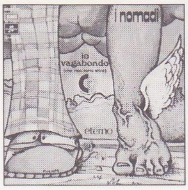
チェトラ、マグマと渡り歩いたトロルスだが、'78年に入って心機一転メジャー・レーベルのワーナー・ブラザーズと契約、アルバム「アルデバラン」を発表した。新メンバーに元ヌオヴァ・イデアのジョルジョ・ウザイ(Key, Vo)が参加し、トロルス最強の6人編成となった。この勢いで翌年出したシングルがこれで、両面共LP未収である。TV番組「ルナ・パーク」のテーマとなっているが、抜群のディスコを聞かせてくれる。映画「サタデイ・ナイト・フィーバー」の影響でいきなりビージーズ路線を走り出したトロルスだが、ニコのファルセットは意外とバリー・ギブに迫るものがある。スタジオ内の和やかな雰囲気で始まるB面はコーラスを最大限に活用しており、ややジャズ・ロック調の佳曲である。 (片山)

N



NEW TROLLS
Musica
Poster
'80
●WB T17654
○
◉

WBに移籍して「ALDEBARAN」、「NEW TROLLS」と順調に良質でポップなアルバムを発表して来た彼らの、ワーナー時代最後のシングル。もちろん両面共LP未収である。A面では「ANCHE NOI」にも通じるポップ・ロック路線を踏襲、アップ・テンポの中で6人による痛快な演奏が堪能できる。B面では一転、あのクラウディオ・バリョーニの超名曲「ポスター」をカバーしているが、絶妙なコーラス・ワークでオリジナルとは優劣付け難い出来だ。この曲は'92年作「QUELLI COME NOI」でも再演されている。この後トロルスは4人編成となり、'81年にシングル「LA NELLA' CASA DELL' ANGELO(天使の家)/IL TRENO」(SP1762)を発表、TV番組「DISCORING」のテーマだがアルバム「FS」を凝縮した様な密度の濃い秀曲である。（片山）



(I) NOMADI
Io Vagabondo
Eterno
'72
●EMI 3C 006-17817
○
◉

ノマディの傑作。'72年、と言えば「Un Giorno Insieme」が出た年だ。充実している。A面曲は多分当時出たコンピレーションを始め、後々の中にも収録されていると思うので、どこかで聴けると思う。曲としては歌い上げていくオーソドックスなイタリアン・ナンバーだが、メロトロン等を加えての一回り大きなオーケストレーションが特徴。シンフォニック色が強い。一方B面になると歌物バンドとは思えない斬新な音作りになっていて、こちらも聴きごたえがある。ムーグ?を多用した実験色の強い曲でアコースティック・ギターのやや無調の響きが被せられている。また所々に効果音も盛り込まれる。これで一応ヴォーカルも入るあたりが恐い。まさにイタリアン・ロック全盛を証明する好サンプルでもある（松本）



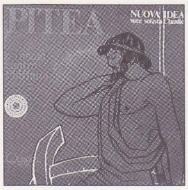
NOMADI
Mamma Giustizia
Il Caso È Felicemente Risolto
'73
●EMI 3C006-17927
○
◉

ベーシストを交通事故で、次いでリード・ヴォーカルのアウゲストが病気で他界してしまったために新生ノマディは同名の別グループのようになってしまった。当シングルはヴィットリオ・サレルノ監督の映画に使用されたサントラ盤で、A面がノマディの歌と演奏、B面が同曲のインストで曲名は映画のタイトルと同じになっている。音楽担当者は『世界残酷物語』『黄色いロールスロイス』やダリオ・アルジェント監督作品でも知られているリズ・オルトラーニ。ジャズの手法を取り入れたクールな曲調は、ノマディの中でも異色のものといえる。タイトルは『否、事件は好ましい結末にはならない』という意味で、ノマディの歌は『母の正義』あるいは、『母の裁き』といったところか。
（HIRO TANAKA）



NOME
Marte Alla Volta
Trine
'89
●private press GN 001
○
◉

イタリアの'70年代プログレという重箱の隅を虫眼鏡で覗いた様なこのシングル編の中では'89年リリースの本作は異彩を放つのではなかろうか。'89年は5年前だがこの業界ではつい最近である。音の方も、シングルでは他に類を見ないチェンバーロックである。路線としてはヘンリー・カウ、ジュルヴェルヌだろうか。A面では女性ヴォーカリストをゲストに迎え、そのヴィブラートの効いたオペラチックヴォーカルを多数の金管楽器で責め立てる言った具合でカウの赤いクツ下を思い出さずにはいられない。B面はインストでフリップ、ロジュ・トリゴー風トコロテンギターをメインに無調の変拍子大会。プレザン＋ウェスタンカルチャーか。本作以外の活動は不明だが、実はLPがあってレコメンが配給してたりするのかも。（森下）



NUOVA IDEA
Pieta, Un Uomo Contro Linfinito
Dolce Amore
'70
●Oregon OR 700
○
◉

ヌオヴァ・イデアー知られているだけでも3枚のLPと4枚のシングルをリリースしているグループである。本シングルは、LPリリースに先がけて彼等がリリースした最初の録音で、LP未収録音である。'70年ということもあって荒削りなサウンドであずが、後の彼等のサウンドへの伏線的な役割を担っているといえば良いのだろうか。数あるイタリアンロックの中でも、名前こそ知られているものの、日本では、人気のないグループであるが、プログレッシヴでかつポップなサウンドは、オリジナリティあふれる素晴らしいものであるといえよう。初期オザンナ風1st、軽快なプログレッシヴ・サウンドを有する2nd、2ndの延長線上にありながら自己の音楽性を最も明確にした3rdとどれも仲々の好作品である。（今）



NUOVA IDEA
Sara'Cosi
Uomini Diversi
'73
●Aristar AR.0589
○
◉

'73年、3rd「Clowns」発表前のシングル。両面ともアルバム未収曲で、A面はシャウトするヴォーカルや、そのサウンドがまるでブリティッシュ・ハードロックの様だが、問題はB面で、ウザイのストリングス・シンセを始めとする多彩なキーボードワークと、美しいコーラス、アコースティック・ギターとがからみ、なかなか凝った展開を見せる。3rdより2ndに近く、派手さはないがイタリアらしいなかなかの秀曲である。（木下）



(LA) NUOVA GENTE
Doremi
Noi Contro Noi
'76
●Durium Ldal-7947
○
◉

DURIUMレーベルからリリースされたこのグループのシングルは、知名度こそ低いものの、これぞラヴロックと言える好作品に仕上がっている。とは言っても、ソリーナやメロトロンが大活躍している訳でもなく、曲の展開が素晴らしい訳でもないが、マイナーからメジャーコードに移り〝ドールミ〟とサビの部分では思わず一緒に口ずさんでしまう。そう、ラヴロックで大切なのは、一緒に唄えると言う事ではないだろうか?このグループ、アルバムは確認されていないが、他に一枚、FMAレーベルより、A面Che Sarei B面Fantasma d'alle Gria(ZFR50403)と言うシングルが、'76年にリリースされているがこの曲のプロデューーさーは、PFMでお馴染みの、クラウディオ・ファビである。　(Amore　堤野)



NUOVO RACCOLTO
Hosbagliato Io
Arriverai Domani
'76
●Dig It DG 1140
○
◉

ヌオーヴォ・ラコルトというグループは、1970年代中～後半にシングルを数枚リリースしている。いわゆる〝ラブ・ロック〟グループである。彼らのサウンドは、バンドというよりも、どちらかと言うとシンガーの作品に近いアレンジに仕上っており、いかにもシングル・ヒットを狙いましたという作品。(これは悪く思って言っているのではない。あしからず。)それだけに甘く切ないオルガンやムーディーなプロフェト系のシンセのメロディーと、室内弦楽アンサンブルが見事に溶け合った秀品としての風格がある。イタリアには、いったいどのくらいのこの手のグループが、ヒットを狙い消えて行ったのだろう、と驚異的な層の厚さに舌を巻かざるをえない。ラヴ・ロック・マニアは必聴だ。　(N Ureno)



OFFICINA MECCANICA
The Land Of A Thousand Dances
Un Prato E Poi Sognare
'73
●Picci LG 3020
○
◉

「Signora Marisa/La Mia Strada In Periferia」(Picci LG 3014, '72)に続く2ndシングル。計5枚のシングルを残し、アルバム製作されなかった事が非常に惜しまれるバンド。基本的には1～2作目でのラヴス・ロックが持ち前のバンドだが、これを延長してシングルとしては驚く程プログレッシヴな作りを見せる3作目「Bambini Innocenti」、そしてがらりと変って歌物として好作の4作目「Amanti Di Ieri」と、個性のあるバンドだ。ギターにはジャズ色があり、そのシングルのB面にはドラムに初期クリムゾンに似たニュアンスもある。A面はコピー曲で論外だが、後半にアープ・シンセサイザーが絡むB面など何か無理なフェイド・アウトだと思う。アルバムがあっておかしくない曲作りだ。　(松本)



OFFICINA MECCANIC
Bambini Innocenti
(Strumentale)
'73
●Picci L 63929 3029
○
◉

読者の皆さんにはこの〝オフィチーナ・メカニカ〟というグループ名はあまり馴染みのない名前だと思う。それもそのはず、現在5枚のシングルの存在が確認されているだけの超マイナーグループだ。(恐らくLPは制作していないと思われる。)このシングルは、暗い讃美歌風コーラスをイントロとして、クリムゾン張りのブラス・アンサンブルと優い溢れる生ギター&ボーカル・パートが織りなすプログレを展開する。チェルヴェッロやイル・バレット・ディ・ブロンゾの「YS」のイントロ的雰囲気だ。B面はこの曲のインスト・ヴァージョンで、こちらはイフ・タイプのブラス・ロック・アレンジに仕上っている。また他の2枚も同様のブラス・ロック・サウンド。　(UNO)



OFFICINA MECCANICA
Amanti Di Ier
Insieme Al Sole
'77
●Vedette VVN 33285
○
◉

Officina MeccanicaのVedette移籍後の秀逸な1枚。Picci時代のサウンドは、OsannaやCervello等にも通じる妖し気な暗さとP・F・MやLatte E Miele的清澄さとが、練り上げられた構成の中で極めて魅力的に作用し合った非常に優れたものだった。真にプログレッシブなグループであり、当時の第1級のグループと同列に扱われ論じられるべきである。このシングルは彼等のそうした持ち味を失うこと無く更に純化され、無垢なまでの清楚さを漂わせた名曲である。穏やかな情感など不思議な温もりに色どられたこの作品は、静かに高まる緊張感を伴って、再び我々に忘れ難いOfficina Meccannica節を聴かせてくれる。　(鈴木伸一)



OMBRE DI BRONZO
Finirá
L'eterna Primavera
'?
●Fono Rama F.NP 020
○
◉

さてこのナゾー様でも出てきそうな名前の得体の知れないバンドのシングル、曲は〝For your love〟のイタリア語版。なんだ、と思うなかれこれがヤードバースが土下座して謝まる程素晴らしく、しかもオルガンパワーでツェッペリンをも踏み潰す壮絶な破壊力なのだ。特にキメの部分のアレンヂが実にカッコ良く、まさに「星野、木俣(ほしーのきまったつ!!仏壇は長田屋!」と同等の迫力、まさに怒濤のエンディングでキックアタック電光パンチだ。イタリアンシンフォニックの底力をまざまざと見せつける一枚。♬ながたやだー　(牧野)



(GLI) OPERA
Donna Di Chi
Se Tu, Se Mai
'75
●CBS 3260
○
◉

アルバムの存在をうわさされながらなかなか確認出来ないオペラの'75年CBSシュガーからの作品。彼らのサウンドは所謂ラブロックというレッテルをはられるだろうが、リズムセクションがしっかりしているので単に甘さに走らないところがいい。A面はオーケストラに女性コーラスを配した美しい曲。〝Se Tu Se Mai〟の方はストリングスのリフレインがドラマチックなナンバー。みんなでアルバムを見つけよう。 （木下）



(GLI) OPERA
L'ho Persa Ancora
Se Tu, Se Mai
'76
●CBS 4042
○
◉

オペラといえば、'78年にDuriumから出た「Aria Acqua〜」が一番人気だが、他にも魅力的なシングルを数多く残している。アルバムが確認されないのが本当に不思議だ。今までのオーケストラをシンセ系ストリングスに置き替えたA面は、タイトなリズムにゆるやかなストリングスシンセ、チュブラーベルズ、マンドリンの調べが印象的なナンバー。B面は、前年の「Danna〜」のB面と全く同じナンバー。 （木下）



(GLI) OPERA
Lei Bambina Lei Signora
Cara
'76
●EMI 3C 006-18209
○
◉

'76年EMIからのシングル。この頃のオペラにははずれはない。このシングル両面ともシンセ系キーボードをうまく使ったナンバーで、共に後半のリフレインがとても印象的だ。個人的にはこのシングルの出来ばえと同レベルのアルバムが見つかれば大喜びだ。同レベルということもあり、ボッテガの唯一のライバルとなるチャンスはあったはずだ。彼らは、この手のグループとしてはほんとにリズムがタイトでなかなかよろしい。 （木下）



(GLI) OPERA
Re Salomone
Aria, Acoua, Terra E Fuoco
'78
●Durium Ld AI 8001
○
◉

10数枚のシングル盤を発表しているオペラが、とてつもない曲を残していた。ラッテ・エ・ミエレを彷彿させる教会音楽風の「空気・水・土・火」（自然界はこの4つの元素でできているというヨーロッパ中世の考えに基づく。サード・イヤー・バンドのLPタイトルにもある。）を聴いたなら、ジャケットに写っている彼らが天国から降りて来た天使にみえてしまうだろう。作詞・作曲は両面ともF.Ricciardiで、他のシングルの曲も彼が多く手掛けている。また、パンダというグループとメンバー交流があるらしいということも付記しておく。 （吉瀬）



(GLI) OPERA
Il Diario Dei Segreti
1000 Anni Luce
'79
●Durium LdAI 8038
○
◉

A面は彼らお得意の甘く切ないラヴロック。B面は〝千年光〟なるタイトルのSFチックな曲で効果音的シンセが大量に盛り込まれた彼らとしては異色の作品。行き過ぎを承知で言えばプラネタリウム。しかしメロディはGens, Operaを通して多数の名曲を書いて来たF. Ricciardiのものでオペラとしてのアイデンティティは失われていない。次作〝Volare Mai〟は名作としてその次の「Lassia Che Sia/Senti」（Durium LdAI8078, '80）、ロック色が強いと言えば聞こえはいいが、実はオーケストラを付けるだけの金をかけてもらえず冷遇されていた時期だったのではないかと想像するがどうだろう。レーベルを移っての「Guerriero/Con Lei」（Radio '81 ZBRR 7210）も悪くないが最早ラヴロックとは言いづらい。 （森下）



(GLI) OPERA
Volare Mai
Vecchio Mercante
'79
●Durium LdAI 8050
○
◉

1975年にCBSより「Donna Di Chi/Se Tu, Se Mai」でデビューし'81年まで活動したオペラだが、一般に人気が高いのは「Re Salomone」のB面だろう。本シングルも同様にA面は良く出来たラヴ・ロックなのだがB面は、クイーンの影響を受けたとしか言いようのない大胆なコーラスとアレンジをしたプログレッシブな作品である。曲はシンセの音からストリングスで始まりコーラスが入って来て、「いつものラヴ・ロックかな?」と思われるが強引とも思われる展開でボヘミアン・ラプソディのコーラス・パートを思わせるパートへ。もう少し演奏能力があればと残念に思われる。又、オペラの中心人物F, Riccardiは今話題のGENSの中心人物でもある。 （長谷部）



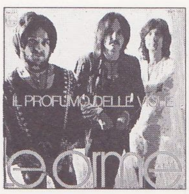
DONELLA DEL MONACO/
OPUS AVANTRA
Allemanda
Flowers On Pride
'75
●Suono SRNP 5002
○
◉

高潔な精神と純粋な創意の昴場は、これ程迄に美しい作品を産み落とし得るのだろうか。典雅で気品溢れる響きと清澄なリズムの香りを漂わせる〝Allemanda〞は、Donella Del Monacoがその極みとも言うべき歌唱を聴かせる珠玉の名曲。アヴァンギャルドとは無縁のOpus Avantraの奥床しい演奏を従えて、たおやかに高らかに歌うDonellaのソプラノ・ヴォイスが心奥を震わせ天空に舞うこの曲は、時の刻みを忘れさせる永遠の美を我々の脳裏に植えつけてくれる。2ndアルバム収録曲とは似て非なる〝Flowers On Pride〞も又Donellaの独壇場で、華やかで官能的な歌唱がダイレクトに胸を打つ傑作。狂おしい迄の感性の発露はアルバム収録テイクを霞ませてしまう程充実している。絶品。 (鈴木伸一)



(LE) ORME
L'aurora
Finita La Scuola
'70
●Car Juke Box CRJ-MP1059
○
◉

現在まで実に長い音楽活動を続けてきたオルメだが、一般に知られているのはフィリップスに移籍後のアルバム群である。しかし、オルメはそれ以前にも数年の音楽キャリアを持ち、カー・ジューク・ボックス・レーベルに2枚のLP(Ad Gloriam, L'aurora)と知っているだけでも6枚のシングルを70年までにリリースしている。本作は2nd LPからのカットであり、フィッリップス以前の最大の名曲である「ラウロア」が片面に収録されているので、前後オルメの作品を代表させてリスト・アップしておく。最初期のビートルズとサイケデリック・ミュージックからの影響を離れ、たおやかなオルメ節とでもいうべきものを確立したモニュメント的作品で、正にイタリアの夜明けの空をかざるオーロラ的名曲である。 (山崎)



(LE) ORME
Il Profumo Delle Viole
I Ricordi Piu' Belli
'70
●Philips 6025 022
○
◉

'67年にデビューしたオルメは数々のシングルと二枚のアルバムを発表した後、70年にそれまで在籍したCAR JUKE BOX RECORDSを離れメジャー・レーベルのフィリップスと契約した。そして移籍後初のシングルが本作で、両面共LP未収である。いきなり畳み掛ける様なリズムで始まるA面ではオルメ特有のオルガンとピアノのコンビネーションが素晴らしい。英語盤で世界に進出した経験がある為か、どうしてもイタリアのEL&P的な解釈でしか語られて来なかった彼らだが、今一度見直すべきではないかと思われる。哀愁のヴォーカル、超低いチューニングのタム、速いフェイズをかけたギター等、あまりにも多くのオリジナリティが有るからだ。B面も同様に、オルガンと哀愁のメロディーが光る秀曲である。 (片山)



(LE) ORME
Concerto N. 3
Blue Rondo'A La Turk
'73
●Car Juke Box CRJ-MP 1090
○
◉

オルメ73年の作品。すでにフィリップス時代であるのに何故か古巣カー・ジューク・ボックスからリリースされた。片面がデイヴ・ブルーベックの曲で両面LP未収。インストゥールメンタル・チューン。両面の曲共キース・エマーソンがナイス時代に演奏していた曲である。両面ともナイスに非常に良く似た演奏で、従来のオルメとは又、違った側面のプログレッシヴ・クラシカル・ロックを聴くことができる。オルメはカー・ジューク・ボックス時代、フィリップス時代を通じてLP未収録のシングルをリリースしており、他にもコントラプンティ時のLP未収曲「Sèra」、フィリップスよりの1st時の未収曲「Ricordi Piu Belli」等秀曲がある。 (山崎)



(LE) ORME
Sera
India
'75
●Philips 6025 134
○
◉

レ・オルメ――イタリア語の美しさを聴かせる愛すべきプログレッシヴ・ロック・グループだった彼等はその長い歴史の中にシングルも多数録音している。本シングルは75年。アルバム「Contrappunti」録音時に同時リリースされたものでA面がLP未収曲。B面が「Contrappunti」からのカットである。「夕暮れ(SERA)」と名付けられたA面はオルメ従来の歌心を大切にした好ナンバーで、暖かさを感じさせるほのぼのとした作品。オルメは数あるイタリアン・ロックの中でも最近は軽視されるむきがあるのでここで読者の注意を再度促したい。特に「Uomo di Pezza」「Felona e Sorona」「Contrappunti」「Storia o Leggenda」「Florian」等は少なくとも一聴すべきアルバム群である。オルメを聴かずしてイタリアン・ロックを語ることなかれ。 (山崎)



(LE) ORME
Canzone D'Amore
E' Finita Una Stagione
'76
●Philips 6025 153
○
◉

'74年「CONTRAPPUNTI(夜想曲)」発表後、オルメにちょっとした変化が起こった。トリオ編成を守って来た彼らに突然ギタリストであるトロ・マルトンが加入したのである。彼の経歴は残念ながら分からないがとにかく弾きまくるタイプのギタリストの様だ。アルバム「SMOGMAGICA」を'75年に発表、古くからのファンの怒りをかった様だが、今聞くとアルバムとしてのバランスがとても良い事に気付く。翌年同じメンバーで本シングルを発表両面共LP未収であるが、A面ではアメリカン・ポップス調のギター・ポップになってしまった。オルメの秘密兵器であるオルガンは登場せずに、シンセも控え目だ。B面も同傾向の曲だが、珍しくリズムが決まっている。本作録音後トロが去り、ジェルマーノ・セラフィンに代わった。 (片山)



(LE) ORME
Dimmi Che Cos'E'
Strumentale
'87
●Baby Records BR50369
○
◉

オルメの活動体形は大体4つに分けられる。1.CAR JUKE BOX時代、2.トリオ・スタイル時代、3.ギターを加えて様々な挑戦を行なった時代、4.シンセを使ったテクノ・スタイルの時代だ。'80年代に入り、イタリアの音楽シーンもプログレッシヴなものからより洗練されたものへと移行し始め、マティア・バザールの様にシンセを中心にした打ち込み物が大流行し始めた。'80年代のオルメは正にこの時代の煽りを受けたと考えて良いだろう。'82年、アルバム「VENERDI」を発表したがそこには完全に'70年代の彼らの姿は無く、誰もがオルメは終わったと信じた。しかし'87年、突然本シングルを引っさげて〝サンレモ音楽祭'87〞に登場、そのポップで「マティア」も真っ青のサウンドと相変わらずの唄で我々の度胆を抜いてくれた。（片山）



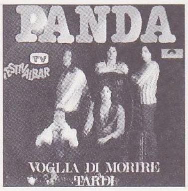
(IL) PAESE DEI BALOCCHI
Fantasia E Poesia
Amore Per Gioco
'79
●Disso Tex 2025 034
○
◉

個人的な話で恐縮なのだが、僕は15年程前からパエゼ・デイ・バロッキのギタリストと知り合いなのだが、彼と初めて会った当時に〝バロッキは1980年まで活動していて、'79年にシングルをリリースしている〞という事を聴かされていたのだが、長い間、本当に信じる事は出来なかった。（人柄の問題ではない。決して…）で、長年の答えが、これ。本当に何も作品を発表出来ないまま、10年くらいだらだらと活動（?）していたのだ。そして10年という年という年月の中で、かつてのプログレ・サウンドはなりを潜めて、甘く切ないラヴ・ロックになってしまった。（でも曲は良いよ）当り前の事か…この年まで生き延びていただけで、良しとするか。この2曲は最近再発されたイタリア盤CDに追加収録されている。（N.Ueno）



PALLADIUM
Piccolo Mondo Via
Che Uomo Sono Io
'75
●Philips 2025 137
○
◉

パラディウムというグループは、1960年代後半にビート・グループとしてデビューして以来、数多くのシングルとアルバム1枚をリリースしているグループ。1971年頃から以前のビート・ロック・サウンドから、〝ラヴ・ロック〞路線へと転向したが、今一歩パッとしないナンバーばかりをシングル・リリースしてきて、ヒットには全く恵まれなかったグループであった。そんな彼の中でも、1975年にリリースされたこのシングルは、傑出した作品。A・B面の両ナンバー共に、フルート、オーボエ、弦楽アンサンブルを中心とした気品に溢れる室内楽アレンジが美しく響き渡る名曲。このカタログに取り上げられているシングルの中でも、〝ラヴ・ロック〞としては、1、2位を争う作品です。ちなみにアルバムには未収録。（N.Ueno）



PANDA
Voglia Di Morire
Tardi
'77
●Polydor 2060 135
○
◉

パンダの1stアルバムは、曲の出来、不出来に差があったり、マシュー・フィッシャーの曲をノークレジットで使ったりと、ずるいところもあるのだけど、仲々よく出来たアルバムだった。しかし、'77年に出した2枚のシングルの出来はその1stや2ndと比べて遥かに素晴らしい出来だ。A面は、控えめなストリングスをバックに配し、シンセとコーラスで静かに盛り上げて行く。B面は、ヴィオラのソロや、ストリングスとアコースティック・ギターをバックに静かに歌われる前半から、オーケストラが加わる後半へと進む。2ndアルバムの10倍は素晴らしい曲だ。（木下）



PANDA
Notturno
Dimenticare
'77
●Polydor 2060 153
○
◉

「Voglia Di Morire」と同じく、ニコ・パパタナシューのプロデュースだが、今回はヴァンゲリスがアレンジャーとしてクレジットされている'77年のもう1枚。A面は流れる様なピアノに始まり、彼らの曲の中では最も凝った展開を見せる曲。エンディングは明らかにヴァンゲリスの趣味。ドラマックに幕を閉じる。B面は彼らの最大の特徴である甘いヴォーカルに、分厚いコーラスを生かした幻想的な小品。アルバムもヴァンゲリスのアレンジで作っていれば、と思わせるシングルである。（木下）



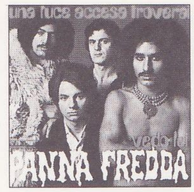
PANDEMONIUM
Sicra
La Strada
'76
●RCA TPBO 1253
○
◉

メンバーが何人いるか数えるのも嫌いになりそうなくらい、メンバーの構成が解らい。不思議なバンド。グループの方向性として、コーラスを主体として、リードヴォーカルが入れ替って曲が進行するという、他のプログレ・バンドには見られないパターン。曲調はイタリアン・ポップスともラヴロックとも言えるが、こうもヴォーカルが替ると聞くたびに、非常に新鮮である。強いて言えば、曲調は異なるが、We are the worldのラヴ・ロックバージョンと言えば良いか、時々レコード棚から引っぱり出したくなるレコードだ。知りうる限りで、LP2枚、シングル3枚が有るが、本シングル（LP収録）の2曲の出来が一番良いようだ。（長谷部）



PANNA FREDDA
Strisce Rosse
Delirio
'70
●Vedette VVN33177
○
◉

パンナフレッダのデビュー・シングル。1970年と言うイタリアン・プログレッシヴ・ムーヴメントの最初期であり、本格的なプログレッシヴ・ロック・サウンドでは無いが、オルガンを中心としたキーボード・ワーク等、時代を考えると仲々興味深いものがある。A面は基本的にはポップなヴォーカル・ナンバーであるが、泥臭いクセのあるサウンドに仕上げられている。B面はA面以上に泥臭く抜けの悪いサウンドであり、ブルージィなギターをフューチャーした一種独特のカラーを確立している。その時点でのメンバー等の詳細についてはクレジットが無く不明であるが、ジャケットから推測するとオーソドックスな4人編成であった様だ。この後、アルバム、シングル各1枚を発表している。 (中島洋一)



PANNA FREDDA
Una Luce Accesa Troverai
Vedo Lei...
'70
●Vedette VVN 33184
○
◉

パンナフレッダは、1970年から1971年にかけてアルバム1枚、シングル2枚を残しているが、本作はセカンドシングルに当り、1970年に発表されている。前作と同様に、ブルージィな泥臭いギターが独特な印象を与えるナンバーが両面共収録されている。しかしながら、基本的には共にポップなヴォーカルナンバーであり、個人的にはA面のピアノとコーラスワーク、B面での歌い上げるヴォーカルの方が印象的で、ミスマッチとも思える泥臭さを排し、本来の歌物としての魅力を引出すアレンジをした方が、より良いサウンドになったのではないかと思う。もっとも、この泥臭いアレンジこそイタリアン・プログレッシヴ・ロックの魅力、と言う方も多いので、そう言った方々には十分にアピールする佳作である。 (中島)



PAOLO FRESCURA
Amore Mio
La Canzone Mia
'83
●Lighea 540 000-7
○
◉

'70年代に3枚のソロ・アルバムをリリースしたパオロ・フレスクーラだが、その後も活動を続け、いくつかはシングル・リリースがあるようである。これは'83年のリリースだから、3枚目のアルバムからしばらく間がある。この間にも少なくとも2枚のシングルがあるが、他にもあるのではないかと思う。彼の持ち味は、何といってもイタリア的な素朴でストレートな感情表現と甘いメロディー・ラインにあるのだが、この基本的イメージは少しも変わってはいない。〝AMORE MIO〞というストレートなタイトルを全く自然に歌いあげる様は、今のイタリアでさえ少なくなってきたピュアな素朴なイメージで心を打たれる。 (山崎)



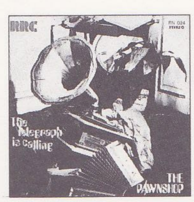
PAOLO RIVIERA
Senza Me Come Stai
Io E Te
'82
●YEP 5290 745
○
◉

'80年に〝Cavallo Bianco白馬〞をサンレモ音楽祭で歌い、同タイトルのアルバムも出した。秀曲が多く3枚のシングル・カットがある。そのときはトト・トルクァティのアレンジが目立っていたが、アレンジャーがズリアンに変わった当シングルもメロディアスな心地好い曲。彼の厭味のない声は好感がもてる。しかし、'80年代に入ると'70年代から続いていたカンタウトーレ・ブームが一層強まって、歌うだけで曲を書かない彼のようなカンタンテは実績がないだけに一般大衆に認められる機会がなかった。彼の所属したイエップ・レーベルはカンタンテや曲を書かないグループが集まっていて、プロデューサーのエリオ・パルンボらの半ばレギュラーの作曲陣によって支えられ、現在はアイドル物が強い。 (HIRO TANAKA)



PATRIZIO ALLUMINIO
Tu Anima Mia
L'Isola
'75
●Fonit SPF 31314
○
◉

プログレッシヴ・オルガン・ロック・トリオのALLUMINOGENIはアルバム1枚とシングル5枚をリリースして1974年に解散したが、そのリーダーであったキーボード奏者のパトリッツィオ・アルミニオは翌75年にソロ・シングルを1枚発表している。アルミノジェニ時代にはいかにも一部のマニア向けの2流オルガン・ロックであったが、このシングルは、雄大に溢れ出すストリングス・シンセと悲愴感を漂わせるピアノ、果てしなく響き渡る低音シンセによって作り出されるシンフォニック・サウンドにイタリアならではの歌い上げる泣き泣きのカンタウトーレ・ボーカルが絡む名曲。アルミノジェニ時代にこれだけのサウンドが出来たなら、もっと評価も変っていたのに… (UNO)



PAWN SHOP
The Telegraph Is Calling
My Shade
'71
●RRC RN 024
○
◉

このグループは、イタリアの中でかなり異色のサウンドを醸し出すロック・グループ。シングルであるが、先ず、ラヴ・ロックでは毛頭ない。年代の古さを見てもらえば、想像がつくと思うが、サイケデリック・ロックの範疇に入るサウンド。エレクトリック・シタールや、サウンド・エフェクト的なギターといった実験的な要素を強く持ったそのサウンドは、アメリカの13th Floor Elevatorなどに通じるプログレッシヴな精神に満ち溢れている。歌詞の方も英語で歌われているのでイタリアン・プログレやポップスに一辺倒なファンにはきついサウンドであるが、アナロジーなんかより、ずっとプログレッシヴな精神に溢れる良質サイケデリック・ロック・グループである。 (Numero Ueno)



PERIGEO
Movie Rush
Tema Di Alba
'76
●RCA TBBO 1224
○
◉

ペリジオはイタリアではアレアと同じ位知名度のあるジャズ・ロック・バンドだったわけだが、このシングルが出た'76年にはアメリカを始めとした海外でもアルバム・リリースされて知名度を得ることになった。アルバムで言うと5枚目の「Non E' Poi Cosi' Lontano」の頃になる。初期の重さも抜け軽快さが目立ってきた頃とも、イタリアン・ロック・ファンからすれば、この頃まで、という時期でもある。このシングルは映画「Movie Rush」のサントラと有り、両面ともアルバムには収録されていない。5作目に比べるともっと初期の作風に感じる。骨太なジャズ・ロックでいかにもテーマ曲ふうのシンプルなフレーズだ。アルバムを聴いていれば、それ程聴き所のある曲でもないが。

（松本）



PIANA-BIGWHITE
Ra Elios
Nell'aria
'78
●Radio ZBRR 7045
○
◉

Dario Piana（E、ギター、キーボード）、Roberto Bigwhite（フルート）の二人のデュオ・シングル。両面供、Bigwhiteのフルート（曲が盛り上るとイタリア名物の唾吹きフルートに変化）とPianaのピアノを中心に曲が進みPianaの弾く美しく伸びやかなギターが絡む。残念ながら両面供、インスト曲だが十分に満足出来るシンフォニックな内容だ。ゲストとして、Gigi Cappellotto（ベース）、Giuseppe Cantarelli（A・ギター）、Gianni Dall Aglio（ドラム）が参加している。又、Pianaの書いたジャケットも非常に美しい。

（長谷部）



PIERO ALOISE
Com' Eri Bella
Piccola Amante
'76
●EMI 3C 006-18213
○
◉

もしアルバムがあったならパオロ・フレスクラの1作目と同じくらい愛聴されていると思う。たった2枚のシングルが、というのも2年の開きを考えれば嘘臭い。多分、他にもあるだろう。こちらもアレンジはヴインチェ・テンペラともう1枚のシングルに同じく。女性コーラスのバッキングやアコースティック・ギターの弾き語り調から転調していく作りも大差ない。ただし、V.テンペラか、ストリングス・シンセサイザーのバッキングやピアノが入っていて、これが中々効果良く使われている。やはりA面曲がよく、わずかな収録時間の中にもタメをつくって転調を際立たせ、物寂し気なメロディを一気にサビに持っていくあたりがうまい。よくあるタイプの中でも抑揚のついた方の2枚だと思う。

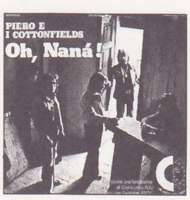
（松本）



PIERO ALOISE
Quanto Amore C'E'
Ecco E' lutto Qui
'78
●EMI 3C006 18348
○
◉

ピエロ・アロイセなる聞きなれない歌物のシングル。しかし、アレンジがヴィンチェ・テンペラだ。A面はウッドブロッリとストリングスのピッチカートで始まり、何か映画のサントラのようだが、サビの部分で一気に盛り上がる。このミスマッチが、何とも言えぬ雰囲気を出している。B面の方はアコースティック・ギターのアルペジオによりシンプルに始まり段々とストリングス、リズム等が入って来るという王道パターン。曲の方もアレンジが良いのか、A級の出来と言ってもさしつかえないだろう。

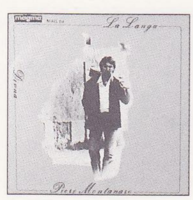
（長谷部）



PIERO E (I) COTTONFIELDS
Oh Nana !
Uomo Da Quattro Soldi
'73
●Joker M7161
○
◉

'72年に1枚のアルバムを残したPIERO E I COTTONFIELDSには3枚のシングルがある。リリース順に「Due Delfini Bianchi/Via Mazzini31」（Joker M 7122、'72）、「Li Viaggio、La Donna、Un Altra Vita/Cantico」（同M7145、'72）、そしてこのシングルとなる。両面ともアルバム未収録。A面は〝Oh〟〝Nana〟と来る。ブルージィなヴォーカルもアルバムと変わりなく、それにもましてこのコーラスなので辛い。B面になるとムーグとチェンバロの派手なイントロが耳に入ってくる。曲自体はオーソドックスだが、一応その後もキーボードのバッキングは厚めで流れ続ける。それでもやはりイタリア臭さは薄い。

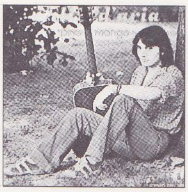
（松本）



PIERO MONTANARO
La Langa
Divna
?
●Magma MAGD8
○
◉

ピエロ・モンタナーロの名前は本シングル（制作年度は明記されていないが番号から推測して'78年）と'71年のオムニバスアルバム「Nuovi Compressi D'avanguardia Da Radio Montecarlo」で見つけることが出来るがそれ以外の資料・情報は今の所全く無い。「Nuovi〜」ではI Tibúというバンドと組んで一曲のみ収録、Krelを思わすオルガン・ロックで本シングルで聴けるカンタウトーレとしての輝きを見出すことは出来ない（曲自体は悪くないが）。A面は泣きのメロディーからサビで盛り上がる典型的ラヴ・ロック。作者としてヴィットリオ・デ・スカルツィの名も見える。囁く様に震える声で歌われるB面は彼らカンタウトーレとしてのより本質的な面が出ていてA面よりもプログレ・ファン向け。

（森下）



PINO MANGO
Fili D'Aria
Quasi Amore
'77
●Numero Uno ZBN 7025
○
◉

ビート、プログレッシヴ・ロック、ポップ・ロックと'80年代に入るまでにイタリアのグループの音楽形態は少しづつ変化したが、もう一つの重要な流れであるカンタウトーレ(自作自演歌手)も同様であった。当シングルは後にマンゴとして知られるようになる'80年代を代表するカンタウトーレのデビュー盤。メジャーになってからのスタイルとは大きく異なっていて、丁度ジノ・デリゾの「Il Mare」に近い。当時のアントネッロ・ヴェンディッティのアルバムもミュージシャンは殆ど共通する。この時期にヌメロ・ウノから巣立ったカンタウトーレは80年代からのイタリアン・ロック・シーンの中心となり、ヨーロッパ内で注目されるようになる。 (HIRO TANAKA)



POESIA SUI FIORI
Mondo Giovane
Io Voleno
?
●Universal Sound USA 1030
○
◉

ポエジア・スイ・フィオリという、いかにもファンタジーに満ちたグループ名を持つこのグループは、シングルを数枚リリースしているマイナーグループ。A面のナンバーは、悪い言い方をすれば、〝内山田洋とクール・ファイブ〟風のしようもない時代遅れの歌謡曲だが、B面ナンバーが良い。うらびれた物悲しいソロ・ヴァイオリンが全面にフィーチャーされたオデッセアのボーカリストに似たボーカルが力強く歌い上げる名曲。ぜったいにこっちをA面にした方が良いのに…きっと彼らは考え方の古いプロダクションに所属して無理矢理、A面のナンバーを歌わされていたのだろう。本当にB面は名曲なのになァー… (Numero Ueno)



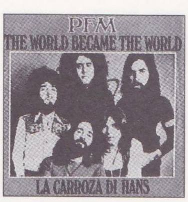
POPY FABRIZIO
Malattia D'Amore
Campesino
'77
●Come Il Vento ZBC 7016
○
◉

もとはマウリツィオと組んで兄弟デュオでデビュしたが、マウリツィオが作曲家、アレンジャー歌手として活躍するようになってからは影の存在となって第一線から身を引いた。ただし'60年代のコーラス・グループ、ノラ・オルランディ&4+4の頃かはメジャーで活動していただけに、全くレコーデイングをやめたということではなく、思い出したようにシングルを出した。彼らのレーベル名のコメ・イル・ヴェント(風の如く)は、デュオ時代に歌った曲名。'72年はサンレモ音楽祭に出場したこともある。当シングルのA面はドナテッロが歌った曲だが、曲を作った本人であるマウリツィオがアレンジを担当しているので、マウリツィオ・ヴァンデッリのアレンジのドナテッロ盤と聴き比べるのも面白い。 (HIRO TANAKA)



PREMIATA FORNERIA MARCONI
La Carrozza Di Hans
Impressioni Di Settembre
'71
●Numero Uno ZN 50126
○
◉

〝セレブレーション〟と並ぶ大ヒット・ナンバー〝甦る世界〟と〝ハンスの馬車〟という1stアルバムの名曲の豪華カップリングによるデビューシングル。A面の〝ハンスの馬車〟の方はアルバムよりも多彩な展開としっかりとした構成を持つヴァージョンに仕上っており、特にクラシック・ギターのソロ・パートに続く展開部は著しく異なり、ヴァイオリンのソロがフィーチャーされている好アレンジ。B面の〝甦る世界〟の方は1stアルバムのテイクのショート・ヴァージョンに当り、全世界へ向けてリリースされたアルバム「甦る世界」に再録された英語ヴァージョンと同じ構成だが、このシングルでは再現部の名フレーズがフルートではなく、シンセで演奏されキーボードがより重厚なアレンジに仕上っている。 (UNO)



PREMIATA FORNERIA MARCONI
The World Became The World
La Carrozza Di Hans
'74
●Manticore 13 268
○
◉

PFMで最も重要なシングルが本作であると随分と長い間言われて来たが、それはB面に入っている〝ハンスの馬車〟が73年のヨーロッパでのライヴ録音だと言われて来たからである。これは当時発売された日本盤シングルにも堂々と書かれていた。しかし良く聞いてみると、単にデビュー・アルバム「STORIA DI UN MINUTO」の中のテイクをリミックスして、拍手を足しただけである事が判明した。これでPFMのシングルには貴重なものが英マンティコアから出された「FOUR HOLES IN THE GROUND/THE WORLD BECAME THE WORLD」(K13506)だけになった。A面はクレジットに〝ADAPTED FROM THE ALBUM...〟と有るが、アルバムのテイクに大胆に付け加えられたシンセが大活躍するインターナショナルなヴァージョンである。 (片山)



QUEL PAZZO MONDO
Canzone Mia
Brava Maria
'70
●Durium Ld A 7694
○
◉

シングル3枚が発見されているこのグループ、1973年の作品が感動的な名作として有名である。ここで紹介するのは1970年に発表されたシングルである。今回このような企画がなければ世に知らしめる機会のまったくないであろう内容、と言ってしまえば誰も振向かないがそうは問屋がおろさないのがイタリアンロックファンの追究の手厳さである。有名グループの起源にまで逆昇って解明してしまおうというパワーはまさにイタリアンロックの爆発力にも似ている。さて、ようやく内容に触れるが(シングル1枚でこの字数を埋めるのが大変ということを御了承いただきたい)、暗めのメロとドラマティックな展開、エフェクト処理がノスタルジックな古くささのたまらないロックである。 (六井)



QUEL PAZZO MONDO
Questa Bambolina Di Guai
Catene Nuove
'71
●Durium Ld A 7743
○
◉

3枚のシングルを残したクェル・パッツォ・モンドの2作目。ジャケットの絵柄が表わすような、'60年代ビート・サウンド、それもアイドルものふうの曲が、2曲入っている。全体に曲が落ち着かず、歌物バンドと言うにもメロディ・ラインが貧弱。B面は幾らかオルガン・ロック調にはなる。またファズ・トーンのギターも入るが、あくまでもヴォーカルが中心になっていて、それもまた当時のポップスふう、とほとんど冴えない。もう少しロック色があれば、と思ってしまうが、彼等にその力量があったかどうか、この2曲を聴く限りでは疑問に思う。アルバム製作に至らず埋もれた多くの一つという気がする。（松本）



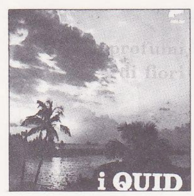
QUEL PAZZO MONDO
Pio'Grande Del Mondo
Dammi Il Sole Che Non Ho
'73
●Durium LdA 7792
○
◉

今現在、'70年、'71年、'73年とDuriumに3枚のシングルを確認しているQnel Pazzo Momdoだが、グループの最初期はオルガンを使用したビートっぽいサイケバンド（だが、サビではラヴ・ロック調のメロディーになる）だが、本シングルは両面アコースティック・ギターを中心に美しいストリングスが曲を盛り上げる。最近のイタリアの発掘物としてはトップ・クラスの水準である。イタリアの哀愁と叙情に満ちた、決して派手でな盛り上がり方はしないが、極上の一枚と言える。（長谷部）



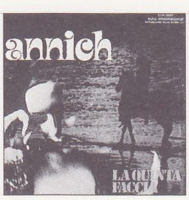
QUELLI
Mi Sentivo Strano
Dettato Al Capello
'00
●Ricordi SRL 10.502
○
◉

プレミアータ・フォルネリア・マルコーニ（PFM）はクェッリ（QUELLI）、クレル（KREL）というグループを母体として誕生したが、フランコ・ムッシーダとフラヴィオ・プレモリを正式メンバーとし、一時期ラディウスが在籍していたクエッリはプログレッシヴ・ムーヴメント以前としては忘れてはならない人脈を形成するグループであるといえる。彼等は数枚のシングルと一枚のアルバムをリリースしてその歴史を閉じたわけだが、サウンドのほうは、PFMからは想像もできないようなビート・サウンド。アフロディティス・チャイルドやディープ・パープル等のカヴァー・ヴァージョンを得意としていた。本シングルもそういったビート的作品で、プログレッシヴ以前のイタリアのサウンドを象徴する一枚である。B面はLP未収録曲。（山崎）



(I) QUID
Profumi Di Fiori
'75
●Kansas 5100 412
○
◉

'75年のカンサス・レーベルと書けば、イタリア通には何も書くことがなくなってしまう。そういう内容だ。ジャケットのトロピカルな夕陽ではないものの、ストリングス・シンセサイザーの清涼感あるオーケストレーションとちりばめられたピアノの音で、爽やかな雰囲気は強い。アコースティック・ギターのフォローもそれに見合ったものだ。ヴォーカルのメロディ・ラインは極く標準的な当時の歌物だが、演奏の方での味付けが中々利いている。曲も極端な抑揚はなく、さらりとした印象なので、歌物が好きな人がUTとジャルディーノ・デイ・センプリチを聴いたあと、このシングルで一度洗い流して、改めてアルソン・デル・ソーレをかみしめる等、組み合わせのアクセントには適しているだろう。（松本）



(LA) QUINTA FACCIA
Annick
Pronto Amove
?
●Euro International EUR 1940
○
◉

この手のグループ（所属ラブロック系）はイタリアにはそれこそ掃いて捨てる程いるのだが、このLa Quinta Facciaのシングルは、ゆったりとした曲調に、スライド・ギターとピアノのユニゾンにシンセがからむ様がなかなか印象的で好感が持てる。B面はA面よりリズムがしっかりしており、フルートを使ったアクセントを持ったアレンジと、後半からバックに流れるオルガンがいい雰囲気を出している。他にも作品があるらしいが、耳にしてみたいものだ。（木下）



(I) RAGAZZI DEL SOLE
To Find My Way
Fiaba
'79
●Kansas CN3062
○
◉

'70年の幻のコレクターズ・アイテムである〝イ・ラガッツィ・デル・ソーレ〞。これはどちらかというとサイケ・サウンドのアルバムであった。この同名グループのシングルは9年もの歳月がたっていることと、アルバムが筆者の手元にすでにないので、あのラガッツィ・デル・ソーレなのか確証がもてない。A面はビートのきいたポップス系作品で当時の時代背景を考えると平均的な曲。しかし、B面の〝FIABA〞はうって変わってバラード調のイタリアン・ロック然とした好ナンバー。キーボードをバックに配した曲で哀愁感のある、全盛時のジャルディーノ・デイ・センプリチを想わす素晴らしいものだ。（山崎）



(I) RAGAZZI DELLA VIA GLUCK
AZ/018
Astri Chiari

'70
●Cian BF69050
○
◉

ラガッツィ・デッラ・ヴィア・グルックという長いグループを持つ彼らは、アルバムを1枚と数枚のシングルをリリースしている中堅グループ。彼らの基本的なサウンドは、少し古臭いブラス・セクションを取り入れたポップスであり、アルバムや、他のシングルは今一歩の出来なのだが、このシングルはけっこう聴ける。もちろんブラス・セクションも入っているが、フレンチ・ホルンの高なりがサウンドに雄大なスケール感を持たせ、他のラヴ・ロック・グループと異なる特徴の良さを醸し出している。こうゆうブラス・セクションのアレンジをいつもしていれば、マクソフォーネにちょっと似ているね、とか言って少しはマニアに相手にされていたかも、知れないのに…　(Numero Ueno)



RAMINGHETTI
Ragazza mia
Guarda

'?
●Eldorado EL/B 04410
○
◉

このベントラー傘下のレーベルのEPこそ私の最愛のイタリアシングルなのだ。ラミンギのインチキみたいな名前だが音で勝負したらラミンギの方が土下座して謝まるだろう。両面共実に素晴らしい出来で全編に鼻の穴にワサビを突っ込んだような泣きのギターと得体の知れない必殺技を連発するオルガンが支配するシンフォニックの王道を極めていてイントロはやたら大ゲサ、歌はイタリアらしく朗々としており、エンディングに到っては涙すら出てくる。特筆すべきはオルガンワークで私も15年もロックを聴いてきたがいまだかつてこれ以上に危険な匂いのするオルガンソロは聴いたことがない。特にB面がスリリング。お茶目なガールフレンドのような愛くるしいシンフォニックです。　(牧野)



(I) RAMINGHI
Rendimi L'amina
Express

'71, '72？
●Bentler BE/NP 5093
○
◉

1枚のLPと3枚シングルを残したラミンギ。サイケがかったオルガン・ロックを得意としていた彼らだが、この最後の作品では、オルガンは使用されておらず、セールス不振からか、イメージ・チェンジを図ったものと思われる。ジャケットには、〝Hit Hot Discoteque〞と記されており、B面は正にその内容となっている。だがA面ではバラードを演っており、仲々の出来となっている。語り掛けるボーカルに始まり、除々に盛り上がる典型的なパターン。広がりのあるソリーナと、もの悲し気なギターが雰囲気を盛り上げている。最後にして彼等のベスト・チューンとなった。　(高橋)



(I) RIBELLI
Chi Mi Aiutera'
Un Giorno Se Ne Va

'67
●Ricordi SRL 10、470
○
◉

イタリアも例に漏れず、'60年代はビート・サウンドが全盛だった。その中でも、このリベッリは、デメトリオ・ストラストが在籍していたことで、イタリアン・ロック・ファンにも知られている。ストラトスが参加しているシングルで確認がとれているのは、「Pugni Chiusi/La Follia」(SRL 10-451、'67)、本作、「Come Sempre/Nel Sole Nel Vento、Nel Sorriso E Nel Pianto」(SRL 10、506、'68)の3枚。ほとんどがカヴァー曲で、このシングルもA面が〝You Keep Me Hanging On〞、B面がオールディーズ・ナンバーと畑こそ違うが、既にイタリアのクリス・ファーローかといった迫力だけは出ている。A面は原曲に添ってハモンド・オルガンとヴォーカルも一際熱い。アレアは見える街もないが資料にまで。　(松本)



RICCARDO FOGLI
Amico Sei Un Gigante
Uma Volta Di Piú

'74
●RCA TPBO 1075
○
◉

マニアの間では、「元イ・プーの」、「あのラヴロックの」なんて冷たい言葉しか聞えて来そうもない、リッカルド・フォッリのシングル。A面はそんなマニアの言葉を吹き飛ばす、怒清のシンフォニック・ロック。レコードに針を落すとリリカルなピアノに、心の準備をする間も無くヘヴィなシンセが唸りを上げ、オーケストラが駆け上る。その辺りのB級プログレを軽く蹴ちらす内容だ。元来ポップス畑の人なので歌心あるメロディに、アレンジは良し、イタリアン・ロックによく有るドタバタ・リズムでは無く、非常に切れのあるリズム隊、殺し文句のメロトロン入りそして最後に両面ともLP未収というマニア泣かせの上物。作曲、アレンジ共にニュー・トロルスのヴィットリオ・デ・スカルツィ。B面は本来の音である良質のポップス。　(長谷部)

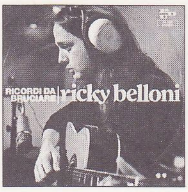


RICHARD COCCIANTE
Down Memory Lane
Rhythm

'71
●Delta ZD50158
○
◉

リッカルド・コッチャンテのデビュー・シングルと思われる。彼が活動を開始したのが70年頃と言う事から、これ以前にもレコードが出ているかも知れないが未確認である。コッチャンテは実に沢山の国で、その国の言葉で吹き込みをしており、そのためかリッカルドだったりリチャードだったりする。このシングルは映画「ROMA BENE」のサントラであるが、両面共英語で唄われており何と作曲・アレンジがあのルイス・エンリケス・バカロフである。その後のコッチャンテの自由とは異なるが、「ミラノ・カリブロ9」を思わせる静かな曲調のA面とタイトル通りリズムを強調したB面共に素晴らしい作品である。他にフランスだけでリリースされたシングル「AVEC SIMPLICITE」(POLYDOR 2056 891)等も存在する。　(片山)

R



RICKY BELLONI
Ricordi Da Bruciare
Il Letto Sfatto
'75
●PDU PA1108
○
◉

リッキー・ベッローニは1952年生まれで、NEW TROLLSのメンバーの中では最年少だった。70年にENORME MARIAというバンドでデビュー、73年にはプログレ・バンドのヌオヴァ・イデアに参加、最高作と言われる「CROWNS」の制作に携わる。その後76年にトロルスに参加するまでの間の75年に、たった一枚制作されたのがこのシングルである。A面は誰もが涙なしには決して聞けないバラードで、とても個人的なコレクションの中に埋もらせておくにはもったいなさすぎる。彼の弾くA.Guitarの音色が特に素晴らしく、又メロトロンのストリングスも効果的に曲を盛り上げている。B面は一転して痛快なポップ・ロックを聞かせている。86年トロルスを離れるが'90年のANNA OXAのライヴに参加後、92年には正式復帰している。(片山)



RICORDI D'INFANZIA
Mani Fredde
Latte E Rhum
'73
●Fonit Cetra SP 1497
○
◉

本誌12号のイタリア・カタログから漏れたアーティストの補足として後号で紹介した幾つかのグループの中に〝リコルディ・ディ・インファンツィア〞というグループのアルバム「Io Uomo」が紹介されていたのを憶えているだろうか？　このアルバムは重厚なオルガンが印象的なブラック・サバス張りのヘビー・プログレ・サウンドであったが、彼らが残した唯一のLP未収録曲によるシングルは前記したサウンドを一切感じさせない朗々としたイタリアン・カンタウトーレをベーシックとした歌心溢れるメロディアスなナンバーで、雄大なメロトロンをバックにじっくりと聞かせてくれる。特にブラス・メロトロンが奏でるエンディングが奏でるエンディングのハイライト・シーンは圧巻!アルバムよりシングルの方が良い作品であるという数少ない例です。(UNO)



RITORNO ALLE ORIGINI
Scegliti L'uomo
Versione Strumentale
?
●Pisciana RO 2008
○
◉

イタリアのコレクターズ・アイテムのシングルと言えば、個人的に注目しているレーベルが、SCORPYO他、をリリースしているRADIOと、ICEや当シングルをリリースしているPIANCIANAである。特にこのPIANCIANAは謎に包まれたレーベルであり、アーティストの方も、シングル1枚のみで消えてしまった幻のミュージシャン達ばかり。このリトールノ・アレ・オリジニもその中の1つで、彼らの事は皆目わからない。マグリットの絵を連想させるシュールなジャケットの中身の方は、以外とポップな内容だが、ストリングス・シンセをバックに全面に渡ってテーマを奏でる雄大なアープ系のアナログ・シンセが印象的。オデッセアに当らずとも遠からずといった感がある。秀作である。(N Ueno)



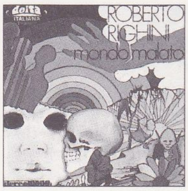
ROBERTO CACCIAPAGLIA
Acufene
Cactus
'81
●Ricordi SRL 10951
○
◉

長い活動歴を持ちながらも自己名義の作品が極めて少ないロベルト・カチャパリア。'80年というセカンド・アルバムとサード・アルバムの間にリリースされたシングルである。テレビ番組のため作られた曲を収めたもので、この時期、彼はその種の仕事をメインに活動していたものと思われる。キーボードのメロディアスな演奏とシンセ・リズムを組み合わせて軽快なサウンドを作り出している。曲が短かく、作品の性格もあって、彼の実力が十分発揮されたものとは言い難いが、彼の活動を知るという意味では興味深い。(賀川)



ROBERTO CARLOTTO
A Cartulina 'E Napule
Caro Amore
'78
●CGD 10087
○
◉

ロベルト・カルロットと言っても、すぐ解る人は、本当にイタリアン・ロックが好きな人だろうが、あの「フンカ・ムンカ」のと言えば殆どの人が解るであろう。彼本人名義のシングル。決してシンフォニックな作品ではないが、彼独特のビブラート泣き泣きヴォイス。これでもかと言う熱唱。パスタ・パワーに脱帽するばかりである。曲は本人も一流アレンジャーとして活躍しているし、プロデュース・アレンジ共アルベルト・ラディウスとなれば悪いはずが無い。フンカ・ムンカ名義の曲よりは幾分リラックスしているが、あの歌心は変らない。これぞ正にイタリア演歌!(長谷部)



ROBERTO RIGHINI
Mondo Malato
Non Era Un Sogno
'71
●Dalta ZD 50077
○
◉

Flea On The Honey等を擁していたDeltaレーベルの作品のジャケットは見開きで内ジャケにまで描かれたUp & Downによるサイケデリックなイラストが眼を引く。サウンドもジャケットのイメージそのままのサイケデリックでハードなものだが、〝Mondo Malato〞での気儘なコラージュ感覚や〝Non Era Un Sogno〞に於ける後のイタリアン・プログレに通じるような壮麗なパートの導入には非凡なものを感じずにいられない。この後プロデュース等に従事していたらしいが、'80年になって「Melinda」(RCA PG 33406)というミニ・アルバムを発表し、久々に元気な姿を見せてくれる。(鈴木伸一)



(I) ROBINS
Tu
Tenero Amore
'76
●Harmony H 6009
○
◉

(I) ROBINSなるこのグループが何枚の作品を発表しているのか僕は知らない。或いは時の流れの中にこの一枚で消えてしまったのかも知れない。しかし、残されたこの一枚は何という素朴な優しさに満ちていることだろう。ズバ抜けた名曲とは決して言わない。高価なプレミアムがつくようなものでもない。アコースティクギターに爪弾かれて淡々と歌われるシンプルなラヴソング。それだけの話なのだが、その嗄れた歌声はあくまでも優しく、まるで、目の前の愛しい人に語りかけているような安らぎさえ感じられる。押さえていた想いがほとばしるかのように「Tu〜」と歌い上げられるバックで、流麗なメロディーを奏でるストリングスから、この曲に込められた一途な想いが、時を超え、ひしひしと伝わってくるようだ。　(長砂)



(LA) ROSA DEI VENTI
Capitan Cook
Nel 3000 Dopo Cristo
'72
●Erre ZRR 50229
○
◉

フルートとアコースティックギターの美しい調べをバックに泣きのメロディーが感動をさそう清涼感溢れるA面。曲名とはほど遠い印象である。B面は清涼感というよりは浮遊感漂う不思議な魅力でなぜか聞き覚えがある。曲中でハタと気づく。キングクリムゾンの「風に語りて」とよく似ている。イタリアンロックの中心で少し異質な要素を備えたこのグループ、ジャケ写のメンバー4人共どこか　れている。息抜の1枚として推選。参考までにもう1枚の曲名と番号を上げておく。「Piccola Lady/Amo」(Erre RP 3052, '73)　(六井)



(IL) ROVESCIO DELLA MEDAGLIA
Let's All Go Back
Anglosaxon Woman
'75
●Frog　FRS 3001
○
◉

名作、コンタミナツィオーネをリリースした・ロベッシオ・デッラ・メダリャはRCAに3枚のLPをリリースした後も活動を続け、フロッグ・レーベルにニュー・アルバム(4th)を録音した。本作はその4thアルバムからのカットである。しかしシングルを出した後、何かの理由でLPリリースはたち消えとなってしまい、そのマスター・テープの所在もわからずじまいという状況である。サウンドのほうは、オーケストラこそはいっていないものの、洗練されたシンフォニックを聴かせてくれ、ことにA面は叙情的なヴォーカルをフィーチャーして、徐々に盛りあげていく作風。威風堂々として、円熟したサウンドを聴かせてくれる。RDM最後の一撃である。　(今)



ROYAL BLOOD
Pioggia Sul Tuo Viso
Lo So
'68
●Tiffany TIF 553
○
◉

Aldo TagliapietraとNino Smeraldiが在籍していたLe Ormeの前身グループがこのRoyal Blood。やや古めのオルガン・ロックだが、後のLe Ormeサウンドの萌芽を既に垣間見る事が出来る。〝Pioggia Sul Tuo Visoは、仄かな郷愁を感じるイタリアらしい美しい佳曲で、初期Le Ormeの原点とも言うべき作品。〝Lo So〞はロック色の強い暗くヘビーなサウンドで当時としてはかなり先鋭的な曲。このプログレッシブな感覚が、Philips時代のLe Ormeへの布石となっていたのだろう。後の成功を予感させるに足るこのシングルは又イタリアン・プログレ隆盛の礎とも言えるものである。　(鈴木伸一)



SAGITTARI
Buongiorno Amore
Io Me Morirei
?
●Tele TLC-NP 521
○
◉

サジターリというグループについては一切の知識もない。ジャケットもないこのシングルは、録音や楽器などから想像すると、1973〜75年くらいに発表されたものであろう。この謎のシングルが、かなり良いのだな、これが。一聴すると、〝Hunka Munkaの未収録シングル?〞と勘違いする程、サウンドが(決して歌声ではありません。)似ている!歌のAメロのバックに流れるクラビノーヴァや、歌サビでこれでもかと盛り上がるオルガンなどHunka Munkaならではのキーボード・アレンジの手法がここに生きている。きっとDik Dikにあこがれ、スターダムに上がれるのを夢見て消えていったのだろうと、勝手なノスタルジーが沸いてくる。とにかく一度聴いたらサビの〝Morirei, Morirei…〞は忘れないよ。　(N.Ueno)



(I) SALIS
Chissa Se La Luna Ha Una Mamma
Crona Di una Cosa
'70
●Liberty LIB 9062B
○
◉

Aintonio Salisを中心としたグループ。現在までAntonello名義のソロを含めると、シングル7枚、アルバム3枚リリースされているが、アレンジャーとしてDario Baldan Benboの名前がクレジットされているのが歌ものファンには、見逃せない所だ。又、'78年作のAntonello Salisのソロアルバム「Dopo Il Buio La Luce」(IAF LPA　89018)はヘヴィ・プログレの名盤とか?さて当シングルは、1stアルバムが出る前年の'70年にリリースされているが、年代の割には、全体のバランスが良く、うまくツボを押えて、アルバムで聴かれる曲よりも、より歌もの的要素が強く、SALISの発展形であるGRUPPO 2001を聴いているみたいだ。尚このシングル、LIBERTYお得意の見開きジャケットに成っている。　(堤野)



SALIS
Tu Sei Bella Tu Sei Cara
Fiori Bucati

?
●Video Star VS 000150
○
◉

'60年代にSALIS AND SALISとして活動し始めたファーミリー・バンドSALIS。長い活動歴の割には3枚のアルバムと数少ないが、GRUPPO 2001やCADEMOといった枝分れをして、その後もベースからキーボードに転向したアントニオ・サリスを中心に活動を続けたようだ。このシングルがいつ頃の録音なのか詳しくは判らない。打込みのドラム等からしてアントニオ名義のSALIS,'78年のアルバム「Dopo Il Buio〜」以後のものか。既にデュオとなっている事を考えれば、ジャケ/音ともに納得がいく。A面のキンクスふうのメロディを持つナンバーは安上がりのポップスという印象だが、クリアーなギター・トーンを活したB面が、メロディアスで落ち着きのあるヴォーカル曲になっている。共に洗練されたトーンだ。　（松本）



SARA E LA BANDA MAGNETICA
Io Mamma
Ti Perdono

'72
●Numero Uno ZN 50139
○
◉

マティア・バザールのアントネッラに近い歌声を持つ女性ボーカリストのサラをフィーチャーした〝サラ＆バンダ・マグネティカ〟は、1972年に天下のヌメロ・ウーノから当シングル1枚をリリースしたのみのマイナー・グループ。〝女性ボーカルをフィーチャーした〟と言うとすぐに、バンドはバック・バンドねって思われがちだが、このグループは違う。例えは悪いが、日本で言えば〝カルメン・マキ＆OZ〟のような明確なロック・グループ・サウンドである。ワイルドなベースと、イタリアン・プログレにありがちの手数の多い〝パタパタ〟ドラム、力強いバッキング・オルガン＆ピアノに、全面的にフィーチャーされた地中海風のソプラノ・サックスというサウンドは、デュエロ・マドレに近いプログレ・サウンドである。　（N.Ueno）



SCHOLA CANTORUM
Il Mio Amore
Pierrot

'78
●RCA PB 6142
○
◉

知っている人は少ないだろうが、ダニエル・センタクルズ・アンサンブル・タイプの男女混合のヴォーカル・グループのようだ。取りたてて、大騒ぎするシングルではないことを断わっておきたい。A面は物哀しい女性スキャットで始まり、ささやきかける女性ヴォーカルがいい。ダミ声の男性ヴォーカルが邪魔。曲の盛り上げ方は、ディク・ディクの名曲〝Volando〟に似ている。アレンジはペリジェオのGiavanni Tommasoである。B面はあのリアーレ・アカデミア・ムジカのFederico Troianlがアレンジをしており、彼のレパートリーにも通じるほのぼのとした中にも美しさを秘めた佳曲である。　（吉瀬）



SCORPYO
Destinazione Infinito
Visioni

'77
●Radio RRS 2075
○
◉

SCORPYO名義の唯一のシングル。1977年発表が信じられない古めかしく、サイケデリックでハードな音作りはプログレファンならず、その手のファンにも十二分に受け入れられる独自の音楽性を持っている。A面で妖し気なハモンドに始まり、ヘビーなギターが入ったかと思うと攻撃的なギターとボーカルがユニゾンで切り込み、気だるいボーカルが続く。B面では更にボルテージは上がり疾走する8ビートの上をタメの効いたギターとハモンドが唸り、間奏部では破壊力のあるギターがキメのフレーズを連発し、後半はSEも被さり、ビリエットもまっ青と言った内容。無名どころのシングルでは五指に入れたい名盤。　（高橋）



(IL) SEGNO DELLO ZODIACO
Delta Queen
Odissea

'72
●Rifi REN NP16517
○
◉

1972年という、イタリアン・プログレが爆発した年に発表されたシングルだが、見事にその影響下にある音である。A面イントロのハモンドオルガンにファズにワウペタルを撃げたギター、ダメ押しに曲の後半部分ではイコライザー処理されたヴォーカルが入って来る。非常にパワフルな曲ではあるが、コーラス部分でパワーが若干ダウンする。そのミス・マッチがイタリアらしい所だが、B面を聞く限りでは、このコーラス部分がグループの本質かもしれない。ちょっと元気なポップ・グループがとち狂ってプログレを演った思えば自然かもしれない。　（長谷部）



(IL) SEME DELL' AMORE
Ricominciare
Tu Non Lo Sei

'76
●Durium Ld A 7931
○
◉

デゥリウム・レーベルという所は、上はジェット、ストラーナ・ソシエタからオペラ、アリセイ、クエル・パッツォ・モンドetc。一つ一つを数え挙げたらきりのない程、良質でマイナーな存在のラヴ・ロック・グループの宝庫である。特に1973年〜79年は、デゥリウムの最盛期であり、数多くのラヴ・ロック・グループのシングルがリリースされた。（手あたり次第に買ってもはずれがない程。）このセーメ・デラモーレもその中の1つ。シングル3枚をデュリリウムに残している。サウンド的には、A面は甘く切ないアナログ・シンセ・メロが印象的なナンバーで、B面は弦楽とオルガン、シンセ、ソロでこれでもかと歌い上げる、共に好きなナンバーだ。このシングル以外の曲も好ナンバー揃いの彼らは、もっと有名になれたのに……　（N.Ueno）



SENSO UNICO
Nel Vento Correrai
Caldo Il Sole
'75
●Kansas 5100 415
○
◉

〝SENSO UNICO〞とはイタリア語で一方通行という意味。イタリアの道路には特別にこの言葉の標識が目につく。そんなダサイバンド名だから、何の期待も持たずに気まぐれで聴いてみたら、けっこういける。ジェットの名曲〝Sinfonia Per Un Re〞のような重厚なストリングス・シンセが見事なスローバラード。ダサイバンドばかりのカンサス・レーベルの中では、アルバムを出しているグループよりも、ピカーの美しく、シンフォニックなポップス・サウンドである。センソ・ウニコのシングルは、当シングルの他に、'81年にBIGから発表されたものが確認されているが、年代があまりにも開いているので他にもある可能性が高い。 (Numero Uent)



SERGIO ENDRIGO
C'Era Una Volta,Anzi Domani
Homo Volans
'78
●Vanilla VA 015
○
◉

大ベテランHSERGIO ENDRIGOもプログレ・ファンにアピールする時期は〝Vanilla〞レーベル在籍当時(1978頃)であろう。以前にマーキー紙上で紹介されたアルバム「Donna Mal D'Africa」は本当に素晴らしい出来だった。さて、このシングルも当時のものであり、両面共にテレビ番組の主題曲のようだ。正直なところ、A面はサンバ調のナンバーで、それ程出来の良いものではない。しかし、B面の出来は出色。シンフォニックなキーボードがバックを彩る中、哀愁にあふれるENDRIGOのヴォーカルが冴える。ラストのテーマのリフレインも印象的である。蛇足ながらジャケットはイタリアならではと言った6面開きとなっており、内側はスゴロクとなっている楽しいものである。 (杉原)



SIGILLO DI HORUS
Sei Davanti A Me
Tu Che Sei Tra Gli Angeli
'75
●Picnic SH1001
○
◉

LPの方はつまらなかったという記憶しかないが、彼らが残した4枚のシングルの内少くとも2枚はそれなりに楽しめる。本作は1stシングルで女性ヴォーカルが参加、両面共に暖色の穏やかなオルガンをバックに歌い上げる、どことなくフランスを思わせる佳曲。Kansas時代の2枚「Io E Te/Tu Sei Il Mio Uomo」('76 5100426)と「Hot Dance/Stringimi Forte」は未聴。女性ヴォーカリストが残っていて同レーベルのScrivanoの曲でも演っていれば結構いけるハズ。4枚目はアルバムと同時期の作品で「Antares/Samba Di Horus」(Grog '77 GR07)。女性は脱けていて両面共インスト。A面は厚手のキーボードをシンフォニックに重ねたアルファタウルスやラッテの3rdを思わす秀曲。B面はタイトル通りまさしくサンバ風。 (森下)



(I) SIGNORI DELLA GALASSIA
Creazione
Terza Fila
'76
●Bang Bang BG-042
○
◉

シニョーリ・デッラ・ガラシア(S.D.G)というグループは1976年にこのシングルでレコード・デビューし、4枚のシングルとLPを2枚リリースしているグループであり、このシングル及び3枚目まではラッテ・ミエーレ+イ・プー風のシンフォニック・ラヴ・ロックを主体とするサウンドだ。どれも良質な作品だが、その中でもこのデビューシングルの出来が良い。A面は優雅なピアノと女性スキャットが印象的なインストゥルメンタル・ナンバーで、B面の曲が、美しいストリング・シンセのアルペジオとオルガン、ピアノによって作り出されるシンフォニック・ラヴ・ロックの傑作。なお3rdシングル以降のシングル及び2ndアルバムは、ポップ要素が強く押し出されたサウンドへと変化して行った。 (UNO)



(I) SIGNORI DELLA GALASSIA
Mamma
Ed Ora Vai Via
'78
●Durium Ld Al 8021
○
◉

シニョーリ・デラ・ガラシアのサード・シングル。デビュー・シングル以来のキーボードを中心とした叙情的なラヴロック・サウンドはここでも不変である。A面はコーラスがやや耳に付くものの、いかにもイタリア的な情緒溢れる佳曲である。B面はメランコリックな風情をたたえた、これ又美しい曲である。重量感に欠けるとの指摘がある彼らのサウンドであるが、その事が欠点では無く、むしろロマンティックな雰囲気をかもし出す、バランスの良いアレンジを考えた結果の様に思える。デビューからこの頃迄の彼らのサウンドは、いずれも質の高いラヴロックであり、多くのファンにアピールするものと思われる。美しいイタリア的叙情が好きな方は、是非御一聴をお推めする。(中島)



(I) SIGNORI DELLA GALASSIA
Archeopterix
Vulcano
'79
●Rifi RFN-NP16773
○
◉

ドリウムからリフィへ移籍後の初シングル。通算4枚目。ドリウム時代の叙情的なラヴロックサウンドから一転して重厚なサウンドとなっている。A面はニューウェーブ色のある暗めの淡々としたヴォーカルナンバーで、出来は今一つである。B面はテクニカルなオルガンを大々的にフューチャーしたドラマチックなインストナンバー。彼らの曲の中では異色とも言えるプログレッシヴ・ロック色の強い佳曲である。この後彼らはテクノ・ニューウェーブ色の強いサウンドへと変化して、セカンド・アルバムをリリースする。プログレッシヴ・ロック・ファン向けの作品は本作迄であろう。



SILVANA DEI CIRCUS 2000
Bugie
Tempo Di Sole
'73
●Rifi RFN-NP 16536
○
◉

2枚のアルバムと3枚のシングルを出したCIRCUS 2000は、'73年に入ってドラマーがDUELLO MADRE結成へと、そしてシルヴァーナもソロ活動に入っていくことで解散状態になる。このシングルは内容、タイトルの打ち方にリフィ・サイドの意向がよく見える。A面、B面にしてもバンド・サウンドから離れてイタリアン・メロディになってきている。それにしてもCIRCUS 2000のあのヴォーカルがこれほどイタリア語感のイタリア情緒なのには驚く。相変らず力味気味のシルヴァーナだが、いよいよ〝オカルティックな曲想に、Oh Yeah.!〞を過ぎて、一シンガーとして再出発ということなのか、歌い上げていたりする。もちろん両面ともストリングス入り。　(松本)



SILVANA ALIOTTA
Madre
Baby "Be My Baby"
'74
●Rifi RFN-NP 16577
○
◉

そして'74年、CIRCUS 2000からは想像もつかないシルヴァーナの歌が、ここに展開する。A面はイタリア・ファンの納得のいくところだと思う。B級だ、西海岸コピーだ、と思いながらも何度か聴いているうちにプログレッシヴなインスト・パートあたりから忍び寄るCIRCUS 2000も悪くないが、ロックの熱狂を抜けた彼女の歌の世界も悪くない。さすがに癖が残っていて暑苦しさのあるアレンジだとしても、そのままのイタリア感情である。B面はロネッツのスタンダード・ナンバーのカヴァー。とり立てることはほとんど見当らない。その後の足どりは未確認。ロックがまぶしかった彼女がここに落ち着いたかと思うと、イタリアの刹那的な一瞬にして過ぎ去る若さゆえの躍動を、また一つ見たような気になる。　(松本)



SINFONIA D'AUTUMO
United
Prendi La Mia Anima
'86
●M.E.A.Sad M451012
○
◉

ナポリの弱小レーベルから1986年に恐らく自主製作に近い形で発表されたシングル(レコード・レーベルの紙がコピー.!)。A面は本誌読者には興味の無いポップスだが、B面は初期のボッテガを思わせる。'80年代ではトップ・クラスとも思われるラヴロック。美しいキーボードに導かれ、イタリア特有のハイトーン・コーラスに絡むギターも良いメロディーを弾いている。'80年代プログレは暗黒の時代だったが、ラヴロックグループには'70年代後半であった。ラヴロック・ファンは'80年代も要注意という例である。　(長谷部)



SOCIETA PER AMORE
L'amore E' (Molto di Piú)
California Sound
'77
●New Polaris F.K.50
○
◉

恐らく、このシングルと「He Bella Sei/Decidi Tu」(F.K.32, '76)を発表し消えたと思われるSocietá Per Amore。このポラリスというレーベルは非常にラヴ・ロックグループ(I Romans, Numi)が多い。ラヴ・ロックの好きな方はCGD、UP、CBS、ERRE、DURIUM等のレーベルを集めるのも良いだろう。レコードの内容はピアノにシンセが絡み、そしてコーラスとフルートが、というラヴ・ロックの王道パターン。年代的にアレンジは少々すっきりしているが、十分にイタリア独特の哀愁は感じられる。B面はタイトルから想像出来るとおりの音でプログレ・ファンの興味の対象となる音では無い。　(長谷部)



(I) SOGNI PROIBITI
Oggi Sono Tanto Triste
Il Gioco Di Patrizia
'76
●Durium Ld A 7921
○
◉

A面はミディアム・テンポのオーソドックスなラブ・ロック。サブタイトルに〝Fifty Tears For Every Kiss〞とあるので、原曲はアメリカン・ポップスかもしれない。さびしげでなつかしさを感じさせる音作りは60年代のポップスに近い。ハッタリのない歌と演奏は好感がもてるが、問題はB面だ。本シングルのプロデュースも担当している才人、Renato Pareti作曲によるインストで、ややイージー・リスニング風ながら、クラシカルで美しいメロディは非常に魅力的だ。彼のソロ・アルバムも出来がいいので、機会があれば聴くことを勧める。　(吉瀬)



SOGNO
Ma L'amore No
Oltre Oceano
?
●R&V Studios NP2131
○
◉

ジャケットは画用紙みたいな紙質に2色印刷のいいかげんなイラストで、クレジットはなく、まして、バンドだか、ソロ作品だかも全く解らない。こんなに何も解らないシングルも珍らしい。とにかくレビューを書く方としては全くお手上げ状態の困りもののシングルを、松本君に〝こんなの知っている?〞とつい口をすべらした為に書くはめになってしまった。とにかく音の方はインストで、オーソドックスなミディアム・テンポのリズム隊にアコースティック・ギターのアルペジオ、そして主役はシンセ群。シニョーリ・デッラ・ガラシアや、ラッテ・ミエレ風のムーディーで爽かなストリングス・シンセが朗々とした空間を演出する。イージーリスニングとして発売されたものであろうか?　(N.Ueno)



(LA) STANZA DELLA MUSICA
Er Giorno Der Giudizzio
Chi Non E' Innamorato
'78
●Philips 6025 205
○
◉

スタンツァ・デッラ・ムジカは'70年代後半にアルバムを1枚出しているが、この時点で手元にそろわなかった。恐らくこのシングルもアルバムからのカットだろう。一言で言うなら彼等も歌物バンドだが、ありがちなオーケストレーションをバックにしたタイプではなく、一風変ったところがある。このシングルも両面とも、どこかおどけたような、どこか土臭さを吸収した味わいがある。ウッドベースや管楽器をフィーチャーした民謡タッチの曲調を持つA面、よりイタリアならではの陽気さを感じさせるB面、どちらも所謂歌物というよりも、南国情緒とでも言うべき地方色を漂わせて、あまりラヴ・ロック・ファンには向かないかもしれない。毛色の違ったヴォーカル系バンドといったところだろう。（松本）



STEFANO (PULGA)
Vivo
Stanco
'76
●FMA ZFM50404
○
◉

このシングルは思い出深い。以前に本誌でもおなじみの田中裕生氏とイタリアに行った際に、絶対に探すと心に決めていた3枚のシングル（他の2枚はGEN〝Anche Un〜〟PANDA〝Voglia Di〜〟）のうちの1枚であり、特にこのシングルはひび割れたものしか田中氏も所持していなかったため、良い音で聴きたいと心から願っていたものだからである。思い入れが強かったのを差し引いても、このシングルの内容は超一流のものである。後のCGDよりのアルバムとは大違いの、類稀なセンスが息づいている、彼のカンタウトーレとしての姿がみられる。特にB面の〝Stanco〟は、キーボーダーとしてのセンスも余すところなく発揮された名曲。心を深くえぐる切々たるピアノ・プレイは本当に感動的だ。（杉原）



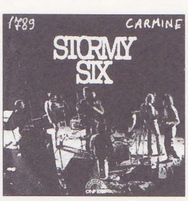
(LE) STELLE DI MARIO SCHIFANO
E Il Mondo Va
Su Una Strada
'68
●CBS 3442
○
◉

まるでアモン・デュールの「Psychedelic Underground」かヴェルヴエット・アンダーグラウンドの''シスター・レイ''を思わせるようなビートニク系アーティスティック作（アルバム）が、最近CDになってしまったマリオ・スキファノだが、これはそれ以前に録音されたシングル。or,g,g,b,dsの4人編成でやはり彼自身は演奏参加していない。多分、ウォーホールに位置づけの似たコンセプト・メーカーなのだろう。非イタリア系のビート・サウンド、ジャケット・ワーク、ともにアルバムを予感させる。曲自体はオーソドクスだ。A面はハード・タッチ、B面はバラード・タッチ。イタリアには珍しく全然人なつっこさがないのも相変わらず。ハード・エッジな連中だ。（松本）



STORMY SIX
La Luna Estanca
Lodi
'?
●First FR 5007
○
◉

ファースト・レーベルからのリリースだから1作目「Le Idee〜」の頃には違いない。'60年代末か'70年か、その辺りだろう。両面ともアルバム未収録だが、曲自体はどちらもとりたてるものでもない。ロルケストラへ移籍以後のユニヴェル・ゼロも真青な複雑なアンサンブル、ジュルヴェルヌを軽く先取るチェンバー・サウンドが、まるで嘘のような、まるで別のバンドのような、この頃のストーミー・シックスである。明るめの、コード・チェンジもおいてきぼりのフォーク・ロック・サウンドになっている。ただし、後の充実した音楽性を知っているなら、彼等の歩みを見る上で、たいへん貴重な資料ではある。（松本）



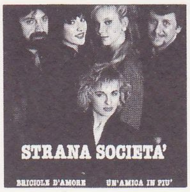
STORMY SIX
1789
Carmine
'76
●L'orchestra ONP 1001
○
◉

ストーミー・シックス全盛期、もしくは音楽的に充実期を迎えた頃のシングル。A面は5作目「Cliché」に収録された代表曲の一つ。B面は6作目「L'apprendista」に入っている曲だが、テイクがまったく違う。アルバム・テイクがヴォーカル・ナンバーであるのに対して、こちらはインストになっている。しかも冒頭部一つとってみてもアルバムでは生ギターなのにシングルではピアノ、中間部の変拍子構成の所でアルバムはよりドラムが細かにアグレッシヴなスティックさばきを見せる等、大幅な違いがある。総じてシングル・テイクの方がクラシカルでアンニュイ。この当時の彼等の典型的なナンバーだけにはずせないところ。アルバムの5作目と6作目は同時期に書かれていたのかもしれない。（松本）



STORMY SIX
Cosa Danno
Reparto Novità
'81
●L'orchestra OLPN 803
○
◉

B面が深い。この曲は「Ar Volo」に収録され、後には「Recommended Records Sampler」にも収録された。シングルは「Ar Volo」テイクとは違い、「〜Sampler」テイクと同じである。ということがどうでもよくなるメロディを持っている。ここにも深いものがある。無名の民の喜びや悲しみの塗り込められた歌を、ストーミー・シックスが朗々と歌った、そんなイメージを起させるメロディの存在感、もしくは説得力を感じる。もちろん彼等の自作曲だが、トラッドになり得るような曲だ。長年歌ってきた彼等の成果の一つと言っていいだろう。音楽を飾らず型どらず、研ぎ澄ませても内に包み、少ない言葉で多くを語る。ぎっしりと詰った重味も余韻となって人に響く。見習いたくなる素晴しい音楽だ。（松本）



STRANA SOCIETÁ
Briciole D'Amore
Un'Amica In Piú
'?
●Drums EDN 2229
○
◉

結局探し出せなかったがどうやら彼らは'89年頃に3rdアルバムを出したらしい。本シングルは恐らくそこからのカット。若くてきれいなおねえちゃんが3人もいて、多分オリジナルメンバーは残っていないのではないか。とりあえず内容は良い。上出来の女性ヴォーカル・ポップス。彼らは'74年の2nd以降もシングルリリースは続けていてサンレモ'76参加曲「Andiamo Via/Ma Che Ragione Hai」(Durium Ld A7911)、'77年参加曲「Tesoro Mio/Bella Bellissima」(Durium LDAI 7958)は共に良い出来。ドカスの1st LPを出したフォニット時代の「Fiori Gialli/Quella Donna Sei Tu」(Fonit'73 SPF31304)も意に反して非常に素晴しい内容。シングルは他にも何枚かある。 (森下)



TAVOLA ROTONDA
Principessa
Destino
'73
●Rifi : RFN-NP 16542
○
◉

La Verds Stagione解散後Ihle兄弟が新結成したグループ・Tavola Rotondaの唯一(?)のシングルは、数あるシングルの中でも屈指の一枚。夢見心地のボーカル、ハーモニー、華麗にして気品漂う各種キーボード、爪弾かれる清澄な生ギター、幽玄かつ流麗なフルート、そして深遠メロトロンが聖神の中に翳りを添える。クリムゾン、ジェネシス、キャメル等のエッセンスを巧みに吸収しイタリア独特の繊細で奥深い美意識で包み込み、嘆息も出んばかりの叙情で我々を圧倒する。A・B面共甲乙つけ難い完成度を誇るこのシングルはI hle兄弟渾身の1枚であり、比類無き美しさを湛えた信じ難い逸品である (鈴木伸一)



(I) TEOREMI
Sognare
Tutte Le Cose
'71
●Polaris FK2
○
◉

冒頭からいきなり重金属を引擦る様な歪んだギターの爆発的な音の塊。イタリア・ヘヴィーの一つの頂点的バンド、テオレミの唯一のシングルはLPを気に入った人なら狂喜するに違いない内容である。LPの一年前の制作で、曲はLP同様メンバーではないPallesiのクレジットがあるが比較的シンプルな構成(ただしB面はジェスロ・タルの〝With You There To Help Me〟のカヴァー)。ヴォーカリストはTito GalloでLPのLord Enzoとは別人だろう。少々なよっとした声質でコーラスに助けられている。ベースのAldo Bellanovaは後にサマディに参加する。サイケ調の美しいスリーヴも書いておく価値があるだろう。 (欲しいぞ森下 忠)



(I) TEPPISTI DEI SOGNI
Sei Tu L'amore
La Pioggia D'autunno
'79
●Mia M 1551
○
◉

ピテッシティ・デイ・ソーニもシングルを数枚リリースしているラヴ・ロック・グループ。このグループも特別な個性は何一つ見当らないごく一般的なヒット指向のグループだが、それらの中では〝La Mia Solitudine〟というナンバーがちょっと印象的な曲。いかにも地中海に面したイタリアならではのマンドリンと、ソリーナのストリングス・シンセ、そしてあまりにお決まりの歌サビでの無理した音域のファルセット・コーラスが爽やかで心地良い。〝Amore, Amore!〟と暑苦しいサウンドが多い中で、そよ風のような存在のグループです。 (N.Ueno)



TERRA
Angeli E Dinosauri
Silenzio Il Tempo Gira
'82
●It ZBT 7252
○
◉

Albergo Intergalattico Spazialeで歌っていた女性ヴォーカリストのソロシングル。A面ではアルベルゴ〜の時の相棒ジャコモ・ディ・マルティノの名も見え、恐らく両面共キーボードを弾いているのは彼だと思われる。A面「天使と恐竜」では、厚く深いキーボードをバックにした彼女の感情移入の激しい歌い方は何かに憑かれたかの様でもある。B面も同様で、導入部の悲愴感とサビでの高揚感の対比が見事。より一層狂的なヴォーカルを満喫出来る。華やかなルックスとは裏腹に彼女はむしろムッツィ・ロフレッドやカトリーヌ・リベロあたりと比すべき存在なのかも知れない。'82年のイット制作ながらポップとは程遠い内容でよく出たものだと感心してしまった。 (森下)



(I) TIPI
Un Pensiero... Una Lacrima
I Tuoi Capelli
'70年代初頭?
●West Side WS 8005
○
◉

オルガンの壮厳の響きから、ストリングスをバックに切なく歌い続ける様は古さを感じさせるものの、一聴に値する曲である。B面もまた古めかしいオルガンの響きが独特の雰囲気を出している。ストリングスは使用されてはいないが、'60年代のブリティッシュ・ビートにも近い味わいのある曲といえる。プログレッシヴ・ロックとはいい難いが、単なる資料に終らすにはもったいない好シングルの一例であろう。A面はTeaとMarino、B面はDurandとElliotの作詞・作曲で、このレコード番号のひとつ前の8004はあのアルサ・ファラックスのシングルである。 (吉瀬)



TITO SCHIPA JR.
Sono Passati I Giorni
Combat

'72
●Fonit SPF 31290
○
◉

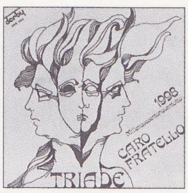
ファンの間でもあまり口にのぼることがないようだが、Tito Schipa Jr.が中心となって作られた「Orfeo 9」はよく聴いたレコードであった。70年あるいは、71年に発表された。彼の最初期のシングルであろう。A面は、「Io Ed Io Solo」に収まっている。生ギターをバックに彼独特の語りかけるように唄うスタイルはすでに確立されている。うって変ってLP未収のB面「Combat」はロック調のかなり凝ったアレンジによるドラマチックな曲。Bill Contiのアレンジに因ることも多いと思われるが、発売時期の古さを感じさせない。彼の知る人ぞ知る「Occhi Del Nord」に次ぐ名曲といえよう。こんな曲をシングルのB面として封じ込めてしまうイタリア人の大胆さと創造力に脱帽せざるをえない。（吉瀬）



TONY CICCO
Settimo Cielo
Velocita

'82
●Una ZBU 7263
○
◉

確かこの時期にソロ・アルバムが出ていたと記憶しているので、アルバムからのカットかも知れない。フォルムラ・トレ解散後、「Notte」や「E Mia Madre」でシンガーとしての印象を決定づけた彼だが、その後の足取りはイタリアン・ロック・ファンの範中からはずれた感がある。'77年にはFANTASYというバンド名義で「Uno」(EMI 3C 064 18306)をリリースしたものの話題には成っていない。このシングルは、音こそ洗練されていても一時のディスコがかった音作りから離れて、彼のあの歌声を安心して聴ける。両面とも都会的な雰囲気の曲だ。ほとんどエフェクトをかけていないギターのコードストロークの硬いトーンが耳に残る。語尾に溜息まじりの余韻を残すかのようなヴォーカルは未だ彼ならでは。（松本）



TRIADE
1998
Caro Fratello

'73
●Derby DBR 1855
○
◉

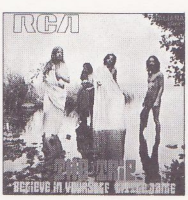
LP一枚を残して消えた愛すべきキーボード・トリオ、トリアーデ。彼等はLP以外にもシングルを一枚だけリリースしていた。残念ながら両面共、LPからのカットである。ジャケットはLPのカヴァーになっている3つの頭を持つ男のイラストが渋い茶色の紙に印刷されている。彼等のサウンドはテクニック的にはいまひとつではあるが、独特の哀愁を秘めたアイデンティティーはやはり人の心を打つものがあるようだ。セカンド・アルバムがぜひとも聴きたかったグループの一つであるように思う。オーバーグラウンドに浮上できずに消えた数々のグループの中でも特に、印象の強いグループであっただけに、現在から回顧する想いは募るばかりである。（今）



TRIP
Fantasia
Travelin' Soul

'70
●RCA PM 3561
○
◉

かつては幻の名盤としてファンを騒がせた「Time Of Change」。グループ自体の人気も下がる一方でちょっと残念。'70年11月に発売された彼らのセカンド・シングル、まずジャケットに目が行ってしまう。いかにもそれらしき出で立ちで当時イタリア国内でそう多くはない演奏主体のバンドだと分からせる。1stLPと同じくUp & Down Studioのデザインによるものだろう。1stLPはプログレ・ファンを喜ばせる内容とは言い難いが、それでもオルガンの使い方、曲の構成など注目すべき点を見つけることはできる。この2曲、やはり、オルガン中心のブリティッシュ・ロック風とはいえ、曲の良さもあって仲々飽きさせない。初期のトリップを知るには最適な1枚といえる。サントラ盤「Terzo Canare」にも収録。（吉瀬）



(THE) TRIP
Believe In Yourself
Little Janie

'71
●RCF PM 3604
○
◉

早い話がトリップは「Trip」「Caronte」と「Atlantide」「Time Of Change」の二期にわかれる。前者がギター系ハード・ブルース・ロック、後者がハモンド・オルガン系E、L&Pタイプ。関心人物のフリオ・キリコはもちろん後者のドラマーだ。バンドはビリー・グレイのギター・ワークからジョー・ヴェスコヴィのキーボード・ワークへと比重をかけていくわけだが、2nd「Caronte」発表の年に出たこの3枚目のシングルは、その両側面を聴くことができる。A面がアルバム未収録。3人のイギリス人を抱えたこのバンドの英米ロック筋のもので、泥臭いサウンドに少し野卑なコーラスが乗る。B面は2ndからのカット。オルガンとメロトロンを利かせたバラード調のヴォーカル曲で比較的奥行きがある。（松本）



(I) TROLLS
Il Mondo Che Vuoi!
Nel Silenzio

'67
●Columbia SCMQ 7069
○
◉

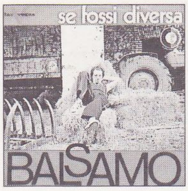
イ・トロルスはニュー・トロルスの前身だという話が以前から有ったが残念ながら今だに確かな確認が取れていない。というのは、どうやら元々友人同士だったそうなのだが、いざバンドを組む段階になって所謂音楽的意見の相違から二つに分かれてしまったらしい。そしてトロルスという名前を争って裁判沙汰にまで発展したとか。その結果負けたヴィットリオ派が「ニュー」を頭に付ける事で一件落着したそうなのだ。しかし結果的にはイ・トロルスは'66年から'69年まで7枚のシングルを出しただけで解散に追い込まれたのである。イ・トロルスのメンバーは5人で、Dr, Ba, Sax, Trumpet, Organ + Banjoといった変則的な構成で、当時流行りのヒット・ポップス寄りの音楽を演奏していた。（片山）



L'UMANITA
Non Andartene Stasera
Ora Tu
'?
●Manuelita MAN NP 9001
○
◉

Massime(ギター)、Roberto(ベース)、Marco(オルガン)、Mauro(ドラムス)という4人から成るグループL'Umanitaが、Gino Dorettiというボーカリストを迎えて制作したこのシングルは、やや古さを感じさせるものの、プログレッシブな感覚の横溢したサウンドを聴かせてくれる。〝Non Amdartene Stasera〞〝Ora Tu〞共にG. Dovettiの荒々しく歌い上げるボーカルと棚引くようなオルガンの音色が耳に残る。テクニック云々という以前に、暗く淀んだサウンドに身を任せるのも又一興であろう。美しく意味深長なジャケットは透逸なる出来映え。尚Stella Edimはミラノのレーベル。

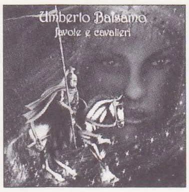
(鈴木伸一)



UMBERTO BALSAMO
Se Fossi Diversa
Cosa Vuoi Pensare A Poi
'72
●Las Vegas LVS 1057
○
◉

ウンベルト・バルサモの恐らくデビュー曲と思われる。独特のハスキーな声で真面目な愛を唄う姿勢はこの時既に確立されていた様だが、A面は〝夏のディスク・フェスティヴァル1972〞に参加した曲で、'74年の1st ALBUM「PASSATO PRESENTE E FUTURO」に別ミックスで収録された。静かに語りかける様にただひたむきに愛を唄い続けるバルサモであるが、この曲の中に既にバッティスティにも似た心を打つ力強さが感じ取れる。B面はＬＰ未収のバラードだが、名アレンジャーのジャン・ピエロ・レヴェルベリの手腕が最大限に発揮された最高の出来で、ハープ、ブラス、ストリングス、ハモンド、シンセと総動員して一大オーケストレーションを聞かせてくれ、イ・プーの〝パルシファル〞をほうふつとさせる。

(片山)



UMBERTO BALSAMO
Favole
Cavalieri
'85
●Momenti MOM 94001
○
◉

'82年にアルバム「MAI PIU'(愛を置き去りにして)」を発表後、バルサモは何故かシングルしか出さなくなってしまった。'84年、移籍したばかりのFONIT-CETRAを離れWEAからシングル「IO VIVRO'/L'ESTATE(WEA 249388)」を突然発表したが、いきなり曲調がバッティアート路線になってしまった。翌年再びレーベルをMOMENTIに移籍し本作を発表、ビート、シンセの音色、使うフレーズの全てが完璧にバッティアートそのものになってしまった。バルサモが何を思ってエレクトリック・ポップへ走ったか知る由もないが、サウンドといいジャケットといい中々美しく仕上がっている所は流石バルサモである。'90年、アルバム「RESPIRANDO LA NOTTE LUNA(CGD903171086)」を久しぶりに発表、今後に期待できる力作だった。

(片山)



UNDER 2000
Preghiera Dlamore
Tagilia La Corda
'71
●RCA HELP ZH 50051
○
◉

HELPレーベルのシングル。他にも2枚EPがあるらしいが見たことはない。が、このEPA面の素晴らしさに触れると握った拳が離れなくなるという野口英世状態に陥いるであろう。本来10分くらいかけて仕掛ける展開を強引に2分半に凝縮したという感じでめまぐるしく展開するのだが、展開する度に狂おしいまでに美しいフレーズが紅蓮の炎の如く聴者を包み込むであろう。オルガン、泣きのギター、ファルセットのコーラス等といった事以前に曲展開の勝利といえる。さながら悪代官に帯を引っ張られて駒の如き回転で着物がはだけて布団に倒れ込む罪のない町娘の如く、悲しく、美しく、そして……乱れるっ!まさに太陽とオペラの国イタリアの申し子といったシングル。

(牧野)



(THE) UNDERGROUND SET
Motor Road Underground
Slaughter On The Motor Road
'70
●Radio RR 1043
○
◉

'70年代末から'80年代前半にかけての日本人ディーラー/コレクターによるイタリアンロック発掘作業、当者達の殆どがシンフォニック好きだったため、ハード系やアヴァンギャルド系の作品を過少評価することになってしまった。アンダーグラウンド・セットもそういった例の一つだったが今日ではオルガン(ハード)ファンに聴かせると大喜びする代物として再発見されている。両面未収の本シングル及びB面未収の「Arcipelago/La Filibusta」(Radio RR1030)は4曲共テレビ番組用のものの様で、バンド自体がスタジオミュージシャンを集めて作った企画物だとする識者の説を裏付けていると考えてもいい気がする。もう一枚あるらしいシングル「Una Lettera/Libitum」(Tickle '71 TSP 1301)は現物未確認。

(森下)



UT
La Mia Vita
Afrodite
'75
●ERRE RR 3076
○
◉

ウー・ティ(UT)は一枚のアルバム(MARQUEE 12号ヨーロピアン・カタログ・イタリア編参照のこと)の他、そのアルバムからの抜粋とシングル・テイクを収録したベスト・アルバム的色彩の強い「La Strada Era Bella」と計2枚のアルバムをリリース後、シングルを数枚リリースしながら'70年代後半まで活動を続け、解散してしまったグループである。後期のシングルは当然、LP未収曲で、かなりタイトになってしまっているものの、UTのオリジナリティを感じさす好作品群である。ここでは両面ともLPに収録されてはいるが、ジャケットの美しさが光る本シングルを代表的一枚としてリスト・アップしておくことにする。カンタウトーレとプログレッシヴ・ロックの橋渡し的なグループUT。機会があったらぜひ聴いてほしい。

(山崎)



UT
Farai L'amore
Trasmigrazione
'77
●Bird CD 4524
○
◉

UTは'76年のシングル・コンピレーションLP「La Strada Era Bella」以後も活動しており、何枚かの未収録シングルが出ている。確認できるかぎりは、他に「Lucia/Moonchid」(Bird CD 4536, '78),「Elisabetta Sa/Treno Va」('79)がある。また掲載外のシングルで'74年の「Homo/Nel 3000 D.C.」(Erre PR 3068)のB面曲も未収録。当シングルのA面は多少タイトな演奏になりながらも、UTと判る未収ヴォーカル曲、B面は彼等の特徴とも言えるインスト・チューンという構成になっている。うまく彼等の音楽性がまとめられている。エコーのかかったフルートの調べからギターの泣きへ、そしてヴァイオリンへと受け継がれていくB面のクラシカルな曲想が透逸。こちらは両LPに収録。 (松本)



UT
Elisabetta Sa
Treno Va
'79
●BCE 45-PO 4943
○
◉

ENZO STAVOLOのLP/EPをリリースしたBCEからのリリース。両面ともにヴォーカル・ナンバー。これ以前に比べると相当演奏もタイトになり、彼等の特色でもあった激甘のヴィブラート・ヴォーカルでさえ、すっきりとしたものになっている。ストリングスの付け方もポップだ。時期を思えば、この変化は自然な流れとは思うが、UTの、他数多くの歌物バンドをしのぐ特色の、インストゥルメンタル・パートが聴けないのは残念。シングル1枚では判らないとしても、音作りの傾向に変化が出てきているように感じられる。もちろん歌物バンドの性格は変らない。UTのインスト・パートは歌の補強ではなく、それ自体が歌メロをより多彩に展開した積極的なものだったが、ここでは歌を隠す補強にも思える。 (松本)



(The) VALERIANO GROUP
L'Urlo Del Vento
Slow Down-Piano, Giu
'77
●Tickle TCK 1322
○
◉

The Valeriano Groupの知り得る限りに於て唯一の作品。〝Slow Down-Piano, Giu〟は乗りの良いやや屈折したハード・ロック。バイオリンも導入しており割と良い。しかし絶品は〝L'Urlo Del Vento〟で、シュールで幻想的な奮囲気を湛えたそのサウンドは、イコライズされたボーカル、風の音の如きシンセサイザー、憂愁に満ちたフルートそして清澄なギターの音色が一体となってまるで夢幻の荒野を彷徨うかのようだ。もしこの方向性でアルバムを制作していたならば、かなりの水準に達した作品になっていた事だろう。 (鈴木伸一)



(LA) VECCHIA LOCANDA
Innamorati
Contratto D'amore
'78
●MEC MG 4009
○
◉

下っ腹の出たメンバー写真からは想像もできない美しくやさしいラブ・ロックを奏でるヴェキア・ロカンダの多分唯一のシングル。ジャケットからするとナポリ出身のグループかもしれない。両曲ともキーボードを多用した典型的なラヴ・ロック・サウンドで、ところどころ入る泣きのメロディに共感を持つ方も多いだろう。イタリア人にとっては余りにも当たり前の曲調だからこそ、無名のままで終ってしまい、時を経て異国の日本で再評価されるのだろう。作詞・作曲はA面は、Gino Martinisi、Lutterotti、Capuano。B面は、Martinisi、Capuano。 (吉瀬)



(LA) VERDE STAGIONE
La Verde Stagione
Lacrime Sul Cuscino
'70
●Numero Uno ZN 50003
○
◉

レコードに針を落とすや否や、なつかしいようなイタリアン・ラヴ・ロックの世界への引きこまれてしまう。'70年発表ながら後年たくさん生まれてくるこの手のグループと比べても遜色はない。同じレーベルのFormuia 3が派手な活躍を見せているのに比べ、実に対照的なサウンドを持った地味とはいえ良いグループだったのに、何枚かのシングルを発表して解散してしまったようだ。せめて1枚のLPでも作ってくれていたらと思うのは私だけではないだろう。私の持っている3枚の中ではこのシングルが推薦できる。A面は甘く切ないメロディ・ラインを持ったラヴ・ロックの典型ともいえるサウンド。ストリングスも美しい。B面は幾分ポップな曲で、ギターのメロディが楽しい。 (吉瀬)



(LA) VERDE STAGIONE
Milioni Di Domande
Come Una Rondine
'70
●Numero Uno 2N 50.031
○
◉

GEMSというバンドを前身にして'70年に結成されたヴェルデ・スタジョーネのセカンド・シングル。A面はムーディ・ブルースの〝Questions〟をジャン・ピエロ・レヴェルベリがオーケストラ・アレンジしてのカヴァー・ヴァージョン。B面ではヴィブラート・ヴォイスを活かしてロック色の強いメロディアスな面を見せる。'70年代初頭ならではの泣きを力強く仕上げ、彼らの代表曲に挙げておかしくないだろう。録音の古さが気になることと、シングルの各曲に出来不出来の差があること、などを解消していけば、フォルムラ・トレを育てたヌメロ・ウーノのこと、彼らのアルバム用に書かれた曲を聴いてみたかった気がする。結局はアルバム製作には至らなかった。 (松本)



(LA) VERDE STAGIONE
Senza Elisa
Stella Stella
'71
●Numero Uno ZN 50121
○
◉

一枚のシングルを残したGEMS〝Innamoratevi Unitevi/Seduto Per Terra〞(Equipe EQ 0112)が前身で、それは〝Lovers of the World Unite〞のカヴァーでフォーク・ビート調のもの。それ以前にもパトリツィオを除くナンドとルーカの兄弟は〝Ti Fai Tanto Desiderare〞をリコルディから出している。GEMSから当シングルまでは3兄弟といとこのファブリツィオの4人編成。メジャーを目指したようだが、当シングルのB面にも顕著なアコースティック中心の静かなサウンドは強い印象を残させるまでには至らなかった。A面は「エリーゼのために」。この後、ヌメロ・ウノからリフィに移籍し、編成を変えながらプログレッシヴ・ロックの世界へ入っていくことになる。
(HIRO TANAKA)



(LA) VERDE STAGIONE
L'onesta
Al Nord
'72
●Numero Uno ZN-50141
○
◉

イタリアンロックのレーベルで、まず頭に浮かぶのが、PFMやFormula3などのNumero Uno、そのNumero Unoからシングルを、リリースしている彼らだが、レーベルがメジャーな割には成功しなかったようだ。確かに、曲、演奏、唄とどれを取っても他のグループに劣る所こそ無いが、言い替えれば、これが、Verde Stagioneだと、言ったセールスポイントに、欠けていたように思われる。しかし、ヴォーカルなど決して悪く無く、その甘い声を生かした。ラヴロック風味の強くきいた曲を、もっとたくさん作っていれば、われわれリスナーも楽しみが増えていたのに。イタリアンロック全盛期の'70年代に数枚のEP盤を発表した〝Verd Stagione〞決して忘れる事の出来ない名前である。
(堤野)



VIETA
Lo Stalliere
Giorni Neri
'?
●Sombrero D.M 210
○
◉

一瞬、〝Acqua Tarkus〞かと思ってしまうキーボードのメロディ・ライン、そのあとに来るナイーヴな歌声、アコ・ギの響きもよく、やがてドラムのロールと骨太なベース・ラインから再びAcqua Tarkusふうにキーボード・プレイへ。こんなA面と、ストリング・シンセをバックにリズム・セクションが技巧的なところを見せるそんなB面で、プログレ・ファンの気を魅かないはずがない。ところが資料/情報は何もない。いつ録られたのかも判らない。チョッパー・ベース・タッチのB面を聴いていると'70年代後半なのか。ジャズ・ロック系と言うにはA面のヴォーカル・パートが叙情的。ドラムの音がぺしゃけている録音だというのにこのベースは相当な実力だ。16チャンネル以上でアルバムを期待したい。
(松本)



VINCE TEMPERA
Ansia
Up Pops
'72
●EMI 3C 006-17844
○
◉

後にイル・ヴォーロのキーボード奏者となるヴィンチェ・テンペラのそれ以前のシングル。彼は後に何枚かのソロ・アルバムもリリースしているわけだが、むしろアレンジャーやキーボード奏者としての参加の方が有名かもしれない。このシングルが出た'72年というと、例えばTEATRO TEMPORANEAMENTE TRABALLANTE(T.T.T.)との共作等がある。A面はTV番組のテーマ曲らしく、アップ・テンポでポップな曲調をサックスやトランペットがリードし、キーボードが終始動きの激しいバッキングをつけている。少しファンキーな曲調だがキーボード・トーンはくすんでいるのでロックっぽい。B面もタイプとしては似ていて、やはりアグレッシヴなポップ・インストゥルメンタル・ナンバーになっている。
(松本)



(I) VULCANI
Era D'Estate
Primavera In Te
'72
●Metropole SM 013
○
◉

稚拙な西部劇の広野とドクロのイラストのこのジャケットを見た時には、まさかこんなに良い音が出てくるとは思わなかった。確かにA面のナンバーはこのイラスト通りのインディアンを歌った曲だったが、B面の〝Primavera In Te〞が名曲。イントロや中間部と歌パートの場面展開が激しい曲であり、歌中はオルガンの白タマをバックに歌うこの当時の平均的な歌ものだが、これがイントロ、エンディングでは一転して壮大なオルガンをバックに力強く気品にも温れるフルートが飛び回わるプログレへと早変わり。やっぱりクラシックが生活に息づいているお国がらが羨ましい。隠れたB級シングルの名作だ。1972年にMetropoleという超マイナーなレーベルからリリースされたものである。
(N.Ueno)



YOICE
Sold Out
Good's Own Land
'71
●Produzioni Ventotto PRV 28009
○
◉

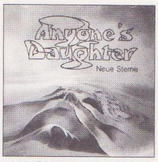
アナロジーの前身。メンバーはLP発表時と同じだが'70年の結成から'72年の頭まではこの名前で活動していた模様。音の方はアナロジーと同一メンツだけあってオルガン・ロックで女性ヴォーカル、歌詞は英語である。演奏は安定しておりその落ち着いた音造りもあってむしろ英米風。'60年代末から'70年代初頭の作品に通じる、ややケイケ・プログレ直前な印象を持つが、当時にあってこの作品が抜きん出たものとは言い難い。完成度を落としてでももっと新な試みが欲しかった、と思うが23年前はこれで良かったのだろうか。同じレーベルのTerza Classeのシングル「Animal Love/Jimmy」('73, PRV28003)ももっと熱いサイケで良い出来である。今後の発掘に期待が持てそうなレーベルだ。
(森下)

新宿レコード

日本で初めてスタートした60・70年代のプログレッシヴ・ロックの専門店



GENTLE GIANT



ANYONE'S DAUGHTER



PETE SINFIELD



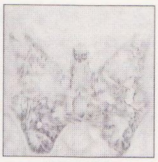
STICK & STRING QUARTET



BO HANSSON



TARANTULA



CANARIOS

〈特選プログレッシヴ・ロック〉
- ●PENDRAGON/The Window Of Life
- ●IQ/Ever
- ●PALLAS
  /The Sentinel
  /Knightmoves To Wedge
- ●STRANGERS ON A TRAIN
  /The Labyrinth
- ●ILLUSION/Madonna Blue
- ●MAGMA/Magma Live
- ●PETER HAMMILL
  /Loops & Reels
  /There Goes The Daylight
  /Offensichtlich Gold Fisch
- ●GENTLE GIANT
  /Acquiring The Taste
  /Civilian
  /Giant For A Day
  /In A Glass House
  /Interview
  /Free Hand
  /The Power And The Glory
  /The Missing Piece
  /Octopus
  /Playing The Fool
  /Same
- ●BO HANSSON/Lord Of The Rings
- ●SOLSTICE/New Life
- ●LOS CANARIOS/Ciclos
- ●EVERON/Paradoxes
- ●ANYONE'S DAUGHTER
  /Adonis
  /same
  /Piktors Verwandlungen
  /In Blau
  /Neue Sterne
  /Live
- ●KEVIN AYERS/Song For Modern Hippies(Live in Japan 1992)
- ●TARANTULA /1st /2nd
- ●PETE SINFIELD/Still

〈イタリアン・プログレッシヴ・ロック〉
- ●ROMANTIC WARRIORS/Battlefield
- ●GIL ALLUMINOGENI
  /Geni Mutanti
- ●LA PENTOLA DI PAPIN/same
- ●PROCESSION/Frontiera
- ●STICK & STRING QUARTET
- ●CONSORZIO ACQUA POTABILE
  /Sala Borsa Live 1977
  /Nei Gorghi Del Tempo
- ●V.A./Fafnir
- ●COURT/same
- ●MAXOPHONE/same
- ●LOCANDA DELLE FATE
  /Forse...with Extra Tracks
- ●SYNDONE/Inca
- ●CALLIOPE/Citta'Di Frontiera
- ●PFM/Live In Japan
- ●ORME/Ad Gloriam
- ●IBIS/same
- ●BALETTO DI BRONZO
  /YS-with Extra Tracks
- ●LATTE E MIELE
  /Papillon-with Extra Tracks

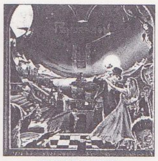
☆プログレッシヴ・ロックの名盤・廃盤の数々を世界各国から輸入して取揃えております。



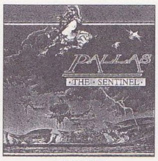
SOLSTICE



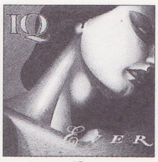
MAGMA



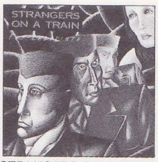
PENDRAGON



PALLAS



IQ



STRANGERS ON A TRAIN



ILLUSION

〒160 東京都新宿区西新宿7・5・6 新宿ダイカンプラザ 756・2階 TEL03(3363)3669
営業時間(平日)11〜19時 (休日)11〜17時 定休日・毎週月曜日

新宿レコード

アナログ廃盤専門！ 本集成にも全面協力しております。

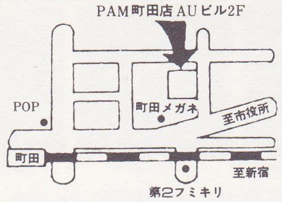


Rare records only
Tadashi Morishita
Wine Home A 101, 2-2-12
Nishi-ikebukuro, TOSHIMA-KU
TOKYO 171 JAPAN

ANNI VERDI

通販屋です。リスト請求下さい。
アンニ ヴェルディ／森下 忠
〒171 東京都豊島区西池袋2-2-12
ワインホーム A 101

輸入盤・中古盤専門店
レコードハウス
PAM



ブリティッシュ・ロック、
ユーロ・ロック多数在庫あり
LP・CD高価買取ります。

〒194 東京都町田市中町1—15—9 AUビル2F
TEL. 0427-23-1005 ●火曜定休 営業時間1:00PM—8:00PM

GSM

ほとんどが一品につき、買う時点をよくかんがえて

他店には真似のできないダンピング・プライス

池袋駅 又は 目白駅
PM2.00-7.30
火曜日は休み
豊島区西池袋2-17-8
03-5992-5787

平成六年 1994

アナログ・LP世紀末 これが最後
在庫一掃セール

1月	5日～10日	全品10％引き
	12 ～17	20％
	19 ～24	30％
	26 ～31	40％
2月	2 ～ 7	50％
	9 ～	値段、交渉次第

（委託盤は除く）

MUSIC SALES NETWORK
Progressive Artistry

廃盤、貴少盤の専門店!!《通販専門》
●1～2カ月に1回カタログ発行。
●ご希望の方は360円を郵便振替（東京2-121166 プログレッシヴ・アーティストリー）で振込むか、切手72円を5枚同封の上でご請求下さい。（申込方法が変わりました。御注意下さい。）
●廃盤、プログレ高価買い取り致します。（10枚以上出張又は送料もちで買い取ります。）
※都営新宿線船堀駅に業務係設置!!
不在の場合ありますのでTEL確認の上、ご来店下さい。〔東京都江戸川区船堀4-9-23 サンハイツ船堀101 プログレッシヴ・アーティストリー業務係〕

TEL & FAX
03-5696-3281
〒134 東京都江戸川区宇喜田町1245—29
1245-29 Ukita-cho, Edogawa-ku, Tokyo 134

HIGH-TIMES

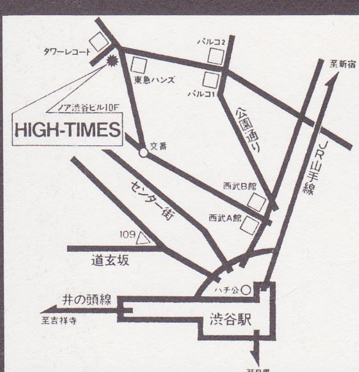
プログレ系アナログ廃盤専門店都内最後の砦

イタリア～国内盤から外国盤特価品、大物廃盤から知られざる名盤、未開拓の歌もの間でフォロー。シングルも充実。

その他、ブリティッシュ、ジャーマン、フランス、ジャパニーズ、アザーヨーロッパ等アナログ廃盤、中古盤は1万枚の品揃えです。CDもニューリリース、中古等ますます充実中是非一度御来店ください。

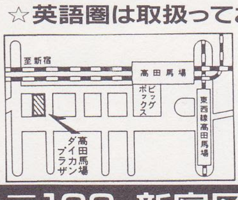
プログレッシヴ
サイケデリック
ハードロック
女性ヴォーカル
アヴァンギャルド
日本のロック
ワールドワイド'70'S

HIGH-TIMES
〒150 東京都渋谷区宇田川町36-2 ノア渋谷 10F 1003号
TEL03-5489-0269
営業時間 12:00～20:00● 火曜定休



輸入盤
ユーロピアン ポップス専門店
中古盤

☆イタリア盤、フランス盤の在庫は日本随一
☆英語圏は取扱っておりません



●通販リストご希望の方はフランス、イタリア、スペイン、イージーリスニングのうちご希望のジャンルをお書きになり、62円切手各2枚を下記住所に。

EUROPEAN POPS &
EASYLISTENING MUSIC
CASA BIANCA

☎03(3232)5425
●営業時間/12:00～20:00(日祭日12:00～18:00)
●定 休 日/毎週水曜日と土・日を除く祝祭日

〒169 新宿区高田馬場1-31-8 ダイカンプラザ518号(5F)







税込定価4,000円(本体3,884円)